蒼き流星

的中青矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼き流星

【Ｎコード】
Ｎ９６７３Ｉ

【作者名】
的中青矢

【あらすじ】
無理だと分かっていても。人はそれに抗おうとする。それがどんなに難しくても、己の信念を曲げずに突き進む者もいる。スバルとその仲間達は、どんな状況においても己の信念を曲げずに、突き進めるのか――――
繋がる物語編　エグゼの言葉、その意味が紐解かれる

登場人物

物語の主要人物

星河スバル

言わずと知れたこの小説の主人公。電波変換してロックマンになる世間的には世界を3度救っており、その名声は今回の事件で更に広がっていく。ウォーロックなどの仲間達の絆を大切にし、今回の事件の発端の敵組織を壊滅させようと思っている。自覚はしていないが、ミソラのことを気にかけている。

ウォーロック

スバルの相棒（ウィザード）。もとＦＭ星育ちのＡＭ星人。１年という短い期間だが、スバルとの絆は深い。スバルのことには敏感で、時々ミソラのことでからかう。けれど作者のヘビードーンでやられることもしばしば。

響ミソラ

今作のヒロイン。電波変換してハープ・ノートになる。国民的歌手で、１年前にはマネージャーとのトラブルで一時は歌手をやめようとした。けれどスバルと関わっていくうちに、また歌手に復帰する。スバルに好意を寄せている様子。

ハープ

ミソラのよき理解者（ウィザード）で、元ＦＭ星人。ミソラのことをいつも気にかけている。ウォーロックとは普段は犬猿の仲。ミソラとスバルの仲を応援している。

ゴンタ

食いしん坊で、よくお菓子を食べている。電波変換してオックス・ファイアになる。けれどこれはまだ完全ではなく、他の電波人間よりは短い。メテオＧの事件で、自分はルナを守りたいといっていたが、実は逃げていたんじゃないかと思い、戦いにはできるだけ参戦しようとしている。

オックス

ゴンタのウィザードで、元ＦＭ星人。ゴンタの牛丼を食べてはまってしまった。ゴンタ同様少し単調な面があり、戦いでは苦戦しがち。けれど、それでも戦いをやめず、ゴンタと共に戦いに身を投じていく。

白金ルナ

金持ちで、少し高飛車な面がある。ここぞというときにリーダーシップを発揮する。モードとは仲がよい。ジャックに思いを寄せているようだが、真意は不明。

モード

ルナのウィザードで、ルナとは仲がよい。ルナに協力を惜しまなくて、高飛車な面のあるルナとは対照的な存在。

キザマロ

背が小さく、それをコンプレックスと思っている。今回も非戦闘員だが、スバル達のことを応援している。

ペディア

キザマロのウィザード。計算が得意で、勝率などを計算してくれる。キザマロと同じで、スバル達を応援している。

ジャック

元ディーラーの幹部で、スバル達の敵であった。好戦的な面も持つが、今は改心した模様。電波変換してジャック・コーヴァスになる。その力を敵組織相手に存分に発揮する。

コーヴァス

ジャックのウィザードで元ＦＭ星人。前にブライにデリートされ

たが、それをＷＡＸＡが直した。今はジャック同様改心した模様。好戦的な面は変わらず、ウォーロックとはいざこざが絶えない。

ツカサ

元は地球を破壊しようとしていたが、スバルとの関わりで考えを変えていった。電波変換してジェミニ・スパークＷになる。性格は温厚で、いつも冷静。スバルを世界に必要な存在と考え、彼を守ろうと戦っていく。

ヒカル

ツカサのもう１つの人格。もとは残忍な性格だったが、今はあまりそういう面は見えない。電波変換してジェミニ・スパークＢになる。

ジェミニ

元ＦＭ星人でツカサのウィザード。今は性格は落ち着いている。あまりハンターから出てこない。

甲斐　疾風（ハヤテ）

スバルとＫ都でぶつかった少年。銀髪で。姿のモデルはブ〇ーチの日番谷。シャツが白でズボンが黒と、シンプルが好き。ゴンタを上回る量、スピードを兼ね備えており、カレー一杯３０秒で食べら

れる。ウォーロックは、シルバー・ウィンドだと思っていたが、ゲイルに周波数があり、なおかつシルバー・ウィンドがＷＡＸＡにいた時、学校に居たので疑いが晴れる。どちらかというと冷めていて、考え方がスバル達とは大分違う。周りをちゃんと見ているが、自分は見ていないので宿題をよく忘れる。日本刀を持っていて、それでウイルス相手に生身単身で突っ込むほど強い。
　変わるというより、前の自分に戻るのを酷く拒んでいる。昔にある罪を犯していてるようだが・・・・？
　母親と父親とは、現在別居中。

ゲイル

　カイのウィザードで、白い龍。鱗、翼がある。周波数もあり、シルバー・ウィンドだという疑いが晴れる。

宇宙（ソラ）　銀河

　黒髪で色白。黒服に身を包んでいる。スバルはギンガを見ただけで体が震えだした。カイに「宿題」といっているが、その本当の意味は分からない。彼も「宿題」をやっている。

ＷＡＸＡ関係者

暁シドウ

サテラポリスのエース。電波変換してアシッド・エースになる。以前、ジョーカーの自爆に巻き込まれたが、アシッドに助けられ、奇跡的に助かる。今回もスバル達に協力をし、敵組織相手に戦っていく。

アシッド

暁のウィザードで、人工生命体。暁を助け、デリートするが、ＷＡＸＡに復元される。ウォーロックとは犬猿の仲である。暁のことをスバル達に言わないなど、少々抜けている部分がある。

クインティア

ジャックの姉で、元ディーラーの幹部。今は改心して、ＷＡＸＡに力を貸す。電波変換してクイーン・ヴァルゴになる。前は教育実習生としてなりすませるなど、勉強はできる。

ヴァルゴ

クインティアのウィザードで、元ＦＭ星人。性格は、はじけている。クインティアとは１８０度性格がちがうといってもいい。今は改心しているが、少々問題を起こしている。

ヨイリー

世界的な権威を持つ博士。人を「ちゃん」づけし、それを絶対に

曲げない頑固者。アシッド、ジョーカーの生みの親である。今回ではエグゼＰＧＭの解析をして、その可能性を研究している。

敵組織　ガイア

黒ローブの男／あの方

目的は世界、銀河征服。年齢など、不明な点が多い。計画にスバルを組み込んでいるらしいが、内容は謎。両親がいない。

黒ローブのウィザード

好戦的で、黒ローブの男と計画を実行しようとする。

ゲイボルグ

黒ローブが信頼していると思われる電波体。重厚な装備に身を包み、組織のナンバー2。組織の中で唯一、計画の内容を知っている。

赤い魔術師

スバルと最初に交戦した電波体。計算されつくした戦いが得意。

ブラフマ・ウォーターカレント

弓の使い手で、体は青。弓は水を纏っている。黒ローブに忠誠を誓っていたが、捨て駒扱いされ、半ばヤケでスバルと戦った。最後は『インフェィティバレット』の前に倒れ、スバルにあるプログラムを渡し、爆発した。爆発する瞬間、計画を知った。

アサルト・ブリッツ

銃の使い手。背は低く、体は黄色。2丁の銃を使って、ミソラ達と戦う。弾丸は電撃を帯びている。その弾丸は電流を地面にながし、他の弾丸に辿り着いたら、スパークする仕組みになっている。スバルの元に向かう途中、シルバー・ウィンドにあい、『風魔烈風刃』で敗れる。最後に計画を知った。

プロヴェ・ウッド

『ガイア』の中で唯一武器を使わない電波体。武器と呼べるものは植物を生成する能力。この植物は普通(ふつう)に出すこともできるが、ノイズを吸収することにより有り得ない生長速度で再生する。

プロヴェ自身は『ガイア』全員が操られていることを知っており、けれどそれを解除できないのを知っているので命令のままに戦った。最後はスバルの『クロスエアスラッシュ』に倒れる。

その他

キリュウ

こちらも不明な点が多い。「奴ら」など、不明な言動多い。電波変換してシルバー・ウィンドになる。

ウィンド

性格は楽天的。「連中」、「あいつ」など、不明な言動が多い。

シルバー・ウィンド

銀色の装備で全身を包む謎の剣士。スバルを圧倒的強さで倒した。けれどそのあとアサルトを倒していて、目的は分からない。「エグゼＰＧＭ」を欲しがっている。ゲイボルグ以上の実力を持っているが、単独で行動している。この小説の裏の主人公。

ハイド

３度もスバルに敗れている脚本家。電波変換してファントム・ブラックになる。今回もスバルの暗黒の十字架（ダークネスクロス）に敗れる

出られない人物

どこかに幽閉されている人物。スバルのことを知っていて、なおかつ世界を心配している。

フランベルジェ

謎の電波体。武器は自分の名前と同じフランベルジェの部類に入る

剣。過去に3人に負けていて、その中の1人のシルバー・ウィンドを倒そうとしている。主な攻撃方法は圧縮した水と斬撃。どっかに出るかも……

作者

この小説の神のような存在。ウォーロックを気遣ったり、ヘビードーンで攻撃したりなど、物語の進行にいろいろと関わっている。趣味はゲーム、パソコンなど。性格はなんでもテキトー。

特技　早読み（本気出せば週刊漫画1話30秒位）　早食い　早更新　早寝遅起（22時寝　8時起き）

必殺技

主要人物の必殺技

ロックマン

「エグゼノイズ」

ロックマンエグゼの記憶とロックマンが共鳴した新しいノイズチェンジ。ウォーロックと相性がいいらしく、メテオGの破壊されたあとも、このノイズチェンジができた。この変身の間、スバルだけに疲れ、ダメージがある。

必殺技

「ロックバスター」

色がピンク色になり、攻撃力、ラピッド性能が比べ物にならないほどに強化されている。

「プログラムアドバンス」

ギャラクシーアドバンスのものがプログラムアドバンスに変わった。威力はロックバスターと同じで強力で、隙が少なくなっている。

「ソウルユニゾン」

バトルカードを消費してできる変身。消費するカードによって変身が変わってくる。

サーチソウル　消費カード　　ガン、キャノン系

必殺技

「スコープガン」

どこからでも相手に当たる銃撃。追尾性能はない。

「サークルショット」

スコープガンの威力をあげ、追尾性能をつけた銃撃。性能を上げた分、溜めなければいけない。

「インフィニティバレット」

スコープガンの超連射。連射性能がすごく、大量にウイルスなどをデリートするときも使える。

カーネルソウル　消費カード　　置物系

必殺技

「スクリーンディバイド」

相手からみてV字型の斬撃を放つ。範囲が広く、１０メートル先でも届く。

「カーネルアーミー」

電波の兵隊で、敵の後ろをとって斬りつけたり、後方から銃撃することも可能。

「オーバージェネレーション」

溜めて、剣を伸ばして、半径１０メートル以内に3度斬りつける技。後方にも届く。

ブルースソウル　消費カード　ソード系

「ワイドブレード」

横に範囲がでかいソード攻撃。

「風魔烈風刃（ふうまれっぷうじん）　未完成」

シルバー・ウィンドの風魔烈風刃を見よう見まねでやった。結果、ゲイボルグの鎧に亀裂を入れられたが、操りきれなかった風がスバルに襲い掛かった。諸刃の剣といえる。

カオスユニゾン

ダークカードを消費してできる変身。変身はカードの種類で変わる。

スバルの覚悟の象徴

ブルースカオス　消費カード　ダークソード

「カオスシールド」

左手から黒い盾を出す技。防御技。

「風魔烈風刃」

ゲイボルグ戦で使ったのを強化したもの。闇の力で自分へのダメージを軽減している。けれど、シルバー・ウィンドよりは威力が弱い。

「暗黒の十字架（ダークネスクロス）」

闇の力を溜めて、居合いから十字に斬る技。

ナイトカオス　消費カード　ダークドリル

「ロイヤルレッキングボール」

鉄球を相手に投げつける技。「ダブルロイヤルテッキングボール」は左右から敵にぶつける技。

「ナイトディフェンス」

鎧を硬化させる技。けれどこのとき攻撃は出来ない。

「ダークドリル」

右手をドリルに変形させ、標的を貫く技。

「デスロイヤルテッキングボール」

右、斜め右、斜め左、左の四つの方向からロイヤルテッキングボールを放つ。

クロスユニゾン

カードは消費しないで行う変身。その代わりどれもクセがある。

スラッシュクロス

「ワイドスラッシュ」

横に爪で切り裂く技。衝撃波は出ない。

「エアブレイド」

ワイドスラッシュに衝撃波を付加させた技。

「アッパスラッシャー」

エアブレイドを縦に出した技。こちらのほうが威力が高い。

「クロスエアスラッシュ」

エアブレイドを斜めに、さらに2つ出した技。

エレキクロス

「サンダーボルト」

直前上の電撃を腕から放つ技。マヒ効果あり。

「デスライトニング」

上空から五つの落雷を落とす技。マヒ効果あり

「アルティメットボルテックス」

全方向からの電撃の雨。マヒ効果あり。

ハープ・ノート

「パルスサウンド」

パルスソングの強化版。パルスソングと同様、様々な効果を相手に与える。

「反響（エコーミラー）する鏡」

透明な壁。音が反響しやすい。ただし、強度は高いとはいえない。

オックスファイア

「オックスクラッシュ」

オックスタックルの強化版。炎で推進力を上げ、スピード、威力を上げている。

「オックス・ボルケーノ・ブレス」

オックスブレスの強化版。放射状に広げることもできるが、直線状にもできる。

ジェミニ・スパーク

「バズーカナックル」

ロケットナックルの強化版。爆発し、なおかつマヒ効果もある。

「エレキブレード」

エレキソードの強化版。範囲が縦にも広くなり、威力も上がっている。

「ジェミニライトニング」

ジェミニサンダーの強化版。ノイズの力を使って強化してある。

ジャック・コーヴァス

「無効化の壁（インヴァリットウォール）」

電波以外の攻撃を全て無力化する。電波には脆い。あることがきっかけでコーヴァスについたらしい。

「デスペインヘルフレイム」

ペインヘルフレイムの強化版。一個一個が大きくなっており、威力、範囲が高くなっている。

クイーン・ヴァルゴ

「無効化のベール（インヴァリットベール）」

電波の影響をなくすベール。電波以外には脆い。あることがきっかけでヴァルゴについたらしい。

「ブリザードドラゴン」

氷の竜を放つ技。攻撃を受けた相手は、凍結し、動けなくなる。

ゲイル

「ダウンバースト」

上空から圧縮した空気の塊を落とす技。アシッドの解析に寄れば、

航空機を墜落させるほどの威力。

敵組織　ガイア

ブラフマ・ウォーターカレント

「アクアアロー」

その名の通り水を纏った矢。ヒット数が多い。

「ウォーターサルンガ」

アクアアローを縦３つに放った技。貫通力がすさまじい。

「オーシャンズウロボロス」

アクアアローの連射版。水流が凄く、蛇のように見える。

アサルト・ブリッツ

「ボルティックドーム」

地面に着弾した電流を纏った弾が地面を流れ、スパークする技。

「ジェノサイドサンダー」

電流を纏った弾を、２０数発連射する技。マヒ効果もある。

「ライトニングイーグル」

溜めて一気に電流と弾を放つ技。鷲のような形である。

プロヴェ・ウッド

「プラントウォール」

植物の壁、プロヴェを包むように防御する。

「リーフランス」

足元から植物で出来た槍を出現させる。相手が死ぬか、プロヴェがやめるまで槍は敵を追う。

「リーフカッター」

葉っぱを手裏剣のように飛ばす。

「ローズカーテン」

上からバラで出来たカーテンを出す。プラントウォールよりは脆いが、その代わり殺傷能力がある。

「ヘルプラント」

全方向からの植物の攻撃。よけきれることはほぼ不可能。

レーヴァテイン・フレア

「ファイアボール」

その名の通り火の玉。速度を変えることができる。遅くして相手の行動を制限したり、早くして普通に攻撃に使ったりも出来る。

「プロミネンス・バーン」

ファイアボールが幾つも合体してできた球が爆発する技。

「マジシャンズライトニング」

相手を掴み、電流を流す技。マヒ効果もついている。

「バーニングスター」

火の粉を雨のように降らせる。バーストモードなら、一つ一つが巨大な槍の大きさ（二メートル）。

「フレイムタワー」

地面から火柱を出現させる。

「バーニングドラゴン」

火で形成された龍を出現させる。速度は音速で、温度は二千度。

ゲイボルグ

「暗黒の槍（ダークネスランス）」

闇の力を槍に付加し、相手を突く技。暁達を一撃で気絶させた。

その他

シルバー・ウィンド

「一の型　迅雷」

一瞬で相手を突く。ゲイボルグの鎧を突き破っており、その貫通力はとてつもない。

「二の型　緋炎」

縦、斜め左下からの二撃から繰り出される攻撃。

「五の型　風魔烈風刃（ふうまれっぷうじん）」

一瞬で相手を5度斬りつける。放つ前に風を集めておけば、放つと同時に風の刃も敵を襲う。

「風の刃（エアブレード）」

風の刃。近づく者を容赦なく切り裂く。弾丸なども切り裂ける。風魔烈風刃もこの風を主に使っている。

「風の盾（エアシールド）」

風の盾。近づく者を拒絶する。炎などの形状が不安定なものから使用者を守る。真空状態を周りに作ることも出来る。スーパーアーマーが相手では、拒絶できない。

「コンベーション」

バトルカードを力に変換して、刀に付加する技。属性があれば属性を。攻撃力アップなら攻撃を上げるなど、能力は多種多様。刀自体の変化は（長くなったりとかは）ない。

「バーストウィンド」

半径3メートルの範囲の全ての風、空気を刃とし相手を切り刻む。剣によるものではない。

他にも竜巻なども発生させられる。

フランベルジェ

「インパクトウェーブ」

斬撃にあわせて高圧縮の水の衝撃波を放つ。その威力は鋼鉄さえも切断する。

「アングリーウェーブ」

インパクトウェーブを連続で放つ技。単体の威力もインパクトウェーブを凌ぐ。

「ストームインパクト」

アングリーウェーブを広範囲、かつ高威力で放つ技。空中で放つことが多い。

作者

「ヘビードーン」

突如、相手の頭上にヘビードーンを出現させる技。一回ごとに威力が上がっていく。

基本用語集

ハンターＶＧ

いわゆる未来の携帯。情報がありすぎる時代で、自分の知りたい情報だけを画面に出すことができる。ウィザードを入れる機器でもある。

自分だけの機能、例えばカイの鏡（リアルウェーブ）なども登録すれば使えるようになる。けれど容量があるので、その許容量を過ぎてしまえば使えない。

元々は電波変換をするために作られた物。

ウィザード

人間を助けるために作られた人工電波体。意志があり、自分の動きたいように動ける。家事や救助、戦闘も行うことが出来る。ハンターに入れれば、大抵の電波体はウィザードになれる。

電波変換

普通は、電波体と人間がほぼ１００％同調（シンクロ）して始めて行うことが出来る。同調できていない場合は暴走もしてしまうこともある。けれ

ど９５％など微妙に同調してない場合は、１００％の力が発揮できないだけ。ちなみに残りの５％は心の噛み合っていない場合。

トランスコード

サテラポリスが登録して、大抵の人間は電波変換することが出来る。電波変換する掛け声でもある。登録する方法は簡単で、「電波変換」か「トランスコード」といえばハンターがサテラポリスにアクセスし、登録される。

「電波変換　オンエア」でも電波変換できるが、それは周波数が分からないようになんらかの細工をしているか、サテラポリスが故意にアクセスできないようにしているかだ。

周波数

いうならば電波体の強さ。強ければそれなりに周波数も多い。電波体には必ずある。例外もあるが。

周波数を変えて別の場所に移動することも出来る。けれど地球の裏側など、あまりに遠い所などは移動することも出来ない。移動できて半径１キロメートル。

用語集

エグゼＰＧＭ

エグゼの記憶。このＰＧＭと共鳴した者は、エグゼが生前使った変身、能力が使える。まだ秘密があるようだが・・・・・・

謎のプログラム

ウォーターカレントがスバルに渡したプログラム。まだなんのプログラムか分かっていない。

ノイズ吸収プログラム／ノイズパワーアッププログラム

簡単に言うとスバルのエースＰＧＭと同じ。究極変身（ファイナライズ）できるようになる

【和食屋　春空】

スバル達が入った和食亭。おいしいが、時代の流れによって、あまり売れてはいない。けれどそれでも時代に乗ろうとはしないで、地元の味を大切にしている。

清火寺

Ｋ都の観光名所の１つ。春には桜が咲いて、本堂からの景色は絶景。

空の架け橋

陸と陸を繋ぐ自然の橋。龍の形をしている。

ウィザードフード

本編に書いたとおりだが、元ＦＭ星人のウィザードはあまり人間の食べ物を食べると、若干体に支障がある。なのでＷＡＸＡが開発してくれた。普通の店でも買え、人間の食べ物を嫌うウィザードは買うものがよくいる。

ムーメタル

言わずと知れたブライが追っている金属。元々はスバルの体の中にあったが、ゲイボルグ戦でスバルが気絶したときにシルバー・ウィンドがスバルの体内から奪い取った。この金属を体内から取れるものは、相当な実力の持ち主。ちなみにスバルは、「絆」の力でシリウスを倒したと同じなので、スバルは摘出することが出来ない。現在シルバー・ウィンドは体内に入れているのではなく体外に持っている。

能力などは不明な部分が多いが、ヨイリーの資料によれば、オーパーツのような身体能力などの向上、コピー能力、そして異次元の移動などが可能らしい。なぜシルバー・ウィンドが奪ったのかは謎。

ちなみに異次元行くにはどこの世界に行くかを念じなければいけない。たとえば、「平和な世界にいく」と思ったら、何個もある平和な世界のうち一つがランダムに決まってその世界への道が開かれ

る。簡単に言うとパソコンで何かを検索してその検索結果から適当に選ばれ表示されるということ。だから詳しく念じればそれだけ的が絞られる。適当「異次元」にいくといえばどんなところにいくかは分からない。

電波刀

電波のみを斬ることができるといわれている刀（ちなみにこれは誤り）。元々は武具屋の老人が所持していた物。刃でのみ斬ることができ、峰では斬れない，

作者が今ハマっている小説ｏｒ漫画にもこの刀に似ている効果があるが、それは後から知ったものなので作者にパクリなど言わないで上げて欲しい　ｂｙカイ

平行世界（パラレルワールド）／異次元

いくつもあり、決して他の世界とは交わらない。現在移動したことがあるのはスバルのみ。その世界は様々で、ラ・ムーのよって破滅した世界など、他の世界とは全く異なった世界。

簡単に言えば、電波が確立された世界とされなかった世界があるということ。もっと分かりやすく言えば、モン○ンみたいな世界になる可能性もあるし、流星のような世界になる可能性もあるということ。つまり枝分かれした世界。各世界にはそれぞれの可能性が含まれている。

他の世界に行くことは、危険であり、自分達のいる世界を壊してしまう可能性もある。

クロスフュージョン

言わずと知れたエグゼ時代の電波変換。【Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣ】もこれを基にして開発された。間違ってはいけないのはこれは電脳獣のあとに作られた。つまりこれはゲーム版のあとであり、アニメとは別世界である。

これはディメンションナルエリアの中でしか変身できない文、体に負担が少ない。もちろん変身できる者は少ない。

これは開発はされたが実戦で使われたことは無い。なにか理由があったようだが、それはまだ分からない。ちなみに発案者は光熱斗、開発者は光祐一郎。

補足（前書き）

ネタバレ含みます。注意を

補足

補足

シルバー・ウィンドについて

４６話、４７話、４８話でシルバー・ウィンドがＷＡＸＡにいますが、カイはその日、本当に学校から移動していません。そしてＷＡＸＡにいたシルバー・ウィンドは本物です。なら誰・・・・？

よく読んでもらいたいところ

謎という話があるのですが、そこは結構あとあと重要になるので、内容を覚えておいたほうがいいです。１人１人の言葉をよ～く・・ね

キングとガイア

一応関わりはありません。どちらも知っている程度です。ガイアはキングが危険だから妨害しようとしました。キングはあることでガ

イアを知ります。

１０７話　異次元

ロックマンは生きています。結局キリュウが助けました。なのでご安心を。

第1話　日常

雲ひとつないコダマタウン
いつもと変わらない空。いつもと変わらない町並み。そしていつもと変わらない――――

「うわっ、ウォーロック！　なんで起こしてくれないんだよ、もう8時だよ！」

日常である。

『あぁ？　だって起こしても起きなかったぜ？』

「だってじゃないよ！　遅刻しちゃうじゃないか！　遅刻したらウォーロックのせいだからね！」

自分が悪いのに人のせいにするスバルを尻目に、時間は刻々と過ぎていく。

いそいで服を着替えて、ハンターＶＧを持って、リビングに行く。

「おはよう、母さん」

「おはよう、スバル。今日も寝坊ね」

フフフと、あかねは笑う。

「そういえば、もう1年ね～。あなたが学校に通い始めたの」

1年前のスバルは、父親の大悟が事故でいなくなってしまったのがきっかけで、学校に行かなくなってしまったのだ。そんなスバルは、今ではすっかり学校が好きになったようだ。それは母にとって嬉しいことこの上ない。

「そういえばスバル。前に聞いた質問の答えを聞いてなかったわね」

ふと、思い出したようにあかねが聞く。トーストを口に挟んだままスバルは硬直した。

「そろそろお母さんも知りたいんだけどな～。スバルの――――」

「い、行ってきま～す」

さっきまでトーストを半分しか食べていなかったのに、一気に食べたらしい。よく喉に詰まらなかったものだ。

「そんなに知られたくなかったのね」

まあ年頃の男の子だから仕方がないか。

「帰ってきたら聞き出そう♪」

イタズラっぽくあかねは笑った。

ドアを勢いよく開ける。

「ご、ごめん、寝坊した」

「寝坊したじゃない！　今何分だと思っているの！」

朝からいきなり怒鳴られて、スバルは少し動揺したが、すぐさま時間を確認する。ハンターＶＧの時計を見てみると、８時１５分だった。

「え、こんなに時間経ってたっけ？」

「スバル、俺でも今日は寝坊しなかったんだからよ～」

「勘弁してくださいよ」

ゴンタ、キザマロの順で言われる。あの遅刻魔のゴンタでさえ寝坊しなかったのだ。まあスバルも遅刻魔なのだが。

「いいから行くわよ！　ほら、ダッシュ！」

そして４人は学校への道を走っていった。いつもと変わらない日常だ。

第1話　日常（後書き）

初投稿です。感想等お待ちしております。応援よろしくお願いします。

第2話　電波変換

「は～い、じゃあ今日の授業は終わり」

みんなは一斉に自分の帰りのように取り掛かる。そんな中、スバルのハンターにメールが来た。

「メール？　誰からだろう」

スバルには友達があまりいない。同じ６－Ｂの委員長とゴンタとキザマロはメールをしてくる意味がないので、残っているのは、この学校でない友達と、ＷＡＸＡ関係の人に限られる。メールを見てみると

「ミソラちゃんだ」

途端に大半の男子がスバルを見る。いや、睨みつけると言った方が正しいだろう。

響ミソラと言えば、ニホンのトップアイドルだ。そんな人からメールが来たのを羨ましがらない男子がどこにいる。

「ねぇ、響ミソラからメールが来たって、ホント？」

近くの男子が聞いてきた。顔が恐い。

『（バカだな、スバル。こうなることは分かってただろ？）』

他の誰にも聞こえないように、小声で話す。

「（うるさいよ、ウォーロック。なにか策とかない？）」

『（あるにはある……）』

その時心底スバルは驚いた。あのウォーロックが、単調でからかわれやすいウォーロックが、策を練れるとは。今日は４月の下旬なのに雪でも降るんじゃないのか。

『（けどな、条件がある）』

「（…何？）」

『（帰ったらウイルス退治に行きたいんだ。このごろ腕がなまってな）』

メテオＧの事件の後、まともに戦っていないのだ。好戦的なウォーロックはここの所戦いたくて仕方がなかったのだが、スバルが渋っていたのだ。

（・・・・・・）

メンドクサイ。だけど、このままやられるくらいなら

「（分かった。で、策って？）」

『（簡単だ、それは）』

「（それは？）」

『電波変換だー！』

いきなり大声でウォーロックが叫んだ。もはや最終手段をここで使うとは思わなかった。そしてスバルは

（そんなの僕でも最初に思いついたよ～）

だが時既に遅し。

「逃げる気か？　スバル」

眼が本気だ。このままだとヤバイ。この事態を打破するには

「ウォーロック！」

「おお！」

「トランスコード　シューティングスターロックマン！」

まばゆい光が、スバルを包み込み、スバルはロックマンになった。

「ウォーロック、屋上に」

帰りの荷物をもって、スバルは屋上に向かった。

「待て、スバル～」

ミソラファンの男子は、スバルを追いかけた。

残された女子（1人を除いて）と極少数の男子（ゴンタとキザマロ）はただ、

「スバル（君）ってバカだな～」

と思っていた。そしてある1人の女子は、

「スバル君～明日覚えてらっしゃい～」

他でもない白金ルナだが。ゴンタとキザマロの「バカだな～」は委員長のことも含めてである。

「・・・俺、スバルに明日休んだほうが身のためだってメールしたほうがいいかな？」

それも

「ゴンタ、今なにか言った～？」

地獄耳のルナには聞こえてしまう。

そのあと、ゴンタの断末魔が教室から聞こえたのは、言うまでもない。

第2話　電波変換（後書き）

今回はギャグに回ってしまいました。次からはバトル路線、少し恋愛・ギャグの予定です。応援よろしくお願いします。

第3話　赤い魔術師

スバルは家に帰っていた。あれからスバルは追っ手から免れ、ウェーブロードから家に帰ったのだ。

「恐いね、ミソラちゃんのファンって」

『・・・ああ、恐ろしいな。あと1年間あいつらといるとなると背筋が凍っちまいそうだぜ』

声からして本気だろう。

「そういえば、まだミソラちゃんのメール読んでないや」

『……なんだか顔が嬉しそうじゃないか、スバル』

ウォーロックがニタニタしながら言ってくる。

「それはそうだよ。大切な友達からのメールだもん」

スバルはウォーロックの言いたいことが分からないらしい。鈍感なのはいつもどおりらしい。

『分かった分かった。・・・あんまり気付かないとミソラが泣くぞ？』

「ん？　どう意味だよ、ウォーロック」

問い詰めようとしたが、ウォーロックは口笛を吹いてテレビを見て

いる。

「ふ～、まあいいか。でメールは……」

メールを見てみると、

「へ～、ウォーロック。今度の土曜日ミソラちゃん来るって」

その言葉にウォーロックはピタリと止まった。かと思えば瞬時にコチラを向いて、

『良かったじゃね～か～、スバル～』

またもウォーロックはニタニタしながら言う。

「だからどういうこと、ウォーロッ――」

ドオォォンッ

どこからか爆発音が鳴り響く。

『なんだ？　今の音は』

ウォーロックが焦りはじめる。なにか嫌な予感がした。

「まさか、ウォーロックが策なんか練っちゃったから――」

『そんなこといってねぇでさっさと行くぞ！　場所は展望台だ！』

スバルは家から飛び出した。

「トランスコード　シューティングロックマン！」

電波変換して展望台に急いで向かった。

「フフフ、これでロックマンはやってくるでしょう」

魔術師のような格好をした、赤い電波体はそういった。

「おや、もう来ましたか」

直後、ロックバスターが赤い電波体に向かって数発撃たれる。けれどそれは、赤い電波体をすり抜けてしまった。

『なんだ？　コイツ』

ウォーロックが不思議がっている。

『はじめまして、ロックマン。私と勝負してほしいのですが、いいですか？』

いきなりあいさつしてきたかと思うと、今度は挑戦してきた。

『・・・テメェはだれだ？　見たところただ者じゃねえが』

たしかに、周波数が尋常じゃない。強敵には間違いないだろう。そ

れに気になることがある。

「・・・なんで展望台に傷1つないの？」

どこを見ても傷がない。大きな爆発音がしたのに、だ。

『フフフ、簡単ですよ。あなたたちをここにおびき寄せれば私はいいのです。わざわざ被害を広げる意味もありませんしね』

『・・・テメェ、ホントに敵か？』

被害を広げる意味がないとは、悪党が言う言葉とは思えない。

『私のしたいことはただ1つ、あなたの実力が知りたい。それだけです』

赤い電波体が構える。

『行くぞ、スバル！　これでウイルス退治はチャラだ！』

相手が戦う気があるならば、ここは退けない。もし自分と戦うために被害が広がるかもしれないからだ。
できれば闘いたくなかったが

「うん！　ウェーブバトル　ライド　オン！」

『さあ、あなたの実力を見せてください！』

第3話　赤い魔術師（後書き）

やっとバトルです！正直バトルを書くのは不安ですが、がんばりたいと思います！

第4話　ノイズチェンジ

「はぁぁー！　ロックバスター！」

けれど、それも虚しくすり抜けてしまう。

『どうしました？　その程度の力で地球を3度も救ったのですか？』

「ク・・・・・」

スバルは赤い電波体に攻撃を1度も当てられていない。

『為す術なしですか・・・・ではコチラからいきましょう。ファイアボール』

マントのなかから火の玉が十数個出てくる。

『へ！　こんなの簡単に避けられるぜ！』

動きは速くなく、むしろ遅い。余裕で避けられる。

ファイアボールを避けながらロックバスターを撃ち続ける。けれど、行く先々に、ファイアボールが邪魔をしてくる。

「遅いのに、追尾性能がすごい」

ファイアボールはまだスバルを追いかけている。

『フフフ、大丈夫ですか？』

気が付くと、前にファイアボールがある。左右も見る。けれどそこにもファイアボールがある。そして後ろにもある。

『な、追い詰められていたのか！』

スバルに十数個のファイアボールが、３６０度から迫ってくる。

『スバル、上だ！』

「うん！」

スバルは上にジャンプした。けれど、スバルの目の前に、赤い電波体が瞬間移動した。

『甘すぎますよ、マジシャンズライトニング！』

首を掴まれた、途端にスバルに物凄い電流がならられる。

「ぐわあああああ！」

電波体は手を離す。ダメージが大きすぎてスバルはただ下に落ちていく。そして下には、さっきのファイアボールが合体して、大きくなっていた。

『・・・あなたには失望しました。さようなら。プロミネンス・バーン』

そしてファイアボールが、爆発した。

スバルは黒コゲになっていた。かろうじて電波変換が解けていないにしても、もう立てない。

『あなたが弱すぎた場合には、あの方から抹殺の命令が出ています。・・・けれど、ただやるのではつまらないと、あの方はあなたの目の前で、この町を消すよう命じられました』

「・・な・・・ん・だ・・て」

そんな自分がやられるだけでなく、町のみんなが死んじゃうなんて、そんなこと

「あ・・ちゃ・いけ・ない・・・んだ!」

『・・・スバル・・・・・』

「ウォーロック・・・頼みがある・・・」

『・・・なんだ?』

「ノイズ率を上げて欲しい・・・・」

なにもしないより、可能性に賭けてみたい。

『分かった・・・いくぞ!』

スバルはなんとか立ち上がった。

『・・・うおおおおおおおおおおお!』

ノイズ率が急激に上がった。そして

「ノイズチェンジ！」

これまでにないまばゆい光が、スバルとウォーロックを包んだ。

第４話　　ノイズチェンジ（後書き）

ウォーロックがノイズ率を上げるというのは、流星３のユーモアワードにありました。最終的には燃え尽きちゃいますが、この作品では燃え尽きませんよ。次話のノイズチェンジは、あのヒーローです。

第5話　英雄の力

『ほう、やはりロックマンは他人を傷つくのをみたくないから何度でも立ち上がってきますね。……あのかたの仰るとおりだ』

光が消え、スバルの姿が見え始める。だが、ノイズチェンジしたのにも関わらず、姿が変わっていない。いや、かすかに変化がある。胸に小さなロゴがある。赤い丸に、黒い斜め線がある。

『…あれは！やっかいですね……』

「ウォーロック、このノイズチェンジは？」

『…わからねぇ、ただなんか』

『「底から力があふれてくる……」』

ハンターからノイズチェンジの説明が言われる。

『エグゼノイズ　能力　バスターマックス　ギャラクシーアドバンスの変化　多種の変身』

『・・・よく分からないが、スバル！　とにかくやるぞ！」』

「うん！」

ハンターにカードを選択する。

「ソード、ワイドソード、ロングソード、ギャラクシーアドバンス、ジャイアントアックス！　……ってあれ？」

それはジャイアントアックスではなかった。横にも縦にもでかい、ソードだった。

『なんだこれは…見たことねえぞ』

「だけど、分かる。これなら、あの電波体に勝てる！」

スバルは跳躍し、赤い電波体に向かってソードを振る。けれど、それを相手もソードで防ぐ。

『さすがあの方が見込んだだけはある。それは２００年前の英雄の姿ですよ』

『へぇ～そうなのか。だったらテメェも倒せるな！』

一旦２人は地面に降りる。

「ロックバスター！」

それはさっきのロックバスターとは比べ物にならない威力だった。攻撃力とラピッド性能が、ギガカードのバスターマックスの上をいっていた。

『ク・・・・』

今度はすり抜けず、確実に当たっている。

『やられっぱなしは嫌いなんでね、ファイアボール』

また十数個ものファイアボールがスバル目掛けて飛んでくる。それもさっきの生易しいスピードではなかった。いっきにスバルと距離を縮める。

「こっちもそれは同じだよ！　キャノン、トリプルスロットイン！　ギャラクシーアドバンス、インパクトキャノン！」

やはりこれもインパクトキャノンではなかった。だがそれをお構いなしに撃つ。

突如、１つのファイアボールに当たると、全てのファイアボールに被弾した。ファイアボールがすべてスバルに当たる前に爆発する。

『やりますね、ではこれは――――』

『そこらへんにしておけ、実力は分かっただろう？』

突如現れた黒い騎士が、赤い電波体を静止した。

『私としたことが、勝負に熱くなりすぎてしまったようだ』

『待て！　逃げる気か？』

ウォーロックが叫ぶ。だが黒い騎士は

『オマエ達のためでもあるんだぞ？今のおまえ達は、変身しているとは言え、ダメージが大きいはずだ。それにそろそろ結界も切れる』

「結界？」

『気付かなかったか？　おまえ達の戦っていたこの場所は、傷がつかないように結界が張ってあったんだよ。もちろんお仲間にもここに来ないようにね』

仲間が来ないようにしたのは分かる。けれど

「なんで傷をつけないようにするんだ？」

『別に我々はおまえ達を殺しに来たわけではない。無駄な犠牲は嫌いなんだよ』

スバルは黙り込む。

『ではまた会うときは来るだろう。それまで、その変身の謎でも解いておけ』

そういって2人の電波体はどこかに消えた。

「行ったね・・・」

『ああ、それじゃあ帰るか。いろいろ分からないこともあるし・・・スバル？』

その瞬間電波変換が解けてしまった。倒れそうになったスバルを慌てて抱き止める。

（この変身はスバルにだけ疲れがあるのか？俺は全然平気なんだが・

・・・）

ともかくスバルを抱きながら、ウォーロックは家に帰った。

第5話　英雄の力（後書き）

この話だけ長くなってスイマセン。次からは気をつけます。変身で要望があれば待ってマ～ス。可能な限り実現していきます。あとギャラクシーアドバンスではないですよ～。

感想等もお待ちしておりマ～ス♪

第6話　誘い

「ふぁ～、よく寝た～」

あれからスバルは、家に着いたのだが、夕食を食べずにずっと眠ったままだったのだ。エグゼノイズの体力の消耗は早いらしく、ダメージを負っていたあの状況では、いつ倒れてもおかしくない状況であった。逆に最後までよく戦えたものだろう。

（そういえば、今日は何時に起きたんだろう）

昨日の戦いが、たしか日のまだ落ちてなかったはずだ。推定は5時～6時。いくらスバルと言えどこの時間に寝ればさすがに遅刻も―

――

「えぇー！　今9時半？　ヤバイ学校行かなきゃ！」

急いで服に着替え、リビングに向かう。けれど別に遅刻したのは変わらないと思うのだが・・・・

「母さん！　ごはんは？」

けれどリビングにはあかねの他に

「おっはよ～、スバル君」

ミソラもいた。

「え・・・・・」

「ということは、僕は3日間寝込んでいたと」

「うん、そうね。ウォーロック君もがんばって起こそうとしたんだけど、（いつもだけど）起きなくてね」

「じゃあ今日は土曜日？」

「そうだよ、メール送ったんだけど返信がなかったの。断られたのかな～って思ったら、『スバルは今眠っている。だけど土曜日は来てもいいって、スバルが言ってたぜ　ｂｙウォーロック』って返信が来たから今日はお邪魔させてもらったの」

『たまにはウォーロックも使えるのね～』

と感心したようにハープが言う。

「そういえば、ウォーロックは？」

いつも朝の不機嫌顔で起きるの待っているウォーロックがいないのは、なんか変だ。

「ウォーロック君はウイルス退治のついでにＷＡＸＡに行ったわ」

「ＷＡＸＡ？　なにしに？」

あのウォーロックが、ＷＡＸＡに行ったのだ。なにか今日も起きてしまいそうで恐い。

「なんか、新しい変身のことを調べて欲しいから～って言ってたわよ」

ウォーロック、僕は君を見直したよ。

「それから～、『アシッドのやつをぶっ飛ばすんだ～』とも言ってたわね」

前言撤回。アシッドとバトルするために行ったのだろう。新しい変身は口実にすぎない。

「へぇ～、スバル君また新しい変身ができるようになったんだ」

と、羨ましそうに言った。けれど顔はなにか残念そうとも思える表情だ。

「いや～、べ、別にそこまですごくないよ・・・・」

と照れくさそうに、頬を赤らめながら言う。

「フ～ン・・・・（スバルはやっぱりミソラちゃんか～）」

と内心あかねは思っている。

「スバル君、今日午後空いてる？」

「空いてるけど、なんで？」

（鈍いな～、スバルって）とあかねはスバルに心の中で言う。

「その～・・・午後スピカモールで買い物に行かない？」

客観的に見れば、デートの誘いと見て良いだろう。スバルの返事は

「うん、いいよ。久しぶりに出掛けたかったし」

スバルはあまり出掛けたがらない。その理由はウォーロックと2人で行くのが嫌らしい。何故だかあかねは分からないが、

（スバルって本当に、こういう所は大悟さんに似てないのよね～）

相手の気持ちが気付いていないのに、何故かスバルは女の子が好きになるようなことばを言う。末恐ろしいとも感じたこともあった。

「ありがとう！スバル君」

と満面の笑みでミソラが答える。

「じゃあ、ウォーロック君が帰ってきたら行きなさい。1人で残されるのは可哀想だから」

さすがにウォーロック1人が残されるのは可哀想すぎるだろう。

『ポロロン、じゃあ待ちますか。あのウォーロックを』

と半ば残念そうにハープが言う。

「仲良くしなよ、ハープ」

『そんなやつと仲良くしたくはないけどな、ミソラ』

とウォーロックが帰ってきた。

『あら、いたの。周波数を感じなかったけど』

『ああ、なんか新しい変身をしてから周波数が変わっちまった』

「で、どうだったの？なにか分かったの？」

『遅くても今日の5時には連絡があるってよ、ヨイリーのばあさんがそう言ってたぜ』

ヨイリー博士なら安心して良いだろう。

「じゃあ行ってきなさい、スバル。エスコートちゃんとしてあげなさいよ？」

「からかわないでよ、母さん」

とスバルが笑いながら言う。

「いや、デートとかじゃないんで・・・」

ミソラが頬を赤らめながら言う。「デート」という単語が出た時点で、ミソラはデートのつもりで誘ったのは間違いないだろう。

『ほ～・・・スバル、おまえもやるな！』

ウォーロックがニタニタしながらスバルの肩に手を置く。この現状を理解してないのはスバルだけだろう。

「「じゃあ行ってきま～す」」

スバルとミソラが、スピカモールに買い物（デート）をしに向かった。桜の花びらが散る道を、スバルとミソラは楽しそうに歩いた。

第6話　　誘い（後書き）

ってことで長くなってすいません。これからもあると思いますが、温かい目で見守って欲しいです（見てくれる人がいるか怪しいが）。

恋愛になりましたが、スバルは気付いていません。その気はあるのですが・・・まあ恋愛も少し期待しててください。

スピカモールでもバトルはしますよ。新しい変身もしますしね。

感想等もお待ちしておりマ～ス♪誤字脱字なども報告してくださっても結構です。

第7話　Tシャツ

「ねえ、これどう?」

「う〜ん、いいんじゃないかな〜」

「・・・スバル君さっきからそればっかりだね」

スバルとミソラは洋服店に来ている。ミソラが服を買いたいのだが、自分だといくつも買ってしまうのでスバルに見てもらいたいのだ。けれど、スバルには全部似合って見えてしまうので、選べない。

ちなみにミソラは変装している。眼鏡と帽子でだ。これだけだとバレそうに思われるが、まるで本当に違う人のように振舞っているのでバレない。

「でも全部似合ってるし・・・・・・」

「・・・じゃあ、分かった。スバル君がいいな〜って思う服を選んで」

「ぼくが!?う〜ん・・・・」

そういわれても悩んでしまう。スバルの趣味とミソラの趣味では結構違うものである。けれど断れるわけでもないので

「これ、かな・・・・」

スバルが選んだのは、水色の半袖のTシャツだ。真ん中に青いハー

トがあるだけで、他にはとくに模様などはない。いたってシンプルだ

「ミソラちゃん、赤が多いけど青とかもどうかな～って思って」

ミソラが今着ているTシャツの上に着てみると

『あら・・・・・』

『お・・・・・』

「うわっ・・・・・」

他のスバルとハープとウォーロックは唖然した。

『ミソラ、すごく似合ってるわよ・・・・』

ミソラ自体は赤が好きなので、つい赤だけが似合うと思っていたのだが、青も似合っていた。

ミソラも唖然としてしまった。こんなに似合うとは思わなかった。

「・・・スバル君、ありがとうね」

まだ驚いているのか、声があまり大きくない。だが、スバルへの感謝の気持ちはちゃんとあった。

「うんうん、ミソラちゃんも僕を支えてくれているんだから、これでおあいこだよ」

スバルも嬉しそうだった。

（本当にありがとう、スバル君。ちゃんと私のこと分かってくれているんだね）

ミソラは、スバルにもう1度心の中でお礼を言った。

一方スバルは

（青って僕が好きだから選んだんだけど、気に入ってもらえてよかった～）

スバルがミソラの気持ちを知るにはまだかかりそうだ。

「あれがロックマンか・・・・デートとは余裕じゃねえか」

スピカモールのウェーブロードで、青い電波体が言った。右肩に厚い鎧があり、いかにも地球の電波体ではない雰囲気がある。背中には大きな弓を背負っている。

「だが・・・あの方はやつを観察しろとお命じになられた・・・・まだ攻撃するのは早いか」

そう電波体は呟き、スバルの観察を続行した。

「そういえば、スバル君。朝ごはん食べてないよね？」

スバルは朝９時に起きたのでごはんを食べていない。あかねがまだ起きないと思ったからだ。

「いいよ別に、まだおなか減ってないし」

というスバルだが、お腹は鳴ってしまう。

「・・・どこで食べる？あ！あそこのパフェ食べようよ」

「え、ちょっと待ってミ、ミソラちゃ～ん」

ミソラに手を引かれながら、スバルは走った。

『大変ね～、スバル君』

『なあ、やっぱりミソラって――――』

『さあ？とにかく私達は見守ってあげましょう』

『それもそうだな』

２体のウィザードは、自分の主人を、ただ見守っていた。

第7話　　Tシャツ（後書き）

今回はデートです、次回のラストからバトルの予定です。敵の名前など考え中です。一応神の〇〇にしようと思います。っていっても分からないと思いますが。神の名前ではありませんよ。名前といったら名前ですがね

ミソラの服は、想像で水色が似合いそうだからです。まあ、スバルともども分かっていませんけどね

感想等もお待ちしておりマ～ス♪

第8話　交錯

「ミソラちゃん、今日はそれしか食べないの？」

ミソラは甘い物はたくさん食べるのだが、今日は普通のパフェだ。

「え～、スバル君は私に一杯食べて欲しいの？」

ミソラが聞く。まるで

「私を大食いだと思ってるの？」

と聞いてるようだった。

「別にそういうわけじゃないよ。でも、なんか不思議に思ってさ」

「だって、私2人で一緒の食べたいんだもん。スバル君に無理させたくないもん」

これはどちらもミソラの本音だ。そんなミソラにスバルは

「僕のことは気にしなくていいよ？ミソラちゃんは自分の食べたいものを頼みなよ」

スバルに自分に気を使って欲しくなかった。ミソラはアイドルだ。忙しい毎日を送っている。それに両親がいない1人暮らしだ。友達と居るときくらいは羽目を外して欲しい。

「いいのいいの！　さ、食べよ！」

そういって強引に話を中断させた。スバルもそれ以上は言わなかった。

「そういえばスバル君。新しい変身ってどんなの？」

「エグゼノイズっていうノイズチェンジだよ。バスターの性能が上がったり、ギャラクシーアドバンスの威力が格段に上がったりするんだよ」

「すごいな～、スバル君は」

そう言ったけれど、内心ミソラは悲しんでいた。自分はノイズが蔓延していると戦えない。メテオGの時も最後の戦いに一緒に行けなかった。いや、アンドロメダの時も、ラ・ムーの時も自分はスバルと一緒に戦えなかった。自分が弱いから、自分が足手まといだから、一緒に戦えないんじゃないかと思うと胸が苦しい。これ以上差を広げられるのが恐かった。

「どうしたの？ミソラちゃん」

「え！　…うんうん、大丈夫だよ。ちょっとお腹が痛くなって」

「食べないほうがいいんじゃない？」

「大丈夫大丈夫、気にせず食べて」

ミソラは笑った。けれどそのミソラの笑顔は嘘だとスバルは分かっている。ミソラのことを理解できてない気がした。自分が分かってあげたらミソラは悲しまないんじゃないかと思うと、自分に腹が立

ってくる。

『そろそろだな、へへへ……』

ふいにウォーロックが笑い始めた。

「どうしたの？ウォーロック」

『いや～もうすぐ来るかな～って思ってさ。エグゼノイズの情報が』

なるほど。ウォーロックはエグゼノイズになって戦いたいらしい。

『ポロロン♪　この単細胞は戦うことしか頭にないみたいね』

『うるせぇ、ハープ！　テメェはあのノイズのすごさが分からないからいえるんだ！』

「そういうウォーロックは分かるの？」

どうせ分からないだろうなと思っていた。

『とにかく強い！』

『・・・ごめんスバル君、コイツは脳みそが筋肉だから」

『なにを～～～！』

「2人とも落ち着いて、他の人に迷惑だから」

スバルが仲介に入る。これもまた平和だな～っと思っていたスバル

だが、その平和を1つの爆発音が壊す。
すぐにスピカモールは逃げ惑う人々

『ク・・・この感じ、また来たか、スバル！いくぞ！』

「分かった！」

『ミソラも行くわよ』

「うん！」

ミソラも元気を取り戻していた。

「トランスコード　シューティングスターロックマン！」

「トランスコード　ハープノート！」

光が2人を包み込み、電波変換した。

第8話　交錯（後書き）

２人の擦れ違い？を書いてみました。自身がありませんが、自分なりにがんばりました。

スバルは、ミソラが悩んでることを分かってあげたい。ミソラは足手まといになりたくない。スバルはミソラを守りがいがために、戦わせないようにしています。逆にミソラはスバルを守りたいから戦いたいんです。人間関係って難しいですね～。

次からはエグゼからの変身なんですが、要望がないようなので、銃撃戦？をやりたいと思います。僕てきには、剣で勝負させたいんですが、後々そちらもやりたいと思います。

応援よろしくお願いします。感想大歓迎ですから気軽に書いてください。待ってマ～ス♪

第9話　　変身

「ウォーロック、場所はどこ？」

『イベント会場だ、急げ！』

「分かった！行こう、ミソラちゃんは逃げる人を非難さ――――」

「やだ！」

ミソラは大声でそういった。一瞬2人だけ時が止まってしまったかのようだ。

「私はスバル君と戦いたい！もう足手まといなんてゴメン！だから」

ミソラは泣きそうになりながら

「私も連れて行って……」

ミソラの感情が爆発した瞬間だった。泣くまいと努力はしているが、眼に涙が溜まっている。

「・・・分かった。行こう！　だけど約束して、絶対に死なないで」

「スバル君も…死なないでね」

2人はそう言ったあと、駆け出した。

『来たか』

青い電波体がそう言うと同時に、スバルとミソラがイベント会場に着く。やはり傷1つない。

『俺の目的は、おまえ達を倒すことだ。悪いが、前のやつとは違って、最初から本気を出させてもらうぜ』

「おまえらの目的はなんだ！」

『言っただろう？おまえを倒すことだ。それ以外に何もない』

『めんどくせえ、行くぞ、一気に終わらせてやる！』

『行くわよ、ミソラ！』

「「うん！ウェーブバトル　ライド　オン！」」

2人が叫び、戦いが始まる。

「ショックノート！」

ミソラが巨大な音符を繰り出す。

『フン』

青い電波体は、自信の色と同じ弓を弾く。矢は正確無比に音符を破壊する。

「ロックバスター！」

数発撃つが、それはすべて避けられる。

「ク！一定距離を置かれているから当たらない」

今のところどちらも攻撃を当てられないでいる。近づこうとするが、その分離れられてしまう。

『テメェ、ちょこまか逃げてねえで正々堂々勝負しやがれ！』

『弓矢は遠くから攻撃する物。相手の届かない範囲から攻撃する武器だ。それに従って何が悪い？』

『ク・・・・』

『ミソラ、どうする？』

『考える暇など与えんぞ』

矢がミソラに向かって放たれる。ミソラは避け続けるが、体力が奪われていく。

「ク、どうすれば・・・・」

『せめてノイズチェンジがあれば』

「エースＰＧＭはヨイリー博士にあずけちゃったし・・・・」

『とにかく止まってるよりはなにかやったほうがマシだ！』

「うん、キャノン！」

青い電波体はそれを避けもしなかった。キャノンは着弾した。けれど、傷１つない。

『・・・・もう限界だ・・・・・・・・』

『なんだ？どうした？』

「わからない。けど……！メールだ！」

『来たか！よしノイズ率は上がっている、行くぞ！』

「うん、ノイズチェンジ！エグゼノイズ！」

青い光がスバルを包みこむ。そしてスバルの胸元に流星からエグゼのロゴに変わる。

『クズが・・・・・』

スバルに向かって５つの矢が放たれる。それは水が纏ってあり、スピードも段違いだった。

「スーパーバリア！」

矢はバリアを貫かなかった。けれど、纏っていた水の分だけヒット数が多くなっていた。

『5回防いでどうする・・・水流があるから×2で、10回だよ！』

水圧でバリアを破った。スバルに矢が命中する。

「ぐわあああああああ！」

「スバル君！」

『その程度か、弱すぎる。あの方はなにを考えているのだ・・・』

「なんてね」

『ッ！』

よく見れば矢が当たっていたのはタヌキのような物だった。

「ヘンゲノジュツ、だけど今回は時間稼ぎに使わせてもらったよ」

『時間稼ぎ?』

「そう、エグゼノイズの力を知るためのね！」

『よし、いけるぞ！』

「うん、ソウルユニゾン！」

第9話　　変身（後書き）

２人での戦闘が難しいですね。ハープ・ノートが全然出てませんね。何故敵は資格を送ってくるのか、目的など不明点が多すぎると思いますが、後々解明していきたいと思います。

戦闘は1話を長くしたいと思います。ごめんなさい。ソウルユニゾンを今後は使うので、なにか要望があればお願いします。闇の力なども使う予定ですので・・・今後も応援よろしくお願いします。

第１０話　銃撃戦

「サーチソウル！」

スバルの姿が変わっている。一言で言うならば、狙撃手だ。体は濃い緑色になり、左手はスコープガンになっている。バイザーは左目だけになっており、水色になっている。

『それがおまえの、２００年前の英雄の力か』

「そうだ！」

『これでおまえに勝ち目はないぜ！』

『どうかな！』

スバルがスコープガンを構える。

『おまえらは俺の相手として認めよう。俺の名は、ブラフマ・ウォーターカレントだ！』

「いくぞ！　スコープガン！」

『アクアアロー！』

弾と水を纏った矢が何度もぶつかり合う。ミソラはそれをただ見ていることしか出来ない。

「・・・ハープ・・・・・」

『大丈夫よ、あなたは悪くないわ。それにまだ戦いは終わっていない。きっとなにかできることがあるはずよ』

無力なミソラを、ハープは慰めた。

『うおおおお、ウォーターサルンガ！』

一直線に3つのアクアアローを撃ってきた。貫通力は絶大だろう。

「サークルショット！」

ギリギリまで溜める。そして、それを一気に放射する。3本の矢は破壊され、弾はウォーターカレントに向かう。

『クソ・・・・』

避けようとするが、追尾してくる。

『なに！　がはあああああ！』

サークルショットはウォーターカレントに当たった。今度は確実に効いている。

『ハァハァ・・・・』

『大人しく降参したらどうだ?』

『いやまだだ！』

ウォーターカレントは狙いをミソラに定めた。咄嗟のことにミソラは反応できない

『ウォーターサルンガ！』

「ミソラちゃん、危ない！」

スバルはウォーターサルンガとミソラの間に割って入った。

「ぐはあああああああ！」

「スバル君！」

スバルは力なく倒れる。自分が弱いからスバルが攻撃を受けた。自分の所為だ。自分が弱いから――――

「大丈夫だよ・・・ミソラちゃん・・・・」

「ッ！　スバル君、立たないで！」

もう立たないで。これ以上スバルが傷つくのを見たくはなかった。

「ミソラちゃんは・・・僕が守るから・・・・・」

「え！」

「ミソラちゃんがいてくれたから、今の僕があるんだ」

ミソラがスバルの傍による。

「もう喋らないで！」

ミソラは泣いてしまった。なんで自分のためにここまで

「僕はその恩を返せていない、だから、何度でも」

脇腹を押さえながらスバルは立ち上がる。

「立ち上がるんだ！」

『フ、ずいぶんと滑稽だな。そんなにその女を守りたいか』

「・・ああ！」

『覚悟か・・・・・俺にも昔あったものだ。今ではないがな・・・・』

ウォーターカレントが有利とはいえ、ウォーターサルンガ以上の威力のサークルショットを喰らっているのだ。どちらも満身創痍といったところだ。

『・・・おまえの覚悟と俺の忠誠心、どちらが強いか、証明しようじゃないか』

『言われなくてもそうするつもりだ！』

2人が自分の武器を構える。これが最後の攻撃だ。

『オーシャンズウロボロス！』

「EFB（エグゼフォースビックバン）インフィニティバレット！」

青い蛇と、無限の弾が真正面から激突した。

『うおおおおおおおっ！』

「はあああああああああ！』

連射だと銃のほうが断然強い。けれど、オーシャンズウロボロスは水を纏っていて、弾は水流で威力を軽減してしまう。そして、矢で弾を破壊されてしまう。徐々にスバルは押される。

『スバル、気張れよ！』

「分かってる！はあああああああ！」

けれど、それでもオーシャンズウロボロスのほうが強い。

『ミソラ！』

「うん、パルスソング！」

ミソラの音色が、オーシャンズウロボロスに当たる。音は水の中だと、陸上の何倍ものスピードで伝わる。そしてその音の行き先は

『なんだこれは！ぐわあああああああ！」

パルスソングは相手を混乱させる技だ。それが水のなかから一気にきたのだから、その威力も馬鹿にならない。その怯んだスキに

「これで終わりだ、インフィニティバレット！」

『ぐはあああああああ！」

無限の弾が、ウォーターカレントに襲い掛かる

第１０話　銃撃戦（後書き）

銃撃戦というよりは、お粗末なものになってしまった気がします。サルンガやブラフマなどは神の矢のことです。オーシャンズウロボロスは、アクアアローの超連射と考えてもらって結構です。それが一直線にあるので、蛇のようになるというわけです。

必殺技も、分かりやすい、ウラを返せばひねりがないものになってしまいました。最後の最後で活躍したハープ・ノートは、新しい必殺技を作りたいと思います。可哀想なんで。

誤字脱字、意見・感想もお待ちしております。ドシドシください！

第11話　忠誠心

ウォーターカレントは力なく倒れた。数百発の銃弾を撃ち込まれたのだから仕方がない。

「・・・勝った・・・・勝ったよミソラちゃん！」

「うん、2人で勝ったんだね！　でも、大丈夫？　脇腹に当たったみたいだけど」

「大丈夫だよ。・・・・ごめんね」

「え？」

「僕、ミソラちゃんの気持ちが分からないから、こんなことになったんだと思う。ごめんね」

エグゼノイズを解いてスバルは言った。

「ううん、謝るのはこっちの方だよ。スバル君は分かっていたんだね。私がもっと強ければこんなことにならなかったんだと思う。アンドロメダの時、ラ・ムーの時も、メテオGのもそう。私、もっと強くなる！　強くなって、スバル君の役に立てるようにになるから、それまで、待ってて」

「うん！」

『・・・私の忠誠心はこの程度か・・・』

突然ウォーターカレントが喋り出す。

『聞きたければ聞くがいい。俺は、あの方に忠誠を誓っていた。組織の中で1番おれはあの方に忠実だった。だから今回の計画も俺に大役をお命じになられるとおもった、しかし」

ウォーターカレントは虫の息でも喋り続ける。

『しかし、計画で私は生贄になるようにお命じになられた・・・・・」

「い、いけにえ?」

『おい、それはどういうことだ!』

『簡単なことだ。おまえ達の力を引き出させるための捨て駒にされたんだよ』

よく分からない。なんで僕達の力を引き出させるのだろう。

『なんでおまえ達の力を引き出させるかは俺にも分からない。けれど、おまえ達の実力が低すぎるなら、殺しても構わないとも言われた』

謎が多すぎる。力を引き出そうとしているのに、弱すぎたら殺してもいいとは、明らかに矛盾している。

『俺は半分忠誠心を失った。だからこうして戦いにも負ける。あの方はこうなることを知ってて俺を・・・・・』

「最後に聞かせて、なんでおまえ達は僕と戦うの？」

『・・・言えない。言ったら俺は爆発する』

「「！」」

『だから早く逃げろ。そして、伝えてくれ、もしあの方にあったら、俺はあなたに忠実だったと・・・』

「君は、死ぬのか？」

『ああ、死ぬな。・・・ロックマン、これをもっていけ』

それはプログラムだった。

『おまえなら使いこなせるだろう・・・この時代の英雄よ』

行け、と指で命令をされる。聞きたいことがあったが、スバル達はそれに素直に従い、出口を目指した。

『・・・あなたは、死ぬ間際に計画の全貌をプログラムで教えてくれるといった。俺はもう死ぬときだ。・・・・・・教えて欲しい』

ただ、その命が消える瞬間を待つ。そして自分の中からなにかが壊れるような感覚を感じたとき

『・・・・・な！』

スピカモールが爆発した。

第11話　忠誠心（後書き）

暗い話になってしまいました。相手の組織とエグゼノイズには共通点が2つあります。そこも考えて欲しいです。

スバルとミソラは、お互いを理解するため、守るために前に進んでいきます。そんな2人を温かい目で見守ってあげてください。

感想大歓迎ですよ～　背景を青にしたいのですが、やり方がイマイチわかりません～。誰か助けて～

第１２話　始動

『ロックマンはどうだった?』

黒い騎士が赤い魔術師に聞く。

『ウォーターカレントが負けました。そして死ぬ間際にあのプログラムをロックマンに渡しました。』

『あれをか・・・・計算どおりだ』

黒い騎士は笑った。なにもかもあの方の計算どおり。一寸の狂いもない。

『引き続き監視を続けろ。たしか次は・・・・・』

『ええ、あやつです。いくらあのソウルユニゾンが使えても、あやつの銃相手に銃で勝てるわけがありません。』

赤い魔術師はそう言い切った。

『そうなると他のソウルユニゾンを使う・・・・・徐々に使い方を知ることになるだろう』

『２００年前の遺産の使い方を』

スバル達はスピカモールの事件のあと、ＷＡＸＡから召集命令がかかったのだ。無論、敵の組織のこと、エグゼノイズのことを詳しく話すためだ。

スバルとミソラは、ウェーブライナーでＷＡＸＡ日本支部に向かっていた。

「スバル君、どうしたの？そんな深刻そうな顔をして」

「いや・・・昨日のことを思い出してたんだよ」

スバルはあくまで明るく言った。これから暗い話をするのに暗く言ったら、ミソラも暗くなってしまいそうだからだ。

「最後にもらったプログラムのこと？」

「それもそうだけど・・・ウォーターカレントの言っていた目的が気になっていて」

「・・・・気になるけどさ、まだいいじゃん♪そういうのは考えないようにしよ」

スバルは自分が馬鹿だと思う。自分よりミソラのほうがはるかに明るいのだ。それなのにミソラが暗くなってしまうなんて考えるなんて、その前に自分が暗くなってしまうじゃないか。

『ＷＡＸＡ日本支部、到着で～す』

ウェーブライナーの運転ウィザードがそういった。スバルとミソラは、ウェーブライナーから降りた。ミソラが先に歩いていたのだが、まるで遠足でも行くように歩いているのだ。スバルは少し笑った。

「どうしたの？スバル君」

『おおかた、ミソラを見てニヤ――――』

『そんなことあるわけないでしょ！」

とウォーロックをハープがビンタする。

「なんでもないよ。」

スバルはそう言った。ミソラはいつまでもミソラで居て欲しい、そうスバルは思った。

ドアまで辿り着いた。ハンターをかざして中に入る。

「ようこそ、スバル君、ミソラちゃん。司令室でみんなが待ってるよ」

「「分かりました。」」

サテラポリスの隊員に指示されたとおりに、司令室に向かう。エレベーターに入り、司令室がある最上階のボタンを押す。

「久しぶりだね～。ここ来るの。」

ミソラは楽しそうに言う。無論全然楽しくはないが。スバルもようやく気付く。スバルが暗い表情をしているので、気を使ってくれているのだろう。

最上階に着く。司令室のドアを開ける。

「「失礼します。」」

「来たわね。・・・これで全員そろったわね」

ヨイリーがそういった。

「じゃあ、これより会議を始めるわ。」

第１２話　始動（後書き）

今回はとくになにもありませんね。ただ、スバルがミソラを意識し始めたという所を書きたかったので、ここはあえて書きました。

プログラムは後半に必要になります。

次は今検討中なんですが、スバルの出番ないかもしれません。期待してしまった人はすいません。あと計画は軽く狂います。それが後にどう影響するかを考えて生きたいと思います。

感想くださいね！お気に入りにも登録してくだされればとっても嬉しいです。これからも応援よろしくお願いします。

第１３話　謎

「まず私からね」

ヨイリー博士から、ということは他に話す人がいるのだろう。今会議に出席しているのは、長官、ヨイリー、大悟、スバル、ミソラ、ウォーロックｍハープだけだ。他にも来るらしいのだが、来る気配はない。

「スバル君のエグゼノイズのことよ。これは２００年前のネットナビ、ロックマンエグゼのノイズチェンジだと分かったわ」

それはメールにも添付されていた情報だった。スバル以外は驚いている人もいたが、すぐに落ち着きを取り戻す。

「そして驚くことに、それはエグゼの戦いの記憶だと分かったわ」

「記憶・・・ですか」

大悟が言う。信じられないといった顔だ。

「ええ、前にも言ったとおり、ノイズチェンジは、ウォーロックちゃんの周波数と共鳴してできるものなの」

『ああ、だが俺の周波数自体が変わっちまったんだぜ？そんなことありえるのか？』

「これは極めて稀なことよ。そしてこのノイズを使っている間は、スバルちゃんだけに、疲れ、ダメージがあるわ」

「どうしてですか？」

「エグゼは元々人間だったの。それを人格データに変換してできたナビなの。同じ人間だからダメージがスバルちゃんだけにあるんだと思うわ」

「じゃあ、あのソウルユニゾンってなんですか？」

今まで黙っていたミソラが聞いた。

「さっきも言ったとおり、エグゼノイズは記憶よ。エグゼも過去にソウルユニゾンを使ったことがあるのよ。それがウォーロックちゃんと共鳴することにより、できるようになったのよ。もちろんこれ以外にも変身することもできるわ。けど・・・・・」

「けど？」

「経験が必要なのよ。エグゼの記憶も完璧じゃないから、覚醒させなきゃいけないのよ。言い換えれば、忘れていた物を思い出させなきゃいけないってことね」

ようするに僕は経験不足らしい。それもそうかエグゼは6回だけど、僕は3回しか救っていないのだ。

「私からは以上よ。長官、お願いします」

「分かった。」

長官は咳払いし

「私からは、新しい遊撃隊メンバーの紹介をしたい。入ってくれ」

スバル達が入ってきたのは違うドアから、新しい仲間は入ってきた。

「暁さん?ジャック?クインティア先生!・・・ツカサ君!」

続々と入ってくるかつての仲間と敵。こんな日が来るとは夢にも思わなかった。

「よう、スバル。元気にしてたか?」

「暁さんこそ!たしかジョーカーの自爆に巻き込まれたんじゃ――――」

「その話はあとな、スバル」

「では、新しく入ったみんなに、ハンターを渡すよ」

そのハンターの中には、ジャックにはコーヴァス。クインティアにはヴァルゴ。暁にはアシッドが入っていた。みんな思い思いのことを話す。

「私からは以上だ。私はこれから出かけなくてはいけないので、暁君。あとは任せたぞ」

「ハイ、長官!」

それを満足そうに聞いて、長官は退室した。

「じゃあ、俺からは、このごろ現れた敵組織のことだ」

みんながしんとなって聞く。

「まず、奴らの組織の名前は分かっていない。目的もよく分からない。分かっているのは、スバルの力を引き出したいということだけ」

不明な点が多すぎる。なぜ自分の力を引き出したいのだろうか。

「次に規模だが、そこまで大きくないと推定される。せいぜい7人くらいだろう」

「なんでそんなことがわかるんですか？」

「それは、・・・まだ推測に過ぎないから、あまり話したくないんだ。すまない」

「・・・・・・」

話したくない理由が分からない。なにを隠しておきたいんだろう。

「他になにか分かることがあるか？スバル」

「え、え～と、これも推測なんですが、もしかして敵は過去に存在してたんじゃないかな～って」

「・・・は？」

みんなが唖然とする。

「スバル、どうしてそう思うんだ？」

暁は念のため聞いておいた。

「なんか、戦いの途中で閃いたってゆうか・・・すみません、今の忘れてください」

みんなの視線が痛い。

「じゃあ、今日の会議は終わり。解散」

それと同時にみんなが帰っていく。

「ヨイリー博士、ちょっといいですか？」

「なあに？スバルちゃん」

「その、相手の電波体が僕に渡したんですよ」

「・・・これを？」

コク　と頷く。

「分かったわ。調べておくわ」

「ありとうございます」

「帰り道気をつけなさいよ。あと、ちゃんと守ってあげなさいよ？」

「・・・はい？」

よく分からなかったが、スバルはウェーブライナーに足を運んだ。
そんなスバルをヨイリーはやさしく見ている。

「博士、言わなくてよかったんですよね？」

暁はヨイリーに尋ねる。

「ええ、あれは士気に関わることだわ・・・・・」

「それにスバルの変身、あれは悪い方向に行けば」

「彼や他の子たちも巻き込むわね。闇は克服できても、エグゼの最後の変身は・・・・」

「ヤバイですね・・・」

「スバル君が暴走しないように頼むわよ、シドウちゃん」

「・・・ハイ」

紅に染まる空を、ヨイリーは悲しそうに見つめた。

第１３話　謎（後書き）

感想下さ～い

第１４話　決意

「おい、スバル」

ウェーブライナーのなかで、ジャックがスバルに話しかけてきた。
なぜスカイウェーブで帰らないのかというと、ウォーロックが電波変換を無駄にしたくないらしい。
ミソラはクインティアと話している。女同士でなにか、恋の話でも話しているのだろうか。

「なに？ジャック」

「俺が居ない間学校でなにかあった？」

「あ、それ僕も知りたいな～」

話にツカサも入ってきた。

「えーと・・・とくにないな～」

真面目に考えてなにもなかった。

「おい、なにかしらあるだろ」

「いや、それがなにもなくて・・・・」

「自分のことも含めてか？」

ジャックが笑いながら聞いてくる。その顔はウォーロックそのもの

だ。

「そういうことはスバル君に聞いちゃ駄目だよ、ジャック君」

そういったのはツカサだった。

「なんでだ?別に聞いてもいいだろう?」

「違うよ、スバル君鈍くて自覚してないんだよ」

ジャックが数秒固まる。そして

「え~、こんなに周りが分かってそれは、アハハハハハハ」

ジャックは笑いが止まらなくなってしまった。イマイチよく分からないスバルは

「なにを自覚してないの、ツカサ君」

「スバル君もいずれ分かるよ」

とにっこり微笑んでツカサは言った。

「そういえば、ヒカルは?」

スバルは思い出したように言った。

「ヒカルは・・・必要なとき以外は封印できるようにしたよ」

「それはよかったね」

「うん、そうだ。スバル君、僕とブラザーを結んで欲しいんだ」

スバルは少し黙ったままだった。

「・・・・ツカサ君、なにを言っているの？」

断わられるそうツカサが思った瞬間

「僕達はとっくにブラザーじゃないか」

「スバル君・・・・ありがとう」

ツカサは、心から嬉しかった。生まれて初めてのブラザーができたのだ。嬉しくないわけがない。

「ジャック、僕と結ばない？」

「あぁ？・・・ったく仕方ねえな。いいぜ」

ブラザーが増えた。そんなスバルも嬉しかった。またみんなで笑えあえる。多くの友達と平和な日常を送れる。だから

（こんな平和を壊さないためにも、僕は戦うんだ）

（ヒカル？）

（何だ）

（やっぱりスバル君は結んでくれたよ）

（よかったじゃねえか、その友情が壊れないようにも、精々用心しな）

（うん、分かってる）

ツカサはつい数ヶ月前を振り返った。

僕は過去に大きな罪を背負ってしまった。どうやったら償えるか考えているとき、メテオGの事件でスバルのがんばりを知った。そんなスバルを、彼は守りたいと思った。こんなすごい人を死なせちゃいけない。そしてふと思いついた。

「スバル君を守っていけば、そのうち償いになっていくんじゃないのかな」

だから、ツカサは自分のブラザーを守っていく、

（それが僕の償いになって、人のためになるから）

第１４話　決意（後書き）

この物語のあらすじにも書きましたが、スバル達はそれぞれの信念、決意などをしていきます。それがどんな状況になっても、貫き通せるか。弱い人間なら通せないと思います。でも人間というのは弱いです。なぜなら逃げ道を探せてしまうからです。けれどそれを、絆で乗り切っていく、そんな話にしたいと考えています。

感想は本当に励みになります。一言でもいいので書いてくださいね！

今日１日で２００人もの人が、のべだと２０００人の人がこの小説を読んでくれました。ありがとうございます！これからもいろいろとあるかと思いますが、がんばって書いていきたいと思います。これからも応援よろしくお願いします！

第１５話　気遣い

「ふ～、疲れた～」

ベッドに横になって。スバルは言う。

『エグゼの記憶か・・・・・・そういえばスバル、過去に居たとか言ってたけどよ～、どういうことだ？』

「う～ん・・・なんて言うか、なんかそう頭の中に考えが浮かんで来たって言うか・・・」

スバル自身も、よく分からなかったが、けれど間違ってる気はしなかった。

「ウォーロック、エグゼの記憶が僕に流れるってことはないのかな？」

だとしたら納得もいく。しかし根拠がないのだ。

『・・・そんなの俺に分かるわけないだろ？』

ウォーロックの考えを聞きたかったのだが、ウォーロックの頭からして、まともな返答は返ってこないと今更ながらに思ったので、それ以上は聞かなかった。

『あとなスバル、ヨイリーのばあさんから新しいＰＧＭもらったぜ』

「へぇ～、そうなの？」

『その名もエグゼＰＧＭだ！これから電波変換したら、最初からエグゼノイズになってるって訳だ』

「それはすごいね！だけど、ノイズがなくても大丈夫なの？」

ノイズチェンジはノイズがなければできないのだ。

『それがな、俺達は前に戦うごとにノイズが貯まっていった、そうだよな？』

「それがどうしたの？」

『エグゼノイズはな、そのわずかなノイズだけで変身できるらしいんだ』

「ふ～ん、なるほどね。だけどさ」

スバルは不思議がった表情で聞いた。

「なんで僕には説明しなかったんだろう」

ウォーロックは一瞬固まったが、質問に答えた。

『・・・簡単に言うとな、作者の気遣いだ』

「作者？なんで作者が関係あるのさ」

『いやさ～、最近おまえと俺の会話が変じゃん？』

「うん、まあね。ウォーロックがよく分からないこというし」

『それでな。「さすがにこのままじゃ駄目だ」って言って、俺とおまえの会話をまともにしてくれるよう気遣ってくれたんだよ』

（ウォーロック、それは全部君が悪いんだよ・・・・あと作者さん、気遣いありがとう・・・）

スバルは心の中でウォーロックにツッコミをいれ、作者にお礼を言った。

「スバル～、夕飯よ～」

「分かった、今行く」

スバルはリビングに向かっていった。

『・・・スバルにはまだ言ってねえが、俺にも記憶が流れていた』

けれど、それはエグゼのものではなかった。

『何なんだ?この情報は・・・・あの変身ってなんだ?』

スバルに流れている記憶と違って、ウォーロックの記憶は分からないことがありすぎた。けれど確実に分かることもある。

『エグゼノイズにはヤバイ変身があるな・・・・・・』

なにかあったら真っ先にスバルを止められるのは、身近にいる自分だ。自分がなんとかしなくてはいけない。

『へっ、俺らしくねえか・・・・』

ウォーロックもスバルの後を追おうとした。

『あ!やべ、スバルにヨイリーのばあさんからの伝言伝えておくの忘れてた!・・・・まあいいか』

ウォーロックもリビングに向かっていった。

『ミソラ、ヨイリー博士からメールよ』

ミソラはメールの中身をみる。

「ノイズを吸収プログラムをあなたように作ったわ、上手に使って、スバル君に追いついてやりなさい。だって、ハープ。ヨイリー博士、ちゃんと分かってくれてるね」

『そう、よかったわね、ミソラ♪』

そう言うハープだったが、ミソラがあまり戦いに参戦して欲しくなかった。スバルを守りたいという思いが

強いあまり、勝ち目もないのに戦ってしまうかもしれないから。

「・・・大丈夫だよ、ハープ。私は無理なんかしないわ。そして負けない。・・・私ね、この戦い

が終わったら、言おうと思うの」

『戦いの後でいいの?』

「うん、だって、困っちゃうと思うよ?戦いの間に無駄に困らせたくないもん」

それもそうね、と2人は苦笑する。こんな幸せな日々を壊してはいけないんだ。

（ミソラは私が守るわ、なんとしても・・・・・・）

それは自分はどうなってもいいというのではない。2人でまた幸せを噛み締められるような、そんな思いからの決意だ。

「あれ、PSってある・・・・」

『へぇ～、なんて書いてあるの？』

「え～とね・・・・・・！」

ミソラは顔を赤くした。

『ミソラ！なにがなにが書いてあるの？』

ハープもそれを見た。その瞬間、ハープは思った。

（やっぱりみんなは分かってたか・・・・・）

ハープは夜空に散る満天の星空をみながら、そう思った。

第１５話　気遣い（後書き）

２回も決意で終わってしまいましたが、次回はなんと、ＧＷで旅行に行きます。場所はまだ検討中なんですが、コチラも要望があればすぐにお願いします。　ウィザードも決意をしました。やはり、オペレーターとの絆を１番に大事にするような書き方をしたいと思います。　人との絆、決意がテーマにしたいのですが、テーマなっているでしょうか？そこのところも意見、感想お待ちしております。これからも応援よろしくお願いします♪

第16話　行き先

「・・・・い、・・・・バ・・君、・・・・きなさい、スバル君！」

「ハッ！」

気持ちよく寝ていたスバルは、闇魔の怒鳴り声によって起きてしまう。

「あなたどうしたの？そんなに私の話が退屈なの？え！」

スバルはなにが起きたか理解できてないでいた。

「えと・・・委員長、なんの話をしてたんだっけ？」

その言葉に闇魔はさらに怒る。

「！あなた、最初から聞いてなかったの？」

たしか自分は、授業が終わって帰りの用意をしていたら、委員長に呼ばれて、話を聞いていた・・・はずだ。どうやら自分は眠ってしまったらしい。

「スバル君、私達は明日から始まるゴールデンウィークの予定を決めているの？分かった！？」

「ハ、ハイ！」

スバルの背筋が自然と伸びる。

「で、どこに行くかを迷っているんですよ」

キザマロが口を開いた。

「俺はうまい物があるとこだったらどこでもいいぜ！」

ハーとルナがため息をつく。

「たしかに、おいしい物はあったほうがいいわ。だけど！どうせ旅行に行くなら楽しんだほうがいいじゃない？それにこの時代には自然が少なくなってきてるわ。だから、自然がたくさんあるところを探しているのよ」

「い、委員長、旅行なんだけど・・・・・・」

「なに？スバル君。アナタは寝てたんだから、まともな意見じゃなきゃ承知しないわよ！」

「いや、そうじゃなくて・・・・・」

「僕は遠慮してくよ」

「な、なにを言っているの!?そんなに私達と旅行に行きたくないの!?」

「いや、そういうことじゃなくて。僕は今戦いの真っ最中なんだよ。知っているでしょ?スピカモールが破壊されちゃったのを。僕は命を狙われているんだよ。もし委員長が近くにいたら、狙われるかもしれないんだよ」

その可能性を低い。現に敵はいまのところ死者を1人もだしていない。けれど、殺さなければ人質にする可能性は否定できない。

「・・・でも、あなたが守ってくれるんでしょう?」

ルナが少し顔を赤らめて言う。

「・・・へ?」

予想していた返答を大きく上回っていた。いや、どこかでその答えを予想していた。スバルの表情自体はあまり変わっていない。

「そうだぜスバル!俺もおまえを援護するぜ!」

「そうですよ、ロックマンは絶対みんなを守ります!だから僕らは安心できるんですよ!」

ゴンタとキザマロにもそう言われてしまった。これはひけなくなってしまった。

「・・・・分かったよ。だけど約束して、絶対に無事でいてね？」

3人が顔をあわせて、一緒に言う。

「「「その言葉、そのままお返しします！」」」

3人で言われてしまったら、スバルも堪ったもんじゃない。大きなため息をつく。そんな時

『おいスバル、メールだぜ』

その単語がでるとともに、クラスの男子がスバルを見る。

「あ、友達からだ～」

「友達」という単語がでた瞬間、視線はスバルから外れていった。「友達」というくらいなのだ。あのトップアイドルを「友達」というとは到底思えないからだ。

「で？なんだって、スバル」

ゴンタが小声で聞く。

「え、え～とね。もうすぐゴールデンウィークだね。ルナちゃん達と旅行でもいくのかな。私もゴールデンウィーク休みがとれたから、もしＯＫだったら行ってね？私の意見としては、Ｋ都がいってみたいな～、だって」

Ｋ都、それは遠い昔に、今のＴＫのような都市の名前だ。ニホンの

古くからある建物があり、おいしい食べ物もたくさんある。近年では、K都をそのままのままにしようと、木もリアルウェーブではなく、本物の木だ。条件としては申し分ない。

「・・・じゃあゴールデンウィークには、K都に行くわよ！」

「オー」という前に

「へ～、僕達も行っていいかな？」

ツカサが突然聞いてきた。

「いいわよ、旅行は人数が多いほうが楽しいもの」

「ジャック君もいこうよ」

ツカサがジャックを誘う。ジャックはしょうがなさそうに

「しょうがねえ、行ってやるか！」

「ホントは行きたくてしょうがなかったんでしょ？」

「んだとドリル！しょうがねえから行くんだよ！」

ルナとジャックが喧嘩を始める。

「それにしても、スバル君。ミソラちゃんと行けてよかったじゃない」

ルナとジャックが喧嘩をやめる。男子がスバルをまた見る。

「ツカサ君、なんで言ってしまったんですか！」

「そうだぜ！スバルが死んじまうかもしれないぜ？」

「ゴメンゴメン、口が滑っちゃった」

ツカサが笑って謝る。滑らせたの間違いではないのだろうか。

『スバル』

「うん・・・・ゴメンねウォーロック・・・・」

戦い以外は使いたくなかったのだが、しょうがない。

『いや、謝ることはないぜ、スバル。これもまた運命さ』

「ウォーロックの口からそんな言葉が聞けるとはね・・・・」

「トランスコード　シューティングスターロックマン！」

「スバルく～ん！明日は8時、ウェーブライナーの乗り場に集合ね～！ミソラちゃんにも伝えておいてね～！」

逃げるスバルに、ルナは業務連絡を伝えた。

追いかけっこがまた始まった。

第１６話　行き先（後書き）

６時がアクセス数は3だったのに7時のアクセス数が３１と、一気にみなさんが読んでくれました。それほどこの小説の更新を待っててくれるとは思ってませんでした！ありがとうございます！

K都はみなさんおわかりですね？ミソラがゴールデンウィーク暇なのは変ですが、ゴールデンウィークの番組はその前に収録していると思うので、ミソラも休めというわけです。ツカサとジャックは仲を良くしております。表のSとウラのSといった感じです。一応ですが、ルナもスバルのことが・・・・です。

ええ、平日は2話で更新したいと思いますが、冬休みに入ると、部活があり、クタクタになってしまうので、冬休みは分かりません。それに両親の実家にもいくので、投稿ができません。ごめんなさい。その間に構想を練っておくので、たのしみにしてください。

感想ください！簡単でいいです！これからも応援よろしくお願いします！

第17話　メール

「そうだ、ミソラちゃんに明日の連絡しとかなきゃ」

思い出したかのようにスバルが言う。

『ふ～ん・・・・そうか。さっさと済ませろよ?』

「ウォーロック、どうしたの?前まではミソラちゃん関係だとなんか絡んできたのに」

するとウォーロックは

『作者の気遣いを無駄にしたくないんでな』

「・・・・あっそう」

ともかくミソラにメールを送ろうとするスバルだが、手が止まった。

「どうしよう、普通にメールを送ればいいのかな・・・」

いまどきの女の子はメールとかを、ただ普通に送るのではないらしい。スバル自体、学校の連絡や、戦いの最中の重要事項でしかメールをする機会がないため、どうすればいいか分からない。

『・・・・そういうのは無理に考えないほうが身のためだぜ?普通に送れよ』

「それもそうだね、そうするよ」

（なんかこの頃ウォーロックがすごくまともなことを言うんだけど、なんで？）

そう疑問に思いながらも、スバルはミソラに送るメールを打つ。集合時間、滞在する日程、場所、持ち物などを打ち込んでいく。

（う～ん、でもこれだけじゃただの連絡だな・・・・）

スバルは考え込んでしまった。友達なのだから、もう少し面白いメールを送りたい。

（じゃあ、「旅行いっぱい楽しもうね！」でいいかな）

スバルが考え込んだのがこの文だ。普通これくらいは誰でも思いつくとは思うが、仕方ないといえば仕方ない。

「じゃあ、送信っと。終わった～」

『まさか、スバルがミソラのことを、女だと思ってたとはな・・・・・』

「・・・・は？男なわけないでしょ？」

『いや、そういう意味じゃなくて・・・・・いてっ！』

突如ウォーロックの頭上にヘビードーンが現れ、ウォーロックの頭にクリーンヒットした。

「大丈夫、ウォーロック！」

『作者の・・・・裁きか・・・・・・・・』

「ウォーロックーーー！」

ウォーロックはそのまま気絶してしまった。あのウォーロックを一撃で気絶させてしまう威力なのだ。ものすごい威力だろう。

「・・・・作者って、僕とミソラちゃんのなにを知っているの？ウォーロックのいいたいことって何？」

静かな夜のなか、スバルは小さく呟いた。

『で、なにか分かったか？』

黒い騎士が聞いた。それは赤い魔術師ではなく、黄色い電波体だ。背は１６０センチくらいだろう。人間からして子供に見える。

『うん、彼らは明日からＫ都にいくつもりらしい。もちろん電波変換できるお仲間もいっしょでね』

『・・・・・そうか、仲間は邪魔だな。よし、おまえはウイルスと共にＫ都に行け。ウイルスを民間人に襲わせるふりをさせろ、そうすればやつらは、ロックマンをおいてウイルスを退治しに行くだ

ろう』

『ふり・・・か。襲わせちゃえばいいのに』

笑いながら黄色い電波体は言う。それは、残虐性のある言葉だった。

『・・・・・おまえはまだ計画を全て知らないからそう言えるのだ。黙ってあの方の命令を聞いておけ』

『もちろん、ロックマンを殺してもいいんだよね?電波変換をしている状態なら』

『ああそうだ。殺しても構わん。殺せば、おまえは、あの方の補佐に昇格できる』

その言葉を聞いた黄色い電波体はニタっと笑って

『必ず殺してやるさ、ロックマンを』

『そうだ、それでいい。時間は私がおって指示をだす。・・・・・しっかりやれよ』

『あんたに言われなくてもそうするさ』

そういって2人の電波体は別れた。

『・・・・いよいよか・・・・・ロックマンもそろそろ次の段階に進むはずだ。順序からして、次は』

『闇の力か』

その言葉は、闇夜に木霊していった。

第17話　メール（後書き）

え～っとスバルがメールをしてないのは、スバルはメールをもらってるしかないからです。当然送ったこともありますが、明日の学校の用意とかだけという設定です。僕は極力ゲームに沿って行きたいので、物語りもそういう終わりをすると思われます。今考えている結末は、読者のみなさまを少なからず裏切るかもしれません。スバルやその仲間は死んだりはしませんが、皆様が予想していた結末とはちがうと思います！断言できます！

予想してみてください！まだ情報が少なすぎて無理だと思いますが、最後は中途半端なところで終わります。まあ、最後は・・・おっとここからはネタバレになってしまいます。もしこれで絶対合ってる！という結末を考え付いた人は、感想に書き込んで結構です！もちろん普通の感想もお待ちしております！次話をまた今日更新するのでお楽しみに！

第18話　思惑

ウォーロックが作者によって気絶した日の次の日。スバルはウェーブライナー乗り場に来ていた。旅行に必要な持ち物を持って、みんなのことを待っている。

『スバル、おまえにしては早いお目覚めじゃねえか。俺は昨日のことでおまえより目覚めが遅かったけど』

「だって、そりゃあ、旅行なんて楽しみじゃないか。それにK都なんてはじめていくし」

『そうか・・・・・・』

なにかその返答に不満そうにウォーロックは言う。

「もうそろそろ8時になるから、みんな来るかな」

そんな時、1人の女の子がこちらに向かってくるのが見えた。服は青色で、髪は紫色だ。その顔は笑顔であって、なんていうか――

「お待たせ！スバル君。もしかして待たせちゃった？」

ミソラの顔をみて、なにか感情がこみ上げてくるのが分かったが、ふいに話しかけられて分からなくなってしまった。

「・・・・待ってなんかないよ。今日は旅行が楽しみで早く起きちゃったんだよ」

「そうなんだ。私も楽しみだよ！スバル君たちと行ける旅行なんて滅多にないもんね！」

そういうミソラの顔は、眼が開けられないくらい眩しいものだ。

「おまたせスバル君」

ツカサも来た。荷物も、旅行に行くにしては少し少なかったが、シンプルが好きそうな彼らしいといえば彼らしい。

「ミソラちゃん、その服似合うね～。・・・・・もしかしてスバル君が選んだの？」

スバルとミソラはびっくりしてしまう。そんな2人を、ツカサは楽しそうに見ている。

「やっぱりそうか～、スバル君青色好きだもんね。ミソラちゃんもよかったね」

スバルにはツカサの「よかったね」が分からなかったが。

「ありがとうツカサ君。スバル君に選んでもらって良かったよ」

ミソラがそういったので、あまり気にしなかった。

「ミソラちゃん、ちょっといいかな？」

ツカサはスバルから離れて、ミソラに耳打ちをした。途端、ミソラは顔を赤くして、

「ツカサ君の意地悪！」

と言った。そんなツカサは、そんなミソラをみてまたも笑った。

「ツカサ君なんか言ったの？」

そういうとミソラは

「なんでもない！」

どうやら自分は仲間はずれらしい。

「うるさいわね3人とも！もう少し静かにできないの？」

その声の正体は、ルナだった。後ろにはゴンタとキザマロとジャックがいる。

「それにしても、委員長にしては遅かったね。なにかあったの？」

「そ、それは・・・・・なんでもないわよ！」

ルナが化粧をしているのに気付かないのはスバルだけだった。逆ギレされしてしまうスバル。キザマロ、ゴンタは

（ドンマイ、スバル）

と思っている。

「じゃあ、とにかく全員そろったわね？次のウェーブライナーが来たら、それに乗ってK都まで行くわよ」

「委員長、乗換えとかはいいんですか？」

キザマロがメガネをくいっと上げてルナに聞く。

「それは心配しないで。ちゃんと調べてあるから」

「乗る時間はどんくらいあるんだ？K都といえばここと真逆の位置にある都市じゃねえか」

「それは、約1時間半くらいね。ゆっくり景色でも眺めて体力を温存してなさい！」

「やったぜ！おやつたくさん食えるぜ！」

ゴンタの頭にはそれしかないのか。みんなが苦笑する。今日も平和だった。

そんな時、ウェーブライナーがやってくる。

「みんな、出発よ！」

「「オー！」」

7人はウェーブライナーに乗り込んでいく。

（僕はまだここから出られないのか・・・・・・・）

彼は思う。自分が消える前に

（外にでなくちゃ。あいつに、地球を・・・・・・・）

彼の願いは虚しく、彼は出られないでいる。まだそのときではないから。

（・・・・早く、君と会いたいよ・・・・・・・）

（スバル君）

『俺の計画は成し遂げられると思うか？』

黒いローブをかぶった男が、黒い騎士に聞いた。

『はい。あなた様の計画は、我々が成し遂げて見せます』

黒い騎士がその男に向かって、言う。どうやら黒いローブのほうが

地位が上のようだ。

『まだ、その時ではないが、早くそのときが来てほしいものだ』

『ええ、全くです』

『次はアサルトか・・・・・あいつも所詮は捨て駒だ』

それは仲間としてはあってはいけないことだ。けれど、その男は、なんの躊躇もなくそんな言葉をいうのだから、その考えが揺らぐことはない。

『ですが、気になることもあります』

『なんだ?言ってみろ』

『やつの力の源は、絆です。あのプログラムを早く覚醒させたいなら、仲間を襲ったほうが――――』

『それは駄目だ』

黒ローブの男が黒い騎士の声を遮った。

『やつらの絆を深めてしまっては、たしかにすぐに覚醒できる。・・・・だが、そうしては奴はそれを・・・・・・』

『・・・・・分かりました』

黒い騎士が黒ローブの男の考えを察する。

『察しがよくて、助かるよ、おまえは』

『ありがたきお言葉です』

もうすぐ、それぞれの思惑が、幾重にも交錯し始める。

第１８話　思惑（後書き）

とくに2つ目の区切り目と3つ目をよんでください。あとで「そうだったのか！」ってなるはずです。多分・・・・・

スバル達の思惑は、ミソラ、ルナのです。まあ予想がつくと思いますが。そこも次から書いていきます。ツカサがミソラにいったことはご想像にお任せします。分かったらつまらないので。

ご感想お待ちしておりマ～ス。１行でもいいので。これからも応援よろしくお願いします！

第19話　友情

ウェーブライナーに乗ってから1時間、スバル達はK都に向かっていた。途中でゴンタがご飯を誤ってこぼして、それが他の客に迷惑がかかった以外には、とくに問題もない。

『スバル～、俺は暇だぜ～』

ウォーロックが物凄くつまらなそうに言う。

「そんなに暇ならコーヴァスとオックスと戦ってくれれば？」

めんどくさそうにスバルは言う。

『だってよ～、コーヴァスは『俺は改心したから無駄に戦いたくはねぇんだ』って言うしよ～。オックスはオックスで『俺は牛丼を食ってるんだ！邪魔するな！』とか言ってよ～』

「・・・・・あっそう」

スバルはウォーロックをなんの未練もなく切り捨てる。

『・・・・・スバル、おまえ冷たくないか？』

それはそうだ。せっかくの旅行をウォーロックの愚痴を聞かなければならないんだ。それも1時間も。

「スバル君、私も冷たいと思うな～」

隣に座っていたミソラが言う。

『おお！ミソラもそう思うか！』

ウォーロックは期待がかった眼差しでミソラを見る。

『ポロロン♪あなたがそれほど哀れに見えるのよ』

ハープがウォーロックをいじめる。ＦＭ星時代もこうだったのであろうか。

『うるせーハープ！俺はミソラに聞いてるんだ！おまえは関係ないだろ！』

『私はミソラのウィザードですもの。それくらいは、あ・た・り・ま・え♪』

『グググ・・・・・・』

ハープの勝ち。負けたウォーロックは

『あー暇だ暇だ暇だ暇だ――――！』

「うるさいわねウォーロック！黙りなさい！」

闇魔大王（ルナ）の怒鳴り声で黙り込むウォーロック。それから1時間、ウォーロックは一言も喋らなかったという。

「さあ、着いたわね！ここがＫ都ね」

先頭を切って歩いているルナがそういった。

「うわー、ホントに木造建築だ～、すごーい！」

ミソラが感心したように言う。周りは木造建築の建物があり、いかにも和風という感じが漂っている。他のメンバーもそう思ったのだろう。感嘆の声が聞こえてくる。

「じゃあ、まずホテルにチェックインするわよ！」

「分かったぜ！で、どこなんだ？」

「それはね・・・・・あそこよ！」

一同がルナの指を差した方向に眼を向ける。１５０メートルほど先に、そのホテルがあった。

「・・・・・マジで？」

「・・・・・歴史の教科書にでてきそうですね・・・・・・」

「・・・・・これがホテルなんだね」

そこは、歴史に出てくる大名屋敷のような建物だった。３階まであるのだが、今の現代には不自然すぎる建物だあった。

「ていうかさ・・・・・」

ジャックが言いたいことが分かった、ルナ以外の人は

「「「「「「あれってホテル？」」」」」」

ホテルというには、洋風さが感じられない。間違いなく和風である。和風は今の都会っ子のスバル達には、どうしてもショボく感じてしまいます。

「言っておくけど、ショボくなんてないからね？あれは２５０年位前からある、由緒ある旅館なのよ？」

「へぇ～、いいね、そういうの」

スバルが言った。

「・・・スバル君、ホントにそう思ってる？」

ミソラが聞いた。その質問はルナの選んだ旅館がどうとかではなくて、スバルの顔が嬉しそうではなかった。

「いや、ちょっと考えことしててね」

そういってスバルは力なく笑った。

『・・・・スバル、ちょっと駅で買いたいものがあったから、いいか？』

ウォーロックが

「いいよ、なにが買いたいの？」

『俺がそこまで案内するから。すまねえが、おまえ達は先に行ってくれねえか？』

「なにを言っているの？待つ――――」

『いいから、先に行っててくれ』

いつもとは違う、ウォーロックの声に圧倒されたルナは

「じゃあ、先に行ってるわ。すぐに追いついてきなさいよ！」

他のみんなは旅館に先に行ってしまった。

「で、ウォーロック。なに？」

1年もいる相棒のことだ。買い物ではないことくらい分かっていた。

『話がある、ちょっとこい』

言われるがままにスバルは着いていった。その行き先は、路地裏だった。

「で、話って――――」

突如、ウォーロックの拳がスバルの顔面をとらえる。そのままスバルは壁とぶつかった。

「げ、げほげほ、ウォーロック、なんなんだよ！」

『なんなんだよじゃねえ！ウェーブライナー乗ってる途中に急に冷めやがって！テメェのせいでみんなが暗くなっちまうじゃねえか！』

図星だった。たしかにスバルは途中から急に暗くなっていた。

「それは・・・記憶が流れてきたんだよ」

『記憶だ？』

「うん、なんか・・・・暴走しちゃう記憶だった。それだけじゃない、それで仲間を襲っちゃって。危うくデリートしちゃうところだったんだ！」

『・・・・・・・』

それにウォーロックは心当たりがあったが、ひどく曖昧なものだった。なのでスバルを納得させるにはそれでは無理だった。

『・・・テメェは、相談することができねえのか？テメェには昔と違って仲間がいるんだろ？テメェは絆がとうとかいってるが、自分で全部背負いすぎなんだよ！』

ウォーロックが怒鳴る。それは怒りからくるものではない。スバルの過ちを正すものであり、絆がうかがえるものだった。

『だから、困ったときは相談しろ。誰でもいい。ツカサでも、ジャックでも、ゴンタでも、ゴンタやキザマロでも、ルナでもいい。ミソラでもいい！もっと仲間もいるし、家族だっている！だから、１

人で背負うな』

ウォーロックの願いだった。自分は単体では弱い。けれどスバルと一緒だから、ここまで来れた。だからスバルには知ってて欲しかった。スバルは、だれもが必要とする人なんだと。

「・・・・分かったよ・・・・・・これからは気をつける・・・・」

『じゃあ行くぞ。みんなが待ってるからな』

「・・・・うん」

スバルは立ち上がり、歩み始めた。みんなのもとへ、歩み始めた。

第１９話　友情（後書き）

男の男の友情？って感じで書きました。ウォーロックってのは意外かもしれませんが、１年もいれば分かると思いますよ？意外にウォーロックって周りのこと見てる（気がする）。

え～、まだ変身の希望あれば言って下さい。７回くらいできると思うので。あと、ラスボスでは無理です。（一部例外）それもよろしくお願いします！感想もよろしくお願いします！

今日はもう一回更新キツいかもしれません。ごめんなさい。

第２０話　旅館

旅館に行くと、委員長たちがロビーで待っててくれていた。ミソラが心配そうな顔でスバルに寄ってくる？

「どうしたの？ほっぺた赤いよ？」

それはウォーロックに殴られたからであるのだが、そんなこと言えるわけがない。買い物でいくという名目なのだから。それに、ミソラに心配をさせたくなかった。けれど

『言えよ、いきなり俺の言った事を破るつもりじゃねぇだろうな？』

ウォーロックとの約束もある。

「・・・分かったよ、全部喋る」

それからスバルは、記憶のこと、それによってウォーロックに殴られたことを全て喋った。

『だからなんでウォーロックはそういうことでしか思いを伝えられないんだろうね～』

ハープは呆れ半分でそういった。

『うるせー、１番手っ取り早いだろうが！』

ケンカはまたも勃発した。そんな２人は置いといて

「スバル君、ウォーロック君の言うとおりだよ。ちゃんと私達を頼ってね？少しは力になれると思うから」

「うん、・・・少しは気が楽になれたよ！ありがとう、みんな」

「へっ、水臭いぜ、スバル！」

「そうですよ、僕らはブラザーですもの！」

「ったく、呆れちまうな、スバルは全部背負い込もうとする・・・けどそれもスバルのいいところか！」

「これからも僕らを頼ってね。きみのおかげで僕は大きく変われたんだから」

スバルは泣きそうになってしまったが、涙をこらえた。自分はこんなに大切にされているんだなと、初めて思えることであった。けれど、１人話しに加わっていない。

「ルナちゃん、どうしたの？」

ミソラが聞く。心配そうだ。

「い、いや、なんでもないわ・・・・・・」

『なんだぁ？委員長も悩み事か？』

ウォーロックが呆れている。

「そ、そんなんじゃないわよ！さっ、部屋に行きましょう」

「なんか委員長変じゃない？」

スバルがジャックに聞く。

「そりゃあ、アレだろう」

「アレって？」

「それは・・・・いや、旅行なんだからさよ、考え事はなしでいこうぜ！な？」

なんか無理矢理話を中断させられた気がする。

「あなた達の部屋は３階の５４号室よ。カギはキザマロが持ってるわ。私とミソラちゃんは６１号室。分かった？」

エレベーターに乗ってスバル達はルナの話を聞いていた。

３階へとスバル達は、男子は５４号室がある右側の通路を、女子は６１号室のある左側の通路を歩いていった。

「１０分後、集合よ」

そう別れ際にルナに言われた。元気がなかったように思えた。

５４号室。でかいドアがあった。カードキーでキザマロを使って開ける。

部屋は大きく、８人は入れるだろう。お茶も自分で作れば飲める

し、不満はなかった。

「和風だね、結構広くていいね」

今度は元気のある声でスバルは言った。

「おう、そうだなスバル。和風って、案外結構いいもんだな」

「そりゃあ、あの委員長がえらんだ旅館ですから、当たり前ですよ！」

キザマロが言った。

「じゃあ、早く荷物置いて、ロビーに行こうぜ」

ジャックがみんなを急かす。

「そう急ぐことはないよ、ジャック君。旅行なんだから、ゆっくりしようよ」

「あのドリルのことなんだから、時間遅れたらキレるぜ？」

それもそうだと、男子達はすぐに、準備をする。

「ルナちゃん、ちゃんと言ってあげるべきだと思うよ？」

ミソラがルナに言う。

「わ、分かってるわよ！そんなこと、あなたに言われなくても」

「・・・私達はたしかにある意味敵なのかもしれないけど、それで遠慮してるくらいなら私は駄目だと思うよ？」

６１号室の前に着く。ルナがカギを開ける。

部屋はやはり和風で、３人くらいの部屋だろう。結構よさげな部屋だ。

「さ、早く準備しましょ？」

ルナが急いで準備を始める。明らかに挙動不審だ。

「・・・・そんなことじゃスバル君は振り向かないと思うよ？」

ルナの手がピタリと止まる。

「やっぱり・・・・・」

「わ、私は、ほ、星河君が好きなんじゃなくて、その、なんていうか、その・・・・・」

ルナが慌て始める。

「まだ、戦いは始まったばかりでしょ？ちょっとは強引に行かなく

ちゃいけないと思うな、私は」

「・・・・・・」

ルナは黙り込んでしまう。

「まあ、私はそのほうが、いいけどね」

ミソラがルナに強く言う。なぜならこれはルナのためでもある。このままではスバルに思いを告げられないままでもあり、ミソラにとってもスッキリしない。

「・・・・・私には、私のやり方があるから・・・・・」

「・・・・そう」

2人は準備を続ける。

『そろそろ俺も暴れられるのか？』

黒ローブのウィザードは、黒ローブの男に話しかけられる。

「いや、まださ。まだ時はきてないよ」

『早く来てほしいぜ。そうしたら、俺達は、この星を』

「それだけで終わる気はないよ、ゆくゆくは銀河も手に入れる」

黒ローブの男は、微笑みながらウィザードに話していく。

『そうだな、そうだよな。俺らの復讐はとどまる事を知らないもんな』

「そう、そのためにはがんばってもらわなきゃいけないんだよ」

「ロックマンに」

第２０話　旅館（後書き）

計画の目的は明かしました。けれどなぜスバルが必要なのかはまだ秘密です。結構複雑な構想にしているのですが、友達（ロックマンを知らない）に聞いたら、

「ツメが甘い」といわれてすこしブロークンハートです（笑）

眠いのですが、がんばって更新しました。だれか夜遅くまで起きれるコツとかあるんだったら教えてください。

感想も遠慮せず送ってください。変身も募集しているので。これからもよろしくお願いします！

第２１話　清火寺

「おまたせ～」

スバルが待っていたミソラとルナに言った。

「うんうん！全然待ってないよ～」

「そ、そうよ。あんまり待ってないわよ・・・・」

スバルは約１分間、遅れてしまったのだが、ルナに怒られなかった。安心半分、不安半分だ。不安というのは、ルナがこんな調子なので、なにか起こってしまうと思うからだ。

「じゃあ、行きましょう。まずは清火寺（きよかでら）よ」

清火寺とは、国宝にも指定されている、古くからあるお寺だ。春だと、本堂から見る桜が満開の景色は最高らしい。けれど今は、桜は散ってしまっているのだが。

「まあ、私が作ったプランは最高に楽しいんだから。期待してなさいよ」

「なあ、委員長。なにか食い物でもあるのか？」

ゴンタが空気を読まない発言をした。一同はゴンタを睨む。

「いや・・・・なんでもないや」

「じゃあ行くわよ。近いから徒歩ね。１５分くらいで着くはずよ」

「分かった。じゃあ行こうよ」

スバルが言う。

スバル達はルナを先頭に、清火寺に向かった。

清火寺はホテルから１５分くらいで着くのだが、今日はゴールデンウィーク。もちろん混んでいる。人が多すぎて中々前に進めない。

「結構多いね」

ツカサが言った。たしかに多い。見たことはないが、百鬼夜行のようだ。

「お、俺疲れた・・・・」

「ゴンタ君、早すぎますよ！」

清火寺は山の上にあるために、傾斜である。当然平地よりはキツい。そしてこの大行列。長い時間傾斜に

いなてはいけないので、とても疲れる。

ようやく門らしきものが見えてきた。

「これが仁皇門（にこうもん）ですね」

キザマロがいった。マロ辞典で調べたのだろう。

「さあ、まだ先は長いわよ！がんばって歩くわよ！」

半分ヤケ気味な声でルナが言う。

階段を上っていくと、青色で塗られている門があり、その後ろにも青く塗られている塔があった。

「これが東門ね。後ろにあるのは四重の塔かな？」

「へぇ～、ミソラちゃん詳しいね」

「前々から調べてたんだ。だって、ここ前から来たかったんだもん！」

ミソラが元気一杯で答える。それをスバルは微笑みで返す。

『さ、まだ先は長いんだから、早く行きましょう』

ハープが2人を急かす。

「でも、こう階段ばかりだと、なにかと辛いな」

もうそろそろ半ばだと思うのだが、本堂は見えない。

「この疲れがあるから、本堂からの景色が一層素晴らしく見えるのよ。あなたには分からないでしょうが」

「んだとドリル！さっきからウジウジしてるかと思うと、いきなり喚きやがって」

「な、なによ！あなたには関係ないでしょ！」

よく喧嘩をあきない2人である。いつもこの2人は喧嘩をする。

（委員長って、ジャックのこと・・・・・）

そう思うスバルだが、自分には分からないので、口にはしなかった。

次は経堂の中に入った。なかにはお釈迦様が祀られており、不思議な空間を使っていた。

「うわ～、なんか神々しいね、ツカサ君」

「そうだね。不思議な気持ちになるな、これを見てると」

隣にも隋失堂という建物があるのだが、帰りにも通るので後に見ることにした。

ここまで来ると、本堂が見えてくる。

「もう少しですね～」

「俺、も、もう駄目。・・・あ！芋こんにゃくが売ってるぜ、ちょっと行って来る！」

疲れてないのではないかと思うくらい、ゴンタは猛スピードで走っ

た。芋こんにゃくを買うと、今度はゆっくり芋こんにゃくを食べながら戻ってきた。

「うまいな～、芋こんにゃく」

一同はゴンタを無視して先に進んだ。

次に入ったのは夜倉堂(よくらどう)だ。戦国大名の夜倉貞朝(よくらさだとも)が寄贈した建物らしく、大名というだけあり、かなりお金を費やしてるように見える。

「千手観音ね。いいわね～、なんかかっこいいわね」

「・・・・そうか？」

かっこいいとは言わないと思ったが、ジャックは言わなかった。ここで喧嘩をするのはさすがにヤバイ、と感じたからである。

そしていよいよ、待ちに待った、本堂である。

第２１話　清火寺（後書き）

今回はつまらなかったかもしれませんね。ごめんなさい。一応自分の実体験で書いています。建物などの名前はほぼ変えてあります。

第２２話　絶景

そこは素晴らしいものだった。さすがに国宝に指定されてるだけはある。

「きれい・・・・」

「ホントだね」

「私のプランに間違いはなかったわ！」

「うわっすげー。なんだこりゃ！」

「さすがは国宝、風情がありますね～」

「綺麗だな～、でも春に来て見たかったな、どうせなら」

「姉ちゃんも連れて来てやりたかったな～、なんで暁なんかと・・・・」

感想＋愚痴をいうみんな。

そこは、言葉では表せないものだった。若葉が瞳を映し、風は若葉や木々を揺らす。一言で表せば、荘厳、だろうか。

「桜が咲いているときに見たかったね。ツカサ君が言うように」

「そうだね、でもしょうがないよ。それに、夏には夏のいいところがあるし」

そうスバルが言う。

「スバル君。また、来れたら来ない？できれば春に」

「・・・分かったよ。またここに、来ようよ。みんなで」

スバルからすればみんなで来るのが必然だと思うのだが、ミソラにとっては違う。

（ハァ～、どこまで鈍感なんだろう。けど、そこもスバル君か）

「うん！来ようね、みんなで」

彼なら守ってくれるだろう、この約束を、絶対に。

一方のルナは

（なんなんだろう、私はスバル君が好き）

しかし、ルナの心にはもう1つの感情がある。

（でも、ジャックを見ていると、なんだか・・・）

ルナの心は、まだ誰にも分からない。

『え～っと、場所は清火寺、日時は明日の１０時半、か～。明日は清火寺にこないと思うけどな～。ま、あの方にはあの方の考えがあると思うしな～』

ウェーブロードの上で、黄色い電波体、アサルトが呟く。

『・・・それにたくさん障害物があるから僕にしては戦いやすいか。あの方は僕の武器を理解したうえで・・・・あの方の計画はあの黒い騎士しかしらないけど、倒せば僕にも教えてくれるはず。倒さなきゃな、ロックマン。死ぬ間際に知ってもしょうがないし』

そういって、アサルトは消えていった。

スバル達はあれから隋失堂に行った後、昼食を食べる所を探していた。１度も来てないところで探すのは少しキツい。ハンターＶＧで探した所は、やはり人が多く、あと１時間は待たないところばかりだ。

「どこかないかな～」

スバルが呟く。時刻は12時半。さすがに腹が減ってくる時間帯である。

「ルナちゃんのオススメのところはどこも待つの長いし、ホントにどうしよっか？」

ミソラが言う。

「電波変換するのもどうかと思うし、・・・・お！」

ジャックが指をさす。一同がそこを見る。そこは和食屋さんだった。

「お客もそこそこいるし、大丈夫そうだね」

ツカサが言う。たしかに、並んでいるわけでもない。絶好の場所だ。

「よし、じゃああそこに行くわよ！」

みんなが足を揃えて向かっていく。

「【和食屋　春空】だって。いい名前だね」

ミソラが言った。

「じゃあ、早速入りましょう」

ドアを開ける。こじんまりとした店だった。お客も多くはなく、けれど、その客は満足しているように思えた。

若い着物姿の女性の店員が

「いらっしゃいませ、お客様は」

「7人です」

ルナが慣れきったように答える。

「かしこまりました。ではお席はそこになります」

スバル達は窓際の席に案内された。テーブルも木造で、リアルウェーブではけっしてない。

スバルの隣にミソラ、そしてそのとなりがツカサが座る。反対側は、左側からルナ、ゴンタ、キザマロ、ジャックの順で座る。

「じゃあ、食べたい物を頼んで。あとゴンタは食べ過ぎないように」

1人1人にメニューが渡され、みんなが考え始める。

「・・・僕は今日のオススメでいいかな」

「僕もそれかな。なんかこれがあると頼んじゃうんだよね」

「ツカサ君、それ分かる！私も頼んじゃうんだよね。ってことでわたしもオススメで」

「そうだな～、俺もミソラちゃんと同じオススメで」

「おいおい、ここはみんな別々にしようぜ・・・・そういう俺もオススメで」

「え～っ、みんな同じですか～？じゃあ僕も」

残るのはルナただ1人。

「な、なによ！私は他のを――――」

『1人だけ仲間はずれか、かわいそうに』

ウォーロックがルナに言った。他のみんなは、ルナの発言に注目を集めている。

「・・・・・私もオススメで」

満場一致のオススメになった。

「じゃあ、今日のオススメを7つお願いします・・・・」

「かしこまりました。少しお時間がかかりますので、ゆっくりおまちしてください」

ルナは店員に言うと、ため息をついた。

「私は私で食べたい物があったのに～」

ルナの声は、虚しく店内で響いた。

第２２話　絶景（後書き）

絶景という割には、少なかった気がしませんでしたか？それほど言葉がなかったんですよ～。桜の咲いてるときに見たかったんですけどね～。そのときがこの小説であるかもしれませんけど・・・・・

さあ、期待に満ち溢れた？旅行編！敵の行動、思惑。ミソラとルナの思いの先。みんなの決意。それがどうのように交錯するか。

感想、変身の要望、意見など募集中で～ス。感想は大歓迎です！

お願いしま～ス

第２３話　願い（前書き）

あとがきメッチャ長いので無理に読まなくてもいいですよ。まあ、それだけ読んでもらいたいことがあるんですけど。

第２３話　願い

「これが今日のメニューです」

お盆に乗っけられた食事を見た。まず、竹の子ご飯、お吸い物、茶碗蒸し、だし巻き卵、牛タンの大和煮の５種類が乗せられていた。

「すげー、こんなの初めて食べるぜ！」

ゴンタがはしゃぎだす。肉があるからじゃないのか、いささか疑問である。

「あの、牛タンの大和煮ってなんですか？」

ミソラが質問した。

「牛タンを甘辛く味付けし、３日間煮込んだものです」

店員さんが答えた。

「へぇ～、手間がかかってるね」

ツカサが感心したように言った。

「じゃあ、みんなで」

「「「いっただきまーす」」」

みんなが一斉に別々の物を食べ始める。

「竹の子ご飯おいしいね！」

スバルが言った。スバルは料理が上手すぎる母がいるので、あまり外食をしたがらない。けれど今回は

違う。下手すれば母より上手いかもしれない。

「だし巻き卵もおいしいよ、なんでこんなにおいしく作れるんだろう・・・」

ミソラが感嘆の声を漏らす。

「牛タンの大和煮ってのもおいしいぜ！」

「やっぱり茶碗蒸しでしょう」

「お吸い物が最高よ！私が言うんだから間違いないわ」

「僕も竹の子ご飯かな。なんか食べやすいって言うか」

「だからツカサは甘いんだ。俺は牛タンの大和煮！」

それぞれが自分の1番おいしいと思ったものを言う。それを聞いて店員は満足そうだった。

「でも、こんなにおいしいのに、なんでガイドブックに載らないんだろう」

「それはね、時代の流れかな」

店員が親切に教えてくれた

「時代の流れ？」

スバルが聞く。

「ニホンは、２００年前から外国の食べ物が流行し始めたわ。だからその頃から和食は取り残され始めたの。だから、都会の人たちはここに来ても洋食などを食べようとするのよ」

それは納得だ。たしかに自分達は和食や和風に抵抗がある。それは馴染みがないのもあるが、古臭いと思っていたのも事実だ。

「洋食が悪いとは言わないわ。けどね、私は、どこでも洋食を食べるとか、そういうのはやめてほしいの。その場その場で、地元の味と言うのがあるし、なにより、ニホン人の原点は和風と和食だから」

店員さんは最後にそう締めくくった。

会計を済ませ、次はどこに行くかルナに一同が聞いた。

「お土産を買うわよ！」

他は固まってしまう。

「・・・・Ｗｈｙ?」

ジャックが英語で聞く。明らかに「おまえ頭大丈夫?」って聞き方をしている。

「何故って?それはね、明後日はお土産屋が混雑してしまうからよ」

「ああ、なるほどね。すいてるうちに買ってしまったほうが得だと」

スバルが言った。

「そういうこと、分かった?ジャック君～」

今度はルナが、上目線でジャックに言う。

「ちっ・・・・でもな!土産ってのは旅行の最後に買うのが常識だろ?それを曲げてまで買いたいものが

あるのか?」

「な、なによ!私はみんなのためをおもってね～」

またしても喧嘩勃発。喧嘩するほど仲がいいとはこういうことを言うのだろうか。

結局お土産を買うことになった。理由は簡単。ルナが他にプランを考えていなかったからだ。それじゃあしょうがない。

お土産屋は幾らか集合してあるものだ。そして一個一個回って、自分の買いたいものを買う。それがお土産を買う、作者の常識である。

スバル達はお土産屋に向かったのだが、

「・・・・What is this?」

ジャックがまたしても英語でルナに聞く。ルナは呆然としている。

「なんでこんなに人がいるの?」

スバルも聞く。みんなの視線の先には、大勢の人がいる。無論、お土産を買いに来た人々だ。

「ルナちゃんのプラン、失敗だね。」

ミソラが言った。人は同じことを考えるものであることがよく分かる。

「ま、まだ失敗とは限らないわ」

ルナが言った。少し顔がひきつっている。

「い、1時間後ここにまた集合よ、分かった?」

そしてみんなは、雲の子を散らすようにそれぞれが行きたい場所に行った。

で、スバルはミソラのお土産を探している。

『なあ、スバル、なんでミソラの土産を探してんだ?』

「だって、僕、ミソラちゃんに贈り物とか、買ったことないもん。それにさ、ミソラちゃん、この前のスピカモールのお金も払ってくれてるし、なにかお返ししたほうがいいかな~って」

『・・・・・そうか』

それ以上ウォーロックはなにも言わなかった。理由は言わなくても分かるだろう。裁きが恐いのだ。

『ルナちゃん、誰に買うんですか?』

モードがルナに聞いた。無論お土産のことだ。

「・・・・・お母さんとお父さんに買うわ」

『・・・・好きな人には買わないんですか?』

「どっちか分からないのに買うのはよくないと思うわ。それに・・・・」

『それに?』

「ジャックの好みって、私知らないし・・・・・・」

『・・・それは痛いですね・・・・」

そしてこの少女は、これから何分と悩み続ける。

『ミソラはどうするの?』

「どうするって?」

『スバル君に買わないの、って』

ハープが単刀直入に聞く。

「・・・・いいの!スバル君もお土産好きそうじゃないし、それに」

『それに?』

「この青いTシャツ買ってくれたもん」

『それでいいんだ・・・』

納得いかなそうにハープが言う。

（それに、賭けてみたいしね・・・・・）

ミソラの考えは、彼に伝わるのか、今はまだ定かではない。

夕日に照らされる町。その路地裏に、1人の少年と1体のウィザードがいた。

『おい、暇だぜ～。今日風あんまないから悲しいし～』

「そんなこと言われても、俺は知らねえよ」

ウィザードの呼びかけに、少年は答える。

『俺は気分屋だぜ?長い付き合いだからな、なんかいいこと浮かぶだろ?なにかねえ――――』

「ない」

『か～～～っ、冷たいねぇ。相変わらずだこと』

「誉め言葉として受け取っておくよ、ウィンド」

ウィンドと呼ばれるウィザードに、少年は冷たく言う。

『・・・・で？連中はいつ動き出すんだ？そろそろ俺も動きたいぜ。まあ、戦いたいってわけじゃねえけどよ』

「分からないって、まだ。別に結界張られるから、２０分は遅れて大丈夫でしょ」

『テキトーだな。まあ、やることあれば俺はいいや』

そういって、ウィンドはハンターに戻っていく。

「・・・なあ、俺らが奴らをデリートしていったら、俺らは本当の奴らに恨まれるかな？」

『本望だと思うぜ？・・・・こんなことなら尚更』

「・・・あっそう。・・・できれば、戦いたくなかったな・・・」

『・・・そうだな・・・・・・』

少年とウィザードは、悲しく言った。その願いは叶わないことを知っているから。

『・・・あいつも、こんなこと分かってたのかな。今に思えば』

その考えは、今はまだいない者に言われた、質問であった。

（あの子も来たのか・・・・）

まだ出られない人物は、時を待っている。

（・・・・そろそろ、僕らの計画も始まる頃かな）

彼の考えはまだ一部の者しか分からない。

（彼らは、戸惑ってしまうかもしれない。けれど、ちゃんと前に進んでほしい）

その人物は思う。

（この世界のためにも・・・・）

第２３話　願い（後書き）

最後のほうがミステリアスな風に終わったと思います。まあ謎は残すだけ残して、あとにどんどん解決したほうが結構締りがいいと思うので。

もうネタバレはしません！宣言します！まあ、そういう人こそ破るけど・・・

新たな登場人物が出ました。完全オリジナルなんですが、僕のほかのサイトの、他のゲームの登場人物なんです。その小説はまだ終わってないんですが。この小説でも出せると思うな～っと思って出してみました。これからどうなるんでしょうね（俺しか知らないのに聞くな）

さあ、ドンドン登場人物が集まってきました。これからもまだ登場人物が増えていきます。よく読みなおしてみてください。

英語間違ってるかもしれません。すいません。

明日は更新しないかも？です。部活朝６時集合で夜７時帰りっぽいので。他県に練習試合ですから、クタクタだと思います。がんばって更新したいと思いますが。

さあさあ、この小説も波に乗ってきたと思います！ユニーク１００人超えました！ありがとうございます！これからも最高の作品に近づけるように一層精進するので、応援よろしくお願いします！感想もよろしくお願いします！

あとがき滅茶苦茶長くなりましたが、ごめんなさい～。では！

第２４話　お土産

「で、なににしよう？」

スバルがウォーロックに聞いた。

『・・・・ペアストラップとかか？』

突如、ウォーロックの頭上にヘビードンが出現する。

『いやいや、俺はスバルの為を思って、うごあっ！』

ヘビードーンがウォーロックに炸裂する。ちなみに今回はヘビードーン２である。痛いに決まっている。しかし、作者の力によって、周りの被害はない。ウォーロックだけにある。

「ウォーロック、大丈夫？」

『なんで・・・・俺が・・・・』

「でも、なんでペアストラップなんて言ったの？」

『・・・・・なんでって・・・・』

「だって、それ恋人とかがするものじゃん。僕達違うし」

まるで当たり前にみたいにスバルは言う。

『それ、ホントに思ってるか？』

「・・・は?ホントとかってどういう意味?」

『いや、なんでもない』

ウォーロックがはぐらかす。

そんな時、スバル達がいる店に、１人の少年が入ってきた。髪は銀髪、身長は１６０位である。眼は細く、服は、シャツが白、スボンが黒と、いたってシンプルである。

「ハァ～、どうしよっかな～」

その少年は一人言を呟いている。

「できれば家でも食いたいしな～。旅館でも食いたいし。あ、この八つ橋買おう」

少年のカゴには食べ物ばかりである。それもカゴからあふれるくらいに。いくつ食べる気なのだろう。

ウォーロックがそう考えているとき、その少年はスバルの方に歩いてきた。そしてその少年とスバルはぶつかってしまう。狭い通路だったのでしょうがない。

「あ、ごめんなさい」

先に謝ったのはスバル。自分がぶつかったのではないが、ニホン人として謝っておいた。

「お、ごめん」

そしてそのぶつかった少年も謝る。別になんてことのない風景だった。しかし

「あ！」

その少年はスバルを見て、声を上げた。

「え、僕の顔になんかあります？」

思わずスバルは聞いてしまった。

「い、いや、俺が知ってる人に似てると」

その少年は言った。

「あの、僕の名前は星河スバルっていうんですけど・・・・」

「あ、星河スバル！え、え～っと、誰だっけ～。まあ、いいや！とにかくぶつかってごめんなさい」

そう再度謝って、少年はどこかに消えていった。

『ロックマンて知らない人多いんだな・・・・』

ウォーロックは少し悲しそうに言った。

そしてあっという間に1時間は過ぎた。スバルはあかねと大悟にお饅頭を、そしてミソラの贈り物を買った。ゴンタは全部食べ物。キザマロはストラップとかを買っていた。ミソラはストラップ、化粧品、鏡などを買った。ジャックはクインティアにお土産と自分が食べる食べ物。ツカサはストラップを買った。そしてルナは

「いつ戻ってくるんでしょう」

まだ戻ってきてない。一体なにをやっているんだろう。

「委員長、このごろ様子おかしいしね～」

「お、おまたせ～」

ルナが走ってくる。息は上がっていて、それほど急いできたんだろう。

「どうしたの?委員長」

「ちょ、ちょっとどれ買おうか迷ってて」

それほど迷っていたんだろう。ルナを迷わせるとはどれほどの物だったんだろう。

「じゃあ、旅館に戻るの?ルナちゃん」

ミソラが聞いた。

「う、う～ん・・・・・・そうね。戻りましょう。今は４時だから。明日にもいろいろあるし、それにウェーブライナーに乗って疲れたし。旅館でゆっくり休みましょう」

少し考えた後、ルナは旅館に帰るといった。みんなは旅館に戻っていった。

同刻

『アサルトがロックマンと交戦するのはあと１８時間。さて、アサルトはどんな忠誠心を示してくれるのかな。ククク・・・』

黒ローブのウィザードが呟く。

「さあね。もちろん生半可な忠誠心ではないから、期待してもいいとおもうよ」

男は答える。

『どんどん俺らの計画は進んでいくな』

「それはそうさ。時間の流れは早いもの。気付いたら木々は枯れ、生き物は死に絶える。時間の流れは残酷なのさ。僕達にとっても。この世界、いや、銀河にとっても」

男はそうウィザードにいう。

『けどまだ始まったばっかりだぜ？大丈夫なのか？ほとんどギャンブルと変わんないぜ？』

「人はなにかを賭けなきゃ前に進めない。僕らにとっても、あいつらにとっても。それにそのために彼らいるんじゃないか」

『・・・それもそうだな』

男とウィザードが話し合う中、時間は刻々と進んでいく。残酷なほどに、とても早く――――

第２４話　お土産（後書き）

え～っと、募集のことですが、僕にメールを送ってください。すみません。ネタバレを回避するためです。なのでできるだけ感想には書かないで下さい。

くたくたでしたが書きました。俺偉い！なんてことはありませんが、あしたも更新します。ぜひ読んでください。今日もできたらもう1回します。え？適当に作ってるんじゃないかって？いやいや、もう作ってあるんですよ～。あとは文章にするだけっていうか。だから大丈夫です～

感想、意見、募集などよろしくお願いします～♪

第２５話　熱いバトル

そしてスバル達は旅館に帰って行った。
さて、学生の夜の過ごし方とはなにか。怪談。これは夏にやるべきだ。トランプ。地味すぎる。すぐさま寝る。これはつまらない。
では、なにか。それは学生時代だれもがやったあの

『枕投げだ～！』

そう枕投げである。１人１人が自分の力を示し、なおかつ友情を深められ、そして喧嘩の発端にもなる枕投げ。これをやらずして旅行といえるのか。

「では、ルールは僕が説明します！」

キザマロが元気よく言った。

「ルールは、まずオペレーターとそのウィザードが組み、相手のオペレーターとウィザードと勝負します。他の人は枕がどっかいかないようにカバーします。それとウィザードの攻撃で枕が壊れた場合は、弁償代を払ってもらい、負けとなってしまうので気をつけてください。なお、オペレーター、ウィザードそれぞれが５回枕に当たってしまったら負けです。どちらも枕は５個ずつです」

司会者キザマロのルール説明のあと、対戦表が発表された。

１試合目　スバル組とゴンタ組　２試合目　ツカサ組とキザマロ組
３試合目　ジャック組と２試合目勝者となった。

「では！みなさん、悔いの残らないように戦いましょう！」

司会者の言葉とともに、枕投げが始まる。スバル組とゴンタ組だ。

「ゴンタ・・・」

「スバル・・・恨みっこなしだぜ！」

『オックス・・・こうやって戦うときが来るとはな・・・』

『ブロロロロ・・・どうせ俺達が勝つ』

そして試合開始のゴング（？）が鳴った。

先手はゴンタ。枕を1つスバルに投げる。それをスバルが辛うじて避ける。

『あまいぜ！』

続いてオックスがスバルに投げる。けれどそれも避ける。

『おめぇがな！』

ウォーロックがオックスに投げる。けれどそれは簡単に避ける。

「へっ、遅いぜ！」

またもゴンタが投げる。それをスバルはなんなく避けるが

『これで1回だぜ！』

オックスは避けた後のスバルを狙った。これでスバルは1回当たった。

「く、くそ」

スバルは悔しそうにそういった。

「まだまだだぜ！」

ゴンタは2つ投げる。けれど両方とも外れてしまう。

「くそ！もう1回・・・・あれ？」

枕がない。スバルのほうには１０個ある。

『ブロロ・・・・俺達の負けだ・・・』

「すまねえ、オックス・・・・」

直後、２人に枕の嵐が降り注ぐ。

「勝者～スバル～！」

キザマロが高らかに言った。

「さあ、ゴンタ君。なにか言うことは」

「自分が馬鹿でオックスに申し訳ないです・・・」

しょぼくれてゴンタが言った。

「では、次は、僕とツカサ君ですね。ではスバル君、司会頼みますよ！」

「任せて！」

キザマロがスバルに司会を託す。

「では、正々堂々戦いましょう！ツカサ君」

「遠慮はなし、でね」

『ピピッ、勝率、９９％だよ、キザマロ君！』

『・・・・・・』

ジェミニは黙っている。

「どうしたの、ジェミニ」

『いや、それが・・・・』

ジェミニがツカサに耳打ちする。

「じゃあ、囮お願い」

『・・・分かった』

「どうしたんでしょう、ジェミニ選手」

司会者スバルが実況ウォーロックに聞いた。

『え～っ、ジェミニには腕がありませんからね～。囮しかできないんでしょう』

「なるほど。では試合開始です！」

試合開始のゴングが鳴る。

先手はペディア。計算されつくした軌道でジェミニに投げる。それを避けるが、ジェミニは枕に当たってしまう。

『・・・なに？』

「フフフ、１個目の枕で見えない角度から僕がもう１つ投げたんですよ」

「なるほど～考えたものですね～」

『ええ～っ、いいコンビネーションですね～』

司会と実況が感心したように言う。

「じゃあ今度はコチラからいくよ」

ツカサが投げる。けれどそれはペディアがキャッチする。

『こんなの簡単――――』

ボスッっとペディアに枕に当たる。

「え、どういうことイテッ！」

キザマロには2個当たる。

「キャッチしたあとは一瞬隙が生まれるでしょ?そこを狙ったんだよ。そして驚いているうちに投げたって訳さ」

ツカサが説明する。

「なるほど、考えますね、ツカサ君も」

「いやいや、君達も」

「おお～っ、火花が散っております」

『さあ、ここからどうなってしまうのか！』

そしてまた激闘は再開した。

結果　ツカサがキザマロに勝った。キザマロが当てるごとに一喜一憂してる間に2個当ててていった。これでツカサは勝ったのだ。

「え～では、司会に復帰させてもらいます。ではジャック君、ツカサ君！」

「ツカサ、よろしくな」

「こちらこそ」

にこやかに交わすあいさつ。けれどそれは決してにこやかなものではない。純粋に勝ちたいものだけに出せる、闘志である。

『ジェミニ、おまえとの対決は初めてだな・・・』

『勝ってやるさ・・・いくらでもな』

試合のゴングが鳴る。

「これでも喰らいな！」

「それはないね」

ツカサとジャックが投げた枕が真正面からぶつかる。そのうちの1つは、出口に、もう1つは逆方向に飛んでいった。

「入るわ――――」

それは不運にも、闇魔大王（ルナ）にぶつかった。

第２５話　熱いバトル（後書き）

ギャグでしたね～。まだまだ続きますが。闇魔様に当たるとは想定しなかったと思ったと思いましたが、どうでしたか？
枕投げ、楽しいですよね～。やったら先生に怒られたけど（笑）
感想等お待ちしておりマ～ス♪気合でもう１回更新しました～。

第２６話　心理戦

男子が枕投げを始める１０分前。ミソラとルナは部屋でトランプをしていた。種目はジジ抜き。

（分からない～。なにがジジなのか）

ルナが思う。ジジ抜きはジョーカー以外もジジの可能性があるので、なにか分からない。

２人の手札はミソラが６枚、ルナが７枚。今のところミソラが勝っている。

「う～ん、じゃあこれ」

ミソラの手札の１番右を引いた。ルナの手札にそれと同じカードはなかった。

「じゃあ、私はこれ」

ルナの手札から左から２番目を引く。これもはずれ。

（多分ジジはクイーン。だったら・・・・・）

「ルナちゃん」

「なに？」

「私の勘なんだけどね。多分ジジは１０だと思うんだけど。どう思

う？」

「え、え～っと、私には分からないわ」

「恐いな～、ルナちゃんが１０持ってるから」

（え？ジジは１０なの？でも敵に教えるなんて・・・・でもプレッシャーをかけるって可能性も・・・）

こちらはこちらで心理戦を繰り広げている。言葉では、演技もあるミソラが有利である。けれどルナは頭がいい。どちらが勝つかはまだ分からない。

「じゃあ今度はこれ」

ルナが引いたのは６。それもない。

「じゃあ・・・・これ」

ミソラが引いたのは３。これもない。

「・・・なかなかあたらないわね・・・」

「そうだね。まあ、楽しいからいいじゃない」

ミソラが言った。ルナは焦ってる。ここで煽ればこっちに勝機が見えてくる。

「じゃあ、これ」

ルナが引いたのは3。さっきミソラが引いたのと同じなので意味がない。

「う〜ん、これかな」

ミソラが引いたのは9。これはミソラの手札にあった。

「うそ！」

ルナは声を上げた。ここで一気に差が開いた。

「え〜っと、これ・・・・かな」

ルナが引いたのは4。これはルナの手札にもあった。

「やばいな〜。まだ勝てる気がしないよ」

ミソラが言った。演技である。けれどルナはそれに気付かない。さすがトップアイドルと言うべきか。

「じゃあこれ」

ミソラが引いたのはキング。ミソラの手札にはない。

「じゃあこれね」

ルナが引いたのは、クイーンだった。

結果ミソラの勝ち。クイーンを引いた時点でミソラの勝ちであった。

「じゃあ、ジャック達のところに行きましょうか」

ルナが溜め息混じりにそういった。それほど悔しかったのだろう。

「・・・・あれれ？」

ミソラが言った。

「なにがおかしいの？」

「いや、いつもならスバル君達とか、星河君達とか言ってるのに、ジャック達なんだな～って」

ルナはしまった、という顔をしている。

「べ、べつにいいでしょ？なにか問題があるの？」

「ないない、さっ行こう」

ミソラが言った。

（へぇ～、変わったんだ～。たしかに仲いいしね。お似合いかも♪）

ミソラはそう思った。

（もしかして、気付かれた？）

ルナは内心焦っている。

そして男子達の部屋に着いた。

「・・・なんか盛り上がってるね」

ミソラが言った。

「・・・そうね。なにをやっているのかしら」

「中入ってみない？これだと着替えているわけないし」

「でもノックしなきゃ」

コンコン　とするが、誰も気付いてない様子だ。

「・・・やっぱり入りましょう？」

「そうだね」

ルナがドアを開ける。その途端、枕が飛んでくるのが見えた。そしてルナの顔に直撃。こうして無事、男子達は闇魔大王（ルナ）の逆鱗に触れることになる。

第２６話　心理戦（後書き）

はい。どうでしたか？ルナの思いの先や、ミソラの心理戦が強いところなど、面白く出来たと思うのですが。トランプの手札で矛盾が発生してしまっているかもしれません。ごめんなさい。

今日はあと3話更新するので応援よろしくお願いします。感想もお願いします

ＰＶがついに１００００いきました。ありがとうございます！

第27話　思い

場の時が凍てつく。男子達の頭がフル回転する。この状況を打破するにはどうすればいいか、かつどうすれば無事に生き抜けるのか。

「・・・・・・だれなの」

ルナが静かにそういう。

（絶対怒ってるって～）

スバルは心の中で叫ぶ。

（やべえな、俺らこのまま生きて帰れるのか？）

ウォーロックが心の中で思う。

「私にこの枕を投げたのはだれなの？」

ルナがまたも静かにそういう。

「い、いや、ツカサ君とジャックが投げたのがぶ、ぶつかりまして・・・そのどちらかの枕が当たりました」

「どっちなの？分かるでしょ？」

一応だが、枕は違う色にしてある。そして一発目なので、ルナに当たったほうの枕は、どちらかか分かる。ルナのは赤。ツカサは青。

ジャックは――――

「げばっ！」

突如、光の速さで枕がジャックに当たる。いや、光の速さとは分からないのだが、ルナが持っていた枕が消えた。気付いたら投げていて、当たっていた。テレポーションかなにかなのだろうか。とにかく恐ろしい。

「なんであなた達はなにをしているの？ここは旅館よ？」

そういうルナの声など耳に入らない。なぜかというと、瞳が赤い。そんなことはないのだが、そう錯覚してしまうような、殺気があった。

ツカサ以外の男子の足がガクガク震える。ジャックは倒れたまんま。

「い、いやさ、これは友情を深めるものであって――――」

「それで怪我をしたらどうするの？誰が責任をとるの？それにこの部屋の布団や枕を壊したら弁償するつもりだったの？どうなのよ」

弁償するつもりはあった、と答えれば今度はルナの右ストレートが来そうで言わなかった。

「・・・ド・・・リ・・・ル・・が・・・」

ジャックが立ち上がる。顔が赤い。少し涙腺が緩んで見える。だんだんかわいそうに思えてきた。まあ運が悪いというしか言いようがない。

「べつにバリア張ってるから大丈夫だろうが！」

ジャックが吼える。

「え、バリア？」

スバルが聞いた。

『ああ～、まあ俺の力っていうか～。電波でないものの力を無効化する能力っつうか・・・』

コーヴァスが説明した。そんな能力があるとは知らなかったが。というかコーヴァスの性格からしてその能力はどうかと思うが。まあたしかに壁にぶつかっても傷がなかったのでホントのことだろう。

「分かったかドリル！べつに――――」

「まあまあ落ち着きましょうジャック」

キザマロが止める。

「邪魔すんな！」

ジャックがキザマロを振り払おうとする。

「いえ、邪魔するつもりはありません」

「じゃあなんで」

「枕投げでの問題は枕投げで解決すべきじゃないですか？」

キザマロが言った。たしかに道理に合っている。

「・・・ちっ・・・」

「私は反対よ」

ルナが言った。まだ怒っているらしく、物言いは静かである。

「怪我したらどうするの？」

「でしたら、依然シーサーアイランドで使ったゴーグルがハンターの中にあるはずです。これで眼は大丈夫ですし、他は大丈夫でしょうし」

ルナも黙る。あまりの威力じゃなかったら他は大丈夫なはずだ。

「それでいいですか？お二方」

「異議なし」

「私もよ」

「では今回はウィザードなしで。お二方だけの問題ですので。枕は5つずつ、3回当たったら負けとします。なお、他の人はコーヴァスのバリアのなかで観戦します」

キザマロの説明のあと、2人は二手に別れる。

そして構える。

「それでは試合開始！」

試合開始のゴングが鳴る。そして激闘が幕を開けた――――

『おい、食いすぎだろ』

ウィンドが少年に言った。

「そう？まだ食えるけど」

『やめとけ、腹壊すぞ』

少年はお土産屋で買った菓子を、泊まっている旅館で食べている。
それも1人で。カゴいっぱいのお菓子は半分以上もなくなっている。

『おまえ、ブラックホールか？』

「なわけねえだろ？底も存在する」

少年が反論する。けれどあまり意味のない反論だと思う。

『・・・なあ、明日は戦うんだよな?』

ウィンドが聞いた。ゴクリと菓子を飲み込んで少年は

「うん、そろそろロックマンとも戦ったほうがいい」

少年は言う。

『まさか、こんな時が来るとはな・・・・』

「いつかはそうする運命さ。連中も、止めなきゃいけないし」

『・・・それで、過去が変わってしまってもか?』

ウィザードが言う。

「・・・・しょうがないんじゃない?こうなるよりは・・・・」

『・・・・そうか・・・・たしかにこうなる運命よりかは、な』

悲しそうにウィザードが言う。それは未練がましいものだった。

『けど、もし過去で――――』

「俺らは、あいつの指示で動くだけ、そういったのはおまえだろ?」

少年が言う。

『・・・そうだな、すまねえ・・』

「まあ俺はその指示を実際に聞いてないけどな～」

そういって菓子に手を伸ばす。

「・・・・・おまえも大変だね。その性格で頼まれごとしちゃって」

『そうだな・・・・・みんなの思いを背負ってるから、仕方ねえよ』

そして少年も、同じ思いで

（頼むぜ、あいつの思いに報いるためにも・・・・）

少年は八つ橋を食べながらそう思った。都会よりは光が少ないので、綺麗な星空が見えた。それを見ている別の少年は、期待通りに動いてくれるのだろうか。

（まあ、まずは自分のことから・・・だな）

そしてその少年とウィザードは、計画のために動き出す。思いを託した者達に報いるために――――

第27話　思い（後書き）

まあジャックとルナのバトルの結果は次回で分かるので、大丈夫ですが。動き出す新たな人物。敵か？味方か？どちらかは分かりませんが。いずれ明らかになります。

活動報告にも書きましたが、データベースを作ります。明日くらいに。今日はあと2話更新するので分かりませんが、時間が余ればそちらも進めます。

応援よろしくお願いします！感想ともよろしく～

第２８話　信頼

さて、あの枕投げがあった日の翌日。スバル達は心地よくない目覚めを迎えた。それはなぜか。それは最後の枕投げにある。

ジャックＶＳルナ。この２人の死闘で予想だにもしないことが起きた。そう、隣の客がうるさくて眠れない！と言って旅館の女将に言ったのだ。そして枕投げをしているところを見つかり、怒られた。まあ子供だからと甘くしてもらえたものの、旅館全体を掃除させられ、寝たのが１２時。眠いに決まっている。

「ふぁ～あ、ウォーロック、何時？」

『８時過ぎ・・・・・』

「そう・・・眠い・・・・」

『あと１時間くらいは眠れるはずだ寝・・・よ・・・う』

そういってウォーロックは寝た。

「僕もそうしようかな・・・・・」

そしてスバルも寝た。

そして9時ごろ

「おはよう・・・・みんな」

スバルが言った。まだ眠い。

「おはようスバル君」

ツカサがあいさつを返す。眠そうではない。夜更かしに慣れているのだろうか。それを聞く気力がスバルにはない。

「じゃあ、ロビーに行こうか・・・・」

旅行とは思えない空気でスバル達はロビーに向かった。

そしてルナの口からこれから行く場所を言われた。

「今日、行くのは空の架け橋よ。バスで行くわ。・・・・ほらシャキッっとしなさい！」

ルナが男子に向かって怒鳴る。

「でも僕達朝ごはん食べてないよ?旅館の料理も昨日はこれを見越してキャンセルしたし・・・」

「買い食いよ」

金持ちからこんな言葉がでるとは思わなかったが、昨日掃除をして空腹なので異論はなかった。

「じゃあ近くのコンビニで買いましょう。行きながら食べられるパンがいいわね」

一同はルナの指示のもと、コンビニに足を運んだ。

「眠いな～」

朝9時半に起きてその言葉が出てくるのは、大抵夜更かししている人の言動だ。

少年はホントに眠そうにそういい、ハンターを取り出す。

「どう?今日の目覚めは」

『上々だ～。けど』

ウィンドは続けた。

『いい風が吹かねえな、今日』

「・・・そうだね、だって俺達は殺人と変わらないことをするんだもの」

『気が進まねえな』

ウィンドはホントに気が進まなそうにいった。

『・・・一瞬で頼むぜ』

「もちろん、わざわざ長引かせる意味がない」

少年は言った。

『・・・あいつらには明かさないんだな?』

「うん、そのほうがなにかと都合がいい。動きやすいしね」

『分かった、行くときは言ってくれ』

「じゃあ、コンビニ行って飯買いに行こう」

そういって、少年もスバル達の後にコンビニに向かう。

バスの中、スバル達は少しの間仮眠をとっていた。普段寝ていない時間帯に寝ると、寝ていても眠く感じてしまうのだ。

「スバル君、寝てるね～」

ミソラが言った。

『そりゃ、あなたと違って夜遅くまで起きてないもの』

「ひどい、ハープ。私は収録からの帰りが遅くて慣れたのよ～」

ミソラが反論する。

『まあスバルは、次の日遅刻したらまずいから早く寝てんだけどな』

ウォーロックが言う。

「まあ、しょうがないんじゃない？」

ミソラが言う。それをウォーロックはため息をつきながら

『起こす身にもなってくれ』

同情せざるをえない言葉だった。遅刻癖はルナ達から聞いている。

そう言っている間にバスが停まる。

「降りるわよ」

寝ている人も起きてバスから降りた。

「ホントだ～。たしかに空の架け橋だね～」

ミソラが感心したようにそういった。

それは自然の橋だった。海で割れている陸地を陸で繋いでいる、そういうものだった。けれどなぜそういうのか、それは

「龍が空に向かって飛んでるみたいだね」

そう、その橋が龍に見え、陸が空に見える。故に空の架け橋。

「どうする？渡ってみるか？」

ジャックがみんなに聞いた。

「そうね、どうせなら渡ってみるのも――――」

ドオオオンッ　と聞いたことのある爆発音が耳に聞こえた。それは

『スバル！奴らだ！』

「ホントに？」

『ああ、それも二手、１つは清火寺、もう１つは町に周波数を感じる。町はウイルスが大量にいるみたいだ。清火寺には強い周波数を感じるぜ』

「分かった！委員長とキザマロは安全な場所に避難して！僕は清火寺に向か――――」

「私達が清火寺に向かうわ」

ミソラが言った。

「ミ、ミソラちゃん？」

「私達が敵の電波体を足止めするわ。その間にスバル君はウイルスを倒して」

ミソラがスバルに言う。

「でもあぶ――――」

「大丈夫、俺達もついてるぜ」

ジャックが言った。

「僕達3人で足止めする、だから――――」

「俺も清火寺にいくぜ」

ツカサの言葉をゴンタが遮る。

「今回も俺も行かせてくれねえか？」

「でも、委員長達が・・・」

「いや、ゴンタ君も着てもらうよ。スバル君の話だと、敵は一般人を攻撃してない。だから大丈夫だと思うよ。万が一のために安全な場所に避難してもらうんだよ」

ツカサが言った。

「大丈夫よ、私達4人なら」

ミソラは言った。その言葉は決して覆らない。スバルはそう感じた。

「分かった。僕もすぐにそっちに行くから、頼むよ」

それはスバルが仲間に頼むという、珍しいことだった。

『へっ、今回はそっちに大物を譲ってやるぜ！』

『あなたなら、ウイルスに負けちゃいそうね～』

『なんだと！』

「ウォーロック」

スバルがウォーロックを止める。

『ちっ・・」

「行くよ。トランスコード　シューティングスターロックマン！」

スバルは電波変換し、町に向かった。

『やるわね～、ミソラ』

ハープがミソラを誉める。

「だって、スバル君だけに無理させたくないもん」

『それだけじゃないでしょ？』

ニッとミソラは笑う。

「すごいね～、まあ、今回は俺達も戦いたいしな」

『ああ、試してみたいもんな！』

コーヴァスが言った。

「じゃあ、行こうか」

ツカサが言った。

「「「「トランスコード！」」」」

そして、それぞれの思い胸に戦いが始まる。今、K都が戦場と化す。

第２９話　４対１

スバルはウォーロックに指示された場所にウェーブロードを使って向かう。

「うわっ」

思わずスバルはスバルは声を上げてしまう。

そこには大量どころか、町を埋め尽くすくらいのウイルスがいた。

メットリオ、クロッカー、ホイルズ、バルカナ、ハンマリー・・・・

他にもいろんな種類のウイルスがいた。

スバルは町に下りる。

「早くミソラちゃん達のところにいくために、いくよ、ウォーロック！」

『へっ、いきなりか！いつでもいいぜ、スバル！』

バトルカードを転送する。そのカードは、「ダブルストーン」。

「ソウルユニゾン！」

光がスバルを包み、スバルの姿が変わる。

「カーネルソウル！」

姿は黒い軍服を着た剣士、といったところだ。両肩には白い鎧があ

り、右手には黄色く長い剣が装備されている。

『行くぞ、スバル！』

「うん、スクリーンディバイド！」

敵から見てＶ字型の斬撃がウイルスをデリートしていく。

「カーネルアーミー！」

ウイルスの後ろを電波の兵隊が攻撃する。後ろを取られたウイルスはデリートされていく。

（早く、全部倒さなきゃ・・・）

次々とウイルスをデリートしながら、スバルは思った。

『・・・・・４体の電波体、しかもロックマンはいない、か・・・』

そういうと同時に、４体の電波体が清火寺ちかくの森に飛び降りる。

『・・・どういう冗談？ロックマンは？』

「へっ、あいつがいなくても俺達だけで充分だぜ」

黄色い電波体にジャックが言う。

『・・・君達をさっさと倒してロックマンのところに行こうか・・・』

「だ～か～ら、行かせないって」

それを無視し、黄色い電波体は自分の2丁ある銃に弾丸を装填する。

『・・・まさかロックマンが来ないとは・・・計算外にもほどがあるよ・・・あのデカブツが』

「無視すんな！」

『うるさい』

それと同時に銃が火を吹く。弾丸の行き先はジャックだ。

「よっと」

ジャックは避けた。

『一応名乗っておくよ。僕の名前はアサルト・ブリッツ。ガイアの一員さ』

「ガイア？」

ゴンタが聞いた。

『そう、いずれこの世界を手に入れるものさ。さあ、はじめよう。君達の名前は知ってるからね』

5人が構える。

「いくぜ、ペインヘルフレイム！」

紫色の炎が、アサルトに向かって飛ぶ。

「ロケットナックル！」

ツカサもロケットナックルを放つ。

『遅いよ』

アサルトは軽々と避ける。ペインヘルフレイムの炎が、木を燃やす。

「なに？」

『結界は張らないでおいたさ、僕にとっては都合が悪いんでね』

「くっ、オックスブレス！」

アサルトはそれも避け、ゴンタに弾丸を撃つ。

「ぐはっ！」

ゴンタはのけぞる。

「なんだ・・・これ・・・から・・だ・・・が」

『弾丸に電流を纏わせているからね、当然マヒ効果もついてるよ』

「ショックノート！」

けれどそれは、弾丸によって壊される。

『ここまでで、君達がどれほど馬鹿で弱いか分かったよ』

『なんだとっ！』

コーヴァスが怒る。

『次から本気だよ』

アサルトから殺気が放たれる。それはさっきまでとは違う

「くっ・・・・・」

『ほら、止まったら死ぬよ？』

2丁の銃で連射するアサルト。

「なめんな！エレキソード」

ヒカルがアサルトに突っ込む。

『・・・ちっ』

アサルトが避けて弾を撃つが、弾はヒカルに当たらず地面に着弾する。

「へっ、ノーコンが！」

しかし間合いを詰めたエレキソードも避けられる。

「オックスタックル！」

ゴンタがガラ空きの後ろに突進する。けれどそれもジャンプでかわされる。そしてアサルトは2発弾丸を撃つ。しかしこれもゴンタには当たらず、地面に着弾する。

（なにかがおかしい・・・・）

ツカサはそう思っていた。さっきまでとは違い、わざと外しているように思える。

アサルトは地面に着地し、態勢を立て直す。

「パルスソング！」

それすらも避けられる。アサルトはまたも弾丸を1発撃つが、ミソラにはあたらず地面に着弾する。

（なにが狙いだ？なんで・・・・）

そう考えているツカサの方向に、弾丸は飛んでくる。地面に着弾する。そしてその弾は

「まだ電気を纏ったまま・・・・まさか！」

『気付くの遅いよ、これで終わり』

ジャックの足元に弾丸が撃たれる。

「まずい！みんな逃げ――――――」

突如、電撃のドームが４体の電波体を包んだ。

第２９話　４対１（後書き）

ジェミニスパークは２人で１体と数えました。アサルトの狙いなどはなんだったのか、など明日は更新できないと思うのでそちらもこれから時間が空いてる人は読んでください。

明日はデータベースですね。登場人物、技など、分かりにくいことがあるのでそちらを補足として作らせてもらいます。あと、コーヴァスのバリアの能力をつけた理由などもギャグとして出したいと思います。

なんとか４話出来ました。どうだ！まあ勝手に僕が目標にしただけなので。

黙する者先生、早速使いました。まさかウイルスだけで終わるわけがないのでご期待を！と、変身も実現できるものは実現しているのでメールで言ってくれれば実施できる物は実施したいと思います。

まあ、昼寝したので少しデータベースを作ります～。

では、これからもよろしくお願いします！

第３０話　接触

「くっ、いったいどれだけいるんだ・・・」

ウイルスをデリートしながらスバルは言った。どれだけ倒しても、ドンドン湧いてくる。まだ十分の一しかデリートしてない。

「・・・・え?」

スバルは立ち止まった。ウイルスを倒して道を曲がったのだが、ウイルスが全くいない。いや、町からウイルスの気配が消えた。

「ウォーロック、他にウイルスは?」

『いや、消えやがった・・・まるで神隠しみたいに・・・・』

ウォーロックも驚いていた。

そこに1体の電波体が町に降り立った。体全体は銀色の防具を覆っていている。重厚というわけではなく、軽量そうだ。その頭部は銀色の竜のようで、眼は赤いバイザーで隠されていた。右手には銀色の刀を持っている。防具は鈍く光る銀、刀は白銀と言った感じだ。

「終わったか・・・・」

その電波体は言った。

『ああ、手ごたえのないやつらだったぜ』

どこからともかく声が聞こえた。多分、防具がウィザードなのだろう。

そして驚いたことに、この剣士が、大量の電波体をデリートしたというのだ。ウェーブロードからみたウイルスの数からして、スバルは約十分の一しかデリートしてないのに対し、剣士は十分の九をデリートしたということなのだ。

「あ、あの君は？」

スバルが銀色の剣士に聞いた。

「ん？・・・・早速か」

そう剣士は言った。

「じゃあ、始まり」

なにがなんだか分からなかった。剣士は軽く跳躍した。そして、消えた。

「――――遅いな」

そして剣士は、一瞬でスバルの懐に入っていた。

「な――――」

剣士がスバルに斬りかかる。ギリギリ剣で防ぐ。スバルはあとずさりする。

「お～、すごいねアンタ」

剣士がスバルを誉める。

「・・・・え？」

『へっ、あれくらい避けられるぜ！』

ウォーロックが自慢げに言った。

「いや～、違う違う」

剣士は言った。

「あんたら、よくそんな実力で世界を救えたものだね」

『な、なんだとー！』

ウォーロックが怒る。

「だって、そうでしょ？今のは剣で防ぐんじゃ駄目だ。体で避けなきゃ」

剣士が説明した。

「まあ、いいや、さっさとくれない？」

『・・・・なにをだ？』

「決まってんじゃん」

「エグゼの記憶だよ」

周りの木々が炭化している。そしてそこには4体の電波体が倒れ

ていた。

『ボルティックドーム、僕の必殺技さ』

アサルトは言った。

『簡単に言うと帯電した弾丸が地面に着弾、そして電流は地面に流れていく、電流は他の弾丸に行き着き、スパークする。ざっとこんなもんだよ』

ミソラ達は立ち上がろうとするが、立ち上がれない。

『だから言ったでしょ？無理だって』

その言葉は、ミソラ達の耳に木霊する。

『さあ、ロックマンの所に行こうか』

「さ・・・せ・・な・・・・い」

ミソラがそういった。そして４人は立ち上がる。

『絆の力か・・・・でも無駄さ』

アサルトは２丁の銃に弾丸を装填する。

『これでも喰らって寝てて』

そして４発弾丸を放つ。それは電撃を帯びているものではなかった。

「ぐ！これは・・・ノイズ！」

４人が悲鳴をあげる。

『そう、ノイズは電波体にとって毒と同じ。君達はもう戦えないよ』

「へへっ、それはどうかな・・・」

ジャックが言った。

「ハープ、・・・・ノイズ率は？」

『ざっと、１５０％ってところね・・・さっきの弾、相当ノイズを纏っていたわ』

『なにを言っている？』

アサルトが４人に聞く。

「・・・俺達はな、ノイズのせいでスバルと一緒に戦えなかった。だから、それを克服したんだ」

ゴンタが答えた。

「そしてそのノイズは、僕達の力に変えさせてもらう」

ツカサが言った。

『・・・ノイズ吸収開始』

ハンターＶＧから音声が流れる。

「よし、いくぜ、みんな！」

目には見えない周囲のノイズが４人に吸収されていく、そして

「究極変身（ファイナライズ）！」

その掛け声とともに、４人の姿が変わっていく。

『・・・・予想外だね、なにがこいつらを動かしてるんだ・・・』

アサルトは不思議そうに言った。そして４人の姿が変わり終わった。

「ハープ・ノート　シンガーモード！」

「「ジェミニ・スパーク　ライトニングモード！」」

「オックス・ファイア　ボルケーノモード！」

「ジャック・コーヴァス　ヘルバーニングモード！」

今、反撃が始まる。

第３０話　接触（後書き）

さあ、スバルが接触しました。この剣士は最後まで深くスバルに関わっていきます。この剣士の行動に注目してください。

ミソラ達には、さすがにそろそろ新しい力を与えないと今後の活躍がなくなってしまうので設定しました。その力は次話で明らかになります。

剣士の姿は、分からない人が多いと思います。一応僕のすきなゲームの防具にあります。これだけで分かる人もいると思いますが、分からない人はメールしてください。といってもそのゲームをやっていなければ分からない・・・

では、データベースも見てください！これからも感想と応援よろしくお願いします！

第３１話　反撃

ミソラ達の姿は変わった。

『・・・・・毛を逆立てた猫か？』

アサルトは言った。

ミソラの姿はギターが巨大化し、胸のハートが音符に変わっている。
そして頭部に内蔵されたアンプの性能が上がった。

ツカサとヒカルは、髪の毛が黄色くなり、腕、足に電流を纏っている。

ゴンタは、角と腕が巨大化し、腕は炎を纏っている。

ジャックは、足にツメが装着され、腕には紫色の炎を纏っている。
翼は巨大化し、飛行性能があがったように見える。

「さあ？やってみないとわかんないよ」

ツカサが喧嘩を売るように言った。

「じゃあ、行くよ、みんな！」

ミソラの声とともに、４人は動き出す。

「マシンガンストリング！」

ギターの弦が、アサルトを捉える。弦を伝って音符がアサルトに直撃する。

『くっ・・・・・』

さっきまでとは違い、スピードが格段に上がっている。

『・・・・！マヒ効果つきか』

「そういうこと、ヘルズシックル！」

ジャックの翼が、アサルトに襲い掛かる。

『――――でも僕にはあまり効果がないよ』

アサルトはヘルズシックルを避ける。

「バズーカナックル！」

ツカサの拳がアサルトに飛んでいく。

それを避けるアサルトだが、

「エレキブレード！」

ヒカルの剣が襲い掛かる。

『いちいちウザイな』

それを紙一重で避けるアサルト。

「そこだ！オックスクラッシュ！」

そこにゴンタが猛突進をする。

『がああああああ！』

突進を避け切れなかったアサルトは、木にぶつかるまで止まれなかった。

「どうだ！」

ジャックが勝利を確信した、そのときだ。

『ジェノサイドサンダー！』

２０数発の弾丸が４人に襲い掛かる。

「ぐお！」

４人はその場で座り込んでしまう。

『調子こくなよ、誰が終わったって言った？』

傷ついたアサルトは４人に近づく。

『わざわざ殺すまでしなくてもいいと思ったけど、やっぱり殺るわ』

２丁の銃を構える。その銃口に電流が溜まり始める。

『消えな、ライトニングイーグル！』

電流の鷲が、４人に襲い掛かる――――

『てめぇ、なんでエグゼＰＧＭのことを！』

「エグゼＰＧＭ？おまえ達はそう名づけたのか」

剣士はそう言った。

『とにかくよこしな、じゃないと死ぬぜ？』

剣士のウィザードと思われる声が聞こえた。

『いやだね！てめぇらを倒してやるぜ！スバル！』

「うん！」

「実力の差を知らないって、悲しいもんだね～」

「スクリーンディバイド！」

Vの字の斬撃が剣士に襲い掛かる。それを剣士は飛んで避ける。

「カーネルアーミー！」

スバルの足元に10体の兵隊が出現し、剣士に向かって銃を連射する。

それは剣士に当たった。剣士から煙が上がっており、剣士は落ちていった。

『どうだ！』

空から黒い粉末が落ちてきた。

（なんだろう、コレ）

そう思っているうちに、剣士の周りの煙が晴れた。

『な、なんだと！』

何発もの弾丸を受けながら、剣士にはかすり傷1つなかった。

「そ、そんな馬鹿な！」

「だから言ったろ？おまえらじゃ俺に勝てないって」

「くっ・・・・」

『スバル！一番デカイのをかますぜ！』

「分かった」

剣に力を集中させる。刀身は伸び始め、力は増していく。

「やれやれ・・・・」

剣士は溜め息まじりにそういった。

「おおおお！ＥＦＢ（エグゼフォースビックバン）オーバージェネレーション！」

スバルは半径１０メートルに３発斬撃を放つ。その斬撃の中に、剣士は突っ込んでいく。

「弱いな」

剣士が斬撃を放つ。剣士の斬撃は、スバルとは別次元のものだった。３発の斬撃をたった一撃で打ち壊す。

『な、そんなことが――――』

そして、一瞬でスバルの前に辿り着く。

「五の型　風魔烈風刃」

一瞬だった。一瞬でスバルを剣士は五度斬りつけた。

「うわあああああああ！」

スバルは吹っ飛ぶ。

『おい、スバル！立ち上がれ！このままじゃマジで死ぬぞ！』

ウォーロックがスバルに向かって怒鳴る。

横たわっているスバルのもとに、剣士は一瞬でスバルのもとに来る。
そしてスバルの腹を足で踏む。

「がはっ！」

「あの攻撃はカーネルそのもの。それなら俺も一撃じゃ無理なはずだ。なぜか・・・悲しいなもんだな」

「おまえの力不足だ」

第３１話　反撃（後書き）

どうでしたか？強すぎますね、剣士。黙する者先生すみません。活躍どころか負けてしまいました。

それと、ミソラ達の姿、オーバージェネレーションはデータベースでまた書きます。

どうなってしまうの？な旅館編です。あと3話くらいで終わる予定です。

ではでは！応援よろしくお願いします！

第３２話　連携

清火寺――――

黄色い鷲が４人に迫る。その時

「「ジェミニサンダー！」」

立ち上がったツカサとヒカルが極太の電撃を放つ。

「いまだ、みんな！」

「ツカサ・・・・分かった！」

立ち上がった他の３人も、瞬時に体を動かす。その時、ツカサとヒカルが吹っ飛んだ。けれど３人は振り返らない。

「反響する鏡（エコーミラー）！」

ミソラとアサルトの２人を囲むような形で透明な壁を作った。

『なに？』

「いくよ、パルスサウンド！」

ハート型の音が、アサルトに直撃する。

『これくらい僕にとっては屁でもな――――』

アサルトは言葉を止めた。アサルトのダメージは一秒一秒蓄積されていく。

「不思議でしょ？」

ミソラがアサルトに言った。

『音は３６０度に響き渡るわ。けどそれを、ある一定の場所でなんども重複できたら・・・・・』

『じゃあ、なぜおまえらは喰らわない！』

アサルトは焦り始めていた。

「コーヴァスの無効化（インヴァリットウォール）の壁がミソラを包んでいるからさ」

ジャックが言う。今度こそは、コチラの勝ちという思いを持って。

「音そのものは電波じゃない。だからミソラは平気なんだよ」

（ヤバイ！体が・・・・）

アサルトはパルスサウンドを喰らって、動けない。ミソラは反響（エコー）する鏡（ミラー）を解除する。

「これで終わりだ、デスペインヘルフレイム！」

「オックス・ボルケーノ・ブレス！」

赤と紫の炎が混じりあい、アサルトを焼いていく。そして

「さっきのお返しがまだ済んでないね」

『！なんでおまえは立ち上がれる！おまえは――――』

「君と同じ理屈さ、電気を操るんだから、耐性があるに決まってるでしょ？」

ツカサとヒカルが手を組む。

「ジェミニライトニング！」

ジェミニサンダーとは比べ物にならない太さの電撃がアサルトに向かう。

『こ、こんなことが、あるわけ・・・・・』

『うわあああああああああああ！』

第３２話　連携（後書き）

みじか！っと思われた方もいると思いますが、都合上このような形になりました。

さあ、旅行編もあとわずかになっていきました～。どうなってしまうんでしょうか。楽しみにしてくださ～い

感想等くださいね～。

第３３話　力不足

「やったぜ！」

終わった、これで――――――

『ジェノザイドサンダー！』

２０数発の弾丸は、木々に着弾する。そして木々は燃えていく。

「なにっ！？」

『もうおまえ達に構っている暇はないよ！』

そういってアサルトは周波数変換でどこかに行ってしまった。

「私達も――――」

「駄目だ！ここの木はまだ燃えている急いで消火しなきゃ！」

「・・・・スバル君・・・・・・」

「早くエグゼPGMをよこせ」

剣士がスバルに言う。

「別に命を取る気はないからよ」

「いやだ！君はきっと悪い方向に使う、そんなのは駄目だ！」

スバルはその要求を拒否する。

「・・・・・・残念だな、じゃあ――――」

剣士は刀を振り上げる。

「――――さよならだ」

やられる、そうスバルは思った。

『来たぞ』

ふいに剣士のウィザードが言った。剣士は腕を止める。

「・・・・そうか」

そしてスバルに向き直った。

「また今度な」

そういって周波数変換で剣士は消えた。しかもスバルが周波数変換しても追えないものだった。

「くっ、僕達もどうにかして――――」

『スバル、まずは傷を治したほうがいい』

いつもとは違い弱弱しい声で、ウォーロックが言った。

「どうしたの？ウォーロックらしくないじゃないか」

『・・・・あいつからは』

『周波数が感じられなかった』

「・・・・え？」

周波数がないなら、それは電波じゃない。けれどさっきの剣士は電波体であった。

『だからまず傷を治して、策を練ってからいくべきだ。・・・・・悔しいが、あんな実力の差を見せられ、わけも分からない奴の所に、すぐ行こうなんて気にはなれねえよ・・・・・』

「・・・・・・・」

『クソが・・・・・』

アサルトは毒づいた。あそこまで手こずるとは思わなかったのである。

『ロックマンはなにがなんでも僕がデリートする・・・あの方の補佐になるためにも』

ウェーブロードを走っていくアサルト。

『もうすぐロックマンのいる町に着くはずだ。待ってろ、ロックマン。必ず僕がデリートしてや――――』

「悪いがそれは叶わないぜ」

アサルトの前に、銀色の剣士が出現した。

『・・・・アサルト』

剣士のウィザードが、悲しそうに言った。

第３３話　力不足（後書き）

やっとこの小説が動き出しました！（遅っ！）

今回も短いですね～。まあ、繋ぎの話なんでしょうがないんですが。

今回は短めに～。では！あと１話更新したいと思います！

第３４話　再会

『・・・・・おまえは？』

「おまえには名乗っておくべきか」

剣士は言った。

「俺の名前はシルバー・ウィンドだ」

『・・・銀色の風？おかしな名前だね』

アサルトが嘲笑した。

「まあな」

『アサルト・・・・おまえも俺を覚えてないのか？』

剣士のウィザードは実体化する。

『誰？きみ、初対面なのに、勘違いしてない？』

『・・・・・・』

「まあまあ、おまえは俺が倒すから」

剣士は言った。それは絶対的自信からくる言葉だった。

『・・・いきなり出てきて、ふざけないでくれる？僕は急いでる

んだ』

アサルトが2丁の銃を構える。そして電流を溜める。

『消えろ！ライトニングイーグル！』

黄色い鷲は、シルバー・ウィンドに向かって飛んでいく。シルバー・ウィンドは避けもせず、ただ立っていた。そして、直撃した。

『ざまあみろ！じゃあ先に――――』

「なに寝言ってんの？」

攻撃を受けたというのに、シルバー・ウィンドはスバルのときと同じで、無傷であった。

『な！馬鹿な！』

「電気ってのはな、空気より真空のほうが通りやすいんだ。俺の周りは真空状態なんだ。これで電流は俺に当たらず周囲に分散されていく」

『でも、弾丸を撃って――――』

「そしてもう1つ、俺の周りには風の刃（やいば）がうずまいてる。それで弾丸を粉々にしたんだよ」

シルバー・ウィンドは説明したが、アサルトが理解するのは少し遅い。

『・・・・そんなことが・・・』

「じゃあ俺の番ね」

シルバー・ウィンドは居合いの構えでアサルトに向かって飛んだ。

『くっ、ジェノサイドサンダー！』

しかしそれは、シルバー・ウィンドに少しのダメージも与えない。

シルバー・ウィンドの刀に周囲の風が集まっていく。

「五の型　風魔烈風刃」

一瞬で5度斬り裂き、なおかつ風の刃がアサルトを斬る。

「ぐわあああああああああ！」

「この世界の礎となってくれ、アサルト」

シルバー・ウィンドはアサルトに最後の言葉を言った。

デリートされながら、アサルトは全てを理解する。

『・・・おまえは！・・・・そしてあいつは・・・・・』

そしてアサルトはデリートされた。残留電波も残らずに、きれいに。

『・・・・・・・これでまた1人減ったな・・・・・』

「・・・・ああ。これが運命、か」

シルバー・ウィンドは悲しそうに言った。

『・・・・残念なことに、招いていない客が来たぜ』

その言葉とともに4体の電波体が現れる。ミソラ、ツカサ、ジャック、ゴンタである。

「誰だおまえは！」

ジャックがシルバー・ウィンドに言った。

そしてもう1人の電波体がやってくる。

『・・・・やっぱりコイツ、周波数がねえ』

やってきたのはスバルだった。

「・・・・またやられたいのか？」

「次は、勝つ！」

スバルは剣を構える。

「・・・・おい、そこのあんた」

シルバー・ウィンドはミソラに話しかけた。

「清火寺はどうなった？」

「え?・・・・・・えーっと、周りの木が焼けちゃって・・・・・」

「じゃあ行かないとな」

そしてシルバー・ウィンドはまた周波数変換で消えた。

「な!逃げやがった」

ジャックが悔しそうに言う。

「なんでミソラちゃん言っちゃったんだ?」

ゴンタがミソラに聞いた。

「な、なんかあの人、悪い人じゃない気がして・・・・・」

ミソラが話しにくそうに言った。

「スバル、おまえはあいつにやられたのか?」

ジャックがスバルに聞く。

「・・・うん」

「やっぱ悪い奴じゃんか~!んじゃ行こうぜ!清火寺に!」

5人は清火寺に向かった。

「どこだ?」

清火寺に着いたものの、シルバー・ウィンドがどこにいるか分からなかった。

「クソ〜、どこにもいねえ〜」

スバルは焼け野原になったところを見る。清火寺には被害がなかったものの、その周辺の木々は燃えてしまった。

「・・・ごめんね、スバル君」

「しょうがないよ、ミソラちゃん達はがんばってくれたよ」

スバルは言った。来年の春に桜を見にここに来たかったが、木々は焼けてしまったので、もう見れない。

その時、焼け野原になったところから、一斉に芽が出た。それはぐんぐん伸びていき、やがて木になった。

「「え？」」

そして木々は生長していき、やがて焼ける前の大木になった。

「なんなんだ、これ」

みんなはただ呆然としてそれを見ていた。そして、木々は桜に変わっていった。

「・・・すごい！」

ミソラは声を上げた。

桜は風に揺られ、散っていく。

「おい、アンタ、今すぐこっち来い！・・・理由は来れば分かるから！」

ジャックはルナとキザマロに連絡をした。

夏に散る桜は、輝いていて、とても美しかった。

「綺麗だね、ミソラちゃん」

「うん、これで来年は来なくていいね」

ミソラはそう言った。

「・・・・来年も来ない？ここに」

スバルはミソラに言った。

「・・・・スバル君がそういうなら、私は行くよ」

2人は桜から緑葉に変わるまで、桜を見届けた。

第３４話　再会（後書き）

桜、咲きましたね～。現実で見たかったな～。
どうでしたか？これで旅行編は終わりで～す。予定よりも長かったです。
そして新しい章に入りマ～ス。こちらも楽しみにしててください。
動き出す新たな人物、裏に潜む影。そして謎のバトルカード。これが次の章のキーワードになります。
ではでは、感想等、よろしくお願いしマ～ス！

第３５話　退屈

『・・・・・ロックマンの実力は上がらず、アサルトは死んだか・・・・・・』

黒ローブは期待はずれというかのように言った。

『申しわけありません・・・・・まさかあそこで奴の仲間が来るとは思わず・・・・』

『・・・・・・おまえが責任を取れ・・・分かったな?』

『・・・・・・はい』

『それと、シルバー・ウィンド・・・・・あいつ、どこかで・・・・』

『・・・私は存じ上げません』

『まあいい。今度は、しっかりやれよ』

黒ローブは去り際に

『あいつにアレを絶対使わせろ』

そう言って去っていった。

あの後スバル達は、アサルトが起こした事件が速報で全国放送され、それを心配した父兄はすぐ帰るようにといい、コダマタウンに帰っていた。

『暇だぜ～』

ウォーロックは言う。空いてしまった1日は、なにも考えてなかったのですることがない。

「・・・・・シルバー・ウィンドって何者なんだろうね？」

カーネルソウルのオーバージェネレーションで確実に倒せる自信があった。けれどそれはたった一撃で破られたとなると、少し落ち込んだ。

『・・・・・周波数が感じられねえし、あの実力・・・・・そして俺達を襲って、エグゼＰＧＭをよこせっていったら、今度はアサルトを倒しちまった・・・・・・』

「敵、なのかな・・・・・・」

2人はテレビを見ながら言った。

『・・・・分からねえ・・・ただ、今の俺達じゃ敵わないことは確かだ』

「『ハァ～』」

2人は溜め息をついた。

「ほら2人とも、溜め息ばかりつかない」

あかねが言った。

「・・・・・テレビつまんないね」

『刑事ドラマやんねえかな～』

「ゴールデンウィークってやるの？」

『さあ？』

そして2人は、1日この退屈な時間を過ごしていた。

「・・・・・ガイア、と名乗ったんですか」

「ええそうよ、残留電波をのこしてないからまだ分からないけど、あの組織とは関わりがありそうよ」

暁の言葉に、ヨイリーは答えた。

「・・・・・こりゃ次は俺も行かなきゃいけませんね」

「ええ、・・・・うまい棒はいらないわよ」

暁はうまい棒を持っていくき満々だったので、ヨイリーは静止させた。

「・・・・やつらの目的はなんだと思います？」

「スバルちゃんのレベルアップ、というからそれに間違いはないでしょう。次の戦いは、スバル君にはあまり戦わせないで」

「結構きついですよ？あいつなしじゃ」

「だからあなたにエースＰＧＭを返したんでしょ？」

「そりゃそうですけど～」

暁は面倒事をおしつけられてように言った。

「・・・・次は、クインティアちゃんにも行ってもらうわ。ジャックちゃんは少し怪我を負っているから、行かないでもらって・・・・スバル君にも行ってもらうわ」

「・・・・なんでですか？」

「狙いはスバル君よ、スバル君が行かなければ相手はあなたなんか相手にしないはずよ」

「なんかってなんですか！」

『シドウ、落ち着いてください』

アシッドが暁を止める。

「ということで、頼むわよ、シドウちゃん」

「・・・・分かりました」

暁は渋々了解した。

「・・・・まあエースＰＧＭも帰ってきたし、あんまし体の負担なくてアレが使えるな」

『無理な状況に陥ったら強制的に解除します』

「ハハハ、頼むよ」

そういう暁の顔を、アシッドは心配そうに見つめた。

『お、ミソラがでてるぜ！』

ウォーロックが大声で言った。

「そりゃ、ニホンのトップアイドルだもの」

スバルが当たり前だというように言った。

『おいおい、少しは喜べよ～』

からかうウォーロックに続いてあかねが

「そうよ、もしかしたら将来のおよ――――」

ウォーロックの頭上にヘビードーン3が出現する

「いや、今のはおれじゃおごわっ！」

直撃。ウォーロック以外には被害がない。

「ごめんね～、ウォーロック君」

あかねが謝る。

「いや、おふくろのせいじゃないぜ・・・・・」

明らかにあかねのせいだと思ったが、スバルは黙っておいた。

（なんか、ウォーロックって、ミソラちゃんのことになるといつもこうだな～）

スバルはウォーロックに呆れている。

「まあいいか」

スバルはミソラが出演している番組を見ることにした。

第３５話　退屈（後書き）

さあ、謎が増えて新たな章に入りました。始まる新たな章。新たに登場する人物。新たな力。どんどんいろんなのが増えていきます。とにかく応援よろしくお願いします。感想等もよろしく～

第３６話　転校生

そしてゴールデンウィークが終わってまた学校に行くことになったスバル達。スバル達小学生は休みボケをしている者が多い。遅刻ギリギリに学校に着いた。

「まったくもう！今日は転校生が来るのに、こんなんじゃ駄目じゃない！」

朝から闇魔大王（ルナ）が怒る始末である。

「そ、それはそうと、転校生って誰？」

（お、これはまさかのミソラって展開か？）

「男の子が２人って聞いてるわよ」

（ちっ、つまらねえな）

ウォーロックは心底残念がった。

そして教室のドアが開いた。

「よ～し、みんな座れ」

育田先生が教室に入ってきた。

「今日は転校生が２人このクラスに入ってくることになった。みんな、仲良くしてくれよ」

そういって転校生の2人が入ってきた。1人目は髪が黒く、顔は白い。黒い服に身を包んでいて、普通ではない人に思えたが、顔が暗いわけではないので、別に普通の人だと思った。

もう1人は、髪が銀髪で顔は肌色、服は上が白、下が黒のその人物は

「あっ、きみは！」

思わず声を上げてしまうスバル。

その少年もスバルを見て、少し笑った。

育田先生が1人目の男の子の名前を書く。

「宇宙銀河（ソラギンガ）君だ」

「よろしくお願いします」

そういった銀河は、スバルを少し見る。スバルと目が合った。

（・・・・え？）

銀河と目が合った瞬間、スバルの体は震えた。それがなんでか、スバルには分からない。

2人目に入ってきた男の名前を書く。

「甲斐疾風（カイハヤテ）君だ」

「よろしく」

「じゃあギンガ君は窓側に開いている席。カイ君は、そうだな・・・・星河の隣の席だ」

2人は指示された席に座る。

「よろしくな、スバル君」

「う、うん」

震えていたスバルは、声も震えていた。そんなスバルをカイは気にした様子もなかった。

そして今日の授業は始まった――――

そしてカイのことで分かったことがある。それは

「よし、もっかいおかわり！」

カイが大食いだということ。彼は今日の給食のカレーを一杯３０秒

で食べたかと思うと、即座におかわりをしにいった。

「・・・・カイ君、君ってなにもの？」

震えが止まっていたスバルはカイに聞いた。

「は？何者もなにも、人間だよ」

そういうことを聞いたんじゃないが、スバルは口を閉じた。

「まあ、俺は少し食べるのが早いって言われるけどよ」

（少しじゃないでしょ）

スバルは内心で突っ込んだ。

『おい、あとでおまえのウィザード見せてくれないか？』

ウォーロックがカイに言った。

「ん？別にいいけどなんで？友達作りたいのか？」

『べつにそういうわけじゃねえけどよ・・・・』

ウォーロックは何かスバルに言いたげだったように見えた。

「よし！もう一杯もらってこよう！」

もう5杯目だが、カイはなおも食い続ける。ゴンタも食べていない状況でだ。

「・・・ホントになにもの？」

スバルの疑問は、誰も分からない。

そして昼休み

『・・・スバル』

「なに？ウォーロック」

『あいつ、シルバー・ウィンドってやつに見えるんだが・・・』

「え？」

たしかにシルバー・ウィンドと同じ身長だ。そしてあの銀髪。共通点はある。

『だからもしやつのウィザードから周波数がなかったら、すぐに電波変換して倒すぞ』

「ちょ、ちょっと待ってよウォーロック！いくらなんでも考えすぎじゃ、それにもしそうだとしても他の人に迷惑が――――」

「おい、ウォーロック。俺のウィザードを見せるぜ」

カイがウォーロックを呼んだ。

カイのところにスバルとウォーロックは行く。

「ウィザード　オン」

そしてカイのハンターからウィザードが出てくる。

白い龍という感じだろうか。足は他のウィザード同様ないが、鱗があり、翼もある。そして

『周波数もあるぜ、スバル』

周波数もあったようだ。

「カッコいいね～、なんて言うの？」

「ゲイル、これがコイツの名前だ」

『よろしくな。スバル』

ゲイルはスバルにあいさつした。

「こちらこそ、僕のウィザードのウォーロック」

『よろしくな』

『お、おう』

ウォーロックが一瞬戸惑って返事をした。

「やっぱり、ウォーロックの勘違いだよ」

『・・・そうだな、すまねえ、スバル』

そしてカイとギンガの初めてのコダマ小学校の生活は終わった。

家に帰ったスバルは、朝のことを思い出す。

ギンガと眼が合った瞬間、自分の体は震えだした。恐怖も何も感じていない状況でだ。

（僕、おかしくなったのかな・・・・）

スバルはあまり考えることはやめた。考えても何も始まらない、そう思ったからだ。

ウォーロックはウォーロックでなにか考え事をしているらしい。今日は雪でも降るんじゃないか。

『始まったな、計画が』

ウィンドが銀髪の少年に言った。

「そうだな、だけどまだ始まったばかりだ」

銀髪の少年は素っ気なく言った。

『・・・・俺らだけで大丈夫か?』

「いけるでしょ?できないなら最初から僕を誘わないでしょ」

冷たく言う少年。

「やるならやる。やらないならやらない。ただそれだけだよ」

『・・・・そうか』

ウィンドは言った。

「もし彼がいたなら、僕達と一緒に戦ってくれたのにね」

『・・・・いねえ奴のこと言ってもしょうがないだろ?』

「・・・そうだな、じゃあ始めよう」

「スバルと次に接触した奴をデリートする」

第３６話　転校生（後書き）

感想等くださいね～

第３７話　歴史

カイとギンガが転入した翌日。いつもと変わらない日常を送っていたスバル。

今は３時限目　社会

歴史を習っている。年代は２０ＸＸ年

「え～、約２００年前に、あるネットナビとオペレーターが世界を６度救った」

社会の先生は教科書の要点をまとめる。

「そのネットナビ、ロックマンエグゼとオペレーター光熱斗は、ＷＷＷ、ゴスペル、デューオ、ネビュラグレイ、そして電脳獣の脅威から世界を救ったといわれる」

生徒は軽く頷きながら先生の話を聞いている。

「ロックマンと光熱斗はかたい絆で結ばれていた。そして彼らは、他のナビやオペレーターとも絆があった。だから彼らは世界を救えたと考えられている」

スバルもそれは共感できる。自分も絆で世界を救ったのだから。

「・・・・・そして彼らは最後に、ある事件を解決したと言われる。・・・・・これは世間的には知られていないものであるらしい」

世間的には知られていない事件？そんなものはサテラポリスから聞いていない。

「これがロックマンエグゼの最後の戦いだったと言われている。まあ、噂程度の話だがな。今のはテストに出ないから覚えなくてもいいぞー」

社会の先生の言葉なんて耳に入らなかった。

「まあ、どうせ噂だし、気にすんなよ、スバル」

隣のカイがスバルに言った。

「テスト出ないんだし、いいじゃねえか」

「それと、昨日出した宿題だが――――」

「やべ！やるの忘れた！」

カイはすごく驚いている。

「・・・・・じゃあカイは居残り」

「うわあああああ！」

叫ぶカイ。それは虚しく学校中に響いた。

「ハヤテ君、ドンマ――――」

「まあすぐ終わらせればいいか」

（切り替えはやっ！）

そのツッコミはカイには届かない。

キーンコーンカーンコーンと学校の鐘が鳴る。

「じゃあ、授業終わりー」

みんなは即座に自分の席を離れる。

「スバルー・・・・・なに考えてんだ？」

カイがスバルに聞いた。

「いや、エグゼの最後の戦いってなんなんだろうなーって」

「・・・・なんで気になるんだ？」

「なんかさー、他人事じゃない気がして」

スバルはエグゼＰＧＭのことを言わなかった。言っても分からないだろう。

「やっぱりか――――」

そう、カイが言ったように聞こえた。それは普段のカイが発するような声ではなかった。

「え？やっぱりって？」

「いやさ、同じロックマンだからかな～って思ってさ」

普段の声に戻ったカイは言った。

「そう、なのかなー・・・・」

スバルはまた考えこんでしまった。

放課後　屋上

『今日はいい風吹くぜ～、カイ』

ゲイルはカイに言った。

「・・・・そう。風吹くと寒いんだよな～」

『そういうなって、いい風だぜ?今日は』

カイは微笑む。

「だといいけど、明日はどうかな?」

途端にゲイルの顔が変わる。

『・・・わからねえ、なんか――――』

「あっそう、それにしてもスバルは大変だね~。あんな年で世界任されちゃって」

『そうだな、あの年で・・・・』

「どうした?」

『いや、俺は生きすぎたなって思ってさ』

ゲイルが悲しく言った。

「・・・生きすぎて悪いことはないだろ?」

『・・・あいつらの思いを背負ってだぜ?』

「だったら自分でデリートすれば?」

『してやるよ、終わったらな』

ゲイルが言い切った。

「・・・・その時がくればいいな」

『ああ、くればいいな』

その2人の言葉の意味は誰も分かることはない。

第３７話　歴史（後書き）

歴史の部分間違ってたらごめんなさい。

カイとゲイルの会話、意味分かります?分かったらショックなんですがね・・・・

データベースをお気に入りにいれてくれた人がいるのですが、探してもいないのですが、誰なのですか?こういう人が読んでるんだ～って知りたいので教えて欲しいのですが・・・・無理にとは言いません。

活動報告に書きましたが、オリジナル書こうかな～って思ってます。

第３８話　ＷＡＸＡ

『準備は整った』

黒い騎士は、右手に大槍、左手に盾を持ち、そう言った。

『では、行こうか・・・・・』

そして黒い騎士は飛ぶ。

『待っていろ、ロックマン』

カイは速攻で社会の宿題を終わらせ、スバル達（スバル、ルナ、ゴンタ、キザマロ）と帰っていた。

「カイ君って、その細さでゴンタ君を凌ぐ大食いだとは驚きました」

キザマロが言った。

「いんや、あんま食わないよ。それにゴンタが食う前に俺が食べるからゴンタが食えないだけだし」

「ああ、だから今日は腹減ってるんだ・・・・・」

ゴンタが腹をおさえてそう言った。

「ハハハ、ゴンタは少しは食べる陵減らしたほうがいいよ」

スバルが言った。

「スバル、それはゴンタに失礼だと思うぜ?」

カイがスバルに言った。

「そうだね、ゴンタ。ごめんね？」

「スバル、明日のデザート貰うぜ」

それは駄目だよ～と、みんなは笑いながら言う。

「あなた達、ちゃんと宿題やりなさいよ？」

ルナがスバル達に言った。

「やると思うよ？多分」

「多分じゃ駄目！ちゃんとやりなさい！」

「Ｉ　ｄｏｎ、ｔ　ｋｎｏｗ」

「分からないじゃな～い！やりなさい！」

「Ｉ　ｄｏｎ、ｔ　ｋｎｏｗ　ｈｏｗ」

「どのようにすればいいか分かりません？ふざけてないでやりなさい！」

「Ｂｅ　ｑｕｉｅｔ　ｐｌｅａｓｅ」

「ぐぐぐ・・・・・」

ルナはついに黙り込む。それはそうだ。ここは道端。うるさくては

近所迷惑だ。

「カイ君って、どうして英語知ってるの？」

スバルが聞いた。

「これさえ覚えれば外国人に対処できるから、覚えた」

なんともテキトーな答えだ。

そのときハンターから電話音が鳴った。

「もしもし」

「スバルちゃん、いそいでＷＡＸＡに来てちょうだい！」

ヨイリー博士からだ。

「どうしたんですか？」

「今、ＷＡＸＡ周辺でとんでもない電波体反応があるのよ！」

「え？」

「多分ガイアっていう組織の電波体よ！お願い、今すぐ来て頂戴！」

「分かりました！僕、行ってくる！」

「俺も行くぜ！」

ゴンタが言った。

「・・・・嬉しいけど、まだ怪我治ってないでしょ？」

「それはそうだけど・・・・」

「だからこっちで待ってて！」

「・・・・分かった！帰ってこいよ！スバル」

「うん！トランスコード　シューティングスター　ロックマン！」

スバルは電波変換して、ＷＡＸＡに向かった――

「スバル、戻ってこいよ」

カイはスバルが去ったあとに、そう言った。

パタンと、写真立てが倒れる。

「あれ？」

仕事が早く終わったミソラはベイサイドシティにある家に帰っていた。家に帰っていてゆっくりしていたら、なぜか写真立てが倒れてしまっている。

「なんでだろう」

その写真は、K都から帰る前に、みんなで撮った写真だった。

「・・・なんか悪いことでもあるのかな～」

ミソラは冗談のつもりでそう言った。それが的中するとも知らずに

――

第３８話　ＷＡＸＡ（後書き）

ＷＡＸＡでバトルで～す。冬休みオリジナル書くのでそちらもよろしく～。

感想等よろしくお願いしマ～ス♪

第３９話　黒い騎士

ＷＡＸＡニホン支部――――

「ロック、どこにいる？」

『・・・・・入り口にアシッドがいる。まずそっちに言ってみようぜ』

「分かった」

スバルはアシッドがいる入り口に向かった。

「アシッド、暁さん！クインティアさん！」

スバルは入り口にいた人に声をかける。

「おお、スバルか」

暁は手にうまい棒を持ってスバルに言う。

「シドウ、うまい棒を食べるのをやめたら？」

クインティアのツッコミを暁は聞いているのか聞いてないのか、適当に頷いている。

「んでだな、まだガイアの連中は現れてないんだ」
暁は周りを見ながら行った。
『けれど確実にこの近くにいます。警戒は怠らないで下さい』
『けっ、てめえに言われなくても分かってるよ！』
「落ち着いて、ウォーロック」
スバルはそんなウォーロックを止める。
『ったくヨイリーのばあさんもまだ来ていないのに呼ぶなよた――』
『！来ました、みなさん！』
アシッドの言葉が発せられて数秒たってから、それは空から現れた。
それは、以前現れた黒い騎士だった。
『てめえがお出ましか！』
ウォーロックは黒い騎士に言った。
『・・・・我はロックマンにしか用がない。他の者は、失せよ』
黒い騎士は暁とクインティアに言った。

「そんなことはないぜ、俺達も参加させてもらう！」

「そのとおりよ、シドウ」

「「トランスコード！」」

2人は電波変換した。

『哀れな奴だ、実力の差も分からないとは』

「じゃあどんくらいだ？」

暁は黒い騎士に聞いた。明らかに挑発している。

『それを今から確かめるんじゃないか？』

「それもそうだな、じゃあ行くぜ！」

夕日に照らされる中、戦いは始まった――

『おお、来たか。……でも俺も勝てるかな』

まるで一人ごとのように呟くシルバーウィンドは、しかし声に真剣みが帯びていない。

『なんてったって奴は最強の騎士、スバルじゃどうしようもならないほどに強い。この俺と互角なほどに』

熱に浮かされたような目線で、彼は見つめる。その先にあるものを。

『ゲイボルグ、俺の変わりに最後までリーダーを務めていた。……だからこそ、俺はおまえを殺さなくちゃいけない。なんとしても』

左腰に差してある刀をチェックしながらシルバー・ウィンドは、この先の顛末を考える。しかしどんな番狂わせがあろうとも、結果は変わらない。それが彼にとってたまらなく悔しい。

『……ああ、最悪な日だ』

状況は良くも悪くもなかった。スバルとクインティアが後方から援護し、暁がソードで攻撃をしていた。

ゲイボルグはそれをなんの苦もなく避けていた。

ただ、時間が過ぎていき、ノイズ率が上がっていった。

「くっ、コイツはなにを待ってるんだ・・・」

苦し紛れに暁が言った。

『コイツの動きは無駄がなく、しかも解析できません』

「それって、キツくないか?」

『なんとかするしかないでしょう』

暁が振ったソードは盾に防がれる。

「ハイドロドラゴン!」

クインティアが水の竜を放つ。

しかしそれもたった一突きで壊れてしまう。

「くっ・・・・・・」

「ギャラクシーアドバンス！　ギガキャノン！」

大きな青きキャノンをゲイボルグに放つ。

『・・・・・悲しいものだな』

それはゲイボルグが避ける。

「アシッド、ノイズ率は？」

『・・・・もう出来ます、シドウ！』

「いくぞ、クインティア！」

「分かったわ、ヴァルゴ！」

『キャハハ、もっと暴れてやるわよ！』

2人の周りのノイズが吸収されていく。

「「究極変身（ファイナライズ）！」」

2人の姿が変わっていく。

「アシッド・ブラック・エース！」

「クイーン・ヴァルゴ　ブリザードモード！」

第３９話　黒い騎士（後書き）

究極変身にしました。データベースにもそうしているのですが、すみません。

では、感想等よろしくお願いします！

第４０話　本気

暁の体は、以前暴走したような黒い体になっている。

クインティアは、杖が巨大になり、色は白が主体になっている。

「これで決めてやるぜ」

暁がゲイボルグに言った。

『その程度の力でか？』

「じゃあ見せてあげるわ」

ゲイボルグの頭上に雨雲が発生する。

「ゴッドインベル！」

雲から雨が降りだす。ゲイボルグは盾で防御するが、その盾は溶けてしまう。

「これでおまえの盾はないぜ」

暁がここぞとばかりに攻め立てる。

「ウィングブレード！」

暁がゲイボルグに高速で突撃する。

それをよけるゲイボルグだが、後ろにはスバルが待ち構えていた。

「これで終わりだ、ドリームソード！」

ロックオンで一気に間合いを詰めたスバルは、ゲイボルグの背中に斬りかかった――――

スバルのドリームソードはゲイボルグの鎧に当たった。けれどそれは、傷1つ付けなかった。

『どうなってんだ！あの鎧、傷1つついてないぞ！』

『弱すぎるな・・・・・そろそろ本気をだすべきか』

ゲイボルグの表情が一瞬消える。そして、その一瞬でスバル達に殺気が伝わる。

『・・な！』

3人の体は震える。今まで味わったことのない恐怖によって。

『・・・・だから言っただろ？おまえ等と私では、実力の差がありすぎる、と』

本能が告げている、無理だと。けれどここで退けばＷＡＸＡは間違いなく陥落する。

「・・・・ウォーロック、ソウルユニ――――」

『ここはスタイルチェンジだ』

ウォーロックには考えがあるようだ。

「・・・・・分かった」

ウォーロックはエグゼノイズのことを自分よりもよく知っている。それはウォーロック自身にプログラムが組み込まれているからだ。多分、エグゼの記憶がウォーロックに伝えているのだろう。

「スタイルチェンジ」

スバルの姿が変化していく。

「シールドスタイル！」

スバルの体は緑色になり、左手には盾が、右肩には鎧、そして右手には剣が装備されている。

「暁さん！僕が２人を守ります、だから攻撃してください！」

「・・・・分かった！クインティア、行くぞ！」

２人は駆け出す。その２人をバリアが囲む。

『・・・・こんなもので防げるわけがない』

ゲイボルグは暁を突く。それはバリアが防ぐ。

「ブリザードドラゴン！」

クインティアの氷の竜がゲイボルグに突っ込む。

盾がないゲイボルグは直撃し、足元が凍てつく。

「これで、どうだ！オメガレーザー！」

暁の両肩から出る赤いレーザーが、ゲイボルグに向かって放たれる。

第４０話　本気（後書き）

感想くださ～い。

短いですね。はい、キリが悪いのでこうなりました。ごめんなさい。

第４１話　罠

赤いレーザーはゲイボルグに直撃した。その熱で氷が溶けていく。

「やった、か・・・・」

暁の究極変身（ファイナライズ）が解ける。普通の状態でも体がキツいのだ。究極変身（ファイナライズ）はよりキツい。

『終わりと誰が言った？』

その瞬間、暁の目の前に黒い影、ゲイボルグが現れる。

『暗黒の槍（ダークネスランス）』

ゲイボルグの槍に黒いなにかが纏う。そしてゲイボルグは、暁の腹部を突いた。

「ぐはっ・・・」

スバルのバリアはいとも簡単に破られ、腹部を直撃した。暁は吹っ飛んで、壁に激突した。

「シドウ――――」

『余所見をするな』

ゲイボルグはクインティアの目の前に移動して、暗黒の槍（ダークネスランス）を腹部に放つ。

クインティアは声も上げずに吹っ飛んだ。

『次はおまえだ、ロックマン』

ゲイボルグはスバルに向かって言った。

スバルはただ震えていた。ありえない。こんな簡単にやられるなんて。

そんなスバルを無情にもゲイボルグ移動して腹部を突いた。

「が・・・」

スバルは暁と同様に吹っ飛んだが、バリアを咄嗟に二重張っておいたので、ギリギリ意識はあった。

「・・・暁さん、クインティアさん・・・・」

2人は気絶している。死んでしまってはいない。なぜならブラザーバンドが切れていない。

「・・・ウォーロック、攻めるよ」

やるしかない。やらなければやられる。

『・・・分かった、あれでいくぞ！」

スバルはバトルカードを転送する。カードは「ソード」。

「ソウルユニゾン！」

スバルを赤い光が包み込む。

「ブルースソウル！」

剣と盾を備えた変身。体は赤くなり、バイザーは黄緑色になっている。

「・・・僕はもう退けないんだ！」

スバルはゲイボルグに向かって走る。

「ワイドブレード！」

スバルは剣を横に振るう。それをゲイボルグは槍で受け止める。自然に鍔迫り合いになる。

スバルが別れ際にゲイボルグの頭に剣を振るう。それも槍で受け止められる。

「ウォーロック・・・・」

『なんだ？』

「あれをやってみる」

『やってやれ！この状況を壊すならなんでもやれ！」

その言葉に頷き、スバルは居合いの構えをする。イメージはあの剣

士。

（風・・・・）

そう思うと自然に風は剣に集まっていった。

そしてゲイボルグに突っ込む。

「風魔烈風刃！」

一瞬にして5度斬りつけ、なおかつ風の刃がゲイボルグを襲う。

これは予想できなかったらしく、ゲイボルグは直撃する。そして

ピシ　とゲイボルグの鎧が音をたてる。

ゲイボルグの黒い鎧に小さな亀裂が走った。

「やった・・・・」

『・・・たしかにすごい。だが、おまえにもダメージがあるようだな」

そう、スバルにもダメージがあった。操りきれなかった風は、スバルに襲い掛かった。気付けば，スバルはゲイボルグ以上のダメージを受けていた。

『やはり弱いな』

ゲイボルグはスバルに突っ込む。スバルには避ける体力も気力もな

い。スバルの体は力なく空に飛ぶ。

「ぐ・・・・は」

スバルの体は地面に落ちる。

『・・・ロックマンよ、おまえにはキズナ以外にも力があるではないか』

スバルはハンターを見る。そのディスプレイ画面には、今まで見たことのない黒いカードが表示されている。

「・・・これは？」

『それさえあれば貴様は私に勝つことが出来る。使わないのか？』

罠だった。普通の精神状態だったらスバルは見抜けただろう。けれど今のスバルは――――

――――見抜けなかった。

勝たなければいけない。ここを守るためにも、２人を守るためにも。

『スバル、やめろ、それは――――！』

スバルはウォーロックの言葉を無視して、黒いカードを使用する。

「ダークカード　ダークソード」

スバルは黒い光に包まれる――――

（彼も次の段階に行ったか・・・・）

出られない人物はただそれを待っていた。

（なら、あの子も）

その予想は、外れない。

（僕達の計画も次の段階に進んでいく――――）

３つの計画が、ついに交錯し始めた――――

第４１話　罠（後書き）

感想くださ～い。

第４２話　恐怖

スバルの右腕に黒いソードが装備された。ブルースソウルは解けている。スバルの体は少し黒くなっていて、ダークソードの禍々しさがにじみ出ているように見えた。

「ハアッ！」

スバルはロックオンでゲイボルグに一気に詰め寄り、剣を振るう。

金属と金属がぶつかったように、鎧と剣が弾かれた。

「ダークカード　ダークバルカン！」

黒いバルカンが、ゲイボルグに向かって連射される。けれどもそれも鎧によって防がれる。

「ちっ、ダークランス！」

黒い槍が、ゲイボルグに向かう。スバルの体がどんどん黒くなってきていても、スバルは気にしなかった。ただ勝つ、それだけを考えてダークカードを使う。

けれど、その思いも虚しくゲイボルグの鎧を貫けなかった。

『・・・闇の力を使ってその程度か・・・・・』

ゲイボルグはスバルを槍で吹き飛ばす。

「ぐ・・・ダークリカバリー！」

スバルの体力は異常なくらい回復した。しかしそれは逆に、体力の減少に繋がる。

「はあ・・・はあ・・・」

『さあ、もう1段階覚醒せよ！』

「くそ、ダークカード　ダーク――――」

スバルは声が出なかった。いや、出せなかった。闇への恐怖、それをなんのちょうちょもせず使う自分に、恐怖で声が出なかった。

スバルは座り込んで泣いてしまう。

『・・・弱きものよ、なら私が直に覚醒させてやる』

ゲイボルグはスバルに歩み寄る。けれどスバルは、泣いてしまっていてどうにもならない。他の感情をすべて潰す、恐怖が心を支配しているからだ。

『エグゼよ、覚醒せよ！』

『アンタにしては隙だらけだな』

その瞬間、一筋の風が吹いた。それはスバルの前に立ちふさがり、ゲイボルグを近づけさせない。

『・・・・なに？』

ゲイボルグの鎧は3つの傷跡がある。何かが切り裂いたのだろう。

『久しぶりだな、ゲイボルグ』

銀色の風、シルバー・ウィンドのウィザード、ウィンドがゲイボルグに言った。

『シルバー・ウィンド、貴様、なにものだ？』

『なにものって？俺達はあんた達を倒す電波体ってとこだな』

『・・・周波数がない電波体か、笑わせるな』

『今のうちに笑っとけ、あとで泣くからよ』

シルバー・ウィンドが刀を構える。

『ここで前につかなかった決着つけようぜ、ゲイボルグ』

『初めて会った敵に何を・・・・・・・まあいい』

ゲイボルグも槍を構える。

『じゃあそういうことだ、ロックマン。・・・・邪魔だ』

突如、シルバー・ウィンドはスバルを蹴り飛ばした。

「あ・・・・」

スバルは壁に激突し、気絶した。

『・・・仲間ではないのか?』

『誰が仲間って言った』

その一言言った瞬間にシルバー・ウィンドが突っ込む。刀を縦に振るう。それをゲイボルグは槍で防ぐ。

『腹がら空き』

シルバー・ウィンドは空いている腹に蹴りをいれる。ゲイボルグは少し怯む。

その隙にシルバー・ウィンドはゲイボルグの喉を突こうとする。けれどそれはゲイボルグの拳によって敵わなかった。ゲイボルグの拳は、シルバー・ウィンドの腹にめりこんだ。

『ぐ・・・・』

シルバー・ウィンドは距離を置く。鎧に傷はないが、シルバー・ウィンド自体にはダメージがある。

『やっぱり風は通じないか・・・・』

シルバー・ウィンドがハンターのディスプレイからカードを選ぶ。

『フラッシュスピア　コンベーション』

突如、刀が電流を纏う。フラッシュスピアは出現せず、電流だけが出現した。

『・・・その力をどうやって?』

『アンタが思い出せば分かるよ』

ウィンドが言った。

『まあそういう話はいいから、ケリつけちゃおうぜ?』

『・・・つけられるかな?』

そして、シルバー・ウィンドが、消えた。

『これでつけられるよ』

ゲイボルグの懐に一瞬で詰め寄ったシルバー・ウィンドは、剣を振りかぶる。

『こしゃくな！』

ゲイボルグは槍で防ごうとする。けれど、シルバー・ウィンドは軌道を変えて、ゲイボルグを斬る。しかし浅い。

『・・・・ぐ！』

だが、ゲイボルグは硬直する。動けない。なぜなら

『まさかマヒがあるとは思わないよな』

マヒ効果がついていたからだ。

『これで終わりだ』

そういってシルバー・ウィンドは刀を振り上げた。その一閃は止まることを知らず、鎧を斬り裂いた。

第４２話　恐怖（後書き）

明日から更新がんばります！
感想くださいね～

第43話　二択

『ぐ・・・・が・・・・』

刀は鎧を容赦なく切り裂き、その内側にあるゲイボルグの身が電流によって焼け焦げる。

『・・・・あきらめな、おまえじゃ俺らに勝てねえ』

『ふざけるな！ここでおまえらも殺して――――』

「そこまでだ、戻れ、ゲイボルグ」

ふいに空から声が聞こえた。空を見ると、ディスプレイがあり、そこに黒ローブの男がいた。

「ロックマンの力は解放した、今回はそれだけでいい」

『・・・・・分かりました』

『おい、おまえ、誰だ？』

シルバー・ウィンドが男に聞く。

「ガイアのリーダーってところかな？」

『・・・・・てめえのウィザードは――――』

「それは次期に分かっていくよ、じゃあ、さよなら」

ディスプレイが消えた。その瞬間にゲイボルグも消えていた。

『ちっ、逃したか・・・・・コンベーション使ってもデリートできなかったとは・・・次は仕留めますか』

シルバー・ウィンドは無理矢理ウィンドを説得した。

『じゃあ、本題に移りますか』

シルバー・ウィンドはスバルに歩み寄る。

『てめえ、スバルに近寄るな！』

電波変換を解いたウォーロックはシルバー・ウィンドに立ち塞がる。

『別に殺すわけじゃねえ、どけ』

構わずシルバー・ウィンドは歩く。

『くそ、ビーストスイング！』

ビーストスイングが、シルバー・ウィンドにむかって放たれる。

『・・・な・・・・』

ウォーロックの爪は鎧にすら当たらなかった。透明な何かが、防いでいた。

『やめとけ、おまえの攻撃は俺にあたらねえ。そんなに疑うなら』

シルバー・ウィンドは刀をウォーロックに渡す。

『な、テメェなめて――――』

『これでいいだろ』

ウォーロックは黙り込む。

『ロックマン、起きろ』

スバルはゆっくり眼を開けた。

「・・ぼ、僕は一体・・・」

『聞け、おまえが戦いを続ければおまえの仲間も傷つく。分かるな？』

スバルはゆっくり今の状況を理解していく。

『このままおまえが戦いを続けなければ、おまえや仲間は傷つかない、だから――――』

『エグゼＰＧＭをよこせ』

『・・・てめえ、それマジで言ってんのか？』

ウォーロックがシルバー・ウィンドに言い寄る。

「・・・僕は、みんなをたす――――――」

『自分じゃ何も出来ない甘ちゃんがか？』

その言葉にスバルは傷つく。シルバー・ウィンドはなおも続ける。

『てめえはキズナの力はすごいといった。たしかにそうだ。けどな、おまえ自体はどうだ？弱い、弱すぎる。そんなんでなにができる？おまえ自体が強くなくてなにが人を守るだ？自分も守れねえやつが、かっこつけてんじゃねえよ！』

シルバー・ウィンドの怒声があたりに響く。

『・・おまえがエグゼＰＧＭを渡せば、連中はおまえに手は出さないはずだ。だから、渡せ』

スバルは口を開けようとしない。現実を目の当たりにして、ショックで放心してしまっているのだろう。

『・・・決断はおまえに任せる。答えは5日後、ここで聞く』

ウォーロックの持っていた刀がシルバー・ウィンドに戻っていく。まるで手品のようだった。

「おまえのウィザードとよく話し合え、じゃあな」

シルバー・ウィンドはそういって、風のように消えていった。

『・・・・・スバル』

ウォーロックはかける言葉がなかった。圧倒的実力の差を見せ付けられ、仲間はやられ、闇に心を蝕まれてしまったスバルは、眼が当てられなかった。

「・・・・僕は、どうすれば・・・」

スバルの言葉は、ＷＡＸＡからでてきた救助班の声にかき消された。

「幸い、2人の命に別状はありません」

ヨイリーが長官に言った。

「よかった、無事でなによりだ」

長官はホントによかったとばかりに言った。

「退院はどのくらいだね？」

「3日後、退院はできますが、戦闘はできません」

「そうか・・・・あれほどの敵ではしょうがないか・・・・・・」

「問題はスバルちゃんです。ダークカードを使って相当心が危ないです」

「・・・それは彼の精神力にかかっているな・・・・・・」

「・・・・・はい」

スバルが今後どうなっていくのか、ヨイリーはそれが気が気でなか

った。今の彼らでは、なにも分からない。

第４３話　二択（後書き）

感想お待ちしておりマ～ス♪じゃんじゃん下さい！

第４４話　本当

3日後――――

スバルはあれから元気のない生活を送っていた。闇の力への恐怖、自分の無力さを一度に味わって、気力もなかった。

「スバル君、大丈夫ですか？」

キザマロが言った。スバルは黙り込んでしまっている。

「スバル君、シャキッとしなさい！」

ルナの怒声でもスバルは口を開けない。

「うるせえよ、委員長。俺が眠れねえじゃねえか」

隣のカイが迷惑そうに言った。

「なによ！あなたはクラスメイトが元気がなくても平気なの？」

「しょうがねえじゃねえか、ボッコボコにされたんだろ？へこむよそれは」

カイは仕方なさそうに言う。

「今のは聞き捨てならねえな、カイ」

ゴンタが言った。

「なんで？おまえらはさ、スバルのなんなの？」

「ブラザーだぜ！」

「そうだろうな、でもよ。おまえらはさ、人が話しかけて欲しくないのに話しかけてるのと同じなんだぜ？」

「だって元気になって――――」

「そんなのただの押し付けだろ？人に自分の意見を押し付けてるのと同じだ。そんなのキズナとかブラザーとは言えないと思うぜ？」

みんなは黙り込む。

「じゃあ俺は眠いから寝るわ」

カイは寝てしまった。

スバルはずっと黙り込んでいる。

「じゃあ俺らは帰るぜ、ズバル」

ジャックが言った。他のみんなも帰っていった。

「・・・・ウォーロック」

『なんだ？決心がついたのか？』

「そうじゃない・・・・・僕は戦うべきなのかな?」

スバルは迷っていた。このまま戦うべきか、戦わないべきか。

『・・・・俺はおまえに任せるぜ、どんな答えであろうと』

「・・・・・分かった、僕が決めるよ」

『明後日だからな、まだ時間がある。よく考えておけ』

1人の少年の溜め息が、教室に消えていった。

「眠い・・・・・・」

みんな帰った教室に、カイはいた。

『家帰ろうぜ？もう5時だぜ』

ゲイルが言った。

「そうだな～、さすがに帰らないとヤバイな」

カイは帰りの用意を持って、教室を出ようとする。

「・・・・・盗み聞きは感心しねえな」

教室の入り口に隠れている人物に言う。そして、その気配が消えた。

『・・・・消えたな』

「ああ・・・・・」

『なんか気持ち悪いな』

「気にすんなよ。さ、帰ろうか」

カイとゲイルは帰っていった。なにも気にせず、ただ自分のことを考えて。

「シルバー・ウィンド、やっかいなのがいたもんだな・・・・」

黒ローブの男が言った。

『ああ、あれほどの実力の持ち主がなんでいまごろ・・・・・・・』

「分からないことがありすぎる」

『・・・・やつは多分、俺達の邪魔になる存在だな・・・・』

「まあゆっくり様子をみたほうがいい、なにをやらかすか分からないからね」

『でも、あのウィンドとかいうウィザード、どこかで・・・・』

「・・・・もし邪魔になるなら、デリートするよ」

『ああ、もちろんだ』

あるウェーブロード

「ロックマンは今、戦う気力がない、いまなら、私の脚本が上手くいく。・・・・・フフフフ、ハーハッハッハッハッハー！」

それぞれの思惑、計画が交錯し、物語は進んでいく――――

第４４話　本当（後書き）

難しい議題になってきました。本当の友達、絆。それはなんなんでしょうね？僕個人の考え方で書いていくんですが、ちょっとみなさんと考えがズレている可能性があります。ご了承下さい

最後は、分かりますよね？あれが来ます。あれが。

ではでは、闇の力編、本題に突入で～ス♪

第４５話　リスク

あと一日

スバルは学校に行かなかった。昨日のカイの言葉で、ルナ達もスバルを無理に連れて行こうと思わなかったらしく、おとなしく学校に行った。

「どうしようかー」

ベッドに寝転がり、天上を見ながらスバルは言った。

「・・・・僕が強くなんなきゃいけないのか」

強くなるとはどういうことだろうか。筋トレすればいいのか、はたまたもっと別のものか。

（・・・シルバー・ウィンドはなにを言いたかったんだろう）

スバルは考える。けれど答えは見つからない。

「強くなるって、なんだろう」

漠然とした疑問は、誰も答えてはくれなかった。

闇の力が恐い。そしてそれを使う自分も恐い。

「・・・・あれはもう使いたくないな」

スバルはただ、答えを探し求める

「カイ君、ちょっといいかしら？」

ルナがカイに話しかける。

「べつにいいけど、なに？」

「あなたの思うブラザーってなに？」

単刀直入とはまさにこのことだ。ルナはカイに言い寄る。

「・・・・・その友達の気持ちを察し、その友達をよい方向に導こ

うとする人のこと」

「それなら昨日のことだってそうだわ、スバル君をよい方向に導こうとしているもの」

ルナは食い下がる。

「じゃあ、なんであいつは黙ってるんだ？」

「それは、ボコボコに倒され――――」

「違うよ、あいつは自分がどうすればいいか分からなくて、それを考えているからだ。だからあんた達の声も届かない。違うか？」

ルナにはカイの言葉が悔しいが理解できた。

「自分を見つめ直しているんだ、他人の意見はあんま役にたたないしな」

カイは忘れた宿題をやりながら言った。

「あんた、１年間一緒にいるのに、なんでこんなに分からないんだ？」

カイの言葉がルナを締め付ける。

「・・・あんたらは、スバルも入れてキズナに頼りすぎている。それは他力本願と一緒だと俺は思う。人間的に成長して、初めてキズナが生かされてくる。・・・・俺の考えは以上だ」

「・・・なんでスバル君のことをそんなに分かるの？」

「・・・・・・・勘」

そんなものに説得しかけた自分は馬鹿だと、ルナは思った。

「そんなことで――――」

「じゃあ、あんたはどう思うんだ」

そう言われると分からない。カイが合っていると思えてくる。

「まあ、結局の所、あいつに聞かなきゃ分からないってこと」

カイはそう締めくくった。

夕方

「分からない・・・・・」

スバルは答えを見つけられずにいた。

『なあ、スバル』

「なに？ウォーロック」

『おまえは、たしかにこの１年間で強くなったと思う』

「どうしたの急に」

『いいから聞け。でだな、おまえはビビってる』

「ダークカードに？」

『違う、戦いにだ』

戦いに恐がっている？自分はそうは思っているつもりはない。

『負けたくない、だからおまえはリスクのない戦いをしようとする』

「だってそうでしょ？リスクが多ければそれだけ失敗する確率が――――」

『そこだ、おまえは失敗を恐れている』

部屋を静寂が支配する。

『勝ちたかったらな、それだけのリスクを背負うべきだと俺は思うぜ？』

「どういうこと？」

『覚悟を決めろ』

それはスバルの心に刺さる言葉だった。

「・・・・・・・・・死ぬ覚悟を？」

『違う、勝つ覚悟をだ。なにがなんでも勝つ。そういう覚悟を持ってことだ』

スバルはしばしの間考える。

「・・・・・分からないよ、僕には」

スバルには分からなかった。死というリスクを持ってまで戦いたくはなかった。

スバルは死を恐れるようになったと、ウォーロックは思った。いくつもの激戦の中、スバルは生き抜いてきた。けれど今回は、圧倒的実力を持った敵との戦いだ。その戦いでスバルは死を連想したのだろう。

前までは友達のためと、無茶をしてきた。けど今は違う。自分へのリスクを減らして勝ちたいと思っている。だから、勝てない。

（スバル、おまえは変わったな）

人は変わっていくものだ。それはいくつもの戦いでウォーロックは理解した。

（おまえの覚悟は、明日分かるんだな）

そう、全ては明日分かる――――

第４５話　リスク（後書き）

難しい議題です。リスク。ようするになにかを得るにはなにかを払わなければいけないってことです。なにかの漫画みたいですね（笑）

では感想お待ちしておりマ～ス♪

第４６話　客

今日は土曜日だった。けれど授業参観があるのでみんなは学校に行っていた。スバルを除いて。

『決まったか？スバル』

「・・・・一応ね」

その言葉に元気はなかった。不安で一杯と言った感じだ。

『・・・・で？いつ行くんだ？』

「１０時くらいかな？だいたいその時間が丁度いいと思うし」

『・・分かった』

スバルの答えはここでは聞かなかった。ここで聞いてしまったら、なにかが壊れてしまいそうな、そんな感じがしたから。

国語の授業、眠いと感じてしまうのは自分の弱さだろうか。俺は今寝ようとしている。起こしてくれるはずのスバルはいなくて、誰も俺を起こそうとはしない。

「ほら、カイ君。起きなさい！」

先生の声でやっと俺は起きることができた。なんともかっこ悪い状況だ。

時計は9時37分と、あと3分で授業が終わる。

（早くおわんね～かな～。眠い）

俺は1人でそう思っていた。けれどそう思っていると時計の針は進まない。

（進め～、早く終われ～。俺暇じゃねえんだからよ）

俺の思いは知ってか知らずか、時計の針は進まない。

（あいつ来るまでに間に合うかな～）

「もうすぐだね、ＷＡＸＡ」

もうすぐＷＡＸＡに着くはずだ。

「・・・・来ているのかな、シルバー・ウィンド」

不確定だが、スバルはシルバー・ウィンドはカイだと思った。あの口調、背、性格。カイにそっくりであった。

「なら、今は授業参観だから来ないかな？」

周りを見渡すが誰１人来る気配はない。

「やっぱりハヤテ君なのかな～」

スバルの呟きは、周りに響く。

溜め息をつくスバル。友達であった者が敵だったとは、残念である。

「フフフ、そんな溜め息ばかりついていては、私の脚本が台無しですよ」

ふいに聞いたことのある声が聞こえた。それは、以前倒したことのある

「ファントム・ブラック！」

「お久しぶりです、星河スバル、いや、ロックマン」

ファントム・ブラックは地面に着陸した。

『てめぇ、なんでここに！』

「簡単ですよ、あなた達に復習をするためです」

彼はスバルに3度敗れている。彼の誇り（プライド）をズタズタに引き裂いたのには違いない。

『てめぇ、なんか、今の俺達には敵わねえよ！』

「そうですかね？私も使えるようになったんですよ、ノイズを」

『なに！？』

ノイズを操れるようになったとなれば、ハイドは相当強くなっているはずだ。

「果たして、戦意喪失のスバル君と、ノイズを操れるようになった私、どちらが強いですかね」

今の自分では分からない。戦うのが恐い。戦ったらまたダークカードがでてきそうで。

「・・・・・ではこちらから行きますよ！ファントムクロー！」

ハイドの胸から黒い巨大な手が出てくる。

「くっ・・・・・・・」

右に回避して隙を狙う。けれど隙がない。

「ステッキソード！」

一気に詰め寄ってハイドは杖を振るう。

それはスバルにかすった。

「どうしました？もう戦えないのですか？」

『スバル、戦え！』

戦えない、今の自分は恐がっている。死というリスクも背負えない。

だから、戦えない

『やばいな・・・・』

シルバー・ウィンドはウェーブロードから戦いを見ていた。

『あれじゃ勝てないな、完全にビビッちまってる』

スバルの戦い、表情を見れば簡単に分かった。

『助太刀してぇが、無理だしな。あいつのためにもなんねえ。まあ、死にそうになったら助けるけどよ』

『覚悟を決めろ、闇の力を使う覚悟を。そして、勝つ覚悟をな』

第４６話　客（後書き）

招いていない客が来ましたね。スバルの選択。シルバー・ウィンドの最後の言葉。勘がいい人は分かりますよね？

では朝からの更新ですが、何話更新するか分かりません。神殺しの咎を負う者も更新しなきゃいけないので。そちらもよろしくお願いします！感想も下さい！

第47話　答え

「カイ君、ちょっといい？」

ルナがカイに言った。

「え？今はちょっとム――――」

「いいから、話を聞きなさい」

質問から命令に変わったルナの言葉。

「・・・・なに？昨日の続き？」

「まあ、そうね」

本当に迷惑そうな顔をカイはする。

「メンド・・・・・・」

「あなたは、ブラザーというのはその友達をよい方向に導くといったわね？」

「はいはい、そうですね」

うんざりしたようにカイは言った。

「じゃあ、その答えを教えちゃいけないの？」

「は？アンタは馬鹿ですか？」

「なにが？答えを教えちゃ悪いの？」

「・・・あんまりヒント教えるのはどうかと思うけど、教えてやるよ」

カイが机からプリントを取り出す。

「これはなに？」

「・・・・・昨日の宿題よ」

「そう、正解だ」

カイがそうは思っていないように言った。

「じゃあ、あんたがこれやって？」

「・・・・・・は？」

訳が分からないとばかりにルナが言った。

「別にあんたがやってもバレなきゃいいでしょ？」

「駄目よ、それじゃあなたのために――――」

「分かってんじゃん、じゃあこれで終わり」

カイが話を中断する。

「待ちなさい！まだ話が――――」

「自分でもう分かるだろ？」

ルナは黙る。考える。そして理解する。

「・・・私たちはスバル君の宿題をやっているのと同じってこと？」

「そう。人は自分で考えたほうがその重みを知る。今のアンタもそうだろう？」

カイが言葉を続ける。

「もしその答えが間違っているなら、それを周りのやつが教えればいい。テストで言う丸付けだ」

さっき取り出したプリントをカイはまた取り出す。

「テストで答え教えちゃ意味ないよな？俺が言いたいのはそういうこと」

「・・・そしてまた人は成長していくって言いたいの？」

「そうだ。何事も人生は試行錯誤。なにかをやらなきゃ始まらない」

溜め息をついてカイは言った。やっとこれで説明が終わったと言わんばかりだ。

「・・・リスクを犯して始めて人間は進んでいく。スバルはまだそ

れが分かっていない」

「・・・・・分かったわ、教えてくれてありがとう」

「どうも、じゃあおれは――――」

「宿題をやってからね？」

カイはそうして宿題が終わらず、学校に放課後まで居残ることになる。

「ぐはっ！」

スバルはファントムクローによって体を締め付けられている。

「フフフ、どうしましたか？これで終わりですか？」

為す術もなくスバルは締め上げられる。

『スバル、ダークカードだ！』

ふいにウォーロックが言った。

『この状況じゃ使うしかねえ！』

「・・・それは駄目だよ、ウォーロック」

スバルは苦し紛れに言った。

「闇の力は僕を飲み込もうとする、だから・・・・・あ！」

「ゴチャゴチャとうるさい！」

ハイドはスバルを壁に投げつける。

「がはっ！」

『おい、大丈夫か、スバル！』

「・・・・・ウォーロック、分かったよ」

『なにがだ？』

「闇は僕を飲み込もうとする、だったら――――」

「――――その闇を僕が飲みこむ！」

『・・・・ハハハ！スバル、おまえにしては突拍子もないな！』

ウォーロックが豪快に笑う。

『だったら、この脚本野朗とシルバー・ウィンドに示してやろうぜ、俺らの答え、覚悟を！』

「うん！シルバー・ウィンド、これが僕の答えだ！」

ダークカードを転送する。

「カオスユニゾン！」

闇の力が、スバルを包む――――

第４７話　答え（後書き）

どうでしたか?例えが分かりにくかったらすみません。

スバルの覚悟は次話で明らかになります。やっとバトルです!難しいこと考えなくてすむ～。

ＰＶが２００００いきました!ありがとうございます!これからもがんばって生きたいと思います!

カイは宿題終わりません。ずっと学校で居残りです。かわいそうに（自業自得）

では、感想等もよろしくお願いします!

第４８話　覚悟

シルバー・ウィンドは言った。

『・・・・じゃあ取引はパーか』

残念そうに言った。けれどそれは期待も持ち合わせている物だ。

『あいつの計画は最初からこうなることを見越してのことだったのか？』

その質問は、とうに消えていった人物へのものだった。

『とんだ骨折り損だぜ、こっちは』

毒づくシルバー・ウィンド。

『・・・・あいつはそこまで連中を倒すために計画を練ったのか。恐ろしいね・・・・・俺らは仲間外れにしたくせによ』

『さあ、ロックマン。おまえの覚悟を見せてもらうぜ』

「ブルースカオス！」

スバルの体はブルースソウルとほぼ同じだった。違うのは、色が紫色主体になったこと。

「そ、それが闇の力か」

ハイドは驚いたように言った。

「そうだ、闇を飲み込んで得た新しい力、カオスユニゾンだ！」

スバルの出した答え、それは、リスクを犯しても、仲間を助けるということ。闇の力を正義のために使うこと。そして、もう負けないという覚悟。

「ふさけるな！私は、負けん！」

ハイドが突っ込んでくる。

「ステッキソード！」

「カオスシールド！」

スバルの左手から黒い盾が現れ、スバルの身を守る。

「な！・・・・・」

「風魔――――」

「え？」

「――――烈風刃！」

突如、ハイドの体を一瞬で5度切り裂く、そしてそのあと、風の刃がハイドを襲う。

「ぐわあああああああ！」

ハイドは後ろに吹っ飛んでいく。けれど、まだ電波変換は解けていない。

『しぶといな・・・・』

「と、当然だ、私は、ロックマンを倒すまで立ち上がる！」

ハイドは立ち上がった。それは執念で立っているとしか言いようがない。

『スバル、次で決めるぞ』

「・・・うん」

「まだ勝負は終わっていない！ファントム――――」

スバルの剣に闇の力が溜まっていく。そして

「ＥＦＢ（エグゼフォースビッタボンネスクロス）　暗黒の十字架！」

スバルはハイドを十字に切り伏せた。

「ぐはあああ！私は、まだ・・・・・」

ハイドは電波変換が解け、地面に倒れた。

『・・・やったな』

「うん・・・・・シルバー・ウィンド、居るんでしょう？」

そうスバルは言った。どこにいるかも分からない相手に向かって。

『・・・バレてたか』

どこからともなくシルバー・ウィンドは現れた。

「・・・きみはハヤテ君なの？」

『違う、そんなやつじゃない』

「僕達の味方なの？」

『それも違う、俺達の目的は、エグゼＰＧＭと、ガイアをぶっ潰すことだ』

「・・・・・・なんで？」

スバルには分からなかった。ガイアを倒す理由が。

『そんなことおまえに話す意味がない・・・・・・で、いいんだな？プログラムを渡さなくても』

「うん、君に渡す意味がないから」

喧嘩を売ったスバルを見て、シルバー・ウィンドは笑っている。いや、顔が見えないが笑いをこらえているように見える。

『そうか、まあそれでも俺はいいけどね』

また意味の分からないことを言うシルバー・ウィンド。

『じゃあ、その覚悟を貫き通せよ、必ず、なにがあっても』

「きみに言われなくてもそうするつもりだよ」

そしてシルバー・ウィンドは、風のように消えていった。

「誰なんだろう、ホントに・・・・」

シルバー・ウィンドの正体が分からない。また会ってから考えてみると、カイではない気がした。

『考えてもしょうがないだろ?終わったんだからよ』

「そうだね、今から学校行こうか」

『行けばいいんじゃねえか?どっちでも俺は構わないぜ』

「・・じゃあ、行こう!」

スバルはハイドをサテラポリスに預けて、学校に向かった。

「終わんねえ～」

カイは昼休みでも宿題をやっていた。

「くそ、こうなるならやっとけばよかった・・・・」

そんな愚痴も、今は役にはたたない。

「大変そうだね、カイ君」

カイに話しかけてきたのは、ギンガだった。

「大変だよ、ホント」

カイはうんざりしたように言った。

「がんばってね、きみの宿題」

そういってギンガは去っていった。

「宿題・・・・か」

カイの呟きは、誰にも聞かれずに消えていった。

第４８話　覚悟（後書き）

感想お待ちしておりマ～ス♪

活動報告にも書きましたが、平日は１話、土日は２話にさせてもらいます。理由は活動報告をお読み下さい。

これからもよろしくお願いします

ユニーク３０００突破！

第４９話　仲

「あ～、授業終わっちゃったか～」

スバルは教室を見て言った。

「遅いな～、おまえは」

カイが妙にゆっくり言った。

「ハヤテ君、君、今日ずっと学校にいた？」

「いたよ」

「トイレにもいってない？」

「ずっと教室にいたぜ。委員長とゴンタは知ってると思うけど」

カイは言った。やはりシルバー・ウィンドではない。

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、なんでもない」

適当にごまかす。それをカイは理解した。けれど口には出さなかった。

「で、あなたは答えは決まったの？」

ルナがスバルに聞いた。

「うん、決まったよ」

「そう、良かったわね」

ルナは素っ気なく言った。

「まあこれでウジ虫にならなくて済むな」

カイがキツく言った。

「・・・・・ウジ虫みたいだった？」

「ああ、隣に居るから教科書の角でぶん殴ろうかと思ったよ」

それはいくらなんでも言いすぎだろう。

「まあ、良かったじゃねえか。スバルが元に戻って」

ゴンタが言った。

「うん、ありがとうゴンタ」

素直にお礼をスバルは言った。

そんな時、スバルのハンターから着信音が鳴った。

多分言ったらクラスのみんなに睨まれるので声を殺していった。

「（ミソラちゃんだ・・・・しかもこの5日間無視してた・・・・）」

『（おれが音を消してたんだ、すまねえ・・・・）』

まあ自分が暗くなっていたのでウォーロックが気を利かして着信音を消しておいてくれたのだろう。

「見せてみろ」

スバルのハンターをカイが奪う。

「あ！」

「・・・・・はい、返すよ」

スバルにハンターを返す。

「もう読んだの？」

「軽くね、べつに全部知りたかったわけじゃないし」

「じゃあ、なにが知りたかったの？」

「お二人の仲を」

スバルの顔が少し赤くなる。

「え？」

「まあ仲がいいことは分かったよ」

カイは空を見ながら言った。その眼はなにかを見透かしているような眼に見えた。

「じゃあ、俺はまた居残りあるから。先帰ってて」

「分かった、ハヤテ君もがんばってね」

そうスバルは言って、帰っていった。

「・・・なにが仕事だ」

ミソラからスバルのメールにはこういう一文が書いてあった。

仕事で戦いにいけなかったけど、大丈夫？

別になんともない一文かも知れない。けれどカイの捉え方は違った。

「本当にスバルのことを心配してるなら――――」

「――――仕事を一時的にでも休むべきじゃないのか？」

スバルのことを本当に思っているのか、カイはそれが疑問で仕方がなかった。

「・・・・・・あ～、うぜ～」

カイは宿題を見てそう言った。彼の声は、１人しか居ない教室に響き渡った。

「今回のことでＷＡＸＡも分かったな」

少年は言った。

『戦力の少なさか？』

「ああ、これでロックマン１人でしか戦えない状況に陥ったＷＡＸＡは、ある科学者を呼ぶ」

『おい、それってまさか――――』

「そのまさかだよ」

少年の考えはウィンドにも伝わる。

『けどよ、あまりにもリスクがありすぎるぜ？いくらＷＡＸＡでもあれは呼ばないだろう』

「呼ぶしかないんだよ。多分その科学者はあのヨイリーをも上回るほどの実力、ヨイリー自身が推薦するだろうしね」

少年は確信していた。必ずその科学者を呼ぶと。

『そこまでするか？』

「遅かれ早かれするね。ロックマンの覚醒次第で」

『・・・・・・もうすぐじゃねえか』

「ああ、だからこっちもそれを頭に入れとかなきゃいけない」

少年は言った。もう少しで、計画は山場を迎える。自分にとっても、敵にとっても、あいつにとっても――

「・・・・招いていない客もあと1人、2人来そうな風だし、まだまだ分からないな」

少年の呟きは、風によってどこかに運ばれていった――

第４９話　仲（後書き）

ユニーク３０００突破！ありがとうございます！

ではこれからもよろしくお願いします！まあ明日の更新楽しみにしてください！

第５０話　一手

「ロックマンも精神的に強くなったか・・・・・」

黒ローブの男が言った。

『ああ、これは予想外だったな・・・・・』

ウィザードは驚いたように言った。その予想外は、彼らにとって悪い方向の予想外だ。

「シルバー・ウィンド、あいつはなにがしたいんだ？」

『分かってるのは、俺達の計画の邪魔をしているってことだ』

「けど僕達じゃ目立ちすぎる。それにまだ早い。ロックマンが覚醒してからだ」

男は焦っていた。計画が崩れ始めている。

『その役目、私が引き受けましょう』

「ゲイボルグか・・・・・おまえにできるの？」

ゲイボルグは以前負けている。それも圧倒的差で。

『前はあの力を抑えていました、だから――――』

「おまえは今は用がない、下がれ」

ゲイボルグはただ黙って、去っていた。

『・・・あいつは後から必要になるからな』

「あいつが必要になる事態にはなって欲しくないけどね」

男は言った。

『次はあいつか・・・・・勝てるか?』

「捨て駒に勝ちを期待するのはどうかと思うよ?」

彼らもまた次の一手を打つ――――

「シドウちゃん、相談があるのよ」

「なんですか博士？」

ヨイリーはいいにくそうに言った。

「私はＷＡＸＡには少し戦力が足りないと思うわ」

「・・・それは俺じゃ力不足ってことですか？」

暁は動揺した。けれどそれもまた事実だ。

「そういうことじゃないわ、あなたたちが怪我をしたら、代わりがいないってことよ」

ヨイリーは説明した。

「それでね、強い仲間を考えてみたのよ、そしたら、１人しか浮かばなかったのよ」

「誰です？」

「あなたも知っている人物よ」

暁は考える。けれど思い当たらなかった。

「分かりません、博士」

「アシッドちゃん、あなたなら分かるんじゃない？」

『・・・・・博士、私の考えが当たっているなら、私は反対します』

アシッドはきっぱり言った。

「・・・・・でもね、他に思い浮かばないのよ」

「だから誰ですか？」

『・・・・シドウ、あなたがメテオＧの事件で最後に関わった者です』

最後に関わった人物。それは、暁と一緒に爆発をしようとした――

――

「ジョーカー！」

３人は黙り込んだ。

「・・・博士、でもなんでジョーカーなんですか？」

「それにはもう１つの理由があるわ、シドウちゃん」

ヨイリーが１つ咳払いをして話す。

「・・・もし、スバルちゃんのエグゼＰＧＭにシドウちゃんの予想が当たっていた場合、もう１つの力が必要だと思うの」

「たしかにそうですね、まあ突拍子もない予想ですから・・・」

「けどね、エグゼＰＧＭと掛け合わせたら強力になるものなのよ。

それを作る技術を持っている科学者は、私は1人しか知らないわ」

「ヨイリー博士ではなく？」

「ええ、実力だけなら彼のほうが上だと思うわ」

「彼・・・・・？」

暁は考え込む。そして彼は1つの、思い出したくない名前を思いつく。

「まさか！」

『あれをですか！？』

「ええ、――――」

「――キングを再構築しようと思うの」

ガイアとＷＡＸＡの一手。そしてキャストは揃っていく――

第５０話　一手（後書き）

記念すべき５０話が短い！ごめんなさい～。キリが悪いので。

次から新たな章です。まあ、ストーリーに関係ありませんけどね・・・・１０話くらい行きそうですね。マジで。まあ、期待してもらえると嬉しいです。

感想くださいね～。読んでくれるのはとても嬉しいですが、感想くれるととてつもなく嬉しいです！そちらもよろしくお願いします！

番外編　baseball

月曜日、スバル達はいつも通り・・・・・じゃなく登校した。
それはなぜか。それは今日の1日の授業にある。1時間目、体育。
2時間目、同じく体育。3時間目、なんだかんだで体育。4時間目、
偶然体育。5時間目、先生の気まぐれで体育。6時間目、生徒の希
望で体育。

そう、今日はオール体育の日なのだ!全クラスが体育のこの日、
男達の戦いが始まった。

それは

「球技大会だ～!!!!!」

熱血な体育の先生が大声で叫んだ。

球技大会、それはいろいろあって全授業が体育の時に行われる大
会。

球技大会、それは男が血と汗と涙を流す大会。

球技大会、それは全力を出し、最後に燃え尽きる大会。

この3つが揃ってはじめて球技大会といえる。

「今日はがんばるぞ～!」

ゴンタが校庭で叫んだ。

「「「「「「おー！」」」」」」

それに応じて野球組も叫ぶ。

球技大会は、サッカーと野球に分かれている。スバル達は野球組である。

そんな球技大会に、消極的な存在が1人。

「眠い～」

カイである。彼は眠そうに言った。

「カイ、ちゃんと今日は打てよ？」

ジャックが言う。

「打てたらな」

カイが素っ気なく言う。打つ気があるとは思えない。

そして開会式が始まった。

「え～、では健闘を祈ります」

校長が手短に言った。

「今日は熱くなろうぜ、みんな！」

熱血体育先生がそういうのと同時に、生徒は

「当ったり前よ～！！！」

と、教師にむかって言って悪い言葉を発する。けれど熱血先生は、

「元気がよろしい！」

といってなにも咎めなかった。

（恐るべし、球技大会！）

今日は男子が燃えている。様子がみんなおかしい。平静を保っているのはカイと自分(スバル)だけ。それとも自分達がおかしいのか。

「では、早速試合に入りたいと思います。各自、準備体操をしっかりしてください」

保険の先生の言葉で、生徒は準備体操をし始める。眼が恐い。

とは言っても、一年生から順にやっていくので6年生は暇だ。

『暇だ～』

ウォーロックが呟いた。周りを見てみると、みんなバッティングの練習をしているではないか。

「どんだけ勝ちたいんだろう・・・・」

スバルは心の底からそう思った。

「みんながんばるね～」

超非協力的なカイが言った。

「はは、カイ君はやらないの？」

「ただバット振ればいいんだろう？普通に準備体操すればいいじゃねえか。普段使ってねえ筋肉使って、試合前から筋肉痛になるなんてただの馬鹿じゃね？」

明らかに馬鹿にしている口調だ。

「そ、そこまで言わなくても・・・」

「まあ、俺は打ちたいときに打つよ」

打たないだろう、というツッコミはやめておいた。彼自身そのつもりなのだから。

「おっ、打った」

一年生の試合を見て言った。ボールは高く飛び・・・アウト。

「悲しいね～、打ってもアウトって」

カイは虚しそうに言った。

それから何分もたって、6年生の番になった。

「ぜってぇー勝つぞ！」

リーダーのゴンタが円陣を組み、叫んだ。

「「「「「おー！」」」」」

そして試合が始まった。こっちの先攻だ。

1番　ジャック

「ぜってぇ～かっ飛ばしてやる！」

ちなみに、野球組には野球を習っている人はなれない。強制的にサッカーになる。

なので別に打てない相手ではない。

一投目　ジャックを様子を見た。　ボール

2投目　ジャックは思いっきりバットを振った。空振り。

3投目

「いけ～！」

ジャックはバットにボールを当てた。そのボールは高く舞った。・・・・・・フライ。

1アウト。幸先が悪い。

「ジャーック！ちゃんとしなさい！」

ルナの怒声が校庭に響く。

2番　ツカサ

1投目　まさかのセーフティバント。

相手は予想が外れ、送球が遅れた。一死一塁。

「よし、よくやったツカサ！」

ゴンタが言った。

3番　スバル

1投目　空振り

2投目　空振り

簡単にスバルは追い詰められた。

3投目　ファール　粘るスバル。

そして４投目　奇跡が起きた。スバルはバットを振った。ボールには当たらなかった。けれど思い切り振りすぎたバットは、一周した。そして偶然ボールがバットの先に当たった。

ボールはセンターに飛んだ。

スバルは走る。

セーフ。一死　一、二塁。

そして４番　ゴンタ

一投目からかっ飛ばした。　ヒット

「よっしゃー！」

ゴンタは叫ぶ。相当嬉しかったのであろう。

満塁のこのチャンス。バッターはカイ――――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ（後書き）

さあ、始まりました。まあつまらないと思いますが読んでください。

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？

超非協力的なカイが次のバッター。満塁とはチャンスであればピンチにもなる。最悪トリプルプレーも考えられる。

「どうしよっか～。打つか、打たないか・・・・」

カイは呟いている。

そんな時、アナウンスが流れる。

「え～、１つ言うのを忘れていたことありました」

一同は静かに聞いている。

「この大会で一番活躍した選手は、３月まで宿題がチャラになります」

カイの口が少しずつ三日月に吊り上がっていく。

「では、以上です」

カイの表情がよく分からない。笑っている、のだろう。いや、嬉しすぎてどうすればいいか分からないという感じだ。

カイがバットを構えた。眼が本気だ。さっきまでのやる気のなさはどこにいったのか、

１投目　相手も打たれなくないので、際どいところを投げる。ボー

ル。

２投目　同じくボール

３投目　カイが振らずストライク

４投目　ボール　カイは全く動じない。

５投目　ストライク

次の投球で全てが決まる。

６投目　相手が選んだのは、ボール、。けれどカイは振った。あたらない。そう思ったとき、カイは持ちてをギリギリまで下にした。それでリーチを伸ばしたのだ。

カキーン　と、いい音が鳴って、球が空を一直線に飛んでいった。そして球は、民家に落ちていった。

満塁ホームラン。４対０。一回表でこのリードなら勝ちは確実だろう。

「せーの、ナイバッチー！」

周りの歓声に包まれながら、カイはホームを踏んだ。

「カイ君、打たないんじゃなかったの？」

「いつ俺がそんなこと言った？打てたら打つっていっただけだよ」

カイが満面の笑みでそういった。それだけ宿題をチャラにしたいのだろう。

6番目　キザマロ

空振り3振。

まあ6番目以降はあまり打率がいい人がいないので、まあしょうがないだろう。

7番目のニシヒロ君もアウト。攻守交代だ。言い忘れていたが、この大会は5回裏までとなっている。あと4回守れば終わり。

さあ、ここで守備の配置を言っておこう。

ピッチャーはジャック。キャッチャーはカイ。ファーストはゴンタ。セカンドはサカエグチ。ショートはキザマロ。サードはタジマ。右翼手（ライト）はニシヒロ。中堅手（センター）はスバル。左翼手（レフト）はツカサ。

この無敵（？）な陣形で勝ちに行く、6－Bナインズ！

相手の1番とジャックがにらみ合っている。カイがサインを出す。

（ハヤテ君って野球習ってたの？）

慣れた手でミットを構えている。

一投目、ジャック渾身のストレート。ストライク。

ジャックはストライクを取れたことに喜んでいた。さっき打てなかったからであろう。

カイはただ無表情にジャックにボールを送球する。ド真ん中のストレートだったので、相手を試したのだろうか。

2投目　やや右のチェンジアップ。打たれたが、内野を越えず、キザマロがボールを取って、アウト。

（次はどういうサインだすかな～）

カイは考えた。ジャックが投げられる球種はストレートとチェンジアップだけ。いつ打たれてもおかしくない。

（かといって、無理にストレート投げさせると肩痛めるしな）

しょうがないので打たれてもいいことにした。４点リードしているのだから、1、2点は相手にやってもいい。

一死ランナー無し。

2番のバッターは別に打つ気満々というわけでもなく、ただジャックを見ていた。

1投目　ストライクギリギリのストレート。バッターは無理して打った。フライ。

2死ランナー無し。圧倒的にコチラが有利だ。

3番のバッターは。細身で、打ってもとばなそうだ。

1投目　ストレート　ストライク

2投目　チェンジアップ　ストライク。

3投目　チェンジアップのサインを出したが、ジャックが首を振った。しょうがなくストレートに変更。ストライク。

「よっしゃー！」

ジャックが雄たけびを上げる。

（あいつ、今日持つのか？）

カイの疑問は、声にならずに消えていった。

一方女子は、がんばってる男子に料理を作っている。

「むむむ・・・・・」

ルナは考え込んでいる。そう、誰に料理を作るかで迷っている。

「う〜ん・・・・・」

これは重要なことだ。相手によって料理は変わってくる。

ルナの頭にスバルとジャックの顔が浮かんでくる。

「・・・・・私はどっちに作れば・・」

ルナの思いは、はたしてどちらに向かうのか――――

２回表

８番　タジマ君。

タジマ君は、スバル達とはあまり関わりがないが、明るい性格で誰にでも好かれる性格だ。運動神経が抜群で、野球でも活躍してくれるだろう。

一投目　ボール球は打たなかった。ボール。

２投目　ド真ん中のストレート。これを待ってましたとばかりに打つ。２ベースヒットだ。

無死二塁。

９番　サカエグチ君。

人当たりが良く気配りを忘れない、いい人だ。中学から野球をやるつもりだと言っていた。その実力やいかに。

１投目　ここで堅実な犠牲バント！タジマ君は三塁へ向かう。

一死三塁

ここでリベンジに燃えるジャックの登場だ。

「今度はぜってぇ～打つ！」

1投目　打てる球だった。ジャックは思いっきりバットを振った。けれどファール。

その時、ジャックの様子がおかしくなった。顔が険しく、苦しんでいた。

「大丈夫?ジャック」

スバルは心配そうに聞いた。

「ああ、大丈夫だよ・・・」

ジャックは苦しそうだったが、そう言った。

カイはジャックを、ただ横目で見ていた。

2投目　ジャックは振った。けれどよく見れば片手だけだった。右手は触れているか触れていないかという、フリをしているだけだった。

もちろん片手で打った球など意味がない。アウト。

二死三塁

2番　ツカサ。ちなみにツカサ自身の身体能力はそこまで高くない。

1投目　ファール。

2投目　ファール。

追い詰められたツカサ。

（やばいな）

ツカサは内心そう思った。このチャンスはなんとしても点にしておきたい。そして、このチャンスを物にできなければ、今後の自分に関わる。

3投目　ツカサの思いを乗せ、バットは球を飛ばした。

「お～、いいとこ打ったな～」

カイが感心したように言った。

球はセンターに飛んでいった。中堅手（センター）は球を取れなかった。

5対0。二死ランナー無しという状況になった。

3番　スバル

2度目の奇跡は起こるのか？

1投目　ストライク。様子を見た。

2投目　ファール。

3投目　ストライク

簡単にスバルは打ち取られた。

少しスバルはへこんでいるように見えた。

そして2回目裏が始まる――――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？（後書き）

いつもより少し長いです。この章は一話一話長いです。

感想よろしくお願いします

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？

４番　相手のバッターはいかにもパワーヒッターだった。体つきがよく、表情が強そうな顔をしていた。

「・・・・クソ！」

ジャックは毒づいていた。見れば右手を押さえている。

けれどカイは黙っていた。彼も自分で答えを出すべきだと考えたからだ。

１投目　ジャックのチェンジアップ。けれどそれはいとも簡単に打たれた。

ホームラン。このいい状況を打破する展開になった。

「ちくしょ～・・・・」

ジャックは悔しがっていた。

（・・・・さあ、どうする？）

自分の怪我の所為でジャックは打たれた。ここで退くか、続行するか。

（おれはよく分かんないけど、遊撃隊って、特攻でもするの？）

普通なら退く。これは戦場の基本である。無論、カイは戦場にいっ

たことなどないが。スバル達の活躍をテレビなどで聞いてみると、退いてもいいのに退かない。これが疑問だった。

（・・・勘違いしてるな、キズナを）

勇気と無謀は違う。たまにそんな言葉を聞く。勇気は自分が出来る範囲で、無謀は出来ない範囲のことだと俺は教わった。けれど俺には変わらない気がする。成功すれば勇気。失敗すれば無謀。俺はそう思う。

まあ今回はそんなことは置いといて、仲間のために退かない。これも一種の手だろう。けれど、そんなラッキーが続くのだろうか。この先それで死なずに済むのか。

（・・・退かせるべきか・・・・）

こんなつまらないことで腕でも怪我をされてみろ、こっちの罪悪感が半端じゃない。そして俺はバッテリーを組んでいる。責任は俺にもある。

（次打たれたら交代しよう）

そう俺は決めた。

5番　バッターは小さかった。けれど今のジャックの状況では打たれてもおかしくない。

1投目　チェンジアップ。もうチェンジアップしか投げられない。ギリギリ、ストライク。

2投目　そして打たれた。幸いライトフライだった。

「審判、タイム」

カイはそういってジャックに歩み寄る。

「・・・なんだ?」

苦しそうな顔をするジャック。

「交代。おまえ、ライトになれ」

一瞬ジャックの時間が止まった。

「な、なんで?」

「おまえは分かってないのか?」

「打たれたからか?そんなのこの次――――」

「違う、腕がもう駄目だろ？」

カイはジャックの右腕を見る。かすかに腫れている。

「だ、大丈夫だって」

「・・・おまえ、この先の戦いでもこんな無茶するのか？」

カイにそんなことを言われるとは思わなかったらしく、ジャックは驚いている。

「こんな軽いのどうって――――」

「今は無茶するな、別に負けちゃ悪いって試合じゃねぇんだ。頭冷やせ」

そういってカイはジャックの持っていたボールを奪う。

「審判、配置変更。俺ピッチャー、ゴンタがキャッチャー。ニシヒロがファースト。ライトがジャック」

そして配置が変更された。

「ゴンタ、ちゃんと取れよ？」

「取ってやるぜ、いくらでもな！」

強気でゴンタが言った。

ジャックはやはり少し落ち込んでいた。カイにキツく言われたからだろう。

まずピッチング練習。カイは今更だが右利き。

「ゴンタ、サインいらねえ。俺が投げたの取れ」

「おう、その方が俺は楽でいいぜ」

一投目　軽いチェンジアップ。

2投目　右側に曲がりながら落ちた。どんな球種だろう。スバルには分からなかった。

「あれ、シンカーじゃね？」

そんなささやく声が聞こえた。

3投目　左側に曲がりながら落ちた。

「なんで初心者がカーブ投げられるんだよ！」

今度は怒鳴り声が聞こえた。たしかに疑問だ。

そして試合再開

6番　まあがたいは良くも悪くもないという感じだ。

1投目　球がまっすぐ進み、バッターがバットを振った。けれど球はバッターの近くでストンと落ちて、空振り。フォークというやつ

だろう。

（次は、あれだな）

２投目　カイは容赦なく変化球を投げる。シンカー。バッターはそんなの打てるわけもなく、ストライク。

３投目　カイのストレート。インハイで、バッターは振ってしまった。軽く球は宙を舞ったが、タジマ君が取ってアウト。

続く7番バッターも抑えて二死ランナー無し。

８番バッター　キザマロよりは大きいが小柄な子だった。

１投目　ストレート　空振り

２投目　ストレート　空振り

３投目　ストレート　空振り

圧倒的実力でカイはバッターをねじ伏せた。

攻守交代　５対１

４番　ゴンタ　打てるのか？

１投目　ド真ん中のストレート　ゴンタは思いっきりバットを振った。ファール。

「ちっ、しくったぜ」

悔しそうにゴンタは言った。

２投目　インローのチェンジアップ。これには惑わされない。ボール。

３投目　アウトハイのチェンジアップ。ゴンタはバットを振ったゴロ。アウト。

一死ランナー無し

５番　カイ非常に落ち着いた様子でバッターボックスに立っている。

みんなもカイに期待しているのか、固唾を呑んで見ている。

ピッチャーがカイを睨む。カイは無表情に見つめている。

すると、キャッチャーがカイから離れた場所に立った。

１投目　ボール

２投目　ボール

３投目　ボール

ここでまさかの敬遠だ。まあたしかにここで打たれるよりはマシかもしれない。

４投目もボール

一死一塁

カイはゆっくり一塁に歩き出す。

6番　キザマロ

1投目　ファール。

2投目　ファール。粘るキザマロ

3投目　ファール。

4投目　ファール。

「粘るね、キザマロ」

スバルが言った。

「粘るな～、打て！キザマロ～！」

ゴンタも言った。

5投目　そこでカイが動いた。二塁に走るカイ。盗塁成功！

「フフ、みんな僕に騙されましたね」

アウトになったキザマロだが、その顔は喜んでいた。

7番　ニシヒロ君

1投目　インローを無理に打ったため、内野フライ。アウト。

攻守交代

まだまだ勝負が分からない3回裏が始まる――――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

ギリギリできたので更新しました。明日は出来ません。４日にまとめて更新します。

番外編　baseball？

9番のバッター

1投目　アウトローのチェンジアップ。ボール。

2投目　インハイのストレート。球は内野の中で数回バウンドした。サカエグチ君がとって、一塁に送球。アウト。

（このまま勝てるな）

スバルはそう思っていた。

1番　ジャックにやられたバッターだ。

1投目　その時、カイの手が滑った。緩いボールが、ド真ん中に進む。

カキーンといい音がなってセンターに球に飛んだ。

「・・・・・え？」

スバル、予想もしていなかった事態に驚いている。球はスバルの頭に激突。バッターは今ランナーに変わった。ライトのジャックはへこんで動けず、レフトのツカサは少し距離が遠かった。

無死二塁。チームの空気が重い。

カイはジャックを注意をしようとしたが、打たれたのは自分だ。軽

いアドバイスくらいで言った方がちょうどいい。

「スバル、俺も打たれるから油断すんなよ？」

「う、うん。ごめんね？」

「打たれた俺が悪い。だから気にすんな。ジャック、おまえはやる気出せよ？」

笑ってカイは言った。特に悔しいって訳じゃないらしく、いつも通りだった。

「さあ、あと3回守ればいいからさ、がんばろうぜ」

「ああ、勝とうぜ、みんなで！」

ゴンタの言葉で、チームに活気が戻ってくる。

2番のバッター

1投目　カイのストレート　空振り

2投目　同じくストレート　空振り

3投目　同じくストレート　これも空振り――――

いや、打たれた。カイは驚いている。バッターも驚いている。適当に振ったら当たったのだろう。二塁のランナーは走った。

球はライト方向に飛んでいった。

「ジャック！」

ジャックの精神的に取れそうではない。スバルは走り出す。

球はジャックに向かって落ちている。

「危ない！」

そうスバルが言った。

パシ　そんな音が聞こえた。見ればジャックがキャッチしているで

はないか。

「・・・・おれはそんなに――――」

ジャックが一拍置いた。そして

「信用されてねえのか～～～～～！」

校庭にジャックの叫び声が木霊する。

そしたらカイが

「してねえよ～～～～！」

ジャックが思い切り肩を落とす。

「元気出したんならがんばれよ！」

カイはそう言った。ジャックはカイにボールを送球した。その顔は吹っ切れているという感じだ。

二死二塁

3番のバッター

1投目　シンカー　打てるはずもない。ストライク

2投目　カーブ　ファール。

3投目　ストレート　空振り

「終わり、と」

カイが言った。まだまだ余裕そうだ。

攻守交代

４回表

８番　タジマ君

「絶対に打つ」

１投目　ストレートを打った。センター前に落ちた。ヒット。

「打つな～、タジマ」

ジャックが感心したように言った。

「たしかに、すごいですね」

キザマロも身を乗り出して言った。

９番　サカエグチ君

１投目　今回も犠牲バント　タジマは二塁へ

一死二塁

そして一番　ジャック

1投目　ジャックは振ろうともしない。なぜなら

「盗塁成功っと」

タジマが盗塁するからだ。　ストライク

けれどジャックは打てない。

2投目　ジャックはバットを構えた。ストライク

3投目　ストライク

打てないけれど、ちゃんと自分の仕事はジャックはした。

2番　ツカサ

「打てるかな～」

ピッチャーも慣れてきたのか、ボールにキレがある。

「・・・・でも打たなきゃな」

手を抜けばそれだけあとに後悔する。

1投目　インローのチェンジアップ　ボール　ツカサは打ちそうになった。

2投目　アウトハイのストレート　ファール

3投目　アウトローのストレート　ツカサは振らなかった。ストライク、だったのだが

「あ、やべ！」

キャッチャーはボールを捕球出来なかった。ボールはキャッチャーの後ろまで勢いよく飛んでいく。

三塁のタジマがホームベースに向かって走る。キャッチャーもボールを取ってベースに戻る。

完全なスピード勝負――――

一方ＷＡＸＡニホン支部

「・・・・なるほどね」

ヨイリーが呟いた。

「なにがですか？」

近くにいた科学研究員が聞いた。

「これね、スバルちゃんに渡されたプログラムなのよ」

ヨイリーがパソコンの画面に表示する。

「でね、このプログラム、パワーアッププログラムなのよ」

「それはよかったですね、スバル君も喜びますよ」

「ただ、これね・・・」

ヨイリーの表情が曇る。

「どうしたんですか？」

「ただ、まだ分からないことがあるのよ」

今の時代、まだ分からないということはまずない。しかもヨイリー

博士でだ。

「スバル君に渡すかいま考え中なのよ」

「う～ん・・・・」

敵が渡したプログラムで、未知の部分があるとすれば、トラップの可能性が高い。

「そういえば、あのシュミレーターがありましたよね？」

シュミレーションとは、近日に完成したバトルウィザードにプログラムをつけたらどうなるか、というものだ。ちなみに名前はまだ決定していない。

「そうね、やってみましょう」

ヨイリーは早速、そのシュミレーターがある場所に向かう。

番外編　baseball ？

タジマ君とキャッチャーのスピード対決、タジマ君は負けてしまった。

「くそ、負けた」

悔しそうだ。

「カイ、次俺ピッチャーな」

ゴンタが言った。一応守備の交代は審判に言えば何度でもＯＫだ。

「じゃ、俺キャッチャーで」

カイが言った。みんなは異論はない。

「球種は？」

「ストレート一本！」

ゴンタが自慢げに言った。対するカイは、期待してなかったのか

「あっそ」

素っ気なく言った。

「好きなとこ投げていいよ」

カイは言った。

「マジか？ありがとーカイ！」

ゴンタは泣いて喜んだ。

「な、なんでサイン出さないんだ？」

「分かるのか？ゴンタが」

ジャックの問いにカイはキッパリ言った。

（たしかに、ゴンタじゃ理解できてなさそう・・・・・）

スバルは内心で思った。

「じゃあ、あと2回がんばるぞ！」

「「「「おー！」」」」

4回裏

4番　前の打順でホームランを打たれたバッターだ。

1投目　ド真ん中のストレート　ストライク

（好きなとこって言っても考えて投げろよ）

内心ゴンタにカイは突っ込んだ。

2投目　またしてもド真ん中のストレート　それは
カキーンと打たれた。ホームラン。民家には落ちなかった。
5対2　無死ランナー無し
いきなり燃え尽きたゴンタ。肩を落としてる。
（自業自得、かっこつけたのが悪い）
カイはそう思った。他のみんなもそんなようなことを思っていた。
そんなゴンタの思いも知らず、5番
1投目　やけになったゴンタがインハイのストレート　ボール
2投目　ド真ん中のストレート　空振り
3投目　アウトハイのストレート　空振り
4投目　アウトローのストレート　空振り
一死ランナー無し
というかゴンタの目が恐い。簡単に言えば三角だ。
6番のバッター
ゴンタはバッターを睨みつける。

1投目　ストレート　ストライク

2投目　内角やや低めのストレート　けれどそれは

パァンといい音をし、センター前ヒット

ゴンタ、再度燃え尽きる。いや、灰になったと言った方が正しいだろうか。

けれど炎の男ゴンタ、また立ち直る。心なしか涙の痕が見える。

「俺は負けねえ！」

もう負けたよ、というツッコミはなしでお願いしたい。絶対に今度こそ灰になって風に飛ばされてしまうだろう。

一死一塁

7番

1投目　外角やや低めのストレート　ファール

ゴンタは打たれたのが嫌なのか、怪訝そうな顔をしている。

2投目　内角やや高めのストレート　ピッチャー返し　一塁に送球

二死二塁

8番

1投目　ド真ん中のストレート　そしてそれは
カキーンと見事なまでに打たれた。2ベースヒット。
5対3
ゴンタ、唖然。あまりのショックで声も出ないのか。
またもや二死二塁
ゴンタ、涙腺が緩んでいる。今度は確実に泣いている。
けれどチームのエース（？）ゴンタ。最後まで投げきってやるという気持ちがあるのか、構える。
9番
1投目　インローのストレート　レフトフライ
攻守交代
「くそ！次は絶対抑えてやる！」
ゴンタはさらに燃え上がっていた。熱い、熱すぎる！
そして5回表――――

WAXAニホン支部

「……やっぱりないわね」

ヨイリーが呟いた。

「よかったじゃないですか」

研究員が嬉しそうに言った。

「でもなにか引っかかるのよね～」

「まあなにかあれば取ればいいですし、そこまで気にしなくてもいいんじゃないですか？」

「……そうね」

ヨイリーは結局スバルに渡すことにした。ヨイリーは次にやる仕事があるので少し急いでいた。

「もうすぐシドウちゃんがあれをとってくるはず……」

ヨイリーの出した答え、吉と出るか凶と出るか――――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

ユニーク４０００いきました！ありがとうございます！

感想お待ちしておりマ～ス

番外編　baseball？

9番　サカエグチ

ランナーがいないこの状況では、バントは難しい。

「どう打つかな～」

サカエグチは小声でそう言った。

1投目　アウトローのストレート　レフトフライ

「くっそ～」

悔しそうな表情をするサカエグチ。

一死ランナー無し

1番　ジャック

「よし、打つぞ～」

実はジャックただの筋肉痛だったことが判明。少し肩が痛いくらいなので打つつもりらしい。

1投目　内角やや低めのストレート　ジャック振らない。　ボール

2投目　外角やや高めのストレート　ファール

追い詰められたジャック。

3投目　外角やや低めのストレート　そしてそれをジャックは思いっきりバットに当てた。

センター前ヒット

「よっしゃー！」

雄たけびを上げるジャック。

一死一塁

こちらは1点取ればほぼ勝ちが決定的になる。

2番　ツカサ

ここはバントでは駄目だ。せめてジャックが二塁ならバントでも良かった。

ここは打つしかない。

1投目　インローのストレート　ボール

ツカサはよく見ている。

2投目　ド真ん中のストレート　ファール

3投目　アウトローのストレート　ボール

どちらも引かないいい対決だ。

４投目　外角やや低めのストレート　そしてツカサは打った。

ライト方向のヒット

一死　一、二塁

３番　スバル

ぶっちゃけみんなは期待していない。

（なんか、みんなの眼が冷たいような・・・・・）

そうスバルは感じた。

ここで打てば本物の英雄、打たなければ名声だけの英雄となる。

（う、打たなきゃ・・・・・）

そう思うスバル。けれど現実ではそうはいかない

１投目　内角やや低めのストレート　レフトフライ

みんなからの視線が痛い。

４番　ゴンタ

さあ、リーダーの意地を見せられるのか

1投目　インローのストレート

打った！ゴンタ走る！他の2人も走る！けれど

ライトフライ

攻守交代

チームのみんなの空気が重い。

（僕が打たなかったらかな～？）

スバルの暗い気持ちが、試合に響かなければいいのだが・・・・・・・

（あと・・・・・3人か・・・・・）

出られない人物はそう思う。

（あと・・・・3人で、この計画の結果が決まる）

なにを考えているかは予測できない。

（・・・・頼むよ、ウィンド、スバル君・・・・）

5回裏

これで全てが決まる

1番バッター

1投目　インハイのストレート　ボール

2投目　インローのストレート　ストライク

3投目　真ん中のやや低めのストレート　ファール

一進一退のこの状況。勝つのはどっち？

４投目　真ん中のス――――

いや、チェンジアップだ！今更だが、チェンジアップは速い球の後に投げることにより、タイミングをずらす

球種だ！とまあこんなに熱血指導的なことを言わなくて言いのだが。

そしてバッターは空振り

一死ランナー無し

このままいけば勝負は決まる。

２番バッター

「絶対抑えこんでやる！」

眼に炎が灯っているゴンタ。「漫画か？」そう突っ込みたくなる。

一応言っとくがこれは小説だ。

１投目　インローのストレート　ファール

２投目　外角やや高めのストレート　ファール

そして３投目　外角低めのストレート――――

打たれた。物の見事に打たれた。センター前ヒット。

ゴンタ、燃え尽きたのだろうか。止まっている。灰になったのか？
スポーツ違うがジョーなのか？

けれどゴンタ、構える。眼にはさっきよりも炎がメラメラと燃えている。

３番のバッター

１投目　ド真ん中のストレート　ストライク

２投目　インハイのストレート　ファール

３投目　外角やや低めのストレート　レフトフライ

打ち取ったゴンタ。けれど油断は出来ない。

次は４番バッター、ホームランを打たれたら同点の危機――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

さあ、１試合目そろそろ終了です。途中で出できた人は誰でしょうね？まあ、僕しか知らないんですがね。

ロックマンゼロの短編書いたので見てくださいね～。要望とかあれば長編も書きたいと思っています。

では、これからも応援よろしくお願いしマ～ス♪

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？

ここで４番。運が悪いとしか言いようがない。

けれどゴンタ、復讐（リベンジ）したいのか、やる気満々だ。

（絶対勝つ！絶対勝つ！絶対勝つ！）

ゴンタの思いは周囲には簡単に分かった。

１投目　インローのストレート　ボール

相手は微動だにもしない。完璧に自分が打てる球しか振らない。

２投目　外角やや低めのストレート　ファール

ゴンタは冷や汗を浮かべている。それはそうだろう。打たれれば同点の危険がある。かといって、カイは１番活躍したいので敬遠はやりたくないらしい。

３投目　アウトハイのストレート　ボール

どちらが勝ってもおかしくない戦い。

４投目　インハイのストレート　ボール

あとがなくなってきたゴンタ。

５投目　アウトローのストレート　ファール

フルカウント。一世一代の大勝負？

6投目　ゴンタが今までに見せたことのない構えをした。

（あ、あれは！）

スバルの心の声

そして、ゴンタは投げた――

「では、料理を運びま～す」

家庭科の先生の声で、女子は自分のつくった料理を運び出す。

ルナも自分の料理を運び出す。女子は自分の分と男子の分を作っていた。

（この選択でよかったのかしら・・・・）

ルナは心の中で呟いた。

ルナの選択、それはどちらにに渡るのか？

その答えはまだ分からず、女子は自分達の教室に運ぶ。

料理を食べるのは教室だ。

男子達はどんな反応をするのだろうか

ボールはまっすぐ飛んでいった。

バッターがバットを振る。

そのとき、ボールが落ちた。フォーク！まさかここでフォークとは。

空振り、三振

「よおおおっしゃ――――！」

ゴンタの叫び声が校庭に響き渡った。

ゲームセット　５－３

カイは笑っていた。これで宿題チャラに近づいたといわんばかりの表情だ。

「さあ、飯だ。早く教室行こうぜ？」

ジャックがせかす。

「そういえば、今日は女子が作ったんですよね？昼食」

キザマロが思い出したように言った。

「マジか？美味いのがいいな～」

ゴンタが言った。

「だ、誰が委員長の食べるんだろう・・・・・」

スバルが呟く。みんなは顔を下に向いた。

「俺は遠慮しとくよ」

カイはキッパリ言った。

「多分腹痛を起こすだろうし」

「それはあってほしくないです」

キザマロが言った。

「じゃ、じゃあ行こうか・・・・」

重い足取りで男子は教室に向かった。

さあ、闇魔大王（ルナ）の料理を食べるのは誰？

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

野球１試合目終わりました。２試合目もあります。ってか予想より全然長いですね。まあ、あくまで番外編なんで・・・・・

データベースも見てくださいね～

感想お待ちしておりマ～ス

番外編　ｃｏｏｋ

「そ、そういえばゴンタ、なんでフォーク投げれたんだ？」

ジャックが突然聞いた。

今はエレベーターの中、みんなはルナの料理を食べるのは誰かとビクビクしている。だからこそ、そこに触れないような会話にしようとしている。

「あ～、あれは適当に構えたらああなったんだよ」

適当に投げてフォークになるとは、まさに奇跡。もしかしてボールを投げたのはゴンターガ様なのだろうか。

「へ、へぇ～・・・・」

適当に相槌を打つスバル。みんなはできるだけ会話を長くしようと必死だ。

けれど教室との距離は益々縮まっていく。

カイはあまり料理に期待していないのか、めんどくさそうに歩いている。

他のみんなは冷や汗を浮かべながら歩いている。

まあ大体食べる人は２人に絞られているのだが。

（悲鳴をあげるのはどっちかな～♪）

カイはこの状況を軽く楽しんでいた。

（どうせ、俺の可能性はねえ。スバルかジャックには悪いが、俺は普通の飯を食わせてもらうぜ）

カイは余裕だった。絶対に食べなくて済む自信があった。

そしてスバル一行は教室に着いた。

さあ、ここで1つ言っておくことがある。

ジャックとカイの机にある料理からなにやら煙が上がっている。しかも黒色の。

「・・・・・誰が作ったの？」

カイが聞いた。

「私よ、なにか問題ある？」

ルナが言った。

「・・・・ジャックのは？」

「それも私のよ」

カイの表情が固まる。

「・・・・なんで2つ作ったの？」

「1つ足りなかったらしくて、それで私が作ったのよ」

ルナが無表情で言う。

（先生・・・・人選ミスだろ）

カイは先生に内心で突っ込んだ。

「じゃあ、私はちょっと出てるは」

そういってルナは教室から出て行った。

カイは改めて料理を見る。料理は所々焦げている。それだけならまだミスで済むのだが、大量に唐辛子、塩、砂糖をぶっかけている。そして丸い白い粒。これはホウ酸というものではないのか、少し怪しい。

あえて言おう。これは殺人兵器だ。煙は一酸化炭素か何かだ。

そしてふとスバルの机を見る。まあまあ美味そうな料理。そしてスバルはいない。

その瞬間、カイは動いた。料理をもってスバルの机に。

即座に料理を入れ替え、自分の机へと戻る。

良かった、自分は殺人兵器を食べずに済んだと、心からカイは喜ぶ。

（スバル、グッジョブ！）

これで自分が机から動かなければ大丈夫だ。

そこにスバルが戻ってきた。あの殺人兵器には気付いていないらしい。

さすが鈍感！感心せざるを得ない。

そしてジャック。殺人兵器を見つめている。

これを食うのか・・・・・・そんな風に見つめている。

（かわいそうな奴だ）

カイはジャックを哀れに見つめる。無論可哀想とはあまり思っていない。

そして、昼食の時間が始まった。

「「「「「「いただきます」」」」」」

カイはスバルとジャックを見る。

スバルはなにも気付かないのか、普通に口に運ぶ。

そしてジャック。手をつけない。一切。

さあ、そろそろスバルの悲鳴が聞こえる頃だ。

3・・・・・・・・・2・・・・・・・・・・1・・・・・・

スバルは黙々と食べ続ける。

（あれ？煙上がってるよね？）

黙々と黒い煙が上がっている。普通に見れば食べてはいけない物だ。

それを普通に食べている。

カイも食べ始める。そこそこ美味しい料理だ。

ジャックはまだ食べない。まあ普通の反応だろう。

けれどスバル、なぜか普通に食べている。

見た目と味は違うのか？それとも味覚がおかしいのか？

疑問がいくつか浮かんでくる。

そしてジャックも料理を恐る恐る食べる。

あ、倒れた。泡を吹いている。これは大変だ。

ジャックの周りに人が集まる。

「お、おい大丈夫か？」

カイもジャックのところに行く。

ジャックは苦し紛れに親指を立てた。

「つ・・・ぎの・・・・し・・あい・・・・・・が・・・・・ん・ば・・・・れ」

そしてジャックは眼を閉じた。

「「「「「ジャック――――――！」」」」」

ジャックはその後、急いで保健室に運ばれたとさ。

番外編　ｃｏｏｋ（後書き）

スバル、これからどうなってしまうのでしょうか（笑）

そしてジャックに明日はあるのでしょうか。

次話をご期待下さい。

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？

ジャックは今日はもう動けないらしい。

「ジャック、どうしたんだろう」

スバルが呟いた。

「スバル、おまえ料理食ってどうだった？」

カイがふと聞いた。

「え？・・・・どうって、少し焦げてて苦かったけど、食べれたけど」

カイは不安そうにスバルの顔を見ている。

自分の顔になにかついているのか？スバルは自分の顔を触って確かめる。

違うだろ、とカイの表情が言っている。

「じゃあ、ジャックがいないところは、外野はツカサとスバルが左右に別れてくれ。スバルはライト、ツカサはレフトね。あとはさっきと同じで」

カイがみんなに指示をだす。誰がリーダーか分からなくなってきた。

次の相手は運動神経抜群の生徒が集まる６－Ａ。理不尽なほどに運

動神経が抜群な生徒が集まっているクラスだ。

そんなクラスに、６－Ｂナインズはどう立ち向かうのか

そして６年生決勝が始まった。

６－Ｂは後攻。

ピッチャーはゴンタ。

１番のバッター。体つきもなかなか。さすが理不尽クラスの１人。

１投目　外角やや低めのストレート

普通に打たれた。ゴンタ唖然。ライト前ヒット。

無死一塁。

（まあ、当然か）

カイはべつに驚きもせずミットを構えている。

もし危なかったら自分が投げればいい話だ。それでも少し怪しいが。

2番　背は少し低いが、腕が太い。そして顔がイカツイ。いかにも強そうだ。

1投目　アウトローのストレート　ボール

微動だにもしない。カイがサインをだしたいところだが、ゴンタの頭では無理だろう。

2投目　インハイのストレート　ボール

ゴンタが痺れをきらして打てる球を待っている。まあ短気なゴンタが相手ではそういう作戦だろう。

相手は頭もいいらしい。

3投目　そしてド真ん中のフォーク　これは予測できなかったらしく空振り。

やはりあれはゴンタではなくゴンターガ様なのだろうか。神々しく

みえる。

相手は少し悔しそうに唇を噛み締めている。次は狙ってくるだろう。

４投目　ここで相手の盗塁。ストレート。カイは素早く二塁に送球する。

アウト。一死ランナー無し。よくカイは反応できたものだ。

そして2ストライク　2ボール。まだ1つ余裕がある。

けれどどちらのチームも余裕はない。一日体育三昧だ。疲れるに決まっている。

疲れていないのはカイくらいだろうか。涼しい顔でミットを構えている。

羨ましいものだ。運動が中の下くらいのスバルにとってはとても羨ましい。

５投目　真ん中のフォーク　ボール

もう後がない。勝負に出るか、歩かせるか。全てはゴンタ次第。

6投目　外角やや高めのストレート　それは打たれた。

ボールはライト方向に飛んでいった。スバルは、なんとかグローブでボールをキャッチする。

二死ランナー無し　ヒヤッとしたがなんとか大丈夫なようだ。

3番　これも運動できそうなバッターだ。

いい加減運動できなさそうなバッターはいないのか、そう思う6－Bナインズ

「はぁ～」

溜め息をつくスバル。早く自分達が攻撃をしたいものだ。そうすればある程度休める。

けれど無情にも試合は続行する。

1投目　インローのストレート　ボール

ゴンタは肩をまわした。さすがに何球も投球していると肩が痛くなってくるだろう。

（そろそろ俺が代わる番か？）

ジャックがいないのでマシに投球できるのがカイとゴンタだけだ。
数を減らしたくはない。

2投目　アウトハイのストレート　ショートのほうにボールがいったが、キザマロはちゃんと一塁に送球した。

攻守交代

スバル達が今度は攻める番だ。

『・・・・・・ここがコダマ小学校か』

ウェーブロードに立っている電波体が呟いた。

『・・・・・・あやつがまだ生きているとは思わなかったが、幸運といえば幸運』

訳の分からないことを呟く電波体。淡い水色の服に身を包んでいて、腰にあるのは剣。

『まだ我を楽しませる剣士もいたか・・・・・・もう少したったら・・・・借りを返そう――――』

『ウィンド・・・・・・！』

少年が言った、招いていない客が、１人来た。

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

遅れてスイマセン。明日はしてない分を更新します

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？

１回裏

１番はツカサ

相手のピッチャーは、やはり運動できそうな体格だ。相手を見るとやる気がなくなってくるのは俺だけ？と６－Ｂナインズは思う。

「がんばれ～」

カイがツカサに声援を送る。ツカサは軽く頷き、バッターボックスに立つ。

１投目　インローのストレート　ボール

際どいところだったが、ツカサは振らなかった。

やはりというか、球が速い。

２投目　内角やや高めのチェンジアップ　ストライク

今のはストライクゾーンに入っていたが、振らないのが正解だろう。

打っても飛ばないからだ。

3投目　アウトハイのストレート　ボール

打つ気配がツカサにはない。真ん中にボールが来るのを待っているのか？

4投目　真ん中の・・・・・・スライダー　バッターに対して右に平行にスライドする球種だ。

ファール。ツカサは追い込まれた。もう後がない。

5投目　真ん中やや高めのカーブ　空振り

一死ランナー無し

「これでいいんだよね？」

誰に話しているか分からなかったが、カイが返事をする。

「うん、ＯＫだよ」

カイが微笑んで言った。

（なんで笑っているの？）

スバルは疑問に思ったが、カイの言葉で考えを中断した。

「スバル、打ってけよ～」

カイが心にもないことを言った。顔からして心がこもっていない

「う、うん」

自信なくスバルは言う。

（球数増やしてくれよ～）

スバルがバッターボックスに立った。

（打つ、打つ・・・・・）

ただそれだけを念じてバットを構える。

1投目　インハイのストレート　ファール

「なに振ってんだボケー！」

カイの罵声が轟く。

（今振らなくていいの？）

野球をほとんど知らないスバルは、どこを打てばいいか分からない。

2投目　真ん中のカーブ　ストライク

（え？今曲がった？）

初体験の変化球に感心と驚いている顔をしているスバル。

ベンチではチームのみんなが落胆している。まあ当然といったら当然だろう。

3投目　外角のスライダー　空振り

「おつかれ～」

カイが戻ってくるスバルを冷たく向かえた。なんかイラっとする。

「・・・・なんか冷たくない？」

スバルが少し声を荒げていった。

「ゴンタ、打ってけよ～」

スバルを無視してゴンタを送るカイ。

「ねえ、聞いてる？」

「ん？聞いてるよ。耳はいいからね」

自慢げにカイが言った。

「・・・まあ、これでゴンタを見れば分かるかな」

スバルにはカイの言っている言葉が分からなかった。

「まあ見てろよ、試合を」

しょうがなくスバルも試合を見る。

ゴンタはバットを構えた。

1投目　外角高めのカーブ　空振り

ゴンタは悔しそうに顔を歪める。

2投目　真ん中のスライダー　ストライク

さすがに打てない。こうも変化球ばっかだと打ちにくい。

3投目　真ん中ののストレート　見逃し三振

攻守交代

「これで情報集終わりだな、あらかた」

カイが呟いた。

「・・・・最初からそのつもりだったの？」

スバルが聞いた。

「おまえに話すと顔に出るからな」

カイが素っ気なく言った。

「はぁ～」

溜め息をつくスバル。そこまで信用されていないとは・・・・

「じゃあ、次守るぞ」

2回表が始まる――――

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

２試合目１０話くらい行きそうです。まあ１話１話は短いですが。

では、期待をしてください～。前の話の最後は次章で出ますので、注目を～

感想もくださいね～

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（前書き）

盛り上がってきた球技大会編　どうなる？

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ？

４番バッター。まさに巨漢。打てば絶対飛ぶだろう。
慎重に投げなければ確実に先制点を取られるだろう。

１投目　真ん中のフォーク　ボール

相手もフォークが来るのを分かっているのか、微動だにもしない。

２投目　もう１度フォーク　これは打った。ファール。

やはりというか、ボールが遠くまで飛ぶ。

３投目　アウトハイのストレート　ファール

相手は１投目以外は結構打ってくるようだ。けれどゴンタがそれを分かっているかどうかは分からない。

４投目　真ん中のチェンジアップ　タイミングをずらされ空振り

一死ランナー無し

（4番は初球以外は振ってくる。・・・・じゃあ変化球で押せばいいか）

ゴンタは考え付いた。

5番　痩せているが、筋肉はがっしりとついているバッター。

1投目　内角高めのストレート　ファール

2投目　外角低めのチェンジアップ　これは打たれた。

レフト方向に飛んでいった。ツカサは取れず、バッターは走った。

一死二塁

ゴンタはもう呆然とせず、すぐに構える。

6番　まあ背の高くある程度筋肉とついている。背が高いとやはり運動できそうな感じがする。

「・・・・暑いな」

今は2時ごろ、一番1日で暑い時間帯だ。

そして体育漬け。今日は最悪だ。

そう思ったスバルは、突然うずくまった。異変を察したツカサは、すぐさまスバルに歩み寄る。

「どうしたのスバル君?」

カイたちも集まってくる。

「スバル・・・もしかして腹が痛いのか?」

カイがなにか察したように聞く。

「・・・う、うん・・・・・」

苦しそうに顔を歪ませるスバル。

「スバル、しっかりしろ！」

「そうですよ、しっかりしてください！」

ゴンタとキザマロが必死にスバルに声をかける。

「・・・ごめん、僕・・・もう無理っぽいや・・・・・・」

スバルは力尽きたかのように目を閉じる。

「スバル――――！」

またも被害者が、１人増えた

（委員長の料理は恐ろしいな・・・・・）

カイは心の中で思った。ちなみにジャックとスバルは病院に搬送されたらしい。

（スバル、時間差で喰らう料理を盛られるとは・・・・・）

時間差だと、訳も分からず痛み出すので通常よりも数倍痛い。

そして７人で試合をするのはきつい。だから

「６年生の決勝は、中断～！」

と、熱血体育の先生が言った。

この言葉で試合は中止。引き分けとなった。

カイは残念そうな顔をしている。

そして閉会式。

（なんか、急すぎる展開な気がする・・・・・）

カイは心のそこで思った。作者の展開の悪さを罵ってやりたいとも思う。

「では、ＭＶＰを発表します」

校長が言った。この言葉でカイは眼を輝かせる。ＭＶＰさえなれば自分的には勝ちと一緒だ。

「ＭＶＰは――――――」

「6ー B　カイ　ハヤテ」

「よっしゃアアアアア――――！」

カイが叫んだ。これで1年間宿題チャラ。

「・・・・しかし」

校長が話を続けた。

「カイ君は、民家にボールを飛ばしましたね？」

その言葉でカイが固まる。１試合目のホームランだろうか。耳のいいカイは　ガッシャーンという音が聞こえたので、もしやとは思ったのだが・・・・・

「そして窓を割ってしまったらしく、しかもお金持ちの家だったので、窓も高級なそうです」

カイの顔が見る見る青くなっていく。

「しかし、小学生のミスです。なので弁償代は学校が払います」

その言葉でカイの顔は明るくなる。ラッキーとか思っているのだろう。

「だから、弁償代を払う代わりに、宿題はチャラにはなりません」

カイはまたも硬直した、そして

「クソ――――――

一方　病院

「「う、う～ん・・・・・・」」

ルナの料理を食べた2人は、退院まで呻き声をあげて寝ていたという・・・・・・

かくして、締りの悪く球技大会は終わったという。

生徒達はいろんな意味で燃え尽きたらしい・・・・・・・・

番外編　ｂａｓｅｂａｌｌ　？（後書き）

さあ、最悪な展開で終わった球技大会、どうでしたか？

コメディィなんで、許してください・・・・・・

次の話が終わったら次は、新しい章です。やっと本編に入ります。

では、次話から期待を！

第５１話　捜索

球技大会が終わってから1時間後の、ある場所

「・・・・・アシッド、大丈夫か？」

『大丈夫です、シドウ。エースＰＧＭが戻ったおかげで、ノイズがあっても平気です』

今、暁とアシッドはある場所に来ている。

「そうか、じゃあゆっくり行こうか」

『・・・・シドウ、だからといってうまい棒は食べなくてもいいです』

アシッドが静かにツッコミをいれた。

「・・・・・で、まだないのか？」

渋々暁はうまい棒をしまって、アシッドに聞いた。

『・・・・・・・・・・・まだありません。粉々になってしまったものなので、探すのは困難を極めます』

たしかに粉々になった物なのだから探すのは難しいだろう。

暁は、キングの残留電波を探していた。無論、メテオGが消えたために、残留電波を残さずにデリートされた可能性もあるのだが。

「しっかし、ここはなにもないな」

メテオGのノイズが大量にある場所に来たのだが、見渡す限りが荒地。今の時代こんな所があるとは考えられなかった。

『・・・ここが荒れているのは、シドウも理由を知っているでしょう?』

「・・・・まあな。けど、そこまでかなって思ってさ」

いつもの彼らしくない発言をする暁。

『それにしても、妙ですね・・・・・』

「どうした?」

『・・・この感じ、なにかに似ているような・・・・・』

アシッドがぼそぼそと呟き始める。

『いや、すみません。なんでもありません』

「・・・そうか」

黙々と暁は歩いていく。

ガイアの正体、これには暁は思い当たる節があった。

けれど、証拠も何もなく、可能性も極めて低い物だった。

だが、これ以外にも思いつかないのも事実だ。

（あいつらの姿、形からして、あれしか思いつかないんだけどな）

そう思いながら暁は歩いていく。

『ッ！シドウ、ありました』

暁は止まった。

「どこだ！？」

『まっすぐに、あと５０メートル付近です』

「分かった、急ぐぞ！」

暁は、荒地を物凄い速さで駆けた。

「ここか？」

『はい・・・・・ここにあります』

暁は見えていないが、アシッドには見えているのだろう。

『・・・ここにある電波で再構築は可能です、シドウ』

「そうか、じゃあ頼むよ。アシッド、ウィザード・オン」

アシッドがハンターから現れた。

『・・・では、開始します・・・・・ッ！シドウ、なにか来ます！』

その言葉が発せられるかられないかの瞬間、空中に一体の電波体が現れた。

『フフフ、ＷＡＸＡもこういう手を打って来ましたか・・・』

現れたのは、赤い魔術師。

「く、こんな時に・・・・・」

『シドウ・・・！』

「ああ、トランスコード　アシッド・エース！」

暁は電波変換し、魔術師に対抗しようとする。

『やめておいたほうがいいですよ？あなたでは敵いません』

「やってみなきゃ分からないって言うだろ？」

アシッドは駆け出した。

『分からない人だ。ファイアボール』

数個の火の玉が、暁に放たれる。

「アシッドブラスター！」

銃弾が、火の玉を打ち消していく。

「ロックオンソード！」

空中にいる魔術師に、ロックオンで一気に間合いをつめ、斬りかかる。

『効きませんよ、そんなもの』

ソードは魔術師をすり抜けた。

「なに！？」

『行きますよ、マジシャンズ――――』

「バトルカード　エアブラスト！」

暁は、勢いよく後退した。

『風を前方に爆発させ、緊急回避した。ってところですか？』

「・・・ご名答、そういうわけだ」

暁は顔を歪ませる。強い、なぜ攻撃かあたらないかも分からない。勝てる気がしない。

『分かってるでしょ？勝てないって。では、終わらせましょうか・・・ボルケ――――』

『おいおいそれはねえだろ』

そこに現れたのは、シルバー・ウィンド。

『あなた・・・ですか』

「あいつは！」

暁が正体を掴みたい電波体である。けれど、いまだに分からない。

『久しぶりだが、感傷に浸っている暇もなさそうだな』

『あなたの言っている意味がよく分かりませんね。初対面でしょ？』

『おまえにとってはな』

そしてシルバー・ウィンドは魔術師に突っ込んだ。

『シドウ、集めきりました！』

暁は時間稼ぎをしていた。たった1分を稼げばこちら勝ち。移動しながらアシッドは残留電波を集めていたのだ。

「そうなったらさっさと戻るぞ！」

暁はもと来た道を戻ろうとする。シルバー・ウィンドなら逃げれると確信しているからだ。

『逃がしませんよ』

魔術師は杖を構える。

『バーニン――――』

『だからさせないって』

シルバー・ウィンドが遮る。その間に暁は上手く逃げた。

『あなたは邪魔な存在ですね・・・・・ここで排除します』

『いいぜ、やってやろうじゃねえか』

魔術師は杖を、シルバー・ウィンドは刀を構える。

「そこまでにしろ」

どこからともなくそんな声が聞こえた。それはゲイボルグに止めを刺しそこなったときの声だ。

「君にはまだ仕事がある、だから終わりだよ」

『分かりました、ここは退きます』

そういって、魔術師は消えた。周波数変換でも追えない。声ももうしない。

『・・・ちっ』

シルバー・ウィンドは舌打ちし、どこかに消えていった。

第５１話　捜索（後書き）

新しい章に入りました。今後ともよろしく～。

感想等もくださいね～

第５２話　予定

球技大会のあった週の木曜日。無事、スバルとジャックは学校に登校できるようになった、やっと。

スバルとジャックは、ルナの顔を見た瞬間顔が青くなったという。まあ仕方ない。

そして無事に授業が終わった放課後

「ねえ、明後日どこかにでかけない？」

ルナが話を持ちかけてきた。

「いいよ」

「いいぜ、美味い所があるなら！」

「いいね、行こう」

「行きましょう、委員長！」

「しゃあねえ、行ってやるか！」

スバル、ゴンタ、ツカサ、キザマロ、ジャックがそれぞれ行くと言った。

「あなたはどう？カイ君」

ルナは眠たそうなカイに聞いた。

「・・・・・・どうしよっか～」

カイは考え込んだ。

「一応、場所も決めてあるんだけど」

「どこ？」

カイが聞いた。

「ＴＫシティよ」

「ふ～ん・・・・・・」

カイはそこには興味なさそうに言った。

「そこ、広い？」

カイが聞いた。

「広いわよ、いろんなお店も――――」

「ちがくて、広い場所があるって聞いてるの」

ルナはきょとんとした。無理もない、遊びに行くのに広い場所があると聞かれたらおかしく思うだろう。

「・・・あるわよ、噴水のある広場が」

「じゃあ、行くわ。俺も」

なぜそんなことで行くか分からないが、人が多いと楽しくなるので良かった。

「で？具体的になにすんだ？」

ジャックが聞いた。

「買い物とか、お食事とか、とにかくお店を回るのよ」

ルナが言った。

「やったぜ！いろいろ食える！」

（（（（（（おまえの食いつく所はそこか！））））））

とみんなが心の中で突っ込んだ。

「そうだ、ミソラちゃんも呼んであげて。スバル君」

「え？でもなんで僕？」

スバルがルナに聞いた。

（ミソラちゃん、苦労するわね・・・・・）

ルナは心の中で思った。

「いいから、早くしなさい」

「は、はい！」

スバルはまた殺人兵器を食べさせられそうで、すぐにメールを送った。

明後日空いてる？よかったらみんなで出掛けない？

まあなんの変哲もないメールを送った。

「どんなメール送ったの？」

カイがスバルに聞いた。

「別に普通のメールだよ？」

スバルが言った。

「つまんないね～」

とカイが言った。つまらないとか、そんなのあるのだろうか。

「じゃあ、明後日はＴＫシティでショッピングよ。ミソラちゃんが

来る場合は連絡しなさい、分かったスバル君？」

「わ、分かったよ・・・」

最後のほうを弱弱しくスバルは言った。

「じゃあ、帰りましょう」

「俺は居残り～」

「がんばってね、ハヤテ君」

スバル達はカイを置いて帰っていった。

「楽しそうだね、カイ君」

ギンガがカイに話しかけた。

「そう？普通だよ」

カイは素っ気なく言った。

「それで、宿題は終わりそう?」

「どうかな・・・・・・あと3週間は必要な気がする」

「そんなに?」

少し笑ってギンガはカイに言った。

「・・・・で?おまえはどうなんだ?」

その一言で、ギンガは笑うのをやめる。

「さあ?分からないよ」

「そうか、そっちもがんばれよ」

笑ってカイが言った。

「うん、そっちもね」

「ああ」

そしてギンガは教室から出て行った。

「分からない・・・・・・か」

カイはそう呟いて、宿題をやり続けた。

学校のと、もう1つ――――

「そろそろ準備が整う」

黒ローブの男はそう言った。

『そうだな、これで準備が整う』

ウィザードも嬉しそうに言った。

『楽しみだな～、何人殺すのかな～』

残虐な笑みを浮かべ、ウィザードは喋る。

「まあ、まだ整ったわけじゃないし、様子を見ていこうよ」

『そうだな、ゆっくり行こうぜ・・・・・世界が驚く光景を見れるなんて、俺達幸運だな』

「そうだね。誰が邪魔しようとも僕達の邪魔はさせない。分かってるよね？」

『ああ、分かってるぜ・・・・』

「そろそろだよ――――」

「世界が僕達の手に入るのは」

第５２話　予定（後書き）

１日４話更新するの久々ですが、疲れますね～。野球編がいかに大変だったかわかりました。

では、感想等よろしくお願いしマ～ス

ユニーク５０００いきました！ありがとうございます！

第５３話　星空（前書き）

一人称の割合を増やしました。

第53話　星空

スバルは家に帰っていた。

もう8時。風呂にも入り、食事も済ませていたスバルは暇だった。

「なんかないかな～」

『ウイルス狩り！』

「1人で行って来ていいよ？」

スバルはウォーロックの言葉を速攻で返す。

『上手くなったな、スバル』

「ありがとう、ウォーロック」

自分の部屋でくつろいでいたのだが、本は全て読んだ。ゲームももうクリアした。

「・・・・ウォーロック、行かないの？」

『ああ、なんか別にどうでもよくなった気がしてな』

ウォーロックもつまらないらしい。

そんな時、メールの着信音が鳴る。

『ミソラからか？』

ハンターを見たらウォーロックの言うとおりだった。

「え～っと・・・・明後日来れるって」

『そうか・・・・・良かったな』

その瞬間、ウォーロックの頭上にヘビードーンが出現する。

『何で――――――――!!!!?』

ウォーロック撃沈。またなにかあったのだろう。

「・・・・となると、明後日行くのは・・・・８人か」

８人か、そんな大人数でどこかに行くなんて初めてだ。

『楽しみなのか？』

なんとか復帰したウォーロックがスバルに聞いた。

「うん、楽しみだよ」

それは心の底から思っていることだ。

『・・・・戦いがあるかも知れねえぞ』

ウォーロックがいつもより低いトーンで言った。

「・・・・かもね」

なにか戦いがあるような気がした。

『まあ、今考えたってしょうがねえ。戦うなら勝つだけだね』

「そうだね。そのときは頼むよ、ウォーロック」

2人は、それから展望台に向かった。

眩い幾千もの星を見に――

「寒いな～」

少年は満天の夜空を見ていった。

『だろうな』

暑さの感じないウィザードに言われると少しむかつく。

「星、綺麗だな」

『そうだな』

綺麗な星は、これから起こることを知らないのか、ずっと輝いている。

「また、見れるかな」

少年の呟きは、誰にも聞こえずに消えていった。

「明後日か～」

ミソラは自分の家のベランダでそう呟いた。

『良かったじゃない、遊びに行けて』

当たり前だ。また楽しい休日が過ごせるのだから。

「うん、嬉しいよ・・・・・あの子とも、会えるかな」

『あれ、ミソラいつの間に乗り換え――――』

「そういうんじゃないよ」

そう、そんなんじゃない。

「ただ、あの子なら――――」

「これから起こることを全て知っていそうなんだよ」

ミソラの言葉は、その少年に伝わることなく、消えていった。

第５３話　星空（後書き）

感想くださいね～、批判でも結構です。けどただの悪口はやめてください。
これからもよろしくお願いしマ～ス。

第５４話　復元

「・・・・ふ～、やっぱり大変ね～」

ヨイリーが呟いた。

「老人には堪えるわ～」

「大丈夫ですか？博士」

暁が心配したように言った。

「大丈夫よ・・・・スバルちゃんのためですもの」

そういってヨイリーは手を動かす。

ヨイリーはただパソコンの画面を見つめ、キーボードを叩く。

そう、自分がやらなければいけない。

少しでもスバル達の力にならなければいけない。

それが、非力な老人のできる最低限のことだから。

「・・・・でもなんでキングなんです？」

ヨイリーだけである程度のことはできるはず、では何故？

「・・・それには２つの理由があるわ」

ヨイリーは暁を見ずに言った。

「まずはジョーカーちゃんの復元に必要なデータを彼が持っているの」

そこである1つの疑問が浮かび上がる。

「ヨイリー博士がなんで復元できないんですか?」

ジョーカーの生みの親はヨイリーだ、その生みの親が作れないとは考えられない。

ヨイリーはパソコンの画面を見たまんまだったが、すぐに答えた。

「ジョーカーの設計図ともいえるものを、キングに盗まれてしまったの」

これで疑問は解消した。けれど何故?盗む必要があるのか?ジョーカーはデリートされたわけでもない。

「そういうことか・・・・」

理解した、キングは俺がディーラーを抜けた後にもあの計画を――

――

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

だとしたら嫌な予感がする。もしあの計画を再び実行しようとすれば――

――

恐ろしいことになる。

「・・・・なにか知っているの？」

沈黙で察せられたのだろう、嫌な空気が部屋を支配する。

「・・・・話を続けるわよ、それでキングは設計図を盗んでしまったの。だから復元は彼しかできないのよ」

なるほど、そういうことか。

「それであつ1つは？」

「そしてあと1つは、彼がノイズに対して天才だからよ」

それは納得できる。キングはノイズを使って世界規模の犯罪を犯しているのだから。

「それでキングを？」

「ええ、すぐに戦力が欲しいのよ」

ヨイリーはただパソコンの画面を見ていた。キーボードを打つ音が妙に大きく感じる。それほど静かだ。

「やっぱり、俺が力不足なんですかね～」

そういってうまい棒をポケットから取り出す。やっぱりたこ焼き味は美味い。

「ここでは飲食禁止よ」

「マジですか？」

けれど食べるのはやめる気はない。

「・・・ほどほどにしなさい」

呆れてヨイリーが言う。疲れているのか、優しさがあまり感じられないのは俺だけだろうか。

「・・・・で？あとどれくらいでできそうですか？」

「もうすぐよ、長官と大悟ちゃん、それに天地ちゃんも呼んでちょうだい」

「分かりました、今から呼んできます」

めんどくさそうに俺は言って、部屋を出た。

「あいつが素直に聞く奴だとは思わないけどな～」

俺はそんなことを呟いた。

「あいつを従わせるには、どんな要求を呑めばいいんだ？」

簡単に従ってくれるとは思っていない。

「・・・・どんな要求を・・・・」

『シドウ、それよりも早く呼びましょう。３人は司令室で集まっているはずです』

分かっている、言いたかったが、もっともなことなので黙って従う。

エレベーターの中に入り、司令室のある最上階のボタンを押す。

「・・・・終わるのかな、この戦い」

『終わります、必ず』

アシッドが自信満々に俺に言うとは、今日はなにかあるな。

「なんで分かるんだ？」

『始まりがあれば終わりがある。これは世の真理です』

「・・・・じゃあ平和になる終わり方はあるのか？」

『分かりません』

アシッドがこんな解答をするとは、ヨイリー博士になにか異常がないか調べてもらおう。

そんなことを思っているうちに、司令室のある最上階に着いた。

そして司令室の扉を開ける。重苦しい空気でなければいいのだが

「お、どうした？　暁君」

長官が話しかけてきた。空気も重くなくていいことだ。

「長官、天地さん、大悟さん、そろそろ復元できるそうです」

「・・・そうか、ついにそこまで・・」

大悟が感心半分、不安半分な声で言った。

「では、行きましょうか。長官」

俺達４人は、ヨイリーのいる部屋に向かった

「そうか・・・・・駄目だったか」

男は魔術師に言った。

『申し訳ありません』

「いいよ。なにをしようと、計画が進めばいい。おまえには重大な仕事があるからね」

『・・・・では、私はここで』

そういって魔術師は去っていった。

「キングが、ＷＡＸＡについたか・・・・・」

『しょうがねえじゃねえか、この際』

たしかにしょうがないのかもしれない。

「そうだけど、失敗する可能性は低いほうがいいだろう？」

そう、可能性は低いほうがいい。

『次の駒がちゃんと仕事をやってくれればいいさ』

「君は楽天的だね」

『クックック、いつもだろ？』

「・・・そろそろ僕の計画も山場を迎えるよ。見守っててね――」

「父さん、母さん・・・」

第５５話　完成

「では、復元を開始します」

ヨイリーが部屋に入ってきた４人に言った。

部屋の奥には人が１人楽々入りそうなカプセルがある。

ヨイリーがＥｎｔｅｒキーを押すと同時に、カプセルに粒子が集まっていく。

下から粒子は集まっていき、脚のようなものを形成していく。

５人はただ固唾を呑んで見守っていた。

ようやく足首まで形成が終わった。

「・・・完成まで、あと９２％」

徐々に膝まで形成していき、太股も形成していく。

「あと、６０％」

そして胴体まで形成していった。なにかが蘇る、神秘的な感じである。

「あと、４５％」

腕、そして胸を形成していく。

「あと３０％」

顎、首と形成していく。全員が期待、不安を膨らませながらカプセルを見つめる。

「あと１０％・・・・・5・・・・4・・・・・3・・・・・・2・・・・1・・・・」

って、頭を形成した。

カプセルが開き、中から黒服の男性が出てきた。

「・・・ごきげんよう、諸君」

あの時と変わらないキングは復元された。

もう、新たな1日がスタートしていた時間であった。

「今日は遅刻しなくて済んだね」

もう朝の8時になっていた。スバルはもう学校に登校、クラスメイトはスバルは凝視する。

「・・・なんかあったの？」

クラスメイトの1人がそうスバルに言った。

なにかって？それは・・・・・ない。

「なにもないけど・・・なんで？」

「い、いや、なんでもない・・・」

そういって話は終わった。

『まあ、当然だろうな』

ウォーロックに当然といわれると、少し違和感がある。

「なにが当然なの？」

『普通、遅刻魔のおまえが、こんなに普通の時間に登校すればおかしいと思うだろ』

自分が普通の時間に登校してないのは置いといて、なんでそんなこ

とを気にしているのだろう。

『・・・おまえ、今日の言動に気をつけろよ?』

ウォーロックの言っている意味が分からない。

『・・・また、おまえ追いかけられ――――』

「分かった、ありがとうウォーロック」

そういうことか、なるほど。嫌でも意味が伝わってくる。

「おはよ～、スバル」

ハヤテ君が話しかけてきた。眠そうなのは言うまでもない。

「おはよう。明日だね、みんなで遊びに行くの」

「そんなに楽しみなの?」

まるであまり楽しみでいない言動だ。

「まあ、たしかに楽しみなのは分かるけどさ～」

ハヤテ君がもったいぶったように言う。

「そりゃあ、ひび――――」

「ハヤテ君ストーップ!」

僕はハヤテ君の言葉を遮った。あまりの声量で教室の生徒がこちらを見ている。

「い、いやさ、そういうことはここで――――」

「へ～、なるほど。２人でデートにでも行くのか？」

まるでこの状況を楽しんでいるかのように聞かれた。だからそういうことはやめてほしい。

「・・・・デートって？」

クラスのある男子が僕に聞いてきた。嫌な予感がする。

「い、いや――――」

「そのまんまだよ」

ハヤテ君が男子に言ってしまった。

『カイ、遊ぶのはやめろ』

ここに救いの神が光臨した。その名もゲイル。

『――――アイドルとデートなんて大スクープだろ？』

前言撤回、フォローになっていない。逆に状況が悪化した。ミソラちゃんとはそんな仲じゃないのに～！

「星河・・・」

気付くと囲まれていた。今は朝。つまりまだ授業はある。帰れない。

『・・・終わったな』

ウォーロックが静かにそういった。そんなこと言うなら何か案考えて！

「お～い、席つけ～」

なんと、ここでベタなパターンの先生が来るとは。作者様、感謝します！

育田先生が、出席を確認し終わった。

「じゃあ、すぐに授業を始める・・・・その前にカイ、話がある」

ハヤテ君に話があるとは、なんのことだろう？

「・・・分かりました」

「先生が戻ってくるまで自習な～」

そう言って先生とハヤテ君は教室を出て行った。

「カイ、なんで偽った」

育田先生がカイを問い詰める。

「・・・なにか悪いことでも？」

それに対してカイはおどけたように返した。

「・・・君の事情はよく分かった、けれど――――」

「すいません、先生。もう戻れません」

カイはさっきとは違って真剣なまなざしでカイは言った。

「・・・俺は罪を消そうとは思っていません。だからこのことは内

密にして欲しいんです」

「・・そんなことでいいのか？」

「・・・はい」

カイはそういって、職員室を出て行った。

「それでいいのか・・・・カイ」

「おまえはそんなにも簡単に自分を捨てられるのか？」

第５５話　完成（後書き）

やっと更新～、感想等お待ちしておりマ～ス。

第５６話　交渉

「だいたいの状況は把握したよ」

椅子に腰掛けている黒服の男性、キングがコーヒーを飲みながらいった。

４人はあの夜、キングをまず牢屋に入れてから、休眠を取った。

「やれやれ、蘇らせられたあとは牢屋か」

といキングの呟きを聞き、４人はキングも寝かせた。といっても、本人は眠れなかったというが。

「それで私を蘇らせたのか・・・・・」

キングは呆れた様子で言った。

「・・・・私がまた犯罪を犯さないと思わなかったのか？」

思っていた。確実に犯すと思っている。

「でも、あなたに依頼したい仕事があるの」

ヨイリーが落ち着いた様子で言った。

「・・・じゃあそれを見越して私を蘇らせたのか。全く、君達はたまに予想外の行動をするな」

キングが外を見ている。蒼く澄み渡る空が一面に広がっている。

「あの少年・・・・・星河スバルもそうだった・・・・」

しみじみとキングが言うと、一層伝わってくる。それだけスバルとの戦いは記憶に残っているのだろう。

「話を戻そう、まさか無料(タダ)で働くとは思っていないだろう?」

もちろんだ。そんなことは百も承知だ。

「ええ、あなたがこの仕事を請け負ってもらったら、以前の罪は全てなくなるわ」

「・・・・・え?」

思わず俺は博士を見てしまう。キングの眉が　ピクッと一瞬動いた。

「これでいいでしょ?」

「ちょ、ちょっと博士!」

俺は博士の言葉を訂正しようとする。

「それって、自由の身にするってことですか!?」

この事件が終われば自由の身にする、それがどんなことか、博士は分かって言っているのだろうか。

「ええ、そうよ」

いたって冷静に博士は答えた。

「それでいいのよ」

「けど――――」

「いいのだよ暁君」

長官に止められてしまった。

みんな頭がいかれたのか？それとも俺の耳がおかしくなったのか？

「まだ必要な物がある」

キングがゆっくり口を開いた。

「私が働く代わりにもう1つ、それに見合うだけの財力を後で貰う」

つまりは金をよこせと、そういうわけだ。

「ふざ――――」

「いいわ、保証しましょう」

またも博士から衝撃の一言が伝えられる。

「なんでそこまでするんですか！」

俺は思わず博士に怒鳴ってしまった。

「そこまでする必要があるからよ」

あくまで冷静に博士は返した。

「・・・・もう勝手にしてください！」

俺は部屋を出てしまった。

「彼は昔から変わらないな」

キングが淡々と言った。コーヒーがもうないのか、コップは近くの机に置いている。

「熱血というか、先走りやすいと言うか・・・・交渉は考えさせてもらう」

「ええ、じっくり考えてみて」

「・・・・では、牢屋に戻らせてもらおうか」

キングは立ち上がり、サテラポリス隊員の同行のもと、牢屋に行ってしまった。

「暁さんは、戻ってくるでしょうか・・」

天地が聞いた。

「・・・彼にも考えさせる時間が必要だろう」

大悟が天地に言い聞かせた。

「その『時間』があれば、ね」

ヨイリーが『時間』を強調していった。

「・・・博士、そこまで焦らなくても・・・・」

「たしかにそうかもしれないわ。だけど今アメロッパで開発された電波体が暴走しかけているという話を聞いたでしょ？このままだと世界が混乱の渦に巻き込まれていくわ・・・・それだけは止めたいの」

ヨイリーは、自分にそう言い聞かせるようにそう言った。

「このまま、なにごともなく事件が終わってくれればそれでいいのだけど・・・・」

全て上手くいくわけではない、それは自分だってそうだし、相手だって同じだ。

そう、全ては予測不可能――――

第５６話　交渉（後書き）

更新遅くてスイマセン。理由は活動報告を見てください。

一応この話には伏線と呼べるものがあります。お気づきだと思いますが・・・

では、感想お待ちしておりマ～ス。

第57話　脱退

「アシッド、俺は独りで事件の真相を負う」

WAXAニホン支部から出て行った暁は、アシッドにそう宣言した。

『・・・本当にそれでいいのですか？』

「ああ、俺は自分のやりたいようにやってみたい。・・・なあに、少しばかしサテラポリスから離れるだけだ。別に永久に離れるって訳でもない」

無理に作った笑顔でそう言われても説得力がない。けれどこの人はそういう人だ。

『そうですか・・・・・』

ここで止めることもできる。けれど・・・・

『分かりました、私も一緒に行きます』

そう、これでいいのだ。

「本当か！？」

そんなに驚かなくても、私達は相棒（パートナー）でしょう？

『はい、私もついていきます』

「おまえなら止めると思ったんだけどな～」

止めると思うならそんなこと宣言しないで貰いたい、シドウ。

「じゃあ、俺らも始めるか」

こうして始まった単独での任務が始まろうとした。

実はこれには裏の事情がある。

『シドウを単独で泳がせる？』

思わず驚きの声を出してしまう。

「ええ、そうよ」

博士は淡々と言ってしまうが、それは大変なことだ。

幾らあんな人間でもエースはエースだ。

「彼なら単独のほうが仕事をはかどると思うわ」

『仕事？泳がせるのにですか？』

「簡単に言うとね。彼はキングのことで猛反対してたわ」

たしかにそうだ。私もそうだが。

「それで彼のことだから怒ってどっか行っちゃうと思うわ」

否定できない。彼ならどっか行ってもしまってもおかしくはない。

「だから、先に仕事を決めて裏で働いてもらうのよ」

なるほど、ここでそう来るか。

「サテラポリスでの仕事は、相手に漏れる場合が多いわ。けど、単

独での行動は・・・・」

『漏れにくいと。そして仕事は私が指示をすればいいと』

「理解できたわね?もし彼がどこかに行かなくても、それは他の人がやってくれるわ」

『他の人?』

「あなたは気にしなくてもいいわ」

誰だろう、このサテラポリスにそんな人もう1人いるのであろうか。

「じゃ、あなたはシドウちゃんが暴走しそうなときは止めて頂戴」

『分かりました』

こういう事情だ。

では、最初の仕事を始めよう。

『シドウ、では星河スバルを尾行しましょう』

「なんでスバルを？」

『敵は必ず星河スバルの近くで騒ぎを起こしています。ならば、星河スバルを尾行すれば必ず敵は現れます』

「なるほど～。頭いいんだな、アシッド」

『そして敵と交戦する近くに、シルバー・ウィンドは現れます。そこで正体を暴きましょう』

「そうだな、そろそろあいつの正体も知りたいし・・・・」

『では決定です。コダマ小学校に向かいましょう。もちろん内緒で』

「よし、じゃあ行くか」

こうして私達も行動を開始した――――

「これでいいんですね？」

ヨイリーは電話越しの相手に聞く。言葉からして、ヨイリーより地位が上のようだ。

「ああ、それでいい」

相手はそう素っ気なく答えた。

「これで、ことは進む」

「・・・そうですか。さすが『閃光』の異名を持つ戦士だったことはありますね」

「やめてもらいたい。もう昔のことだ。けれど、私のかわりに働いてくれる子もいそうなんで、良かったのかな？」

「そうですか・・・では、お体に気をつけて」

「あなたこそ、無理をせずに」

そうして電話は切られた。

「じゃあ、キングのところに行きましょうか」

暁が出て行ってから2時間、世間的には13時となった時のことだった。

第57話　脱退（後書き）

では、感想お待ちしておりマ～ス♪

過去編？　ディーラー（前書き）

暁脱退前のディーラーです。

過去編？　ディーラー

ここは、メテオGの事件まえのディーラーのアジト。

「キング、仕事が終わったぞ？」

暁はやっと終わったとばかりに戻ってきた。

「遅かったじゃないか、息子よ」

キングがある資料を見ながら返事をした。空中椅子に座っており、フワフワと浮いている。

「なんの資料だ？」

キングがなにかの資料を見るなど珍しい。なぜなら彼は見た資料は即座に覚えられるのだから。

「いや・・・・最強の電波体を作るためには何を使えばいいか分からなくて、考えていたのだよ」

「最強の電波体？」

たしかそんなことは計画にはなかったはずだ。

「それで、過去の資料を読みあさっているのだよ」

「最強の電波体が何で必要なんだ？」

メテオＧさえあれば計画は達成される。それなのになぜ必要なのだろうか。

「世界を征服する際に、その地域ごとに見張り人が必要だと思ってな。賢く、強く・・・・」

彼はそう言い聞かせるように呟いた。

「あんたらしくないな、そんなに大変なのか？」

「ああ、相当な技術をようする。これを作るのは全世界のＷＡＸＡの技術力を結集すればできるくらいだ」

「そんなにか？」

そこまで必要なのか。キングを悩ませるほどの代物なのか？

「・・・ノイズで作るのである程度簡単だと思ったが、難しいな」

「なにかモデルがいるのか？」

するとキングは暁に自分の持っている資料を渡した。

資料は写真付きであった。写真には６体の電波体らしきものが写っている。

「それが、最強の電波体を作る鍵なのだよ」

6体の電波体はそれぞれいろんな色をしている。形も皆それぞれであり、1つのチームらしさを感じられない。

「これをノイズと電波で作ることができれば、世界は私のものに・・・」

そうとう考えていたのか、キングらしくない。独り言がやけに多い。

「なるほど、これは人を守るために作られたのか」

資料にはあまり情報がなく、ただ科学の集大成だとか、あまりこちらが欲しい情報はなかった。

「これさえあれば地球を何度も壊すことが出来る」

「本当か?」

地球を何度も壊すことが出来る?そんな馬鹿げたこと本当に出来るのか?

「だから、それを人を殺めるもののために使う」

キングがニヤリと笑ってそう言った。

「なんだって!?」

人は殺さない、これが暁たちが協力する条件だった。人を殺さず世界を征服するというのが計画だった。

「おや、おまえには教えてなかったか。私達はとうに人を殺してい

るぞ？」

嫌な笑いだった。人を嘲笑うような、そんな笑みだ。

「・・・おまえ・・・・・！」

「気付かないとは愚かな、クインティアとジャックはとうに気付いていたぞ？・・・他のやつは死ぬ時に気付いたがな」

気付かなかった。いないと思った奴は、海外に派遣していると聞かされた。それも、クインティアに。

「おまえだけだよ、そんな平和ボケしているのは」

突き付けられる現実。それに暁は愕然とする。

「いっとくが、クインティアは分かっていて協力しているのだよ・・・まあ、これからなにか起こそうとも思っているようだが」

耳に入らない。ただ自分達は人を殺していたと。知らず知らずのうちに人を殺したという現実。

そして信頼していた、愛していた人物に裏切られた悲しさ。全てを暁は理解した。

「・・・まあ、最強の電波体は諦めたよ、電波体にノイズを注入して強い電波体に――――」

「黙れ！」

もうこんなところにいられない。こいつを止めなければ。

「おまえはもう用済みだ。こんな者がいても使えない」

キングが言うが早いか、暁の立っている場所に穴が開く。

「ッ！これは！」

「さようならだ、息子よ。もし、私に歯向かう勇気があれば、また私の元に来るがいい」

穴に落ちながら、暁はキングの声を聞き、アジトから出された。

「では、ジョーカー。まず仕事を頼もう」

どこからともなくジョーカーが降ってきた。かなり上にいたのか、振動が凄い。

「おまえはＷＡＸＡから、おまえの設計図を盗んでもらおう。あれは、今後の計画にも必要になるかもしれないからな」

『御意』

そう言った途端にジョーカーは消えた。

「さあ、私の計画も回り出すぞ・・・・・ハハハ！」

なお、最強の電波体を作る計画は、後にキングはクリムゾンドラゴンを産み出すことになった。電波体にすることは不可能だったと思われる。電波とノイズ、という問題ではなかった、とは誰もまだ気

付いていない――

「ゲホッ！」

どこに流されたか分からない。けれどこれだけは分かった。キングを止めなければならない。

「やってやる・・・いくらでも」

暁は立ち上がって、ある場所に向かった。そう、サテラポリスに――

後に彼は、１人の少年に思いを託し、キングの野望を阻止すること

になる。

（キング、おまえはあの時なにをしようとしていたんだ？）

暁はコダマ小学校に向かっていた。近くの駄菓子屋でうまい棒を買って、それを食べながらだ。

（俺には分からない。けれど、おまえがまた悪事を、俺はそれを止める）

彼はそうして、事件の真相を追い求めて奔走する――――

過去編？　ディーラー（後書き）

次話は過去編ではありません。

第５８話　質（前書き）

質と書いて「たち」と読みます

第５８話　質

「ＺＺＺＺｚｚｚｚ・・・・・」

寝息を立てて気持ちよさそうに寝ているカイ。

「星河、起こしてやれ」

起きなさそうだが、こんなに気持ちよく寝ていると。

トントンと背中を叩く。けれど起きない。

パンと背中を思いっきり叩いても起きない。

『俺に任せな』

ウォーロックがハンターから出てきた。

『起きろ！ビーストスイング！』

やりすぎだろう。スバルは止めようとするが、追いつかない。

けれどウォーロックの爪はカイには当たらなかった。

「え！？」

止まっているのだ。ウォーロックは驚愕の表情でカイを見つめている。

『それはやりすぎだ、ウォーロック』

カイのハンターかゲイルが出てきた。やれやれといわんばかりの表情でカイとウォーロックを見ている。

『音で起きるんだよ、コイツは』

といってゲイルはバサバサと翼を羽ばたかせる。

クラスの全員がコチラに注目している。ルナに対してはあからさまに怒っていた。

けれど起きないカイ。

『起きねえじゃねえか』

ウォーロックがそう言った。

それにしてもここまでして起きないとは、ある意味今カイは幸せだろう。

『・・・いつまでも寝てんじゃねえ！』

結局暴力に走るゲイル。拳を握り締め、カイの背中を殴る。

「痛っ！」

カイが勢いよく起きる。顔を歪ませていて、本当に痛そうだ。

周りでは失笑が入り混じった視線でコチラを見ていた。

「もう少し寝ていたかったのに～」

寝るなら家で寝ろ、と先生が言って授業は再開した。

ゲイルはハンターに戻っていた。

『・・・さっきの・・・あれは・・』

ウォーロックはぶつぶつ呟いてハンターに戻っていった。

「午後の国語は殺生だろう～」

とカイが呟いた。給食の後の授業はたしかに睡魔に襲われるが、それを耐えなきゃ駄目だろ。

そして授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「じゃあ、今日は終わり～」

いつもと変わらなくみんなは帰りの準備をした。

「ねえ、星河君」

急に話しかけられた。

「なに？」

声の主はギンガだった。なにを考えているか分からない表情でこちらを見ている。

「君は、世界を何度も救っているよね？」

「う、うん」

突然聞かれて少し動揺してしまった。

「たしか・・・・・死んじゃった人とかはいなかったよね？」

「え・・・サテラポリスからそう聞いているけど」

ギンガの意図が分からない。なぜこんなことを聞いているのだろう。

「じゃあ、もし――――」

「死んじゃった人がいたら?」

「え!?」

なにを言っているのだろう。意味が分からない。

「君が関わってきた事件で、もし死者がいたら、君はどうするの?」

「・・・・分からない」

「やっぱり・・・・君は器じゃないよ」

最後に意味深な言葉を言って、ギンガは去っていった。

「なんだろう、あの子」

急にギンガから殺気が伝わった。明確な物ではないが、なにか、質(たち)の悪いものが。

『・・・・あいつ』

「どうしたの?ウォーロック」

『あいつのハンターから、ウィザードの気配がしねえ』

「え?」

今時、ウィザードがいないのはおかしい。欲しくない、思う人も居るようだが、ギンガのような人は怪しさが増す。

『あいつ・・・・・なんなんだ?』

「・・・・・分からない」

「おい、スバル」

カイに話しかけられた。

「なに言われたんだ?」

「いや、よくわかんないこと言われただけだけど」

カイがなにか考えてから、また言葉を放った。

「あいつの言うことはあんま気にすんな」

「・・・・・うん」

それが正しいと感じた。なぜだろう。けれど、そんな感じがする。

「じゃあ、さき帰っててくれ」

「うん、じゃあね」

スバルは帰りの用意もって、ルナ達のもとへ言った。

誰もいない教室、いるのはカイだけだ。

「てめぇも、質悪いな――――」

「なあ、ギンガ」

その言葉が発せられた数秒後に、物陰からギンガが現れた。

「君もね、カイ君」

第５８話　質（後書き）

感想くださ～い。
ユニークが６０００、ＰＶが４００００がいきました～。ご愛読ありがとうございます！

変身の要望あと１つで～ス。お待ちしております。

第59話　宿題

「おまえ、性格悪いな、本当に」

「なんのこと？君は人をすぐ疑う癖があってあまりいい人間とはいえないね」

2人は教室で睨み合っていた。

「・・・引き下がる気はないのか？」

「主語が分からないけど、僕はやろうとしたらやり遂げる人間だよ」

カイは緊張を解かない。対するギンガは緊張を解いている。

「あんまり『宿題』を長引かせたくはないんだけどな」

「へ～、そうなんだ」

ギンガはただ、相手に嫌悪感を抱かせるような言い方をしている。

「・・・言いたいことをいったらどうだ？」

聞いているとムカついて仕方がない。

「じゃあ、本題に移ろうか」

ギンガの表情が、消えた。

「君は、なんなの？」

「・・・・どういうことだ？」

ギンガは、怒りとも憎しみともとれる表情をしている。いや、明確ではないのだが、少なくともカイにはそう感じた。

「君は何者なの？」

「ただの普通の小学生、だけど？」

あくまで普通にそう答えた。けれどギンガはその答えに満足はしていない。

「そんな答えをするなら――――」

「殺すよ？」

突如、ギンガから殺気が放たれた。常人なら気を失ってもおかしくないだろう。

「ほら、君は普通に立っている。君は普通じゃないだろ？」

「そういうおまえも普通じゃねえな・・・・」

常人にこんなに殺気が出せるわけがない。修羅場を潜り抜けた者か、もしくはもの凄い怒りと憎しみを秘めた者か。その両方とは小学生にしてはあまり考えられない。いや、考えたくない。

「・・・まあいいよ、いずれ君の正体も暴くよ」

そういってギンガは教室から立ち去ろうとする。

「おまえの過去が何であれ、おれはやりたいことをするまでだぜ」

カイの言葉にギンガは止まった。いや、硬直したといったほうが正しいだろう。

「『宿題』・・・か。その本当の意味を俺は知って、初めておまえの――――」

「これからは、もう余計な詮索はなしだよ」

そういってギンガは今度は本当に立ち去っていった。

「・・・決まりだ」

『なにがだ?』

ゲイルがハンターからカイに聞いた。

「帰ろう」

『べつに宣言することじゃなくね?』

そう突っ込むゲイルだが、言葉を続けなかった。

「やらなきゃいけないこと、それが『宿題』」

カイは1人で呟いた。

「後々役立つことだが、やる前はやりたいとは思えない」

昇降口に向かいながらも、カイは呟いた。

「やった後には自分に得なことがあるはず」

自分に言い聞かせるようにカイは呟いた。

「じゃあ俺は、やった後に何を得るんだ?」

（どちらも勝負に出るか・・・・）

出られなくても、思うくらいならできる。

（君はどうするのかな、ウィンド）

彼なら、どちらを選ぶだろうか。

（ウィンドを相棒（パートナー）にするくらいなんだから、きっといい答えを出してくれるよね？）

（キリュウ君）

第５９話　宿題（後書き）

感想等お待ちしておりマ～ス。一個謎が増えましたね？『キリュウ』、誰でしょう？考えてみてください♪

感想お待ちしておりま～す。短くても結構です！

第６０話　カレー

星河家

「そういえばウォーロック、なんでハヤテ君にやったビーストスイング止めたの？」

なぜかウォーロックはビーストスイングを寸止めした。

『止めたんじゃねえ、止まったんだ』

「止まった？」

止まる？そんなことがあるのか？疑問だ。

『まるで、なにかに遮られたような・・・・』

「遮られたって、なにもなかったじゃない」

まるで空気中で止まったという感じだったはずだ。

『いや・・・・あいつなら・・・』

「あいつ？そんな人いるの？」

動きを止めることのできる者なんかいない。ウォーロックもどこかおかしくなってしまったのではないか？

『シルバー・ウィンド・・・・』

「・・・・え？」

『あいつなら有り得るぜ』

たしかにシルバー・ウィンドなら有り得る。けれど、それは――

『カイがシルバー・ウィンドの可能性があるってことだ』

それは、否定できなくもない。ハヤテは少し不明な点が多い。けれど、それは考えたくない。

「そんなの、有り得ないよ。ウォーロック」

『分かんないぜ？裏で俺達の命を狙ってたりしてな』

「やめてよ、そんなこと。明日遊びに行くのに・・・・」

徐々に語尾が弱くなってしまった。

『・・・まあ、おまえがどうしようが勝手だがな。俺は怪しませてもらうぜ』

そういってウォーロックはハンターに戻っていった。

「・・・・そんなこと、ないよ・・・・・」

「スバルー、ご飯よー」

「・・・分かった、今行く」

スバルはリビングに足を運んだ。

「お、今日はカレーか」

大悟が椅子に座りながら言った。

「今日は結構腕によりをかけたわよ～」

「そうか、あかねがいうなら間違いないな」

大悟とあかねは楽しそうに会話をしていた。

「今日はカレーなの？」

「そうよ、おいしいわよ～」

とあかねがスバルにも同じことを言う。それだけ自信があるのだろう。

『へぇ～、そんなに美味いのか？』

「えぇ～、ウォーロック君はウィザードフードがあるから、それで我慢してね？」

『なっ！これは！マグロ味だと！？今日はごちそうだな～！』

おまえは犬か、とツッコミたくなる会話だ。

ちなみに『ウィザードフード』とは、あまり人間の食べ物を食べたがらないウィザードにも食べてもらえるように開発した物だ。というのも、ウィザードに排泄はできない。なのでゆっくりと吸収していった食べ物を空気中に電波として放出していくらしい。けれど、元ＦＭ星人のウォーロック達は元々ウィザードとして作られていないので、これを放出をやっている間は体が思うように動かなくなるなどあまりよくないらしい。だからウィザードでもすんなり食べられるようにつくったらしい。

「では」

『「「「いただきま～す！」」」』

こうして家族で楽しい食事が始まった――

『おいカイ』

「ん？なんだ、ゲイル」

カイは2人で机をはさんで食事だ。といってもカイはあまり料理がうまくないのでほぼフードディスペンサーに頼っている。けれどそれも、旧式のものだ。材料が無ければ料理を作ってくれない。

『なにが決まりなんだ？』

「・・・・・答えなきゃ駄目？」

今日のご飯は肉野菜炒め、湯気が立っていて食欲をそそられる。

『いっとくけど俺達はコンビだ』

「まあ、そうだけどさ～」

カイはただ箸を動かす。やはり食べるのが早い。どんどん肉野菜炒めとご飯が消えていく。

「決まり・・・・・まあ考えて」

とカイは言う。まるでなにかを隠すように。

『教えろ～』

「うるさいから黙って？飯食えないじゃん」

カイは食事はあまり喋りたがらない。それは食う時間が遅くなるからだ。そんな簡単な理由でコミュニケーションを取らないのはどうかと思うが。

『・・・・・ったく』

「・・・ごちそうさま」

『早っ！』

1人前の料理をたった3分程度。やはりカイは化け物なのか。

「で、分かった？」

『分からないって！』

呆れ顔になるカイ。そんな彼をゲイルはただ眉を細めて見つめている。

『・・・教えない気か？』

「考えろ、俺から言えるのはそれだけ」

横にゴロンと寝転がったカイ。

ゲイルは外に出た。今日はもう曇ってしまって星は顔を見せない。

雲は群青色、紺色に染まって、所々薄い所がある。

『今日は微妙だな』

誰に言っているのかも分からない。けれどゲイル自身は分かっている。

『また・・・・・明るくしてやるよ、俺が』

そう、ゲイルが呟いた。それは決意とも取れる。

『・・・・・じゃあ、またな』

もうこの世に去っていった、ゲイルはそう告げた。

空は明るさを戻すどころか、闇を深くしていった。

第６０話　カレー（後書き）

スバルの家の食事はまだ書きます。

では、感想お願いしマ～ス

第61話　悪戯

スバルはバクバクとカレーを食べていった。本当に美味しい。さすが母さんだと思ってしまった。

「ふふ、おいしい？」

「うん、おいしい！」

スバルは元気よく返事をした。口の周りにルーが付着していることから急いで食べているのだろう。

「そんなに急がなくてもまだあるわよ？」

といってもスバルはスピードを落とそうとはしない。

ウォーロックはというと、ウィザードフードを犬のようにガツガツ食べている。はたから見れば本当に犬だ。

「やっぱりあかねの料理は美味いな！」

大悟も感嘆の声を上げた。

「そう喜んでくれると嬉しいわ～」

今夜はみんな上機嫌だった。急いでスバルと大悟はおかわりをする。ここにカイがいたら即ごはんが消えてしまうだろう。

「あ、そうだスバル」

思い出したように大悟が言う。その眼はさっきまでとは違い、真剣な眼だ。

「おまえに言うの忘れてたな？」

「なにを？」

スバルもスプーンを止める。

「あのな、ＷＡＸＡは再構築したんだ」

「だからなにを？」

スバルは身を乗り出して再度聞いた。

「ミスターキ――――」

《ここで臨時ニュースです！》

誰も見ていなかったテレビからの音声だ。４人は喋るのをやめ、テレビに耳を傾けた。

《今朝、このテレビ局に謎のメールが届きました》

謎のメール、それは犯行予告などをあらわす言葉と言っても、今の時代では過言ではない。

さすがに今時紙の手紙などはあまり聞かない。だからメールで送信するのだ。しかも送信元は分からないようにしてある。なんとも陰

湿な物だ。

《では、メールを読み上げます》

とアナウンサーの声のあとに、その謎のメールが画面に表示された。

「・・・・・え？」

その文面を見てスバル、いや家族全員が驚愕の表情をした。

《ロックマンは英雄などではない。ロックマンは人類の敵である。我々人間はロックマンを排除すべきである。あの偽善者ぶった輩はすぐに排除すべきだ。このメールを見ている人間よ、もう1度考え直して欲しい。誰が悪で、誰が正義かを・・・・・と、こんな悪戯メールが届きました。今後このようなことがないようにしてほし――――》

「全く、馬鹿らしい」

と言って大悟はテレビを電源を切った。声は大きくないが、その声は苛立ちに満ちている。

「こんなこと気にしなくていいぞ、スバル」

「う、うん・・・・・」

スバルもいささかショックだったのか、声に元気がない。

「スバル、大丈夫よ。ただの悪戯だから」

あかねも優しく声をかける。

『んなの気にしててもしょうがないぜ？』

ウォーロックも心配していた。

「・・・・ありがとう・・・僕、明日遊びに行くからもう寝るね？」

「・・・・ああ、おやすみなさい」

スバルは自分の部屋に駆け上がって行った。

「あんな悪戯するなんて、ヒドイ時代ね」

「・・・・悪戯なんだろうか・・・・・・」

大悟が呟いた。

「そんなこと言わないでよ、ね？」

「ああ、そうだな。すまん」

ウォーロックはただ黙って考え込んでいる。

（・・・・スバルの心を揺さぶる作戦なら・・・・・・まさかな）

自分で思ったことを否定したウォーロックは、スバルの元に戻っていった。

「悪戯・・・・・・か」

なぜか悪戯ではない気がした。

心から悪意を持ってあんなメールを出したのではないかと思えた。

「考えすぎ・・・・かな？」

スバルは布団の中に潜りこんだ。

明日は早い、だからさっさと寝てしまいたかった。

けれどやはりいつもより寝るのが早いから、寝れなかった。

（・・・・早く寝たいな～）

スバルはそれから寝るまでそんなことを思っていた。

第６１話　悪戯（後書き）

感想お待ちしておりマ～ス。最新話読んででなくても感想書いてくれても結構で～ス。

深まる謎編、今までで最長の可能性があります・・・・予想外です。別に悪くないんですがね。できれば最終章とその前をできるだけ長くなって欲しかったんですが・・・・・まあ、いいか。気にせずがんばっていきます！

第62話　バス

「ふぁ～・・・・・よく寝た」

スバルは起き上がった。

さんさんと降る日光がスバルを照らす。

「ウォーロック今なん――――」

スバルは言葉を止めた。

今は6時。ウォーロックはまだハンターの中で寝ていた。

「・・・・・早すぎたな」

まだ準備をしてなかったので準備をする。

まあ、財布さえあればなんとかなるのだが。

それと着替えてしまう。

いつもと変わらない服装、気に入ってるからこれを着ているのだが、カイ曰く「毎日毎日着てるから気持ち悪い」と言われている。

『・・・お、朝か・・・ってスバル、もう起きたのか！？』

ウォーロックが跳ね起きた。いや、ベッドで寝ていたわけではないのだが、そんな感じでウォーロックは起きた。

『・・・・今日は絶対なにかあるな・・・・』

「そんなこと言わないでよ・・・・」

縁起でもないことを言わないで欲しい。これから遊びに行くのにそんなことを考えないで欲しい。

知らず知らずのうちに眼が細くなっていた。

『あ・・・・悪かった』

とウォーロックが謝った。けれど自分ではなぜ謝ったか分からない。

着替え終わってしまった。時間はまだある。集合時間は9時半だったはずだ。

「・・・・どうしよっかな～」

しょうがないので朝ごはんが出来るまでにハンターでテレビでも見ることにした。

ニュースしかなかったが、スバルはそれを見ていた。

「あ～、今日は遊びに行くのか～」

ミソラはベランダで太陽を見て背伸びをしていた。町並みの風景がミソラの翡翠色の瞳に写る。

『じゃあ、お化粧しないとね♪』

ハープがミソラに言った。声からして楽しそうだ。

「うん！ちゃんとしないとね！」

ミソラは化粧台の前に座って、化粧を始めた。

これから会う人にかわいいと言って貰う為に。

もう9時になろうとしていた。

当然カイも起きている。

「よ〜し、これでいいか」

適当に服に着替えた。濃い群青に近い青色のTシャツに白のズボン。

銀色の髪がやけに輝いている。今日は晴天だ。

『カイ〜』

「なんだ?ゲイル」

ゲイルがだるそうに話しかけてきた。

『俺、どっか行くわ～』

「・・・・なんで？」

『今日はいい風吹かないから～』

「・・・・・あっそう」

去る者追わず、だ。それがカイのポリシーだ。

『じゃあ、どっか行ってくる』

といってゲイルはどっかに飛んで行ってしまった・

「・・・・なにしに行ったんだ？」

けれどもうすぐ集合時間だ。さっさとバス停に行ってしまおう。

昼食の金と空のハンターを持ってバス停に向かった。

そしてバス停

「スバル君も遅れずに来たし、ばっちりね！」

ルナがそう言った。カイはその声をうるさそうに聞いていた。

今回は全員が時間通りに揃っていた。ミソラは先にＴＫシティに行っているらしい。その方が近いからだ。

「じゃあ、行くわよ！」

みんながバスに乗っていく。

（楽しいといいな～・・・・）

スバルは心の中で思った。

『今日襲うか・・・・・』

ウェーブロードの上で、水色の電波体がそう言った。

『だが・・・まだだ・・・・』

ぶつぶつ呟いている。

『もう少し、待つとしようか・・・・・』

電波体もまた、ＴＫシティに向かっていった――

第６２話　バス（後書き）

さあ、最後の剣士は誰？・・・・・と言ってもアレなんですけどね・・・・

では、次話もご期待を！

第６３話　最悪

「じゃあ、行くわよ！」

バス停からスバル達は、ルナの指示を聞いて困った表情をする。

「「「「どこに？」」」」

当然といったら当然だろう。プランは前回同様ルナに任しっきりだ。

「今日は去年とは違って、お店を回るのよ！」

「だからどこの？」

カイがうんざりしたように聞いた。

「まあ、私に着いてけば分かるわよ！」

（だったら今までの会話無駄じゃん）

と思いつつも口に出してはいけない。それを言うとルナは怒る。

「じゃあ、あとはミソラちゃんを待つだ――――」

ルナが言葉を止める。後ろからタッタッタっという音が聞こえる。

スバルは後ろを振り返る。他のみんなも振り返る。

カイとツカサ意外は驚きに眼を見開いた。

そこにいる美少女は誰か？いや答えは分かっている。答えはミソラだ。

けれど分かったのは眼の色と髪の色、そして身長から推測してだ。

帽子をかぶっており、眼鏡もしている。

だが、目の前にいる少女は可愛かった。カイとツカサ以外の男子の頬が少し赤い。

たしか前にも変装していたが、その比ではない。もはや変装というには目立ちすぎている。

「おまたせ～、どう似合ってる？」

似合ってる？じゃない。声に出ないくらい似合っている。

「似合ってるよ、ミソラちゃん」

「似合ってんじゃね？前よりは」

ツカサとカイが賞賛した。

「に、似合ってますよ」

「に、似合いすぎてるぜ、ミソラちゃん！」

「・・・・似合ってるぜ」

「え、え～っと・・・・似合ってるよ」

とそれぞれ各々の感想を言う。

「そ、そういえば、なんでカイ君はミソラちゃんを知ってるの？」

しばらく呆けていたルナはカイに突然聞いた。声からして動揺しているのが分かる。

「いや、トップアイドルを知らないのなんて逆におかしくね？」

「そういうんじゃなくて・・・・・・」

前にあったことがあるの？と聞きたかったのだが、カイは言葉をそのまま受け取ったらしい。

「前にあったことがあるからよ。ね？カイ君」

（・・・・・あれ？）

スバルは自分の体の異常を察した。なぜか腹が重いというかなんというか、嫌なことがあったときのような感覚に襲われた。

（・・・・気のせいかな？）

けれど腹が重い感覚は収まらず、痛みも少々するようになった。

（どうしたのかな・・・・僕）

とスバルは1人で考えていた。

「ま、別におれは偶然居合わせただけだしな」

「居合わせた?どういうことですか?」

キザマロが問い詰める。カイはキザマロを見ずに答えた。

「めんどいから喋んない」

喋らないとは、言いたくないからではないか?また痛みが増した。

「・・・・早く行こうぜ?」

ジャックが暗い空気を壊していった。

「そうね、時間ももったいないことですし、行くわよ!」

そう言ってルナは歩き出した。それに吊られてスバル達も歩き出す。

「あとで聞きたいことあるけど、いい?」

ミソラがカイに聞いた。

「・・・・・分かった」

なぜか痛みは増していく。痛いから表情も暗くなっていく。

スバルは今、最悪のスタートを切った。

第６３話　最悪（後書き）

更新遅れてごめんなさい。ちょっとどうしようか考えてました。ってかスバルの痛み？分かりましたか？自分は緊張状態か先生に起こられる前になぜか腹が重いというか痛みだすんですよ。まあ、つまり嫌な気持ちになるとなりますね。

では、感想くださ～い！

ユニーク７０００突破！

第６４話　ショッピングモール

まるでショッピングモールのような場所だ。

「ここは異国の市場か？」

と分かりづらい他の漫画のネタも使っているカイ。場所も違うし。

「異国はもっと違うと思うよ？」

とミソラはそれに答える。何故かその一言ごとに体が重くなるような気がする。

「う～ん、もうすぐ着くと思うんだけど・・・・・・」

ルナはぶつぶつとハンターに表示されている地図と睨めっこしていた。

「それにしても凄いショッポングモールだね～」

ツカサが感心しきったように言った。

「そりゃあれだろ、一応ニホンの首都だし」

とジャックが言う。ジャックも感心しているようで、周りを見ながら行っていた。

「上手いもんたくさんあるんだろうな！」

「ゴンタ君、自重してください」

「自重って何だ？」

とゴンタが馬鹿丸出しの返答をする。

「・・・・・・スバル君、大丈夫？」

「・・・・・え？」

お腹が痛くてすぐに返答できなかった。

「・・・・大丈夫だよ」

「そう？顔色とか悪いけど・・・・・」

心配してくれることが、妙に嬉しかった。体も軽くなったような気がした。

「おまえ、朝なにがあった？」

カイが顔を覗き込むように聞いてきた。なぜかカイに言われたら腹が立った。

「・・・・・大丈夫だよ、別に」

とふて腐れたような声を出した。

「・・・・・あっそう」

とカイは悪気があったようにスバルから視線を逸らした。

「どうしたの本当に？なにかあったの？」

ミソラが再度尋ねた。けれどスバルは

「なんでもないから大丈夫」

と答えるだけだった。

「具合悪かったら遠慮なく言ってね？」

といってミソラもまたスバルから視線を逸らした。

自分はどうしてしまったのだろうか。頭でも知らず知らずのうちに打ってしまったのか？なぜか口調が荒い気がする。

「着いたわ、ここよ」

とルナが足を止めた。他のみんなも足を止める。

こじゃれた店で、女子が好きそうな店だった。

「ここで何すんだ？」

ジャックが聞いた。明らかに「俺達入って大丈夫？」と言いたいのだろう。

「大丈夫よ、ここは・・・・・まあ入れば分かるわよ」

といってルナは入っていった。

「じゃあ、俺達も入るか」

と言ってカイも入っていった。

なかは、ようするにストラップ系の小物が多く売られている店だった。

「なんで最初にここを？」

キザマロがまたかと眼で言っていた。

「前と同じ理由よ」

とルナがキッパリと言った。

「前って？」

「前にK都に行ったんだよ、ゴールデンウィークに」

カイの質問をツカサが素早く解決してくれた。

「ふ～ん・・・・そうなんだ」

「じゃあ、ここで３０分買い物よ！」

とルナが行った。

（買いたくないな～）

とスバルは思っていた。そんな矢先、カイとミソラがまたしても２人でいた。

第６４話　ショッピングモール（後書き）

カイとミソラが２人でいる理由はまた次話で。簡単な理由です。ヒントはミソラ、耳いいです。

ってか明日授業参観なんですがね。

そして、ショッピングモールにどんなお店があるか分かりません。お店をいくらか教えてください。

では、感想待ってマ～ス！

第65話　優しさ

「スバル君これ好きそうかな？」

「さあ？」

カイはミソラの買い物、スバルの好きそうな物を探させられていた。

「ってか何で俺に聞くの？」

1度しかあったことがある人間に好きな人の好みなど聞くとは思えない。

「・・・あなた、何者なの？」

「なんかそれつい最近にも質問されたな～」

とカイは上を向いて呟いた。

「・・・簡単に言えば近頃の事件の最後を見届けたい人ってところだな」

「なんで？」

ウイルス相手に生身で突っ込んだほどの人間だ。さすがに興味本位とは思えない。

「そんなに聞きたいなら、なんでスバルの好みを俺に聞くかまず答えろ」

「そのほうが君が喋りやすいと思って」

「・・・・・・あっそう」

「せっかく話したのにその返事はないんじゃない？」

とミソラがムッとした表情で言った。

「じゃあ俺も言うか」

ミソラの言葉を無視してカイは喋り出した。眼はミソラを捉えておらず、ストラップを探していた。

「・・・・・頼まれたんだよ」

「頼まれた？誰に」

「俺は面識ない奴に」

意味不明なことを喋り出すカイ。けれど横からでも分かる。これは真実だ。それだけは分かった。

「これでいいだろ？」

「誰に頼まれたか言ってくれない？」

「喋る気がない。それにおまえはなんなんだ？」

カイがミソラを始めてまともな眼で見た。苛立ちで満ちた眼はまっ

すぐミソラに向いている。

「スバルは大事なのか？」

「大事だけど・・・・・なんでそんなこと聞くの？」

聞かれる理由が分からない。

「じゃあ、おまえは――――」

「スバルになにをしてやれた？」

思考が止まった。いや、その言葉を理解したくなかったのかもしれない。

「おまえはなにもしてやれてない。そんなんで大事っていえるのか

？」

ミソラは下を向いてしまった。カイが言ったのは事実だ。それがたまらなく悲しく、悔しかった。

「・・・・じゃあ、私はなにをすればいいの？」

「おまえが考えろ・・・・・・・けどな、もう手遅れだ」

カイが言った『手遅れ』という言葉が脳に何回も木霊した。

「手遅れってのはな・・・・・・・そのまんまだ」

カイがそういったのと同時に、ストラップを手にした。

ミソラはただ下を向いていた。自分がどれだけ酷い人なのかを理解したからだ。

カイはミソラの右手にもっていた買い物カゴに、手にしたストラップをいれてミソラから遠ざかった。

「ミソラちゃんになにを言ったの？」

スバルがカイに言い寄った。

「べつに、ただ質問に答えただけ」

冷めて声でカイは言った。けれどスバルは違った。マグマのように熱い心でカイを殴ろうとまでした。

「・・・おれを殴ろうとするなら殴れ。けどな、殴ったことが正しいからって、暴力には変わんないぜ？」

あくまで平然と言うカイ。

「・・・・・・ミソラちゃんを悲しませないで、もう」

スバルはあくまでとどまった。それはいろいろあるが、カイの言っていることがあっているからだ。

スバルは気付けば歩いていた。ミソラに向かって。

第６５話　優しさ（後書き）

では、感想待ってマ～ス！

第６６話　ブラザー

「・・・・ミソラちゃん」

思い切ってスバルは話しかけた。

こんな状況で話しかけるのはあの時以来だろう。

そう、はじめてブラザーバンドを結んだときだ。

「ハヤテ君になにを言われたの？」

ミソラはようやく顔を上げた。スバルを見てなにか悲しそうな顔をしている。

「・・・・・なんでもないよ」

ただミソラはそう言った。元気はなく、本当にあの時のようだった。

「聞かせてよ、僕は怒らないから」

けれどミソラは口を閉ざしたまんまだ。

「スバル君に・・・・・悪いよ」

とミソラは言った。視線はスバルを微妙に合わせていない。

「僕達は・・・・ブラザーでしょ？」

ミソラはスバルに視線を戻すと、思ってもいない言葉を口にした。

「じゃあ、私はスバル君になにができたの？」

沈黙、それだけがスバルとミソラを包んだ。他の客の雑音など耳に入らない。

「・・・・いつだってミソラちゃんは僕の隣にいてくれたよ？」

「じゃあ、最近の事件はどう？私はＷＡＸＡの時は駆けつけられなかった！」

ミソラは眼に涙を溜め込んでいた。

「だから・・・・・・私はスバル君になにかしてあげれたなんて言えないの・・・・・」

悲痛なミソラの声がスバルの耳の届いた。

顔が一瞬スバルは歪んだ。そこまで思ってくれたのか、そこまで彼女を追い詰めていたのかと痛感したからだ。

「・・・・・ミソラちゃん」

「私は――――」

「聞いて！」

スバルは怒鳴った。怒鳴るつもりはなかったが怒鳴ってしまった。

ハッとなって周りを見たら、ほとんどがコチラに視線を向けていた。

「ミソラちゃん、来て！」

「え！？」

スバルはミソラの手を取り、店を出て行ってしまった。

「俺って嫌われ者だな～」

とカイはぼやいていた。自分が悪いのだが、さすがに人に嫌われたら多少は傷つく。

「まあ、しょうがないんだけどな～」

ストラップを片手に取り、買おうか買わないか考えていた・

「・・・・・これってもしかして自己犠牲？」

そんなことは考えていなかったが、客観的に見ればそうかもしれない。

「まあ、いいや。頼みごとは一応聞いてるし」

勝手に納得し、ストラップをもと置いてあった所に戻す。

「・・・・・失う物は、ないからな」

そう自分に言い聞かせた。

「ちょっと、スバル君！どこに行くの？」

ミソラはスバルに聞こえるように言ったが、スバルは無視して走った。

気付けばＴＫタワーまできてしまった。結構な距離がった。スバルも疲れていた。別段体力が多いわけでもない。けれど走っていた。

屋内に入り、エレベーターに上る。

「本当に・・・どこに行くの？」

けれどスバルは黙っていた。黙って最上階へのボタンを押していた。

「最上階・・・・・？」

ドアが開いた。

屋上。ＴＫシティ全土を見渡せる場所である。

ここは人気がない。１年前にファントムブラックが事件を起こしたのが主な原因だ。

「ここで、話そう？」

スバルはミソラに、そう言った。

第６６話　ブラザー（後書き）

ここまで来ました深まる謎編。っていっても深まってないし（笑）
ここでの謎は主に３つです。ぜひ考えてください

では、感想待ってま～ス♪

第67話　＋思考

さすがに立ったまま話すと長そうだったので、2人ともベンチに座った。

「それで……ハヤテ君になんて言われたの？」

「……さっき私が言ったこと……」

涙が一粒落ち、地面で少しばかし跳ねた。

「じゃあ、ミソラちゃんはハヤテ君に言ったの？」

「……なにも言ってない」

悲しそうにミソラは言った。言えなかったと言った方が正しいのかもしれない。あまりのショックに言えなかったからだ。

「……でもさ、こうは考えられないかな？」

スバルは提案した。

「これも、1つの教えってこと」

「……え？」

よく言っている意味が分からなかった。

「簡単に言うとさ、ハヤテ君が言ってくれなかったら分からなかっ

たでしょ？」

「たしかにそうだけど……」

「だから、感謝しようってこと……」

スバルはミソラを見ずにそう言った。本心では感謝などしたくなかったのだろう。けれど、2人で面と向かって喋ることが出来たのも事実だ。そういう意味では感謝するべきなのかもしれない。

（強いな……スバル君は）

これは何回も思ったことだけれど、やはりスバルは強いんだなと。

そして

（やっぱり私は、スバル君のことが好きなんだな……）

自分は彼に惹かれているんだと、今実感している。

「ありがとう、スバル君。教えてくれて」

「うんうん、お礼を言うのはこっちのほうだよ。素直に話してくれてありがとう」

スバルは笑顔だった。自然に自分も笑顔になっていた。

スバルの笑顔にはこんな力があるんだと、気付いた。彼にはそんな力があるんだと、気付かされた。

自然とミソラは口を動かしていた。

「あ、あのね……スバル君」

今なら、彼に告白してもいいと思った。戦いが終わった後だと決めていたけど、今告白したくなった。

「私、スバル君のこと……」

スバルはきょとんとした表情でミソラを見ていた。

「私――――」

そんな時、丁度悪くスバルのハンターからアラームが聞こえた。

「ミソラちゃん、ちょっとゴメン」

といってスバルはハンターに耳を傾けてしまった。

（コレも……なにか意味があるのかな？）

とミソラは思った。マイナスに考えてはいけない。今さっき教えてもらったばっかだ。

（やっぱりあとにしよう……）

「ミソラちゃん、みんな他のところ移動しちゃったって」

ミソラは振り向いて、頷いた。

「どこにいるの？」

「僕についてきて」

とスバルはまた歩き出した。

（なんだろう、この気持ち……）

カイがミソラと2人でいたときとは違う気持ち。なんだろう。

さっきと違うとしたら、手を繋いでいるかいないかだ。

（なんかおかしいような……）

この蕾は咲いているのかいないのか、まだ疑問である。

第６７話　＋思考（後書き）

眠い！昨日は１１じまで起きていた（みなさんは普通かな？）ので眠いです！なので寝ます！・・・・・・・多分

題名は『蕾』でもよかったのですが、やはり人間としての成長なので＋思考にしました。

では、感想待ってマ～ス！

あとＰＶが５００００たっせ～い！ありがとうございます！

第６８話　避難

「やっと来たか・・・・・・」

カイは今から店に入ってこようとした2人に言った。

「・・・・遅れてごめん、みんな」

スバルはカイを少し見てから言った。

「・・・・・さっきは言い過ぎた」

カイは自分の頼んだ料理を食べながら言った。ミソラとスバルを見ずに。

「・・・さっきの続きを言わせて？」

空いていた2つの席にスバルとミソラは座った。スバルはカイの真正面だ。

「『手遅れ』ってなに？」

「自分で考えることはないの？」

カイは自分の頭をトントンと叩いて2人を見ている。あからさまに馬鹿にしている。

「そんなんだから嫌われるんじゃないの？」

スバルはつい口に出してしまった。

「そうだな、じゃあ嫌われて何が悪い？」

カイの、普通ではない質問。

「嫌われちゃ悪いのか？　なんで？」

「え……」

カイの眼がまっすぐスバルを見つめる。一方スバルは見れない。

「別に俺が悪いと思わなきゃいいだろ？」

「……それで君はいいの？」

「いいよ。嫌いたきゃ嫌えばいい。ただな、攻撃してきたら俺はやり返す」

パンをちぎって口に放り込むカイ。声も普通、つまり嘘ではない。

「まあ、質問は答えておくか。『手遅れ』……おまえら昨日のニュース見たよな？」

あまり思い出したくないことを言われ、スバルは顔が歪む。

「あの送り主がもし『ガイア』のリーダー、もしくはその一員だったら……」

「なにかをやる前の牽制ってこと？それでもおかしくない？」

ミソラは聞いた。けれどカイは鬱陶しそうにミソラを見た。

「明らかにタイミングがおかしくないか？おまえらは一応がんばってる。スピカモールが少し傷ついただけだろ？そんなんで送ってくるってことは、余程の馬鹿か敵側の人間ってこと」

「じゃあその……馬鹿って可能性はないの？」

「さあな？どちらも考えられる……けどな、俺ならこのタイミングで送るな」

「なんで？」

「このタイミングなら、スバルの心を一番抉れるからだ」

これで終わりといわんばかりにカイは料理にがっついた。

もう2人とも言おうとはしなかった。

「頼まないの？　スバル君」

「……ミソラちゃんどうする？」

「……どれにしよっか？」

「あ、そういや」

カイが思い出したように声を上げた。

ポケットからストラップを取り出す。

「一応選んどいたから、あとで金ね」

「あ……うん」

カイは出される料理に戻っていく。今知ったが、バイキングらしい。バイキングといっても、頼んで持ってくる異色のバイキングらしい。

『さあ……そろそろ始めましょうか？』

ロッポンドーヒルズのウェーブロードにいる電波体は言った。

緑色で、胸が膨らんでいた。女性なのだろう。外見を簡単に言えば妖精だろう。

『今ならロックマンも心が痛んでいるはず……あとは私がどれだけ痛めるか……』

彼女は知っていた。自分が捨て駒であることを。けれど彼女は逆らわない。

『私は計画の糧となるなら喜んで仕事をするわ……』

そんな時、どこからか悲鳴が上がった。

『……この周波数……覚えが……いえ、仕事に集中しなければ』

そして彼女も、計画を実行していく。

みんなのハンターにアナウンスが流れる。

『ショッピングモール付近の噴水広場に、謎の電波体出現！　至急、避難をしてください！』

「「「「え？」」」」

数人が驚きの声を上げた。

「……委員長とキザマロとハヤテ君は安全な所に避難して！他の人は電波変換して行こう！」

「「「「分かった！」」」」

そういってカイ以外は全員店の外に出た。外は逃げる人でいっぱいだ。

「「「「トランスコード」」」」

5人は電波変換した。

「急ごう！」

スバルの号令のもと、5人は噴水広場に向かった。

「あなたも行くわよ」

ルナはカイに言った。けれどカイは聞かなかった。

「……行くか」

「ちょ、ちょっと――――」

「何をしている！早く避難……君達か！」

突然現れた人物、それは暁であった。

「あ、暁さん！」

「いいから、ここは危険だから早く避難しよう！　君も…な！」

さっきまでいたカイはいなくなっていた。

「くそ！」

『シドウ、まずは2人の避難が先です』

「……分かった。2人とも、行くぞ！」

二人の非難を最優先し、シドウは安全な場所に避難するために走った。

第６８話　避難（後書き）

ようやくバトル～。この章は３つもバトるので大変です。

では、感想待ってマ～ス！

第６９話　死合（前書き）

しあいと読みます。

第69話　死合

『邪魔者が来たか・・・・・・・』

広場にいたのは水色の剣士。そしてそこに現れるスバル達。

「おまえ、誰だ！」

『永く生き過ぎた者・・・・・というところかな？』

「ふざけたこと言いやがって！」

ジャックが前にでて攻撃をしようとする。

『おまえ等は邪魔だ、帰れ』

「な、なんでだ！？」

ゴンタが声を上げた。『ガイア』はスバルを倒したいはず。なのに帰らせようとする意味が分からない。

『我は『ガイア』ではない』

「なんだって！？」

「じゃあなんで騒動を起こした！」

スバルは怒鳴った。

『奴をおびき寄せるためさ』

「奴・・・・・・・？」

『我は奴と決着をつけたい。だから起こした・・・・人を殺してないからいいだろう？』

「そ、だからって――――」

「スバル、黙れ」

ふいに聞こえてくる人の声。見ると、そこにはカイがいた。

「なんでここにいるの！」

「まあ、まず話を聞け」

カイは静かにそういった。

「全員、ハンターを見る」

戸惑いながらも全員がハンターを見る。

「な・・・・・・！」

ハンターにはあるメールが届いていた。

「『ガイア』と名乗る電波体がロッポンドーヒルズに出現、ロッポンドーヒルズには近寄るな・・・・・！」

「つまりおまえ達の相手はロッポンドーヒルズにいるってことだ」

そこから察すると、つまりロッポンドーヒルズに行けって事だ。

「俺は、こいつの相手をするからよ」

布状の竹刀袋から刀を取り出すカイ。

「無茶だ！」

「おまえらの目的はなんだ？・・・・・・・・・さっさと行け」

「でも――――」

「あいつは俺に用があるってんだ。おまえらは邪魔ってこと」

『スバル・・・・・・行こう』

「ウォーロックまでなに言ってんの！？」

人間と電波体の差は大きすぎる。勝てるわけがない。

『あいつは危なかったら退く、それに・・・・・・・・・』

その言葉の続きは分かった。つまりカイがシルバー・ウィンドであったらということだ。

「・・・・・・行け」

カイのその一言でスバルは意を決した。

「・・・・行こう！」

ミソラ以外の４人はロッポンドーヒルズに向かった。

「あとで話したいことあるから・・・・・・・・・生きてて」

そう言ってミソラも４人の後を追った。

「・・・・・・・・・待たせて悪かったな」

『我はまだ待っておるぞ？』

「・・・・・・どういうことだ？」

『ウィンドを出せ・・・・・・！』

相手の目的は分かった。けれど

「生憎俺のハンターにはウィンドなんて奴いないんでね」

カイは刀を構える。刃の元の部分には「神風」と金色で彫ってある。

『その刀・・・・・』

「電波刀（でんぱとう）」

そうカイは答えた。

「簡単に言えば電波を切断することの出来る刀だ」

『・・・・・・そうか、なら――――』

『殺されても文句は言うな』

引き下がる気がないのを知ったとたん、分かりたくもない殺気を放たれる。

「殺される？　なにそれギャグ？」

カイは不敵に笑って腕に力を込める。

『我が名はフランベルジェ・・・・・・そなたは？』

「俺は、カイだ」

『では始めよう・・・・・・・死合を』

その瞬間、２人は同時に地面を蹴った――

第６９話　死合（後書き）

では、感想待ってマ～ス！

第７０話　捨て駒（前書き）

広場とロッポンドーヒルズでのバトルはほぼ同時（描かれている時間は）です

第７０話　捨て駒

「ハヤテ君・・・・・大丈夫かな」

『心配したってしょうがねえ、とにかく『ガイア』を倒すことだけ考えろ！』

「・・・・・・そうだね」

今は無事に戻ってくることを願うしかない。

「あの子なら大丈夫だよ」

追いついたミソラが優しく言った。

「あの子は、強いから」

「・・・だといいけど」

「信じようよ、生きて帰ってくれることを」

ミソラはスバルにそれだけを願っていた。だからこんなことがいえる。

「分かった・・・・・・もうそのことについては話さない」

迷っていたら負けだ。もう決めたのだ。今更戻る意味がない。

『ようやく来たか・・・・・・・・』

待ってましたとばかりに緑色の電波体は言った。

そしてスバル達がロッポンドーヒルズに降り立った。

「おまえが『ガイア』か！」

『そうです、名をプロヴェ・ウッドという』

「木属性か・・・・・燃やしてやるよ！」

『できるなら、やってみなさい』

プロヴェはジャックに言った。自信満々なのを見ると、炎にも対策があるようだ。

『では、さっさと終わらせましょう・・・・・あの方を待たせてられませんから』

「あの方って誰なの？　なんで君達はそんな人に従っているの？」

『・・・・分かりないわよ。ただ、もしかしたらそうプログラミングされてるのかもしれないわ』

「捨て駒扱いされてもいいの！？」

『それが本望だわ』

プロヴェの言葉には嘘がない。だからこそ、それが信じられない。

『スバル、行くぞ！』

「うん」

「「「「「ウェーブバトル　ライド　オン！」」」」」

『さあ、いきましょうか』

「さっさと終わらせてやらあ！　ペインヘルフレイム！」

ジャックが紫色の火の玉を幾度も投げつける。

『単純すぎるわ』

地面から植物が生え、プロヴェを包む。

『プラントウォール』

火が植物を燃やし、煙を立てる。

「どうだ！」

煙が晴れ、その光景にジャックは驚愕した。

「無傷！？」

そう、植物の壁はさっきと同様に存在していた。

「そんなわけはない、木は燃えたはずだ！」

冷静なツカサも驚いているのか、声が大きい。

『こんなので勝てると思ったの？』

植物は地面に戻っていった。

『これで2人を・・・・・・・・意外だわ』

失望している。それだけは分かった。

「く、バトルカード　ファイアスラッシュ！」

スバルは炎の剣を右手に、プロヴェに向かって走る。

『かかったわね！』

その言葉と同時に、プロヴェとスバルは植物の壁に包まれた。

「な・・・・・・・！」

「スバル君！」

けれど時すでに遅し。スバルは包まれた後だ。

「くそ！　だったら燃やして助けるぜ！オックスブレス」

直線状の火炎放射が植物の壁にぶつかる。

植物は表面が燃えた。

「これを繰り返せば――――」

言葉が止まった。なぜなら、

「再生した・・・・・・・！」

そう、火で燃えた分だけ植物は再生した。ジャックの時も同様だろう。

「これじゃスバルを助けられない！」

ジャックが毒づいた。けれどプロヴェは外部も攻撃し始める。

突如植物で編まれたような人形が数体出現する。

「俺達を中に入れさせない気か！」

攻撃しても、すぐに再生する人形。どれだけ攻撃しても再生する。

「ちっ・・・・・・キリがねえ！」

「ここは？」

『ドームの中って言えばいいかしら？』

顔を上げればプロベェがいた。

『半径３０メートルのドーム。外部からは周波数変換で移動も出来ない』

『一対一（サシ）で勝負って訳か・・・・・』

苦々しくウォーロックは言った。

『ええ、ここでなら仲間の手助けもないだろうしね』

「・・・・ウォーロック」

『ああ！』

だったら実力で勝つだけだ。

「クロスシステム！」

スバルを一筋の光が包む。徐々にスバルの姿が変化していく。

「スラッシュクロス！」

濃い緑色主体の姿になったスバル。両手には３つずつ鋭利な爪があり、接近戦が得意なように見える。

「改めて勝負だ、プロヴェ・ウッド！」

『来なさい！　あなたを痛みつけてやるわ！』

第７０話　捨て駒（後書き）

スラッシュクロスは風月さん応募の物です。ありがとうございます！

まだ１つ応募しております！　それは近々出るのでぜひ応募下さい！

第７１話　相性

剣を真横に振った。けれどそれは奇妙な波を描いている剣に防がれてしまう。

鍔迫り合いになったが、すぐさまフランベルジェとの距離を取った。

一進一退といったらいいのだろうか。双方とも多少のかすり傷を負っているが、致命傷は負っていない。そしてどちらも今のところ互角に見える。

「見える」というのは簡単だ。

フランベルジェが本気を出してない。

（・・・・・・どうする？）

本気を出していない、これは奥の手を出していないとも取ることができる。

そしてコチラには一撃必殺の技も持っていない。つまり一発逆転がない。

地形で利用できそうなのは中央にある噴水くらいだろう。

『まだ電波変換しないのか？　持久戦ではそちらが不利なのは分かってるだろう？』

分かっているつもりだ。電波体と人間では身体能力が違う。それも雲泥の差だ。

そしてカイが使うのは日本刀。相手が使うのは剣、フランベルジェの中でも大きいツヴァイヘンダー。

フランヴェルジェとは波を描いている特殊な刀身をしている。そしてその刀身で引き裂いて出来た傷は止血しにくい。つまり持久戦では血が流れすぎて最悪死ぬ場合もある。

そしてリーチも違う。相手は１９０はある身長。力もある。

ありとあらゆる点でカイは不利だ。相性が悪すぎる。

そして、策もない。あるにはあるが、これは使いたくない。

「しゃあねえ・・・・・・」

地面を蹴ってフランベルジェに飛び込む。

刀を縦に振り上げた。

『単調すぎるな』

縦に振り上げたので胴体ががら空きだ。そこをフランベルジェは狙う。真横に振るわれる剣。

「引っかかるね、あんた」

真横に振るわれる剣は、打ち落とせる。

つまり、剣を刀で殴るといった感じだ。

ガアアンと金属と金属が音をたてた。剣は下に打ち落とされる。

「これで、終わりだ！」

打ち落とされた剣を戻すのには時間がかかる。そしてコチラは剣と刀がぶつかった反動ですぐに振り上げられた。がら空きの頭。そこにまっすぐ刀を振るった――――

「がはっ！」

悲鳴をあげたのはカイだった。数メートル後ろに吹っ飛び、地面に背中を打ち付けた。

『剣だけで勝てると思ったか？』

フランベルジェはカイの腹を殴った。生身のカイでは致命傷。幸い腹でも下の部分だったので。骨は折れていない。

ゆっくりと立ち上がるカイ。腹をおさえており、その顔からはダメージの大きさが分かる。

『・・・・・・おまえにその気がないなら、殺すまでだな』

そういってフランベルジェは剣を構えた。噴水の水が、徐々に剣に吸われていく。

「・・・・・・なんだ？」

『インパクトウェーブ』

フランベルジェが剣を振るう。

刀身から、波を描いた水の衝撃波が飛ぶ。

「な・・・・・・！」

カイは必死に衝撃波を弾く。けれどフランベルジェは止まらない。

着実に追い詰めていく。

ついに弾けなくなったカイは横に避ける。

『隙だらけだな』

フランベルジェが突然カイの目の前に迫る。

カイは頭を刀で防ぐ。けれどまたもフランベルジェは腹を狙う。

勢いを生かしての蹴り。声も上げずカイは飛んだ。

『・・・・・・弱いな』

落胆した表情でフランベルジェは言った。

対してカイはもう戦う余力も無い。けれど立ち上がる。カイの視界は出血の為か視界がおかしくなっている。けれども彼は戦う。

『なぜ戦う?』

「・・・・負けが嫌なんでね」

負けず嫌い、ここまでくると呆れてくる。

『それで死んでもいいのか？』

「上等・・・・！」

カイは腰にある鞘に刀を戻す。居合いの構えだ。

『なら、死ね。アングリーウェーブ』

まさに怒涛の攻撃。さっきとは比にならないほどの衝撃波を幾度も放つ。

「・・・・・・・・・・」

カイの放った言葉は水の音にかき消された。

そして、なにかが起きた。衝撃波が分散し、ただの水となって周囲に落ちていった。

『・・・・・なに？』

なにが起きたか見えなかった。けれど分かっているのは、カイは無傷だということ。

『貴様、なにをした？』

「・・・・うるせえ」

けれどフランベルジェの勝利は決定的だった。余力が無いカイ。ほぼ無傷のフランベルジェ。

『・・・・まあいい。これで本当にさようならだ』

そしてまた、フランベルジェは剣を振るう――――

「助けなきゃ！」

広場の近くにいた少女がウィザードに言った。

『ええ、そうしましょう』

ウィザードもそれに賛成のようだ。

「そうと決まったら急がなきゃ！　電波へん――」

『待ってください！』

急にウィザードは少女を止める。

「なに？　早くしないと――」

『・・・・・・・私達が助けなくても大丈夫なようです』

ウィザードは冷静に少女に言った。

「なにをいっているの!?　死んじゃ――」

けれど少女は理解した。ウィザードがなにを言いたいのか。

そして、広場に風が吹き荒れた――

第７１話　相性（後書き）

あ～、疲れました。

では、感想待ってマ～ス

第７２話　動く

「なんで？　・・・・・私はスバル君を助けなきゃいけないのに・・・・・・・！」

ミソラの願いも虚しく、人形は再生していく。

「どうなってんだ？　永遠に再生するのか！？」

もう何対倒しただろうか。燃やしても再生してしまい、ただ二酸化炭素の嫌なにおいが周りに充満する。

「オックス、ノイズ率は？」

『ブロロロロ、まだ１００％もいってねえぜ・・・・・・』

さすがに４人の気力ももうない。

「どうすれば・・・・・・・・」

打開策も無いまま、体力と気力が削がれていった――――

「ワイドスラッシュ！」

鋭利な爪が、植物を切り裂く。けれどそれは再生させられてしまう。

『リーフランス』

スバルのいる足元から植物で出来た槍が突き出る。

「くっ！」

間一髪で避けるスバル。けれどそれを追ってまた槍は形成されていく。

『どこまで追って来る気だ!?』

『あなた達が死ぬまでよ』

その言うとおり、避け続けるスバルを延々と追ってくる。

スバルはらちが明かないとばかりに空中に飛んだ。

「エアブレイド！」

3枚の平行な衝撃波がプロヴェに向かって飛んでいく。

『プラントウォール』

幾重もの植物の盾が衝撃波を緩和してしまう。

「キリがない・・・・・・・」

『私には一撃必殺の攻撃が無い代わりに、再生と防御に優れているわ』

淡々と喋るプロヴェ。スバルをそんなプロヴェから眼を逸らさない。

（ロックマンが戦えば戦うほど成長する・・・・・・・だから私が抜擢されたのか）

計画は知らない。知ってもしょうがない。どうせ自分は『あの方』のために働くのだから。

『スバル・・・・・俺もやるぜ』

スバルの後ろにウォーロックが実体化する。

『あいつが再生するなら、その再生しているときに俺が切り裂いてやる！』

「分かった、頼むよウォーロック！」

『そっちもな！』

そしてスバルは地面を蹴った。

『リーフカッター』

突然空から降ってきた葉っぱがスバルとウォーロックに向かって飛んでいく。

『ビーストスイング！』

後ろからウォーロックが飛んでくる葉をどんどん切り裂いていく。けれど葉は空から無尽蔵に落ちてき、プロヴェの元にいけない。

「アッパースラッシャー！」

腕をアッパーのように振り上げる。縦に長い衝撃波がとび、上から落ちてくる葉を切り刻む。

一瞬で来た隙、それを見逃さずスバルはプロヴェに向かって駆けた。

「おおおおおおおっ！」

獣のように飛び掛り、腕を横に薙ごうとする。

『ローズカーテン』

「なっ！」

突如、棘のカーテンがどこからともなく降って来る。

体の何箇所も、棘によって刺されてしまう。そしてカーテンはマン

トを翻すように動いた。
当然スバルは吹き飛ばされ、プロヴェは無傷だった。
「・・・・強すぎる・・・・・・」
『あなたが弱すぎるのよ』
前の2体とは比べ物にならないくらい強い。それだけは感じ取った。
『・・・・・・言っておくけど、前の2人は私より弱くないわよ?』
「・・・・え!?」
『私達はね、力を抑えられているのよ』
「な、なんのために?」
『決まっているじゃない。あなたを簡単に殺しちゃえば意味が無いもの』
何故『ガイア』は自分を生かしておくのだろうか。その疑問だけが心の中で飛び交った。
『あなたを強くする、それが『あの方』の目的。ただそれだけよ。それだけで私は動ける』
「だったら僕が動くのも簡単だ・・・・・・・・・」
今は敵を倒すことだけに集中してればいい。無駄なことを考えてい

ては勝てない。

「僕はみんなを守るために動く！　それだけだよ」

『・・・それでいいわ』

本当は戦いたくないのではないか？　けれど今は分からない。もう何も思わない。ただ、相手を倒すために爪を構え走った――

第７２話　動く（後書き）

実際のガイアは今のスバルより強いです。全然違いますね。

では、感想待ってマ～ス！

第７３話　久しい

死んだ、そう思った。けれどこれでもいいのだ。これであとは上手くいけば――――

水で構築された衝撃波がもう目の前まで迫ってきている。避ける気力もないし、防げもしない。

そう、本当に終わったのだ。あと3メートル、そんなとき後ろからと突風が吹いた。

「・・・・・・な！」

ただの突風なら驚きはしない。問題はその現象だ。衝撃波が風とぶつかり水に分散してしまった。

風と思えたのはこれ以外になにも考えられなかった。見えない何かにぶつかり砕けて言ったかのような壊れ方。他に何が考えられようか。

『久しぶりだな・・・・・・・・ウィンド』

重たいフランベルジェの口が開いた。

『ああ、本当だな。フランベルジェ』

突然の風を起こした人物、シルバー・ウィンドだった。

どこからともなく現れた人物にカイは驚きを隠せない。けれどシル

バーウィンドはそれを無視して話しかける。

『なんでおまえがここに居るんだ？』

『・・・・・・やはりか』

『やはり？』

『その少年がおまえのオペ――――』

金属と金属、いや、刀と刀がぶつかった音が周りに響いた。

そう、シルバー・ウィンドとカイの刀がぶつかったのだ。

『なんの真似だ？　助けてやった恩人に』

「・・・・・・・・てめぇがどこの誰か知らねえが、俺の勝負を邪魔すんな！」

カイの怒声がシルバー・ウィンドに届く。けれどそれは意味の無い物と化す。

『・・・・・じゃあ聞くけどよ、あいつはおまえに用があるのか？』

「・・・・・なに？」

『あいつが勘違いしておまえと戦っただけだ。俺が来たいじょう――――』

『おまえは邪魔なだけだよ』

その途端、カイが吹っ飛んだ。刀でもなく、まるで透明な何かに飛ばされたかのように。

ただ一直線に、飛んでいった。

『オペレーターではなかったか・・・・・・』

『悪いな。見当ちが――――』

『そんなのはどうでもいい』

フランベルジェからはさっきの戦いとは違って、殺気がにじみ出ていた。

『久しぶりの再会でそれはねえだろ。もっとなんつーか話とかねえのか？』

『・・・・・・我は今までに3人に負けた』

その口調からして思い出したくないらしく、声のトーンが低かった。

『我はその3人に勝てるようになるまで修行した。そして今、その1人のおまえがいる・・・・・・・・！』

『つまり復讐（リベンジ）ってわけか・・・・・・・・』

『そういうことになるな・・・・・・さっさと始めよう』

フランベルジェは不意打ちが嫌いらしく、正々堂々と言った。

『めんどうだな・・・・・・まあしょうがねえ』

シルバー・ウィンドも刀を構える。退く気がないからだ。無駄な説得は時間の無駄。それだけだ。

突然、怒涛の水と怒涛の風が交錯した。

「おい君！」

暁はカイに駆け寄った。腰にあるのは刀、多くの箇所に傷があることから戦闘したのだろう。

「大丈夫か！？」

「くそ・・・・・・が」

カイは呻くばかりだ。

「今運んでやるからな！」

「やめろ・・・・・・！」

カイは無理して起き上がった。

「俺は、まだ――――」

「何を言っている！　とにかくここから移動するぞ！」

『シドウ、すぐにこちらに戻ってください。広場で大規模な戦闘があります』

「分かった！　すぐに戻るから奴らの戦闘データを解析しておいてくれ！」

そういって暁はカイを背負ってその場から移動していった。

「もう大丈夫なようだね・・・・・・・・」

『そうですね。これでカイ君は少なくとも大丈夫でしょう』

少女は安堵の声を漏らした。

「全く無茶するな～・・・・・・」

声からして心配していたのだろう。

「・・・・・・ウィンドは大丈夫なんだよね？」

『ええ、彼は放って置いても大丈夫でしょう』

「じゃあ、買い物もしたし帰ろっか」

その瞬間、少女が眩い光が包んだ。そのあとには少女は居ず、なにも起こらなかった。

第７３話　久しい（後書き）

感想待ってマ～ス

第７４話　予想外

さっきからはプロヴェは一歩も動いていない。
そしてスバルは何百歩も動いている。体力的面ではスバルは厳しい状況にある。

「はあああああっ！」

無尽蔵に出てくる植物を２人がかりで斬り続ける。

「・・・・・どれだけ再生し続けるんだ！」

『ああ、全く無く出なくなる気配がねえ！」

けれどもそんな２人の声を知ってか知らずか、植物は再生する。

『くそ・・・・ビーストスイング！』

「ワイドスラッシュ！」

『フフフ・・・・・まだ気付かないなんて愚かね』

プロヴェは静かに笑みを浮かべた。

「ハープまだなの？」

『駄目よ！　全然さっきから上がらないわ！』

ノイズ率が上がらない、それはミソラ達にとって強力な力を失ったと同じことである。

「なんで上がらねーんだ？　倒しても意味無いのか？」

ヒカルの疑問は周りの音にかき消されていく。

「でもおかしい・・・・・倒しても意味が無いはずがねえ！」

メットリオでもノイズ率は上がるのだ。植物の人形でもそれは同じのはずだ。けれど一向に上がらない。５０％はいっているのだが、１００％には届かない。

「・・・・・やべえ、そろそろ体力が」

みんなの気力も底を尽き始めている。このままでは確実に負けてしまう。

「何かがおかしい・・・・・ノイズ率が上がらないなんて・・・・・」

攻撃しても、ノイズ率は軽く上下するだけだった。

下がることも無く、上がることもなく。これが幾度も繰り返されるだけ。

『そろそろか・・・・・』

ウェーブロードから戦いを眺めていた男が左手をドームに向けてかざす。

『デストロイミサイル！』

何十ものミサイルが列を作り、ドームに向かって飛んでいく。

『さあ、私も行こうか』

男はドームに向かう。男は巨体だったが、それを感じさせない速さだった。

『待っていろ、ロックマン・・・・・・・！』

空から降ってきた無数のミサイル。

「あれは・・・・・！　みんな伏せろ！」

突如、爆音が周りを支配する。

嫌な臭いが周りに充満し、辺りの視界を悪くした。

やがて爆発は治まり、視界もよくなっていったが、なにかがドームに入っていったのが見えた。

「な、なにが起こったんだ？」

ゴンタの疑問は誰にも分からなかった。あのミサイルは誰が放った物なのか、理解できなかった。

「あ、あいつだ・・・・・・・・！」

ジャックがゆっくりとコチラに駆け寄ってきた。

「あいつって？」

「この周波数、ほとんどのやつが分かるはずだ・・・・」

全員周りの周波数を確認する。そして、各々が驚愕の表情を浮かべる。

「あいつがか？」

「スバル君は大丈夫なの！？」

「でも、あいつしかいない！」

ジャックが2人の声を遮った。

「・・・・人形はどうにかなったけど、どうすれば・・・・・」

「とにかく攻撃してぶち破るぞ！　スバルが危ねえ！」

「あいつは、危険すぎる！」

第７４話　予想外（後書き）

植物の栄養源分かりましたか？

ヒントはデストロイミサイルは単体の威力が小さいってことです。

では、感想待ってマ～ス

第75話　生き方

『おお～、あっちでもドンパチやってるか～』

シルバー・ウィンドは衝撃波を避けながら言う。声に余裕がある。

『無駄口を・・・・・・・斬る！』

突然突っ込んで、フランベルジェはシルバー・ウィンド目掛けて切りかかる。

シルバー・ウィンドに当たる前に剣は止まってしまう。フランベルジェは舌打ちをして距離を置く。

『忌々しい風だ』

『しょうがないさ、俺とおまえでは力の差がありすぎる』

いちいち勘に触ることを言うシルバー・ウィンド。

『減らず口がいつまで言えるかな？』

『勝つまで』

その声と共に2人は再度切り結んだ。

『インパクトウェーブ！』

超至近距離からの水の衝撃波。さすがにこれは風の盾（ウィンドシールド）でも防げない。

それほど高圧縮の水は強力なのだ。

それをシルバー・ウィンドが刀で防ぐが、先ほどの戦闘とは打って違い、刀では防ぎきれない。微かに防具を傷つける。

『まだまだだあ！　アングリーウェーブ！』

怒涛の攻撃が、シルバー・ウィンドに飛んでいく。

『これは・・・・・・よっと』

さすがに危ないと感じたのか、シルバー・ウィンドは天高く跳ぶ。けれど読まれていた。フランベルジェはシルバー・ウィンドより高く飛んでいて、今まさに剣を振り下ろそうとしている瞬間だった。

『うおおおおおおおっ！』

風さえも斬り、シルバー・ウィンドの腹を斬る。幸い防具が丈夫だったためか、身までは斬られていない。けれど威力が高すぎてシルバー・ウィンドは地面に落とされた。

地面が割れるような音がして、煙が立ち込めた。

『昔の我とは違う！　もうおまえなどには負けない！』

高らかな声が建物に反射して、やけに大きく聞こえる。

ゆっくりとシルバー・ウィンドは立ち上がった。腹には真一文字の傷があり、フラベルジェの強さも伝わってくる。

『たしかに凄いな・・・・・がんばったもんだね～』

『分かったか！　ならさっさと負け――――』

『でもこれじゃまだまだだな』

フランベルジェの体が硬直した。驚き、怒り、その感情が入り混じったような、そんな表情だった。

『たしかに強くはなった。けど・・・・・それでも俺には敵わないな』

『・・・・・まだ言うか、ならやってみるがいい！　アングリーウェーブ！』

フランベルジェの怒涛の攻撃に対して、シルバー・ウィンドはただ手をかざすだけ。そう、かざしただけだった。

『巻き上げろ』

その瞬間、シルバー・ウィンドの数メートル先に竜巻が発生した。

『なにっ！』

竜巻は水を巻き上げ、やがて水の渦となる。そしてそれはフランベルジェを飲み込み、上に吹き飛ばした。

『言ったろ？　おまえじゃ俺に勝てないって』

力なく落下するフランベルジェを尻目に、シルバー・ウィンドは淡々と言った。

『認めろ・・・・・勝てないって』

『・・・・・認めろだと？　剣士は逃げずに最後まで戦うもの、そうだろ？』

剣士にとって逃走とは死に等しい。

『そんなことでここで死ぬよりはマシだと思うけどな』

『だからどうした・・・・・死ぬためなどに戦ってなどいない！』

どんなに実力差があろうとフランベルジェは立ち上がる。それが、彼の生き方だから。

『そうか・・・・・・残念だよ』

『なにがだ？　まだ死ぬわけではないが？』

パチンと指を鳴らしたその瞬間、噴水の水はフランベルジェの周りに集まり、水の球体に包まれた。

『これが我の本領だ・・・・・・！』

『へぇ～、面白そうな技じゃん。技って言うよりは力を解放したって言うほうが正しいかもしれないけどな』

『ここからが本番だ！』

「だったら丁度良かった」

突然の第三者の出現。その人物は、暁だった。

「いや～、ちょっと男の子を避難させてたら遅れちまってな～」

『シドウ、あなたがうまい棒を食べながらここまで来たのが原因でしょう？』

見ると口の周りにカスがついている、もちろんうまい棒のカスだ。

「まあ気にするなって、アシッド。ドランスコード！」

暁は電波変換し、アシッド・エースになる。けれどそれで終わりではない。

「究極変身（ファイナライズ）！」

『こいつ、究極変身（ファイナライズ）をするのか・・・・・』

「アシッド・ブラック・エース！」

フランベルジェの感嘆の声が示すとおり、暁はそうとうな周波数が発せられている。敵としては全員申し分ない。

『・・・・まあ、これ以上は来ないようだし。第二ラウンド、はじめと行こうか？』

そして、一斉に攻撃が放たれた――――

第７５話　生き方（後書き）

短い、ごめんなさい。「あっち」とはスバル側のことです。

では、感想等待ってマ～ス！

第７６話　協力

突然の爆音。見ればドームがぶち破られており、煙がもくもくと上っている。

『だ、だれだ！？』

煙の中に人影、二メートルはあるか、その巨体でこちらを見ていた。

『久しぶりだな、ロックマンよ・・・・・・』

「この声・・・この周波数・・・・・・まさか！」

『そのまさかだ』

煙が晴れ、現れたのは忘れもしないあの敵。

「『ジョーカー！』」

『ついにキングが復元されたってことか・・・・・・・・』

プロヴェの呟きにスバルとウォーロックは驚きを隠せない。

「キ、キングが！？」

『そうだ、ロックマン』

低い声で言うジョーカーに、ウォーロックは敵意を剥き出しにしている。

『なんでテメェとキングが復元されたんだ！』

『ヨイリー博士が復元なさったのだ』

「ヨイリー博士が？」

あのヨイリーがキングとジョーカーのような危険分子などを復元するとは思えない。

『嘘言うんじゃねー！』

『聞いてないのか？　おまえたちの父、星河大悟から』

「父さんから？　そういえば、昨日なにか言いかけてたような・・・・」

あれはキングについて言おうとしたのではないか。そしてもしそれが本当なら、ジョーカーは味方ということになる。

『スバル、こいつが仲間のわけねえ！』

『信じるか信じないかは自由だが、私はあいつと戦わせてもらう』

『ふ～ん、いいわよ。どうせあとで片付けるのが今になっただけだし』

その瞬間ジョーカーは消えた。いや、周波数変換で移動したのだ。

ジョーカーはプロヴェの後ろに移動し、攻撃をしようとする。

『甘いわ、ローズカーテン』

ジョーカーの前に、棘がびっしりのカーテンが舞い降りる。

『デストロイミサイル！』

ローズカーテンに、無数のミサイルが撃ち込まれる。

『そんなのすぐ再生――――』

けれどカーテンは再生できない。再生するのを上回るスピードでミサイルが撃ち込まれてしまっているからだ。

『くっ！』

このとき初めてプロヴェは動いた。ジョーカーはここぞとばかりに攻撃をする。

『フルダブルスイング！』

『プラントウォール！』

ローズカーテンよりも強度の高い植物の壁を生成するが、ジョーカーの技の前では一撃目で破壊されてしまう。

『きゃあっ！』

二撃目を喰らい、プロヴェは吹っ飛んでしまう。ドームの壁はクッションとなってプロヴェを受け止める。

『戦う本人は脆いらしいな・・・・・・・』

その言葉通り、プロヴェは大きな傷を負っていた。

『スバル、どうするんだ?』

スバルは決断を決めかねていた。以前敵だったものが突然仲間と言い出すのだ。無理も無いだろう。

「・・・・ウォーロック、ジョーカーを見張ってて」

『それでいいんだな?』

「うん、まだ信じられないけど・・・・・・・ジョーカーがいなきゃ勝てないと思う」

『分かった、ジョーカー!』

『・・・・・承知した。では、共に行くぞ!』

2人は構え、プロヴェの出かたを窺う。

『ここまでやるとはね・・・・・・もういいわ、2人とも本気で殺してあげる』

プロヴェの足元から、植物が集合していく。

『ロックマン、次の攻撃で決める』

「・・・・・分かった。でもどうするの?」

『私が攻撃する、そのあとに攻撃しろ』

「結構簡単だね・・・・・・・けど君の言うとおりにするよ」

そして2人は最後の攻撃を仕掛けた――――

「こっちも大丈夫そうだね」

少女は遠くから戦いを眺めていた。風で腰まである髪がなびいている。

『では、私はなにもしなくていいのですか?』

「そうじゃない?　どうせカイは避難したし、ウィンドは間違いなく勝つし」

『そうですか・・・・・・・いいことですね』

「本当よね～、なんかあの時以来私達なにもしてないしね」

少女は嬉しいのか悲しいのか、そのどちらとも取れるような声で言う。

「暇だな～」

『そろそろみんなが帰ってくる頃では？』

「あっ！　そうだった。寄り道しちゃ駄目だな～」

『いつものことです』

「そう言わない～。・・・・・・・早く終わって欲しいな、戦い。また、暮らしたいし・・・・・・」

少女の一言は、遠く空に響いていった。

第７６話　協力（後書き）

スバル側は次でラストです。シルバー・ウィンドはもう少し長引きそう・・・・・

カラクリは次で明かします。分かりましたよね？

では、感想待ってマ～ス

第77話　三つ巴

『うざい水だな・・・・・・』

刀は本体に届かず、水をただ斬るだけ。その水も元通りに戻っていく。

「アシッドブラスター！」

どこからともなく撃たれた弾丸は風によって切り刻まれる。

『インパクトウェーブ！』

「バリア！」

暁のバリアはなんとか衝撃波を防ぐが、弾かれた衝撃波は地面を抉った。

『水のバリア・・・・・なら電気』

「ああ、ステレスレーザー！」

暁から放たれる電撃の弾丸がフランベルジェに向かっていく。

『遅いな』

相性がよかろうが当たらなければ意味が無い、それを表すかのようにフランベルジェは避けた。

『めんどくせえ・・・・・巻き上げろ』

再度竜巻が発生し、噴水の水を空に飛ばしてしまう。けれどそれは他の2人には当たらなかった。水滴だけが空に舞い、そしてそれは地面に降る。

『ラッシュレイン！』

その言葉通り、熱帯林で降るかのような雨が降る。空は晴れ渡っていて、異様な光景だった。

「ぐっ、前が・・・・・・」

あまりに激しい雨、数秒で終わる程度のものだが、それは視界を遮るのには充分すぎた。

そして影で気付いた。空中に敵がいることを。けれど反応ができない。

『喰らえ、ストームインパクト！』

バリアに使った水さえも使った衝撃波の嵐が、2人を襲う。

「ぐわあああああ！」

避けきれず暁は吹っ飛んだ。地面と背中を激突させ、酸素が肺から一気に出た。

『サテラポリスのエースといってもその程度か・・・・・』

再度水のバリアを張ったフランベルジェががっかりしたように言う。

『ウィンドは――――』

けれどその言葉よりも早く誰かがフランベルジェの背中を斬り付けた。

バリアのおかげでダメージは少なく、旋回してフランベルジェは地面に立つ。

『さすがだな・・・・・・』

憎憎しげに言う。それほどシルバー・ウィンドは強い。この3人の誰よりも。

『さすがに三つ巴は初めてだから長引くな・・・・・・』

シルバー・ウィンドの声からして疲れ、いや面倒臭さが分かる。

『シドウ、大丈夫ですか?』

「ああ、なんとかな・・・・・・」

暁もなんとか立ち上がる。

『まだ立つか・・・・・・』

「悪いな、俺にもやることがあるんでね」

それはシルバー・ウィンドの正体を暴くこと、及び仲間に引き入れ

ること。けれどそれだけのことをするのにはキツい戦いだ。

3人のそれぞれの思いを胸に、刃を交える。

「ロックオンソード！」

一瞬で間合いを詰めた渾身の一撃は、波を描く剣によって防がれる。

『インパクト――――』

『もらい』

攻撃をしようとしたフランベルジェの背後を、シルバー・ウィンドはとった。

バリアの中に刀を入れる。

『吹き飛べ』

その一言で刀身から風が巻き起こり、水のバリアを吹き飛ばした。

『なにっ！？』

『ッ！　シドウ逃げて――――』

『バーストウィンド』

直径3メートルの範囲の風、空気が刃となり2人を切り刻む。暁はすぐに反応できてほぼ無傷だが、後ろを取られたフランベルジェは避けきれない。

『がああああああっ！　くそっ、ラッシュレイン！』

地上に落ちる2人をまた激しい雨が襲う。けれどこの技は圧縮していない。故に、風でも防げる。

『邪魔だ』

地上から上昇気流のように風が吹く。雨は透明な壁があるかのように止まってしまう。

「がら空きだ、オメガレーザー！」

今だ空中にいたフランベルジェは身動きが取れない。剣で防ごうとしても無茶があった。

『ぐわあああああ！』

力無く落ちるフランベルジェ。もう立てそうも無い。

「終わった――――」

『まだだ！』

けれど立ち上がる。何度でも、死ぬまで。

「くそっ。シルバー・ウィンド、ここは手を組まない――――」

『やだね』

「なにっ？」

あまりに早すぎる返答、この状況でよくそんなことが言えるものだ。

「このまま続けばここら辺が被害を――――」

『だったら次で終わらせてやるよ』

次で終わらせる。果たしてそんなことが出来るのか。

けれどやらなければ被害は広がるばかり。やるしかない。

『終わらせる？　なにを戯言を。こちらが終わらせてくれる！』

フランベルジェは立ち上がり、再度水のバリアを張る。

『・・・・・・そうか。・・・・・・できれば、この力だけは使いたくなかったな』

シルバー・ウィンドの呟きを、暁は聞き取れなかった。

『こい！　終わらせてくれる！』

『ああ、行くぜ』

「望む所だ！」

そして最後の一撃が、放たれる――――

第７７話　三つ巴（後書き）

三つ巴むずっ！　ちゃんと書けたかな？

水のバリアの効果はデータベースで～。

では、感想待ってマ～ス

親が熱出しました！　もしやあれかも・・・・・・助けて――――！

第78話　カラクリ

プロヴェの周り、いやドーム全体の植物が動き始める。うじゃうじゃと、蛇のように。

『ヘルプラント』

その言葉通り、まさに植物地獄だった。槍や刃の攻撃。避けきれない。

けれど2人は避けない。ジョーカーは構え、スバルはただプロヴェに向かって走る。

ノイズがジョーカーの屈強な腕に集まっていく。それと同時に近くの植物は枯れていった。

『グレイブメテオレーザー！』

極太の赤いレーザーがプロヴェに向かう。けれど四方から植物が身を寄せ合うように集まり、プロヴェを守る。

『おまえの植物の栄養源はノイズ。ノイズ率が上がらないのは植物がノイズを吸収しているからだ』

つまりこういうことだ。植物の人形などを倒す。そこでノイズが発生する。けれどそのノイズは植物に吸収されてしまう。この繰り返しがずっと行われていたのだ。なにも知らないスバル達は人形を倒し続け、その分人形は再生する。ノイズ率は上げ下げを微妙に繰り返し、まるで異常現象が起きているかのようにおもえてしまう。

マジックの種のような単純なこと、それをプロヴェはずっと行っていたのだ。

『ふっ、ならあなたの攻撃はノイズを放つ技じゃなくて？』

そう、ジョーカーの「グレイブメテオレーザー」はノイズを放つ技。相手に栄養をあげるようなものだ。

『だったらやってみたらどうだ？』

『なにっ？』

プロヴェの言うとおり植物は再生する。けれど、予想外の出来事が起きる。

『枯れ・・・・いや腐っている？』

植物は見る見る茶色に変色していき、やがて消えていった。

『植物は栄養をとりすぎると逆に腐ってしまう。油断したな』

プロヴェの周りの植物も腐っていき、役に立たなくなってしまう。

『ッ！　これじゃもう――――』

「終わりだよ」

走っていたスバルはもうプロヴェの前まで来ていた。

「EFB（エグゼフォースビックバン）クロスエアスラッシュ！」

衝撃波を両腕から放つ。そしてそれは地面を抉り、プロヴェに到達した。爪痕が2つあり、そしてそこから膨大な粒子が噴き出す。

『・・・・終わりね・・・・・私も・・・・・』

悲しいような、嬉しいようなそんな声。足元から徐々にプロヴェは消えていく。まるで砂時計の砂が落ちるかのように、ゆっくりと消えていく。

そして、全てを思い出す。

『・・・・ッ！　・・・・ふふ、がんばってね、英雄さん』

「え？」

まるでタンポポの綿毛のように空に、天にプロヴェは消えていった。ドームは地面に戻っていき、もう再生することは無かった。

「終わったね、ウォーロック」

『ああ、最後の言葉が気になるが・・・・・・特に深くもないか』

最後の言葉、まるで本当にこちらを応援しているような、そんな言葉だった。

「スバル君！」

ふいに聞こえてきた聞き覚えのある少女の声。見れば電波変換を解

いた４人がそこにいた。

「大丈夫？　今回も助けられなくて――――」

「いいんだよ、僕は平気だから。気にしないで」

そう、優しく語りかけるスバル。

「ジョーカー！　てめえがなんでここに！」

ジャックがジョーカーに駆け寄り、睨みつけている。

『おまえの姉に聞かなかったのか？　全く、私は恨まれるのか・・・・・いつまでも』

過去に犯した罪、それはその人の印象を悪くする物だ。それは仕方の無いことだ。

「ジョーカー、君に罪の意識があるのなら、これから行動で示して欲しい」

『星河スバル・・・・・君は本当に私を信じているのか？　また君を攻撃してもおかしくないだろう』

たしかに、まだ１００％信じ切れていない。けれど、人やウィザードはやり直すこともできる。

「過去になにがあったかなんて関係ないよ、今をどうかを僕は見る」

『そうか・・・・・なら私はそれにこたえよう』

和解、この光景は異様だと思うかもしれない。けれどジャック達とも和解はした。だから別に不思議ではなかった。人はやり直せる。ウィザードでも例外ではない。いつの日か、誰もが反省していい世界になる日もあるのかもしれない。

そんな時、一瞬どこか遠くが光った。

「今の何？」

「光・・・・なのかな？」

ミソラとツカサが驚いた声を上げた。そしてスバルのハンターに電話がかかる。

「もしもし？」

「スバル君？」

電話の相手はルナだった。慌てているのか、声が聞き取れにくくて大きい。

「広場に、シルバー・ウィンドっていう電波体が現れたそうよ！」

「え？　シルバー・ウィンドが？」

予想もしなかった言葉にその場にいた全員が静まり返った。あまりに大きく、あまりに衝撃的で。

「それで、カイ君が・・・・・・」

「カイ君がどうしたの？」

「フランベルジェっていう電波体にやられちゃったらしくて・・・・・いま寝ているわ」

無理も無い。人間と電波体では力の差がありすぎる。自業自得といえばそうだが、それでも心配はしてしまうものだ。

「それで、今暁さんも広場に向かったわ」

「暁さんも？　どこにいた――――」

「聞いて！」

ルナの怒声が耳に響いた。心臓が跳ね上がったようにも感じた・

「だから、あなたも行けたら行って頂戴。できれば早く」

「・・・・分かった、今すぐ行く」

そういって電話を切った。みんなの視線がスバルに向けられる。

「もう一度行こう、広場に！」

意を決してもう1度広場に向かおうとする一行。

けれど、それは叶わなかった。

「ダンシングブレード！」

黒き剣がスバル達に向かって飛んでくる。

「な、これは！」

スバルは間一髪でそれを避けた。剣は回転しながら持ち主に戻っていった。その持ち主をみて全員は戦慄が走った。

『なっ・・・・おまえは！』

ウォーロックは思わず声を上げてしまう。そう、まさかここにいるとは思えなかった。

忘れもしない周波数。白き髪、仲間と絆を否定する瞳。敵を切り裂く剣。

「ロックマン、おまえに用がある」

孤高の戦士ブライは、再びスバル達の前に立ちふさがる。

第７８話　カラクリ（後書き）

戦慄の使い方あってます?ちょっと自信ないです。

カラクリ意味分かりましたか?　分からなかったらメールで送ってください。

孤高きた～、イェ～イ。といっても・・・・・あれだけど

感想待ってマ~ス

ユニーク９０００突破!

第79話　もう一度

フランベルジェの剣に噴水の水全てが集まっていく。噴水の水は空になってしまっていて、虚しい。

『これが我が最強の技・・・・・・・受けてみよ！』

「受けるわけにはいかないな！」

『同じく』

剣を天高く振り上げ、そして振り下ろした。

『ダイナミックインパクト！』

さっきのとは違い、今度は単純に馬鹿でかい衝撃波だ。けれどそれは簡単に避けれる――――

『アクアロード！』

いつのまにか、暁とシルバー・ウィンドの逃げ道がなくなっていた。簡単に言えば、海が割れて地面が露出している所に暁とシルバー・ウィンドがいるのだ。

「なっ・・・・・これは！」

高さも相当あり、跳んでも無理だ。それだけ水が溜まっていた。

衝撃波は徐々にその距離を縮めていく。

『シドウ、逃げてください！』

「そんなこといっても無理だ！」

シルバー・ウィンドは一歩も動かず、ただ衝撃波を受けるのを待っているようにも見える。

「くそ！　オメガレーザー！」

赤いレーザーが両肩から発射され、衝撃波とぶつかる。けれどそれでも衝撃波は消えない。

「やば――――」

そして、衝撃波は直撃した。圧縮され水は四散し、ただの水となってしまう。

『これで・・・・・あと2人か』

溜まっていた水は噴水に戻っていき、地面が水浸しになっているだけだ。

『では、行こ――――』

「なにを言ってるんだ？」

どこからが声が聞こえた。けれど敵の位置を掴む前に視界が黒に変わった。そう、純粋な黒に。

「誰も終わったとは言ってないぜ？」

けれどフランベルジェにとってはそんなのはどうでも良かった。なぜあの攻撃が避けられたのかが理解できなかった。

「いくぜ、カオスウィングブレード！」

そして、一瞬の激痛が走って視界は正常に戻った。あまりの激痛でうずくまってしまう。

「これで・・・・・・終わりだ」

そう、これで終わった、本当なら。

『くっ・・・・・・』

「まだ生きてるのか！？」

あれだけの攻撃を喰らっておきながらまだ生きているのだ。執念、それだけで生きているようなものだ。

『・・・・おまえも生きているんだろう？　ウィンド』

その言葉から二拍立ってからシルバー・ウィンドは現れた。

『最後に、もう一度・・・・・・』

それは、自分がもう死ぬと分かっていて言える言葉だった。それを理解するのは、苦しくて悲しい。けれどそれでもフランベルジェは最後にシルバー・ウィンドと決着を着けたかった。

『・・・・・分かった』

その言葉を聞いてフランベルジェは立ち上がり、剣を手にした。

『行くぞ・・・・・・・ダイナミックインパクト！』

瀕死とは思えない程の威力の衝撃波を放つフランベルジェに対して、シルバー・ウィンドはただ右手をかざすだけだった。

『・・・・・・済まねえ』

その瞬間、眩い閃光が走って、視界を白く塗りつぶした。

目を開ければ、フランベルジェは倒れていて、シルバー・ウィンドは無傷で立っていた。

『最強だよ・・・・・おまえは。我を2度も倒すのだからな』

『・・・・・・・・さよならだ、永遠に』

そして、ようやく、フランベルジェは天に逝けた。

シルバー・ウィンドは天を見上げていた。悲しんでいるのか、悔やんでいるのか、何を考えているかはその防具で分からない。

「今、なにが起きたんだ?」

けれど答えは返ってこない。ただ、沈黙がその場を支配した。

『では質問を変えましょう。あなたは何者ですか?』

『・・・・・おまえらも薄々気付いてんじゃねえか?』

視線がこちらに向き直る。銀色が日光に反射し、眩しく光っている。

『では・・・・・ここで倒さなければいけませんね』

低いトーンで言う。その場の時間がおかしくなっており、今何秒たったかもよく分からない。

『じゃあ、やってみろよ』

まるでそれができないとことを分かって言っているようだった。

『実力、そしておまえの体力も限界。勝ち目なし。そんなハッタリ効くわけねえ』

究極変身（ファイナライズ）は体に少なからず負担がかかる。まだ病気が感知していない暁では奇跡でも起きない限り勝てない。

『じゃあ、俺は帰らせてもらう。・・・・・・用は済んだからな』

そして、広場に居るのは暁だけになった。涼しい風が、暁に当たる。

「仲間じゃないか・・・・・次はどうするかな」

『まずは・・・・・帰りましょう』

「本当にそれでいいのか？」

『シドウの体を考えた結果です』

その言葉に苦笑いしながら、暁は帰っていった。今回は大した成果が無かったが、それでも重要なことは分かった。

シルバー・ウィンドは仲間ではない、と。

第７９話　もう一度（後書き）

やっと終わった~。アクアロードは分かりにくいですね。スイマセン。

最後の次話で明らかに~。お気づきの方は別に驚きませんがね。

ＰＶ６００００！

では、感想待ってマ~ス

第８０話　ムーメタル

「なんで君が・・・・・・・」

このタイミングでソロと遭遇するとは誰が想像しただろうか。この場にいるソロ以外は会うとは思わなかったはずだ。

「もう１度いう、ロックマン。おまえに用がある」

再度殺気の混じった声を放つソロ。みんなの顔が真剣みを帯び始める。

「よ、用って？　また・・・・・戦うの？」

できれば無駄な戦いたくはない、そして先ほどまで戦っていたスバル達に勝機はない。この状況での戦闘はなんとしても避けたい。

ソロの表情は少しも変わらず、まっすぐスバルを見ている。

「そうしたいところだが・・・・・・・俺には他にやることがある」

「え？」

ソロは会うごとに戦いを挑んできていた。けれど今回は違うという、これが驚かずにいられるか。

「おまえの体の中にある・・・・・・・ムーメタルはどこにいった？」

「ムーメタル・・・・・？」

それは数ヶ月前、ブラックホールサーバーでスバルがシリウスに勝利したとき、咄嗟にシリウスが自分の体からスバルの体に移したものだ。これをソロは狙っていて、今もなお追いかけている。

「そう、ムーメタルだ。おまえが持っているのなら、おまえの体にムーの紋章が浮かんでいるはずだ。けれどそれがない・・・・・誰に渡した」

『そんなもの知らねえな！　俺達は誰にも渡してねえ！』

渡した記憶などない。というかそんなものの存在すらも忘れていた。

「記憶に無いか。ならおまえは誰かに負けたか？」

「でも、ムーメタルはデリートされなきゃ取り出せないんじゃ――」

「あれはな、俺やおまえよりも単純な実力が上の奴なら取り出すことも出来る。そしておまえの口ぶりからして負けたな？」

少しスバルの顔が歪んだ。負けた記憶はあまりいいものではない。

「で、誰に負けたんだ？」

徐々に声が強くなってきた。それだけ知りたいのだろう。そして、それだけムーのことが大切なのだろう。

「え～っと・・・・・」

負けたのは幾度かあるが、気絶したのは一度しかない。そして、気絶させた張本人とは――

「シルバー・ウィンド」

そう、彼しかいない。追い詰めたのはゲイボルグだが、気絶させたのはシルバー・ウィンドだった。

「やはりあいつか・・・・・・・・」

『アギ・・・・・・ギギガ！』

「うるさいぞラプラス。一体どうしたって――」

けれどソロは言葉が続かなかった。急に振り向き、遠くを見ている。

「ちっ、今頃現れたか！」

急に慌て出すソロを見て、スバル達はただどうしたらいいか分からない状況にいた。

「せっかくだから教えてやる！　シルバー・ウィンドは、『ガイア』の一員だ！」

「な、なんだって！？」

あのシルバー・ウィンドが『ガイア』の一員、それはスバル達に驚きを与えるには十分すぎた。

「くそ！　すぐ追うぞ、ラプラス！」

『ギギ』

その言葉と同時にソロは消えた。多分周波数変換で移動したのだろう。

「シルバー・ウィンドが・・・・・」

『スバル、とにかく広場に行こうぜ！　被害が広がる可能性もある！』

「ウォーロック・・・・・分かった」

そしてスバルはもう一度広場に向かった。

「・・・・気配が消えた!?」

ソロはムーメタルの気配があった場所に来ていたのだが、急に気配が消えたのだ。

「くそ!　一体何処に消えたんだ!」

怒鳴るソロだが、それは虚しく風に運ばれていく。

「ラプラス、おまえは分かるか?」

『・・・・・・ギガ』

「ちっ、完全に見失ったか!」

そういってソロは消えた。また一定周期経たなければムーメタルは奪還できない、だから帰ったのだ。

「ゲイボルグ、なにか分かった？」

『はい、シルバー・ウィンドは、カイという少年のウィザードではない可能性が高まりました』

その言葉を聞いて男は顔をしかめた。あまりに面白くない答えだったからだ。

「そうか・・・・・・引き続きあの電波体については頼むよ」

『分かりました』

そういってゲイボルグはその場から立ち去った。

『なるほどな』

「カイは違う可能性が増えたか・・・・・・まあまだ確定したわけじゃないか」

カイがシルバー・ウィンドではなければ、逆に誰だということだ。けれどそれは分からない。

「なにをする気だ？　シルバー・ウィンド」

それを知るのは、シルバー・ウィンドとキリュウという少年だけだ。

第８０話　ムーメタル（後書き）

感想待ってマ～ス

ＰＶ６００００！

第81話　風邪

「ハヤテ君？」

スバル達はあの後、ルナに言われて病院に来ていた。広場に行ったのが無駄足だったためか少々精神的にも疲れていたが。

「なんだ、来たのか」

まるで来ないと思っていた口ぶりだ。冷ややかな視線をこちらに送っているのは少々嫌な気分になる。

「大丈夫なの、怪我」

「まあ、明日にはがんばりゃ退院できるってさ」

がんばればとは、無理してではないか？　と疑問に思うスバル達だが、その疑問は言わないでおいた。

「けっ、心配させやがって」

ジャックがつまらなそうに言う。

「誰も心配してくれとは言ってないけどな」

嘲笑を送るカイ。今ここで、2人の視線が火花を散らしている。

「そこまでにしなさい、2人とも」

病院なので小さくルナは言う。けれど声が小さいからと言って殺気がないかとはまた違う問題である。充分ある。少なくともジャックを押し黙らせるくらいは。

「へいへい、そうしますよ」

渋々了解と言った感じだ。その言葉にルナは若干なにかいいたげだったが、このままだとヒートアップしそうなのでやめておいた。

「もう少し自分の体を考えた方がいいと思うよ？」

「そうですよ！　無理はしないほうがいいです！」

ツカサとキザマロの声にも、カイはあまり首を縦には振らない。

「まあ、今後は気をつけるようにはするよ」

やはり元気は無かった。今頃だが、目も細い。眠いようでもあった。

「・・・みんな、ハヤテ君も疲れているから、今日はもう帰ろう？」

「そうだな。じゃ、カイ！　飯一杯食って元気出せよ！」

「なにそれ、笑えばいいの？」

少し元気のある笑みを浮べ出したカイ。夕日が銀髪を照らしていて煌いていた。

「じゃあな、また明後日」

その言葉でみんなは病室を出て行った、ミソラ以外。

「あのさ・・・・・・」

「なに？」

さすがにやっとの思いで眠れそうだったのに邪魔されるといい気持ちにならない。

「・・・・ありがとうね」

「・・・は？」

意味が分からない。礼を言われることなどなかった。

「いや・・・・君があそこまで言ってくれてなきゃ気付かなかったから」

「それでも礼を言われるのは意味が分からないのですが」

「スバル君に教えてもらったんだよ、何事もポジティブに考えればいいって」

それはつまりスバルが凄いと言いたいのでは？　という疑問は言わなかった。言ってもどうせ意味が無い。それに気力もない。

「だからありがとうって・・・・・・」

「あっそう。さっさと帰ってくれ。もう眠い」

「あ、ゴメン。じゃあね」

そういってミソラも病室から出て行った。後に残るのはカイだけ。

「やっと眠れ――――」

『ようカイ』

今頃か、といいたい所だが一応自分のウィザードなので我慢した。

『いや～、おまえがこうなっているとは知らずに遊んでいたらこの有様なんてな～』

「で、なにか面白い話でも？」

さっさと寝てしまいたい。なのになんでこんなタイミングで帰ってくるのかと思う。

『ないよ～。ってかさ、さっきの女、あいつに似てるな～』

「・・・・・・あいつって？」

心当たりが全く無い。そもそもトップアイドルに似てる奴なんてそもそもいるのか？

『いるじゃねえか、おまえが世話になった奴』

「・・・・・・あいつか。似てなくね？」

全然似てない。顔も、性格も、そしてウィザードも。

『なんか似てる気がするんだけどな・・・・・・雰囲気とか、意味分からない所とか』

「性格はあっちのほうが断然悪いけどな」

『おまえよく騙されらしいしな～。・・・・・・まあ、今回の分かったろ？』

分かりたくないくらい分からされた。それだけ今回の敗北は屈辱的でもあった。そこまで気落ちしないのは、負けを何度も思い出したくないからだ。

「まだ強くなるよ、俺は」

そう、強くならなければいけないのだ。なにがあろうとも。

「じゃ、寝るよ」

そうして、カイは眠った。

『・・・・俺も眠るか』

そしてゲイルも、眠りについた。

「へっくしょん！」

少女は突然くしゃみをしてしまった。

『風邪ですか？』

「誰かが噂してるんだよ、きっと」

「おねえちゃん」

少女は自分よりもうんとしたの男の子に話しかけられた。

「体には気をつけてね？」

「うん、ちゃんと気をつけるよ」

「あと、それとね」

男の子は言うか言わないか迷ったようだが、口に出した。

「キリュウ君がいたよ？」

「あいつが？」

「うん、なんかお姉ちゃんのお父さんのところに行ってたけど」

「・・・・・・そう」

なんだかいいような、悪いような気持ちだった。

「キリュウ君・・・・帰って来るよね？」

「あいつなら帰ってくるよ、だから待ってよ？」

「うん！」

男の子はそういった後にどこかに駆け出した。

『私たちも頑張りましょう？』

「そうだね、あいつにだけは負けたくないしね」

少女もまた、自分のやるべきことを再開する。

（・・・・・・あいつは噂しないか・・・・・・・）

第８１話　風邪（後書き）

ゴッドイーターっていうゲームが欲しい！買いたい！でももうすぐ大会！終わったら即行で買いに行こう！

では、感想待ってマ～ス

第８２話　病室

翌日になり、カイは重たいまぶたを開けた。

「ねむっ・・・・・・・いま１０時かよ」

寝すぎた、それほど疲れていたのだろう。

「ゲイルは・・・・・・いない。退院は1時って言ってたからまだ時間あるな・・・・・・」

病院というのは時間の進むのがとても遅い。実際に遅いのではなく、やることがないので遅く感じてしまうのだ。

「誰か見舞い来ないかな～」

スバル達は来ないだろう。親は論外だ。来ることはもう人生で無いだろう。

暇だ、暇すぎる。やることがないのは人生で3番目くらいに嫌だ。

「誰か～」

その時、カイの病室の前で誰かと待った。今更だがカイの部屋は個室だ。だからカイ以外に用がある人は来ない。

「ここか」

入ってきたのは男性。どちらかというともう「おじさん」の部類に

入る年齢だ。頭にはサイレンらしきものが乗っている。

「あなたは・・・・・・・・・・」

「久しぶりだね・・・・・・・カイ君」

男性、五陽田はカイにそういった。カイは少し驚きの表情を浮かべたが、すぐに元に戻った。

「そうっすね、五陽田さん」

「最後に会ったのはいつだったかな?」

最後、今回で3度目だからたしか前は・・・・・・・・・・

「去年の・・・・・・秋でしたね」

「秋・・・・・そうだったね、この年になると物忘れが激しくてね」

その言葉に少し笑顔を浮かべる。これも冗談だということは分かっていた。

「で、なにが用ですか?」

あまり時間は取りたくなかった。さっさと終わらせたかった。

「・・・・・君は何をしているんだ?」

「何って、こんな怪我をする無茶ですかね」

笑って言う。けれど目は笑っていない。作り笑いだ。それも簡単に見破られる。

「君はそうやって生きてきたんだろうが・・・・・そういうことをやめたほうがいいんじゃないのか？」

「あなたは俺の正体を探りに来たのだから、そういう話はやめません？」

探りを入れられるのは分かっていたが、まさかここでこの人とは。まあ、それを分かっていてサテラポリスも送ってきたのだろう。

「では、君のウィザードを見せてくれないか？」

「残念ながらいませんよ、どっか行きました」

それは真実であって、揺ぎ無いもの。事実とは一番強い。どんな濡れ衣を着せられようと、事実だった場合はほぼ勝つ。それだけ強いのだ、事実とは。

「そうか・・・・・なら後日署に来てもらうしかないな」

「マジすか・・・・・・」

正直面倒臭い、それだけにつきる。なんでわざわざ怪しまれたくらいで行かなければならないのだ。

「すまないね・・・・君も知っているシルバー・ウィンドが『ガイア』の一員だと分かってサテラポリスも血眼になって捜索しているらしくてね。それで君も容疑者に挙げられてしまったんだ」

「・・・・・まあ、なにもなければ大丈夫なんでしょう？」

「ああ、それは保障するよ」

そうでなければ困る。何も罪も無い人間が牢屋に入るなどあってはいけない。

「それでだな・・・・・・なにかせっかくだから話でもしないか？」

「・・・・そうっすね、なにがいいですか？」

「君の・・・・・・・過去を話して欲しい」

「う～ん・・・・・・別にいいっすけどあまり広めないでくださいね？」

ああ、と五陽田は言う。しょうがないとばかりに話し出した。

「え～っと、あれですよね？　だったら・・・・・・・たしか2年前の夏休み前、7月13日の夜11時の時――」

そして、あのときのことを話した。

第８２話　病室（後書き）

感想待ってマ～ス

過去編？　カイ？

夕日に染まる街、飽きるくらい歩いた帰路、無駄なまでにうるさい同級生。

本当になにもかもが普通すぎた。あまりに変わらない毎日に刺激が欲しいと感じたことも幾度かあった。

変わる日常、それは日常とは言わない。けれどそんな日が来て欲しいと思えてくる。

だからこそ今は思える、そんなこと願うなど馬鹿だと。

小学四年生、運動は剣道をやっていた。県内では結構有名な選手と言われることが多く、それで調子に乗っていたこともあった。親は普通の会社に勤め、別に不自由なども無かった。強いて言えば、お小遣いが少なかった。剣道で使う竹刀が自分は早く割ってしまう、だから金がかかってしまう。

まあ、悲観しても仕方ない。どうせ増えることなど無いのだから。

「ゲーム買いてぇ～」

けれど増えて欲しい物だ。ありすぎても困りはしないのだから。

自分は刺激はゲームなどで補っていた。面白いゲーム、それを買う度に日常は変わらなくてもいいと思える。けれど今は違う、なにもない。だから変わって欲しかった。

「そんなこと言ってないで宿題やりなさい」

キッチンにいる母親にそういわれて、現実を見なければいけなくなる。一応宿題は全部やっている。たまに出せないこともあるが。それは気にしてはいけない。気にしたら負けだ。

「あ～、じゃあやるか」

宿題ほど面倒臭くてやる気が無い物はない。自分では全速力でやっているつもりなのだが、中々進まない。さっさと終われと念じながらやる。

「ただいまー」

父親も帰ってきたようだ。声からして仕事帰りで疲れているようだ。

「おかえり～」

自分の部屋から一応言っておいた。そしてまた宿題に向かう。けれどやはり逃げ道があるとやはり使ってしまう。

そう、それは漫画だ。机の近くにある漫画本についつい手を出してしまう。心が弱い奴と罵りたければいい。とにかく読ませて欲しい！

パラパラとめくり時間を潰す。何度も読んだ漫画だが、逃げ道にしては上出来だ。

けれど天罰というには必ずあるものだ。突然自分の部屋のドアが開いた。

「なにやっているの！」

突然部屋に入ってきた母親の怒鳴り声が響く。

「……分かったよ」

渋々宿題に戻る。しょうがないので終わるまでがんばる。

それから数十分経った。

「ごはんよ～」

「分かった」

やっと夕飯だ。勉強をすると腹がよく減るので心待ちにしていた。

ダイニングに行き、テーブルに乗っている料理を見る。

「カレー？」

「ハヤシライスよ」

「お～、これはうまそうだな」

父親はうまそうといっているが、別に普通に見えてしまう。それとも俺の感覚がおかしくなったのかもしれない。

3人が椅子に座り、合掌する。

「では、いただきまーす」

そういってスプーンを持ち食べ始める。自分で言うのもなんだが食べるのは早い。そして量も多い。「ブラックホール」なんて言うあだ名も付けられた。

とにかく食った。テーブルが少し汚れようが知ったこっちゃない。

とにかくおわかりをした。

「ごちそうさま～」

食べ終わり、さっさと自分の部屋に戻って行った。

「さっさと終われ～」

そして宿題に没頭した。

9時半、就寝だ。眠らなければ怒られてしまう。さっさと布団の中に入った。掛け布団を体全体で覆って、眼を瞑った。

（なんかないかな～）

ただ、ほんのちょっと心の中で思っただけだった。けれど、それが本当に叶うなんて、思いもしなかった。

「キャ――――――！」

夜の１１時、全てが壊れる時間が、始まった。

過去編？　カイ？

「キャ――――――！」

「・・・・・・・・なんだ？」

時計は１１時を示していた。普通なら起きれば眠い時刻だが、さっきの叫び声の大音量で目も覚めた。

（ゴキブリかなんかか？）

そんなものだろう。この時代強盗などテレビでもなければありえない。たまにあるらしいが。

「さっさと倒しちまおう・・・・・・」

今寝ないと明日大変なことになりそうなのでさっさと終わらせたかった。父親も居るだろうが、２人のほうが早い。

ベッドから降りて、壁にかけておいた木刀に手を伸ばした。木刀で倒すのもあまり言い気持ちはしないが、こっちのほうが早く終わる。ちなみにこの木刀は少しばかし重く作られている。尚更威力が高い。

そっとドアを開けようとした。そこには母親と父親が居るはずだ。

「放せ！」

けれど、ふいに聞いたことの無い声も聞こえてきた。

「・・・・・・誰かいるのか？」

まさか、強盗とかか？　いやいやありえない。けれど、少し不安がある。

ドアを少しだけ開け、ダイニングの様子を窺う。

「（誰だあいつ！？）」

見れば両親は居た。そして、小太りの男がいた。身長は１６５くらい。カイと比べれば１０センチくらい差がある。男はナイフを持っていて、カイの両親に刺そうとしていたが、両親は必死の抵抗でナイフを抑えていた。

「（どうすればいい・・・・・・？）」

異常事態だが、頭は冷静に働いていた。男は強盗か何かで、両親を殺そうとしている、それだけは分かった。

男はこちらに気付いていない。だったら

「行くか・・・・・・・・」

やらなければ両親が死んでしまう。そんなのあっていいわけが無い。

問題は気付かれずに後ろを取るかだ。距離はざっと3メートル。ドアを開けた瞬間にバレてしまう。全速力でも反応されてしまうだろう。

「どうする・・・・・？」

けれど男は両親を振りほどきナイフを振り上げてしまった。

そのときには体は動いていた。ドアの音で男は振り向き、驚いた様子でこちらを見ていた。けれどそんな関係ない。

男がナイフを動かす前にみぞおちに突きをお見舞いした。男はよろめき、ナイフを手放しそうになる。そして木刀でナイフを弾き飛ばす。ナイフはクルクルと横回転し、床に落ちた。

男はまだ驚いた。自分でも驚いている。なぜこんなにも力が出るのだろうか。分からないけど、とくに気にも留めなかった。

男はなおも抵抗をしようとこちらに攻撃する。けれどそれは交わした。力を入れすぎたのか、体が流れてしまう。

頭ががら空きだった。そこで、木刀を振り上げる。

「終わりだよ」

そこに、渾身の一撃を入れた。たった一撃なら気絶だけで済むはずだ。そう思った。

まるでゲームのラスボスでも倒すような気持ち。それもカイを支配した。倒した後の達成感がなにかも知りたかった。

そして、奇妙な音をたてて、男は倒れた。

なにもかも、また笑って暮らせると、そのときは疑わなかった。

夜１１時半、警察はある家に訪れていた。周りには多くの大人が終結していた。多分近所の父兄だろう。

「五陽田警部、死因が判明しました」

警官の１人が五陽田にそう告げた。

「なんだ？」

「その・・・・・撲殺です」

警官は躊躇ったように言った。けれど五陽田はその言葉にはあまり反応しなかった。

「で、凶器は？」

「それが・・・・・・・木刀です」

【木刀】という言葉を聞いて、五陽田は顔をしかめた。

「木刀だと？　・・・・・・・で、誰がやったんだ？」

「・・・・・・・四年生の男の子です」

「は？」

あまりに馬鹿げている警官からの言葉を聞いて、五陽田は声を上げた。

「そんなことあるわけがない、ちゃんと調べろ！」

「ちゃんと調べました！　けれど、本当なんです・・・・・・」

誰も信じられないけれど、警官の必死の訴えに黙り込んだ。

「あの～・・・・・・」

どこからか来た銀髪の少年に五陽田は話しかけられた。

「誰だこの子は？」

「それが・・・・・・・」

警官は言うのを躊躇った。けれど五陽田はそんなの知らずに先に少

年の話を聞いた。

「なんだい？　ここはまだ捜査が――――」

「俺が木刀で殴った人大丈夫ですか？」

五陽田の顔が固まった。いや、周りにいる父兄も、警官も固まった。
その場にいる全員が凍てついた。

「いや・・・・・さっきの様子だとそうとうヤバイらしかったので
質問したみたいですが・・・・・・・」

「・・・・・・・・・あの男は――――」

「まあ、死んでもしょうがないですよね～」

今度こそ、五陽田の顔は歪んだ。「殺した」というのにも関わらず
この有様だ。

この場に居る全員が、この少年を畏怖した。

「殺人鬼！」

そういって教室にある花瓶がカイに投げられた。

「あぶなっ」

そういって避けた。花瓶は地面に落ちて砕け散った。音をたてて、破片が四散する。

「なあに、今の音？」

廊下に居た先生が教室に入ってきた。その声に投げた男子はビクッとして固まった。

「いや、あいつが――――」

「カイがやったんです！」

投げた男子はカイを指差しそう言った。

「おまえ、嘘つくんじゃ――――」

けれど、言葉をつなげなかった。先生の眼が、カイを睨みつけてい

た。

殺人を犯した生徒が、花瓶を投げても誰も疑わない。そういうことだろう。

カイは、孤立した。誰も、味方ではない。

誰も、味方ではない。

「ただいま」

そういって玄関のドアを開けた。

「・・・・・・・・・おかえり」

母の冷たい目がカイを出迎えた。

こうした生活は、あの夜からだ。あの夜のカイにとっての冗談が、

全てを壊した。

まさか、本当に死んだとは思わなかった。

なぜあの時殺してしまったのだろう。なんであの時あんなことを言ったのだろう。

それは今でも疑問だった。けれど、何度思っても変えられない。

そんなのが、嫌になった。

もう、刺激的なものなど欲しくなかった。

「・・・・・・・・行ってきます」

そういってドアを開けた。母からの返事は無く、父親は顔を見せる前に仕事場に向かったらしい。

多分、恐いのだろう。自分が殺人に快楽を感じているにのだと思い、だから自分を避けている。常人は多分そういう考えをするだろう。けれど、それが違うとは誰も分かってくれない。

一応ポストに中身があるか確認した。けれど自分の家に関係あるものではなく、ただ自分を罵る手紙しか入ってなかった。それを見るたびに悲しくなってきた。けれど手紙は減らない。減ってくれない。

歩くと視界に入った全員が自分を見た瞬間距離を取った。それはまるで王様のようでもあった。何も邪魔が無い道。まさに自分は王様のようだった。けれどそれは違うと分かっている。分かっているからこそ、悲しい。

いっそこんな生活など壊れて欲しい。けれどそれは即座に否定した。そんなことを思っているからあんなことが起きるのだ。だから、もうそんなことを思いたくない。

けれど呪いのようだった。まるで、自分がそれを思うごとになにかが起こる。それが、現実だと認めたくなくても、現実だった。

ふいに左から何かが迫ってきた。けれど体は即座に反応してくれない。そしてそれは足だと気付いたときには、近くの建物に激突していた。

「いい当たりー」

聞いたことの無い声、自分を蹴飛ばして面白がっている声だった。

立ち上がってみるとそこには3人の中学生。ここらでは有名な不良だ。前に親から関わるなと言われたことがある。

「おい、来いよ殺人鬼」

自分を蹴飛ばしたと思われる1人が挑発してきた。はっきり言って関わるだけ無駄だった。けれど、あまりに異常なことがありすぎた自分にとってはそんなことなど考えられなかった。

その挑発に乗ってやった。地面を蹴って距離を縮める。

不良たちは間違えてしまった。あまりに不機嫌なカイを敵に回したことを。そしてカイもまた間違った。本気を出してはいけないと分かっていて出してしまった。

結果、1分も経たないうちに不良は倒れた。本当に一瞬だった。

カイの中になにかが、確実に覚醒していることを表してもいた。そう、【狂気】が。

カイも不良をぶちのめした後にようやく気付いてしまった。またやってしまったのだと。死んではいないけれどやってはいけなかった。自分をまた追い込んでしまうからだ。

ひそひそと周りの人間が小声で会話しあう。耳がいいカイにはその会話が少し聞こえてしまった。聞こえた単語は【殺人鬼】。

「なんだよ・・・・・こんなの」

自分は殺人鬼と本当に変わらなかった。感情の揺れ動くまま、ただ敵をぶちのめす。そんな自分が、恐かった。

気付けば、自分はどこかにいっていた。どこかとは分からない。ただ、人とあまり関わらない場所に、あてもなく走っていた。

過去編？　カイ？（後書き）

感想待ってマ～ス。ここは本当に書きにくい・・・・・・・・・・・・

ちなみにカイが最初捕まらなかったのは正当防衛です。

そして何故体が良く動いたかは火事場の馬鹿力です。

では

過去編？　カイ？

雨が降りしきる中、カイはは路上に座っていた。雲は灰色で、晴れる気配も無い。

あれから3ヶ月、頑張って生きた。何をしても。食べ物を盗んだり、ごみからあさって食べたりもした。あの生活を送ってきた者からしてみればホームレスとなんら変わりない。というかホームレスか。

服はボロ雑巾のようになり、体はくさい、けれどもう臭いとも感じなくなってしまった。

なんとかダンボールを寄せ集めて雨宿りをしているけれど、体温は奪われていく。

「寒いな・・・・・・・」

１０月とは寒くなり始める時期だ。そして家も無いカイには真冬のように感じられた。

何で生きているかも分からないこの状況。なんのために生きているかは誰も教えてくれなかった。

親は多分捜査願いを出さなかったのかもしれない。もしくはどこかに引っ越して身を潜めているのか。

トランサーをカパッと開けて、時刻を見る。ただ食べて放浪する日々を送っていると時間が分からなくなってくる。

「今は5時か・・・・・・・・」

そういえば自分より年下の小学生が下校していた。もうそんな時間なのかと自覚させられる。

「じゃあ・・・・・行きますか」

食べ物を探しに行く。明日さえ分からない今の状況だ。ありすぎて困るわけでもないので立ち上がろうとする。けれど力が入らない。

もうこんなに自分も落ちぶれたのかと思った。あの生活に戻りたい、そう思わずにいられなかった。

「・・・・・・・終わりかな」

もう終わりな気がした。立ち上がることも出来ずに、一体生きていけるのだろうか。答えはノーだ。生きられるわけが無い。足が動かせないでどうやって食べ物を探せというのか。

短い人生だったものだ。悲しいとは思わなかった。別にどうでもいい、さっさと死にたいと思っていた。

あとは、ただ眼を瞑るだけ。それだけで楽になると思っていた。そして、眼を瞑った。視界はもちろん真っ黒になり、何も見えない。

待つだけだ。それで俺の人生は終わりだった。意識も遠のき、思考もなにもかも止まってくる。

（さよなら）

この世に言ったのか、それとも両親に言ったのか。はたまた自分に言ったのか分からない。別に分かっても今更どうにかなるわけでもないが。

ふいに、足音が聞こえた。その音で意識は回復した、残念なことに。

（なんだ？）

足音は徐々にこちらに迫ってくる。ここはたしか滅多に人が来ない道だから人が来るなんておかしい。来る人は自分のようなホームレスくらいだ。

どうせ最後に顔を見合わせる人間だと、その訪問者らしき人物を見た。その訪問者はこちらを見て止まり、凝視していた。

見れば、その人物は自分と年が変わらない少女だった。別に汚くも無い服、逆に綺麗な服を着ていた。

たまにいるのだ、ホームレスを馬鹿にする子供が。自分も子供だが、それでもこういう奴らほど嫌いな奴はいない。けれど、そんな考えもホームレスになってからだが。

とにかくあまりにも自分と違いすぎる少女は、ただ自分を見ていた。

「なんだよ」

さすがに何秒も立ったらさすがに疑問に思う。なんでずっと見つめているのかと。

「・・・・・君もしかしてホームレス？」

なるほど、こちらがホームレスかどうか確かめて馬鹿にする気らしい。

「そうだけど、なに？　悪いけどさっさと帰ってくれ」

こちらは今さっきまで死ぬはずだったのだ。それがなんでこんな奴に邪魔されなくてはいけないのだ。起きた自分が馬鹿だ。

けれど、次に少女からいわれる言葉は意外すぎた。

「あのさ――――」

「もしかして暇？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

暇とはなんだ、暇とは。意味が分からない質問をされ頭がパニくった。

「いや～・・・・・・・暇なら一緒に来ない？」

「・・・・・・逆ナンか」

思わず少女に突っ込んでしまった。少女はその言葉を聞いて笑顔を浮かべた。気持ち悪い奴だと思う。

「ツッコミできるなら立てるね？　じゃあ、行こう」

そういって少女は先に歩いてしまった。

ツッコミを入れたくらいで歩けるかと、思ったがなぜか足に力が入った。

疑問に思ったが、けれどようやく歩けるようになったことに少しの喜びを感じた。気付けば雨は上がり、日が差し始めた。

「まあ、最悪の場合食い物盗んで逃げればいいか・・・・・・」

そんな考えで自分は少女についていった。

「早く早く！」

少女にせかされ、足の動きを早くした。

このわけの分からない出会いが、ある意味運命的だった。これほど運命というものに感謝をしたことは無かった。なぜ、感謝したかについてはまた別の話。

「以上すかね」

そうカイは締めくくった。

「ありがとう。なんで私に話してくれたんだい?」

「あなたには知る権利がある。あの夜何があって、俺がなぜあの場所にいたのかをね」

「そうか・・・・・・」

五陽田の顔も神妙になり、なにかカイをかわいそうな眼で見ていた。

「なら、なんで君はあの後家に戻らなかった?」

「やることがあるんでね」

「それがこれかい？」

だとしたらやめさせるべきだ。今すぐにやめさせ親の元に帰らせるべきだ。

「あなたにも教える気は無いですよ」

口ぶりからして誰にも教える気は無い。それだけは分かった。

「無理矢理帰らせることもできるのだよ？」

「だったらとっくにあなたなら実行してますよ。あなたはそんな気はない、でしょ？」

そう言われればそうだ。最初からその気は無い。けれど、このままでいいのかと思う。

「あ～、もう時間だ。スイマセン。最終検査があるようなんで」

そういって立ち上がった。時間を見てから急にせかせかしだしている。

「すまないね、わざわざ過去のことを」

「いえいえ、いんですよ。たとえ――――」

「他の誰かが聞いていようがね」

その言葉に若干ながら顔が引きつってしまう。そんなことにもお構いなしにカイは笑っていた。

「じゃ、またさようなら」

そういってカイは病室から出て行った。

五陽田はすぐにハンターで無線を開いた。

「すいません、長官殿」

「バレたか・・・・・・分かった、すぐに戻るように」

「はっ！」

そして無線を閉じた。妙に病院が静かに感じられた。

「君はあれからなにをしだしだんだ、カイ君」

その答えは、カイとゲイルしか知らない、『宿題』だった。けれど、誰も知らない。そのことに誰も気付けない。

まるで風をつかむかのように、不可能だった。

過去編？　カイ？（後書き）

間違えあると思うのであったら報告を・・・・・・眠い

第８３話　欠席

日曜をテキトーに過ごしたスバルは、またも寝坊して朝を迎えた。

「ウォーロック！」

『うるせえ！　てめえが起きなかったんだろうが！』

急いで着替えるスバル。土曜日の違和感を考えていて昨日の夜も寝付けなかったらしくて、少々顔が疲れている。

『早くしろ！　また委員長の怒鳴り声を聞きたいのか？』

「うわあああ！　それは無理！」

スバルはさっきよりも動きが速くなり、より顔も必死になっている。

「おかあさん、ご飯は？」

「もうとっくに出来ているわよ」

その言葉を聞いた瞬間スバルは椅子に飛び込むように座った。どうやって座ったかはウォーロックには分からなかった。

掻き込むようにご飯をたいらげ、持ち物を持って玄関に向かった。

「い、行ってきまーす」

そしてドアを開けると闇魔大王（ルナ）が待ち迎えていた。

「遅い遅い遅―い！」

「ひいっ！」

ルナの後ろで立っているゴンタとキザマロはかわいそうな眼でスバルを見ている。無論助けるつもりは無い。助けに行ったら自分の身が危ないからだ。その本能に従って2人はスバルを見ているだけだった。

「いつになったらあなたの寝坊癖は直るの！　そんなんだったらあなた中学行けないわよ！？」

「は、はい！」

背筋をピンと伸ばして返事をする。端から見れば軍人かなにかだと思えてくる。

「とにかく急ぐわよ！」

といって4人は学校に駆け出した。

チャイムが鳴るよりもギリギリ早くスバル達は教室に入った。

「遅いぞ、４人とも」

育田が４人に向かって言うが、当の４人は全力ダッシュのおかげで息が上がってしまっている。

「・・・・次からはこんなことがないように」

溜め息混じりに育田は言った。もうこういうやり取りは幾度も繰り返されていた。なので溜め息しか出てこない。

「あぁ、そういえばカイは休みのようだ」

その言葉にクラス全員が驚きの表情を浮かべた。

「あいつが？」

「今日は雨でも降るのか？」

という声が絶えない。カイは顔色を悪くしたことは愚か、虫歯にすらなったことのない。それが休むとは安易には納得できないだろう。

「それがな・・・・・腹痛だそうだ」

育田も納得できないのか、顔を険しくしている。

「まあ、居ない人間をとやかく言っても仕方がない。では、一時間目の用意をしておけよ」

そういって朝のホームルームは終わった。

「・・・・・どうしたんだろう」

誰も座っていない机を見て、スバルは小さく呟いた。

ハンターから着信音が聞こえた。それを聞いてカイはハンターを手にする。

「誰からだ?」

まず昨日の夜に受信したメール、それはサテラポリスからのものだった。用件はこの一週間のうちにサテラポリスに来いというものだった。

「面倒臭いな～、本当に」

なぜ昨日のうちに気付かなかったのかというと夜遅くまで起きていられないからだ。というか起きてもやることが無いからだ。

そして二通目、入院した病院の主治医からだ。

「なになに？　大丈夫かって？　駄目だよ！　腹痛で死にそうだよ！」

メールに怒鳴っても意味が無いのだけれど、ついつい怒鳴りたくなってしまう。

「本当にあの人の言うことは事実だからな～。飲まなければ良かった」

カイが飲んだ薬とは、傷の治りを驚異的に早くする代わりに激しい腹痛に見舞われるというあまり体によろしくない薬だ。普通医師に痛みを伴うと言われれば少しの痛みと思ってしまう。けれど本当に痛い。

「だからあの人は嫌なんだ・・・・・さすがあいつの・・・・・・・だけ・・・・・あ・・・・・る」

途中でなにかを言っているか分からない言葉を発したカイは布団の

上で力尽きた。

『お～いカイ。腹痛の薬を・・・・・・・・ってまた寝たのかよ』

カイがこの薬で力尽きたのは2回目。1回目は、体験したことの無い強すぎる痛みで一瞬で気絶した。なのである意味そちらのほうが良かったのかもしれない。

『まあ・・・・・たしかにこっちが『宿題』を押し付けているんだから疲れるのは無理ねえが、無茶すんなよ。あともう少しだ。それで・・・・・・おまえとはお別れだからな』

気絶しているカイに向かって、聞いてないのを分かっていてゲイルは言った。

『あとはこれを使って、あれを作って・・・・・・』

そういってゲイルはなにか作業を始めた。カイが苦手そうな細かい作業を始めた。けれどゲイルも苦手だが。それでも作業を進めた。

『さあ、これでどう動く？　サテラポリス』

第８３話　欠席（後書き）

今回は非常に書きやすかったです。前の話がクソ難しかったので本当に書きやすく感じますよ。今回は結構自信あります、ハイ。

では、感想下さいね～

第８４話　欲

「ハヤテ君、どうしたんだろう……」

スバルは空をみて呟いた。けれど答えは帰ってこない。当然といえば当然だが、それでも虚しい。

「どうしたの？　スバル君」

そんなスバルに話しかけてきたのはツカサだった。今は昼休みなので教室がやや騒がしいが２人の空間だけは静かだった。

「いや、ハヤテ君が来ないなんてなにかあったのかなぁって」

「彼は嘘は言わないから、腹痛は本当だと思うよ？　だから心配してもしょうがないよ」

そういえばそうなのだが、呟かずに入られなかった。なんというか、カイというのはそれこそ別次元の人間のような感じがするのだ。何か、スバル達とは壁があるような、そんな感じだ。

「ハヤテ君、僕達を避けていない？」

避けているというわけでもないのだが、それでも少し冷たい気がした。

「う～ん……どうなんだろう。たしかにそんな感じもするけど、なんか僕達にヒントも教えてくれてる気もするしな」

「ヒント？」

ヒントとは何だろう、その言葉にいささか興味が湧いた。

「僕は、そんな感じがするんだ。まるで……僕達を導いてくれてるような気がするんだ」

「導く……」

ツカサの考え方は面白いなと、スバルは思った。カイが自分達を導くとはあまり思えない。

では、カイは何が言いたいのだろう。そこが知りたい。けれど、分からない。カイの過去か何かを知らない限り。

「……もしかして二重人格なのかな」

「え？」

「いや……なんかそんな感じなんだ。まるで、なにかを抑えているみたいなんだ」

確証無いけどね、とツカサは付け足して微笑んだ。抑える、

「抑えている……か。だったらたしかに人に嫌われるとか考えている余裕が無いかもしれないね」

カイが言った人に嫌われてもいい、あれが本当の言葉だとは、信じられない。だが、カイの眼からして嘘だとも思えない。

「誰しも【心の闇】はあるものだよ。僕と君みたいに、誰も持っていないはずがない」

「そうだね……時間がかかるかもしれないけど、がんばって分かり合おう、ハヤテ君と¥」

それが、今カイにできる最善のことだと2人は思った。

「じゃあ、僕は係の仕事があるから行くね？」

「うん、分かった」

（……ツカサ）

（何ヒカル？）

（カイのことだが、あれは二重人格じゃねえ）

（……なんで分かるの？）

（俺がおまえから生まれた新しい人格だ、けどあいつからはそんな人格の感じはしねえ）

ツカサから生まれたヒカル、彼だから分かるのかもしれない。

（じゃあ、なんなの一体）

（多分……欲だ）

（よ、欲？）

予想外の単語を聞いて、ツカサは少し動揺した。その動揺が顔に出て、周りから変な目で見られた。

（そうだ……あいつのなかに眠る欲を、あいつは抑えようとしている）

（どんな欲なの？）

（そこまでは分からねえ。けどな、あいつがもし――）

次に言われるヒカルの言葉を聞いて、ツカサは、カイという存在を疑った。

第８４話　欲（後書き）

ちなみに三大欲求ではありません。意外だと思うものです。最後のはあえて書きませんでした……だってつまらなくなっちゃいますから

２日考えてこんな駄文じゃ駄目ですよね・・・・・もっとがんばります。

では、感想待ってマ～ス

第85話　成長

「……誰じゃ？」

突如、店の扉がガラッと開いた。

『お久しぶりで～ス』

「……おまえは――――」

『ゲイルだ。カイのウィザード。ってか知ってるでしょ？』

ゲイルは、武道具店の老人に目を離さず言った。

「おまえとわしだけが喋るのは初めてじゃな」

『そうだな……まあそんなのどうでもいいんだ』

真剣な表情を浮かべるゲイルに対して、老人は表情を一つとして変えない。

『あんた……次に何をしようってんだ？』

「なんのことじゃ？」

『とぼけんじゃねえ』

もったいぶらないで、率直に切り出すゲイル。それには苛立ちが込められていた。

『あんたがこの間俺らに仕向けたんだろ、サテラポリスを』

今はもう夜で、風邪が少しばかし吹いていた。店内は暗く、風邪のせいで扉がガタガタと音をたてているのが不気味だった。

『今度は死ぬぜ？　そっちだって無駄な死人は出したくないだろ？』

「小童がなにを言う。そっちが殺さないと分かっていたから仕向けたに決まっておろう」

『もう一度言う、本当に次は死ぬ。カイの近くに偶然止めてくれたやつがいたからサテラポリスの奴は死ななかったんだ。じゃなきゃ――――』

「本当にまだまだ小童だな」

その言葉に若干ながらゲイルを苛立たせる。けれどそれでも口調を変えず言葉を続ける。

『頼むぜ、本当に。次は……本当にねえぞ』

「……ではこう伝えておけ。おまえがどれだけ戦おうとも、おまえは誰も守れやしない。今のままではな」

『……俺が機嫌よければ伝えておくよ』

そういって、ゲイルは店から出て行った。風邪が一瞬強く吹いたかと思えば、そこにはゲイルの影は無かった。

「おまえでは到底無理だよ、カイ。おまえでは……悲しませることしか出来ない」

伝わらない言葉。それだけが虚しく店内に響いた。

『ただいま～』

「おかえり。で伝えた？」

『小学生のお使いでもあるまいし間違えないわアホ』

寝込んでいるカイにゲイルは暴言を吐く。案外ここだけかもしれな

い、2人がこんな会話をするのは。

「なんて返事もらった？」

『……不機嫌なんだけど教えてやるよ。おまえじゃ誰も守れないってさ』

「そう……だからこんな無茶してるんだけどな」

傷を見せてそう笑った。けれど、腹痛の所為で元気が無い。他に理由があるが、それが一番だろう。

『カイ、たしかにおまえは負けたさ。けどな……それで暴走するのを恐れて腹痛で掻き消そうとするのは体に良くないぜ？』

「心配あんがと。けど……それでも……そうか、俺は逃げているだけか」

上を見上げて、顔を手で覆ってカイは笑った。なにかに狂ったように、静かに笑った。

「ハハハ、本当に俺は弱いな」

『笑うのやめろ、気色悪い』

その言葉を聞いてカイは笑うのを徐々にやめていった。眼は、悲しみを映していた。まるで、いいたいことが分かってしまったように。

『人間は弱いんだよ、だから成長しようとする。そうだろ？』

「……おれはあの時から成長してないのか」

溜め息をついた。全てを吐き出すように。負の感情、それがカイの体内から出て行った。

『だから気にすんなって。今から成長すればいい話だろ？』

「過去は変えられないけど過去から学べることはあるさ」

『暗い暗い暗い暗い！　気分悪くなるからやめろ！』

カイが住んでいるアパートの一室が暗い。電気はついているが光がこんなに暗いのかと思ってしまうくらい暗い。ちなみにゲイルからみる光は暗闇の蛍の光よりも小さい。

（空気悪いな、本当に）

窓を開けたら冷たい空気が入ってきたのですぐ閉めた。この状態のカイを治す力を持っている人物を知っているがそれに貸しを作りたくないのでやめておいた。

（女に貸しを作るのは好きじゃねえ）

そう思いながら、ゲイルは空気の悪い一室にカイと一緒に居続けた。それからゲイルとカイが喧嘩したとか。そのおかげでより一層空気が悪くなったのは、言うまでもない。

第８５話　成長（後書き）

記念べき１００話目！　読了時間一話約3分をキープしてきましたが、ここまでよくがんばりました！ちなみに今日は連載２ヶ月目でもあります。

まあ、内容はつまらないけど気にせず。そこは作者として譲れませんからね。

では、これからも応援よろしくお願いします！

ＰＶ７００００突破しました！　ありがとうございます！

第８６話　幽霊

「寒いな……」

今はまだ5月の中旬くらいなのだが、それでも夜は寒い。そんな中、ジャックは歩いていた。

『俺は全然寒くないぜ』

「だったら暖かくしてくんない？」

『先に仕事終わらせろ』

ちぇっ、と言ってジャックはまた辺りを見回す。川沿いを歩いていて、水の流れる音が少し聞こえてくる。

「……最近のノイズ率の上昇はプロヴェの時だけか……」

ジャックはサテラポリスの仕事で、今最近のノイズ率の上昇を調べていた。理由は、ノイズの量が不自然すぎるほど少ないからだ。

「俺達がメテオGの事件を起こす前のノイズの量と比べると、ほぼ皆無だな……」

そう、通常ノイズはある程度放出される。けれど、あのプロヴェとの戦い以外ではノイズ率は上がってない。これはプロヴェが吸収しているので、全体的に見れば上がっていない。さらにアサルトとブラフマとの戦いのデータを見れば、１５０％以上は上がってない。ここから推測されていることは

「『ガイア』はノイズに対する術がないってことか」

赤い魔術師の戦いをスバルから聞いたとき、ノイズチェンジしたときから攻撃は効いた様だ。そして時間がたつほどノイズ率は上がってしまうので退いたとも考えられる。

「……じゃあなんで対策しないんだってことだ」

スバル達同様なんらかのPGM（プログラム）を作ればそれで済むはずだ。けれど、それをしないというにはなんらかの理由があるはずだ。

「できないってわけじゃあるまいし……」

相手が作れないとも考えにくい。それに、今回の敵も大人の可能性が高い。だからこちらが動くことにも対策をしている可能性が高い。細心の注意が必要だ。

「つっても誰も来ないけどな……」

ここら一体のノイズ率も調べたことだ。さっさと家に帰って夕飯を食べたい所だ。

『終わったか？』

「ああ、じゃあ帰ろう――――」

ふいに、周りの木々がなびいた。そして、そこから影が現れた。

「ッ！　誰だ！」

影の正体は、黒と灰色を混ぜたような、幽霊の形をした電波体だった。

『んだあいつ？』

電波体は黙って、ジャックに向かって手をかざした。別に手からなにか出たわけでもない。けれど、ジャックは頭を抱えて苦しみ出した。

「な、なんだこれ……」

『こ、これは……？　ぐっ、うあああああ』

2人は悲鳴をあげ始めた。月は雲に隠れ、一層辺りを暗くした。そして、また雲が現れたときには、誰も居なかった。

『ん？　これはコーヴァスの周波数だな。こっちに向かってくるな』

「本当？　じゃあ外に出てみようか」

大悟はとっくに帰ってきていて、夕飯も結構前に食べていた時間だ。こんな時間に人が来るとは珍しいが、じぶんのブラザーを待たせるわけにも行かないのですぐに部屋を駆け下りて、外に出た。

『まだ遠いな。もう少しって所だ』

「あ、あれじゃない？」

スバルの指差す方向には、眩い星が煌いていた。その光を遮るのが、多分コーヴァスだ。

「お～い」

手を大きく振ってアピールした。コーヴァスはそれを見ると、一気にこちらに向かってくる。

『……ありゃあ電波変換してるな』

「ホントだ。ジャ―ック！」

今度は大声で呼んだ。ジャックとスバルの距離は一気に縮まった。

『お、おい止まれ！』

けれど、幾ら近づこうとも止まる気配が無い。逆に早くなってきて

いる。

「エアロダイブ」

「うわっ！」

間一髪でスバルは横に跳んでそれを避けた。すぐに立ち上がり、ジャックを見る。

『なにしてんだコーヴァス！　危うく当たる所だったじゃねえか！』

けれどジャックとコーヴァスは返事すらしない。それどころか、攻撃の態勢に入った。

「グレイブクロー」

紫色の炎で形成されている爪が数個、スバルにむかって飛んでいく。

『くそ、頭おかしくなったのか？　ビーストスイング！』

すぐにハンターから出ると、ウォーロックは自慢の大爪で爪を掻き消していく。けれど、掻き消されようがジャック達は表情一つ変えない。

『ちっ……電波変換だスバル！』

「どうしたんだろう……でも、今はとにかく止めなきゃ！　トランスコード　シューティングスターロックマン！」

電波変換し、スバルはジャックに向き直った。

「どうしたの？　なんで戦うの？」

けれど返事は無い。ただ、黙って飛んだ。

『なにかおかしいな……とにかく家から離れるぞ！』

ウェーブロードにあがり、そこからスバル達は遠くまで駆け抜けた。

当然ジャックは追いかけてくる。

『何かが変だ……なにかが』

「とにかくジャックの目を覚まさなきゃ、ウェーブバトル　ライドオン！」

再び、ジャックとスバルは交わった――

第８６話　幽霊（後書き）

ゴッドイーターのオープニングの『Ｏｖｅｒ　Ｔｈｅ　Ｃｌｏｕｎｄ』を聞いてます。案外いい歌でした。がんばろうと思えますね。

それと、お気に入り登録が９人になりました！　ありがとうございます！　けれど３人分かりません……できれば自分がしましたと言って下さい。そのほうが嬉しいです。

では、感想待ってマ～ス！

第87話　おせっかい

「ロックバスター！」

けれどそれははいとも簡単に避けられてしまう。相手が空中に居るのも大きいが、むしろ戦闘になれているジャックというのが一番だろう。

「くっ……全然あたらない」

「ヘルズシックル」

一瞬で間合いを詰めたジャックが翼でスバルの首を刈ろうとする。

「バトルカード　バリア！」

一度しか守れない盾。けれどそれだけでも充分であった。傷は負っていない。

『スバル、攻撃しろ！』

「でも、それじゃジャックにダメージが！」

強すぎる攻撃はジャックを傷つけてしまう。例え正気に戻ったとしても、それでは決して駄目だ。

『けどな、攻撃しなきゃこっちが駄目になるぞ！』

「そうだけど……」

「グレイブクロー」

考える余地を与えないとでも言うようにジャックはスバルに攻撃をする。避け続けるスバルだが、ウェーブロードという足場の狭い場所では全ては無理だった。数個のうち1つに当たってしまう。

「ぐわっ！」

ウェーブロードから真っ逆さまに落ちるスバル。それをジャックは急下降して追いかける。

「エアロダイブ」

空中では翼か何かが無い限り身動きは取れない。そしてジャックは翼がある。空中ではそれがあるだけで勝ち負けが決まる。そして、ジャックはスバルに突っ込んだ。

（くそ、これはヤバイ！）

ウォーロックがそう思ったとき、スバルの周りに風が収束する。それはジャックを近づけさせず、スバルを無事に着地させた。

「な、なに今の風……ウォーロック？」

『違うぜ……今のはシルバー・ウィンドと同じ風の感じがしたぜ』

「シルバー・ウィンドの？」

『おおかた、おまえが死なないようにしたんじゃないのか？　多分

ゲイボルグとハイドの時もそのおかげで風が使えたんだろうな』

それなら頷ける。『ガイア』はスバルを殺さないようにしている。だから風で死なないようにしたのだ。

『けどそんなラッキーはないらしいぜ！　今度は本気でやんなきゃ次こそお陀仏だぜ！』

「そうだね、次からは手を抜かない！」

もう心に決めた。ジャックを倒す、そして助けると。あるのは使命感と、勝つという強い気持ち。

「クロスシステム　エレキクロス！」

黒と黄色基準のボディに、背中には４つの電気器具が４方向に背負われている。

スバルの変身を見てか、ジャックも変身をする。

「究極変身（ファイナライズ）」

「なにっ！？」

『ノイズはほとんどねえんだぞ！』

けれど、どこからともなく表れた赤い物質、ノイズはジャックを包み、さらに強くなる。

「ヘルバーニングモード」

『どこからノイズを持ってきやがった！　ノイズなんてほぼねえんだぞ？』

『１５０％ってところか……これで究極変身（ファイナライズ）はできるってわけか』

黒き電波体、いやウィザードは呟いた。ウィザードがジャックにしたのは催眠ではない。憎しみという感情を爆発させたのだ。ようするに、メテオＧの一件でスバルに負けたときの憎しみだけを爆発させたのだ。だから、スバルだけを狙ったのだ。

『これなら……集めた分のノイズでもお釣りが来るな。俺でもノイズをある程度扱えるから……もしもの時は大丈夫そうだな』

ぶつぶつと呟くウィザードを尻目にスバルとジャックは激しく交戦する。黄色と紫が真っ向からぶつかり、消えていく。

『さあ……そろそろ本当の計画だ。精々死ぬなよ？　じゃないと、なんも罪の無い人間が死ぬかもしれないからな。クックックッ……』

そういって、ウィザードは消えていった。まるで霧のような、実態の無い何かのような。

「サンダーボルト！」

腕から発射される直線状の電撃がジャックに向かって飛んでいく。技を出した直後だったのでジャックは避けきれない。電撃が体の表面を焼き、マヒさせる。体は自由が聴かず、落下していく。

「そこだ、デスライトニング！」

上空に雨雲が立ち込め、そこから5つの落雷が発生した。そしてそれはまたしてもジャックに直撃する。

「これで終わ――――」

けれど、悲しいことにジャックは立ち上がった。体はもうボロボロで立ち上がることは無理なはずなのにだ。

「くっ……なんでたちあがっちゃうんだ」

「デスペインヘルフレイム」

紫色の弾丸が、その場を容赦なく焼いた。地面も空気も、そしてスバルも。黒い煙が充満し、視界を悪くする。

煙が晴れたら、そこには倒れているスバルがいた。所々黒くなっていることから、そうとうな火力だったのだろう。

『スバル・・・・・おいスバル！』

ウォーロックの掛け声にもスバルは答えられない。ただ、細く眼を開けているだけだった。

そんなスバルをジャックは生気のない眼で見つめていた。が、すぐにまた攻撃の態勢を取る。

それをスバルはただ見ることしか出来ない。そして、攻撃を受けるだけだった。

「デスペインヘルフレイム」

そして、また炎は辺りを焼いた。

終わった、念のために死体を確認する。煙が晴れ、そこには――

赤い2個の輪が上下に並んでいた。輪はスバルをすっぽり包んでおり、中のスバルは無傷であった。いや、どんどん傷が治っていっている。そのことにジャックは焦りを露にしている。すぐさま攻撃をする。

「ヘルズシックル」

けれど輪には傷一つ付けられず、逆に衝撃波がジャックに放たれる。

吹っ飛ばされるジャックに対し、スバルは体力をほぼ回復し終えていた。

「なんだろう……今の」

『……分からねえが、とにかく今はジャックを倒すぞ！』

「EFB（エグゼフォースビックバン）アルティメットボルテックス！」

ジャックが最後に見たのは、全方向からの電撃の雨だった。

第87話　おせっかい（後書き）

予定ではこの章ないので書きにくいです。っていうかどう書いていいか分かりません。

……勘のいい方なら分かりましたよね？　分かるように書きましたが。分かった方は、心の中にしまって置いてください。

第８８話　吐き気（前書き）

いやなタイトル……

第８８話　吐き気

電波変換が解け、ジャックは意識を失った。スバルの周りにあった２つの輪はジャックに向かい、そして包んだ。

『……なんだあの輪っか』

「さあ、本当になんだろうね」

攻撃を跳ね返し、そして回復まで出来る謎の物体、これが不思議がらずにいられるか。

徐々にジャックの傷は癒え、そして意識を取り戻した。輪は三日月形になり、回転しながらどこかに言ってしまった。けれどそんなことには構っていられない。すぐさまジャックに駆け寄る。

「う……」

「ジャック、大丈夫？」

苦しげにジャックは起き上がったが、特に顔色が悪いというわけでもなかった。そのことにスバルは安堵した。

「何があったの？」

「スバル……か。サテラポリスの仕事をしていたら、いきなりなんか変な電波体が現れて、それで……」

「それで？」

「なにかこみ上げてきたんだ。おまえを倒すって言う感情が……」

自分でも到底理解できないような口ぶりだ。それにしても、電波体。これはなにかありそうだ。

『コーヴァス、どんな奴だったんだ？』

『あいつは……幽霊みたいな奴だ』

「ゆ、幽霊！？」

その言葉に過剰に反応した物が１名。言わなくても分かるがスバルだ。

『おいおい、そんなのがいるわけねえだろ』

『だから電波体だって！　本当頭悪いな！』

『なんだと！？』

ウィザード同士の喧嘩が勃発。本当の幽霊でないと分かったスバルは再び安堵する。

ふいに、ジャックの体からなにか黒い小さな物が出てきた。それは誰も気付かず、スバルの体内に入った。

急にスバルの顔は青白くなり、吐き気に襲われた。必死に吐くまいと口を押さえる。

「おい、どうしたスバル！」

ジャックの声など耳に入らない。なにかが、ジャックの言っていたなにかが込み上げてくるのを感じた。

そのおぞましい、人の負の感情のようなものがこみ上げるごとに、吐き気は強くなる。

「おえっ」

ついにスバルはその場に吐いてしまった。あまりいい光景ではない。

「しっかりしろ！　今、水買ってくるから！」

ジャックは近くにある自動販売機を探しに、ウォーロックとコーヴァスはスバルにゆっくりと深呼吸をさせる。

『スバル、大きく息を吸え！』

『下は向くなよ！』

下を向かないとは、吐いた息をまた吸わないためだ。吐いた息は当然酸素が薄いので呼吸が苦しくなる。

「がはがはっ」

「スバル、買って来たぜ！」

水をでうがいをさせる。口の中が嫌な味で支配されてしまっているからだ。

「あ、ありがとう」

顔色はまだ悪い。そして声に元気も無い。ジャックとは一気に立場が逆転してしまったのだ。

「どうしたんだ？　急に」

「……分からない。なんだか急に気分が悪くなって……」

「とにかく俺とおまえも今日は家に帰ろう。そのほうがいい」

「……そうだね」

スバルとジャックは立ち上がり、暗く寒い夜道を帰っていった。

『……今のところは予定通りですね』

スバル達をさっきの戦いから見ていた電波体は呟いた。

『ロックマン、まだまだ未熟ですが……ギリギリ及第点といったところでしょうか』

ぶつぶつ呟いている。電波体はスバルを助けた赤い三日月形のバリアを纏っている。

『まあ、あなたの計画通り進んでいますよ？　だから……せめて、ウィンドに真実を教えてあげてくださいね』

その言葉は誰に向けられているかは分からなかった。多分、スバルが聞いても分からない。

『……ヘイト、憎しみを司る者。あなたは……ふふ、独り言を呟いてもしょうがないですね。おせっかいをしてしまいましたし、それに、もう時間ですね。帰りましょう』

その電波体も、自分の帰るべき場所に帰っていった。

「ヘイト、どうだった？」

『ちゃんと入れてきたぜ、ロックマンに』

その言葉を聞いて男の顔が笑う。ただ、笑う。

「あとは、僕は……」

『ああ、簡単だ。もう少し戦わせればいい。ただそれだけだ』

「本当だよ、簡単すぎる。ハハハハ！」

ヘイトも笑った。憎しみを司る者だが、ちゃんと笑うこともある。

「じゃあ、頼んだよ。レーヴァテイン」

本人はいない、けれど命令は伝わる。今の時代そんなことは簡単すぎる。

「災厄の杖と神の槍、この2つがあれば楽勝だ……」

駒が2つある。その2つとは、将棋で表せば「角行」と「飛車」と

いう所だろう。

そして自分達は「王将」。これだけで世界などは手に入れることなど簡単だ。それほど、1人1人が強いのだ。

「さあ、大きな成長に期待してるよ。ロックマン」

第８８話　吐き気（後書き）

電波体の正体と計画分かりましたね？

では、感想待ってます！

第89話　問題

やっとのことで作業が終わったゲイルは疑問の声を上げる。

『んあ？』

「……どうした？」

まだ滅茶苦茶暗いカイは暗いまなざしでゲイルを見た。

『……魚がかかったらしいな』

「というと？」

声が低すぎるカイだが、一応の興味を持ったらしく少し眼に光がある。

『ヘイトが出てきた』

「……馬鹿だな」

その言葉を聞いてカイはまたゲイルから視線を逸らした。

『のこのこ出てきたよ、本当に。馬鹿だな。まあ、そのほうが仕事ははかどりやすいし、なによりこっちの正体がばれているんだからな』

「ばらさないようにしてたのに……」

『だから暗いって！　……でだな、オペレーターの正体も判明したぜ』

「へぇ～、そうなんだ」

『少しくらい興味持って欲しいな』

あまりに興味が無いのに話す気にはなれない。けれどそれは否定された。

「持ってるから早くしろ」

『自分で見ろ』

そういってハンターを投げた。片手で見事にキャッチして即座に位置を確認する。

「……予想通り過ぎる問題ほどつまらないのはないな」

『なんだそりゃ』

「算数の問題で1＋1は？　って聞かれるのと同じくらい退屈だってこと」

『そう落胆するなよ。おまえの勘が当たって嬉しいことじゃねえか』

「どこが？　もう少し面白くなって欲しかったよ」

全てに残念に思うような溜め息と共に言い放つカイは、さながら中年男性っぽかった。

『そんなのに面白さを追求するな。で、あと世話焼きも来たぜ』

「……ふざけんな、邪魔すんじゃねえ」

『俺に言われても困るけどな』

ツッコミは虚しくカイにスルーされた。そんなの知らない、といった感じだ。

『……ってかあいつよく遠いのに来たな。どんだけ約束守る奴なんだよ』

「その約束俺知らないし」

どうでもいいどうもでいい、とカイは会話を打ち切った。

（会話を一方的に打ち切られるのって悲しんだよな……）

人の負の感情とは凄く、近くにそんな人がいればその人も暗くなる。今現在のゲイルもそうだ。

（まあいいか、あとは頼むわ。……英雄さん）

『スバル、治まったか？』

「うん、なんとか……なんだったんだろ、さっきの」

人の感情というものが凝縮されて体内に入ってくる、そんなこと今までに体験したことの無いことだ。それに、人の闇というのは深い。ジャックでも例外ではない。それを体が拒絶してスバルは吐いてしまったのだ。

『ジャックの憎しみみたいんだろ？』

「そうだけど……他の人のも混ざってたんだ。もっと他の、今もまだある憎しみみたいなんだ……」

スバルは怯えていた。改めて、人の心の闇というのを直接体験したのだから無理は無いだろう。それほど、メテオGのときでのジャックの憎しみはすさまじかった。

そして、今まだある憎しみ。それがスバルに対してのものだとは、直感で分かった。たかが直感だが、それでもスバルには自信があった。

『とにかく、今日はもう寝ろ。そのほうがいい』

「ありがとう、ウォーロック……」

そういってスバルはベッドに寝込んだ。そんなスバルを、ウォーロックは不安げに見つめている。

『あの輪っか……とんでもねえ強さを感じた』

ジャックの究極変身（ファイナライズ）時での攻撃に対しても一切傷がつかず、そして衝撃波を放った謎の物質。そしてあれは敵のものなのか、疑問は疑問を呼び、答えを導き出さない。

『憎しみはあの輪っかが入れたのか？……それとも、もっとべつのやつが……』

いつまで出ない答えを考えても、時間が過ぎるだけであった。

「キング、仕事ははかどってる？」

気を利かしてコーヒーを研究室に持っていくヨイリー。研究室にはキングがパソコンと睨めっこしており、ただならぬ空気がそこに充満していた。

「ヨイリー博士……順調といったら順調だよ。ただ、少し問題があってね。２つの能力を最大限に発揮できないんだ」

キングの顔は冷静で、それでいて意欲的だった。ヨイリーが知っていたキングとは全くの別人と言ってもいいほど、違っている。

「なるほどね……たしかにそこは難しいわね」

それに同感したようにパソコンを覗き込む。その画面をみたヨイリーは少し顔を険しくした。

「これが今の限界かしら？　あなたならもう少しいけそうだけど……」

「いや、これはまだ上がる。けど、今のノイズ率ではこれが限界な

のだよ」

コーヒーを口に入れ、キングは言った。今のノイズ率、ジャックの報告だと発生しているノイズはどこかに消えているらしい。そして今キングが作っているのにはノイズが必要不可欠。

「『ガイア』はなにをしようとしているのかしら……」

「『ガイア』がノイズを集めているというのか？　それは考えにくいと思うが……」

その言葉を聞いてヨイリーはキングの顔を見つめる。

「あなた、やっぱり知っているの？」

「おっと、口が滑ってしまったな。もし君が私の自爆装置を取り出してくれたら、教えてあげてもいいがね」

自爆装置、これはキングに対する唯一の脅迫である。これがあればキングは下手なことは出来ず、もしそれを取り除こうとするならば自動的に自爆するようにも作られている。つまり、キングはＷＡＸＡの言うことを聞かなければいけない。けれど、それだけキングが勝手に自爆してしまう可能性が高いので、報酬があるというわけだ。

「それは……無理だわ」

「だろうね、だったら聞かないで欲しいな。おっと、脅迫しても聞く気はない」

分かってる、とヨイリーは言った。キングも馬鹿ではない。自分が

必要とされているから自爆する確率は低いと思っている。

（もしノイズを集めているのなら、『ガイア』はＰＧＭ（プログラム）を持っていると考えていい。けれどそれを作れる奴などいないはず……誰かが裏で糸を引いているな）

（ヘイト……君も姿を現したね）

そう、呟いた。

（やはり、きみはスバル君に憎しみを入れた。そして彼女でもそれを取り出すことは出来なかった。それほどの憎しみを持つ人をオペレーターに選んだんだね）

誰にも伝えられないこの言葉を、ただ呟く。

（けれど……ウィンドがこちらにはいる。彼の憎しみは君の力になるけれど、それでも君は敵わない）

絶対的自信に溢れた声。

（もう、君は逃げられない。スバル君も逃げられない。僕も逃げられない。ここで、僕達の決着を付けよう）

第８９話　問題（後書き）

テスト終わったらゴッドイーターをがんばります。ちなみにこちらを優先しますのでご安心を。「神殺し」もそろそろ更新します。

それとゴッドイータークリア次第小説書くのでよろしくお願いします。

テスト前だけどがんばります！土日も更新しませんけど、要望などありましたらよろしくお願いします。なんでもＯＫなので。

感想待ってマ～ス

第９０話　能力

「すいません、ヨイリー博士」

ヨイリーの研究室に入ってきたのは、天地だった。彼は以前とは違い、どちらかというと脇役の仕事を現在行っている。主役の研究は、キングとヨイリーに託している。それが、最善だと長官が踏んだのだ。

「どうしたの天地ちゃん？」

「その……ソロが追っているムーメタルってなんなんですか？　ソロがあそこまで躍起になって追うのにはそれなりの理由があると思うのですが……」

【ムーメタル】、それは未知の物質だ。実際に調べたことはないのだが、高い周波数を感じたのは事実だ。けれど、それは突然その反応は消えた。それも今だ不明なのだが、シルバー・ウィンドが所持しているというのは分かっている。

「それがね……私も前に調べてみたのだけれどね、よく分からないのよ」

そういって本棚から分厚い資料を取り出した。それを机にドサッと置いて天地に見せる。

「実物の写真もないから資料だけだわ……けど、それに関することは書かれていたの」

「で、そのムーメタルとはなんなんですか？」

今の現代にそんな未知の物質があるならば、科学者は知りたいに決まっている。科学者とは好奇心の塊なのだ。

「それがね、信じられないものなのよ」

「信じられない？」

「厳密には実現できない物よ」

実現できないもの、それはどんなものなの。益々興味がそそられる。

「いろんな能力があるのだとここには書かれているわ……」

「何個もあるのですか？」

「ええ、それも強力なものね」

天地の顔が、徐々に真剣みを帯び始める。さっきまでとは打って違い、ある問題に直面しているかのようだ。

「電波兵器……といっても過言ではないのかもしれない」

「……兵器ですか」

「意味は違うかもしれないけど、そういえると思うわ」

言うのは躊躇ったが、ヨイリーは意を決して天地に告げた。

「ムーメタルは、まずオーパーツと同じような効果があるらしいの」

「オーパーツって、あの！？」

【オーパーツ】それは高周波数兵器だ。かつてスバルは、その力を借りて世界を救った。それが無ければ、世界は終わりだったかもしれないとスバルは言っているほどだった。

「そうよ、そして2つ目。コピー能力」

「コピー能力？」

「ええ、それは私たちも見ていると思うけど、ラ・ムーはムーの電波体を何体も作ったでしょ？　その能力と一緒だと思うわ」

「そんなことが……」

「そして3つ目――――」

「平行世界（パラレルワールド）への道を開く能力よ」

「パ、平行世界（パラレルワールド）！？」

それは決して交わってはいけない世界のことだ。だから平行。スバルはいったことがあるようだが、この世界とは全く違ったらしい。世界が荒廃していて、ムーの電波体によって支配されていたそうだ。それほどまでここことは違う歴史を歩んでいるということだ。

「このことから察するに、ムーメタルとはムーの技術の結晶だわ」

「で、でも待ってください！　それをシルバー・ウィンドは何に使うのですか？」

ヨイリーは眼を瞑り、首を横に振った。それは自分でも分からないといっているのだ。

「分からないわ……何に使うのか、だって彼の目的も分かっていないのだもの」

「そうですか……」

「はいはい、おしゃべりはここまで。無駄に時間を浪費してしまったわ。お互い充分休めたし、仕事がんばりましょ？」

分かりました、といって天地は出て行った。その研究室のドアが閉

まった瞬間、ヨイリーは溜め息をついた。

ムーの技術には未だ解明されていない所が多い。そして、たった3つだけとは思えないのだ。もう1つ、重大な能力があるような、そんな感じがする。

（今の科学でも解明されていないのが多いってことは、今の科学でも発明されてないこともできるってことだわ。それはつまり、あの能力（ちから）も――――）

考えすぎか、とヨイリーは笑ってその考えを否定する。さすがにそればかりはない。なんたって、世界の最先端をいくアメロッパが今がんばって作っているものなのだ。それが、何千年も前の文明が作れているとは思えない。

さすがに、そればかりは現実離れ過ぎていた。

「ラプラス、まだ見つからないのか？」

『……ギギ』

「ちっ……」

憎憎しげにソロは舌打ちをした。全然見つからないのだ。どれだけ探しても。

「どこにいる、シルバー・ウィンド。あんなもの隠せないはず……」

まだ一定周期で高周波数を放つムーメタル。推測ではあと2日だ。2日で、居場所が分かる。

「待っていろ。必ずおまえを倒し、ムーメタルを取り返す……！」

第９０話　能力（後書き）

これを更新したら感想に返答以外マジで勉強します！

ちなみに４つ目の能力は追加しようか迷い中です。追加しなくても最後は変わらないのですが……どうしようかな。

では、感想待ってマ～ス

第９１話　異次元

『急にどういう風の吹き回しだ？』

ウィンドは自分のオペレーター、キリュウに聞く。

「俺は風の向くまま気の向くままな性格でね、ちょっと夜遊びしたくなったのさ♪」

そういってシルバー・ウィンド、キリュウは笑っていった。腰には二本の刀、一本は全部が白銀でもう一本は黒い鞘で柄は濃い紫色の刀だった。長さはどちらも１２０センチといったところか。

『で、どこにいくんだよ』

ウィンドは少々面倒臭そうに言う。彼ら、キリュウがいるのはウェーブロードの上。もちろんある程度の高さがあり、誰からも見えない。そんなところで何をするのか？　それは手に持つ金属、ムーメタルを使うのだ。

「う～ん……決めた」

それを誰にも言わずに、ムーメタルに力を集中させる。突如、ムーメタルの周りに怪しい紫色のオーラが発生する。

月は町を照らし、その光でキリュウも光る。銀色の光がそこらじゅうを照らし、遠くから見れば綺麗な点だろう。

キリュウの目の前の空間に黒い穴が発生する。それはシャーペン

で書いた点だったものが、徐々に膨らんでいった。それは人一人を楽々入れるものに生長した。

これが異次元への道。それがゆっくりと開いた瞬間だった。

「よし、行くぜ」

黒い穴はどこまでも黒く、光が無かった。それを照らしに行くかのようにキリュウは突っ込んだ。

通った後はさっきとは違ってすぐに穴は閉まり、何も無かったかのようになっていた。

今この瞬間から、彼が戻ってくるまでこの世界の住人は彼を止められない。

「ここは……」

穴は地面から結構の高さで、キリュウは落ちた。無論、着地は成功した。

あたり一面強力な電波で形成されており、いかにも外国の遺跡のような場所。そしてウェーブロードのような緑色の坂。そこらへんに転がっている灰色の兵士の石像、これは意外にも電波で出来ていた。

「どこだここ？」

異次元に来たというのに早くも迷子状態だった。まさかこんな状況になるとは二人とも思っていなかった。

そもそもここはどこなのだろう、ニホンだとありがたいのだが。というかウェーブロードがあるからここは地上ではなく空の上、そして外国っぽい。

『キリュウ、おまえどこに行こうとしてこうなったんだ！？　何をミスった！　フザけんな、俺達どうすんだよ！』

当たり前に怒られても解決策は思いつかない。と思っていると青色の電波体らしきものが近づいてきた。右手に剣を、左手に丸い盾を持っていていかにも人間ではなかった。

「すいませーん、ここどこですか？」

ニホンでないと分かっているのにニホン語で会話をするキリュウ。

けれど相手は返事をせずに、ただ剣を振り上げるだけ。

「え～っと、なにを――――」

勢いよく剣を振り下ろす電波体。さすがに油断していたのか、風の盾（ウィンドシールド）を張っていなかった。避けるしか方法は無かったのですぐさま横に避ける。

「んだてめえ！　いきなり何しやがる！」

けれど相手は感情の無いただの電波の兵士。話すどころか反応もしない。ただ、冷徹にこちらを見るだけ。

そして胸らへんから電波が集まり始める。

『おいおいヤバイんじゃね？』

途端に、青色のレーザーがこちらに飛んでくる。それを避けず、シルバー・ウィンドは受けた。

けれど彼には遠距離攻撃は皆無。無傷で立っている。彼は無言で腰にある黒い鞘をした刀を抜く。

「おまえの攻撃程度じゃ俺は死なねえよ」

刀を横に薙ぐ。青い兵士は盾で防ぐが、斬るというよりも盾が横に削ったようだった。

「電波を遮断、それがこの刀の能力。おれの本当の刀だ。おまえじゃ防げない。」

言葉を言い終わるや、兵士の左腕を切断した。痛みを感じないのかよろけない。けれど、死ぬのには変わらない。

「じゃあな」

今度は本気でデリートするために、頭の真上から刀をストンと振り下ろした。結果、斬る感触もなく真っ二つになる兵士は、デリートされた。

「うわっ！　気持ち悪い！」

下はガラスのようなもので、透明な床だった。もちろんそんなものを気持ち悪がるはずが無い。それではなくもっと別のものだ。そのガラスの下に何体もの電波体、ゴリラや鳥、はたまたお化けなどが

たくさん押し詰められていた。不自然すぎた。

『気持ち悪いな。でも、さすがにこれだけのコピーできるってのは凄いな』

「ここまでコピーする理由が分からないけどな」

半ば呆れてキリュウは言った。ここまで量産する理由が分からない。というかそこまでして何を得たかったのだろうか。まあ、そこには自分の追い求めているものはない。今からそれに会いに行くのだから。

どんどん道を進んでいくと、大きな階段が見えた。無論これも電波である。それを一歩一歩上っていく。そこに広がるのはウェーブロード。無数の蜘蛛の巣に似たその上にいるのは先ほどと同じ兵士。色違いでカラフルだったが、その数に少々だるさがこみ上げてくる。

これを抜けた後に自分が今回追い求めている物があるのだ。だから、時間はかけたくない。

『暇つぶし』程度のことに時間などかけていられない。

「邪魔だクズ共!」

ざっと30はあろうかという大群に刀一本で突っ込むのはさながら鬼だった。ウェーブロードは感触も無いまま斬られ、兵士達は体がどこからか真っ二つに斬られていく。それもたった一撃で。

野菜を切るよりも簡単に、ただ刀を振るう。その場にいる者全員が、彼にしてみれば死に行くものだった。

『派手にやったなー』

ほぼ棒読み当然の声でウィンドは言う。ウェーブロードはところどころ途切れていて、そこらへんには残留電波が溜まっていた。

それに背を向けキリュウは進んでいく。

そして、ようやくそれが見えた。緑色の巨人のような、それとも怪物なのか。それがあった。足なんて見えない。人の形をしている異物があった。

「さあ、来てやったぜ」

不敵に、キリュウは笑った。無邪気な子供のように、純粋に。

第９１話　異次元（後書き）

『暇つぶし』にかよ、思われた方もいるかと思います。

まあありでしょ！

そして禁書目録やっと一巻買えました！　やったー！今日のうちには読破はしなくては！　でもモンハンも更新

時間が欲しい！

では、感想待ってます

第９２話　絶対防御

まずはここはどこだということだ。ここは異次元の、ムー大陸。そしてここはロックマンがラ・ムーに敗北した世界でもある。つまりここは誰かが何かをしなければ滅び行く世界。

では、なぜ自分がここに来たというのか。それは簡単だ。

――単にラ・ムーと戦いたかっただけ。それだけだ。この世界はまだ滅ぶとは決まっていない。自分がムーメタルに念じたのは「ロックマンがラ・ムーに敗北する世界」と念じただけだ。つまり、これからのことはまだ決まっていない。だからここでラ・ムーを滅ぼしてもいいわけだ。

「……そなたは誰だ？」

階段を上がっていきなり女性に声をかけられた。たしかこの事件の首謀者、オリヒメ。そしてその後ろに居るのはラ・ムー。横に転がっている人間はロックマン。気絶していて、意識は無い。死んでいないとは思う。あくまで勘だが。

「もう一度問う、そなたは誰だ？」

「暇だから強い奴と戦いに来た、暇人ってとこだな」

訳が分からないとばかりに首をかしげる。まあ、自分でもそんなことを言われれば首をかしげるだろう。自分は変人なのかもしれない。

まあそんなことはどうでもいい、あちらにやる気を出させなければいけない。じゃなければ本気を出してはくれないだろう。

自分は強くなるためにウィンドと組んでいる。どんな奴をも倒せるようになりたい。それだけのためにこんな危険な戦いを繰り返している。それでも、自分は強くなりたかった。

何を踏み台にしても、とにかく上に行く。それだけのためにあの時から生きてきた。

「……まあいい。ラ・ムー、こやつを倒せ！」

『やる気になってくれたか、良かったじゃねえか』

「ああ、本当だよ。本当に――――」

「幸運だ」

自分はラ・ムーと戦えなかった。戦うことはできなかった。理由があって。けれど、今は関係ない。今は強大な敵と戦える。それだけで武者震いをした。

「いけ、ラ・ムー！」

オリヒメの言葉と共に、緑色の巨人は動き出す。両腕は鋸のような剣、ムーブレードに変え、それを右手のムーブレードを振り下ろす。

それはキリュウに頭上を捉えた。まっすぐ、ただキリュウに向かって。

ふいに何かと何かがぶつかるような音がし、あたり一面を誇りから何までが吹っ飛ぶ。それは人の視界を遮り、どうなったか分からない。

風が収まって、オリヒメは愕然とした。寸前でムーブレードが止まる。それはどんなに力をいれても動きはしない。まるで透明な壁か何かがあるようだった。

「あんた、【絶対防御】って知ってる？」

ふいにキリュウはオリヒメに聞いた。呆けているオリヒメにキリュウは続けた。

「おれのウィザ……電波体は、ある一体の奴を基にしてつくられたんだ。そいつの特徴が――――」

『【絶対防御】、完全に敵の攻撃を無効化し、そして圧倒的破壊力で敵をねじ伏せる。慈悲の心もありゃしない最強のタッグが、俺の基にして作られた奴の特徴だ』

「そしてそれをウィンドは防御を弱くする代わりに攻撃を上げたって訳。おわかり？」

そういってキリュウは止まっているムーブレードを一瞬で二閃、たった二閃した。それだけでムーブレードは紙切れのように斬られる。斬られた部分は地面に轟音を立てて落ちる。そしてそれは粒子となって消えていく。

この状況をどんな科学者でも、どんな沈着冷静な人でも理解できず、驚くだろう。世界を混沌に陥れる存在が、こんな勝負にもならないことをしているのだ。

世界の常識を壊す、それがこの戦いだった。

「ラ、ラ・ムー！　本気でコイツを叩き潰せ！」

突如巨大なバルカンが出現し、その無数の弾丸が発射される。けれど、それは避けなくても勝手に破壊されていってしまう。まさに絶対防御。これでも劣化コピーというのだから驚きだ。

ラ・ムーはいつのまにか紫色になっており、いっそう化け物じみていた。地面から電波波紋とよばれるものも出現し、どこからともなくエランドも発生する始末だ。

けれど、数に物をいわせようが状況は変わらない。それどころかそれを発生させる力も浪費されるため、状況をただただ悪くするだけだった。

「あれを狙えばいいのか？」

胸に光るオーパーツと呼ばれる高周波数を放つ物体。それがさっきから防御を張られたり張られなかったりしている。防御を張るとい

うのはそれだけ重要の物のはずだろう。

『おいおい、おまえは馬鹿か？　おまえの刀は電波であればなんでも斬るんだぜ？　ってことはあれを攻撃しなくても奴は死ぬんだぜ？』

防御が張られていようが、それが電波である限り刀では斬れる。斬る感触が無いのだから消すといっても言い換えられる。

「でもよ、やっぱそこはあれ狙わなきゃ～」

楽しんでいた、この戦いを。それはキリュウの【狂気】でもある。こんなことでした【狂気】を鎮められない。けれどそれも仕方が無い。それが自分なのだから。

『分かったよ、精々好きにしな』

「あいよ」

「ラ・ムー、ムーのイカズチだ！」

紫色の巨人は、頭を深々と下げた。そしてそこから発射されるのは、極太のレーザー。

全てが灰にされるレーザー。けれど、それでもシルバー・ウィンドは平然と立っていた。

「『……【完全同調（フルシンクロ）】』」

突如、まわりに集まっていた風が消え、シルバー・ウィンドの色が

白銀に変わる。まるで、全てを照らすかのようにその光は周りを照らした。

「じゃあ、これで終わりだよ」

そして、一筋の光がラ・ムーに向かっていった。けれどそれは肉眼では到底見えず、まるでテレポートでもしているかのようだった。

「五の型　風魔大烈風刃！」

今度は白銀の刀で、風を巻き起こしオーパーツを粉々にした。今度は消すのではなく、本当に斬った。

そして、この異次元は救われた。誰も予想しなかった、異端者によって。

「疲れた～」

ここは異次元のコダマシティ。そこでキリュウは缶ジュースを飲ん

でいた。

全てが終わった。この世界では。あとはまた何か起こる可能性もあるが、それは自分は関わりたいとは思わなかった。自分は、あまり他の世界で目立つ物ではない。ここで目立つのはこの世界でロックマンでなければいけない。今回は手助けという名目できた（一方的だが）のだから、いいとしよう。同じ世界で何度も世界を救うことではない。

「……あれ？」

いつの間にか自分は強くなるというのではなく、この世界を救うために来ていたのだと気付いた。それに戸惑いを覚える。

「……まあいっか。俺はやることはやったし」

この世界で手に入れたのは意外に多かった。まずは経験。あそこまで大きな敵との戦いは初めてだ。そして、もう一つ。三つのオーパーツ。もちろんコピーしてだ。この世界のオーパーツとは違い、もう1つずつコピーした。

「さあ、これでなんとかいくといいな～」

『おい、そろそろ帰ろうぜ？』

「あ～、はいはい」

本当はもう少しここに居たかっら。見ておきたかったのだ。この世界の自分を。もしかしたら、この世界の自分は――――

「もういいよ……」

自分はもう戻れない。戻れるけれど戻れない。手段は持っているがそれは絶対いけないことだ。だから、やらない。

「帰るか」

そして、キリュウはまた元の世界に戻っていった。未練、そんなものは捨てて。

また、戦場に身を投じる――――

第９２話　絶対防御（後書き）

キリュウの力はチート級ですが、まあ弱点もあります。暇があれば補足に載せるつもりですので。

ってか腕落ちてますね～、ちょっとショックです。

まあ、インデックス読んで文章力の向上を。

では、感想待ってます！　どしどし下さい。批判でも結構です！

第９３話　彼女（前書き）

別にカップルの彼女ではないです。

第９３話　彼女

「ふわぁ～」

スバルはどこから見ても眠そうだった。まあ、眠いのはしょうがない。なぜなら彼は今日は寝坊しなかったのだ。おかげで空は灰色に染まっており、雨は今にも降りそうだ。そして隣には、「スバルがこんなに早く来たから雨なんだ」、と言うカイが机に突っ伏していた。

「帰りてぇ～」

そうぼやいている。まだ腹痛は治っていないらしい。

「ほら、そんなことといっても腹痛は治らないわよ？」

「そうですよ、元気出してください！」

「ほら、ポテチ食うか？」

最後の言葉に二個のツッコミ。まず一つは学校にそんなものを持ってきていいのか？　もう一つは腹痛の相手になぜ食べ物を勧める？

カイは不機嫌そうな眼でルナ達を見る。

「あんたらに話しかけられても腹痛は治らないけどな」

まあ、それもその通りだ。治る訳が無い。けどまあ、気持ちの持ち方もあるのだ。けれどそんなことは関係ないとカイの顔が言ってい

る。

「とにかく話しかけないでくれ……こちとらいろいろあってな」

弱々しげにカイはそういった。その言葉にルナ達も引き下がる。ここで引き下がらなかったらカイは一層不機嫌になるからだ。ルナも成長したというべきだろう。

「……ゲイル」

『なんだ？』

「……おせっかいのところに行ってきてくれ」

『マジで？　……伝言は？』

「来るな、今回の件について関わるな」

『りょ～か～い』

面倒臭そうにゲイルは飛び立った。電波体は別に翼がなくても飛べるがゲイルは翼で羽ばたいていた。

「……寝るか」

「カイ君どうしたの？」

ルナの質問にスバルは一瞬戸惑ったが答えた。

「前に、怪我したよね？　その時に貰った薬が効きすぎておなかが痛くなっちゃったんだって」

「でも、あそこの病院結構いいお医者さんいるのよ？　なんでそんなことになるのよ」

そんなこと聞かれてもスバルは分からない。話したがらないのだ。まるで、何かを恐れているみたいに。

「まあいいわ。何かあったらいいなさい、いいわね？」

その言葉に頷き、スバル達は席に着いた。もうホームルームの時間だ。ちなみに作者の学校では学級活動、略して学活と呼ぶ。時代の流れなのだろう。

「おはよう。お、カイ大丈夫なのか？」

「大丈夫です、一応」

そういうとまたカイはぐったりした。一体いつになったら腹痛は治

るのだろう。

「本当に早く治って欲しいわ、五月病」

「……え？」

腹痛ではないのか？　自分達の心配は無駄なのか？　さまざまなことが疑問に思ったが、それでも疑問は言わないでおいた。言えば不機嫌そうな眼で見られるに決まっていた。

今日は自分が早起きした所為で何か起きそうだ。

『いるんだろ？』

とある白い建物の扉の前に立ち、そういった。無論ウィザードに脚はないが。

ガチャッと茶色い扉が開く。そこから見えるのは五歳くらいの少女。警戒の目でこちらを見ている。

『おい、ここのウィザードに――――』

バタンと、ドアを閉められた。あまりのことに体がフリーズした。

「ねえねえ、なんか変なのいた～」

さっきの少女の声なのだろう。他の子供の声もいくつか聞こえる。

『もしも～し、別に俺は悪い奴じゃないんですが』

「なんか私達食べられちゃうかもしれないよ？」

ムカッ、とゲイルは顔が引きつった。何故おまえら子供を食わなければいけない。俺が食いたいのは焼肉だ。おまえら生などどうもでいい！　と意味の分からないことを思っていると扉の向こうから誰かが歩いてきた。

『どうしたんですか？』

「あのね～、なんか恐い化け物がいるの～」

『誰が化け物じゃボケー！』

子供から見れば竜は化け物の類だろうが、とうのゲイルは自分のことを竜だとは思っていない。端からみれば変な話だ。端から見ればだが。

雨なのに客を待たせるとはどんな神経をしているのだろう。

『分かりました、私が見てみます』

といって扉が開いた。そこから自分の用がある人物が顔を出す。

『ちょっと用あるから上がらせて――――』

バタン、と扉はまたも閉まった。いや閉められた。知人に対する扱いが適当すぎると思うのだが。

『本当ですね、まあ時間が経てばどっかいくでしょう』

『ふざけるなー！　なんでおまえは俺を追い返そうとする！　っざけんじゃねえ！』

それでも扉は開かない。動かない。ブチ破ってもいいが、それではいろいろ面倒だ。

『恐い化け物いるので奥の部屋に避難してくださいね～』

「はぁ～い」

もう我慢の限界だ。やはり扉を破壊してしまおう。あとでカイに金は払わせればいいのだから。

と思っていると扉は開いた。

『なんですかいきなり？』

『やっとその気になったのかよ、クソ』

『あなたの短気は重々承知です。子供が苦手なのも』

そういって彼女は笑った。屈託の無い笑顔。それを見るとどうでもよく感じる、訳がない。そんなこと言われて許すなど馬鹿だろう。少なくともゲイルはそうだ。

『黙れ、ああいう奴らは嫌いなんだ。次々喋りやがって』

『あの子達のことを悪く言うのはどうかと思いますよ?』

この言葉を聞くのは二度目。二度も言われればもう飽きる。

『本題だ、カイからの伝言だ』

『これ以上今回の件では関わるな、ですか?』

まるで心が読まれているようだった。けれどそんなのもう何回も体験したことなので気にも留めない。

『そういうこと、あんたらは計画外だ。宿題手伝ってもらおうなんて思ってねえ』

『そうなんですか? 結局前は手伝ってもらったと思いますが』

『カイだろ? 俺に言うなよ』

『カイさんがいるからあなたがいるのではなくて?』

ストレスを溜める女王だと認識した。言うことがいちいち癇に障ることばかりだ。

『それと質問をしていいか？』

『いいですけど、なにか？』

『なんで――――』

『ロックマンに入る憎しみを除去しなかった？　あんただったら簡単だろう』

その言葉に彼女は少し黙り込んだ。まるで、自分が何か罪を犯したように。

『……私もあれは除去するつもりでした。けれど、無理でした』

『強すぎたのか？　それとも――――』

『こちらに対するプロテクトが掛けられていました』

その言葉が意味するのはこちらの行動が読まれていた証拠。そしてそれはもう除去できないということを表わしている。

『多分、あれは何か重要な意味があるのでしょうね。だからプロテクトをかけた』

『ヘイトがしそうなことだ、全く』

ここまで面倒なことになるとは、おおまかな計画のズレはしょうがないが、まさか

『ここまでとはな……』

『本当ですね、彼の計画は恐るべしものです。尊敬に値しますよ』

不敵に笑う。どちらとも、何かを楽しむかのように。まるで、この状況を予想していたかのように。

『では、これで』

『ああ。……それと、俺からの願いごとありか？』

『いいですよ？』

『じゃあ、頼むぜ――――』

最後の一手を、ゲイルは打った。それでも計画は止まらない。何があっても――――

第９３話　彼女（後書き）

彼女と書かれていますが名前は違います。正体はバレましたがね。

アハハ、でも別にいいのだ～（古いな）これでいいのだ～（しつこい！）

彼女にも活躍は少ししてもらます、ハイ。

第９４話　博物館（前書き）

今回は細かい描写は抜きました。理由は頭に簡単に入れるためです、
単語を

第９４話　博物館

ここは、とある博物館。そこに暁とアシッドはいた。

博物館と言っても、ようは偉大なある博士のことに関しての博物館だ。博士一人にわざわざ博物館を作るのはどうかと思う。けれどそんなのをお構いなしに暁たちは入っていった。

『入場料は大人一人五百円、ウィザード一体四百円です』

受付ウィザードにそういわれる暁の顔は愕然としている。

「金が……ヤバイ」

サテラポリスを脱退した暁は収入が無い。ウイルスはいくら狩っても腹は減るのであまり効果的でもない。

つまりお金があまり無い。そしてここでの九百円の支出はデカイ。あまりにも暁は可哀想だった。

「あのサテラポリスなのですが――」

『そんなのは関係ありませんが』

一刀両断、暁はバッサリ斬られた。仕方なく金を支払う。

「アシッド――」

『シドウ、あなたが稼ぐんですよ?』

さすがにどんなうまい棒好きでもそれで生活していけといわれたらキツイ。最初は余裕だったが栄養は偏っているので体に悪い。

そしてその状況でのバトル。無理だ。体が悲鳴をあげている。

「とにかく用事を済ませるか……」

今更だがこの博物館は、光熱斗の博物館である。彼の相棒のエグゼについても多いが、ここは光熱斗の功績についてが多い。

「なになに？　ブラザーバンドを確立した？」

今の時代は当然のようにあるブラザーバンド。それを彼は今から約百五十年前から作っていたのだ。あまりこういう知識が無い暁にとっては衝撃以外の何者でもない。

『シドウ、それくらいはサテラポリスでは常識ですよ？』

光熱斗はサテラポリスの以前の形、オフィシャルの一員でもありまたＷＡＸＡの前の科学省の研究員でもあった。それほど凄い人を知らない人ほど珍しい物はない。小学生に馬鹿にされてもおかしくない。

もっとも、暁にとってはしょうがないことでもあるが。

「え～と、電脳世界を電波に変換した？」

『つまりは今の電波の基礎を作ったということです。プログラムを

そのまま実体化する、これは当時の可逆力ではほぼ不可能だったとされています』

「じゃあ、どうやって可能にしたんだ？」

『努力ではないのですか？』

当たり前の返答。つくづく自分は馬鹿だなと自覚する。

「でもとにかく凄い人なんだな～」

『ちなみにこれを【革命】といいます』

まあたしかにこれは革命といえる物なのだろう。それくらいこの出来事は凄いのだろうと暁は思った。けど実感はあまり湧かない。

「で、問題の」

そこは光熱斗の中学生時代の出来事だ。けれど彼が中学生でしたことは一つしかなかった。

「【クロスフュージョン】の発案……か」

二百年前にも電波変換と似たようなものがあったらしい。この時代まだ熱斗はまだ科学者の卵といったところだ。そしてまだ戦闘員だった。だから発明は父の祐一郎に託したらしい。

けれど、それが完成してもただの一度も実戦で使わなかったらしい。発案したということはその理由があるはずだ。けれどその理由も載っていない。これはどういうことか。使わなかった理由がないのも

また理由がある。

『これは……どういうことでしょうね』

「本当だな……何でこんな物を作ったんだろうな」

暁の【Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣ】もこれを基にして作られたらしい。らしいというのは自分が作ったわけではないからだ。【クロスフュージョン】はどうやら【同調率（シンクロ）】が鍵だったらしい。こちらとも類似点が見られるが、究極的な違いは一つ。

電波かプログラムだということ、それだけだ。【クロスフュージョン】ほうが依然の暁のように体の負担がない。というのも、こちらのほうが融合するのが安易だったらしい。だったらこちらのほうが便利なのだが、こちらにも問題はあった。

「限られた場所でしか変身できないってか」

【ディメンショナルエリア】という結界の中でしか変身はできない。そしてそれを作るにはそれだけの準備も必要としたらしい。それだけの力だったのだろう。

では、なぜそんな大掛かりな物を必要としたのか。気にならないわけが無い。

「なんでだ、なんでそんなものを作る理由があった？」

『やはり、私達の予想通りというわけですか？』

「らしいな、だからあんなに強いのも頷ける」

それなら合点がいった。暁たちの予想はあまりにも辻褄が合っていたのだ。だから、疑わなかった。この事実だけで充分だったので、暁たちは博物館を後にした。

その数日後、博物館で火事が起きた。幸い、死傷者は出なかった。けれど、博物館全てが灰に帰した。博物館だけが五分で綺麗に焼け、まるでそれは、全てを灰に帰す災厄の炎とも噂された。

第９４話　博物館（後書き）

では、データベースも更新します。

ってかデータベースこちらに持ってきたほうがいいですか？読者の方がどちらがいいかに寄るのですが…

さあ、案外ここは関係ありますよ。

どうでもいいですが「とある～」を１８巻まで一気に買ったので借金地獄です。助けて～

では！

第９５話　雑学

スバル達は昼休みを過ごしていた。といっても束の間の休息という奴だ。

「はぁ～、理科って少し難しいな……」

そういって溜め息をつくのはカイの隣の席の住人、星河スバル。彼が溜め息をつくのは理科の授業せいだ。彼は宇宙関連は凄いほどの知識も持っている。その知識は高校生を上回るほどだ。先週の理科の先生が出した問題。

「地球で一番高い山は？」

という質問に、ルナは勢いよく手を挙げ

「エベレスト山です」

と答えた。すると理科の先生はいやらしい笑みを浮かべ

「では火星で一番高い山は？」

と聞いてきた。そんなの知るか。ＴＫ大でも知っているか知らないかの問題。誰もがわからないその状況で、スバルは何事もないように手を挙げ

「オリンポス山です」

と答えた。もちろんクラスの全員が首をかしげた。けれど先生は少

し驚いた後、悔しげな表情を浮かべた。普通ここで拍手か歓声があってもおかしくないのだが、あまりにも非日常的な言葉を聞いてクラスのみんなはピンと来なかったそうだ。

「どうでもいい知識だ」

とカイは呟いた。その言葉に少しスバルはムッとした。さすがにこれ関連の知識は馬鹿にされのが許せなかったらしく彼と口論になった。おかげで授業は中断されたという。もちろん二人は怒られた。他の人はラッキーとばかりに笑っていた。

話は戻そう。それだけ宇宙とか大好きなクセにあまりほかの知識には少し疎い。といってもルナは上回るくらいはある。けれど宇宙よりは完璧ではない。スバルはその完璧を目指していたのだ。

ちなみに単元は「火山」だそうだ。なんか無駄に覚えるのが多すぎて面倒だとか。

「んな教科書見ても覚えるわけでもあるまいし」

とカイはスバルにだるそうな眼を向けている。まあ、腹痛＋五月病＋睡眠不足が祟ったそうだ。はっきり言って馬鹿だと思う。何故かカイにはそんな感情を持ってもいいような気がした。

「じゃあ、どうやって覚えるの？」

「ひたすら問題を解く、かな？」

どういうことだ、とスバルは首をかしげる。問題を解くとはどういうことなのだろう。

「ワーク配られたろ？　で、その問題は解くけど書くのはノートに書く」

「なんで？」

「何回も使えるだろ？　それで問題を覚えてしまうってこと」

「それじゃ応用ができなくなっちゃうんじゃないの？」

「応用って、これは理科だぞ？　応用っても言い方変えるとか今はそんなかんじだ」

なるほど、それは理解できた。けれど次の疑問が湧く。では今でなければ応用はあるのか？

「中学からは原子記号とかなんだとか、いろいろな面倒な種類があるからな。炭酸名問い有無の化学式なんて面倒だぜ？　長いし……やべえ、思い出せねえ」

といってカイはスバルを放っておいて熟考モードに入った。ちなみにこの状態は危険で、カイに話しかけられると怒声で怒鳴られる。

「どうしたの？　勉強ができないの？」

といってきたのはこのクラスの委員長、ルナだ。その頭脳は学校一位とも言われている。けれど噂では中学生並みの知識を持っている生徒もいるとかいないとか。

「うん、まあ。火山とかって面倒だからさ」

「そんなこと言わないでがんばりなさい、いいわね？」

「は、はい……」

スバルはどんなに偉業を成し遂げようが小学生だ。面倒臭いことは山ほどあるし、恐い人には従うしかない。悲しいことだがそれが世の中の真実だ。

「ちょっといいかな、カイ君」

突然現れたツカサに二人は振り向いた。いまだ呼び出された本人は熟考中である。

「カイ君、呼んでるよ？」

一応話が聞こえないほどの熟考ではなかったらしくカイはこちらを向いた。けれどやはりというかその顔は不機嫌そうだった。ゴンタがおやつを没収されたような顔である。

「ん、なんだ？」

少々怒ったような感じがする。しかしツカサはそれを無視してカイに告げた。

「ちょっとついて来て欲しいんだけど、いいかな？」

「……べつにいいけど」

そういってツカサとカイは教室から出て行ってしまった。まるでな

にか大事なことを話すかのように。二人のいるばしょだけがおかしかった。まるで、豚小屋に牛が一匹いるかのような異常さだった。

「なにかあったのかな？」

「さあ、でもべつにあの二人は喧嘩しないから大丈夫でしょう？」

そう、あの二人は喧嘩はしない。というかツカサと喧嘩するものなどいない。正確が温厚だからだ。ちなみにスバルとも喧嘩するものはいない。けれどこれは理由が違う。電波変換されて殺されてしまうだとか、彼女のミソラ（みんなが思っている中で）に言って全国にそのことを言ってしまうとか、なんか現実離れしたことを想像している。無論、そんなことはスバルはしない。

「まあ、がんばろう……」

「じゃあ、がんばってね」

そういってルナもスバルの元から離れていった。まだ五月というだけあって生徒会長の仕事も慣れているような慣れていないようだったといっていた。大変な役職というのはそういうものなのだろう。

「ふぅ～、じゃあ僕も屋上で休もうかな？」

そういってスバルは屋上に向かう。なんとなくだ。その心に、特に他意は無かった。

やはり屋上は風が気持ちいいものだ。今日はここからでもフジ山も見えている。空はもちろん蒼く澄み渡っている。

「なんか、ここに来るとどうでもよく感じるな～」

こんないい景色を見て勉強のことを考えるものなど極少数だ。その中にはスバルは入っていない。そこまでスバルも勉強が好きではない、宇宙以外に関しては。

「いいよなー、空はいつも綺麗で」

人間が見ている空は、下からだ。雨の日でも上空でみれば晴天と同じように見える。だから、空はいつも綺麗だとスバルは言った。

自分達にどんな不幸があろうと空は変わらない。それは虚しくもあり、嬉しくもあった。どんなことがあっても空は変わらない。それは何があろうとも自分にやさしくしてくれるとも取れる。

星空ではないけれど、スバルは満足できた。また戦いは起こるけれど、それでも心を安らげるには充分だった。

「じゃあ、そろそろ戻ろうかな」

もう次の授業の時間になるので急いでスバルは教室に戻っていった。
屋上の物陰に隠れていた人物は笑ってスバルの背中を見ていた。

「もう少し、いれり必要があるかな？　ねえ、ヘイト」

その少年の歪んだ笑みは、誰もが恐れ、畏怖するだろう。そして少年もまた、教室に戻っていく。

第９５話　雑学（後書き）

まあ、伏字とかなくても大丈夫だろう、うん。

禁書目録６巻読書中、がんばって今週には１４までは行きたいな。

ちょっと更新速度が落ちつつあります。これからも見守ってくれると嬉しいです。

では、感想待ってます

第９６話　孤高

もうその日は夜にさしかかっていた。空は漆黒の空のように黒に染まり、その海を照らすように星が煌いている。そんな中で、シルバー・ウィンドはウェーブロードを歩いていた。別に特に理由も無い。ただ散歩気分で歩いているだけだ。

とくに誰がいるわけでもないのだから、ゆっくりと歩いている。彼には高速移動――速度では音速の約半分――ができる。けれど彼はそれを長時間は維持することが出来ない。できて三十メートルというところだ。それを小出しにすることもできない。つまりは彼は必殺の一撃の時にこの高速移動を使う。なのでこんな散歩如きに使うわけが無かった。さらに周波数変換で移動が出来ない。ようするに彼は五十メートル走は滅茶苦茶早いのだが長距離は別に早いというわけでもない。けれどそれは彼が体力が少ないというわけでもなかったりする。完璧というのはこの世界には存在しない、『例外』を除いて。

彼は昨日も異世界に飛んでいるわけだが、彼はそれを気にせず歩いていた。

『……ん？』

そこで彼は疑問の声を上げた。月は雲に隠れ、空の下の街が暗くなった。それと同時に、ソロはウェーブロードに現れた。周波数変換で現れたのだろう。だからべつに驚いたわけでもなかった。

『おまえは……ムーか』

「ムーメタルを返してもらうぞ」

ソロはラプラスソードを片手に持って、殺気を滲ませそういった。
しかし、それはシルバー・ウィンドに対して何の意味も持たない。
彼は知っていた、ソロが自分よりも弱いことを。

『無駄な戦いは避けたいんだけど』

「だったら今すぐ返せ、そうすれば死ななくて済むぞ?」

『すまねえけど、ムーメタルは返せないんだ。代わりといっちゃなんだが、これはどうだ?』

そういってシルバー・ウィンドの周りに、三つの高周波数兵器が出現する。それを見てソロは少し驚きを見せる。

『これは本物だぜ、一応。別におまえがこれで、今から一ヶ月関わらないでくれるっていうならあげてもいいんだけどな』

これは交渉だった。いまやオーパーツは消滅したとなっている。もうこの世界では無い代物をもっている、それも周波数からして本物。一つを手放して三つを手に入れることが出来るこの機会。けれどソロはその自ら機会を放棄した。

「だったらおまえを倒して四つを手に入れるまでだ」

それが彼の道だ。交渉などという物なんか関係ない。もし応じれば自分は相手と同等の立場となる。それは、頂点に立とうとする彼の誇り(プライド)が許さない。

『欲張りだな。ってかそれが意味するの分かるの？』

つまりは戦うという言葉だった。彼から無傷で奪えるわけが無い。それはソロは百も承知のはずだ。

「おまえなど簡単に勝てる。何をそれほど驚いている？」

『二兎追うものは一兎も得ずだぜ？　まあこの場合は四兎か』

そんなことを呟きながら腰になる鞘から刀を抜く。白銀の刀は月の色を反射し、よりいっそう輝く。

剣士二人は睨みあう。彼らは得物を片手に、ただ真正面から突っ込んだ。

「白……ですか」

そういって天地はいった。それはカイと呼ばれる少年のウィザード、ゲイルの検査の結果に対しての言葉だった。ウィザードは別に問題も無かった。ただ少し体にノイズが溜まっているだけだったのでそれを除去しただけだった。ちなみに検査はつい二分前に終わっている。

「結局、シルバー・ウィンドって一体何なんですかね？」

「さあな……それを暁君が調べてくれているはずだ」

そういって大悟はどこか遠くを見るような眼で言った。それは答えのないものをさがすような眼である。科学者というのは必ずといって何かしら壁にぶつかり、そしてそれを見つけるのに何時間も費やす。今回の件もそれと同種だろう。

「周波数が分からない……どういうことなんでしょう」

「電波じゃないってことかもな、けどそれは『ガイア』から周波数が感知されているからそれはないだろう」

サテラポリスとＷＡＸＡはシルバー・ウィンドを敵と断定した。まだ確定的ではないが、彼は『ガイア』では『粛清者』という扱いなのではないかという意見が出たのだ。

「でも、そもそもあれは電波人間なんですかね？」

『ガイア』のメンバーでデリートされていったものからは人間らしき物は出てこなかった。『ガイア』という組織でシルバー・ウィンドだけが電波変換だけで完全な力が出せないというのはどうにもお

かしい。

「分からない事だらけだな。けどそれを解明するのが俺達の仕事だからな！」

「先輩……そうですね！」

そうして二人はその場から立ち去った。もう九時を回っていた。帰るのだろう、けれど予想に対して二人は他の部屋に入っていった。どうやらまだ仕事があるらしい。

夜は長いのだ

第９６話　孤高（後書き）

感想待ってマ～ス

では読書にいこう

ちなみに異世界という存在が出たので、

「〇〇みたいな世界に行かせて欲しい」

とかいう要望も受け付けております。では！

第97話　激突

【絶対防御】と呼ばれる風の盾（エアシールド）とムーの【電波障壁】の防御力はすさまじかった。どちらの攻撃も傷を追わせられない状況。それを実現させていた。

『おいおい、そんなわざわざ再生するなって。壊すの面倒だろう？』

「そっちの風こそ、こちらの邪魔をしてくれているな」

どちらも毒づく。攻撃はあたらないのでただ体力だけが消耗されていく。剣や刀というのは本来手数で決めるものではない。普通は「必殺」なのだ。相手の急所をつきそこを斬る。それが剣の本来の戦い方といえる。それが電波人間であろうと、剣である以上は変わらない。

つまり、二人はそれを無視して戦っているのだ。だからどちらも攻撃を当てられていない。手数で攻める剣とはそれだけ難しいのだ。

『……ダイナソー　コンベーション』

ふいにオーパーツの一つであるダイナソーが刀に吸い込まれた。そしてみるみるうちに刀身は紅く染まり、炎が噴き出す。

「キサマ、ダイナソーを！」

『コンベーションは時間が経てば元通りになるから安心しろって。例えこの刀がぶっ壊れようが関係ねえ』

けれどこれはソロにとってはやっかいなことになった。ダイナソーの力はソロが一番よく分かっている。かつてそれは身をもって知る羽目になったのだから。

『つってもすげえな、バトルカードじゃこんな炎は無理だぜ！』

子供のようにはしゃぐシルバー・ウィンド。狙うのは今しかない。人間は普通真正面からの攻撃に対して反応は働くが後ろからの攻撃には鈍い。そして防御も薄いはずだ。狙うのは今しかない。

周波数変換でシルバー・ウィンドの後ろを取る。一瞬の出来事でシルバー・ウィンドは気付いていない。そして風はやはり薄かった。そこに剣を振り下ろす。

『二の型　緋炎』

ふいに銀色の体が振り返った。とおもったら炎が噴き出す刀をまっすぐ振り下ろし、そして左下からのもう一撃攻撃を繰り出した。それはソロよりも早く、かつ高威力の攻撃であった。一撃目は電波障壁で防げたものの、二撃目までは防げない。

「ぐあっ」

数メートル吹っ飛ぶソロだが、体勢を立て直すため二十メートルほど後方に下がる。けれどそれは追われなかった。シルバー・ウィンドはただ刀を見つめている。

『やっぱ、俺には真似事が限界か。やっぱ止めさせないわ』

と呟くだけだった。そのことにソロは気に喰わなかったが、自分の

体に斜めの傷のせいで声を出せない。

（なんて奴だ……）

完璧に読まれていた。自分が背後に回ることを計算してさも油断しているかのように振舞っていたのだ。そしてそれを一瞬でこなす実力。

土台が違うのかもしれない、そう思ってしまう。もし相手が本気であったらもう止めを刺されていたかもしれない。そう思うと体が震え、嫌な汗が流れる。

けれどそれで終われないのがソロである。

「ラプラス……」

『ギギ』

その言葉を聞いてソロは立ち上がる。ただ、敵を倒すために。自分の誇りのために。

そして、黒き閃光がその場を照らした

『んだそりゃ？』

それが第一声だった。まあ、無理も無い。黒と紫の中間のような色の鎧が、顔以外の部分に纏われていた。剣は禍々しい濃い紫色のオーラは纏っており、邪悪さが滲み出ている。

「孤高の帝王（ブライカイザー）、俺がこの数ヶ月で編み出した変身と言った感じだ」

『ふ～ん、そうなのか。ご苦労なこった』

どうでもいいといった感じだ。二人の距離は依然二十メートル。遠距離攻撃はどちらともできる間合い。

『巻き上げろ』

その言葉と同時にソロの足元から竜巻が発生する。それはやすやすとソロを包み、こちらからは見えなくなってしまった。

彼の電波障壁では防ぐのは不可能、かつ高威力だ。勝負は決した。竜巻はやみ、ソロのいた場所は誰もいない。どうせ高いところまで飛ばされたのだろう。

そう思って上に視線を向けた。けれど誰も居ない

「これで、どうだ！」

後ろから突然声がした。剣が風を斬る音、そこから推測できるのは簡単なことだった。

突如、シルバー・ウィンドの背中が爆発した。爆発と言っても煙が出たわけではない。圧縮された空気が膨張しただけだ。

「ちっ！」

空振りに終わったのでソロは舌打ちした。まさか避けられるとは思っていなかったのだろう。

『まあ、作戦は良かったけどな。けどあそこで格好つけて言葉いうもんじゃない』

といっても、背中の爆発はエアバッグと同じで自動なのだが。

ソロが竜巻を避けたということは、何らかの方法で防いだということだ。当然さっきまでの電波障壁では手数の多さで防げない。

そう、変身前の電波障壁なら。

（ってことは継続時間が長くなったのか？　それとも……）

けれど考える猶予をくれるほどソロは優しくない。一気に距離を詰める。けれどそれは逆にシルバー・ウィンドが高速で移動できる距離に入るという意味でもある。

一瞬で後ろに回りソロの背中を三度斬りつける。

「甘い！」

しかし三度とも電波障壁で防がれる。それも完璧にだ。

（三発とも違う電波障壁で防がれたな。ってことは――――）

「カイザーアーツ！」

ソロの右拳から数発の拳型のオーラが放たれる。意識を集中していなかったために盾は薄くなっており、風を難なく打ち破った。

声も無く後ろに吹っ飛ぶ。銀色の体は体勢を立て直す暇も無くウェーブロードに叩きつけられる。

「さっさとムーメタルを返せ！」

何か急いでいるのか、はたまたシルバー・ウィンドがムーメタルを持っているのが一秒でも許せないのか、声が荒い。

『……おまえ、後悔すんなよ？』

「この状況で何を言っている？」

立ち上がる敵にソロは理解できないとばかりに舌打ちをする。

『おまえの防御はたしかに俺より優れているな。まさか超高速で再生するとは』

攻撃を受けてからコンマ何秒で電波障壁は再生する。けれどそれをもっと早く、より強固に強化されていた。つまり、いくらシルバー・ウィンドの攻撃が早くともそれをかいくぐるのは不可能だった。

「なら、おとなしく降参しろ」

『まだだな。俺は降参なんてだ大っ嫌いだからな』

ガキか、と吐き捨てるソロに対して、シルバー・ウィンドは笑ってこういった。

『テメエじゃ俺には勝てねえよ』

「……だったらこの一撃で決めてやる！」

勢いよく飛んだかと思うと、ソロは剣を振り上げ急降下してきた。

「カイザーブレイク！」

『……おまえの防御が超高速なら、俺の攻撃は超光速だよ』

瞬間、白銀の光と漆黒の光はぶつかって、弾けた。

第９７話　激突（後書き）

では、感想待ってます

要望とかマジでドシドシ下さいね！

第９８話　敗北

結果は簡単すぎであった。たった三つの光の矢がソロに向かって飛んでいった。一つは電波障壁で防げたが、その再生するほんの何秒の間にもう二つの矢がソロに直撃した。そこで、勝負はあっけなくも決してしまった。

『ありゃ？　死なないのかよ』

その視線の先にはソロがうつ伏せで倒れていた。気絶はしていないが、起き上がれるほど軽傷でもなかった。

『腕鈍ってんのかな～、どしたんだろ？』

まるでソロなんかどうでもいいという口ぶりだった。彼にとっては戦闘不能＝勝ちなのだ。

「キサマ……なぜ止めを――――」

『面倒臭いから、それだけだよ』

視線を合わせずそういわれて、ソロは返す言葉が無い。いや、あるにはあるのだがそこまで簡単に言われると言い返そうとも思わない。

『だって分かったろ？　たしかにおまえは一撃入れたがそれでも俺の本気はまだ上なんだから』

「なんだと！？」

『正確には出せない、かな？　次の日寝不足やら体調不良やらで気分最悪になるし』

「……」

あまりにもふさげている言葉だった。それが彼の本質だと気付くとそんな奴に負けたのかと悲しくて仕方が無い。

『まあ、じゃあな』

そういってシルバー・ウィンドは消えた。まるで、話すことは全て言ったといわんばかりに。

そんな彼を、ソロは止められなかった。自分の無力さ、それだけが彼に重くのしかかった。後に残されたのは、惨めな敗北だけであった。

それを味わった彼の行動が、後に関わってくるとは誰も知らなかった――――

『では、数日後に私も仕事ができるのですね？』

「うん、頼むよ？　わざわざあっちに嫌悪感を抱かせるために手紙まで送ったんだからさ」

そういって男はレーヴァテインに命じる。彼ら『ガイア』にとって仕事とは生きがいであり、生きている証明でもある。

『では数日後、楽しみにしててください』

「うん、そうするよ」

そういってレーヴァテインはどこかに消えた。後に残ろうのは男と憎しみ（ヘイト）だけ。

「やっぱり時間は空けとかなきゃね。あっちの体も万全じゃないし」

『でもそれじゃ完璧か？』

「人間ほど弱いものはいない、だから大丈夫だよ」

そう男は言うが、ヘイトはまだ少し納得できていない。

「まあ、君と僕の頭脳が合わされば何とかなるよ」

『分かったよ、そういう心理的面はおまえに全て任せる」

「ありがとう、ヘイト」

互いに利用しあう者、はたまたそれに従うもの、絆を信じて突き進む者。

彼らは最後に何を見て、何を思うのだろうか？

第９９話　劫火

シルバー・ウィンドとソロの対決から一週間、その間は何もなく平和に過ごしていた。

「なんか理科の勉強で疲れちゃった」

「俺はだるい～」

そういう二人、スバルとカイは疲れていた。まあ、この一週間いろいろあったらしい。

「おいおい朝からそんなことというなよ、こっちまでそんな気がしてくるだろ？」

呆れ半分にジャックはそういう。まあ、彼の顔にも学校生活でのストレスがにじみ出ていた。別に皺があるわけではないのだが、やはり疲れているのがよく分かる。

まあ、それが学生の一番の悩みなのは言うまでもない。彼らが通る道だ。

「だるい　だるい　なんかだるい～　だるい　だるい　なんかだるい～　だるいだるいだるいだるいだるいだるいだるいだるいだる～い　メッチャだるい」

「なにそれ！　そんな替え歌聴いたこと無いよ！」

ちなみに本当の歌詞は、「行こう　行こう　湯の国へ……」だった

りする。作者の友達Aが好きな歌、彼が作った最高の歌らしい。聴くとやる気がなくなるのは言うまでもない。このせいで彼のテスト勉強の時間は大きく削がれ、さらにやる気も奪われた。

「そんくらいだるいってこと」

「こっちまでだるくなってくるよ！　やめてくれ！」

横でギャアギャア騒がれるとうるさいのだが、あえてスバルは言わなかった。理由は簡単、なんか言うのがだるく感じたからだ。

「で、ここで話なんだがよ」

ジャックはあまり聞こえない声量でスバルに話しかける。どうやらカイには関係の無い話のようだ。

「この一週間、事件があんまねえんだよ。博物館が炎上したとかあったけど、あれは特に関係なさそうだし。『ガイア』、なにか大きなこと企んでんじゃねえのか？」

たしかにそうかもしれない。ここ最近はほとんど事件があったが、今週は無かった。ということはそれだけの時間を使って何かをしようとしているのではないか。

「お互い気をつけようぜ、とくにおまえは何かされそうだし」

「うん、お互いがんばろうね。絶対、この幸せな生活を壊されたくないから」

ああ、といって二人別れては席に着く。

「結局、誰も分かってないんだよな……」

カイの一言は、誰も聞こえなかった。

ようやく無事学校の授業は終わった。カイは、なぜか急ぎの用があるとかでさっさと帰ってしまった。彼が宿題を真面目にやったのだからクラスのみんなから驚きの声で教室が響いた。

「今日は雨でも降るのかな」

「雪かもしれませんよ？」

そんなことを言うとカイに怒られそうだが、構わずにみんなは帰り道で喋る。

「まあ、そんなことは置いといて。スバル君体は大丈夫なの？」

「うん、おかげさまでもう大丈夫だよ」

「そう、しっかりしなさいね？　あなたはヒーローなんだから」

そうルナに言われると、やっぱり自分はヒーローなんだな、と自覚する。普段のほほんと生きていると、そういうのが分からなくなってくるのだ。

「僕はかげながら応援していますから！」

「俺はスバルの援護をするぜ！」

「……ありがとう」

なんだか照れくさかった。友達にそんなに頼りにされると、誰でも嬉しかったりする。

本当に、こんな生活を壊したくないと願った。

「ぜったいに、守ろう」

夕日に照らされる街の中で、スバルは呟いた。

「大悟さん、大変です！」

ふいにＷＡＸＡの研究員が声を発した。その言葉を聞きつけて大悟はすぐさま研究員の元に走る。

「ＴＫシティに、『ガイア』と思われる電波体が出現しました！」

「なんだって？　それは本当か？」

司令室がそうぜんとなった。すぐさまその電波体の正確な位置を掴もうと研究員がコンピューターに向かう。そして巨大なモニタにその電波体の姿が映し出される。

「これは……」

映し出されたのは赤い魔術師のような電波体、そしてその背景に場

は声を失った。

火だ。火の海だ。建物など見えない。ただ背景には火だけが映っていた。どんなことをしたらこうなるのだろう。ただ、赤い魔術師と劫火だけが映されている。

「正確な位置は！？」

「ロッポンドーヒルズと思われます。え……『ガイア』が周波数変換でどこかに移動しました。追跡できません！」

「サテラポリスに連絡しろ！　すぐさま消火に向かわせるんだ！」

誰がこんな状況を予想しただろうか？　誰がここまで強大な敵だと思っただろうか？　誰がここまで、自分達は無力だと実感するはめになると分かっただろうか？

何もできない非力な研究員達は、ただその劫火を見ていることしか出来なかった。

第９９話　劫火（後書き）

ちなみに最初のほうの歌は常磐ハワイアンセンターの歌の改造版です。これ聴くと本当にやる気なくなります。

では、感想待ってます！

あと2章でこの小説も完結だ！　がんばるぞー！

第１００話　拍手

昨日の夜のことがニュースになっていた。まあ、当然といったら当然だろう。ニホンの大都市の四分の一が全焼してしまったのだから。建物の灰すら残らなかったこの大火事だが、なぜか死者は出なかったらしい。今の時代家庭用火災警報装置なんかは性能が良くなったからなのだろう。

この事件で学校などの公共施設は愚か、スーパーなども営業を今日はやめたらしい。さすがに次どこで火事が起こるかが分からないためらしい。

けれどそんな時代でも、だからこそサテラポリスとＷＡＸＡは今活動することになった。遊撃隊はもちろん活動している。けれど、その活動は簡単だ。

『パトロールって暇だな～』

「仕方ないよ。仕事だもん」

そう、パトロールだ。あまりにも簡単なことだ。

けれど簡単なパトロールだが、これにも意味がある。ある範囲を巡回することによって、サテラポリスニホン支部からの連絡で事件現場にすぐ行けるのだ。よってこれは一番最良の策と言ってもいい。もちろんそれで本部が薄くなるのを防ぐためにクインティアがいて、さらに後から来るミソラもいる。

あとはただ『ガイア』を倒すか捕まえるだけだ。サテラポリスか

らの連絡も無いことから、今は何も無いらしい。

かれこれ二時間は歩き回っている。走ってもいいのだが、どこになにがあるのかも細かく調べるために歩いている。そんなゆっくりと歩いていてなおかつウイルスもいないこのウェーブロードにいるのはウォーロックには辛いらしい。

『刺激の無い生活は俺にとっては地獄なんだよ！』

「そんなこといわれたって僕には何も出来ないよ」

溜め息混じりにそういうが、正直スバルもつまらないと思っていた。さすがに二時間歩きっぱなしはつまらない。

『これで何も無かったら俺らまさしく「骨折り損のくたびれもうけ」だな』

「……ウォーロックがそんなことというなんて世界は間違いなく滅亡に近づいてるね」

なんだとー！、とウォーロックが少しキレ気味に言った。他愛もないただの会話だった。

そんなとき、遠くで爆発が見えた。銀色と紫色がぶつかり、そして周囲に四散していく。

「ッ！　ウォーロック！」

『紫色のやつの周波数からしてソロに違いない。そして銀色からして……シルバー・ウィンドだ』

「分かった、すぐに向かおう」

「星河スバルがシルバー・ウィンドとソロの戦闘を確認した模様！　他の遊撃隊にも連絡を！」

「現在シルバー・ウィンドとソロはコダマタウン南部で戦闘をしている模様です！　なお、他の遊撃隊が到着するにはしばらく時間がかかるようです」

いっきにサテラポリスニホン支部が慌しくなった。モニタに映し出される二人の戦闘を見てデータをとっているものや、コンピューターの画面で他に『ガイア』がいないかを確認する者もいる。

「いい！？　必ずシルバー・ウィンドの周波数、および戦闘データ

をとるのよ！」

ヨイリーの掛け声の下、研究員がそれぞれの仕事をする。

「うおおおおおおおおっ！」

ソロはキリュウに容赦なく剣を振るう。それを軽々と白銀の刀で受け止めるキリュウ。ギリギリと鍔迫り合いになるが、双方ともすぐに離れる。

「オーパーツ返すから帰ってくれって言ってるだろうが。しつけえんだよ」

「黙れ、俺はおまえを倒す！」

さすがに本気にならないとマズイと思ったのか、キリュウは風の盾（エアシールド）と風の刃（エアブレイド）を張る。そのときどこからともなく黄緑色の弾丸が飛んでくる。

それはいともかんたんに風の前に散っていった。弾丸が飛んできた方向を見てみると、青い電波体が駆け寄ってくる。

「ソロ、大丈夫？」

「おまえか……」

憎憎しげにいうソロだが、その顔には焦りが見えていた。確実に、自分ひとりでは勝てないと分かっているのか。はたまたあまりに強大な敵を前にしていているためか。どちらにしろソロがいい状況とは判断しにくかった。

「今回は手を貸せ……あいつには俺一人では勝てない。だから今回は手を貸せ」

それは今までスバルが見たことのないソロだった。誰かを頼らなければ自分が生きていけないような、そんな雰囲気をかもし出していた。

「分かった、手を貸すよ。僕もシルバー・ウィンドには聞きたいことがあるし」

『ケッ！　足引っ張るんじゃねえぞ！』

改めてキリュウを見ると、何故か拍手をしていた。一回一回の間が長く、とても相手を誉めるような拍手だとは思えない。

「へぇ～。ブライがロックマンに手を貸してくれ、ねえ。いいことじゃねえか。成長したんじゃねえの？」

「黙れ……」

「一応誉めてるんだから聞けって。たしかにおまえは過去に酷い事されたけど、昔に頼れる仲間ができたら良かったなって話をしてるわけ」

「それが、どうした」

やれやれ、といわんばかりにキリュウは溜め息をつく。

「苛めって言うのは苛められるほうも悪いんだよ。ただ苛められて何もしないんじゃ駄目なんだよ。誰かを頼るんじゃなくて、誰かから頼らせるくらいじゃなきゃ駄目なんだよ。おまえは、ロックマンからも頼られてるようだし、良かったんじゃないか？　今さらだけど良かったじゃないかと俺は思うよ」

「……」

そのキリュウの言葉を聞いて、スバルはある疑問が湧いた。なぜキリュウはソロの過去を知っているのだろう？　スバルは聞いたが、キリュウは聞いていないはずだ。なのになぜ彼は知っているのだろう。

「どうやら、おまえには聞かなきゃいけないことが増えたらしいな」

「ククク、そうかよ。じゃあ、せめて俺を瀕死に追い込んだら教えてやるよ」

「ロックマン、行くぞ！」

「うん！　カオスユニゾン！」

変換するダークカードは「ダークドリル」。闇の力に包まれ、黒き鎧に包まれる。全ての攻撃を跳ね返す鎧、全てを捻り潰し鉄球。

「ナイトカオス！」

そしてソロも同じように変身する。全てを叩き潰す孤高の力。

「孤高の帝王（ブライカイザー）！」

その変身に一瞬驚いたスバルだが、すぐにキリュウに視線を向ける。聞きたいことは勝手から聞けばいい、それだけだ。

『盛り上がってきたなぁ』

「スーパーアーマーと鉄壁の防御、これは本腰入れて頑張んないとな」

「いくぞ、シルバー・ウィンド！　ウェーブバトル　ライド　オン！」

第１００話　拍手（後書き）

次話からまさかの対決！　勝つのはどっち？

引き続きいろいろ募集中！　ネタ、質問、感想待ってます！

っていうか今更レビューってオススメのために書くと知りました…
…完結してから書くとてっきり。

今度書いてみよっかな？

そしてお気に入り登録が１４人に！　けれど誰か分からない！　教えてください～

では、いろいろおまちしております！

第１０１話　圧倒

「ロイヤルレッキングボール！」

左側から棘付きの鉄球が勢いよく飛んでくる。キリュウの風の盾（エアシールド）は遠距離攻撃の中でも形状が不安定な物でしか防げず、風の刃（エアシールド）は切り裂くのには大きすぎる。つまり彼の能力では防御できない。

けれど、キリュウはそれを防いで見せた。そう、右手に握られる刀で。防いだというよりは、鉄球に刀身を刺して勢いをなくしたというのが正しい。

「そこだ！」

ソロがそこで剣を振り上げた。防げる物がないこの状況での攻撃。当たる攻撃だった。

ガッという音が聞こえた。

「なにっ！？」

キリュウは左腰にある鞘を左手で逆手に持ってソロの攻撃を防いだ。交差するように攻撃を防いでいたのだ。常人なら確実に受けていた攻撃を、なんなく防ぐ。

鉄球から刀を抜くと、風の盾（エアシールド）で勢いの無くなった鉄球ｈがスバルの元に飛んでいく。そして鞘と刀でソロの剣を押し返した。

『ちっ！　全然攻撃があたらねえ！』

「防御が凄すぎる……！」

「おまえらじゃ勝てないって、だから」

肩に担ぐように刀を持つキリュウ。その姿は余裕で満ち溢れていた。とうに鞘を左腰に戻しており、手に持っているのは右手にある刀だけだった。

スバルとソロはキリュウの出かたを窺って攻撃をしてこない。なら待つのは時間の無駄だとキリュウは刀を構える。

「こっちから行かせて貰うぜ」

そして、キリュウが消えた。

『ッ！　スバル、後ろだ！』

気付いたときにはもう遅い。後ろに回ったキリュウはとっくに攻撃をしようとしている。

「ナイドディフェンス！」

咄嗟に防御を固める。けれどキリュウは気にしない。何もいっていないのに刀身が蒼い電流を帯びる。そして、キリュウの攻撃が突きに変わっていた。

「一の型――――」

スバルとソロはもう反応できない。そして、一筋の蒼き閃光が伸び

る。

「迅雷」

刀はよういに鎧を深々と刺さり、そこから電流が流し込まれる。コンベーションされたのは「ベルセルク」。オーパーツの一つであり、かなりの電流がある。当然マヒ効果もついており、スバルはその場で硬直した。

そしてキリュウが回転した。理由が分からないスバルだが、すぐに理解させられた。

右脚による回し蹴りだった。それが頑丈である鎧に叩き込まれる。鎧自体には意味が無いが、スバル自身が吹っ飛んだ。

「がはっ！」

ウェーブロードを何メートルも飛んでいく。けれどそんなのにも目をくれない。

そして刀身の電流はなくなり、代わりに凍てつく冷気が纏われる。

「ダンシングブレード！」

投げられる剣。これは風では防げない。

そう、風なら。刀身から放たれる冷気により空気中の水分は凍り、そして厚い氷の壁が形成される。バキャッと氷の壁が破られたが、

剣はキリュウには届かない。

「くそ！　何で一撃もあたらないんだ！」

「簡単だろ、それは単に――――」

「おまえが弱いだけだよ」

一瞬で背後に回られたソロだが、さっきのスバルを見ていたのだ。とっさに防御する。

ギリギリギリと剣と刀で火花が散り、そしてキリュウの一撃でソロが吹っ飛んだ。なんとか空中で体勢を立て直す。

「ダークドリル！」

ロックオンで近づいてきたのだろう、スバルが片手に巨大なドリルを持って攻撃をする。今の彼にはスーパーアーマーがある。つまり

キリュウの防御は意味がほぼ無い。

風をかき回し、そして突き破る。ドリルは銀色の鎧に当たった。
そして、キリュウが始めて吹っ飛んだ。けれど数メートル吹っ飛んだが、左足で踏ん張った。

「いいか、今のようにあいつにも隙がある。そこを二人で突くぞ！」

「うん！　次は確実に決める」

「……あのさ」

ふいにキリュウが話しかけてくる。

「おまえらさ、なんでこんなに完璧に防がれてるか分かってる？」

『一体何が言いたいんだ？』

「単に君が強いだけじゃ――――」

「違う違う、もっと別だ」

一拍置いて、キリュウはこういった。

「てめぇらの戦いは去年からずっと見させてもらったよ。全部な」

嫌な風が、その場に吹いた

第１０１話　圧倒（後書き）

始まったこの戦い、でも次話には決着がつくという……

ってなことでいろいろお待ちしております

やっと１９巻読み終わった。さあ、土日は書店にＧＯ！

というか質問。たまにお気に入り登録を他の人には見えないようにしている人がいるのですが、なんでですか？　１５人になっても半数が分からないのは少々悲しんですけど……

ってかこれも逆お気に入り登録とか機能無いのかー！！！

第１０２話　観察

「それって、どういうこと？」

「そのまんまだよ、おまえらのことは去年から観察させてもらえた。おかげでおまえらのクセ、攻撃は把握できた。それでおまえらの攻略方法は完璧ってこと」

つまりは自分達の動きはほぼ相手に見切られていることになっている。そして自分達はキリュウを見切れていない。

「まあ、ＦＭ星とメテオＧの最後は見てないけどな。いや～、本当に残念だったよ」

「……それで俺の過去も聞いていたということか」

「そういうことだよ。これで疑問は解決したか？」

ここまで明かすということは余裕があるということだ。けれど、こちらには少しの余裕も無い。

どの観点から見ても、こちらは負けていた。

「じゃあ、こっちはもう行かせて貰うわ。勝てないって分かったろ？」

「待て！　まだ勝負は――――」

「ああ、あと良いこと教えてやるよ」

去り際にキリュウは振り返って、二人に言った。

「おまえら、仲間を呼んだよな？　そしたらとっくにここに来てないか？」

「……それって、つまり――――」

「なにかあったんだろうな。例えば『ガイア』のメンバーに会ったとか」

ゾクッっと背筋が冷たくなった。昨日の事件からして『ガイア』に遭遇した可能性は高い。そして昨日の犯人だとしたら、それはＴＫシティを焼け野原にしたやつに違いない。

そんなやつと戦って、無事でいられるはずが無い。

「今から仲間のところ行った方がよくないか？　それとも今ここで戦って負けるか？」

二択だ。どちらか一つを選べばいいだけだ。けれど、これほど難しい決断など今までで初めてだ。仲間を信じるか、助けるか。敵を倒すか、見逃すか。

この二択で、何かが決まりそうだった。何か、大事なことが。

「仲間を選ぶだろ？　俺にも用事があるし、じゃあな」

そういって、キリュウはその場を去ろうとした。そんな彼の背中を左右から二つの鉄球と数個の紫色のオーラが向かう。

「ダブルロイヤルレッキングボール！」

「カイザーアーツ！」

けれどその不意打ちは、数メートルのジャンプによって回避された。

「……意味分かってんだよな？」

「僕はみんなを信じる、だから君を倒してからみんなのところに行く！」

「俺に仲間などいない。コイツとは利害の一致だけだ。だから助ける意味が無い」

盛大な溜め息をつくキリュウ。

「じゃあ、後悔すんなよ？」

『こっちはするつもりなんてないぜ！』

再度構える三人。そして、スバルとソロが先に動いた。

「ＥＦＢ（エグゼフォースビックバン）　デスロイヤルレッキングボール！」

真右、真左、斜め右、斜め左の４つの鉄球。そして真上から来るのはソロ。

「カイザーブレイク！」

計五方向からの攻撃。そしてこの五つの攻撃は範囲が広い。キリュウと二人の距離は五メートル程度だったが、後ろ二十メートルまで下がっても避けれない。

完全に攻撃を受けるキリュウは、ただ静かにこう呟いた。

「……完全同調（フルシンクロ）　加速（アクセラレーション）」

そして、ウェーブロードで爆音が轟いた

第１０２話　観察（後書き）

これでバトル自体は終わりです。

満足していただけましたかな？　白熱してましたかね？

では、感想待ってます！

第１０３話　光速

鉄球と鉄球が当たる鈍い音が響き、ソロの攻撃により爆風が発生する。その場が煙で見えなくなる。

「やった……？」

手ごたえはあった。そして爆音からして当たっただろう。やがて煙が晴れていく。スバルからはウェーブロードで誰かが倒れているのが見える。

『本当にアイツを倒したのか？』

自分達がやったのだが、あまり現実味が無い。なんてったってあのキリュウを倒したというのだから。

煙は晴れて、ウェーブロードに倒れている人物が明らかになる。

『なっ！』

「うそ、なん――――」

「六の型――――」

後ろから聞こえてくる声が信じられなくて聞き取れなかった。

もし、キリュウが音速の半分程度の速度が最高速度なら、スバルも気付けただろう。けれど、今の彼の移動速度は違う。今の彼の移動速度は

光速のそれに等しかった。

背中に焼けるような痛みが走る。視界が揺らぐ。

（なんで、ソロが？）

薄れいく意識の中、スバルは思う。倒れていたのはソロだったのだ。スバルが放った鉄球により鎧は大破されている。砕かれた鎧からしてこの推測はあっているだろう。

けれど、理解が出来なかった。五方向からの攻撃、それをなんで避けられた？　しかし、それを考える前に意識が無くなった。

理解も出来ぬまま、ウェーブロードに倒れた。

「終わりーっと」

キリュウは誰も聞いてないのを知っていてそういった。さっきの攻撃で受けたのはかすり傷程度。それだけだった。

なぜソロが攻撃を受けたかは簡単だ。まず光速で移動をしてソロに攻撃。電波障壁はなくなってしまう。次に元々キリュウがいた場所にたたきつける。あとは勝手に鉄球がソロを押しつぶしてくれたというわけだ。

スバルは高速で移動して背後を攻撃。それで勝負はついた。

一見無敵に思われる光速だが、移動距離は一回で五メートル。そして次に移動するまでに一秒かかる。一秒とは案外勝負では長い。早い人は竹刀をコンマ二秒でも触れる。それもただの人間でだ。電波人間での戦いではもっと攻撃できるほどの時間だ。

それともう一つ弱点がある。それは

「時間切れってか」

継続時間の短さ。今のウィンドの状態で二分だ。

『まあいいじゃねえか。勝ったことだし』

「まあな。終わりよければ全て良し」

といっても、今からレーヴァテインのところに向かうのだが。元々向かうはずだったのが思わぬ妨害により時間を食ったのだ。

といっても、この戦いであっちも思わぬ妨害を受けてしまったのだが。

「ヘイトぶっ潰していいか？　もう面倒なんだけど」

『……待ってくれ。じゃなきゃあいつがでてこねえ』

「だるいな。まあ、ゆっくり行きますか」

『今日は休もうぜ？　さすがに二連続は辛いよ』

「う～ん……分かった、そうする」

しょうがなく同意したという感じだった。

「ま、『ガイア』の【粛清者】としてがんばっていくよ」

そういって、キリュウは消えた。

第１０３話　光速（後書き）

感想待ってます。ちなみに光速状態のキリュウの名前知りたい人いってください。別に特にネタバレとかないんで。

あ、あともしかしたら○○&○○○○が実現するかもしれません。まあ、予定ですが……

キリュウ、強い！　無敗伝説やっちゃうかな！？　でも彼を強くするのには理由が。それはウィンドのせいなんですよ、ハイ。

では、感想待ってます！　要望とか意見も待ってます！

第１０４話　名前

「負傷者は四人です。いづれも『ガイア』によるもので、『ガイア』は見失ったようです」

「……そう」

ヨイリーは溜め息をついた。遊撃隊のメンバーが『ガイア』に負けたからではない。自分が役に立てなかったからだ。ツカサとジャックとゴンタの場合、遠すぎて周波数が特定できなかった。スバルの場合はキリュウの周波数が特殊なのか、こちらも特定できなかったのだ。

「そのうち三人は軽い火傷だそうです。一日じっくり休めば治るそうです」

今の時代、軽い火傷なら跡も残らず治療できる。今回は運がよかったのか、三人は軽い火傷で済んだようだ。

「そしてスバル君ですが、刀傷は見当たりませんでした」

「手加減されたって、ことね？」

報告する研究員は黙って頷いた。申し訳なさそうに思っているらしいが、しょうがないだろう。

「それと、捜索をお願いされた少年はまだ見つからないそうです」

捜索をお願いした少年とは、ソロのことだ。スバルはウォーロック

が運んできたのだが、ソロは一人でどこかに消えたようだ。

「分かったわ、引き続き頼むわ」

はい、と頷き研究員は自分の仕事に戻っていく。ヨイリーは病室のほうに目をやる。

横たわる四人の横に数人の子供がいた。みんな、四人が心配だから来てくれたのだろう。けれど、そんな子供達のために自分は何もしてやれない。それが、どうしようもなく歯がゆかった。

「私も、もっとがんばらなきゃいけないわね……」

「う～ん……」

暁は片手におなじみのスナック菓子を持ちながらハンターの画面を見ていた。いつもの彼の相棒なら注意をするだろうが、今の彼らはそれすらも忘れて画面を見ている。

「なんかおかしいな、やっぱり」

『なぜか最後の五秒だけ火力が物凄く上がっています』

彼らが見ているのは前に足を運んだ博物館の映像、もっと詳しく言えばそれが消失する映像を見ている。

「最初の炎は偽物（フェイク）なのか？　それをする意味があるのか？」

『考えられることはありますが、彼らにとってプラスになるとは思えません』

その言葉に暁も少々同感した。本当に博物館を焼きたかったら最初から本気で焼くべきだった。わざわざそれをしなかったのは理由があるはずだ。

考えられるのはいくつかある。まずは『ガイア』の名を広めるため。けれどこれはもともと広がっている。

そして二つ目、これが一番『ガイア』にとってプラスとは思えないものだ。

「人が避難できる時間を作った、か」

『さあ、あいつらが回復したら次こそ行動だ』

ヘイトはそういった。

『ウィンドとかいう電波体、ようやく正体が分かったよ』

「そうなの？」

『あいつの真の名前は、ユフィル』

「ユフィル？」

『「ガイア」っていうのは、真の名前をいって初めて本気を出せるんだ。ブラフマはウォーティア、アサルトはヴォルト、プロヴェはシクサ、レーヴァテインはカルマ、そしてゲイボルグはアトル』

全て神の名前だということは男は理解した。

『けど、おかしくないか？　本来風はセシルのはずなんだ。なんでユフィルなんだ？』

「光じゃないはずだけどね」

『あいつには、まだ何かある』

そういうヘイトだが、もしかしたらという予測はあった。けれどそれはあまりにも簡単すぎて、ましてやそれはわざわざ気にすることでもない。

「さあ、じゃあもうすぐレーヴァテインとは戦ってもらおうよ」

『ああ、そのときが俺達の勝ちだ』

第１０４話　名前（後書き）

感想待ってマ～ス

禁書目録の二次創作、案は浮かぶんだが時間が無いというｗｗ
誰か分けてくれ！

第１０５話　出動

結局、スバル達はおきていた。
スバルは、キリュウの最後の攻撃は手加減されていたらしく、さらにこちらの変身が強固だったおかげ背中に打撲が少しあるだけだった。といっても最初は結構痛かったのだが。
他の三人ももう動けるようになっており、次の戦いもできると医師には言われていた。

「うっしゃ、次は絶対あいつに勝つ！」

ジャックの声には張りがあった。ツカサとゴンタも元気になっていることから次の戦いには必ずでるのだろう。

『スバル、次は本当に使うのか？』

ウォーロックの質問にスバルは迷うことなく頷く。

「使うよ、ヨイリー博士が大丈夫だって言うんだから」

数時間前

「キングＰＧＭ？」

スバルは病室で驚いたように聞いた。

「ええ、そうよ」

対してヨイリーは淡々と言う。

「究極変身（ファイナライズ）は二つあったわよね？」

「『レッドジョーカー』と『ブラックエース』ですよね？」

「ええ、その二つがこの一つのＰＧＭに入っていると考えてもらえればいいわ」

ふ～ん、という感じのスバルだが、彼のハンターの中の住人は怪しい物を見る目だった。

『バアさん、それって誰が作ったんだ？』

「お察しのとおりキングよ」

『やっぱりか……』

憎憎しげに呟くウォーロック。スバルももちろんそれは聞いておきたかった。これが信用できる物かと。

「私も眼を通したから大丈夫よ。安心して使って大丈夫よ」

「だから大丈夫だよ。たしかに怪しいけどさ」

『そっちじゃねえよ』

「えっ？」

思わず驚きの声をあげるスバルに対して、ウォーロックは怪しい光を瞳に宿してこういった。

『ブラフマの野郎から貰ったプログラムのことだよ。本当にそれは大丈夫なのか？』

「少しだけ攻撃力を上げるプログラムだって聞いたけど、それがどうしたの？」

『なんか敵から渡されたものだぜ？　いかにも罠とかじゃねえか』

「でも、これも大丈夫って言ってたよ？」

納得がいかないと言いたげなウォーロックだが、これ以上は何も言わなかった。

（……なんかこれはありそうな気がする）

ウォーロックはそう思っていた。エグゼＰＧＭからの情報からそんなものが流れ込んできたかもしれない、そう思えた。

《ガガ……無人のＴＫシティに『ガイア』が出現、遊撃隊は直ちに出動せよ。繰り返す、遊撃隊は――――》

いきなりの出動要請だった。けれど、それはここにいる全員が待っていたものだ。

「いこうぜ、次は絶対にぶっ飛ばす！」

そういって、スバル達四人は出動した。

（……タイミングが良すぎる、絶対何かあるに違いないぜ）

ウォーロックの静かなる考えは、胸のうちに秘められたままだった。

今テレビでは響ミソラが休業宣言をしている。結構話題になっているらしく、生中継で会見が放送されている。なんでも理由は言えないらしい。

「あ～あ、馬鹿だな」

カイはそうテレビを見ながらそういった。

「どうせ――――」

「今日からそれどころじゃなくなるのに」

笑っていた。この世の全てを嘲笑うように、全てが面白おかしいかのように。笑っていた。

「さあ、やっとここまで来たんだ。期待にこたえてくれよ？」

「スバル」

第１０５話　出動（後書き）

次話、計画が明らかに！

やっとここまで来たー！！！！

そしてもうすぐ最強の――――

「ネタバレやめろ！」

くそ、来たか。いいたかったのに……

では、感想待ってます！　ってか短くてスイマセン！

第１０６話　覚醒（前書き）

今回読みにくいところが多々あります。気をつけてください。

最後の少し手前なんて……

第１０６話　覚醒

結局、自分は何故生まれたのだろうか？　物事には理由がある。けれど自分が生まれてきた理由が分からない。あの方は教えてくれない。

誰が仲間かも分からない。あの銀色の剣士は、仲間ではない。けれど仲間のような気もする。

『まあ、終わったら聞きましょうか……』

これが終わったら、聞いてやろう。自分が何故、生まれたのかを。そしてなぜこんなことをしなければいけないのかを。

『……おや？』

前ならこんな考えは浮かび上がらなかった。けれど、なぜかふいにそう思った。

まるで、なにかを思い出しそうなように。もうすぐ、答えが見つかりそうな感じだ。

『……「ガイア」とは、一体何なんでしょうね。ねえ、ゲイボルグ？』

「ッ！　おまえは！」

ウェーブロードからスバルはそういった。彼の視線の先には赤い魔術師がいる。なんかの仕掛けがあるのか、それとも能力なのか、空中に浮遊していた。

ＴＫシティはこの赤い魔術師のせいで、荒野と化してしまっていた。なにもない、ただの荒地のように、全てを燃やしてしまった。

『おや、来るのが遅かったですね。ロックマンとそのお仲間』

別に来なくても良かったと言いたげだった。けれど、それでも彼は杖を構えた。

『名前くらいは名乗っておきましょう。私の名前はレーヴァテイン・フレア。災厄の杖です』

『災厄の杖だぁ？　んだそりゃ？』

『たった一振りしただけで戦争を終わらした杖の名前です。正確に言えば全て焼いてしまったのですがね』

その言葉が本当なら、レーヴァテインの能力は恐ろしい。けれど、

そんなので怯んでいられない。

「そんなことで恐がってられない。……行くぞ、レーヴァテイン！」

その言葉と同時に四人は飛び出した。

「ロックバスター」

掃射されるピンク色の弾丸だが、どこからやってきた火の粉とぶつかって消えてしまう。

「「ロケットナックル！」」

「グレイブクロー！」

「オックスブレス！」

『ファイアボール』

それぞれの攻撃に二個ずつ火の玉がぶつかり相殺する。

『プロミネンス・バーン』

「なっ――――」

溜め無しでその場が大爆発した。それを見て、レーヴァテインは冷徹にこういった。

『ロックマン以外は邪魔です。灰になる前に帰ってください。じゃないとあなた達もあとで困りますよ？』

「くそが！」

直撃は免れた面々は立ち上がる。絶対にコイツには負けないと。コイツを倒して平和にすると。

立たない方がいいのに全員が立ち上がる。

「いくぞ、究極変身（ファイナライズ）だ！」

ジャックの掛け声で四人が同時に究極変身（ファイナライズ）をする。

「「ライトニングモード！」」

「ボルケーノモード！」

「ヘルバーニングモード！」

「……ブラックエース！」

黄色、赤、紫、黒の四色の閃光と共に四人の体が強化される。それをみて、レーヴァテインもそれをある言葉を唱える。

『カルマ……全てを焼く獄炎』

ただ、それをいっただけだったのに、その場の力の関係が、変わった。

「はぁ…はぁ……」

スバルは肩で呼吸をしていた。漆黒の体には黒く焦げた跡がある。

『クソ……なんでってんだ、アイツ！』

あまりの悔しさに声が震えていた。彼らの後ろには倒れている仲間がいる。気絶しているだけだが、昼間の戦闘よりも火傷は酷いだろう。

『さあ、あなたはどうします？』

レーヴァテインの質問に答える力も無い。

彼が唱えた言葉から、互角だったはずの力が一瞬でひっくり返さ

れた。あの言葉で、夜中だったはずの空に太陽が出現したのだ。さすがに昼間のような明るさではないが、それでも漆黒の空に煌々と光る太陽なものは見てて信じられなかった。なにせ、星空が見えなくなってしまったのだから。さらにあろうことか、劫火だった火が獄炎に変わったのだ。全ての攻撃は焼かれ、かすっただけでも電波人間が意識を奪われるほどだった。

「うおおおおおおおおっ！」

背中にあるバーニアで一瞬でレーヴァテインの前に移動する。そして動かない右腕で無理矢理剣を振り下ろす。

それを嘲笑するかのように、スバルの体が爆発した。

『そんな攻撃で勝てると思ったんですか？　それはしょうしょう見くびりすぎですよ』

勝てない、それだけは直感で分かった。さっきの戦いで「レッドジョーカー」にも切り替えたが、状況は変わらなかった。そしてさっきの理解の出来ない攻撃。

絶望という二文字が頭の中で埋め尽くされた。

『ほら、何もしなければ終わってしまいますよ？』

やだ、死にたくない。けれど勝てない。勝たなければ死んでしまう。

『本当に何もしないのですか？』

力が欲しい、純粋に、こいつに勝てる力が。

『英雄が聞いて笑わせられます』

憎い、単純にこんなことを言ういうコイツが憎い。こいつを倒す、圧倒的な力が欲しい。

全てを破壊してでも、こいつを倒す。

「うおおお

「お、来たか」

カイはテレビを見ながらそういった。今記者会見では謎の叫び声でその場が騒然としていた。会見はＴＫシティでやっていたのだろう。

「だから言ったろ？――――」

「どうせこの国がパニくるのに何かしたって意味ないって」

第１０６話　覚醒（後書き）

ちなみに究極変身＝レーヴァテイン（通常）です。

ってかレーヴァテイン強い！！！

太陽は要するに彼にとって有利な状態にするために作ったと考えてください。

超簡単に言うとポケモンの特性、ひざし（あってたっけ？）

わざはにほんばれです。

ヒ～ハ～！　次話で明らかになる簡単な計画……

では、感想待ってます！

ちなみにレーヴァテインは本当は（一般的には）剣です。でも剣だとかぶってしまうので杖にしました。神話を平気でまげてスイマセン。

第１０７話　会議

スバルの姿が変わった。濃い緑色の獣のような姿。眼は紅く染まり、尻尾も生え、なにより雰囲気が変わった。

『やっとですか……』

レーヴァテインはそういった。これが、彼ら『ガイア』の計画だった。ロックマンを覚醒、獣化させる。

『あとは私がコイツと戦うだけですか』

スバルとの戦いを一人でも多くの人に見てもらう。そうすれば、勝手に計画は達成される。

『さあ、戦ってもらいますよ』

獣はただターゲットを見つけると、それに向かって飛び掛った。こうして、野獣と魔術師は戦いを始めた。

《ここはＴＫシティより少し北にある町です。見てください！　信じられないことに、あのロックマンが、建物を次から次へと破壊しています！　建物は爪が振るわれるだけで大破し、ロックマンから放たれる火が全てを焼き払っています。彼はもう、人類の味方ではなく、敵なのでしょうか！？》

《新情報です！　今ロックマンと対峙しているのは、『ガイア』と呼ばれる組織の電波体だということが分かりました。彼は勇敢にも、あの凶暴なロックマンに立ち向かっています。そして、つい最近に報道されたロックマンに対する手紙ですが、これはこのことを見越して『ガイア』のリーダーが送ったそうです。……今回のことで、本当のヒーローは誰なのかみなさんには言わなくても分かると思います。私達人類は、『ガイア』を支持するためにレゾンを変えるべきではないでしょうか？　多くの人に、レゾンを――――》

「くそっ！」

サテラポリスにいる長官は、悔し紛れに怒鳴った。サテラポリスにいる全員が、スバルがあんなことをするわけがないと分かっていた。なら、誰があんなふうにしてしまったのか？

「……キング、君ではないのだね？」

「私ではないな。たしかに究極変身（ファイナライズ）中に起きたことだが、あれはもっと別のことだ」

こんな状況でも、キングは余裕にコーヒーを飲んでいた。いや、こんなときだからこそ飲んでいるのかもしれない。

「ヨイリー博士、『ガイア』から受け渡されたプログラムは、ちゃんとチェックしたのか？」

「もちろんしたわ、ちゃんとシュミレーターにも調べたのだから」

キングとヨイリーの二人は冷静であった。この場をどう打開すれば良いかを考えるためには、感情的になってはいけないのは彼らは知っている。

「たしかに、家電製品が電気無しでは動かないからな」

「……どういうこと？」

「あのプログラムのほかに、星河スバルのほかに渡したものは？」

「あなたのプログラムだけよ」

「じゃあ、ほかに何かあるはずだな」

キングは自分でもう答えが分かってしまっているのか、ぶつぶつと呟いている。

「とにかく、今は星河スバルの捕獲が第一だ。至急、サテラポリス隊員は出動するように！」

長官はそう命令したが、これはあくまで周りの町の避難にあてるためだ。スバルを捕獲するためではない。なぜなら、今の遊撃隊では勝てない。ミソラ、クイテンィア、そして表向きでは脱退した暁でさえ勝てないのは誰が見ても明白だった。倒れた遊撃隊も仮に全快したとしても、勝てない。

今は、とにかく相手の思い通りにさせるしかことしか出来ない。それが、被害を一番小さくさせる方法だから。

まんまと『ガイア』の策にハメられたのだ。最悪、スバルを殺されるのを見てるしか出来ない。

『キリュウ、行かないのか？』

「行く行く。今準備してる」

そういってキリュウは右手に白いハンターを装着する。

『さ、レーヴァテインにはちょっと痛い目見てもらうか』

「いや、俺は手を出さない」

『マジ？　ってことは――――』

「スバルに倒してもらうよ。おまえも残りの二つの手を使いたくないだろ？」

『まあな、疲れるし』

「じゃあ、スバル自滅させますか」

そういって、彼は外に出た。

「電波変換ＣＦ　キリュウ　オン　エア」

銀色の風が、その場で吹いた。

第１０７話　会議（後書き）

ちなみに、電化製品の例えは簡単にいうと、二つ揃えば発動するものです。ってかもう一つ分かりましたよね？　キングＰＧＭではないです。前にスバルに入ったアレです。

話し変わりますが、禁書の小説を合作でさらに非公開で書いています。見たい人は言ってください。ってか公開しようかな？

では、次話からもの凄く謎が解けていくのでお楽しみを

もしかしたら作者の部活が今現在うまく言ってなくて作者イライラしているのでできないかも……本当に後輩をぶん殴りたい（コラコラ）

電波変換「ＣＦ」……

第１０８話　集結

『まだ持ちますか、結構体が丈夫なんですね』

そういうレーヴァテンを攻撃しようと野獣（スバル）は突然爆発した。黒い煙を上げながら野獣（スバル）は地面に落ちていくが、すぐに体勢を立て直した攻撃をする。

スバルが獣化（ビーストアウト）してからもう十七時間が経過していた。それでもスバルは攻撃をやめない。いくら攻撃を受けようが。獣化（ビーストアウト）には自己回復の効果は無い。つまり、体はもうボロボロだった。

『フレイムタワー』

地面から五つの火柱がスバルに向かって放たれる。けれど、アーマーが黒く焦げようがスバルは生きていた。

『さっさと死んでもらったほうがいいんですがね。どちらにしろ全世界のレゾンの力であなたは私に勝てない。できれば諦めてくれて死んだほうが良いのでは？　といっても今は人語も理解できないでしょうが』

人という枠から外れてしまったスバルは、もう止まらない。ただ、目の前にあるものをただ破壊しようとするだけ。

あとはただ、なぶり殺されるだけだ。

「まず、ブラフマに渡しておいたプログラムがスバルに渡す。端から見れば攻撃能力を上げるもの。中身は『獣化推進プログラム（ビーストアウト）』。そしてヘイトに僕の憎しみをいれることによってプログラムと連動、これで獣化（ビーストアウト）に強制的にさせる」

『クックック、これで俺達は全世界を味方にしたんだ。あとはスバルを殺せば俺達は英雄。世界を掌握できるってわけだ。そしてそれを銀河全体とブラザーバンドを組めば終わりって訳だ』

この計画は、スバルとある一人に対する復讐だ。なら、どうしたら相手を苦しめられるか。自分が信じていたもの、自分が今まで守っていたものから裏切られること、それが彼らが出した結論だ。

『さあ、どうやって死ぬのか。見届けてやろうぜ？』

「うん、せめていい死に様を見せて欲しいよ」

それが、この計画の本当の狙いなのだから。

「ん？」

キリュウはウェーブロードで立ち止まった。目の前には虹色のような大きなドームが形成されている。

『懐かしい～、ってかこんなもの使ってどうするつもりなんだろうな』

「さあ？　俺達に効くって――――」

「思ってるんじゃん？」

ドームのようなものの一部が四角く斬られた。ズズズ、という音と

共に倒れる。

『じゃあ、レッツゴー！』

「さあ、粛清しますか。ぶっ飛ばしてやる」

「……ねえ」

後ろから声がした。少女の声だ。振り返ってみると、見たことのある姿だ。

「……おまえも来るのか？」

「え？　……うん」

「じゃあ、行くか。さっさとつまらないゲーム終わらせに」

そして、キリュウとある少女はドームの中に入っていった。

「カイザーブレイク！」

キリュウのいたウェーブロードとはまた違う場所で、彼もドームを破壊していた。

「行くぞ、ラプラス」

『……ギギ』

「待っていろ、まだおまえには死んでは困る……！」

各々の思いを胸に、いまここに終結する――――

第１０８話　集結（後書き）

今日は「禁書目録」の小説をようやく公開できるようになりました。やっと了解が……説得するのに時間がかかりました。合作なんで許可が必要でして……

とある高校生の神の助言

ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒｎｏｖｅｌｍａｎａｇｅ／ｔｏｐ／ｎｃｏｄｅ／１０３２９５／

あと最後の攻撃、名前変更しました。誰の攻撃かは分かったと思いますが、分からなかった人は次話を待ってください。

ドーム……やっとここまで書けるようになったか。長かった……

では、感想等待っています！

第１０９話　解放状態（前書き）

今回結構自信あります。ってか長い

第１０９話　解放状態

『これで終わりにしましょう。バーニングスター』

星のような小さな焔が、矢となってスバルに降り注ぐ。

「――――試合（ゲーム）は立ってる者がいなくなったら終わりだぜ」

小さな焔とぶつかるように風が吹く。風は焔を打ち消し、消えていく。

『あなたですか……ウィンド』

レーヴァテインは憎憎しげにそう呟いた。彼の目の前には二人の電波人間、キリュウとミソラがいる。

「スバル君を死なせはしないよ」

ミソラの決意のこもった声は、スバルには届かない。けれど、ミソラははっきりとそういった。

『あなたが来てなんになると？　現にあなたよりも強いお仲間を三人ほど倒しました。弱いあなたではどうしようもありません』

「けど――――」

「たしかにそうだ」

ミソラの声を遮ったのは、キリュウだ。

「たしかにこいつは一人じゃ役に立たない。本当に邪魔なだけだ」

『ちょっと、それ本気で言っているの？』

ハープはキリュウに抗議をするが、それを無視してキリュウは続ける。

「だけどよ、こんなことわざ知っているか？」

途端に、レーヴァテインに向かって黒い剣が飛んでいく。

『ちっ』

「塵も積もればなんとやらってな。なあ、ブライ？」

彼を援護するように現れたのは、ソロであった。

「何を言っている。おれはロックマンに用があるだけだ」

「はいはい、まあいいや。で、レーヴァテインどうする？」

『……ゲイボルグが来ればお終いでは？』

「そうだな、けどよ。まさかこんなときに対策してないと思ったか？」

『なに？』

「一応、連絡しておいたよ」

『サテラポリスにまだ戦えるものがいたと!?』

「この女以外は避難させるために動員されているよ。だから、もっとほかの奴さ」

「ククク、君がゲイボルグ?」

『……誰だ?　キサマは』

ゲイボルグの前に立ちはだかる、謎の少年。それは笑いながら話しかけてきた。

「僕、君のことあんまり知らないけど。戦ってくれない?　ちょっ

と最近暇でさ」

『死ぬぞ？　さっさとどけ』

「ああ、それはない。だって、僕のウィザードは君の基となった奴だから」

『なに？』

『無駄話をするな』

少年のウィザードは、冷たくその場を制する。

「分かったよ。じゃあ、あっちも大変だし手短に終わらせようか？」

右腕を黒く禍々しいソードに変形させて、少年はそう宣告した。

「おまえの増援は無い。ヘイトも今は来ないだろ？　つまりだ。おまえの作戦負けだよ」

『……フフフ、いいでしょう。三人いっぺんにかかってきてください』

「……あんた、行け」

「え？」

「あいつを止められるのはおまえだけだ。さっさと行け。そしてさっさと元に戻してやれ。俺達は時間稼ぎだ」

「……分かった」

ミソラは一人、スバルの元に向かっていく。それを、止める者はいなかった。

『どうせ死ぬだけですよ？　獣化（ビーストアウト）は彼女が敵う相手ではありません』

「それをなんとかさせに行ったんだよ。ブライ、俺達は時間稼ぎだ。いいな？」

「命令するな……だが、まあいい。これが終わったら返してもらうぞ」

「さあ？　それはまた別の話だな。じゃあ、おっぱじめるか」

「スバル君、もうやめて！」

ミソラの悲しき叫びを受けてもなお、スバルは止まらない。獣となり、本能の限り破壊を行う。

「もう・・・やめてよ」

その場にへたり込んでしまうミソラ。彼女は、カイに言われてからずっと考えていた。その答えが休業だ。

けれど、カイのいうとおりそれは手遅れであった。それが、どうしようもなく悔しくて、悲しかった。

そして、今できることはただスバルを止めること。ほかの誰よりも簡単なはずなのに、彼は元に戻ってくれない。

彼女は思う、自分がもっと重荷を背負わせていなければ、こんなことにはなんなかったのではないだろうか？　もっと自分が、なにかをしていれば、こんなことには

「もうやめてよ、スバル君！」

「ぐあ！」

「がはっ！」

キリュウとソロはそれぞれ別の方向に吹っ飛んでいく。

『これだけですか？　弱いですね』

レーヴァテインが真の名前を告げた途端から、やはり戦況が全てひっくり返った。ブライカイザーとなったソロでさえ、攻撃を防げずなかったのだ。

『やはり、レゾンの力は偉大ですね。力が体のそこから溢れていますよ』

「ちっ、黙れ」

キリュウは毒づくが、戦況は一方に良くならない。炎の質がおかしい。通常状態の火が１センチほどなら、真の名前を告げた途端それが３０センチになるのだ。約三十倍に跳ね上がる力。

『【解放状態（バーストモード）】だけではこれほど強くなれませんよ、全く』

「くそ、どうにかならないのか！」

立ち上がりながらいうソロ。彼ももう相当のダメージを負っている。

『では、一足先にさようなら。バーニングスター』

もはや槍だった。幾戦もの槍が、雨のように放たれる。

「くそ――――」

その場が大爆発し、二人の生死も確認できないほどに煙が立ち込める。

これが、『ガイア』の本気。災厄の杖の本領だ。

暴れまくっていたスバルだが、ふいに止まった。

（……止まってくれたの？）

そう思って嬉しくなる心だが、スバルはただミソラをただ見つめている。まだ、獣のような眼で。

「……え？」

そして、スバルは動いた。理由は簡単だ、ミソラを壊すために。思わず体が硬直したミソラだが、これが運命だと悟った。自分が悪いから仕方がないと開き直った。

だから、心の限り叫んだ。せめてもの可能性を賭けて。

「――――元に戻ってよ、スバル君！」

ミソラは、スバルを抱きとめた。

「はぁ・・・はぁ……」

槍の雨を防いだキリュウとソロだが、体がもう限界を迎えていた。体中に傷を負い、そしてなにより心が参っている。勝てない、それだけが脳を駆け巡る。

「（くそ……加速（アクセラレーション）は意味ないし。かといってあれは……）

加速（アクセラレーション）は距離が遠すぎて意味が無い。さらに防御面が薄い。その理由は、圧倒的過ぎるスピードで攻撃があたらないと仮定しているからだ。だから、意味が無い。

「（どうせなら、あいつも呼ぶべきだったか……）」

脳裏に浮かぶのはある知り合い。防御なら自分よりは全然性能がいいだろう。巻き込みたくないから、世話になりたくないから呼ばなかった。自分が強くなりたいと思わせた人に、手伝って欲しくなかった。

『キリュウ』

「使わないよ、絶対に」

ここで死ぬのだったら、意味が無い。ここまで来たのなら、死ねない。だから、このあとのことも考えて切り札は使わない。

『これで充分でしょう、ファイアボール』

巨大な火の玉が、高速で迫ってくる。もう、避けれない。けれど二人は動いた。火の玉に向かって。

「「うおおおおおおおおおっ！」」

二人が火の玉に直撃する瞬間、赤きなにかが通り過ぎた。それは火の玉を吹き飛ばしていった。

「待たせてゴメンね」

ふいに届いたのは忘れていた存在。もう、諦めかけていた存在。

「僕も戦うよ」

獣化（ビーストアウト）を完全に制御して、赤い怪鳥となって戻ってきたスバルだった

第１０９話　解放状態（後書き）

感想待ってます

第１１０話　獣化

「大丈夫？　シルバー・ウィンド」

「大丈夫だよ、一応」

少し辛そうにいうキリュウだが、すぐにレーヴァテインを見る。

「いっとくけど昨日の奴の力と同じだ。気をつけろよ？」

「……分かった」

そういうとキリュウはその場に座った。彼の体力ではもう立てない。

（やろうと思えば勝てるんだが、あれは駄目だしな……）

「ブライ、おまえも休め」

少し反論しようと思ったが、やはり体が言うことを聞かないらしくソロもその場に座った。

「あの女は？」

「ミソラちゃんには逃げてもらったよ。なんとか説得して」

「そうか……」

正直この三人の中で勝てる奴はスバルしかいない。つまり、一人で戦うということだ。勝てるとは思えない。けれど勝たなければいけ

ない。

『ほぉ……計画ではあのまま死ぬはずだったのですがね』

レーヴァテインは少し感心したようにいった。けれど、それは別に凄いと思ったわけではない。ただ殺すべき敵が自分から戻ってきただけなのだ。

「僕は君に勝つよ、絶対に」

『無理ですね。あなたはまだ獣化（ビーストアウト）を完全に操れていない』

それはそうだ。スバルはついさっき制御できるようになったのだ。体と心は疲れ果てていて、気を抜けばまた飲み込まれてしまうだろう。

「無理でも、やるしかないんだよ」

今回のことで実感した。自分がヒーローだと、その重荷がどれだけ重いのかを。だから、負けられない。たとえどんなに避難されても、それは変わらない。

『ならば……さっさと終わらせましょう』

その瞬間、周りが爆発した。慌てて後ろに下がるが、後ろにはもうレーヴァテインがいた。ただ、何も言わずに杖を振る。それだけで、スバルの体は吹っ飛んだ。

（……まあ、当然だろうな）

キリュウは冷静にそう考えていた。

人間というのは、無意識のうちに体に制限（リミッター）をつけている。けれど、人間という枠を超えたさっきまでのスバルはそんなこと関係なく動けた。攻撃などは本能的に回避していたのだ。

けれど、今はほぼ押さえ込んでしまっている。このことからいえるのは、さっきのように莫大な力は出せないということ。つまり、今のままでは勝てない。

「打つ手無し、か」

やはり自分が出るべきか、それとも呼ぶべきか。

『いまさら迷うな。ここまで来たのなら、ちゃんと予定通り行くぞ』

「分かったよ、ったく……」

そんなとき、キリュウのハンターが鳴った

「もしもし？」

《ああ、キリュウ》

「どうした？」

《ちょっとヤバイ状況になった》

その言葉に眉を細める。

「大丈夫なのか？」

《ああ、ちょうど今結構痛い攻撃やられるところだよ》

その瞬間、遠くから爆音が聞こえてくる。隣町からだろうか、黒い何かが見える。

《ケホケホ……まあ、なんとかするからそっちもどうにかしてね？》

「……分かった」

そういって電話を切った。死ぬとは思えないが、さすがにヤバイだろう。そして、キリュウもある人に電話をかけた。

「もしもし？　そう、俺だよ。悪いけど……いまさら言うなって？　そんなことというな。とにかくだ、俺じゃないほう助けてやってくれ。そう、ゲイボルグだ。頼むぞ……無事でいろよ」

『これでなんとかなるか』

「そうだといいけどな」

「ぐはっ！」

その言葉と共にスバルの体がくの字に曲がる。そして横っ飛びに吹っ飛ぶ。

『なんでそこまでできるのですか？　私の仕事を増やさないで欲しいのですが』

もう杖を振るしかしないレーヴァテイン。その理由はもう死にいくスバルなどに力を使いたくないからだ。

「どうすれば……」

ウォーロックは口を開けることは出来ないでいた。ウォーロックのほうが体力は先に失っているのだろう。いま電波変換が維持できているのが奇跡なのだ。

そんなとき、キリュウと同じくスバルにも電話がかかる。

《……星河スバルか？》

「ッ！　その声！」

（キング！）

スバルはあのときからキングとは会っていない。正直まだ信用できるとは言いがたい。

《今から言うことを実行して欲しい》

「……実行？」

何をしろというのだろう。不安という二文字が頭をよぎる。

《簡単だ、今からあるデータを送る。それを実行してくれ》

「……」

まだ信じられない。スバルはまだなぜ獣化（ビーストアウト）が起こったか分からないでいる。だから、信用できない。

《……実行するかしないかは君次第だ。だけどせめていわせてくれ、帰って来い》

『もう待てません、私はのんきではないので』

空気が動いている。それはスバルに分かった。蜃気楼か何かの類なのか。けれど次に何か攻撃を仕掛けてくるのは分かっている。

そして、ハンターにデータが届いた。それと少し遅れて、爆発が起きる。

「……究極獣化（ファイナビースト）」

そして、漆黒の閃光がその場を照らした。

第１１０話　獣化（後書き）

キタ――――――！

今作最強クラスの変身！　究極獣化（ファイナビースト）

やっと書けるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！　これをメッチャ書きたかった！

あってはいけない変身ですが、どうぞよろしく！

では、感想待ってます！

ってか誰かほかの人とかぶってないかな……

それとモンハン遅れます

そして明日勉強会だということ忘れてた！　なので予定が丸々変更です、スイマセン。

第１１１話　究極獣化

「ブラックファルザー！」

『究極獣化（ファイナビースト）？』

そう、レーヴァテインは口に出した。

スバルの体の形は獣化（ビーストアウト）のファルザーに近い。けれど根本的に違っていた。まず色だ。赤だったいろは漆黒に変わっている。

そしてなにより翼だったはずのものがバーニアに変わっていた。

それは鳥といっていいのか分からない

『それが新たなる力ですか？』

そうなのだろう。けれど、不思議と力が溢れてくる感じがしない。

『やはりあなたを本気で潰すしかないようですね』

言うが早いか、レーヴァテインが動いた。スバルの目の前まで一瞬でだ。反射的に裏拳気味に腕が動いた。ただ、べつに攻撃しようとしたわけではない。

けれど、バキッという音と共にレーヴァテインは吹っ飛んだ。

『がはっ』

近くの建物を貫通し、そして地面にめり込む。

『……なんですか、今の』

ユラリと立ち上がるレーヴァテイン。そこに追撃を仕掛けるべくスバルは動いた。

音速だ。スバルの速度は音速を超えていた。バーニアから出るエネルギーにより圧倒的な速度を出している。もはや戦闘機だ。

『ちっ！』

体勢を立て直すべく避けようとするが、避けた直後腹に蹴りを入れられる。さらにそこからの派生で顔面に回し蹴りを喰らって数十メートル後方に飛んでいく。

「終わった……？」

『フレイムタワー』

スバルの真下から火柱がたった。それはスバルに直撃する。

『終わりと思ってはいけませんよ。死体を確かめてから勝ったと思いなさい』

たった二発の蹴りしか喰らってないのだ。物凄い威力の蹴りだが、それでもまだ生きていられる。

「くっ……」

もう体が限界を軽く超えていた。そしてあと一回攻撃できるか出来

ないかだ。

『次で決めますか……いいでしょう』

「……いくよ」

スバルの右手に極小さなブラックホールが形成される。それにたいしてレーヴァテインは杖を振るう。

突如、天空に赤き龍が形成される。

『ボルケーノドラゴン！』

『終わりだ、ブラックサン』

ゲイボルグの右腕に黒く大きく、それでいて形状が不安定な球体が形成される。

（あの技は！　本当にアレだけはヤバイ……！）

『さらばだ、名も無き電波体よ』

黒き太陽が、少年に向かって飛んでいく。そして、それが着弾した。

『……終わったか』

「誰が？」

『ッ！？』

少年は無傷だった。目の前の邪魔者により。

「ホーリーレイン」

そのとたん、空から光の雨が降り注いだ。それも光速で。当然避けきれる訳がなく、ゲイボルグは光の雨を直撃してしまう。

「大丈夫だった？」

「君か、なんとかね」

「それなら良かった。私が来た甲斐があった」

彼女はそういって笑った。長い金髪が風で少し揺れている。

『くそ……増援か』

「そんな感じだよ。あなたも二人はきついんじゃない？」

『なら――――』

「レーヴァテインは多分ロックマンに負ける。だったらあなたがロックマンを倒さなきゃいけなくなるんじゃない？　それで、『計画』は大丈夫なの？」

その言葉にゲイボルグは歯軋りする。どこで計画が漏れたんだと、そしてコイツらは誰なんだと、けれど答えは見つからない。

『……ここは退かせて貰う』

そういってゲイボルグは周波数変換で移動した。

「ふぅ～、助かりました」

「どうも♪　私の能力の売りは【絶対防御】だからね」

そういって彼女は楽しそうに言った。彼女の防御力はたとえゲイボルグだろうが防いでしまう、そんな安心感を持たせてくれる。

「あっちも終わってればいいんだけどな～……」

ゲイボルグとの戦いで周辺は瓦礫の山だ。といってもここからＴＫシティからはそう遠くない。なのですぐにサテラポリスも駆けつけられるだろう。

「まあ、それはロックマンの活躍次第じゃない？」

スバルはブラックホールを投げつける。そしてそれはレーヴァテインを包み込んだ。そこでブラックホールの周りに黒い羽根が出現する。目標は、レーヴァテイン。

「ＥＦＢ（エグゼフォースビックバン）　ブラックフェザーギャラクシー！」

羽根はブラックホールに突っ込んでいく。そのせいでわずかな穴が生じるが、すぐに塞がる。

そしてスバルは、右手に大剣をもってブラックホールに音速で突っ込む。けれど、まだレーヴァテインの龍は健在だ。こちらもスバルにむかって突っ込んでくる。

避けたらスバルが、当たったらレーヴァテインが勝ちだ。

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

ほぼ真正面からスバルと不死鳥は突っ込んでいた。龍の翼は二枚あわせて二十メートル。もう、避けられない。

だから、スバルは龍に突っ込んだ。迷わず、ただ真っ直ぐに。

そして、スバルが龍を貫いた。そしてブラックホールにむかって剣を真横に振る。

後ろから聞こえるのは、爆発音だけだった

第１１１話　究極獣化（後書き）

なんだかんだで戦闘描写少ないという。

まあ、つぎがあるからかんべんしてくだせえ……

といっても究極獣化活躍するかは決まっていませんがね、ハイ。

カイ外伝も要チェックです。案外関係ありますからね。地味に。

次話に重大な事実が！　といってもこれはまだ意味の無い物ですがね

そしてあのサクサク刑事が『ガイア』を暴くぜ！ハッハー！

といってもある一部分だけだが。

スバルの変身の力関係

スタイルチェンジ＜ソウルユニゾン＜クロスシステム＜カオスユニゾン　究極変身　獣化＜究極獣化

って感じです

では

第１１２話　伝言（前書き）

なんかタイトル前にもあった気が……あったら教えてください

第１１２話　伝言

『……あなたが、あの方が認めた者ですか』

レーヴァテインは静かにそういった。

『ウィンドに、伝えてくれませんか？　「あなたは悪くないと」』

「……『ガイア』って何なの？」

『それは、ゲイボルグに聞けば分かりますよ……さようなら』

そしてレーヴァテインは、空に消えていった。スバルもようやく電波変換を解いて、その場に座り込んだ。もう、周辺を包んでいたドームは跡形も無く無くなっている

「こんなことをして、何が欲しいの？」

「そっちも終わったか？　……ゲイボルグが退いたか。オッケー、じゃあもう帰っていいぞ。多分次はピンポイントでスバルを狙ってくる。だから被害は小さいはずだ。そう、おまえらは何かあったときに待機しておけ。……最後（ラスト）は近いからな。じゃあな」

キリュウは電話を切った。彼の近くにはソロが倒れている。死んでいるわけが無いので寝ているか何かだろう。

「レーヴァテインは終わったか……そうだろロックマン」

「倒したよ、なんとかね」

歩み寄ってきたスバルは適当に答える。

「シルバー・ウィンド、『ガイア』って何なの？」

『「ガイア」ってのは、「操り人形」のことさ』

「『操り人形』？」

『そうだよ。救われない奴のことさ』

どういうこと、と首を傾げるスバル。けれど、すぐに伝えるべきことを思い出す。

「レーヴァテインが最後に、『あなたは悪くない』って言ってたよ」

『……キリュウ、帰るぞ』

「分かった」

そういってキリュウはスバルに背を向けて帰ろうとする。

「最後に聞かせてくれない？　君は味方と思っていいの？」

「そんなの決まってるだろ――――？」

「いいわけねえよ」

《全世界の皆さん、はじめまして。『ガイア』のリーダーです。今日はなぜこんな強制的に回線を支配（ジャック）したかというと、ほかでもありません。ロックマンのことです。みなさんも分かっている通り、あの非道な人間は、我々人類にとって大きな脅威です》

《このままでは、世界が奴に壊されてしまいます。けれどご安心下さい。我々『ガイア』が、ロックマンを倒して見せます。それを指示しているサテラポリスニホン支部も同じです。けれど、我々は無駄に人殺しなどしたくない。なので、ロックマンを倒し、サテラポリスに無条件降伏を迫ります。そして、世界を平和にします》

《三日後、僕を除けば『ガイア』最強の電波体がロックマンと戦います。場所は――――》

『あいつのことだ、因縁の場所でこっちを倒す気だ』

「どこだよ、そこ」

『たしか、そこは海に面していたところだから、ここだ』

そういってウィンドは地図を指差す。

「……ここは」

『そうだ、より人が集まるところを閉鎖することによって大々的に世界に知らせるのにも適している』

キリュウは軽く頷く。そこは、歴史的にも有名な場所、そしてニホンの大都市。

≪『ヨーハマシティ……！』≫

第１１２話　伝言（後書き）

ヨ・コ・ハ・マ！　イェ～イ！　中華街！　イェ～イ！

なんかズレているし（笑）

あと報告です。次章入れてあと二章、（一章を二つに分けたので）なのですが、今しか要望受け付けられません（本編は）！なので下さい！

次章、しょっぱなから過去編です。章の名前は

大地の守護神編です。

お楽しみに！

過去編？　ある男？（前書き）

今回は残酷な描写があります（かかれてはいません、想像しちゃえば駄目です）

そういうのが苦手な方はご遠慮下さい。一応想像通りのはずです。

過去編？　ある男？

今日はスピカモールで家族と買い物だ。父さんは久しぶりに会社

が休みで、僕ははしゃいでいた。そんな僕を、母さんは微笑ましく見ていた。

「父さん、ゲーム買ってよ！」

「ん？　ゲームはまた今度な。おまえゲームに熱中しちゃうから」

「いいじゃん買ってくれても！」

「こらこら、あんまり大声だしちゃ駄目よ？」

その言葉で僕は黙った。久しぶりの家族での買い物だから買ってくれてもいいじゃないか。

「買ってやりたいんだけど、ごめんな」

そういって父さんは僕の髪をクシャクシャにした。悪い気はしなかった。そんな時、スピカモールの有線放送で暴走ウィザードのことをニュースで放送していた。

《速報です！　つい三十分前、コダマ小学校で暴走ウィザードが出現しました！　すぐにデリートされらしいですが、この数週間このような事件が多発しております！　民間人のみなさんは注意を怠らないようにしてください》

「……このごろ多いな、こういう事件」

「そうね、恐いわぁ」

父さんと母さんはそう不安げに話していた。それもそうだろう、誰

もが持っているウィザードが暴走しているのだからしょうがないのだろう。

そんな僕はというと、実感が湧かないでいる。簡単例を上げると、「○○で△△さんがおなくなりになりました」といわれても、知人でもない人が死んでも実感が湧かないのと同じである。

「おまえももう少しこういうことに関心を持ってみなさい」

と前に父さんに言われたことがある。が、やはり関心などあまりない。

「お、あそこのお店おいしそうじゃないか？」

「そうね、行ってみましょうか」

「そうだな、もうお昼になることだし」

僕はその言葉に頷いた。ちょうど小原も空いてきた頃だからだ。

「このスパゲッティおいしいな！」

「そうなの？　このピザのほうがおいしいよ！」

そういって僕は父さんに抗議をする。別にどうってことのない日常だ。

「お母さんもそう思うでしょ？」

「私は……スパゲッティかな？」

「えぇ～、それは無いよ」

二対一で僕の負けだ、けれどまだ抗議をする。まったく聞き分けの悪い子供だ。

「ほら、父さんがあってる」

「父さんは味音痴だからそう思うんだよ」

「なっ！」

結構ショックだったらしく、父さんは固まってしまった。

「そんなことしてたらスパゲッティが冷めちゃうわよお父さん」

「いいんだ、どうせ俺は……」

案外父さんは傷つきやすい性格だったりしちゃう。といっても僕の言葉だけだが。

「もう、冗談だよ父さん」

「そうだよな！　そうだよな！」

立ち直るのも速かったりする。調子が狂って仕方が無い。と、言ったらまた父さんは嘆いてしまうだろう。

「速く食べなさいね。時間は有効に使いたいから」

家族での休みは次はもう来年かもしれない。だから、一分一秒をあまり母さんは無駄にしたくないようだ。

「分かったよ、じゃあ早く――――」

途端に、どこからか爆発が起きた。悲鳴が辺りを埋め尽くし、逃げ惑う人々でスピカモールはいっぱいになった。

「な、なにがあったの？」

「……暴走ウィザードらしいな。とにかく逃げよう！」

僕達も店から逃げ出した――――

けれど

『お、こんなところにいるじゃねえか』

聞こえてきたのは何か楽しそうな声、見るとそこにはウィザードがいた。赤く、両手には日本刀のようなものを装備している。

『餌がわざわざこんなところにいるとはラッキーだな、今日は』

まだ店から逃げられていない僕達は出口を塞がれた。ウィザードの刀から炎が噴き出す。まるで、怒りのような炎を。

直感的に三人はこれが暴走ウィザードだと思った。なにせ、普通とは違っていた。口振る舞い、手にもつ刀、そしてなにより目が。

『さあ、死んでもらうぜ？』

そういって、ウィザードは凶刃を振るった。けれど、僕の視界を遮るように母さんと父さんは前に出た。別に戦おうとしたわけではない。そう、理解してしまった。

迫る凶刃など見ずに、母さんは口だけでこういった。

「生きてね……」

そして

『じゃあな、坊主』

あれはなぜかどこかに消えていった。

父さんと母さんが倒れてまもなく、青い少年はスピカモールに現れた。

「あ、あぁ……」

助けが来た、そう思っていた。けれど、それは何かと戦闘を始めていた。多分さっきの暴走ウィザードだろう。

弾丸が何回も交差した後、ドサッと倒れる音が聞こえた。見ると、青い少年はまだ立っている。少々傷ついてはいるが、それでも平然と立っていた。

これで助けてもらえる。そう思って口を開けた。

「助けて！　僕の父さんと母さんを助けて！」

声になっていない叫びは、空気すら響かない。けれど、それを理解は出来なかった。必死すぎていた。

「助けてよ！　ヒーローなんだろ！？」

誰もその声は聞こえない。誰も聞けない。誰も、誰も。そして、少年はどこかに消えた。会話からしてオグダマスタジオに行ったのだろう。

「……クソオオオオオオオオオオオ！」

声になった声も、誰にも聞こえず消えていった。

過去編？　ある男？

数週間後、あれから幾分か月日がたった。メテオGの事件も終わり、世界は平和になった。

僕は、あのとき声が出ていなかったことを自覚していた。だから、あの青い少年を責める様なことはもうなしにした。彼が悪いのではない、ウィザード自身も好きであんなったのではない。だから、もう恨みっこは無しにした。

親戚からは、一緒に暮らそうと言われたが、僕は一人今までの家にとどまった。お金はいくらかもらえているので生活に困ることも無い。一応自由に暮らしていた。

「疲れた……」

今は四月、今日は始業式だった。堅苦しく校長の話を聞くのは疲れる。ドカッとソファーに座り、テレビの電源を入れる。メテオGでの再放送がやっている。

目をそむけようと思ったが、見ることにした。両親の死を無駄にしたくは無かった。

「やっぱりロックマンって凄いな……」

出る言葉はそれだけだった。響ミソラのライブでのハプニングや、シーサーアイランドでのウィザード暴走、その他もろもろで解決していた。ニュースキャスターがどれだけロックマンが凄いかを説明している。

「でも、やっぱり救って欲しかったかな……」

あの時点で生きているかは分からなかったが、それでも病院に運んで欲しかった。それが、心の残りだ。

「駄目だ駄目、もう考えちゃ駄目だ」

どうしても悪い方向に流れてしまう。自己嫌悪に陥りながらテレビの電源を切ろうとする。

《……ロックマンはこの数多の事件を解決してきましたが、これだけの事件が起きて彼が関わった事件では、死者は『0』とのことです。やはり、ロックマンは――――》

「……は？」

何を寝ぼけたことを言っているのだろう。現に遺族はここにいる。

まさか、テレビ局が間違ったのか？　そう思ってオグダマスタジオに電話をかける。

《そんなことはありません、だって私達はサテラポリスから情報を貰ったのですから》

その一点張りを通された。おかしい、何かがおかしい。しょうがなくサテラポリスに電話をかけようとした。

けれど、もしこれがわざとであったら？　もし何かのメリットを得るためにわざと嘘の情報を流したのなら？　そしてそれを実行で

きるのは上層部。けれどそんなことをしてメリットになる人物はいるのだろうか？

「まさか……」

たしか、あの少年もサテラポリスだったはずだ。では、もし――――

自分の保身のために消したのではないか？　自分の両親の存在を、世界から裏で消したのではないか？

「あのヤロオオオオオオオォォォォォォォ！」

感情が爆発した。全てが、憎しみに染まっていく。結局、ヒーローなんていないのだ。この世界に、救世主などいないのだ。だったら

「僕がなってやる！　あんな自分のことだけ考えてる奴じゃなく、誰にでも手を差し伸べる人に！」

それが、両親の願いでもあるはずだから。絶対に『死』を無駄にしたくなかった。

「その前に、まず殺してやる！」

こいつを殺して、のし上ってやる。絶対に、絶対に。世界を変えてやる。

「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！」

憎しみは憎しみを呼び、それは人をひきつける。そしてそれは、大きな輪となって、世界に混沌を与える

第113話　動き

コンコン、とアパートのドアが鳴った。ここは今シドウが一時的に住んでいる部屋である。部屋のあちこちにはうまい棒の袋とカスが散らばっていることから、彼を知っている人ならまよわず彼の名前を出すだろう。

「誰だ？」

この部屋に用事があるのはほとんどいない。知人にもここに住んでいるとは言ってないことから、それは決定的だろう。

『私がでましょうか？』

「いや、俺が出る」

普通に考えて出るのは人間だろう、それが礼儀でもある。無闇にウィザードを出さないほうがいい。ゆっくりとシドウは立ち上がってドアに向かっていく。

「どちらさまですか？」

ドアを開けて聞いてみる。見てみると、そこには少年がいた。スバルと同じ小学六年生位の身長。髪は黒に限りなく近い紫、骸骨が描かれている服。どこかの不良に見える。

「あなたサテラポリスのシドウさんですか？」

敬語で喋ったのも驚きだが、なにより自分の名前を知っていたこと

だ。

「そうですが……何かよう？」

自分の名前を知っているのはおかしい。それもこんな少年が。

「いや、あなたに用がありましてね」

少年は笑ってそういった。その笑顔が、恐い。

「どんな用ですか？」

「簡単なことですよ、本当に」

緊迫する空気の中で、少年はこう告げた。

「――――あんたが欲しい『ガイア』の情報を教えてやるよ」

酷く小さく、酷く低い声、そして目が変わった。

「ッ！　何故君が知っている！」

声自体は小さいが、明らかに驚いている。そんなシドウに少年は言った。

「話は中でします。だから入らせてください」

「……君の名前は？」

「僕の名前は、覇神（はがみ）　黒影（くろかげ）。『ガイア』の正体を握る者です」

「スバルちゃん大丈夫なの？」

また病室に送り込まれたスバルのもとへヨイリーは見舞いに来ていた。ミソラはというと、スバルと顔を合わせられないと訳の分からないことをいって病室にいない。何があったのだろう。顔を赤くしていたのだからきっと何かあったのは間違いない。

「はい、なんとか」

そういうスバルだが、体はボロボロだった。奇跡的に骨は折れていないものの、精神と肉体共に戦える状況ではない。

「……行くの？　ヨーハマシティ」

三日後、『ガイア』はそこでスバルと戦うと言っていた。何故そこを選んだのか、分からないが、何か大きな意味があるのには間違いない。もしかしたら罠を仕掛けている可能性も有るのだ。

「行きますよ、僕は」

けれど、そんな状況でも彼は迷わずそういった。

「僕、今回のことで分かったんですよ。僕がしっかりしてなきゃいけないって。僕が世界を守るんだって、自覚できたんです」

いや、自覚させてしまったのだ。もし、自分がしっかりしていれば自覚などしなかっただろう。自覚さえしなければ、彼は絶対に闘い闘いには行かないだろう。

彼はもう止まらないだろう。たとえ彼の家族がなんと言おうと。

「……それなら、言ってきなさい。あなたの家族に」

「……分かりました」

「呼んで来るわね。さすがに今動くのはまずいわ」

あかねと大悟はサテラポリスに来ている。理由は、家に居たら他の住民が危害を加えてくる可能性があるからだ。なので、安全なサテラポリスに来たというわけだ。

病室のドアを開け、ヨイリーは大悟たちがいる部屋に向かった。

部屋自体は大きく、寝室は分かれている。二人は居間にいた。

「スバルちゃんから、お話があるそうです」

「……何のですか？」

「三日後の戦いに、行くか行かないかで」

その言葉を聞いて、二人は顔を苦くした。当然だが、これは事実だ。受け入れてもらうしかない。二人はもう答えは分かっていると思う。けれど、それを本人の口から言われるのが恐いのだ、きっと。

「病室で待っています。だから――――」

「分かりました。行くぞ、あかね」

大悟の言葉で、二人は立ち上がった。そして、歩いていく。愛すべき息子が待つ病室に。

「『ガイア』、それは何のために作られたと思っていますか？」

「何って……そりゃあれだろ、戦うためだろ」

「では、何のために戦う必要があるんですか？」

「それは――――」

分からない。『ガイア』の正体はもう暁は分かっていた。覇神から言われる前から。けれど、理由が思いつかない。

「簡単です、人を守るためです」

「人を守る、か」

「だから大勢と戦うコツを知っています。ゲイボルグとウィンド以外は」

「なんでその二体は違うんだ？」

暁はうまい棒に手を伸ばしながらそういう。覇神はそれを気にせずに続ける。

「もともと、その二体は他の四体とは違って攻撃するために作られました」

「攻撃？　それはどういうことでだ？」

「守るというのは攻めてくる側がいて初めてできることです。その攻める側を殲滅するために作られたのがウィンドとゲイボルグってわけです。他の四体は足止めとかそんな感じですね」

足止めであの実力か、と暁は思った。あれだけの実力でだ。ゲイボルグの本気とはどんなものなのか。想像するだけで恐い。

「で、あなたには最終決戦でロックマン達と合流してもらいます」

「……それは本気か？」

もとはといえば暁はキングが信用できなくて脱退したのだ。まだ戻るつもりはない。

「キングは今は確実に裏切りません。裏切ればロックマンが死にます」

「それが計算通りだったら？　『ガイア』と手を組んだりしたら？」

「それはないです、絶対に」

覇神は自信に満ち溢れた声でそういった。

「あいつは、そんな奴ではないはずです。計画通りなら」

「……君と『ガイア』の計画はまだ聞いてなかったね」

そう、まだ聞いてないのだ、肝心なところを。

「聞いたら引き返せませんよ？　そしたらあなたには合流してもらいます」

「分かった、約束しよう」

「では、まず――」

第113話　動き（後書き）

感想待ってます

第１１４話　親子（前書き）

今回駄文ですね。三日溜めといてこれって……

第１１４話　親子

「……で、どうするんだスバル」

最初に口を開いたのは大悟だった。彼の眼は、まっすぐスバルに向けられている。あかねも心配な表情でスバルを見ていた。

スバルは少し迷っていた。ここで嘘を言うべきか、本当に話すべきか。どちらが両親を悲しませないで済むか。が、どちらでも変わりはなかった。どちらも、悲しませてしまうのだ。だから、本当のことを話すことにした。

「行くよ、三日後」

「……本当にそれでいいのか？」

そういわれると決意が揺らいでしまう。多分、家族以外だったら揺らがなかっただろう。けれど、今は家族なのだ。真剣に心配されてしまっているのだ。

「行かなくてもいいのよ。別にあなたが背負わなければいけないことじゃないんだから」

別にスバルが世界を救わなければいけないというルールはない。キリュウやソロが救ったって別に問題なはない。けれどスバルは三日後に向かうという。責任感からなのか、その言葉には退く気がしない。

「でも、僕が行かなくちゃいけないんだ……それが僕の役目だから」

沈黙がその場を支配した。大悟とあかねはスバルを説得しようとしている。いつもの彼らなら、行かせるだろう。けれど、今回は大きな怪我を負ってしまっている。その状況で行くなんて「勇気」ではなく「無謀」だ。無駄死にをするようなものだ。

「分かった、行きなさい」

「ッ！　大悟さん！」

その言葉に、なんとか食い下がろうとするあかね。愛する息子を、死地に行かせたないのだろう。

「スバルの人生はスバルが決めるべきだろう？　それに、親が子供を信用しないでどうする」

「そうだけど……」

「スバルは前も戻ってきただろう？　だから、だいじょうぶだ」

まだ心配そうな目でスバルを見ているが、やがてあかねも納得した。

「だけど約束して。……必ず帰ってきて」

「うん、もちろんだよ」

月が町を照らす中、彼らは静かに約束した。

「う～ん……」

カイは悩んでいた。目の前にある将棋盤を見て悩んでいた。それを挟むように座っているゲイルはニヤニヤ笑っている。

『どうした？　降参か？』

「……こうだ」

パチン、という軽快な音を鳴らして駒が動いた。対してゲイルは即座にそれに応じて駒を動かす。

『王手』

「ぐぐぐ……」

ゲイルは何故か強い。というのもカイの癖を見抜いているからだ。それをカイは知らないでいるので、教えて三日もしたらカイの連敗

伝説が確立してしまったのだ。

『ウィザード相手に将棋という心理戦で勝てるとでも思っているのかね？　全くどこをどうやって育てばそうなるんだか。全く親の顔を見てみたい』

「よし、今から探しに行って来い。その内におまえの駒を玉将だけにして負かしてやるよ」

そんな冗談の言い合いをしながらカイは次の一手を考えている。

『あと三十秒～』

カイたちは本格的に将棋をやるために一手一手に時間制限を設けいている。そうすることで緊張感を出し、お互いにいい勝負をしようぜ的な感じだ。が、もうゲイルの一方的な勝負なのだが。

「……ほい」

もうテキトーだ。ヤケクソだ。それを見てゲイルはまた駒を動かす。

『王手～』

「……」

将棋盤を良く見てみる。王将は逃げ場を失い白旗を立てているように見える。そして他の駒は投降した。

「参りました……」

『ってことでコンビニへＧＯ！』

くそ～、といいながら買い物袋と財布を持ってコンビニに向かう。敗者がお菓子を買ってくるという罰ゲームつきで。カイは悔しさを抑えながらドアを開けた。

残されたゲイルはただ静かに呟いた。

『……さあ、あと三日だ。あとはぶっ潰すだけか』

「次はようやくゲイボルグだね」

『レーヴァテインがやられたのは予想外だったがな』

「そうだね、連中もあんなものを隠し持ってるとは思っていなかったし」

男はそういうが、その声に焦りなどなかった。

「ゲイボルグが負けたとしてもこっちには僕達がいる。だから、大丈夫でしょ」

『そうだが――――』

「できればゲイボルグは負けて欲しいな」

『……なんでだ？』

そう聞くヘイトに男は笑ってこう答えた。

「だって、ロックマンをこの手で殺したいだろう？」

『……俺は別にだな、あいつじゃ駄目なんだよ』

「そうだろうね。でも、僕はやらせてもらうよ。あいつは僕の手で殺す」

それが、彼の両親が望んでいるはずだから。そう彼が思っているからだ。だから、自分の手で仇を取りたい。彼を支えていた全てを利用して。

「三日後、楽しみにしようよ。ねえ、ヘイト？」

——あと三日

第１１４話　親子（後書き）

感想メッチャお待ちしております

ちなみに、三つの場面がありましたが、時間帯はバラバラです

第１１５話　ヒント（前書き）

題名の通りヒント盛りだくさんです

第115話　ヒント

ヨーハマシティは今日から民間人は避難していた。避難と言っても、各々が勝手に移動しただけだ。サテラポリスはスバルを匿っているので――サテラポリスはどんな少年でも殺してはいけないと主張している――全く役に立たない状況だ。

街の周りではテレビ局がワイワイがやがや騒いでいる。どうであと二日後のことを放送しているのだろう。

そんな中、ウェーブロードに彼は立っていた。鈍く光る銀色に白銀の刀を持つ者、シルバー・ウィンド。

『あと二日か……』

思えば、ここで全てが始まった。『ガイア』がこのような利用をされることが、ここから。全ての歯車が回りだしたのだ。そして、『ガイア』はここで終わるのだ。

『長かったのかな……？』

自分にそんな実感はない。なにせそんな記憶がないのだから。ただ、結論として自分は永く生きている。それになんら変わりはない。

『ゲイボルグ、済まないな。せめて、ここで眠ってくれよ』

まだ、世間的には始まってない戦い。けれど、それは案外前から始まっていたのだ。そう、前から。

『ヘイト、おまえなんかがいるからなんだよな。だから、こんなこ

とになったんだよな』

ここにはいない憎しみの対象。それは相手の力を上げることを意味するが、気にせず話す。

『おまえがどこで生まれたか、何で生まれたかは知らないが、これだけは言えるな。――――――』

風が吹き、彼の声を消した。遠くにいるからヘイトには届かない。けれど、彼には届く。

『さあ、おまえが始めた茶番もあと四分の一だ。精々首でも洗って待っとけ』

そういって、彼は消えた。風のように、どこかに。

「おはようございま～す」

覇神は眠そうな目をこすりながらそういった。覇神は暁の部屋に泊まっていたのだ。理由は、家に帰るのが面倒臭いだとか。

「おはよう」

『おはようございます』

暁とアシッドも返事をする。暁たちはもう仕事に取り掛かっている。

「どうです？　納得はもうしました？」

「……でもいまだに信じられないよ」

「ですよね～、こっちも始め知ったときはビックリしましたもん」

「君はいつ知ったんだ？」

そう聞くと、覇神は首をかしげた。

「たしか……ＦＭ星人がこっちに来たときですかね」

「そ、そんなに前から！？」

『ガイア』が関与する事件はつい最近だ。それを一年前から知っているとはいくらなんでもおかしすぎる。

『あなた、何者なんですか？　まさか「ガイア」が一年前から活動しているなんて――――』

「ちょっと待て」

アシッドの言葉を暁が遮った。

「まさか、奴らの計画はもっと前から？」

「そういうことですね、ってかそうです」

『では、何故そんなことを？』

理由がない。わざわざ計画を一年以上も前から計画する意味が。この計画は安易に考え付く物だ（そのおかげで逆に分からなかったのだが）。それを、ずっと前から考えて必要があったのだろうか？

それに、この一年で三回も地球に危機が訪れているのだ。それなのに何故計画など練ろうとしたのだろうか。

「簡単なことですよ――――」

「この『ガイア』と戦う前にロックマンは絶対に死なないって分かっていたからです」

そんなことが、ありえるのだろうか？　もしかしたら三回のうちに

地球が滅びる可能性も否定できないはずだ。それなのに、なんで『未来』のことが分かるのだ？

「なぜかって思われるかもしれませんが、それも簡単です。そうなると運命が決まっているからです」

「そんなことなんで分かる？　アメロッパでも完成されていない技術がニホンにあるわけないんだから」

「分かっているじゃないですか。だったらもう答えは分かるはずです」

余計に謎が増えたという感じだ。けれどアシッドは納得したようだ。

『……運命が決まっているということならば、それは星河スバルが確実に死なないという意味もあるのでは？』

そのアシッドの言葉に、覇神は笑ってこういった。

「よく分かってるじゃないですか。だからそれを見守るのが、僕達の仕事でしょ？」

――あと二日

第１１５話　ヒント（後書き）

感想待ってます

第１１６話　前日

（結局、誤算がたくさんあった。スバル君のことや、ウィンドのこと）

（けど、これで良かったんだ）

（これで、全てが終結する）

（そうだろう？　ゲイボルグ）

「じゃ、お邪魔しました」

そういって覇神は外に出た。暁に伝えることは伝えたし、ここにい

る意味など無くなったからだ。

「気をつけて帰れよ」

「もちろんです。では」

そして、覇神は暁に背を向けてアパートから去っていった。

「……いるんだろう？」

そういうと、覇神の黒いハンターにウィザードが出現する。

『おまえが追い出したんだろう？』

「まあね。きみがいるといろいろ面倒臭いから」

覇神は笑ってそういった。ウィザードのほうがそんなことを気にせず話を続ける。

『なんで急に動いたんだ？　これは計画外だったはずだ』

「……そうなんだけどね～」

元々暁は計画外だった。それをいってしまったら二人を除いて計画外なのだが、それはあくまで今回の話では話さない。

「あの人は信頼できそうだったしね。ま、一応他の人には言わないようには言っておいたし」

『もし言ったりしたら？』

その言葉を聞いて、覇神は軽い口調でこういった。

「だったら、聞いた奴全員重体にすればいいでしょ？」

「スバルちゃん、もう体は大丈夫なの？」

ヨイリーはもう歩けるようになったスバルにそう聞いた。スバルはというともう顔色が良くなっていて、体もほぼ完治していた。

「はい、明日は絶対行けます」

「そう、でも無理だけはしないように」

「みんなに言われてますよ、それ」

笑ってスバルはそう答えた。これなら大丈夫だとヨイリーも心の中で安堵した。

「……あなたには言っておかないといけないかもね」

「なにをですか？」

言うか言わないか、言わないほうがいいのか。言ってどうしろというのか。けれど、言っておいたほうがいいかもしれない。

「それは――――」

「ガイアの正体よ」

——あと一日

第116話　前日（後書き）

ちなみに、暁に覇神が教えたのはガイアの『本質』です。「正体」は教えてません。

ヨイリーが教えたのは、正体です

では、感想待ってます

第１１７話　開幕（前書き）

短いです　キリ悪いし……

第117話　開幕

「……来たか」

キリュウはヨーハマシティのウェーブロードでそう呟いた。誰が来たというのは、スバルのことだ。もっとも、別にキリュウが戦うわけではない。ただの観戦、という感じだ。キリュウにとっては。

『終わりまで手は出すなよ』

「出す気もない。俺らはただ、見届けるだけだろ」

彼らの目的はただゲイボルグの敗北を見届けるだけ。スバルが敗北するところではない。

『あいつには、聞かなきゃいけないことがあるからな』

「俺はどっちでもいいよ。ってかおまえだけ来ても良かったんだぜ？」

『ロックマンが負けたらどうするんだ？』

「そん時は……そん時だろ」

「……ゲイボルグ」

スバルはその名前を呼んだ。漆黒の槍、漆黒の鎧を身に着けるものに。

『ここが、「ガイア」最後の戦いの場だ』

その言葉と共に虹色のドームがヨーハマシティを包む。

「……これは結界とか言う物じゃないんでしょ」

『何を言っている？』

『しらばっくれてんじゃねえ！　これが何なのか俺達は分かってんだぞ！』

『それが分かっているからと言って何になる？　ただの保険に過ぎないものに』

このドームは、いわば戦闘可能な場所だ。ここより外に出れば民間人がいるということになる。つまり、外に行けば死人が出る可能性もあるのだ。

「なんで君達は戦うの？　なんで今更戦うの？」

『あの方の命令だからだ』

「……言う気はないよね？」

聞くのは倒してからだ。相手も話す気が無いのだから。

「最後に聞かせて。君のリーダーはそこまでするような人なの？」

『当然だろう？　あの方は偉大な方だ』

その答えで充分だと、スバルはただ呟く。

「獣化（ビーストアウト）　グレイガ！」

体は、獣のような姿になったスバル。それを見て、ゲイボルグは槍を構えるだけだ。

数秒の静寂の末、両者はただ前に飛び出した。そして、衝突する。

第１１８話　信念（前書き）

われながら結構うまくかけた気がします、ハイ

第118話　信念

「ビーストバスター！」

スバルの左腕から緑色の弾丸が超連射される。それに対して、ゲイボルグは盾でなんなく防いだ。

『暗黒の槍（ダークネスランス）！』

一瞬でスバルの懐（ふところ）に入り、槍で体を貫こうとする。それをスバルは横に避けた。けれど、ゲイボルグは槍を横になぎ払った。

「がはっ！」

脇腹を思い切り槍で殴られて、スバルは吹っ飛んだ。脚は地面から離れ、体は建物を何度も破壊しながら進んでいった。

『気を抜くと死ぬぞ』

まるでこれが本気ではないといわんばかりにゲイボルグは言った。それに対してスバルは瓦礫の山を吹き飛ばし立ち上がった。

（まだノイズ率は足りてない、もう少し待たなきゃ……）

勝機があるとしたら究極獣化（ファイナビースト）だ。あれならゲイボルグにも勝てる。けれど、今のままでは勝つのは難しい。どれだけ速くノイズ率を上げるかが、勝敗を決する。

『来ないならこちらから行く！』

そういってゲイボルグは再度スバルに迫る。さっきよりは距離が遠いせいか、スバルもタイミングを計れる。

「グランドブレイク！」

スバルは地面を殴った。地面はゲイボルグの居る位置が隆起し、上に飛ばした。

「空中では身動きが取れない、そこだ！」

スバルもゲイボルグに飛びかかる。だが、ゲイボルグは何故か盾をその場で投げた。空中での唯一の防衛手段を自ら手放したのだ。だが、それが何故かスバルは理解した。

盾は足場を確保するための物だ。それを、ゲイボルグは蹴った。方向はもちろんスバルに向かってだ。上からの攻撃と下からの攻撃では、勢いの関係で上のほうが断然強い。つまり、スバルは不利だ。

『カルテットトランス！』

四撃、それぞれがスバルを狙う。

「ボルケーノスラッシュ！」

両爪が炎を纏い、四撃に対抗するような感じで放たれる。

空気が爆発するような音がして、両者共に後ろにとんだ。ゲイボルグは腹、スバルは肩のアーマーが砕ける。

「スウゥゥゥ……」

立ち上がったスバルは体を弓のように逸らせて、大量の酸素を吸い込む。ゲイボルグは落ちていた盾を構える。が、それも無駄に終わった

「グレイガブレス！」

スバルの口から放たれるのは先ほど桁違いの炎。それは無差別に物を燃やしてしまう。地面の表面は溶け、赤く染まっていた。

『……やったか？』

ウォーロックの疑問は、視界の異常さによって解消された。

『まだ終わってなどいない』

何が以上か、簡単に言うとドス黒いオーラが何かを包んでいたのだ。その目の前にはゲイボルグの盾らしき物が溶けて落ちていた。

『アトル　全てを染める深き闇』

その一言で、オーラは弾け飛んだ。そして、中から出てきたのはゲイボルグ。変わったのは鎧だけではなかった。槍は二メートルもの長さになり、体の周りには先ほどのオーラが纏われていた。

「それが、君の本気？」

『そうだ、これが我の本気だ』

変わったのは、外見だけでもなかった。殺気が違っていた。サテラポリスで戦ったときよりも、ずっと大きい。

『では、続きと行こう』

「ッ！？」

ゲイボルグが消えた。そう思ったときには体が宙に浮いていた。そして、上を見たスバルが見たものは、黒い球体だ。直径一メートルくらいで、それが数個あった。それはとても早く、スバルに向かっていく。

『カオスバースト』

声も上げられないまま、スバルは地面と激突した。

『……この程度か』

返事は返ってこない。確認に死体を確認しようと歩み寄る。が、それは紅き閃光によって阻まれる。

「究極獣化（ファイナビースト）……」

そして、スバルの体が露になる。それは、紅いグレイガだった。違うのは、肩と脚にアーマーが装着されのと、何より空気だ。あの姿になってから空気が変わった。まるで、近づく物全てを粉砕してしまうような、そんな感じだ。

「レッドグレイガ！」

紅き獣はそう吠えた。

『これがおまえの本気か？』

「そうだ！」

二人は見詰め合って、身構える。どちらも一歩も動かず、互いに様子を見るだけだ。それを、スバルは打ち破った。

「……そんなに世界が欲しいの？」

スバルの疑問、それは前々から思っていたことだった。そう、一年前のＦＭ星、ムー、メテオＧ。世界を破壊するだとか、征服するだとか。なぜそのような感情になるのかが、あまり理解できなかった。

『……さあ？』

返ってきたのは曖昧な答え。彼は本当に分からないのだろうか。それとも本当は分かっているのだろうか。

『では逆に質問だ。何故そこまで世界を守ろうとする？』

「……守りたいからだ」

『なに？』

「理由なんて無い、ただ守りたいと思ったから。みんなとの思い出を守りたいと思ったから、それだけだ！」

その答えに、いったいどれだけの人が辿り着けるのだろうか。ゲイ

ボルグは知っている、極少人数だがそういう考えをもっている人に。

『己を信念を貫け、か』

スバルには聞こえない声でそう呟いた。その考えを教えてくれたのは、一人の知人だ。もう、会うことはできないだろう。自分がそう決めたのだから。

「君には負けない！　自分の信念ももてない君に！」

『ならば今一度叩き潰してくれる！』

そして、両者の攻撃で爆音が天高く轟いた。

第１１８話　信念（後書き）

次話で決着、のはず

次話はヤバイっす。本当に

では、感想待ってます

第１１９話　真っ直ぐ

『ナイトメア』

ゲイボルグの一言で、地面から何やら奇妙な黒い物体が湧き出てきた。黒い物体の見た目は、丸く不安定で、それで今にも消えてしまいそうな感じだ。

それが突然、棘に形を変えてスバルの周りを囲む。それに対してスバルは様子を窺うだけ。棘は一斉にスバルに向かって飛んでいく。

バゴン、という音が響き、もうもうと煙が立ちもめる。そして衝撃波が中心部から発生し、煙を吹き飛ばした。

『無傷か……』

スバルの体には一本の棘も刺さっていない。ただ、棘が飛ぶ前と同じ構えなだけだ。

「クリムゾンタワー！」

地面を殴るのと同時に、ゲイボルグに向かって徐々にノイズでできた柱が迫っていく。ただ、直線状の攻撃だ。横に避ければそれで終わりだ。案の定、ゲイボルグが避けても柱は方向を変えない。そう、だから見えなかったのだ。上の攻撃には。

「メテオタワー！」

メテオノイズジェネレーターの上空攻撃。それを気付いたときには、

もう遅かった。上から降る紅い柱は、容赦なくゲイボルグに直撃した。

「……まだか」

ゲイボルグも無傷であった。体に纏われているオーラは防御用なのかそれとも外見だけなのか分からない。だが、攻撃を守られたことだけは事実だ。

それを見てスバルはただ黙って突っ込んだ。ゲイボルグも同じように突っ込む。近距離からの超高速戦の衝撃で、周りの建物は崩れた。が、その瓦礫も衝撃波によって飛ばされていく。

『グレイガブ――――！』

『失われる輝き（ロストシャイン）！』

ゲイボルグの黒き拳が、スバルの腹にめり込む。それは強固なはずの紅い鎧をやすやすと砕き、内臓を圧迫する。吹き飛ぶスバルの体にゲイボルグは追撃をする。

『暗黒の槍（ダークネスランス）！』

だが、スバルも体を動かして急所を外した。本当に咄嗟だった。槍はスバルの脇腹に刺さり、そして今度こそスバルを吹っ飛ばした。

両者の差は歴然だった。万全のはずのスバルが押されていた。その理由は簡単だ。ゲイボルグのリミッターが解除された、いや、したからだろう。そのおかげでゲイボルグは自分の実力をフルに出すことが出来る。それが、この差を生んだのだ。

ぐぐっ、と力を入れてスバルは立ち上がった。ここで負けられない、それが彼を動かしていた。

「くっ……」

彼自身がよく分かっているだろう。どれほどの力の差があるかを。レーヴァテインとは比べものにならない力をゲイボルグが持っていることを。けれど、そんなの関係ない。自分が勝たなければいけないことになんら変わりない。

ゲイボルグはそれを見てもう一度スバルに迫っていく、高速で。

『サウザントランス！』

「ダンシングクロー！」

スバルもゲイボルグに応じる。乱舞と乱舞がぶつかり、相殺し、そして敵を傷つける。だが、それでもゲイボルグの鎧は破壊されない。

「ぐはっ！」

スバルの体はゲイボルグの攻撃のよってまたも吹っ飛ばされた。建物を貫通し、数十メートルの地点でようやく止まる。

『骨身にしみただろ？　勝てないと』

あまりにも残酷な勝利宣言でもあったそれを、スバルは聞いていなかった。

『終わりかな？』

ウィンドはそう呟いた。彼の視点ではロックマンが倒れていて、ゲイボルグがゆっくり近づいていた。勝負は決していたのだ。

「……どうかな？」

『ゲイボルグの恐ろしさはあのカードの力を使っていることだ。あれにはさすがに勝てねえよ』

たしかに、闇の力にはスバルは勝てない。飲み込むとかそういうの関係なく、単純に戦ったらスバルは負ける。それは人間には絶対に闇があるからだ。闇が少しでもある者は闇に勝てない。それが道理だ。

「別に、あいつに勝つなんて期待してないからいいんだけどよ」

『計画の軸だぜ？　いいのかそれで』

「元々おまえの計画だろ？」

『おまえの自由にしていいって言ったろ？』

ようは全部任せるということだ。本当にウィンドは適当で、面倒臭がりだ。

『俺は俺の用が済めばいい。ロックマンが死のうが関係ない』

「じゃ、ロックマンは生きるよ。絶対に」

そういうキリュウの声はどこか自信に満ち溢れていた。

『そうか？　だってもう死にそうだろ？』

そう聞かれたキリュウは、うっすらと笑ってこういった。

「あれで勝つのがロックマンだろ？」

「たしかに、君の力は凄い……」

ゲイボルグの脚がピタリと止まった。その攻撃に驚いているのだ。別にロックマンが立つことに驚いているわけではない。そんなの彼は何回も繰り返していた。驚いているのはそこではない。

何故彼が立ち上がろうとするか。まだ降伏のチャンスも残されているはずだ。戦うよりかはそちらのほうが生きる確率は高い。そして今は全世界が注目しているのだ。こちらとしても助けたほうが何かといい。

彼はそこまで考えられないのなら、しょうがないだろう。けれど彼は心のどこかで降伏しようと思ったことはあるはずだ。

「だけど、僕は勝たなければいけないんだ……！」

それなのに、何故立ち上がろうとする？　スバルは立ち上がってこちらを見据える。そして、ゲイボルグは理解した。彼が『真っ直ぐ』だからだ。降伏などという『曲がった』考えが許せないからだ。いや、認めたくないのだろう。それが自分の世界を壊してしまうから。

だから彼を――――したのだ。

「――――――――――！」

声にならないスバルの声が轟き、こちらに向かってきた。ただ真っ直ぐに、走って。これほど簡単に対処するなんて簡単すぎるだろう。

『……暗黒の槍（ダークネスランス）！』

ただ一直線に、槍を突き出す。攻撃に迷いは無く、心臓を貫こうとする。それに合わせる形で、スバルも拳を突き出す。

結果、何かが砕けるような音が聞こえ、漆黒の体は宙を浮いた。

第１１９話　真っ直ぐ（後書き）

ロックマンＺＸクリア！　そしてオメガ倒した！

イェ～イ！　とおもってオメガ戦から戻ろうとしたら針で大量死！

結果残機が９こあったのに失敗という……ま、勝ったんだけどさ。

ＯＸ手に入ったけどさ

で、次話でやっと決着ですね、ハイ。

オリジナル書きたいな～でも受験という……なんなんだー！

では、感想待ってます

第１２０話　正解（前書き）

長い……久しぶりにこんなに書いた気がする。
４７００って……やりすぎた

第１２０話　正解

結果は意外な物となった。スバルの左爪は砕けたものの、ゲイボルグの槍を破壊し、そして顔面を打ち抜いて殴り飛ばした。

スバルは驚いていたのだが、ゲイボルグは特に驚きはしなかった。彼は知っていた、これが『絆』の力だと。彼は知っていた。『絆』の本質を。だから、彼は驚かなかった。

「……質問を変えるよ、何で君は今日まで生きているの？」

それは聞いても得があるとは思えなかった。聞いても戦いが終わるわけでもないし、世界が平和になるわけでもない。けれど、聞いておきたかった。そこまで永く生きてでもこんなことをしたかったのかを。

『……それを知ってどうするつもりだ？』

「興味本位だよ。けど知っておきたいんだ。……２００年も生きてこんなことをしたいかを」

『……』

「君、ネットナビなんだよね？」

【ガイア（ネットナビ）】、簡単に言えば２００年前のウィザードと考えてくれればいい。その代わり２００年前の技術のせいで電脳世界でしか活動は出来なかった。それが、今でも生きているのだ。不思議に思わないわけが無い。

『何で今まで生きてやがった！　まさか昔にエグゼに負けたせいで世界を手に入れられなかったからか？』

『……そんなところかな』

ゲイボルグは軽く笑ってそういった。そう、世界を手に入れられなかったという点は。

『だからといって戦力が変わるわけではないけれどな』

「けど、君の武器はもう無い。この意味も分かっているよね？」

言うが早いか、スバルは立ち上がろうとするゲイボルグに迫る。ゲイボルグは顔を防御しようとするが、逆を疲れて腹を殴られた。そして勢いを利用してのアッパーが、容赦なく顎に叩き込まれた。

「僕は許せないよ、こんな事件が昔にもあったなんて……」

そう、このような事件が昔にもあったのだ。ならばなぜ資料に詳しく載っていないか。まずは科学省が隠蔽したから。理由は定かではないが、大きな事件に発展しなかったからだ。そしてもう一つは、ニュースとはまた違った方法で世に広がってしまったからだ。『都市伝説』化してしまったのだ。政府は確証も無い都市伝説を教科書に載せることは出来ないとして、世に大々的に広がるのを抑えたのだ。当然ニュースも禁止された。

それが、今更蘇ったのだ。復活したヘイトにより。長い時間を掛けて、世界を騙して世界を征服しようと。

「僕には君の気持ちが分からないけど、それでも僕は君を倒さなければいけないことは分かっている！」

『……それはないな、おまえなら分かるはずだ』

『嘘言ってんじゃねえ！　スバルがおまえの気持ちなんて分かるわけ無いだろ！』

『あいつの気持ちなら分かるんじゃないか？　ウィンドの気持ちを』

その言葉にスバルは眉をひそめた。

『あれは、唯一の電波人間だからな』

「分かりたくないよ、そんな気持ち」

理解などしたくない。こんな馬鹿げた計画を企てた人の気持ちなど。

『だったら、我を超えてみろ。そうすれば、全てがわかる』

ゲイボルグは立ち上がった。彼のダメージはそこまで大きくない。対してスバルは重傷だ。勝てるわけが無い。

『ブラックサン』

武器の無いゲイボルグの右手に小さな球体が出現する。それは徐々に大きくなり、直径五メートルの巨大な大砲を作り上げる。

『これで、決着が着く』

「だったら、勝つのは僕達だ！」

スバルの右手にノイズが集合していく。それは大気から、地面から集まっていく。

『……いくぞ！』

ゲイボルグは黒き大砲をスバルに投げつけた。対してスバルも凝縮された紅いレーザーを撃つ。

「ＥＦＢ（エグゼフォースノイズビックバン）　レッドガイアスラッシャー！」

紅と黒は真正面からぶつかった。ジリジリと一時は一進一退を繰り返していたが、やがて紅が押され始めた。それを援護するように、メテオノイズジェネレーターかれもレーザーが放たれる。それで、ようやく均衡が保たれた。そして、両者の威力は削がれていった。

「うおおおおおぉぉぉぉっ！」

黒き大砲にスバルは突っ込んだ。ゲイボルグが次の行動に移すよりも前に倒すために。ガリガリとスバルの鎧を闇の力は削るが、それでも突っ込んだ。そして、ノイズが集中している右手で、ゲイボルグを引き裂いた。鎧は引き裂かれたが、それでもゲイボルグはデリートされない。

だが、それは起こった。ノイズによって大爆発が起きたのだ。それは視界を白に染めて、全てを消し飛ばした。

「やった……？」

最後の爆発はスバルが意図的に仕組んだ物だ。相討ちでも、ゲイボルグを倒すために。だが、それも虚しくゲイボルグは立っていた。もう一度攻撃は、可能だ・

『くそが！　ここで終わりなのか！？』

スバルはもう立てない。攻撃を受けすぎた。これで、こちらの負けは確定的となった。

「カオスウィングブレード！」

突如同じ黒色をしたブラックホールがゲイボルグを包んだ。次にそれを見たときは、黒き閃光がゲイボルグを貫いた所だった。

「あ、暁さん！」

「すまない、調べ物があってな」

突然現れた不法侵入者（イリーガル）。その攻撃のよって大ダメージを受けたゲイボルグだが、まだ立っている。

「あいつ、どれだけ丈夫なんだ……」

『解析によると、ゲイボルグの力の源は「ダークチップ」だそうです』

「だからあんなに……」

立っているゲイボルグだが、動かない。まるでもう動けないかのように。さびて動けないブリキのおもちゃのように。

「こいつには聞かなければいけないからな、止めは刺さないで置いておく」

立てないスバルの代わりに暁はゲイボルグに歩み寄る。もう戦いは終わったはずだ。だから攻撃はもう無い。はずだった。

「それはできないな」

そこに現れたのは、銀色の剣士。キリュウだ。

「大丈夫かゲイボルグ？」

『チッ！　増援か！』

苦々しくウォーロックはそういった。けれど、暁はそれを無視してキリュウに言葉を掛ける。

「待ってくれ！　もしかしたらこいつは――――」

『マインドコントロールが解けている、だろ？』

それに答えたのはウィンドだった。その答えを聞いて暁は驚きに包まれる。

『知ってるよ、戦い方を見ていて分かった。こいつには「ためらい」があった』

「なら分かっているだろ！　デリートしなくてもいいってことを！」

『ああ、でもするんだよ』

キリュウは刀を抜いた。その言葉は、死刑宣告に聞こえた。

『こいつはどうせあと一分もすれば爆発する……』

「なんだって！？」

『だったら俺の手で殺したほうがいいだろ？』

「だったら助ける方法を――――！」

けれど、暁の声を無視してキリュウは刀を振った。たったそれだけで風が巻き起こり、そして――――

ゲイボルグは消えた。

「なんで……こんなこと」

改めて思う、『ガイア』はおかしい。何の未練も無く仲間を殺し、平然としていられる。そこにどんな理由があろうとも、理解できない。

『あいつが望んでいることだからだよ。あいつは、ゲイボルグはこんなことになるくらいだったら死んだほうがマシだったとは思って

いたさ。だから、せめて俺の手でってな』

ウィンドは、少し悲しさを滲ませた声でそういった。

「だからって、生きていたら考え直せたかもしれない。なのに君はその可能性を否定した！」

『ああそうだ、否定したさ。ならなぜだと思う？　その理由がおまえには分かるのか？』

分からない。この事件を一番分かっていないのはスバルとウォーロックだ。マインドコントロールが解けたとはどういうことなのか、なら何故デリートしなくてもいいのか。そして、『ガイア』とは何か。

『おまえは何も知らない。少なくとも、アシッド・エースよりかはな。それでも足りない。おまえらは俺達に何が起きたかも実際に見てないくせに正解を考えようとする。だから分からないんだ。本当の正解をな。意見するんだったら、まずタイムスリップでもして見てこい！』

ウィンドの怒声がヨーハマシティに響き渡った。もう結界、ディメンショナルエリアは無くなっていた。今頃はニュースでゲイボルグが負けたというのが放送されているだろう。

「……たしかに分からないけど、だけど君のやったことは許せないよ！」

『……俺らを憎みたければ憎め。だけどそれは奴の思うがつぼだ』

「奴？」

『ヘイトだよ。あいつの目的は二つ、一つはおまえを世界の敵にすること。もう一つは――――』

『戦力の確保ってなあ！』

その声で全員が振り返った。見ればそこには、黒い幽霊のような電波体が浮遊している。形状は不安定そうで、目は緑色。そして、脚がなかった。

「今日はいろいろいっぺんに集まって大変だな、ウィンド」

キリュウの声は、誰にも届いていない。ただ、ヘイトを見て呆然としている。ウィンド以外はこれが何者なのか分からないでいる状態だ。

『俺の名前はヘイト。憎しみを司る者、または「ガイア」のリーダー！』

「『ガイア』のリーダーだと？」

『ああ、そうだ！　この世界の新たなる支配者ってとこかな！』

そういったあと、ヘイトはスバルの目の前に周波数変換で移動した。そして、彼を殴り飛ばした。スバルは砲弾のように吹っ飛び、電波変換が解除された。

「ッ！　スバル！」

けれど返事は無い。完全に意識を失ったらしい。ウォーロックも何故か意識を失っていた。

『ハハァ！　ざまあみろ！』

「よくもスバルを！」

『無駄だ、おまえには勝てねえよ！』

「何？」

アシッドはヘイトの力を解析したらしく、それを暁に報告した。

『シドウ！　ヘイトの力の源は憎しみ！　つまり憎しみの心が高まるほど彼は強くなります』

「なんだって！？」

『ハハ！　わかったか。そう！　俺の力の源は全世界の憎しみの心だ！！』

つまり、ウィンドの戦力確保とはこういうことだ。スバルを世界にするために獣化をさせる。獣化をするにはある程度の力量が必要になる。けれど、強くなったはいいがなりすぎてはヘイトが負けてしまうかもしれない。

だから、大々的に世界に放送して憎しみの心を持たせる。そうすることで、スバルが強くなった分をカバーするのだ。そして今も暁の憎しみの心でヘイトは強くなっている。

『つまり、おまえらは全部俺に力をくれてるんだわ！　だから勝てねえよ！』

憎しみ、それは敵である限り絶対に芽生えてしまうものだ。そうじゃなくてもこの世にはそんなものが蔓延している。つまり、ヘイトと戦うというのは人間の負の感情と戦うといってもいいということだ。

「黙れよ」

ヘイトに斬り込むのはキリュウ。そして彼のウィザードはヘイトに対して憎しみの炎を燃やしている。

『テメェが今頃出てくるなあ！』

キリュウが刀を振ると、ヘイトは吹っ飛んだ。建物に突っ込み、コンクリートを壊していく。けれど、それでもヘイトは無傷だ。それに追撃するようにキリュウも突っ込む。

『テメェなんかが居なければゲイボルグを殺さずに済んだ！　テメェなんかがいなければ俺はとっくの昔に死ねた！　全部、テメェのせいだ！』

『ハハハ、いいねえその心！　俺の力も溢れてくるわ！　でもよ、おまえらの同調率（シンクロ）落ちてるぞ？』

その一言に、一瞬だが隙が出来た。キリュウは別にヘイトが憎いわけでもない。だが、自分達が窮地に立たされることを想像してしまって隙が出来てしまったのだ。そこにヘイトはレーザーを撃つ。風は光を遮れず、直撃する。

『テメェもだカス！』

動こうとした暁にも黄色いレーザーを放つ。避けようとしたが、結局直撃してしまった。

『ハハハ！　最高だよ！　あん時とは全く逆だ！　嬉しいねぇぇ！　ハハハハハハハハハハハハ！』

最強、その言葉が今のヘイトには相応しかった。誰も勝てない。

『そんな君達にビッグニュース！　四日後、もう一度戦うチャンスを与えてやる！　こんなんじゃ足りない！　俺の憎しみの心を緩和するくらいの戦いを楽しみに待ってるぜ！』

そういうと、ヘイトはどこかに消えた。まるで勝利の余韻に浸るように、ゆっくりと帰還した。

第１２０話　正解（後書き）

今回説明不足　（分かるとは思いますが）が多いので分からなかったらメール下さい。結構多いです、ハイ。

次話が終わったら、ついに最終章、のはず！

では

第１２１話　プロテクト（前書き）

短いですがよろしく

第121話　プロテクト

「……チッ」

瓦礫の山からキリュウは立ち上がった。彼の鎧には傷一つ無い。それは彼の鎧が丈夫だからだろう。

「おまえがあんなにキレるからこんなことになるんだろ？」

『わりぃ……ゲイボルグを殺したあとだからな』

仲間を殺して心が痛まないわけが無かった。彼らはどんなに時がたとうと、仲間であったのだから。それを無残に壊すきっかけとなったヘイトが憎くないはずがない。

「ってか俺が殺したんだからな。行くなら自分一人で行け」

『……わりぃ』

調子狂うな、といいたげなキリュウは。あることに気付いた。スバルの隣にウォーロックが倒れている。だが、変わっていた。ウォーロックの目に見えない何かが。

「これって最悪の事態じゃね？」

「……これは」

ヨイリーは酷く困ったようにそう呟いた。

「どうかしたのかね？」

キングはコーヒーを飲みながら聞いた。スバルは病室のベッドで寝ている。この短い間に何度もお世話になっているものだ。

「エグゼＰＧＭにプロテクトを掛けられているわ？」

「プロテクト？」

「簡単に言うともうエグゼノイズは使えないわ」

ふむ、とキングも少々考える。エグゼノイズが無ければ今後の戦いは厳しい。それにあのヘイトの力も思い知ったことだ。

「プロテクトはどんなものなんだ？」

「一種のファイアウォールを形成されているわ」

「見せてみたまえ」

そういって彼はスバルのハンターを操作した。数秒もしないうちに、ヨイリーに返す。

「これもあのヘイトのものだろう。ヘイトが憎しみの力を注入すれば戻るという感じだな」

「ということは不可能ってことね」

その言葉と共に溜め息を出す。これを何とかするのが自分達の仕事なのに、それができないとはなんと言うことなのだろう。無力の一言に尽きる。

「ようやく私が作ったプログラムが役に立つな」

「……そのためには」

「ああ、大量のノイズを用意してくれ」

まだ、仕事は終わっていない。

「ヘイト、久々のバトルはどうだった？」

男は帰ってきたヘイトに親しげにそう聞いた。

『ああ、さすがに凄いな。力がとめどなく溢れてくるぜ……』

彼らの計画で世界にある憎しみの心がロックマンに向いている。厳密に言えば憎しみの心が増幅しているのだ。自分達に憎しみの力が向いてもそれは自分達の力になる。

「あっちももうエグゼの力を使えないんだろう？」

『ああ、俺がもうプロテクトを掛けたからな』

これで最後の準備が整った。あとはただ、四日後まで待つだけ。ただそれだけなのだ。

「『守護神（ガーディアン）』も死んじゃったし、自分達の力でどうにかするのが少し面倒だね」

『いいじゃねえか。これで独り占めだ。もとからあいつらも不法侵入者（イリーガル）なんだからな』

『この計画は、突然始まったんだから』

第１２１話　プロテクト（後書き）

感想待ってます

次章が最終章です

その名も『繋がる物語編』です。ご期待下さい

第122話　ヘイト

『で、もう俺達にエグゼノイズは使えないって事か……』

ウォーロックの落胆した声が病室に響く。今病室にはスバル、ウォーロック、大悟の三人しか居ない。

「まあ、しょうがないことだ。今までこんなことが無かったことが不思議なくらいなんだから」

なだめるように大悟は言うが、正直不安な気持ちになってしまう。自分達がどれだけその力に頼っているかが今分かった。

「……でも、なんでまたそんな回りくどいことをしたんだろう……」

ヘイトのあの実力ならば、エグゼノイズがあってもスバル達に勝てないことは無い。勝つ可能性を上げるならば、まずはその周りから倒していくほうが得策だ。なのになぜそれをしない？

「逆上されるのを恐れたからじゃないのか？」

そうかもしれない。けれど、そこまで準備をして自分を倒す必要があるのかが疑問だ。自分は恨まれたことをした覚えがない。

「けれど、どちらにしても四日後だ。もちろんおまえは行くんだろ？」

「うん、確かめたいんだ。なんで、『ガイア』は僕を襲ったのかを……」

『ああ、俺も知りてえな。ってかそもそも『ガイア』って何なんだ？　昔の犯罪組織かなんかなのか？』

「それについては暁君が知っているらしいが、答えないらしい」

暁が答えない、つまり拒むということは、知ってはいけない何かなのか。それとも、知っても意味が無いのか。

『ああ、うぜえ！　アシッドに吐かせてやる！』

「や、やめなよ！　そんなことしたらここが壊れちゃう！」

「スバルの言うとおりだ、やめとけウォーロック」

大悟にも言われたからなのか、さすがにウォーロックも黙った。というか自分が本当にやると思われたのがショックだったらしい。

《ザザ……これより司令室で会議を開始する。遊撃隊、及び研究員は速やかに司令室に集合せよ》

「スバルはここでじっとしてろ。さすがに体がキツいだろう」

『病人は寝てろってな！』

何かウォーロックに言われるとカチンと来るのだが、それが優しさだと知っているから何も言わなかった。一年間側に居ればさすがにそれくらい分かる。

「何か分かったんですか？　ヨイリー博士」

そう天地は聞いた。ヨイリーからは何か分かったら会議を行うと伝えられていた。招集を掛けたのなら何か大きなことが分かったと思ってもいい。小さなことならハンターに転送しても良いのだから。

「ええ、今日突然現れたヘイトと名乗る電波体についてよ」

その言葉に場の雰囲気が変わった。何か少し重くなったような気がする。まるで肩に重石でも乗っているかのような感じだ。

「で、ヘイトの何が分かったんですか？」

クインティアがまるで焦らすなと言わんばかりに質問する。知りたいのだろう、正体不明な物を。人間というのはそういう性質も持ち

合わせている。

クインティアは好奇心ではなく、どちらかといえばそれを知らなければ恐怖に支配されてしまうという感じだ。いきなり空から机が落っこちてきたら恐いだろう。そして、今後そんな理解が出来ないことが起こると思うと、恐怖に支配されるという感じだ。

「実はね、興味深いことなのよ」

そういってコンピューターのキーボードを操作すると、エアディスプレイに何かが表示される。

「これは……」

「『ガイア』の周波数よ。五体のしかないけれどね」

シルバー・ウィンドの周波数は分からないのだ。何か特殊なことをしているらしく、特定できない。

「大体似ているわよね。全てとは言わないけれど」

何らかの小さな違いがあるものの、大体似ていた。同じ組織なのだから当然といえば当然なのだろう。

「次はヘイトのよ」

そして『ガイア』と比較されるような感じでヘイトの周波数が表示される。

「これは……」

明らかに違っていた。似ているところなど何一つ無いという感じだ。

「分かったわね」

みんなを見渡してヨイリーは言った。

「ヘイトは『ガイア』ではない可能性があるわ」

普通、同じ組織の傘下ならば周波数が似ているはずだ。組織とは一つの目的のためにあるのだからだ。

似ていないはずが無い。だが、ヘイトは違っていた。明らかに、質が。

「では、ヘイトとは何なのですか？」

『ガイア』はマインドコントロールを受けていた。それは元々組織の中で何かが起きてそれを無理矢理従せるのだと思っていた。

「外部の何かなのかもね。独立型だと思うわ」

つまり、利用したということだ。『ガイア』を自分の手ごまとして。最初から死ぬと決めていたのだ。

「でも正体は分からないんですよね？」

誰が作ったのか、その目的とは何なのか。そして何より、いつからいたのか。『ガイア』を利用したのだから、最低でも２００年前からは確実に居る。それがなぜ今更になって復活したのか。

「ネットナビだとは思うわ。『ガイア』もそうなんだし。でも、それだと『ガイア』って何なのかも分からないのよね」

四日後に最終決戦だが、謎がより深まり増えた。結局、この会議に何の意味があったのか。それを見出せぬまま、会議は終わってしまった。後味悪く、各々は解散していった。

第１２２話　ヘイト（後書き）

感想待ってます！

第１２３話　企て

「久しぶりね、カイ君」

「よう」

カイ達はコダマ小学校に登校していた。『ガイア』のリーダーが四日後に戦いを行うと放送したのを聞いて、今日一日くらいは登校させようという教育委員会の方針らしい。

「で、何のようだ？」

「ちょっとお話があってね」

カイの席にルナ、キザマロは集まっていた。スバル、ゴンタ、ツカサ、ジャックは来ていない。いやこれない。『ガイア』の敵と大々的に公表されてしまったから。下手に外に出ないほうがいいのだ。

「大丈夫だった？　この数日間いろいろあったけど巻き込まれなかったの？」

「それならお互いそうだろ？　そしてなぜそんなことを聞く？」

「いえ、あなたは前に無謀な勝負をしてボッコボコにやられていたので今回もまた何かあったのか少し心配だったのですよ」

なるほど、俺はそんな風に見られているのかと少々落ち込み気味にカイは溜め息をつく。あんなことがあったら今度こそ重体で病院に送り込まれるだろう。

「でも、大変だな。三日後のことでクラス持ち切りだぜ？」

そう、今クラスでは三日後のことで持ちきりだ。中には遊撃隊を批判する声もある。当然といえば当然だろう。なんたって救世主の敵なのだから。

だが、こういった中で暴動が起きないのも『ガイア』のリーダーの配慮だ。戦いがあると放送するときにもそういったことを言っていた。なんとも嫌らしい奴だ。まるで本当に善人のような振る舞いをする。

「ええ、あまりいい話ではないけど……」

スバルをよく知っている人なら分かることだ。彼が本当はあんなことをしない人間だと。

「でも、仕方ないだろ。取り返しのつかないことをしてしまったことには変わりないんだから」

例えば、二つ人格がある人がいると知る。一方の人は善人なのだが、もう一方が殺人をしてしまったら、結局その人が殺人をしたということになんら変わりない。それと同じだ。

「そうですが、それも敵の差し金だったらしいですよ？」

「だとしても、結局スバルがやったことに変わりは無い。ようはスバルが暴れるとわかって仕組んだんだろ？　だったら予測されるほどの奴だったんだってことだろ」

カイがいうのは事実だ。けれど、それを受け入れるのは少々ルナ達にはキツイ。

「あなたは少々毒舌過ぎない？」

「そうか？　だって、守りたい人を守るために人を殺しても、それは殺人だ。結果っていうのはそんなもんだ。ようは受け手の解釈の仕方によっていろいろ変わってくるんだ」

自嘲するように、カイは言った。それは誰かが気付ける物ではない。それくらい、彼の心は分からなかった。

「で、本題はもっと違うんだろ？」

「ええ、あなたにも手伝って欲しいのよ」

「何を？」

「ようは、全世界に三日後の戦いを放送したいのよ」

そうすればたしかにスバルのがんばりを世界に放送できるかもしれない。けれど、それに何の意味がある？

「たしかに普通のテレビ局も放送するわ。でもそれじゃ肝心な所を放送できないのよ」

「肝心な所？」

「そう、相手の心のうちを」

「ようするに、一般のテレビ局では声までは届けられないんです。多分、『ガイア』がそうしないようにするはずです」

『ガイア』は少なからずスバルを叩きのめしたいのだ。けれど、ただ叩きのめすのではわざわざリーダーがすればいいのだ。それをしなかったということは、何かしらの理由がある。例えばスバルを苦しめて殺したいとか。『ガイア』がそこまでして仕組んだのなら、相手を絶望の淵に追い込むために言うはずだ。全てを。

「けどな、もし話さなかったらどうする？」

「それならそれでいいんじゃない？　でも、やったほうがいいとおもうわよ」

たしかにそうかもしれない。スバルがもし勝ったとしても、世界がスバルを許さなかったら余り意味が無いのだ。スバルはそれでいいと言うかもしれないが、ルナ達はそれは駄目だといっているらしい。

「サテラポリス、ＷＡＸＡには頼んでいるわ。だから、私達で呼びかけをする」

「なるほどな、子供のほうが影響力が凄いってことね」

依然、キュー・出間崎もキザマロを利用して番組の視聴率を稼ごうとした。それを実行しようとするのだ。

「……いいぜ。面白そうだ」

その言葉にルナとキザマロは多少喜んだ。ルナは生徒会長として呼びかけなかったのは、本当に星河スバルという人間を理解してくれ

ている人間とやりたかったからだ。

「三日後集合な」

「ええ、頼むわよ」

今日の授業はもう終わった。あとは帰るだけだ。二人と別れ、カイは帰りの支度をした。そのとき、視界にある人が目に入る。

「もう終わりだな……」

ただ、カイはそう呟いた。

「スバルちゃん。明日あなたには少しやってもらいたいことがあるわ」

唐突にそういわれて、スバルは面食らってしまった。彼はようやくのところ体も動かせるようになった。なんでも超凄腕の医者からもらった薬により、傷はほとんど治ったようだ。けれど、そのおかげで今日一日は腹痛に悩まされたそうだ。今も少し顔色が悪い。

「何をするんですか？」

「テストよ」

「テスト？」

ペーパーテストでもするのかと考えるが、ヨイリーはそれを苦笑して否定した。

「体にどれくらいノイズが耐えられるかテストするのよ」

「ノイズ……何でですか？」

スバルはノイズにある程度耐性はある。だからノイズチェンジなどが可能だったのだ。今更そんなのを調べる必要があるのだろうか。

「エグゼノイズを補う変身をするためよ」

「エグゼノイズを補う変身？」

たしかにそんなものがあれば三日後の戦いでもなんとかなるかもしれない。今のままではまだ少し不安なのだ。三日後には全員が出撃するが、それでも自分がみんなを守れるくらいじゃなければ勝てるわけが無い。

「ええ、キングが作ってくれたものよ」

「キングが……一体どんな物ですか？」

一応スバルはキングのことは危険視はしないでいる。もう大丈夫だと判断したのだ。ウォーロックはまだ危険視しているが。

「ノイズ率３００％で可能になる究極変身（ファイナライズ）よ」

「３００！？」

２００％でも相当なノイズ率だが、その一・五倍となるとそれこそ膨大な量だ。そこまでして行う変身とは一体どんな物なのだろう。

「名を、二重究極変身（デュアルファイナライズ）」

第１２３話　企て（後書き）

感想待ってます！

ＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮに最近ハマってます（歌手）結構いいので聞いてみてはどうでしょうか。まあ、僕の趣味なんであうかどうかは分かりませんが。

第１２４話　打ち合わせ（前書き）

なぜか今更文章力が上がった気が……

神の助言を書いてからなのだが、なぜ？

……分からない。

第１２４話　打ち合わせ

なぜ、俺は今まで生きているのだろう

――それは『ガイア』を救うため

なぜ、俺は今まで生きてこれたのだろう

――それはあいつに復讐するため

なぜ、『ガイア』は死ななければいけなかったのだろう

――あいつが『ガイア』を利用したから

なぜ、あいつは『ガイア』を利用したのだろう

――それは、俺達があいつを追い詰めてしまったから

『……みんな』

シルバー・ウィンドは静けさに包まれている街のウェーブロードでそう呟いた。今日は暇だ。何もやることが無い。異世界に飛んでもいいのだが、時間のズレがどれだけあるのか分からないので行けない。

『俺はあっているのか？　おまえらを殺して』

死人は口を聞かない。けれど、彼らなら反対するだろう。自分が殺されてしまうのだから。だから、反対して欲しかった。それが偽りの人格だとしても。もしそうしてくれていれば、今頃。

『あいつらを助けられた、か』

計画に反してでもそれは実行したかった。キリュウもそれを了承してくれただろう。彼は強くなりたいのだが、それでも片っ端から殺していくような奴ではない。簡単に言うと死刑囚を殺すような感じだ。言い方を悪くすれば。

『おまえらは満足して死ねたか？　俺はここまで生きてきて後悔してるよ。全てを捨てさせられて、生きる価値なんてないもんな』

やりたくないのに無理にやるのは精神的にキツく、かつ意味の無い物だ。物事の意味とは自分が決めるものであり、シルバー・ウィンドは意味の無い物と感じてしまったのだ。

『俺はおまえらと一緒に死にたかった。どうせなら、そのほうがいいしな』

あの時も、それを望んでいた。心の底から。けれど、そんな叫びを無視してあいつはそれを俺だけ生かした。この百年間、無理矢理に生きてきたので心が壊れてしまった。だから、『ガイア』も。いや、『守護神（ガーディアン）』も殺してしまった。あいつの言うとおりに。全てがあいつの思うがままだった。全てが、一つの狂いもなく。誤算もあったが、それはどうでもいいものだけ。好きなものを先に食べたか後に食べたかという感じの、どうでもいいもの。

『なんで、俺だけ……』

彼の目から涙は出ない。出したくても出ない。ネットナビ、ウィザードもどきにそんなことはできない。出来ても、きっと彼はなかないだろう。

『おまえらが出来なかったことを、俺が全て終わらせてやるから。もう少し待っててくれ。そうしたら、そっちにいけるから』

『それが、粛清者（リーダー）の務めだろ？』

「で、終わったんですか？」

覇神はある人に電話をしていた。彼の家柄の事情、外にはあまり出してくれない。そんなせまっくるしい家にある自分の部屋で声を最小限にして電話をしているのだ。いつ見つかるか分かった物ではない。が、彼はそれを声に出さないでいる。長年こんなことをしているからなのだろうか。

「こっちはもう何もしなくていいんでしょう？　一応防衛という感じですが。ええ、本当に僕のウィザードにはあってませんよ。来るとしても雑魚だけだったのが幸いですがね」

彼の口調は大体敬語だ。これも家柄の事情だ。重要なことなどは多少崩れるが、それは強調するためでもある。

「でも、それならあちらだけに任せたほうが無難では？　僕は立っているだけって感じですが。え？　それならあちらにも仕事が無いのでは？」

時間は夜の八時を回っている。こんな時間にも打ち合わせをしてい

る小学生など彼らくらいだろう。それほどまで彼らのしていることは重要だ。けれど、覇神にしてはゲームだ。それを彼は楽しんでいる。心の底から、だから彼はここまでやった。面白いから。

「それなら、僕がここまでやってきた理由がありませんが？　……それならありがたい。任せてください。守りますよ。あちらは……やめておきますか」

その言葉に覇神は少しながら笑った。電話相手は大切なのだろう。それはただ単純に守りたいというのだから驚きだ。普通ならもっと他になにかあるものなのだが、ただ彼は守りたいという心だけで動いている。本当に尊敬に値する人間だ。

「たしかにもしものときはあちらのほうがそっち方面は得意そうですが、あまりこちらに来るのが強すぎると……ちょっとやりすぎてしまいますよ？」

別にそれは冗談なんかではない。はしゃぎすぎてしまって周りが見えなくなってしまう、自分がそういう性格だから言っている。

「いいんですか？　それはそれでありがたいですね。まあ、こちらも善処します。では、おやすみなさい。かぜをひかないように」

そういって電話を切った。これで打ち合わせは終わった。あとは、実行するのみ。もうすぐ、終わるのだ。計画通りに。

第１２４話　打ち合わせ（後書き）

では、感想待ってます。

ってか伏線多いな。小さな小さな物もあるので注目を

第１２５話　周り

「う～ん、本当にスバルくん大丈夫だと思う？」

ミソラは自分の相棒に向かってそう聞いた。あと二日後に戦いが控えているのだ。無理はしないで欲しい。

『彼なら大丈夫でしょう？　彼を信じなさいって、ね？』

ハープはそういうが、心配な物は心配だ。過去三回ともそうなのだから、今回もそうだ。が、彼は三回とも無事に帰ってきてくれている。だからハープも大丈夫だというのだろう。

「だけどさ、やっぱり今回は大変だと思うよ？　エグゼノイズも無いんだし」

『だからみんな行くんでしょ？　それに彼はそんなものに頼っていないわ』

だからといって、丸腰で敵に突っ込むのと拳銃を持って敵に突っ込むのでは全然違うものだ。敵が一人でも、マシンガンを持っていたらこちらに勝ち目は無いのは明白だ。

「でも、何か一つ足りないと思うんだよ」

『それは同感だけど――――』

その途端、ドオオンッ！　という爆発音と共にサテラポリスは揺れた。けたたましいほどの音量で警報音が鳴り、建物全体が恐怖に包

まれた。

「な、なに！？」

『分からないわ。でもとんでもないほどの周波数が地下にあるわ！』

「じゃあ、行くよ！」

そういってミソラは駆け出した。が、それを遮るように今度は放送が入る。

《あーあー、マイクのテスト中》

「……暁さん？」

暁の声だった。建物が正体不明の揺れに襲われたのにもかかわらず、暁の声は酷くのんびりしていた。

《今の揺れは長官が責任を取るので気にしないで下さい、以上！》

ブツン、と放送は途切れた。あまりにも唐突なことだったのでミソラは数秒固まっていた。

「何があったんだろう……？」

「たしかに体に負担がかかりますね……」

その場にぺたんと座ってスバルは呟いた。ウォーロックも少々疲れているのか、息が荒い。

「まだ無理はしないほうがいいけれど、あと二日よね。少々無理はしないといけないわね」

ヨイリーは軽く言ったが、スバルの体は病み上がりだったのだ。それをいきなり体に思い切り負担のかかる変身をしたら体が寿命より前に逝ってしまう。

「でも、二重究極変身（デュアルファイナライズ）って凄いですね。少し力を使っただけで建物が揺れるなんて」

現に震度四なみの揺れが建物を襲ったのだ。たった二割の力を使ってだ。究極獣化（ファイナビースト）とは違って、もっと違う方面で優れているのだ。

「まあ、ノイズを完璧にコントロールする変身だから。けど、あっちもノイズを集めているから分からないけどね」

ようするに勝率は五分五分というところだろうか。相手の強さ、こ

ちらの人数、それから考えて勝負は分からない。それこそ、面白いくらいに。

「絶対に完璧にコントロールして見せますよ。じゃないと、勝てませんからね」

「頼むわよ、スバルちゃん」

『任せとけ、ヨイリーのばあさん。スバルの面倒は俺が見てやるぜ！』

「ウォーロックが見られてるほうじゃなくて？」

何を！？　というウォーロックの声と、スバルとヨイリーの笑い声がトレーニングルームを包んだ。それは暖かく、彼らの未来を暗示しているようでもあった。

「結局、大丈夫らしいね」

『そうね、本当によく心配させるわね、彼』

呆れたようにハープは言うが、ミソラはスバルが無事でよかったと思っていた。彼さえ無事ならば、それで自分は幸せなのだから。

「私達も、がんばらなきゃね」

『ええ、だったら行動あるのみよ。彼らのようにね』

え、というミソラの疑問は声に出す前に解消された。後ろにジャック達が居るのだ。

「おまえ、今暇か？」

「暇、だけど……」

言っている意味が分からなかった。ナンパかというツッコミは言わないで置いた。それはさすがに彼に失礼だろう。

「僕達、今から外に行くんだ。二日後に備えて」

「ミソラちゃんも一緒に行こうぜ！　俺達もスバルのためにがんばらなきゃいけないんだしな！」

「……みんな」

やはり、星河スバルという人間は凄いなと実感した。彼のためにに

多くの人が集まった。そして多くの人が行動した。それは二日後も変わらないだろう、スバルがスバルである限り。

「うん、行く！」

ミソラのその返事によって、四人は駆けいった。今を精一杯生きるために、スバルという人間のために。

第１２５話　周り（後書き）

今回は主に周りにスポットライトを当ててみました。どうでしょうか。

次話もこんな感じです。ジョーカーなどいろいろ出てきます。

そして「ヘイト」も

では、感想待ってます！

天体観測いいわぁ～（歌）……これ聴くと勉強しなくていい気がする

第１２６話　未知（前書き）

短い……

第126話　未知

「……分からないわ」

クインティアはパソコンの前でそう呟いた。

『どうしたのだ？』

偶然通りかかったジョーカーがクインティアに歩み寄る。彼の今の服装は赤いボディではなく、濃い茶色をした長袖だ。一見外国人に見えて仕方が無い。

「『ガイア』といヘイトの明確な繋がりを見つけ出そうとしたのだけれど、まずはどんな力かを調べてみようとしたのよ」

『たしか、ヘイトは憎しみの力をそのまま攻撃に転用するのだったか？』

ヘイトの主な攻撃はレーザーなどだが、それを産み出しているのは憎しみの心だ。いわばそれがヘイトのエネルギー源だ。けれどヘイトと『ガイア』の関係は何かしらあるはずなのだ。だからいろいろな面で関係を見るということだ。

「ええ、でも『ガイア』には電波と思わしきものさえも確認されないわ」

『プロヴェはノイズを変換したからな』

「……どういうこと？」

変換とはどういうことだろう。ノイズではなく他のもので植物を操っていたということだろうか。

『ようは「ガイア」の力は魔法だ』

「魔法……？」

まさかジョーカーからそんな言葉が出るとは思いも寄らなかった。けれど言った本人は特に気にしていないようだ。

『何も無い所から何も使わずに火を出せるか？』

「それは、無理よ」

何も使わないで火を出すのは無理だ。水素と酸素を化合させれば火はできるが、これにもいろいろと使うものはあるし、そして火ではなくどちらかというと爆発だ。火ではない。

『「ガイア」はそれを可能にする』

「本気でそんなことを言っているの？」

そんなことができればそれこそ神だろう。何も無い所から物質を作る、そんなことは今の科学でも無理だ。

『プロヴェの場合は、ノイズを肥料という感じで使っていたのだろうな。植物の形成するのを促進するために、ノイズを栄養に変えた。本当に常識はずれだ』

「待って、『ガイア』は２００年前のネットナビよ？　２００年前にそんな技術があったというの？」

『偶然出来上がったらしいぞ。詳しくは知らないがな』

あまりにスケールが大きすぎる話だ。全然話についていけない。そもそも『ガイア』とヘイトの関係などそれこそ無くなってしまった。

『だから無駄だ。ヘイトと「ガイア」に繋がりなどない』

そういい残し、ジョーカーもどこかに歩いていってしまった。クインティアはただ、手がかりも無くなってしまったことについて肩を落とした。

『で、おまえは二日後ここにいないんだな』

ゲイルは確認を取るようにカイにそう聞いた。

「うん、ちょっと用事が出来てな」

カイはテレビを見ながらそういっている。テレビでは二日後の戦いの場所が決まったとかで大騒ぎしているが、あまりカイは気にしていないようだ。机にポテチを載せてゆったりとくつろいでいる。

『分かった。……当初とは違うんだな』

低く小さな声でゲイルはいった。

「予定は変わるものだろ？　別にいいじゃねえか」

『まあ、そうだな。本当だったらあの二人も居ない予定だったんだから……。いや、これが最初からの【宿題】なのか……』

「どうでもいい、とにかく俺はいないから」

カイにとってゲイルの言っていることはどうでもいいことだ。カイとゲイル、双方はお互いを利用しあっているだけなのだ。ただ一緒に過ごしているだけ。

「でだ、おまえも大丈夫なんだろうな。充電は終わったのか？」

『なんとか終わりそうだ』

「そうか……」

袋から数枚のポテチを口に運ぶ。バリバリという音が無い響き、カスが床にこぼれるがカイは気にしない。

「やりたいようにやれ、俺から言えるのはそれだけだ」

『おう、やってやるよ』

二人は、ただ己をすべきことを成し遂げようと前に進む。いや、誰しもがそうだ。この事件に関わる者は、数々の思いを胸に抱き、もうすぐ羽ばたいていく――

第１２６話　未知（後書き）

今回質問多そうなのですがどんどん下さいね？

プロヴェなんかよく分かりにくそうなので。　プロヴェのはそれこそ植物が水と二酸化炭素を酸素とでんぷんに変えてしまうようにノイズを植物の栄養に変えてしまうと考えてくれれば。まあ、イメージでね。

『ガイア』の力は本当にタネも仕掛けもありません。一応言っときますが彼らは電波体（ネットナビ）ですよ

それと、次回作の件について

まず蒼き流星の次回作、もう一つは〇〇〇の未来です

受験受かればやりたいですね、じゃんじゃん

では

第127話　前夜

「……いよいよ明日か」

暁はポツリと呟いた。ヘイトからの宣言により場所と時刻が報じられたのがつい昨日だ。

『ええ、明日でようやく終わるそうです』

アシッドも静かにそう呟いた。一ヶ月かかった戦いもようやく終わるのだ。覇神の話では全てが丸く収まる可能性が高いそうだ。なぜそんな曖昧なのかというと、それは覇神にすら最後が分からないそうだ。最初その言葉が分からなかったが、相手も分からないのだから何もいえない。

「物語の終わりは新たな物語の始まり、ってどういう意味だろうな？」

覇神が呟いていた言葉だ。小さくて聞き取れなかったが、たしかにそういっていたのだろう。

『彼らの目的も曖昧であり、さらに何故彼らが動くのかも分からないので何とも言えません。ただ、彼らは信用できると思います』

絶対ではないですが、とアシッドは付け足した。アシッドに未来を見る力など無いのだから仕方ないのだろう。

「結局、全部曖昧に終わってしまうのかもな」

謎が多すぎる。それを無視して終わりを迎えようとしているのだ。
何か釈然としない。暁はある程度知っているのだが、それでも分からないことがある。映画で言うならはじめの十分くらいした内容が分からなくて続きが気になるのに打ち切られた感じだ。

「だけど、それでも明日戦わなきゃいけないんだよな……」

謎が解決しようが解決しまいが関係ないのだ。やるべきことはやる、それが脇役（エース）の仕事なのだから。他のことは主役（スバル）がやってくれるはずだ。

『何があろうとも事件を終わらせるのが私達の仕事だから当然です。それに……』

「それに？」

『世界というのは、結局全てが丸く収まるんですよ。善くも悪くも』

「疲れた……」

スバルはそういってベッドに倒れこんだ。昨日と今日を使って二重（デュア）究極変身（ルファイナライズ）の練習をしていて体がヘトヘトなのだ。

「というか体がなれないな……」

『まったくだ……』

ウォーロックも疲労を伴うためにウォーロックも疲れているのだ。前まではエグゼＰＧＭのおかげで痛みも無かったのだが、そのとき味わっていなかったので今は少しの攻撃でも痛いと感じてしまうようになってしまっているのだ。

「でも、これで明日なんとかなるね……」

何かの大会でもそうだが、前日に運動しないのは帰って悪影響なのだ。疲れるくらい運動するのが丁度いいのだ。もちろん疲れすぎても悪影響だが。スバルは丁度良く運動しただろう。

「明日で全てが終わるんだから、がんばらなきゃ」

明日が最終決戦になるのだろう。相手もその気なのだから尚更だ。

『……あんまり無理するなよ』

「少しくらい無理しなきゃ駄目だと思うけど」

『まあ、そうだけどな。周りが居ることは覚えておけよ？』

人間は弱い、だから集団で過ごす。良くも悪くもそれは変わりがない。そこが人間の長所とも取れる。一人では何も出来ない、集団だからこそできることがあるのだ。今回もそうだろう、たった一人では絶対勝てない。スバルはそれを忘れかけていた。

「うん、ありがとう……」

けれど、いやだからこそスバルは一人でもがんばらなければいけないのだ。他の人が傷つかぬよう、世界を滅ぼされぬように。

第１２７話　前夜（後書き）

運命は決まっている。

一つの世界に一つしか存在しない。

たった一つの未来を掛けて、血を流す。

元々決まっている未来をかけて、無駄な足掻きをする――

第１２８話　出撃

早朝、今回の件の要人はニホン支部の前に集まっていた。その長官、ヨイリー、天地など研究員はもちろん、あかね、大悟、ルナ、キザマロ、カイも集合していた。キングは集まっていない、彼の依然やったことからして集まるのはどうかと思ったのだろう。

「よし、全員集まったな」

長官は遊撃隊全員を見渡してそういった。今の遊撃隊はスバル、ミソラ、暁、ゴンタ、ツカサ、ジャック、クインティア、ジョーカーの八人で構成されている。今回だけのために召集されたメンバーもいる。今回町の警備とかは無しだそうだ。作戦を考えたのは暁だが、暁によると敵は一人しか居ないので攻撃される心配は無いそうだ。いざとなったら警備ウィザードに任せることも出来るのでそこらへんは大丈夫だろう。

「……みんな、私から言うことは一つだけだ。生きて帰って来い！」

「「「はい！」」」

早朝に集まったからか、少し冷たい空気が眼を覚まさせてくれる。そして改めて各々は実感するのだった。今日で終わるのだと、今日を乗り越えればまた平和な日々が待っているのだと。

「では暁君、あとは頼んだぞ」

「任せてください、長官」

二人は握手を交わした。二人ともこれが最後とは思っていないだろう。だからこそ握手をした。また会えるようにと。

「ヨイリー博士、場所は確認できましたわ」

「ええ、一応確認した所宣告どおりの場所よ。あなた達の足ならば二十分で着くと思うわ」

宣告された上空にはディメンショナルエリアでできた闘技場のような形成されていた。空中に馬鹿でかいドームが形成されており、注目があつまるように形成しているようだった。もっとも、その周辺の民間人は各自で退避している。いくらなんでもそこに留まるのは危ないと思ってくれたのだ。

「だけど、相手があそこを選ぶのにはきっと訳があるはずよ。そして負けられない理由もそこにあるわ」

「……退く気はなさそうですね、本当に」

別に和解できればそれでいいのだ。そのほうが血が流れずにすむのだから。けれどその可能性がほぼ無くなった。元からあるとは思っていないが改めて知らされる。

「作戦を伝えるわ」

ヨイリーは暁だけではなく全員に伝える。

「各自のハンターに地図を送信するわ。そのルートどおりに行って頂戴。じゃないとディメンショナルエリアを突破できないわ」

「なんでルート通りじゃなきゃ駄目なんですか？　ディメンショナルエリアって――――」

「そうよ、たしかに大昔に完成した技術よ。でもそれならムーの技術だって未知の部分が多いわ」

ディメンショナルエリアは外部からは破壊できない、入り口のような所からしか入れないのだ。この技術も謎が多いのだ。

「だけど心配しないで、ルートどおりに行けば中には入れるわ」

ヨイリーが断言したのだから大丈夫なのだろう。逆を言えばヨイリーの言うとおりでは無ければ決戦地にもいけないということだ。

「そして倒すだけ、簡単でしょ？」

なんだかアバウト過ぎやしないかと心配しそうになったが、べつに作戦を立てるものでもないということなのだろう。ようするに勝てばいいのだから。

「作戦は以上、あとはただがんばるだけよ」

最後にヨイリーは微笑んでそういった。なんだか肩の重荷が軽くなった気がする。

「じゃ、行くか」

スバルは一度だけあかねと大悟を見た。その表情はとても穏やかで、安心させられた。二人も安心しているからなのだろう。信頼してくれているから、そんな表情が出来るのだから。

「「「トランスコード！」」」

七つの光がその場で光った。電波変換した面々は、暁の指示で動く。

「じゃ、いくぞ」

「――秋原町へ」

スバル達が飛び立った逆の方向からある一匹の獣はサテラポリスを見ることが出来る丘に降り立った。外見はライオンだろうか、た

てがみと尻尾、巨大なキバからそれが分かる。違うのはその色は真っ黒だということだ。まるでペンキをぶっかけて黒に塗ったような色で、さらに形状は不安定そうだった。輪郭がはっきりしないのだ。

「お、早いね」

だが、獣の予定は狂った。獣の予定ではこれからサテラポリスに奇襲をかけるつもりだったのだ。けれどそれは獣の背後にいる黒き少年に邪魔をされる。

「ヘイトの分身（おもちゃ）、待ってたよ。僕が相手だ」

少年は手の甲に黒いソードを形成する。獣はそれに対して振り返り、体勢を低くして威嚇する。

「いいねえ、勉強ばっかの生活してたら退屈でさ。過労で死にそうなんだよ」

少年の口調は軽かった。けれど彼の眼は獣から一度も外していない。

「精々三分は死なないでね？」

それが合図だった。闇と憎しみは、互いの私情のために地面を蹴る

――

「私達も動くわよ！」

「はい、委員長！」

ルナ、キザマロ、カイはニホン支部の中にいた。今から全世界に放送するのだ。全てを知らせるために。

「で、俺らどうすればいいわけだ？」

「まずは司令室に行くわ、あそこで用意してくれてるみたいだし」

「も、もしかして僕達が出るんでか？」

「出ないわよ、ただ本音を伝えるだけなんだから」

この計画で重要なのは全てを知らせるだけだ。呼びかけではない。各々がどう思うかが重要なのだ。前のようなものではサテラポリスも敵になってしまっているのだからほぼ無意味。

「私達は、私達の仕事をするだけよ……！」

何も出来ないからこそ、何かをするために努力しようとする。それ

だけが彼女らに出来ることだから。

第１２８話　出撃（後書き）

感想待ってます

第129話　善

「これが……」

スバル達は虹色の扉の前で立ち止まっていた。扉は四メートルくらいの高さで、無駄にでかかった。ドームは直径五百メートル、高さ五メートルで、戦うには充分だ。

「す、素直に入っていいのか？」

今回のゴンタの質問は間抜けな物ではなかった。誰もがそう思うのだ。罠かもしれない、その疑惑が拭いきれないでいた。

「アシッド、大丈夫か？」

『……解析の結果、罠などはありません。けれど……』

「どうした？」

『通信が完璧にシャットダウンされています。サテラポリスだけのを』

相手もこちらの思惑を察していたのか、この情報は少し意外だった。けれどそんなことで今のスバル達のやることが変わるわけでもない。多少の動揺があっただけだ。

そんなことを考えていると、扉が勝手に開いた。まるでスバル達を誘うように。

「……入るぞ」

ただ暁はそういった。ここで迷っていても何も始まらない。どうせ元々入るつもりだったのだ。それが勝手に開いてくれた。ありがたいくらいだ。

ゆっくりと、八人は中に入っていった。そして、また勝手に扉は閉まる。

「……なんだこれ？」

ジャックの疑問の声がやけに大きく聞こえた。ここはディメンショナルエリアの中なのだが、やけに遮蔽物が多い。ビルのようなもの、木のような物、それが普通の町並みのように置かれていた。違うのは全てが真っ黒だということ。若干ながらそこから周波数を感じる。

「リアルウェーブと似ているわね、でもなんでこんなものを作った

のかしら？」

クインティアの言うとおり、この建物などはすべてリアルウェーブと酷似している。だが作る必要が無い。わざわざ用意して相手は何をするつもりなのだろうか。

「ちゃんとした場所で戦いたからかな？」

その言葉にみんなが反応した。それをいったミソラは意外だったらしくオロオロしている。

「え、いやだって敵は前から他の人を巻き込みたくなかったんでしょ？　だけどそれじゃ本当の戦場っぽくないから――――」

「半分正解、かな？」

どこからか投げかけられた言葉、それは上から言われたのだと気付いたのに三秒かかった。

「どうも、みなさん」

上に居たのは予想に反して黒い人間だった。身長はあまり高いわけでもなく、小学生の平均くらいだった。紫色のバイザー、黒いヘルメットのようなものを被っている。

『ちっ、おでましか！』

『へへへ、そうだよ。待ってられなくてな！』

ヘイトは昂ぶった気持ちを抑えられないように言った。けれど、彼

と電波変換した人間は驚くほど冷静だった。

「待ってよヘイト。ちょっと話すことがまだあるから」

「……何を？」

率直な疑問だった。スバルの口からそう告げられたとき、男は笑っていた。

「本当にゴメンね、サテラポリスのみなさん、響ミソラ、そして星河スバルのクラスメート」

「……は？」

「いや、僕は星河スバルだけに用があったんだけど、君達も巻き込んでしまって悪いねってこと」

理解するのにまたも数秒かかった。けれど気にせず男は続ける。

「だってそうだろ？　彼に償ってもらうのに君たちまで巻き込んでしまうなんて。けど、君達が深く関わりすぎたのもあるけど」

「つまりなんだ？　おまえは他人を巻き込みたくなかったのか？」

「そういうこと」

だからわざわざこんな準備をしたのだ。他人を出来る限り巻き込みたくなかったから。騒ぎを大きくして人を避難させたり、特殊なドームで入れないようにしたり、たった一人を殺すためにここまでやったのだ。

「だから大変だったよ。まあ、知名度もそれなりに上がったからなんとかなったけど」

「でもなんでスバル君を――――」

「僕の両親を見殺しにしたから」

その言葉にどれだけの憎しみが込められていたのだろう。いったいどれだけの犠牲を払ってまでここまで来たのだろう。スバル達には理解できない。

「もっと正確に言うと自分の保身のために両親の存在自体を消したから、かな？」

「どういうこと？」

「メテオGの事件で、スピカモールで暴走ウィザードに殺された二人の夫婦が居たのさ」

たしか、スバル達もそこに行っていた。倒したあとにすぐにオグダマスタジオにいってしまってあまり記憶に無いが。

「だけど呼び止めても振り向きもしなかった。そのままどこかに消えてったのさ」

「君、人間というのはパニック状態になると声が出な――――」

「そう、そのときの僕もそうだった」

その言葉に暁は次の言葉が出ない。

「それだけならまだ許せた。だけど、サテラポリスがその死んだことすらも揉み消した。星河スバルの手によって」

少年は考えが曲がってしまった、ある一点だけを見てしまったことによって。だからこんなことになった。

「そうなんだろう？　自分が世界の英雄といわれたいがために」

「……違うよ」

スバルはそれに対して何か考えながら答えた。

「たしかに、僕も気付いて上げられなかった。だけど君だって分かっているだろう？　だからってこんなことをやっていいかってことを」

「それなら君だって分かっているはずだ。だから、君だけを殺すためにここまでやってきた。こんなことがあっていけない、けれどそれでおさまらない。だから、だから……」

他を巻き込みたくなかった。星河スバルだけを殺してそれで満足する、それが男が設けた境界線だった。

「僕は許せないよ。だけどこんなことまでしていいかっていうと違うことも分かっている。本当は君がもみ消したって証拠も無い」

「だったら自分が全員を救えるヒーローになろう、としたわけだね」

スバルとは違った道を歩んでしまった男は、知っててなお世界を変えようとした。完璧ではないならヒーローではない、だったらそれを降ろしてしまえばいい。消極的な考えだ。

「だったら、まだ戻れるじゃん！　分かってるんでしょう？　こんなことしてまでやっても意味ないって！」

ミソラの声が響いた。けれど男は首を横に振る。

「駄目だよ、ヘイトがそれじゃ駄目なんだ」

『なんだと？』

『ヒャヒャヒャ！　そのとおりだぜ！』

ヘイトは下劣な笑い方をして大声でそういった。

『俺はな、ロックマンが嫌いなんだよ！』

「エグゼ、だね」

その言葉にヘイトのテンションは高くなっていく。まるで比例だ。

『ああ、それと「ガイア」だ』

またしてもでてきた『ガイア』という単語。

『あいつらも嫌なやつだったぜ、とくにウィンドのクソ野朗がな！』

「おまえと『ガイア』の関係ってなんだ！」

『敵だよ、因縁のな』

そしてヘイトは喋り出す。長い、長い話を。

『あいつらはな、それこそ世界の「守護神（ガーディアン）」だよ』

「そして奴らにおまえは世界征服を阻まれたってことか」

暁の言葉にヘイトは少々感心したように言う。

『知ってたのか……そうだ。あの日、この町の電脳から俺は復讐を誓ったんだ……！』

第１２９話　善（後書き）

あとで男の性格は掴めると思います。

次は過去編、２００年前に飛びます。

ここから謎は解き明かされる……！

過去編？　２００年前？（前書き）

矛盾があったらお願いしまう。

ゲームのほうの後日です。

え？　でも……と矛盾が発生しますがなんとか直したのでご安心を。

全ては最後を読めば、ね

過去編？　２００年前？

『守護神（ガーディアン）』、一言で言えば自立型ネットナビで編成された警察、部隊だ。このような部隊は歴史でも珍しかった。なんていったってオペレーターが必要ないネットナビだけで編成されているのだから。だがそれだけならまだ普通の領域だった。この部隊の異常さはなんといっても強さだった。圧倒的力、それはもはや神の力と言っても過言ではなかった。ましてやそれが奇跡で完成したというのだから、まるで本当に神に与えられたように見えてくる。

そんな異常な部隊のリーダー、ウィンドは科学省の電脳に居た。といっても別に好き好んでいるわけではない。彼は今抗議しているのだ。ある科学者に向かって。

『だから、制限（リミッター）を外してくださいって』

彼の言う制限（リミッター）とは簡単に言えば足枷だ。『守護神（ガーディアン）』はあまりにも強すぎた。そのため、非常時以外は力を抑えるために制限（リミッター）を付加したのだ。

「君の場合制限（リミッター）を取ってしまうと暴れるだろ？　どうせこの前引き

分けたのが気に食わないからとかそんな感じじゃないのか？」

彼と抗議しているのは光祐一郎という科学者だ。彼は『守護神（ガーディアン）』を作り、また世界で脚光を浴びるようになった科学者だ。

「君は少し特訓でもしたらどうだ？」

『だからこれ以上強くならないって』

「いやなる。君を作った僕が言うんだから」

『守護神（ガーディアン）』にも人間と同じように停滞期がある。今のウィンドはそれだ。けれど本来のネットナビにそんな機能はない。だから彼はそんなことは無いと思っているのだ。

『ウイルスをデリートするのがそんなに悪いことなんですか？』

「君が本気を出すと電脳が壊れてしまうから駄目なんだよ」

『別にいいじゃん』

「駄目だ」

はぁっ、と祐一郎は溜め息をついた。『守護神（ガーディアン）』のメンバーの問題児といったらウィンドだろう。彼はリーダーでありながら好戦的なのだ。だが祐一郎が悩ませているのは、そんな彼は非常時にはちゃんと任務を遂行してしまうのでリーダーから降ろせないでいるのだ。

『……だったら熱斗達と――――』

「やめてくれ、ウチの息子もやろうとか言い出しかねない」

別にどちらが負けるとかは関係ない。そんなことは祐一郎にも分からない。だが、それは治安を守る舞台としていささか問題なのだ。放っておけない。

ちなみ、オフィシャルが任務の依頼、科学省が『守護神（ガーディアン）』に伝達、『守護神（ガーディアン）』が動くという感じだ。オフィシャルネットバトラーはオフィシャルから直接依頼が来る。これはオペレーターがいるので何かあっても対処できるからだ。『守護神（ガーディアン）』はまだ信用出きないらしく、科学省が見守っていろということだ。

『彼らも中学生ですよ？　青春真っ只中ですよ？』

「電脳をぶち壊して犯罪者になるのを引き止めて悪いのか？」

だがやはりというか、ウィンドは聞き訳が悪い。

「たしかに君の力に関しては悪いと思っている。どちらに対しても』

ウィンドの力、それは本来光を操る能力だった。けれど実現が難しく、途中から風に変更したのだ。そのため光が中途半端に使え、風も極めるというくらいではなかった。

『それに免じて外してくれ』

もう一度祐一郎は大きな溜め息をついた。やはりウィンドを説得するということ事態が間違っていたのか。そう後悔している祐一郎の背中に乱暴にドアを開ける音が聞こえた。

「ひ、光博士！　ヨーハマシティで謎のネットナビ集団が出現したらしいです！」

「何？」

「ネットナビの集団はまっすぐこちらに向かっているようです！　オフィシャルからも依頼が来ました」

その言葉に祐一郎はウィンドを見た。ウィンドは簡単にこういった。

『どうする？　外すか外さないか。まあ、外さなきゃここがどうなるかは知らないがな』

相手の実力も分からない状況で、あまり外したくは無かった。だが、祐一郎はこう結論付けた。

「『守護神（ガーディアン）』に、出撃要請をかける……！」

『で、どうするかだが……』

ウィンドは周りの五人を見渡しながらいった。彼の周りには『ガイア』のメンバーが集まってきていた。もちろん今回の異常事態のためにだ。

『奇襲か、突破か。どっちがいいと思う?』

その言葉に全員が考え込む。今彼らは謎の集団に対してどう攻撃するかを議論していた。

『この場合は、奇襲がいいかと』

レーヴァテインはあまり考えずにいった。だがそれをプロヴェが反論する。

『突破でいいと思うわ。たしかにどんな連中かは分からないけど、わざわざ時間をかける意味もないし』

科学省からの話では、敵の数は五十だそうだ。たしかに多いが、並のネットナビ程度なら制限(リミッター)無しでも彼らなら倒せる。

『だけど、用心には用心をっていうから奇襲のほうがいいと思うよ?』

だからといって敵がどんな集団かも分からないのだ。もしかしたら電脳獣くらいの化け物染みたネットナビもいるかもしれない、そう考えてみるとやはり奇襲のほうがいい気がする。

『……ゲイボルグは？』

意見がまとまらないのでウィンドはゲイボルグに聞いてみた。

『貴様の意見に任せる』

あまりに期待はずれの返答にウィンドは今のを聞き流した。そしてブラフマに向き直る。

『奇襲、だな。やるならそっちのほうがいい』

遠距離攻撃が多い『ガイア』では奇襲のほうが得意なのだ。もっとも、奇襲などとは本番でやったことが無い。精々訓練程度だ。だからといってどちらが成功確率が高いくらいは彼らにも分かる。故に奇襲の意見が多かった。

『……じゃあ、突破で』

そう、ウィンドは結論付けた。そして彼は歩き出した。それに続いて他も歩き出す。

彼らにとって奇襲と突破では、さほどの問題ではない、ウィンドはただ意見を聞いただけだ。この議論は多数決ではない、ウィンドの独断だ。一応聞いているのは、もしかしたら気が変わるかもしれないからだ。別にご飯を右手で食べようが左手で食べようか迷うのと同じで、今回の任務も勝てばいいのだから。今回の任務もとても簡単だ。

『いくぞ、おまえらぁ！』

その言葉と共に黒い集団は歩き出した。数は先ほどまでとは違って三百、その数を使ってネットナビを何体も虐殺してきた。理由は簡単、ニホンを落とすためだ。ただそれだけの願いをかなえるために何体も虐殺した。理由は簡単、オペレーターに憎しみの心を抱かせるため。

その集団の首謀者、いやこの集団を作り出した者の外見は簡単で、黒い幽霊だ。形状は不安定そうで、今にも消えてしまいそう。だがそれでいて不気味さを醸し出していた。彼は集団の真ん中に居た。彼を守るように集団は動いているが、彼の周りに居るのは彼とは姿が違っていた。それこそ、彼が殺してきたネットナビのような形状だ。

『ったく、遠いもんだぜ……』

彼は今電脳を歩き回っているのだが、やはり外から行くよりも時間がかかる。そのことに彼は溜め息をついた。けれど、そんなことも言ってられない。彼の目的のためには電脳からではなければいけないのだから。

『科学省はまだなのか？　ってかここはまだヨーハマか。くそっ』

毒づいても距離は短くならない。イラついている彼の十数メートル前にネットナビが現れる。青、黄、緑、赤、黒、銀の六色だ。

『……さしづめ科学省からだろう。おまえら雑魚に用は無い。やれ』

そして、三百体は一斉に六体に襲い掛かった、数という力で。やがて、その電脳は黒で埋め尽くされた。

『終わりか……呆気ない』

『寝言か？』

その言葉で三百の軍勢の約三割が消し飛んだ。いや、どちらかといえば消えたに近いと思う。何せ残骸すら残らなかったのだから。

その出来事が当たり前だと思っているネットナビは、淡々と告げた。

『おまえが今回の面倒臭い奴らのボスでいいんだな』

『……ああ、そうだ』

その言葉に銀色は頷き、仲間に命令を出す。

『ブラフマ、アサルト、プロヴェ、レーヴァテインはゲイボルグと俺の援護。ゲイボルグは適当に引っ掻き回せ』

その言葉と同時に六体は散った。そこから各々の仕事を始める。あるものは矢を放ち、あるものは容赦なく銃弾を掃射し、あるものは地面から大量の植物で敵を圧死させ、あるものは劫火で敵を焼いた。

『面白いな、おまえら』

彼はそう銀色のネットナビに言った。対して銀色のネットナビは刀を抜いてこういう。

『そうか？　おまえの姿のほうが面白いけど』

お互いは数秒の睨み合いの末、攻撃を繰り出した。風と光、それは本来ぶつかり合うはずの無い物質だが、この電脳世界の中でそれは通用しない。現実世界では考えられないほどの事が起きて、地面が抉れる。

『俺の名前はヘイト。憎しみを司る者』

『俺の名前はウィンド、シルバー・ウィンド。出来損ないだ』

二体は相手に向かって飛び出し、攻撃を始める。相手を殺すために。ただそれだけのために。

過去編？　２００年前？（後書き）

なんか神の助言の総合ポイントがヤバイ……

なぜモンハンと神の助言を書いたかはこの小説が書き終わったら書かせてもらいたいと思います。

どちらもよろしくお願いしますね。

では、感想待ってます！

ってか一話の長さこれくらいでいいですか？

過去編？　２００年前？

『遅えぞ！』

その言葉と共にウィンドはヘイトに突っ込んだ。音速の半分程度といってもそれなりに早い。ただのネットナビなら何があったかも分からずあの世に行っていただろう。けれどヘイトは違った。

『どっちが！』

ウィンドがリーチに入った瞬間に彼は空中から黒い鎌を出現させる。大きさはニメートル弱と言ったところだろうか。それを乱暴に振るう。刀と鎌がぶつかり火花を散らす。けれどどちらも相手を傷つけることは敵わなかった。

『消えろ』

ヘイトが左手を構え、そこから黄色い極太のレーザーを放つ。それは自ら作った集団をも消し飛ばした。けれどウィンドは傷を負っていない。だがどちらもその事に対して感想を抱かない。そのときにはもう交錯していた。

無言でウィンドは刀を振るった。それは風の衝撃波を生み、ヘイトに向かって飛んでいく。それに対してヘイトも鎌をふるって憎しみで出来た衝撃波を放つ。空気が震え、地面が抉れていく。視界が数秒見えなくなった。煙幕が発生したのだ。

『邪魔なんだよ』

それをウィンドは風を巻き起こして吹き飛ばした。烈風はヘイトを呑み込み、ヘイトだけの視界を遮りその隙に攻撃できるはずだった。だが予想外のことがおきた。居ないのだ、ヘイトが。どこにもいない。上下左右、どこを見渡しても居ない。

ヘイトを探しているウィンドの背後に、黒い粒子が集まっていく。それは徐々に輪郭を作っていき、やがてヘイトになった。

『いただき！』

完璧な不意打ち、決して避けることのできない一撃。それは風を引き裂き、敵の首を刈ろうと進む。だが、それは本の少しずつズレていき、結局は当たらなかった。

『……は？』

『ごっさんでした』

顔面にウィンドの肘鉄がもろに当たった。体が無理矢理に吹っ飛ばされて、壁にぶつかった。そう。風の壁に。

『どうだ、自分よりも格段に潰される感じは。結構恐いだろう？』

ゆっくりとウィンドはヘイトに歩み寄る。だが彼は慢心などしていない。ただ相手を叩き潰すそのときまで、彼はもう刀を鞘に戻さないだろう。

『なめるんじゃねえぞ！』

ヘイトはむくりと立ち上がったかと思うと、右手と左手をかざした。

それを見てウィンドは咄嗟に咄嗟に避けようとした。その行為自体に間違いは無い。だが

『馬鹿だな！』

見るとウィンドの周りに黒い球体数十個が浮かんでいた。それはウィンドを取り囲んでいる。だがそんなことを考えさせてくれる時間もくれないまま、球体はレーザーをウィンドに放った。

『時間取らせてるんじゃねえ！　俺はエグゼと戦わなきゃいけないんだからな』

『エグゼ……ああロックマンのことか』

その言葉にヘイトは少々驚いたが、さっきまでウィンドがいた場所に直線状のレーザーを放つ。けれどそれは避けられた。光速の速さを有するレーザーを。

『悪いが、ロックマンは俺がぶっ潰すって決めてな。やらせるわけにはいかないんだ』

疑問が浮かび上がった。どうやって避けた？　高速を誇るレーザーを。全方位から放たれたレーザーを。

『疑問か？　ただ単に光速で移動しただけだけど……』

ヘイトの顔が引きつった。ヘイトは光速の攻撃は放てるが、光速に対応することが出来る。ようは野球でボールを時速百キロで投げられても百キロで走れないのと似ている。

（つってもまあ、もう動けないけどな……）

ウィンドが光速で移動するのには大量のエネルギーを使用し、さらに一度使ったら四日は使えない。それを使ってしまったのだからこれからの戦いは少しきついだろう。だが、それも少しだ。

『さあ、まだ始まったばっかだぞ！』

その言葉と共にウィンドは飛び出す。さっきほどの速さではないが、それでもヘイトとの距離を縮めるのには申し分ない。一瞬で目の前まで接近した。

『バーストウィンド』

途端、空気が破裂した。厳密に言えば風の刃がヘイトに襲い掛かり、そして風の刃同士でぶつかった結果とてつもないエネルギーがその場に集中し、拡散したのだ。

『ぐあっ！』

短い悲鳴だが、それは別に痛みが無かったわけではない。意識が飛びそうになったのだ。拡散した空気と一緒に吹っ飛ばされたヘイトは何メートルか飛んだあとに、背後から来る風の塊にぶつかった。

一撃に留まらず連撃を入れるのがウィンドの戦い方。それが風を生かせる戦いだから、それがいくら一方的でも彼は構わない。

『この……化け物が』

『おまえみたいなイレギュラーな能力に言われたくないな』

とはいってもヘイトとウィンドの差は結構なものだ。山で言えばフジ山とヒマナラ山脈並みだ。それを埋められる物など、存在しない。あって不意打ちだが、それはもう通用しない。ウィンドは存在する者の場所を感じ取ることが出来る（厳密に言えば空気の揺れによって感知する）。

『さあ、止めだ』

容赦など存在しない。ただ自らの仕事をするために、彼は刀を振るう。

『さようならだ』

風が、吹いた。

過去編？　２００年前？（後書き）

次話も過去編！

過去編？　２００年前？（前書き）

更新遅れて申し訳ない！

過去編？　２００年前？

「ヘイトは確認できたか？」

祐一郎の問いに研究者は首を横に振った。そうか、といって祐一郎も自分のモニタに目を戻す。

『はいはい、こっちが悪かったよ』

そこに映っているのはいつもよりも二倍近く不機嫌なウィンドだ。それには四日前のことが深く関わっている。それを簡単にいったら、ヘイトを仕留め損なった。格好つけて仕留め損なったのだ。それはそれは『守護神（ガーディアン）』の中でも失笑と軽蔑の眼差しを向けられた物だ。

『だけど奴は四日で治るほどの傷では無かったぞ』

「君の報告では特殊な能力だと聞いている。完全に治っている可能

性のほうが高い」

祐一郎の返事により一層機嫌を悪くする。余程四日前の戦いに後悔しているのだろう。まあ、それも自業自得の一言で終わってしまうのだが。

『心配すんな。奴はあんまり強くない』

「何を言っている、現に――――」

『ようするに奴は俺達とは場数が違う』

「……どういうことだ？」

『そのまんまの意味だよ』

ウィンドがいいたいのは、つまりは経験が浅いということだ。経験が浅いから自分達に負けた、そういいたいようだった。

『何も考えず攻めてきたか、もしくは何かに焦っているんじゃないのか？』

けれど思いつくわけでもない。ヘイトといういきなり現れた意味不明なネットナビの目的など、知ることすら出きない。

『……つっても考える必要もなくなったらしいぜ？』

「え？」

祐一郎の言葉を掻き消すようにメールの受信音がなった。そこには、

レーダーに何者かが引っかかったという文章と、インターネットを監視するカメラからの映像が入っていた。

「ヘイト……！」

『俺達は行くぜ』

「すぐに熱斗たちも行かせる。それまで時間を稼いでくれ！」

『……俺じゃ信用できないか』

だがそれに文句をウィンドは言えない。失敗してしまったのは自分だからそこは抑えておく。ブツッと回線が切れた。もう出発したのだろう。

「熱斗、ああそうだ。場所は秋原エリア。『守護神（ガーディアン）』も向かっている。ロックマンをプラグインして、ヘイトを倒してくれ」

この時代、最後の戦いが始まった

『またか……！』

ヘイトの舌打ちとともにウィンド達六体は現れる。

『結構治ってるじゃねえか。良かったよ』

『嘘言ってるんじゃねえ！』

四日あれば大抵の傷は修復できる。そして憎しみの心を変換するヘイトにとってそれは造作も無いこと。自ら招いたこと以外で世界には数え切れないほどそんなものはある。

『いや、やり残したからきっちりやりたいだろ？　もう一度ぶっ壊せるなんて嬉しい限りじゃねえか』

最悪な性格だ、とヘイトは心の底から思う。自分が知っている中で三本の指に入るくらいに、ウィンドの性格は悪い。

『今度は、僕らもいるから逃げられないよ』

ジャキッという音が聞こえる。見ればアサルトがヘイトを殺すために銃弾をセットしていた。二丁の銃から今にも電撃を帯びた銃弾が放たれそうなプレッシャーがヘイトを押しつぶそうとしている。

『そうですよ、あなたには逃げられない』

『絶対に倒させてもらうわ』

『悪いが、ここで死んでくれ』

レーヴァテイン、プロヴェ、ブラフマは自分の獲物を構えつつヘイトを睨みつける。やるしかない、とヘイトは前回のように空中に鎌を作る。それを右手に持って構えた。

『じゃあ、行こうか』

『待て』

ウィンドを止めたのは、ゲイボルグだった。何故止めるか、ウィンドには理解できなかった。

『なんで止める？』

『……来たぞ』

ゲイボルグのその言葉により、誰かがプラグインされた。それは青色で、胸に赤と黒のロゴマークがある。

『エグゼ……』

まるで、ようやく探していた物を見つけたようにヘイトは呟いた。

『ウィンド、君を監視するために僕は来たんだから先に始めないでくれ』

少々苛立ったように、この時代のロックマンはウィンドを叱りつけ

た。ウィンドは懲りている様子も無く、ただぶっきらぼうに返事をした。

『悪かったよ。ブルースは？』

『炎山君も他の用事に駆り出されてるみたい』

『そうか、まあいいや』

別に一人くらい増えても減ってもあまり変わらないのどちらも同じだ。けれど、ヘイトはまるでエグゼが来てから様子が変わった。鎌を持つ腕が震えている。それは恐れではなく、歓喜。

『ようやく会えたな、エグゼ！』

『僕は君を知らないけどね』

あくまで冷静に、エグゼは答える。

『熱斗君、オペレートお願い』

「分かった。ウィンド達はロックマンを援護してくれ」

『いきなり出てきてそれかよ』

まあ、それに異議はないけどなと吐き捨てウィンドも刀を鞘から抜いた。銀色の輝きが眩しい。それは太陽のようで、また闇を消す一筋の光のようでもあった。

「バトルオペレーション　セット」

『イン！』

エグゼの掛け声とともに、七対一の戦いが、始まった。

『フン！』

戦いは一進一退だった。四日前とは違い、何かを果たそうという気持ちが表れていた。それが何なのかは、考えないほうがおかしかった。

『暗黒の槍（ダークネスランス）』

ダークチップの力を借りたゲイボルグの一撃がヘイトに向かって放

たれる。けれどそれはどこからともなく現われたレーザーによって相殺された。

『ぐっ！』

レーザーは槍を押し返し、さらにゲイボルグも吹っ飛ばした。けれどそれを見て他の者も立ち止まっているわけでもない。各々の得意とする攻撃をヘイトに放つ。

『フレイムタワー！』

地面から五本の全てを焼き払う火柱が吹き出て、ヘイトに直撃した。けれど、それも黒い霧のようなものに阻まれている。

（おかしいな、これはあり得ない）

どんなに前回のコンディションが悪かろうが、ここまで互角に戦えるわけが無い。簡単に言えば地区初戦負けの選手が全国大会優勝の選手とやって互角に戦えるわけが無いのと同じだ。

『ウォーターサルンガ！』

『リーフカッター！』

今度は鎌でなぎ払われ、ヘイトに一切攻撃があたらない。

『どうしたぁ？　こんなに弱いのか！　ったく手間かけさすんじゃねえぞ』

けれどそれを黙らせるようにピンク色の弾丸がヘイトに直撃した。

ダメージこそ少ないものの、それはヘイトを怒らせるのには充分だった。

『エグゼ、てめぇから殺してやる！』

大振りで鎌が振るわれ、そこから黒い衝撃波が放たれた。とっさに反応したプロヴェが植物の盾で守ろうとするが、それは糸も簡単に破壊され、ロックマンに直撃した。

『ったくてめぇなんかを殺しに来てやったんだぞ？　感謝しろってんだ』

『はいはい、分かったよ』

ウィンドが手をかざした。その途端、竜巻が発生する。全てを呑み込み破壊する竜巻は、うねりを上げてヘイトに向かっていく。けれど、それは鎌で振るわれただけで消し飛んだ。

『雑魚は引っ込んでろ！　アロマトウスカオス！』

黒いオーラが濁流のように襲い掛かる。あまりの攻撃範囲によけることも出きない。ただ、呑まれるだけだった。

『あと五人、楽勝だな！』

一気に二人が居なくなり、驚く五体のネットナビ。二人の大きな存在が消えたのだ。いくら軍隊のようなプログラミングをされているからといって、それはさすがに消せない。

『――ってわけでもないらしいぜ？』

どこからともなく声が聞こえた。声の音源からは、球状の青いバリアが張られていた。そこに、二体のネットナビがいた。エグゼと、ウィンド。

『馬鹿な、さっきは確実に――――』

『ちょっとした手品さ』

エグゼは軽くあしらう。

『じゃあ、こっちもやらせてもらうぜ。解放状態（バーストモード）』

その言葉の意味が分からなかったヘイトはただ首を傾げるだけだった。

『ウォーティア　全てを潤す水』

ボツ、とブラフマが呟いた。それに続くようにアサルトも呟く。

『ヴォルト　全てをなぎ払う雷撃』

どんどん、言葉は続いていく。

『シクサ　全てを包容する樹林』

『カルマ　全てを焼く獄炎』

『アトル　全てを染める深き闇』

そして最後の一体が告げる。

『ユフィル　全てを照らす光』

結果、戦況が変わった。途端にだ。さっまで優勢だったはずの立場がガラリと変わってしまって脳の処理が追いつかないで居る。

『オーシャンズウロボロス！』

荒れ狂う波の如く、蛇は地面を滑っていく。それはヘイトのバリアでは防ぐことが出来ず、片手で支えている状態だ。

『ライトニングイーグル！』

光速の速さで鷲は急接近する。ヘイトはもう片方の手でそれを受け止める。ガリガリガリッと何かを削るような音が聞こえた。鎌は自然と手から離れ、地面に突き刺さる。

『ヘルプラント！』

地面を一瞬で覆ってしまうような植物がヘイトを刺そうとする。けれどそれは驚くことに、地面に突き刺さった鎌からのオーラによって防がれる。

『ボルケーノドラゴン！』

『ブラックサン！』

両手を封じられ、避ける術のない攻撃。黒き太陽と紅き龍は容赦なくヘイトを燃やす。黒と紅の爆炎のせいで、煙が発生する。

『……なめんじゃねえぞ！』

けれどヘイトはまだ生きていた。五発の物凄い威力の攻撃を受けてなお、ヘイトは生きていた。

『シャイニングセイバー』

ウィンドの刀が長くなっていた。厳密に言えば光で構築された刃だ。それは噴射に似たようにまるで形が整っていない。例を上げればチェーンソーがいいだろうか。回っているから形状が変わってしまっているのだ。

『これで終わりだよ、ヘイト。四日間お疲れ様』

『馬鹿が！　当たると思ったか？　無理だな！』

ウィンドの攻撃はまだチャージが終わっていない。その間に攻撃でもされれば終わりだ。

『それはどうかな？』

『ッ！』

忘れていたのだ。この場で一番強いものを。ヘイトは忘れてしまった。だから、バリアの展開も遅れてしまった。

『プログラムアドバンス　ギガキャノン！』

最強の砲弾が、ヘイトに向かって飛んでいった。ギリギリで避ける

ことに成功したヘイト。だが

『終わりだよ』

体勢が崩れ、行動に移すことが出来ない。そしてもう、チャージは終わってしまった。

『喰らえぇぇっ！』

光速で接近したウィンドは、たった一度だけ光速で刀を振るうと鞘に収めた。聞こえるのは、絶叫だけ。

過去編？　２００年前？

『がああああああああっ！』

絶叫、まるでこの世の負の感情が爆発したような声だった。そんなもの聞いたことは無いのだが、けれどもヘイトのその声はそんな感じだった。

『わざわざ力使わせるんじゃねえよ』

もう、唐突に始まった戦いは終わった。ヘイトに殺されたネットナビは約五千体。ヘイト一体だけの命でどうにかなるわけでもなかった。本当なら生け捕りのはずだったが、こんな奴を生かしておく必要が無かった。

『お疲れ様、ウィンド』

『おまえにだけは言われたくないよ』

「終わり良ければ全て良し、だろ？」

熱斗にまでそういわれてしまえばもうウィンドに言い返すことは出来ない。一応上司に当たる地位にいるのだから。

『勝手に死んだって思ってんじゃねえぞ！』

が、ヘイトはまだ生きていた。ウィンドの「シャイニングセイバー」を受けてもなお、生きていた。

『もう、うざってぇ！　エグゼ、てめぇのオペレーターを殺してやる！』

『寝言は寝て言え。たしかにコピーロイドは――――』

『そうかい！　だったらあとで後悔するなよ？　いまならオペレーターは逃がせるぞ！？』

何が言いたいのかが分からなかった。たしかに熱斗はコピーロイドを持ってきていたらしい。それはウィンドは分かっていた。だがそれはオフィシャル専用に作られたもので、他のネットナビには使えない。特殊なプロテクトが施されているのだ。

『じゃあ、おまえらとはさらばだ！』

そういって、ヘイトはプラグアウトした。あとに残るのは、疑問だけ。

『……ウィンド』

『なんだ？』

『行ってくる』

やはり心配なのだろう。それは彼と熱斗が絆で結ばれているからだ。止める必要が無かった。

『行ってこい。んで守ってやれ。あそこまでしぶといんなら……デリートしなくてもいいぞ』

『アドバイスありがとう。じゃあ、行ってくるよ』

『ほぉら、見っけたぁ！』

現実世界に実体化したヘイトは、すぐに熱斗は見つかってしまった。なぜヘイトが実体化出来たのかは理解できなかったが、それでも今がどんな状況下は熱斗には理解できだ。

『熱斗君！』

「ッ！　ロックマン」

『いますぐコピーロイドに転送して！　早く！』

「あ、ああ分かった」

熱斗は近くに立てかけてあったコピーロイドにエグゼを転送した。マネキンのような華奢な人形が、徐々にエグゼの形を作っていく。

『ッ！？　この時代でも実体化できたのか？　……まあいい』

訳の分からないことを言うヘイトだが、その体はもうボロボロだった。だがエグゼは熱斗を庇いながらでも戦わなければいけない状況からして、決して不利というわけでもなかった。

『さっさと死ね！』

「バトルチップ　ドリームオーラ！」

エグゼが熱斗を庇うように前に立つと、熱斗はエグゼを守るためにチップを転送する。オーラはヘイトの放った衝撃波を防ぎ、熱斗たちの立っている場所以外を削っていく。

「目が、開けられない……！」

あまりの衝撃に生身の熱斗は砂埃と衝撃で眼が開けられないでいた。だからこそ、遅れてしまった。

『たった一度防いだくらいで止まってんじゃねえぞ』

エグゼに急接近したヘイトはドリームオーラを鎌で引き裂いた。胸を斜めに切られ、エグゼは後方に吹っ飛ぶ。

『がはっ！』

「ロックマン！」

『終わりだな、オペレーター』

「くっ……」

コピーロイドの耐久力は低い。もうエグゼは動けないかもしれない。そして熱斗にはヘイトに対抗するだけの力が無い。詰みだ。

『恨まないでくれよ』

鎌を大きく振りかぶって、熱斗に狙いを定める。そして、振り下ろす――――。

ガギャッ、と肉を切り裂く音ではない音が聞こえた。死への恐怖から目を瞑っていた熱斗は、恐る恐る目を開ける。

見えたのは、銀色の剣士だった。

『ここでてめぇか！』

『悪い熱斗。そしてロックマン』

特に謝る気もないのか、素っ気なくウィンドはいった。鎌を軽々と受け止めているのを見ると、余裕らしい。

『ちっ！　……ここは退く！』

『待てよ』

『ビッグクランチ！』

その瞬間、ウィンドが重力のような物に抑え付けられた。だがそれは物理的なものではなく、もっと他のものであることはウィンドには理解できた。一秒だけだったが、その間にはもうヘイトは瞬間移動でもしてどこかに逃げられた。

『……ロックマン』

『ごめん、ウィンド。油断しちゃった』

『熱斗、ＰＥＴに戻してやれ』

『ああ、分かった』

エグゼはなんとかＰＥＴに戻った。幸いそこまでのダメージは無かったらしい。

「俺も、戦えるようにした方がいいな……」

熱斗の悔やんでいる声には、ウィンドは何もいえなかった。

『くそっ！　殺し損ねた！』

怒りを露にしたヘイトは誰にも目に付かない路地裏に居た。

『もう、こんなところに用はねえ！』

そういうと、彼の目の前に小さい黒い穴が出現する。それは徐々に大きくなり、そしてヘイトが通ることのできるほどまで成長する。

『俺はまだ終わらねえ……！』

こうして、ヘイトは復讐をする――――

過去編？　２００年前？（後書き）

感想待ってます

いつのまにか７０ポイント突破！　ありがとうございます！

第１３０話　最終決戦

『とまあ、こんな感じだ。分かってくれたかな？』

ヘイトはそう締めくくった。

「逆恨みだね」

『知ってるさ。でもな、それでも憎いことには関係ない』

それを知っていても、やらなければ気がすまなかった。後ろめたい気持ちがあるにもかかわらずやってしまう。たとえば、校則で髪を染めてはいけないのに染めてしまったり。たとえばいじめてはいけないのに友達をいじめたり。たとえば、殺してはいけないのに殺してしまったり。

「僕が言うのも何だけど、子供だね」

『あ？』

「だってそうでしょ？　君には我慢が出来ていない。そんなこと我慢すればいいのに、それが出来ないんでしょ？」

授業中騒いでしまう人がいるとしよう。それはほとんどが我慢が出来ないからなのだ。騒いでしまうのには目立ちたいとかいろいろな理由が存在するが、根本的な理由は精神年齢が子供だから。

「そんなことでここまでやるなんて、幼稚だよ」

たかが一人に復讐するのに世界規模まで発展させなきゃいけないわけではない。汚いやり方でしか、目的が達成出来ないからこんなことをする。スバルはその行為を幼稚と評価した。

「分かってるよ。だから、ここで終わらせるんだ」

男は鎌を生成し、それを右手で掴んだ。男の身長が百五十くらいだとすれば、鎌は二メートルを越していた。あまりにも不釣合いなそれは、さながら死神のようだった。

「君達を殺したあとに何が見えるか、僕はそれを知りたい。それがたとえどんな答えでも」

『やっぱり戦わなきゃいけないらしいな！』

『元々そのつもりだ！』

ウォーロックとヘイトが睨みあう。全員が臨戦態勢に入るが、何故か男は構えもしない。

『どうした？　もしかして降参か？』

コーヴァスの声が響いた。たしかにヘイトの能力は強大だが、それでも八対一に勝てるほどではない。相討ちならできるが、それでは彼らがこれまでやってきたことが意味を成さない。

「たしかに八対一はキツイ。でも、逆に言えば――」

「数を揃えればいいんだろ？」

そういうと同時に、男の左右に一体ずつ黒い塊が出来る。それはヘイトを形作り、その分身もまたヘイトを作る。

『なっ……！』

ジェミニが息を呑むのも当然だろう。なにぜ敵は男を入れれば数は十五にもなってしまったのだから。スバル側の人数の約二倍にもなった。

「あんまり数を増やしちゃうと、こっちの力も弱まるからね。ヘイトは昔それで失敗したから」

『うるせえぞ！』

だが、そんなことで仲間割れするわけでもない。今するくらいだったら過去でも数回はやっているはずである。過去でやっていたらとっくに別れていそうだが、それが無いのだから軽口なのだろう

「ま、でもこれなら君達にも無理なく勝てる。最後の決戦にしてはいいだろう」

『へっ！　まるで一人でも勝てる口ぶりだな』

「そうだけど、何か？」

その言葉は、今までの言葉とは違って冷めていた。まるでそれが当

然のように。言わせるなといわんばかりに。

「僕の憎しみの心がどれだけの物かは君達には理解出来ないと思う。その時点で君達の負けだ」

「だったら君は僕達の気持ちを理解できてる？」

「できれば戦いたくない、だろ？　その気持ちでも負けている」

的は射ている。だけどそれだけでもない。それを男は理解しているのだろうか？　人とはいろいろな感情、思いで動いている。憎しみと怒り、この感情は二つともあることもある。歓喜と達成感、後悔と悲しみ、それに似たようにスバル達にも他に思いがある。

「……うだうだ言ってても仕方が無い、始めるよ？」

ようやく男は鎌を構えた。それは、もう始めたいという意思表示でもある。

「スバル君、僕達はヘイトの分身を相手する！　だから君は、思う存分彼と戦ってくれ！」

「ツカサ君……分かった！」

スバル達も再び武器を構える。

「そういえば、名乗っていなかったね。僕の名前はヘイト・ギャラクシー」

「憎しみの……銀河」

「そういうことだね。ま、これで心置きなく戦える」

『いくぞスバル！』

「ラストバトル　ライド　オン！」

「これで終っわりー！」

少年は黒い獣を手の甲に装着されている剣で容赦なく真っ二つにした。二つの体は、まるで溶けるように消えていく。

「あれ、もう終わり？」

『……くるぞ』

だが、消えたはずの体はまた元に戻り、獣の形を作る。さっきよりも一回り大きく、いかにも強そうな雰囲気を醸し出している。

「弱い奴を何回も倒すのって、飽きるんだけどな……」

少年はだるそうに剣を構える。その目には、勝つとかそういう気持ちが無い。余程弱い奴と戦いたくないのか、腕がだらんとしている。

『気を抜くな、死ぬぞ』

「分かってるよ、こうなれば再生するのをやめたくなるぐらいグロい殺し方をしてやるよ」

若干言葉が荒くなりつつある少年は、一歩を踏み出した。ただ獲物を、殺すために。

「まだ繋がらないの？」

「そ、そう言われましても……」

ＷＡＸＡからどうやっても中継出来ないでいた。相手はスバルを倒したのを伝えればいいのだから、通信を
全部拒否してもいいのだ。特殊なバリア、ディメンショナルエリアがどうしても遮断してしまっている。
「手詰まりじゃねえか」
カイはつまらなそうにいう。キザマロとペディアがどんなにがんばろうが繋げない事に怒りもせず、ただ平然としていた。
「あなたもどうすればいいか考えなさいよ！」
「つってもな……」
腕を組んで考えても、思いつかないものは思いつかない。だが、そこでふとキザマロは何かに気付いたように言った。
「アンテナを使うのはどうでしょう？」
「アンテナ？」
「つまり中継地点を作るって事です」
携帯でもそうだが、ニホンからアメロッパまで電話をかけるには中継地点が必要なのだ。こんかいもかなりの距離があるから電波が弱まり、それで繋がらないでいる。ならば、それを補強すれば言い繋がるのではないかというのがキザマロの見解だ。
「ペディアは演算をするためアンテナにはできません」

「モードは……いくまで時間がかかるわ」

「ということは……」

消極的に行くと、カイのウィザード、ゲイルになる。

「ゲイル、行くか？」

『……別にいいけど、だが――――』

「じゃあ、行って来い。ここで閉じこもってても仕方ないだろ？」

気遣い、カイにしては珍しい行為だった。

「では、ペディアがゲイルをオペレートします」

「分かった。じゃあ頼むぞ、ゲイル」

『……ああ』

そういって、ゲイルは飛び立った。窓から出て行く様は、まるで鳥のようだった。日の光を浴びる、白銀の鳥。それがもたらすのは光か闇か。

第１３０話　最終決戦（後書き）

あと二十話もすれば終わりか……長かったな～

では、感想メッチャ待ってます

第１３１話　王者

「バトルカード　ソードファイター！」

急接近して連撃を放とうとするスバルに対して、男はスバルの持つ剣の根元を止める。バットや剣などは先っぽの速度が一番速い。けれど根元は案外たいしたことがないものだ。男はそれをうまく利用したのだ。

「遅いよ」

「くっ……」

やはりエグゼノイズがなければ何も出来ないのだろうか。そんな不安がスバルの胸に渦巻く。

「もっと、がんばってよ！」

突然右方向からのレーザーがスバルに向かって発射される。一発ずつだが、それが繰り返されては回避の連続でしかない。

ミソラなどもそんな状況に立たされているのか、スバルの耳には爆音しか聞こえてこない。けれど見るなどということはできない。もし余所見でもしたら、スバルの首が跳ね飛ぶだろう。

「うん、まあまあかな？　準備運動にしては」

「これが準備運動だって？」

つまりはまだまだ本気ではないということ、分かっているからと言ってこれはショックだった。けれど同時に疑問も浮かび上がった。

男は初めて電波変換したのはいつだろう？　ということだ。つまりはある程度の経験が無ければここまで戦えるわけが無い。経験で言えばスバルも伊達じゃない。それを上回ることができるこの男は、いつ電波変換したのだろう？　どうやって短時間で強くなれたのだろう。

「まあ、この程度だったらヘイトが『ガイア』を掘り出した意味も無いかな？」

「掘り出した……？」

「そう、偶然ね。ま、僕はそのとき居なかったけどね。なんでもどれくらい時間が経ったか調べるために、ＷＡＸＡの前、つまりは科学省のデータを漁っていたら『ガイア』がコールドスリープ状態で見つかったらしい」

ここでまた謎が増えた。科学省はなぜ『ガイア』を残したのだろうか。悪用されてしまうかもしれないものを、なぜ残したのだろうか。必要ならコールドスリープにする必要も無い。

そして、いったいあとどれくらいの謎があるのだろうか。

「『ガイア』、なんで残ってたんだろうね？　謎でしかたが無いけど、それでもヘイトの復讐の一部にはなったよ。彼らにとっては最悪の死じゃない？　守る側だったものが攻撃する側にされて、デリートされたんだから」

そんなことどうしようもないのに、そこまでするのは復讐するということだけにしか考えられないからだろうか。ここまでくると惨めに思えてくる。

「……君にも最悪な死を味あわせてあげる」

鎌が振られた。大気を引き裂き、憎しみの力を黒い衝撃波と変えて放たれたそれは、大地を削った。けれどスバルも黙って当たるわけでもない。

「バトルカード　オーラ　ホーリーパネル！」

二枚のバトルカードを使い、衝撃波を緩和する。けれどそれで全て防げるわけではない。余波をくらい、数メートル後方に飛ぶ。

「ならっ、バトルカード　マッドバルカン！」

空中でバランスをとり、右手から乱射する。だが弾はすべて見切られてしまう。ただ数度鎌を振るうだけで攻撃は全て無に帰した。

『くそっ、全然当たらねえ……！』

『たかがバトルカードだ。俺らに勝てるわけがねえ！』

絶大、憎しみの力とはこんなにも強大なのかと思い知らされる。けど、それで手がとまるようなことはない。ただ前に、進む。

「アドラステア！」

途端、空中に黒いサッカーボールのような物が数十個出現する。そ

れはフワフワと浮いていたが、やがて全てがスバルに降り注いだ。

爆発、轟音、閃光、それで全てが塗りつぶされた。周りで戦っていた者も驚いてスバルを確認しようとするが、もうもうと立ち上る煙と分身のせいでそれは叶わなかった。

「スバル君！」

誰の声なのか、誰にも分からなかった。ただ、スバルが危険な状況になっていることだけは分かった。そして、無事でいることしか願えない自分が、恨めしかった。

「終わっちゃったかな？」

半分本気で言う男だが、すぐにそれは否定した。なぜならば煙が一気に四方に吹き飛んだからだ。何かの力なのか、大量のノイズが周囲に広がった。

「ノイズ、ねえ……」

「それが君の本当の力か、ロックマン」

ブラックエースとレッドジョーカーの合体だ。キングの技術は合体を可能にしてしまった。色はブラックエースのを基準に紅いラインが入っている。右手に持っているのは漆黒の大剣。装備されているのは紅き鎧。

「――二重究極変身（デュアルファイナライズ）　銀河王（ギャラクシーキング）！」

王国（サテラポリス）の王者として、スバルは仲間を助けるため、この野望を砕くために剣を持った。

銀河と銀河が、衝突する――

第１３１話　王者（後書き）

短めですね、次回は一気に書きたいと思います

ギャラクシーキングダムは咄嗟に考え付きました……

ヤバイな俺も……

五月中には終わらせたい！　けどちゃんと書きたい！

では、感想待ってます

第１３２話　衝突

「銀河と銀河、か」

『おもしれぇ……ぶっ潰しがいがあるねえ！』

スバルは漆黒の大剣を、男は漆黒の鎌を構える。数秒の沈黙とともに、二人は消えた。周波数変換ではない、単純に飛んだだけだ。

次に見えたときは、二人は空中で交わっていた。スバルはバーニアで飛んでいたが、男は翼があるわけでもないのに空中でも立っていた。きっと電波で足場でも作っているのだろう。

「はぁっ！」

スバルは剣を横薙ぎに振るう。遠心力を使ったその攻撃は、莫大な衝撃を生む。それに対して男は縦に振るった。より厳密に言えばスバルの頭を。

『やらせるか！』

それをウォーロックが爪で受け止める。一瞬だ、一瞬だけ時間が稼げた。それを無駄にしないように思い切りスバルは振るった。

が、剣は急停止した。男が止めたわけではない、スバルが止めたのだ。

「くっ！」

理由は簡単だ、鎌が突然爆発したからだ。それを予知してスバルは避けた。

「面白いだろ？　これが人の心だよ」

爆発の正体は黒炎だった。一気に酸素を燃やした炎は爆発するような感じで鎌に纏われたのだ。ゆらりゆらりと揺れるそれは、人の心を表しているのだろうか。

「面白いだろ？　まあ、電波で出来ているけどね」

面白いとかそういう次元ではない。ヘイトという力に驚く。が、それでも電波は電波。ノイズを流し込めばそれで分散されてしまう。

「ソニックブレード！」

音速の速さでスバルは男に突っ込む。剣にはノイズが流し込まれており、電波を分散するはずだ。

けれど、それは叶わなかった。結果はただ剣と鎌がぶつかっただけ。それだけだった。何もおきない。炎は燃え上がっているし、鎌とは鍔迫り合いの状態になっている。

空気では特に問題もない。肉眼では。

「再生能力……」

「詳しく言えばノイズを使っているけどね」

敵もノイズに適応した電波人間。ノイズで再生することも出来ると

いうことだろう。ある程度までのノイズならば耐えることは出来る。そう、ある程度なら。

スバルのメテオノイズジェネレーターとは言うならば印刷機だ。多少のノイズでもあれば数秒で男が耐えられないくらいの量にはなる。

バーニアによって男から離れ、スバルはもう一度剣を握り締めた。そしてバーニアの出力を一気に上げ、音速の域を超えるほどに速度は上がった。

「これで、どうだ！」

音速を超えるほどになった速度は、男には止めることが出来ない。鎌で防いだが、勢いが殺せず後ろに吹っ飛ぶ。

「駄目か……」

男は無言で体勢を立て直した。手に持つ鎌には何の変化もない。ノイズを流すまえに吹っ飛んでしまったためだ。

が、どれくらいの勢いなら男が受け止めきれないかは分かった。次は確実に当てる。そう思って攻撃の準備をしていたが、男が不気味な笑みを浮かべていたのを見て動きが止まった。

「いいねえ、本当に。楽しいよ」

男は楽しんでいた。この戦いを。楽しみにしていたからだろうか、それとも想像以上の戦いだったからだろうか。どちらか分からないが、とにかく男は楽しんでいた。心の底から。

「酷いことした割にはすごいね。尊敬に値するよ」

「だから僕も本気を出すよ」

男がスバル目掛けて飛んだ。鎌はスバルの首を跳ね飛ばそうとする。空気を引き裂く音、黒炎が酸素を燃やす音、自然とスバルの耳に入ってきた。

「デススライサー！」

男の声が響いた。死の鎌は、横薙ぎに振るわれる。

ガリッという音が聞こえ、鎌は止められた。漆黒の大剣によって。

「――遅い！」

爆発的なスピードでスバルは剣を振るう。男の体にかすり傷をつけたその攻撃は、ノイズを凝縮した攻撃。

「ぐっ――――！」

気付いたときにはもう遅い。動けない状況に追い込まれた男の腹部にもう一発剣を振るった。骨がきしむ音が聞こえ、男にダメージが入った。

吹っ飛ぶ男を追いかけるスバル。音速を超えたスピードで追いつき、男を掴み地面に投げた。ディメンショナルエリアでできた地面に亀裂が走る。

「だったら！」

男は立ち上がった途端、鎌を大きく振り上げ黒炎の衝撃波を作る。それに応じてスバルもノイズでできた紅い衝撃波を作る。

二つの衝撃波がぶつかり、爆風が生じる。ミソラ達には被害がないのは奇跡だった。けれどそんなことを考えている暇もない。

「ブラックプロミネンス！」

男の鎌から蛇のような黒炎が放たれる。避けるか、防ぐか。

「――エレメンタルシールド！」

簡単に言ってしまえば、火には水と弱点である属性のバリアだ。スーパーバリアと弱点属性で補強、と強力なバリアになっているのだ。

蛇はバリアにぶつかって消失したが、男はそれを乱射した。数十匹となった蛇は、バリアでは防げない。

だったら、全てを薙ぎ払えばいい。スバルは剣にノイズを凝縮。剣が見えなくなるくらい紅に染まった。それを、振るう。

「ルイン・バースト！」

ルインとは滅亡という意味だ。最初は一匹、蛇が消失した。ノイズは次の獲物を喰らおうと、分散する二匹三匹、まるで比例のように数は多くなり、しまいには全てを喰らった。

「だったら、アロマトウ――――」

「ダークエンドホール！」

男の出そうとした攻撃が、すべて暗い穴によって吸収される。濁流が吸い込まれるその光景は異様だった。逆に一本の黒いレーザーが放たれているようでもあるのだから。

「くそっ、ならこれを喰らえ！」

男が右手をかざすと、そこからレーザーが放たれる。避けるスバルだが、予想外のことが起きる。レーザーの側面からまたレーザーが枝のように生えたのだ。

「ぐあああああああっ！」

レーザーからレーザーが生える、思いもしなかった。単なる方向転換ならまだしも、枝分かれでは咄嗟に反応出来ないだろう。

「君に対してはこっちの方がいいらしいね。だったら何回も発射してあげるよ」

今度は鎌をスバルのほうに放り投げた。物凄い速度ではあったが、スバルの対応出来ない速度でもなかった。剣を振り、鎌を吹き飛ばす。

だが、それは間違いだった。すぐさま男がスバルに向かってレーザーを五発放ったのだ。連続ではなったからといって一本の極太というわけではなく、あるところから何本ものレーザーがバラバラに放たれたという感じだ。

「このくらい……！」

バーニアの出力を上げ、拡散して撃ち出されたレーザーを避ける。けれど、五本のレーザーの側面からそれぞれもう一本のレーザーが枝分かれする。

スバルの視界が、真っ白に染まった。途端、爆発が生じ、轟音が鳴り響いた。カランと、漆黒の大剣が地面に落ちる。

第１３２話　衝突（後書き）

感想待ってます

暇です、ハイ。

オリジナルの小説書いたら禁書目録と似ていて全て削除して心の傷も深いです。

では、今から受験勉強頑張りたいと思います……

このままのペースならきちっと五月には終わるかな？

第１３３話　激怒

「ッ！　スバル君！」

ミソラの悲痛な声が響く。まだ自分は分身を倒せていない。それだから援護することも出来ていなかった。だから、こんなことになったのだと責めてしまう。

確実にさっきの攻撃はスバルに当たっていた。それは事実だ。現に大剣は地面に落ちていて、それはところどころ焦げていて、今にも消えてしまいそうだった。もう使えないだろう。

「終わりか、結構早かったね」

淡々と言う男にはまだ余裕が見える。だが、こちらに余裕など無い。スバルが勝てばこちらの勝ちだったが、スバルが負ければそれで負けだった。

「さあ、次は君達かな？」

「――ブラックエンド……」

突如、男はブラックホール包まれた。暁がやったわけではない。

「ギャラクシー！」

瞬間、音速の速度で誰かがブラックホールの物体に突っ込んだ。それは丸腰で突っ込んだ。

ガギャ、という音とともにそれは止まった。男が鎌の柄で動きを止めたのだ。

「まだ生きてたんだ、ロックマン」

どこか憎憎しげに男は言う。その目の前にはスバルがいた。バーニアの出力を最大にして男にダメージを与えようとしている。だが、男の鎌は揺らがない。

「スバル君！」

「ミソラちゃん、自分の敵に集中して！　こいつは僕が倒す！」

これ以上は無駄だと思ったのか、一旦離れるスバル。それを見てミソラも目の前に敵に集中することにする。今できることは、目の前の敵を倒すことだけだから。

「よく生きてたね、てっきり死んだかと思ってたよ」

スバルが無傷であったわけではない。所々に傷はあるし、意識も朦朧としていた。

「だけど、嬉しいよ！」

鎌から衝撃波を作りスバルに向けて飛ばす。スバルは避けたが、そこに待っていたのはレーザーだった。

「終わりだよ、これで」

黄色い閃光がスバルの脇腹を撃ち抜く。短い悲鳴が響いたが、それ

でもスバルは力尽きない。そんなスバルに、男は何十発も撃つ。

「さあ、さっさと死ねよ！」

憎しみが、すべてを焼き払うが如く放たれる。全方向からくる攻撃を、スバルは避けられない。

だが、倒れない。いくら攻撃しても、倒れない。

男が抱いたのは憎しみよりも困惑だった。何故倒れないかではない。そんなことは分かっている。彼の根本、『絆』のおかげだ。

だが、ここまで倒れない彼は、本当に悪役なのだろうか？　そこまで友達のために頑張れるこれは本当に世界の邪魔者なのだろうか？

男は世界を正そうとしてこの一件を企てた。ヘイトには他に理由があるらしいが、男は違う。ただ、全員が救われる世界を目指そうとしたのは事実だ。

本当に、スバルは自分達のために頑張らなかったのだろうか？

『おい、手を止めるな！』

「う、うん」

「無駄だよ、君には僕を殺せない」

曖昧な表現ではなく断言された。目の前の敵は、虫の息でも男に話しかけた。

「君は根は優しいはずだ。だから、君では僕を倒せない」

気付かれていた、自分の心の底を。それが、男にとっては屈辱だった。

「何を言っているの？　デタラメをいうな」

「デタラメだったら、君はいま攻撃していると思うけど？」

読まれている、確実に。まるで自分の心が文字にでもなっているかのような奇妙さが胸に押し付けられた。

「君は、まだ戦う気なの？」

「くっ……黙れ黙れ！」

今更引き下がれない。そんな気などない。だが何故だ？　引き下がったほうがいいと思ってしまう心がある。

「僕は君を倒す、そして世界を救う！」

「悪いけど、君の考えは甘いよ」

「何？」

一呼吸置いてスバルは話す。

「人間っていうのは悪い心が絶対ある。それがどんな人徳がある人が世界を纏めたってそれは同じ。君は夢を見すぎている」

たとえば、正義感溢れている人徳のある生徒が学級委員をやろうともそのクラスには絶対問題児がいる。それと同じようなことだ。

「じゃあ、君はどうするんだ？　黙ってみていろと！？」

「そのときのために僕達がいる」

納得など、したくなかった。たとえ、それが正論でも。どんなに素晴らしい意見でも。敵の意見に納得などしたくなかった。

「君こそ、甘いんだよぉ！」

突っ込んだ。獣のように叫んで。何も考えず突っ込んだ。自分の心を守るためなのか、単にスバルの言葉に怒っただけなのかは分からない。ただ、迷わず突っ込んだ。

そんな男に、スバルは手をかざすだけ。その手にまたもブラックホールが宿る。そして、それを投げた。男はブラックホールに包まれ、身動きが取れなくなった。

「これが、どうした！」

だが、男は力でその束縛を鎌で解いた。けれど、待ち受けていたのは

「ＥＦＢ（エグゼフォースビックバン）……」

スバルの手から今度はノイズレーザーが発射された。二つのメテオノイズジェネレーターからも真紅の柱が降りる。

「なめるな！」

レーザーにはレーザーを、強引に男は押し返す。分岐したレーザーは三つのレーザーとぶつかり合い、中間地点で爆発した。

「この程度の実力で、調子乗ってるんじゃ――――」

「ブラックガイアギャラクシー！」

突如、音速の二倍でスバルは突撃した。当然、そんなスピードには対抗できない。

ただのパンチだ。けれど、それは正確に男の顔面に当たった。音速の二倍ものスピードが乗った攻撃をだ。オレンジ色のバイザーが割れ、素顔が見える。男はディメンショナルエリアの壁にぶつかって、ずるずると落ちてくる。

その素顔を見て、対してスバルは驚きはしなかった。

「なんで、こんなことをしたんだ」

「――ギンガ君……！」

第１３３話　激怒（後書き）

まだ終わりませんからね！　大丈夫です！

バトルあと四、五やって、エピローグに五話費やして終わりです

最後まで読んでください！

次はもっといい文章のはず、です

まさかもう中間まで二週間だったとは……

まあ、それだけじゃないんですがね。

では、感想待ってます

第１３４話　改心

ギンガに多大なダメージが入ったためか、分身は消えた。

「くっ……」

頬に走る激痛を抑えながら、ギンガは立ち上がった。もうその素顔はどうやっても隠せない。

「な、なんでおまえが……」

コダマ小学校に通っていた者ならば、彼のことを知っていた。関わりこそ少なく、けれど決して悪い生徒ではなかったことも。

それが何故こんなことになるのかが、分からなかった。

「はは、おかしい？　僕がここにいることが」

自嘲の笑みを浮かべてギンガはみんなを見渡してそういった。

「本当に、残念だよ。君を殺せなくて」

笑みがどんどん深くなっていく。

「ここまでしといてこの様。本当に残念だよ。世界なんて、僕には救えなかったのかな？」

だが、隙などは無かった。いつスバル達が攻撃してきても確実に防げるように構えていた。それは別単に鎌を構えるとかそんなことで

はなく、気が抜けていないということだ。

「僕はね、君を憎んでいた。心の底から。あのとき、それからずっと。自分でも呆れるぐらいにね」

彼とヘイトにはスバルに対する執着が凄かっただろう。スバルと『ガイア』全てを巻き込み、滅ぼそうとしただけではなく、それを正当化しようとまでした。自分が世界を救ったと思わせるために。

仮にそれが成功したら、スバルには最悪の死だっただろう。『ガイア』にとっては守るべき立場だったのに殺す立場になってしまってどれだけ可哀想なことになっていただろう。

ギンガとヘイトは、それを実行しようとした。ただの逆恨みで。

「できればウィンドも殺すつもりだったよ。僕には関係ないけどね。だけど――――」

「ここに来なかった、か」

シルバー・ウィンドはここには来なかった。来るとはどこかで思っていた。良くも悪くも。だけどそれは裏切られた。

まるで、まだ自分が来るべきではないというように。

「誤算ばっかりだよ、本当に。最初はいい仲間（ガイア）が手に入ったと思ってたのに、なんでこう上手くいかないのかな」

そんなのスバルには分からない。

「で、どうするの？　諦めるの？」

スバルの問いかけで、ギンガは笑うのをやめた。

「もう勝てないって分かっているだろう？　お願いだから、もうやめてよ」

「……」

ここで戦うのをやめたら、たしかにギンガとヘイトは助かる。だけど、目的は達成出来ない。

どうする？　ここで引き下がるか、突き進むか。

答えなど、とっくに決まっていた。最初からそうだ、もう絶対勝てない状況に陥ったときのことなど頭に入れていた。

絶対に、これだけは実行すると。

「分かった」

鎌はさっきの攻撃で遠くに飛んでしまった。

「もう、戦いは終わりにする」

スバルの表情に若干ながら安心の色が見える。

（本当に、これで良かったのかな？）

スバルの本当の強さをこの戦いで垣間見ることが出来た。それはと

てもじゃないけれど悪役のすることではなかった。

（本当に）

ヘイトは何も言わない。気でも失ってしまっているのだろうか。電波変換が解けていないのだからデリートはされていないはずだ。

「これでいいのかな？」

右手に電波を集中させて鎌を作る。その時間コンマ一秒。反応できるわけが無かった。ギンガとスバルの距離は五メートル。電波人間の身体能力では一瞬で間合いが詰まる。

スバルの表情が驚きに変わった。ウォーロックの声がやかましく響く。そこにギンガは鎌を振り上げた。ただ、スバルを殺すために。

ただ、仇を討つために。

《生きてますか～》

馬鹿みたいな声を聞いてギンガの手は止まった。突然の出来事が二

つも続いてスバル達の表情は困惑だけだ。

だが、馬鹿みたいな声のせいでギンガの手が止まるわけではない。問題はその声を誰のものかということだ。

声はギンガのハンターから出ていて、ギンガにしか聞こえない。

「おまえは……！」

《お、生きてた。良かった良かった》

楽しげな声だった。まるで、相手の不幸を嘲笑うかのように。

「なんで、おまえがこの状況で……まさか！」

《うん、そうだよ。良かったな、大犯罪者。もしかしておまえってテレビに出て嬉しいタイプ？》

どこにいるのだろうか、分からない。もう近くにいるのか、または遠くで高みの見物でもしているのか。

《ＷＡＸＡって凄いな、たった一つアンテナを近くにつけるだけでおまえらのこと放送できちゃうんだから》

「ＷＡＸＡ！？　そんなことはない、あそこはたしか刺客を送ったはずだ！」

《うん、送られたらしいな》

「まさか……」

考えられるとすれば電波変換でもしたのか。だが、らしいという言葉を使った。ということは

《ヘイトに聞いてなかったのか？　まあ、知らなくてもいいんだけどよ》

「おまえは、一体……」

電話の向こうの人間が酷く恐ろしく思えてきた。純粋に、まるで自分が手のひらで動かされているような気がして。

《で、降参するの？　ほら、英雄って馬鹿みたいに優しいからさ、白旗揚げてもいいって言ってきたろ？　テレビでみても格好いいよな。おまえみたいにペラペラ喋ってるのとは大違いだよ》

言葉が出なかった。もう、喋りたくないと思った。

《おまえも分かったろ？　世界はおまえを敵だと思うだろうし、絶好の機会も失った。つまりは詰みだ。電波変換を解いて、おとなしく捕まれ》

「……それで僕が実行するとでも？」

《思っているさ、だってそれが『宿題』だもの。残念ながら、これからはおまえは逃げられないし、それに》

《おまえがどれだけ救世主になろうと思っても、本当の救世主は変

わらない。それが、星河スバルという人間であるかぎりな》

おかしかった。ひどくおかしかった。なんでこんなにスバルに仲間が集まるのかが分かったから。自分とはやはり違っていたから。ここまで堕ちた自分を救おうとしてくれようとする性格を、仲間が見ているから。だからこんな無駄な電話もしてくる。

電話の向こうの相手はしょうと思えば最初から自分を潰せたかもしれない。けどそれをしなかったのは、自分を救うため。

改めて、星河スバルという人間を知った気がした。

《俺からは以上、あとは好きにしろ》

ブツ、と電話は一方的に切れた。

ガシャン、と鎌は地面に落ちた。ギンガは膝を地面についた。

「ごめん、本当の終わりみたいだ」

そういうギンガの顔は泣きそうで、酷く不安定だった。けれど、もうスバルを殺そうなどは考えない。無駄な電話をかけてくれた人に、説得をさせられたから。

「許して、くれる？」

どうせ駄目だろうと思っていたけれど、スバルは何を思ったのか、コクンと頷いた。

泣いていたにもかかわらず、ギンガの顔は笑顔に近かった。スバ

ルは手を差し伸べ、ギンガはその手を取ろうとした。

『――あ～、かったり～』

今度こそ、今度こそ全員が固まった。ギンガも、スバルも。

『ギンガ、残念だぞ。おまえがそこまでの野郎だったなんてな』

「ヘイト……？」

気を失ってなどいなかった。ただじっとまっていたのだ。どうなるかを、ギンガがどう行動するかを。

『てめぇなんかを選んでやったってのに、結局これだ。ったく、友情ごっこはロックマンの取り柄ってかあ？』

明らかに馬鹿にしている口調。だが、そんな敵の感情をも力に変えてしまうヘイトにはそんなのは関係ない。

『こんなので終わるとでも？　あまったれるな。この世に、破滅をもたらすまでは、俺も終わらねえよ！』

ギンガの姿が黒い霧のせいで見えなくなる。そこから助けようと、スバルは手を伸ばす。だが、ギンガは手を取ろうとはしなかった。

これが自分の報いだと、そう思ったから。

「僕を、ヘイトを、倒してくれ！」

そういって、ギンガは取り込まれた。

「ギンガ君！」

スバルの叫びは虚しく、ギンガは取り込まれた。ギンガの体であったものは、ボコボコとあわ立つように脹れ、そして一体の黒き龍が出来上がった。

勝負は、憎しみが尽きるまで終わらない

第１３４話　改心（後書き）

感想、待ってます

今日はいつに無く筆が進みました

これからもがんばっていきます！

ってかオリジナルの構想が練れない……

第１３５話　黒幕

高さはおよそ十メートルくらいだった。直立歩行で二本脚の黒き龍は翼を広げてスバル達の前に君臨した。

『ははっ、いいねえ！　この姿。おまえらをぶっ殺せそうだわ！』

あまりにもデカすぎるそれは、圧倒的プレッシャーを与える。強さとかそんなのは関係なく、ただプレッシャーを与える。

「くっ……まだ奥の手を残していたのか！」

『そうだ、といいたいところだが、おまえらの憎しみがこの体にしたんだぜ？　結局突き詰めればおまえらがこの力をくれたんだよ！』

だからといって、憎しみの心が消えるわけでもない。さらに

『おまえらが俺らの本性をバラしてくれたおかげで、世界中の人間

は俺らに憎しみをくれている。スバルよりも強大で、純粋なモノをな！　保険をかけておいて、正解だわ！　ハハハ！』

つまりはそういうこと。最初からやろうと思えば世界を掌握できたのだ。それをしなかったのは、それだけエグゼと『ガイア』に対する憎しみが凄かったからなのだろうか。

『俺は単純だ！　だからこんなことになっちまった！　だったら単純な奴として、この世界を圧倒的力でぶっ壊すってのが一番いいだろう？』

ヘイトとしては、もうとにかく世界を壊したいのだ。その前の前哨戦として、スバル達を殺す。

「ギンガ君を解放しろ！」

『無理だな！　こいつは世界が荒廃してからゆっくりと苛めてやるよ！　一対一のデスゲームでな！』

「性格本当に悪いね」

『何とでも言え！』

ミソラの皮肉に対してヘイトはそれを否定しなかった。

『だがな、おまえら程度じゃ俺には勝てないぜ？』

「そんなの、やってみなきゃ分からない！」

スバルの言うとおり、勝てないことはないはずだ。それが電波体

ならば。

『おまえら、分かってるか？　どれだけ人間の感情が凄いのかを』

そういうと、どこからともなく八つのレーザーが飛んだ。それはスバル達八人を正確に狙うもので、避けられないものだった。

「これくらい！」

厳密に言えば避けられないことは無い。それは八人が一度回避したことで証明された。だが、避けられないというのはそういうことではない。

レーザーがまた分岐した、しかも全部が十二個ずつに。最初自分に向かっていたレーザーを避けても、流れ弾を喰らってしまうのだ。容赦など存在しない。

「ぐあああああああっ！」

避けられるものなどいるわけが無かった。ショットガンを四方八方に乱射されるようなものだ。

スバルの二重究極変身（デュアルファイナライズ）は問答無用で解けた。他も無様にレーザーを喰らって倒れることしかできなかった。

『無様だなあ！　おまえらの力はそれだけか、あぁ！？』

恐らく、ヘイトは手加減をしただろう。本当なら何十発も撃てるのにあえて八発で抑えた。遊んでいるというわけではない。ヘイトもこの形態になるのは初めてだ。ようは準備運動、と考えればいいだ

ろう。

『ったく、どれだけこっちがこのときを待っていると思ってやがるんだ！？　なめんじゃねえよ！』

倒れている敵に容赦なくレーザーを放つ。次は薙ぎ払いのような感じだ。だが、スバルとて当たってやるつもりも無い。

「バトルカード　ホーリパネル　ドリームオーラ！」

オーラを限界まで広げ、壁のようにする。これで全員を守ろうとしたのだ。

だが、それは無情にも破られた。まるで元々何も無かったかのように、オーラを突き破る。

あまりにも圧倒的で、強すぎる。これが人の感情。恐ろしく、冷たい。だが、それだけで収まるわけではなかった。

『何寝てやがんだ！　ロックマンってのは不屈なんだろぉが！』

誰も立っていなかった。ヘイト以外は誰もが声を出すことも出来ず、這い蹲っていた。次元が違う、この現状にぴったり過ぎる言葉だ。

「あ…ぐ……」

意識が朦朧としていた。元々ギンガとの戦いで体力は底を尽き始めていたのだ。そしてヘイトの逆襲。体力が持つわけが無かった。

『だが、ここで終わるっていうなら次の攻撃で終わりにしてやる』

そういうと、ヘイトの翼にドス黒いオーラが集まる。

「ま…だ……」

誰もが、最後まで諦めないでいた。最後まで立ち上がろうとした。
それはスバルも、ミソラも、ゴンタも、暁も、誰もがそうだった。

けれど、それが全て無駄だとヘイトはいうように攻撃を放つ。

『アロマトウスカオス！』

漆黒の濁流が、全てを呑みこんだ。

「さあ、ラプラス行くぞ」

『ギギ……』

もうスバル達が濁流に呑まれるところは見た。だからといって仇討ちに行くわけではない。気に入らないからソロはヘイトを斬りに行くのだ。

いや、その先にあるものを斬りに。

「シルバー・ウィンド、首を洗って待っていろ」

彼は復讐のために決戦の地に向かう。ただ

『さあ、ようやく俺の出番か』

シルバー・ウィンドは光景を見ていた。テレビではなく他の方法で。それを見て彼は再度自分の装備を確認する。

『全部大丈夫、か』

そもそも電波体に装備の不具合などあまり無いのだが、それでも確認するのにはわけがある。今回の敵が、あまりにも強大で、強いからだ。

体にも異常が無い。仮にノイズがあっても、彼は電波を使わないで風を起こすことが出来るので、吹き飛ばせるので関係ない。

『さあ、待ちに待った瞬間だ』

彼は待っていた。二百年前から計画されていたこの計画を終わらせるために。念のためと言って百年前からこの地球上に生かされていた。その間自分でもデリートしなかったのも、このときを待っていたから。

片時も忘れなかった。『ガイア』、いや『守護神（ガーディアン）』を殺されなければいけないことになった直接の原因を生み出した者の顔を。

どうしても忘れられなかった。どんなにいいオペレーターと会えても、それは消しきれなかった。だけど、それで良かったと思う。生きてて良かったと思う。

『裏切り者の処刑の時間だ』

『なんだ、これはぁ！？』

濁流が、蒼い光によって遮られていた。それはバリアのようにも見える。だがそんなことはどうでもいい。問題なのはヘイトの攻撃を防いだこと。

そして、全員が無事だということ。

『どうなってやがる、これは……』

昔にも味わった感覚。それは困惑と恐怖を生んだ。ずっと待っていたはずなのに、それはかわいそうなくらい自分を追い詰めていた。

『大丈夫かい？』

ヘイトの攻撃を防いだ者は、余裕の声でスバル達に話しかける。だがそれは手を差し伸べたりはしなかった。右腕に備わっている銃を、ひたすらヘイトに当てる。ピンク色の弾丸が、ヘイトを貫く。

『ぐっ……』

そうすると、どこから現れたか光の粉のようなものがスバル達に降り注ぐ。

『ロールちゃんの力を借りたけど、上手くいったみたいだね』

意外という風にいう彼は、撃つのをやめた。

「力が、戻った……？」

暁の言葉通り、全員の体力が戻った。全快とはいえないが、それでも戦うことが可能になった。

そして、自分達を助けてくれた者を見る。蒼かった、ただそれだけが感想である。蒼く、その背中は力を与えてくれそうな感じがする。

だが、一方で誰かに似ていた。そう、誰かに。

「……君は？」

スバルが聞くと、それは振り返った。胸に赤と黒のロゴ、目は緑で子供っぽさが見える。

『久しぶりだね、スバル君』

「エグ、ゼ……？」

『何故だ、何でおまえがここにいる！』

ヘイトは貫かれた体を修復しながらそう聞いた。驚き、困惑、そして恐怖が彼の心を支配する。

『君を倒しにきた、それだけだよ、ヘイト』

淡々と答えるエグゼは特に感情を込めずにそういった。右手のロックバスターを構え、いつでも射撃が可能なのようにして。

『僕は、こうなることを２００年前から分かっていたんだよ。君は知らなかったようだけどね』

『どういうことだ！　おまえは――――』

『記録ではデリートされたことになっているよ』

そういってから、彼は不敵に笑う。

『そんなことといわずにさ、さっさと始めよう。決着の着かなかったこの戦いを』

第１３５話　黒幕（後書き）

予想通りの展開でしょうが、がんばって最後まで読んでください……

では、感想待ってます！

第１３６話　正体（前書き）

前回のサブタイトルと合体すれば意味分かるはずです。

第１３６話　正体

『まさかおまえ、エグゼＰＧＭから？』

『そうだね、僕はそこで眠っていたよ、ウォーロック君。ヘイトのプロテクトは外部からの物だったから、内部から破れたんだよ』

振り返りもせずにエグゼは答えると、右腕にドリームを装備した。

「だけど、なんで君が？」

エグゼは歴史の授業でもやったように、２００年前のネットナビだ。もうとっくにデリートされているはずだ。けれど、何故今ここにいる？

『……僕が、計画したんだよ』

『計画？』

『そう、この一連の計画を』

誰もが耳を疑った。この状況で指す計画とはヘイトが実行した計画のことだろう。だが、それをエグゼが計画したというのだ。

『ヘイト、君はなんで「ガイア」がこの時代に残っているか考えなかった？』

それはスバルも考えたことだった。『ガイア』は兵器なのだ。そんなものを残しておいても得が無い。もし凶悪な犯罪者の手にでも

渡ったらそれこそ世界の脅威なのだ。

だが、もしヘイトが使うと分かっていたらどうだろうか？

『僕はね、君がどれだけ薄っぺらい人格をしているか分かっていた。そしてこの時代に君が事件を起こすことも』

『どういうことだ……？　そんなこと、分かるわけがねえだろ！』

２００年前にタイムスリップが可能なわけが無い。なぜなら今ですら不可能なのだから。

『まあ、それは置いておこう。それで僕は君の人格を考えて、君がこの時代にどんな形で事件を起こすかを考えた。それが』

「『ガイア』を使った復讐」

それを聞いた瞬間、ヘイトの顔が歪んだ。まるで溜まり溜まった感情を一気に背負わされたような、そんな表情だった。

『そして、「ガイア」をコールドスリープすることと同時に僕自身も眠ることにした。スバル君なら、僕の力を使いこなしてくれるだろうと思って』

ようは、全てがエグゼの思惑通りだったということだ。スバルも、ヘイトも、この世界も、エグゼの思惑通りに事が運んだということだ。

『分かった？　これだけ言えば君の疑問も無くなったでしょ？』

だが、ヘイトは半ば放心状態と言っても過言ではない。自分が必死で作った計画が完璧に把握されていたからだろう。

『スバル君、もう戦えるね？』

「う、うん」

エグゼの登場、それは何もヘイトだけが驚いたことではない。スバル達も驚いていた。だが分かることはエグゼが味方だということだ。これほど頼もしいことは無い。

『大丈夫、君ならヘイトを倒せるから』

うっすらと微笑まれてそういわれれば、なぜだた本当にそんな気がしてきた。

『君は僕と戦ってくれればそれでいいから』

「あ、あの！」

「俺達は何をすればいいんだ？」

もう戦えるということをアピールするミソラとジャック。他の五人も同じだろう。さっきエグゼが使った力でほぼ回復している。

だが、無情にも五人にバリアが張られた。張られたバリアは、さっきのヘイトの攻撃を防いだ物だ。

「ッ！　これは……」

『君達はそこで待機してて』

それは黙ってみていろということでもある。そんなことできるわけがなかった。

「ふざけるな！　そんなことできるわけねえだろ！」

ゴンタがバリアを叩きながら抗議する。

『……まだ、その時じゃないんだよ』

ピタリと、全員が黙り込んだ。

『勝負を、早まらないで……』

心の底からの願いを聞いて、誰も抗議をしようとは思わなくなった。エグゼはそれを見て、少しだけだが安堵した。

『スバル君、君には僕と一緒に戦ってもらう』

「……うん」

『そうこなくっちゃなぁ！』

まだ二重究極変身（デュアルファイナライズ）は使えないだろう。使うにしても、もう一度ヘイトと向き合わなければいけない。

『くっ、ハハハハハハハハハ！』

笑ったのはヘイトだった。さっきまでの驚きなど全てを捨てきっ

て、歓喜という感情だけが残っている表情をしている。エグゼはそれを顔をしかめた。

『何がおかしいの？』

『決まってるだろ？　あの時殺し損ねた奴が時代を超えてやって来てくれたんだぜ？　ここまで嬉しいシチュエーションはないよな！』

『悪いけど、もう一度君は負けるんだけどね』

その言葉をヘイトは気に留めなかった。勝つという自信があるのか、ただ単に耳に入らなかったのか。スバル達からは分からなかった。

『負ける？　何を狙っているか知らないが、たった二人で？　勝てるわけがねえだろぉ！』

スバルはもう戦力外と言ってもおかしくない。ヘイトは本気の『ガイア』に負けたのだ。スバルも成長したとはいえ、『ガイア』に敵うほどでもない。結論からして、エグゼが二人分戦わなければいけないのだ。

『だけどね、彼は死なないんだよ』

不敵に笑うエグゼに対して、スバルは負けるという不安が再びのしかかった。

『不安がらないで、たしかに君は大きな力を失った。けど、君にはまだ力があるだろう？』

一瞬スバルは分からなかった。けれどすぐに気付いた。後ろを見れば答えが分かるだろう。

『ヘイトは確かに強い。だけどその分僕がカバーする』

その言葉に後押しされるように、スバルはエグゼと並んだ。そこに大した意味など無い。ただエグゼと対等にいたかったから。

『さあ、これが本当の最後の戦いだ！』

右腕にドリームソードを装備し、エグゼは言った。彼とスバルは後の敵に向かって、駆け出した。

第１３６話　正体（後書き）

感想待ってます

あと、十話……！

ってかもうテスト。勉強のせいで五月中に終わる気がしない……！

……どうする？

第137話　エグゼ

『アドラステア！』

数十個の隕石が再び流星のように落ちる。エグゼはドリームソードで砕き、スバルはロックバスターで打ち落とす。だが、どちらが効率が悪いかは言わなくてもわかるだろう。

（やっぱりキツいか……）

エグゼには詳しくは分からなかったが、この時代には一撃が強力でドリームソードのような軽いものはないくらいは察していた。だからスバルはバトルカードではあまり戦わなかった。

（でも、彼にはほっとけって言われているからな……）

その彼からは、スバルにはもっと経験を積ませて欲しいといわれていた。一体何故そんなことをさせるのだろうか？　今思えばこの計画を立てたのも彼だった。彼の情報は信用できる物だったからあまり言わなかったが、それでも疑問だった。

だが、そんなことを考えている暇などは無かった。

『ディザスターレイン！』

四方八方からのレーザー、それは分裂し二人を貫こうと光の速度で飛んでくる。

『くっ……』

災厄と言ってもいいくらいの攻撃は、逃げ場などなかった。エグゼは咄嗟にバリアを張る。まるで鉄の板をスプーンで抉ろうとしているような奇妙な音が鳴り響く。

音が鳴り止んだ。見ればスバルは怪我を負っていた。エグゼと同じようにバリアを張ったのだろう。立っていることはできた。けれど、もう立つことすらキツイということが見ているだけでも感じ取れた。

『どうしたぁ？　スバル君はもうやられちゃうのかなぁ！？』

あからさまな挑発に応じないスバル。それを見てヘイトは特に攻撃をすることは無かった。

『おい、やっぱりこれはおまえと俺の一騎打ちだな』

もうスバルは無茶は出来ないだろう。眼はまだ勝つという気持ちがこもっているが、無茶すれば彼の命に関わることだろう。

やはりミソラ達と一緒に最後まで待機していてさせていればと思う。そうすれば、スバルも傷つくことは無かった。そう後悔していた。

だが、すぐにそれは間違っていたと思わされた。

「だれが、やられるって？」

消え入りそうな声で、しかしはっきりとスバルはヘイトに向かってそう言い放った。これに驚いたのか、ヘイトは面食らったような

表情をしている。

「僕は倒れないよ。絶対に」

どこからそんな言葉が出るか、エグゼには理解できなかった。

「みんながいるから、僕を後押ししてくれたエグゼがいるから」

――忘れていたのかもしれない。もう、彼のように仲間と戦うことをしなくなってしまったから。

「だから僕は、君を倒すまで倒れない！」

その言葉に、エグゼは笑った。嘲笑でもなく、ただ純粋に笑みがこぼれた。この計画が失敗ではないこと、そう思えただけでエグゼは笑えた。

心のどこかで『ガイア』に申し訳ないと思っていた。たとえそれが誰からの頼みでも、『ガイア』をデリートする道を歩ませてしまったことを。

だから、救われたと思えられた。心の底から。

それだけで充分だと、エグゼはまた剣を構える。まだスバルは戦える。

『……だったらさっさと殺してやるよ！』

（また……！？）

あのヘイトのモーション、間違いなくアロマトウスカオスだ。だが、スバルにそれを避ける術は無い。

だが、そんなスバルの考えを無視してヘイトは彼の中でも最強クラスに入る攻撃を放とうとする。

（ヤバイ……！）

咄嗟に眼を瞑った。だから何も見えなかった。だが自分が攻撃に当たるということだけは分かっている。もう、本当に自分は倒れてしまうのだろうか。そう思ったとき、何かが通り過ぎるような音が聞こえた。

その音が聞こえてから数秒たっても自分には攻撃が当たらない。不思議に思って目を開けてみると、青い残光が目に付いた。

『が…あ……？』

ヘイトが理解できないという表情をしていた。それはスバルと同

じだ。けれど、自分の体に異変があったのはヘイトは気付いていた。

『まさか、てめぇ……』

ヘイトの右脇腹は、何かに貫かれていた。残光もそこから伸びており、多分高速で何かが通過したのだろう。では、一体誰が？

『獣化（ビーストアウト）を……？』

『正確には合体獣化（ダブルビースト）だけどね』

そう誰かがいったあと、今度はヘイトの翼が貫かれた。絶叫と響き、電波が消えうせる。

貫いた正体は翼を持った蒼い何かだった。何かとと表現してしまうのは、鳥のような獣のような、その両方のような存在。だが、どこかで見たことのあるものだ。

「エグゼ？」

『そうだよ、スバル君』

そういって舞い降りるエグゼは変わりすぎていた。ネットナビにもある程度の周波数があるのだが、ヘイトと同じかそれ以上の周波数。そして、圧倒的攻撃力とスピード。

もしエグゼが敵だと思ってしまうと身震いする。勝てないと分かっているからだ。味方で本当に良かったと思う。

『っざけるなぁあああああああ！』

ヘイトが叫ぶと、それに呼応するようにレーザーが周囲に放たれる。もう狙いなど定めていなかった。数撃てば当たるという言葉をそのまま再現しているかのようだ。

だが、エグゼはそれを片手で抑えた。こちらに飛んできたレーザーはエグゼが片手で触ると、周囲に分散して消えていく。

『雑魚共が！　手を抜いていれば好き勝手やりやがって！』

『君が悪いんだよ！』

それにキレたのか、ヘイトはまたレーザーを放つ。だが今度は質にも気を使っているのか、直径二メートルのレーザーが周囲にばら撒かれる。

だが、そこにあえてエグゼはヘイトに向かって飛んでいった。紙一重でレーザーの嵐を避け、そしてヘイトにもう一撃入れようと速度を上げる。

ヘイトはそれに反応しようと右腕を突き出す。手のひらで衝撃を殺そうとするが、エグゼも負けてはいない。一進一退の攻防がコンマ何秒のうちに繰り返される。

だが、軍配はヘイトに上がった。使っていなかった左腕も使って、勢いを殺したのだ。これで握りつぶせばエグゼはデリートしてしまうだろう。

『な……！』

けれど、そこに新たにこちらに向かってくる閃光が見えた。それは二重究極変身（デュアルファイナライズ）をしたスバルだ。

『僕だけに気を取られすぎだよ、ヘイト』

もう反応することも出来なかった。ただ、ヘイトは自分の左脇腹を貫かれるのを黙ってみることしか出来なかった。

憎しみという感情が引き起こす絶叫が、秋原町に木霊した。

第137話　エグゼ（後書き）

あと九話じゃ終わりません。もう少しあります

でも、結構長かったな……

ってかテスト勉強しなきゃ！

けれど眠い……

感想待ってマ～ス

第１３８話　最後

絶叫が響き渡った。いくらなんでも脇腹を二発も貫かれれば痛いに決まっている。

（外しちゃったか……）

何もスバルは脇腹を狙うつもりは無かった。さっきの一撃で決めるつもりだった。だが、ヘイトも馬鹿ではなくギリギリ避けたらしい。

『これで、終わりかな？』

『終わったことを願うぜ……』

エグゼとウォーロックの言うとおり、ヘイトはもはや瀕死の状態だ。とっくにデリートされてもいい状態であったのにもかかわらず、生きていると言うことに驚きを隠せない。

だが、心の中ではやはり思っていたのだ。こうなることを。

『ディザスターレイン！』

何十本ものレーザーが雨のように降り注ぐ。油断をしていたスバル達にとってこれは避けられる攻撃ではなかった。二人のロックマンが容赦なく吹っ飛ばされる。

『だから、誰が終わったって言ったんだよぉ！』

「ま、まだ生きているのか？」

暁と意見が同じなのか、みんなが口をポカンと開けて呆然としている。もうヘイトを倒せるかどうかも分からなくなってきた。

『ぐっ……』

まだスバルとエグゼは立つことはできた。変身も解けていない。だが、そんな状況で次にどうすればいいかがスバルには思いつかなかった。

勝てないという言葉が頭の中に浮かぶ。それほどヘイトの生命力は凄まじかった。

『もううざってぇ、地球ごとぶっ壊してやるゥ！』

「な、何を……？」

『憎しみという力を暴発させてやるのさ！　地球には今充満しているだろ？　これだけはやりたくなかったんだが、おまえらのせいでやるしかなさそうだなァ！』

「はい、こちら暇で暇で仕方がありません」

電話の向こうの声は溜め息混じりだった。それを聞いて少女は薄く笑った。

「で、どこに行けばいいの？　……分からない！？」

さすがに焦ってしまう。たしか今日には場所が分かるから安心してろと言われていたのだ。それがどうだ、分からないときたもんだ。

「本当に？　それって地球丸ごと守れって言ってるの？」

そんなことできるわけがないし、やりたくもない。仮に出来たとしても、精神より先に体が死を迎えてしまうだろう。

「それもいいんじゃないかって？　……電話切るわよ」

分かった分かった、といわれてしょうがなく切るのはやめることにした。遊ばれていることに少なからず苛立つ。

「場所は、秋原町から半径三キロ？」

ようはぐるっとバリアを張れということらしい。あまりに適当すぎる。

「だけど、それじゃ……できますよ！　やればいいんでしょ！？」

そう怒鳴って電話を切ってやった。最後に聞こえたのは笑い声だった。性格悪いな、と心のそこから思いながら自分のウィザードを見る。

『彼はユーモア溢れていますね』

ウィザードのほうがニッコリ顔で少女を見ている。明らかにさっきのやり取りを見て笑っているのだ。

「つまらないけどね」

『やられるほうはですけどね』

少女の顔が少なからず引きつる。さすが『S』だ、サディストだ。このままではいじくり回されること確定だ。

『本当に仲がいいですね～』

「……はいはい」

今から仕事をするというのに余裕だと思う。というかあなた一人で行けば？　と言ってしまいたい。

『これで恋愛感情がないんですから凄いですよね～』

「ニュースキャスターみたいに言わなくていいから、行きましょう？」

『あらあら、照れちゃって』

「……電波変換ＣＦ」

もうウィザードの軽口を止めるため電波変換した。

「もう行くわよ？」

『本当に――』

「行くよ」

黄金の電波体が、この星を守るために飛び立つ。

『簡単に言うと爆発させるんだよ、この星をな！』

「なんてことを……」

『みんな！』

エグゼが叫ぶと、ミソラ達に張られていたバリアが消えた。

『いいかい！　ヘイトは最後の攻撃に出る、これを止めるんだ！』

「だから私達を？」

『いいから早く！』

これが本当に最後の攻撃。スバル達にとっても、ヘイトにとっても。

「スバル、メテオノイズジェネレーターを俺達の真上に移動させてくれ！」

「暁さん……？　そうか！」

すぐさまスバルはメテオノイズジェネレーターを暁たちの真上に移動させる。そこから降り注ぐのは、紅いノイズ。

「「「究極変身（ファイナライズ）！」」」

七人が七人、自身の最強の形態になった。

『スバル君以外はヘイトの攻撃を妨害してくれ！　少しでも時間を稼ぐんだ！』

ヘイトが準備態勢に入ると、地響きが起こった。多分、本当に地球を潰すつもりなのだろう。

「分かった、みんな行くぞ！」

暁の号令の元、ミソラ達はヘイトに向かってかけていった。

『スバル君、君にはもう一度僕の力を預ける』

「でも、プロテクトが――」

『もう解いたよ。合体獣化（ダブルビースト）をするまでに解いておいたんだ』

逆に解かなければ合体獣化（ダブルビースト）を出来ない。そんなことは今は重要ではないので言わないで置いた。

『これで本当に終わりなんだ。だから、力を貸してくれ……！』

「エグゼ……分かった」

その言葉に満足そうに頷くと、エグゼはハンターの中に入っていった。

『多分、究極獣化（ファイナビースト）でも二重究極変身（デュアルファイナライズ）でも勝てない。だから――』

「その両方を合体する？　できるの？」

『僕が獣化（ビーストアウト）で暴走するのは抑える。君は、君のできることをしてくれ』

これで終わりなんだということが伝わってくる。

『へっ、最後にでかいのをかましてやろうぜ！』

「うん、絶対にヘイトを倒そう！」

「超究極獣化（ハイパーファイナビースト）……！」

第１３８話　最後（後書き）

怒涛の更新じゃー！

第１３９話　準備

「いいか、全力でヘイトの攻撃を阻止するんだ！」

ドウッ、と暁のバーニアが音をたてる。それに続くように他も走る。

『邪魔なんだよ！　ルインダイナマイト！』

ヘイトが叫ぶと何も無いところが急に爆発し出した。爆発した所を見てみると、ヘイトと同じ周波数がする電波が残っている。きっと元々違うところに作った電波の爆弾を周波数変換で移動させたのだろう。

「ちっ、ピンポイントで攻撃してきやがる！」

「時間がどれくらいあるかも分からないのにね……」

ヘイトは攻撃しながらでも地球を破壊することが出来るらしく、正確に狙いを定めていた。これでは近づくことが出来ない。距離はあと三十メートルくらいだろうか。そのたった三十メートルが果てしなく遠く感じられる。

けれど、進まなければいけないのだ。スバルのため、地球のために。

「うぉおおおおお、オックスクラッシュ！」

ゴンタがヘイトに向かって突っ込んだ。それに反応するようにヘ

イトも爆弾を周波数変換する。それは容赦なくゴンタに直撃した。

「ぐっ……まだまだぁ！」

だが、そんな攻撃を喰らってもゴンタは怯みはしなかった。これを突破することができれば活路を見出せることが出来る。

ヘイトはゴンタを止めようと、ゴンタを集中的に攻撃をした。判断力が低下したのか、だがそれは間違いであった。

ゴンタが攻撃を一手に引き受けることにより他の六人も進むことが出来る。

『ぐっ……』

だが気付いたときにはもう遅い。たった一度間違っただけで戦況はガラリと変わってしまう。

『ディザスターレイン！』

網目のように発射されるレーザー。それは絶対避けることの出来ない技だった。だが、ヘイトの焦りは蓄積されていく。これで倒さなければヤバイ、そう思ってしまったから威力を重視し精度を犠牲にしてしまった。

それを全て避けきった。まるで最初からどう避ければいいかが分かっていたかのように。

最初に攻撃したのは、ミソラだった。

「パルスサウンド！」

特殊な音波によってヘイトはマヒしてしまう。悲鳴さえもあげられない。それほど一瞬でマヒしてしまったからだ。

「ブリザードドラゴン！」

続いて発射されたのはクインティアの氷の龍だった。龍は一直線に進むと、ヘイトに巻きつき凍結させた。そこに、さっきまで攻撃を受けていたゴンタが走ってくる。

「オックスブレス！」

ゴンタの口から火が吹き出る。だがそれはヘイトに攻撃を与える物ではない。ボロボロのゴンタではそんなこと不可能だ。精々氷を溶かすくらいだ。

『何やってんだぁ？　馬鹿かてめぇら！』

「どうかな？」

ゴンタが不敵に笑う。その笑みにヘイトは少しばかり寒気を覚えた。何がおかしいか分からなかったからだ。

だけどすぐに理解した。後ろからツカサとヒカルが走ってきている。水に電気を流して大ダメージを与えるつもりだろうか。

だが、そんなことでは終わらない気がした。もし仮にヘイトにその知識が無かったらここで止まることはなかっただろう。だけど知っていたから止まってしまった。

『まさか……！』

「『ジェミニライトニング！』」

大量の高圧電流が、水に流れる。それは外部を焦がし、徐々に内部まで焼いていく。だがそれだけでは終わらない。

水に電気を流すと、電気分解を起こしてしまう。そして水は二つの分子、つまり「水素」と「酸素」に分かれてしまう。

「今更気付いてもおせぇ！　デスペインヘルフレイム！」

酸素は炎と接すると燃え上がり、水素と炎が接すれば爆発する。紫色の炎は、容赦なくヘイトを焼いた。ヘイト自身も燃え、それは見るに絶えられない光景だった。

『グレイブメテオレーザー！』

「オメガレーザー！」

更にジョーカーと暁はレーザーを放つ。圧倒的火力でヘイトの体力を削り、地球に攻撃されるのを防ぐ。だが、ヘイトは生きていた。ここまですればスバルの手など借りずに倒せるのではないかと思っていた暁だが、その生命力に愕然とする。

『まだ、終わるかあぁ！』

「終わるんだよ！　カイザーブレイク！」

どこからともなく現れたブライが、周波数変換で一瞬で距離を縮め、彼の最強の一撃を放つ。

『がああああああああっ！』

「ソ、ソロ！」

「勘違いするな、これを早く倒せばあいつと戦えるだろう？」

あくまで自分はおまえ達の味方ではないと暗に告げているのだが、それでも駆けつけてくれたことに感激した。

『あああああああああ！　本気でテメェらぶっ殺してやる！！！』

怒りと憎しみを爆発したヘイトは止まらない。地球が滅びるまで。

『もう、時間だ！　残念だったな！』

「な……、そんな！」

スバルはまだ来る気配が無い。つまり、止められなかったということだ。

『さあ、もう終わ――――』

そのとき、二つの閃光が秋原町から放たれた。一つは地面に垂直に伸びる蒼き閃光、もう一つはヘイトに向かって飛んでいく、白銀の閃光。

「これは……！」

スバルは自身の姿に驚いていた。色は蒼と白が基準で、合体獣化（ダブルビースト）と二重究極変身（デュアルファイナライズ）を融合させたような姿だった。

『これで、行くよ』

「……うん」

スバルは蒼いバーニアを起動させ、飛び立った。そして地面に垂直に舞い上がっていく。徐々に高度は上がっていき、ディメンショナルエリアとぶつかる。バリンという音が聞こえ、砕け散った。

高度２０００メートルまで上がる。雲の上まで到達すると、フジ山も綺麗に見える。さんさんと降り注ぐ太陽が、妙に気持ちよかった。

「これで、決める――――！」

『シャイニングセイバー』

白銀の閃光は一瞬でヘイトの二つの腕を両断した。ドスン、という鈍い音と共に腕が落ちる。それを理解し、さらにそこから痛みが走るのにそれほど時間がかかることは無かった。

『が、ぎゃあああああああああああああ！』

『いい悲鳴だな。こうじゃなくちゃな！』

『て、てめぇ……！』

『いいのか？　地球を破壊することもできなくなるくらいおまえは攻撃された。これでおまえの負けだ。そして』

シルバー・ウィンドは一度天を見上げた。真っ青な空から、何か

が降り注ぐ。

『じゃあな、これで永久のさよならだ』

第１３９話　準備（後書き）

感想待ってます！

第１４０話　流星

「ＥＦＢ（エグゼフォースビックバン）　シューティングスター！」

スバルは蒼いバリア状のオーラを身に纏った。そして、一気に急下降する。あまりに急下降して、気圧の変化に体がついていけていない。

だが、止まってなどいられない。一秒でも早く、スバルは突っ込む。徐々にディメンションナルエリアが見え、そしてヘイトの巨大な図体が確認できた。

「いっけえええええぇぇぇぇぇぇ！」

ただ、スバルは突っ込んだ。

「ん？　終わったかな？」

獣を斬りながら少年は蒼き流星を見ていた。流星が落ちる場所は、秋原町に違いない。そして、それが落ちるということは戦いの終わりということだ。

「じゃ、こっちも終わらせなきゃ」

獣の全長は二十メートルにもデカくなっており、ここまでくると獣かどうかも怪しい。ヘイトが弱ってもこれだけが残っているのは疑問だが、それほどＷＡＸＡを潰したかったのだろう。

「ほら、餌だ」

手の甲から発射される弾丸を掃射する。獣の顔面に当たるが、怯みはしない。

「ちっ、しつけの出来ていない犬だね！」

さすがにイラついてくるのは子供だからだろう。残飯処理（つまらないこと）をやらされて怒りが爆発でもしているのだろう。

（どうせなら僕をあっちに行かせてくれればいいのに……！　あのクソ、野朗がぁ！）

『次で決めろ。時間をあまりかけるな』

「分かったよ、次で決めてやるッ！」

真上に手を挙げる。そこに黒い電波が集中させる。ぐるぐると集まるそれは、球状になる。まるでそれはゲイボルグのブラックサン

のようだった。

「全て、焼けろ！」

直後、全てが黒き炎で焼けた。

「スバル君……？」

ミソラの疑問を肯定するかのように流星は速度を上げていく。

『良かったな、寿命まであと五秒ってところか？』

シルバー・ウィンドは笑いながらそういうが、ヘイトは笑ってなどいられない。彼はシルバー・ウィンドのせいで地球を破壊することが出来なくなってしまったのだ。

ヘイトは生きるために憎しみという心を使ってしまう。それは瀕死であればあるほど使ってしまう。今のダメージからして死を覚悟しても無理なのだ。つまり、ここで何もしなければただ死ぬだけなのだ。

それでいいわけがない。時間を稼げば生き残れる可能性もなくもないのだから。

『……ギャラクシーバースト！』

ヘイトの口から白と黄色が混ざったような光線が吐かれた。それはまっすぐにスバルに向かっていく。

「ぐっ……」

光線とスバルが真正面から衝突する。どちらが押されるでもなく、ただそのまま静止している。だが、それはいつまでも続いていることではなかった。傷ついているはずのヘイトが徐々にスバルを押していく。

「スバル君！」

スバルにはもう誰の声かも分からなくなっていた。ただ、自分を心配してくれているということだけは理解できた。

（……負けられないんだ！）

負ければもしかしたらこれで人生は終わりかもしれない。それは別に自分だけではない。この星に生きている人もだ。そして、せっ

かくここまでヘイトを倒すために準備してくれたエグゼにも申し訳立たない。

それで、はたしていいのだろうか？　ここで負けてしまっていいのだろうか。

「――――！」

声にならない咆哮が轟いた。音源はスバルからだった。獣と評してもいいのかも分からないその声は、味方までも驚かせた。

「まさか、ここで暴走！？」

『それはないよ』

暁の疑問を間髪いれずにエグゼは否定した。

『ヘイト、君はたしかに世界を支配しようと頑張った。……けど、残念だったね』

徐々に押された分をスバルが押し戻していく。

『僕に協力者がいてしまったんだ。それが、君の敗因だ』

『ぐ、おおおおおおおおおおおおお！』

光線は真っ二つに裂けた。それはスバルが突っ込んだからというのは言うまでもない。圧倒的スピードで突っ込んだスバルは、そのままヘイトの胴体を貫いた。

「終わっ、た？」

攻撃の反動で超究極獣化（ハイパーファイナビースト）が解けたスバルは、ヘイトを見た。まるで砂で作られたように、静かにヘイトの原型は崩れていく。

それを見て座り込んでしまう者、溜め息をつくもの、反応は人それぞれだった。電波変換はここがディメンションナルエリアだから落ちてしまうのではないかと思って解けていない。

「終わったんだよ、スバル君！」

笑いながらそういってくれるミソラを見て、スバルは座り込んでしまった。膝が笑っているのである。この二週間、あまりにも多忙すぎる彼のことを考えると当然といえば当然だろう。

「ありがとう、ミソラちゃんのおかげだよ」

「うんうん、スバル君ががんばったからだよ！」

ミソラはスバルに手を差し伸べる。スバルは手を取って立ち上がった。

「あ、ギンガ君……」

原型の崩れたヘイトからギンガも見つかった。意識はないらしい。外傷はないことから、命に異常はないだろう。

「これで、一件落着だね」

「うん、本当に終わったんだ」

ヘイトの脅威は去った。これで、また平和に暮らせるのだろう。

『ありがとう、スバル君』

ハンターからエグゼが出てきた。多分、今回の戦いで一番の立役者は彼であろう。彼がいなければ、きっと負けていた。

『ヘイトを倒すことが出来た。心から感謝してるよ』

「でも、きっと君がいなければヘイトを倒すことは出来なかったよ」

『それはないよ』

「？」

『運命は、決まっているから』

まるで詩だな、とスバルは思った。いつかこんな感じで人に思いを伝えられたらな、と思う。

『――ああ、本当に運命だな』

突如、暖かくなりつつあった場を冷ますが如くシルバー・ウィンドが口を開けた。鞘から刀を抜き、こちらに近づいてくる。

『待ってたぜ、おまえが出てくるのを』

『……やっぱり君は変われないんだね』

そういうエグゼの眼は何故か細かった。それは哀れんでいるのか、悲しんでいるのか、スバルには理解が出来なかった。この時代を生きる者だから。

『いや、変わったぜ。あの時から』

「ちょ、ちょっと待って？　君は何を？」

『僕をデリートしに来たんだよ』

その言葉に真っ先に驚いたのはスバルだった。無理も無い、ヘイトの話では二人は仲間であったのだから。

『……誰か、ギンガ君を外に出してくれ』

エグゼは右腕を構えた。それはつまり、戦うということだ。

「俺が行こう」

それに名乗りを上げたのは、暁だった。まるで最初からこうなることを見越していたようでもあり、反応は迅速だった。

「シルバー・ウィンド、おまえは――――」

『さっさと行け。邪魔者がいたら無駄に血が流れる』

何か言いかけた暁をシルバー・ウィンドは遮る。急かしているようでもあった。今すぐにでも戦いという感じだ。それを聞いて暁はギンガを抱えて、ディメンショナルエリアから出て行ってしまった。それをシルバー・ウィンドは一切見ない。

『この戦いに俺とエグゼ以外はいらねえ。……分かったなブライ？』

ピタリとソロの動きが止まった。今飛びかかろうとしたのだろう。だが、それを止める何かがあった。

『別に入ってもいいが、死ぬだけだぞ？　俺は今も制限（リミッター）があるが、それでもおまえらに負けるほど弱ってもいない。死にたくなければそこで待ってろ』

刀を構えた。そこに風が集中する。電波で作られていない風は、自然現象という形でシルバー・ウィンドに味方する。

『さあ、ようやく俺が復讐する番だ』

第１４０話　流星（後書き）

あと六話の予定。

次話、別に意外でもない話があります！

では、感想待ってます！

明日からテスト勉強なので更新はおやすみです

過去編？　ウィンド（前書き）

過去編と言っても最初だけです。

過去編？　ウィンド

『……それ本気で言ってるのか？』

ウィンドは低い声でそう訊いた。その声には明らかに殺意が混じっている。

『うん、そうだよ』

対してこれが普通だといわんばかりの表情をしているのはエグゼだ。提案した内容を特に悪いと思っていないようだ。だが、それに賛同するウィンドではない。

『なんで「守護神（ガーディアン）」を使い捨てなきゃならねえんだ！　それも俺以外を！』

『厳密に言えば今は「ガイア」だけどね、まあそれは置いておこう。君には他の仕事があるからさ』

『だからってなぁ、ゲイボルグたちを殺してまでやることか？　もう二十年も経ってるんだぜ？』

あれから二十年、熱斗はもちろん大人になり、ワイリーはアイリスとカーネルを再構築していた。もう脅威なんてあるわけが無い時代に、彼ら二人は物騒な話しをしていた。

『ヘイトはあのときから世界から消えた！　自分でデリートしたに違いなんだよ！　それを未来になったら出てくるとか訳分からないことを……』

『事実を言っただけだけど？』

思わずウィンドは刀を抜きそうになった。三日前からこんな感じだった。まるで人が変わったようにウィンドを怒らせるような素振りをするようになったのは。まさか、こんなことを考えていたとは。

『で、それを俺に言ってどうするってんだ？　まさかここで斬って欲しいとか？』

『無理だろうね、君では僕に勝てない』

それだけで充分だった。怒りを通り越して呆れていたウィンドは一気に間合いを詰めてエグゼに斬りかかる。だが、エグゼはそれをバリアブルソードで受け止める。

『おまえにしては愚策だな。それとも何か？　こころの奥底では自分を止めて欲しいって感じか？』

『そんなことあると思う？』

『無いからこうして攻撃してるんだよ！』

圧倒的速さで刀は振られる、がバリアブルソードは砕けはしない。それはウィンドが制限（リミッター）を付加させられているからだろう。

『ヘイトは必ず未来で暴れる。そのために「ガイア」を使って止めようとするんだ、何が悪い？』

『てめぇの脳みそだよ！』

鍔迫り合いになり、互いに相手を押そうとする。だが、どちらも動かない。しょうがなくウィンドは後方に下がる。

『考えてみろ！　だったら俺達だけで済ませたほうがいいだろ！なんで殺さなければいけないんだ！？』

『僕達はどうせ滅んでいくんだよ？　だったら別に利用されてデリートされたほうがいいに決まっているじゃねえか？』

『てめぇは、どこまで腐りやがった！』

ドウッ、と一気に風を刀身に集中させる。目に見えるくらい空気が動いているその光景はあまりにも現実から離れすぎていた。

『腐る、か。たしかに僕は腐ってしまったかもしれないね』

自嘲の笑みを浮かべてエグゼはそういう。それを見てウィンドは歯軋りする。本気ならとっくにバリアブルソードは砕けている時間なのだ。

それがこんなに時間がかかってしまうとは、正直持久戦になることは必至なのだ。

『どうしたの？　「ガイア」が利用されちゃうよ？』

『あんまりナメてんじゃねえぞ！』

直後、風がまるで龍のようにエグゼに襲いかかった。四方向から襲い掛かるそれは、距離というものを消してエグゼに迫る。

だが、それをエグゼは避けた。風は地面を虚しく抉るだけで、エグゼに傷一つ負わせられない。

『防御ばっかしてんじゃねえぞ！』

今度は衝撃波を放ち、ウィンド自身もヘイトに突っ込む。避けようが何しようが、避けた所を攻撃してしまえばいいのだ。

『本当に、こんなのでいいの？』

衝撃波を掻き消し、またもウィンドと鍔迫り合いになるエグゼ。そこにウィンドは違和感を覚えた。何故か鍔迫り合いをよくさせられる。そしてエグゼは攻撃してこない。

そして、自分だけが攻撃させられて時間が過ぎていく。もう少し言うと、無駄に時間が使われている気がする。

（俺にスタミナは関係ない、ということは……）

また後方に下がる。だがエグゼは攻撃をしようとしない。

（もっと別の……たとえば――――）

（この電脳全体を圧縮フォルダにするため……！？）

そう気付いたときにはもうそれは始まってしまっていた。エグゼはウィンドには何も言わずプラグアウトする。当然、科学省の電脳が圧縮されるということは、科学省が承認したということだ。

『やべえ！』

だが、それこそ何をしょうがウィンドに逃げ場は無い。精々寿命を縮めるくらいだ。

《──ウィンド》

『ッ！　エグゼ……！』

《君には百年後に飛んでもらう。そこからもう百年の間に君のオペレーターを探し出してくれ。そして、ヘイトを討つための準備をしてくれ》

『ざけるなあ！　そんなことするわけ──！』

《ここで死んだら、もう「ガイア」を救うことは叶わないよ？》

『ッ！』

生きて可能性にかけるか、死んで自己満足するか。『ガイア』を救うにはとにかく生き残らなければいけない。

《君はどっちにする？　僕はどっちでもいいけど》

『てめぇ……！』

《もし生き残れれば、最後に僕と戦うこともできるしね》

徐々に電脳は圧縮されてしまう。まるでブラックホールに吸い込まれるように電脳は片っ端から消えていく。

『覚えてろよ……俺はおまえを斬るからな』

《いい返事だよ、ウィンド。それじゃ、詳しい話は君の頭に入れておくから》

《精々無駄に足掻いてくれよ》

『前哨戦程度で疲れてるんじゃねえぞ！』

爆風と共に刀が振るわれ、それはドリームソードに当たった。ドリームソードはソードの中でも最強クラスに入る剣だ。だが、シルバー・ウィンドにとってそれは単なる棒でしかない。金属と金属が削りあう音と共に、ドリームソードは折れた。そして、爆風によってエグゼが吹っ飛ぶ。

『もっと俺を張り合えよ！　んなレベルじゃ俺は満足しねえ。獣化でもなんでもしてみろ！』

彼を動かすのは憎しみと怒り、それだけだ。他には何も無い。ただ二つの感情だけでシルバー・ウィンドは刀を振り、エグゼをデリートしようとする。

（どうすればいい……？）

立ち上がりながらエグゼはこの状況をどうすればいいか考える。シルバー・ウィンドの特徴というのは、近・中・遠、全ての攻撃に対処するその柔軟さだ。銃弾は風の刃によって粉々になり、近づけば風の盾によって遮られる。風で防げない物もあるが、それをエグゼは持っていない。

（どうすれば時間を稼げる……？）

次にネオバリアブルソードを腕に装備する。精々三十秒くらいで壊れてしまうだろう。けれど無ければエグゼはすぐにデリートされる。

『獣化（ビーストアウト）は使えないからね、もう』

『そうか、残念だ』

途端、シルバー・ウィンドが刀を振るった。風の刃がエグゼにむかって飛ぶ。剣と刃がぶつかり、キンキンキンという音が断続的に聞こえる。

『もう少し丈夫な体だったら良かったんだけど、しょうがねえか』

呆れていた、シルバー・ウィンドは心底呆れていた。これが英雄と呼ばれていたネットナビ、どんなに腐ろうがもっと強いと思っていた。だが予想は大きく外れてしまって、気を晴らすことも出来ない。

『じゃあ……これで終わりにするか』

足に思い切り力を入れてシルバー・ウィンドは地面を蹴った。一瞬で鞘に刀を押さえ、抜刀の構えを取る。風が集中し、徐々に目に見えるくらいにまでうねりを上げる。

だが、エグゼはこれを待っていた。シルバー・ウィンドに攻撃を与えるこの瞬間を。もし、風の盾がずっと纏われていたらシルバー・ウィンドが近づいてしまうだけで吹っ飛ばされてしまうのだ。つまり、攻撃する瞬間は風の盾を消すはずだ。

エグゼも地面を蹴る。これが唯一攻撃を与えることの出来るチャンスだ。これを当てなければきっと、ここで終わってしまう。シルバー・ウィンドとエグゼはお互いのリーチに入り、そして――――

突発的にエグゼに向かって風が吹いた。それは吹っ飛ばすほどではなく、エグゼの攻撃を妨害する程度のものだ。

（な……）

『五の型　風魔烈風刃』

一瞬でエグゼの胴体を五度斬る、さらに遅れて風の刃が体全体を斬る。威力は言葉にならなかった。周りから見れば何があったか分からなかったが、所々から噴出する微粒子を見て息を呑んだ。

普通なら後方に何十メートルも吹っ飛ぶ攻撃を受けて、エグゼは

吹っ飛ばなかった。彼が何かをしたのではない。シルバー・ウィンドが吹っ飛ばないように風の塊を後ろからぶつけたのだ。

ただ、へたりとエグゼはその場に倒れた。その目には生きているということがもうできていない。人間で言えば呼吸をし、心臓が動いているだけの状態といえばいいのだろうか。瀕死とはこういうことを言うのだと、改めて知らされる。

『終わりか？　弱すぎて話しにならないぞ？』

シルバー・ウィンドはこのときをずっと待っていた。けれど、あっさりしすぎている。

エグゼは顔を上げられない。それを見てシルバー・ウィンドは溜め息をつく。本当にこれで終わってしまうのだとという残念な気持ちと、これだけで死ねるエグゼへの憎しみ。

『面倒だ、これで死ね』

刀を振り上げる。風などは使わない。それがせめてもの情けのつもりだろう。一気に刀を振り下ろす。ガアン、という音が響き渡る。

『……なんのつもりだ？』

刀は振り下ろせなかった。スバルがロックバスターで妨害したのだ。正確無比な一撃だったが、刀は落とされることは無かった。

「僕には何がなんだか分からない、けどエグゼはデリートしちゃいけない……！」

『精神科にでも行ってこい。邪魔だ』

それと同時に風が吹く。けれど、スバルに当たる前にウォーロックがそれを邪魔する。

『ビーストスイング！』

爪で風を掻き消す。それを見て、シルバー・ウィンドは少しだけ笑った。

『さすがに何度もやられれば知恵もつくか』

『うるせえ！』

「ウォーロック、黙って」

その言葉にウォーロックは静かになる。スバルはただシルバー・ウィンドを見る。

「エグゼはここまで考えていた。だったら、君がこうなることも分かっていたんじゃないのか？」

『……』

たしかに、エグゼがシルバー・ウィンドが攻撃してくるのを予想していた、いや仕向けたのだ。では、なぜそんなことをしたのだろうか？

それはとっくに分かっていた。ここまで生かすためだ。

『で？　それがどうした？　そんなのは俺は分かってるぞ』

「僕には分からないけど、他にもあるんじゃないの？」

あるわけがないとシルバー・ウィンドは思っていた。エグゼの目的の中にはそんなものなど無かった。エグゼの計画の中ではシルバー・ウィンドと和解でもして生き残ろうとでもしたのだ。結果、話すこともないまま地面に伏すことになったが。

「君は絶対に何か分かっていない。それが分かればエグゼをデリートする意味も無くなる！」

『そうかよ、無くて残念だよ』

もう無駄だ。そう思い刀をまた強く握ろうとする。だが、本当に無いのかとも考えてしまう。

エグゼの計画はヘイトを倒すこと。それを倒すためにシルバー・ウィンドが必要だった。シルバー・ウィンドを手伝わせるために先に『ガイア』をデリートする計画を言った。そして、憎しみと怒りでヘイトを――

（まて、『憎しみ』……？）

憎しみ、そのフレーズが頭から離れない。憎しみ？　それはなんだった？　さっきまで何かそれについて

後ろを振り向いた。気付いたのはシルバー・ウィンドだけだった。地面から五メートルくらいの高さに、黒い塊が集まりつつあった。

あれは、誰の憎しみで構成されているのだろうか？

過去編？　ウィンド（後書き）

感想待ってます！

ユーザーでもない方でも感想かけるので、ぜひ書いてください！

批判でも結構ですので！

第１４１話　終末（前書き）

シルバー・ウィンド視点です。

ですので描かれていないことが多数ございますが、気にせず読んでください。

質問は受け答えますので

第１４１話　終末

考えられはしなかったのだろうか、ヘイトはまだ生きていると。誰がデリートしたといった、誰が戦いを終わりと言った？　言ったとしてもそれは信用できる物だと思ってしまっていた。

ヘイトのが恨んでいるのは三人、スバル、シルバー・ウィンド、エグゼだ。では、誰が一番弱い？　エグゼはシルバー・ウィンドのせいで隠れている状態だ。だったら、誰に攻撃をしようとするだろうか。

答えは簡単だった。まだ原型も何か分からない黒い粘土のような物は、腕だと思われる触手を伸ばした。そこから、彼の最も得意とするレーザーが放たれた。

憎しみを糧（かて）とするそれは、一直線にスバルに向かっていった。光速の攻撃は避けることが出来ない。スバルは何がどうなったか理解できなかったであろう。それはここにいるほとんどの人間がそうだ。

爆音が轟いた。攻撃が直撃したのだろう。反応することなど出来なかった。シルバー・ウィンドは、ヘイトに攻撃するかスバルを守るか迷ったのだ。どちらにしても結果は同じだったのだが、それでも何故か体は動かなかった。

『ヒャヒャ……ヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！』

笑い声が聞こえた。誰から発せられる蚊など考える必要は無い。気味悪い笑い声がその場に響く。それと同時に誰かの甲高い悲鳴も聞こえた。スバル側の人間だろう。

『本当に滑稽だよ！　ざまあみろ！』

徐々に粘土のような物は形を整えていく。本当に見ていて吐き気がするような光景だった。

『……まだ生きるのか』

『当たり前だろ！？　俺はスバルとエグゼを殺すために生きてきた？　それを達成する前に死ぬわけがねえだろ！』

その割には死にかけているな、という言葉を飲み込む。きっとあの攻撃でスバルはデリートされたか電波変換が解けているだろう。正直どちらでも良かった。

『……そうだな、俺も終われない』

どうせならオーパーツも使って殺しにかかるか、と思ってコンベーションしようとする、その瞬間。ヘイトの表情が固まった。

『なんで……』

震える声でヘイトは何かを言った。けれど聞き取れなかった。咄嗟に後ろを振り返る。そこにはスバルの死体でも転がっているのだと思っていた。しかし、それは間違いだった。

周りからの悲鳴も聞こえなくなる。当然といえば当然だろう。何せスバルはデリートされていなかった。だが、悲鳴が聞こえなくなったのにはもう一つわけがある。

スバルを庇ったと思われるエグゼが立っていたからだ。それも合体獣化（ブルビースト）の状態で。

分かってしまった、何故エグゼが獣化（ビーストアウト）をしなかったのかが。この結果を見越していたからだ。

『スバル君、君は不思議に思わなかった……？』

現状を未だに理解していないスバルに、エグゼは語り出す。その体はあまりにもボロボロだった。誰がそうしたかはシルバー・ウィンドは考えたくも無い。

『なんで、僕のＰＧＭを装備すると君だけにダメージが負荷されるか』

「え……？」

『実はね、君だけじゃなく僕もなんだよ。装備していると自然にフルシンクロしちゃうんだ。余程相性がいいみたいでね』

うっすらと笑うエグゼの顔は、どこかに逝ってしまうような感じだ。

『そして、僕と君がフルシンクロしたということは、ダメージは僕にも入っているということだ』

驚愕した。別にエグゼにダメージがあろうがそんなことはどうでもいい。では何故そんなことを仕向けたのかだ。

『僕は、ここで死ぬんだよ』

つまりはここでエグゼは死ぬということを決めていたのだ、最初から。あの時から。

『死ななきゃいけないんだ、こうしなければいけなかった僕に対しての制裁。それがこれだよ』

「なんで、そんなこと……？」

『僕が、弱いから』

二人の会話はあまりにも弱弱しく、集中しなければ聞き取れる物ではなかった。何故こんな弱弱しいか、それはエグゼからでる微粒子の量を見れば分かるだろう。

『僕が運命に抗えないから、それが悲しいからだよ。君を巻き込んでしまわなければいけなかったこと、「ガイア」を利用しなければいけなかったこと、そして――』

一旦言葉を切って、こちらを見てエグゼはいった。

『ウィンドと戦わなければいけなかったこと』

徐々に、脚からエグゼが消えていく。遅いスピードだが、それは確実に死へと向かっていることを表している。

『ごめんね、ウィンド。酷い事言って』

その言葉にカっとなった。

『何自分だけ逃げてるんだ！　なんでおまえだけ勝手に死ぬんだよ！　ここまでやったら責任取れよ！』

腹が立った。いつの間にか勝手に風が操られ、刀に集中している。

『おまえは、自分だけ死んでいいと思ってるのか？　そんなの自分勝手だろうが！　せめて償いくらいしろよ！』

ダッと駆けた。距離は十五メートル。だが不思議と一気に距離を詰めようとは思えなかった。ただまるで人間のように走り、叫んで突っ込んでいく。

『……そう言うと思ったよ』

笑っていた。自分が死ぬというのに。それとも頭でもいかれたのかもしれない。どちらにしろ斬らなければいけなかった。

胴体まで消えてしまったエグゼはまるで斬られてもいいという風に見えた。それは誰から見てもそうだとは限らない物だったが、シルバー・ウィンドにとってそれは絶対そうだと言い切れるものだった。

風が暴れていた。いや、操りきれていなかった。風が周囲に拡散してしまって、意味を失ってしまっている。逆にシルバー・ウィンドの行く手を阻んでしまう。

『だから、用意もしておいたよ』

エグゼの目の前には二つの光球が出来上がっていく。そんな彼の残った体は胸までだ。

『君には制限（リミッター）を外すプログラムと、それともう一つ。スバル君にもあるから』

笑われても誰も救われはしなかった。それを分かっていたのにエグゼは笑っている。それを見て、足を早くしようとシルバー・ウィンドは力を入れる。

あと三メートル、エグゼの体は顔半分にまで消滅していた。だが、それでもシルバー・ウィンドは刀を振った。

『じゃ、頼むよ。頑張って生きてね』

刀が当たる前に、エグゼは消滅した。白銀の刀が虚しく空気を切り裂く。

『くそが……』

エグゼの前にあった光球がスバルとシルバー・ウィンドの体に入っていった。体が軽くなったように思える。

『おまえが死んで、誰が救われた……？』

返事など無い。もうデリートされてしまったのだから。ネットナビには、残留電波などは無い。

『勝手に満足して死んでんじゃねえぞ！』

その声はあまりに遅く響いた。それが、シルバー・ウィンドをさらに怒らせる。

「なんで、こんなこと……？」

スバルはようやく状況を理解したらしい。が、そんなものはどうでもよかった。もう生きる意味が無くなった。ここまで生きてきた心の支えが、消失したのだ。

『……ははは、死にやがったよ。あいつが本当に死んだよ！』

さっきまで黙っていたクソ野朗が今頃になって笑い始めた。

『ざまあねえな。結局周りの奴に全て押し付けやがった！』

エグゼの行（おこな）ったことは逃げたと言い換えられる。スバルに押し付けてしまったのだ。最低だと思うし、正直死んで当然だと思う。

だが、それはヘイトに笑われるほどのことだとは思えない。思いたくない。

『で、どうするぅ？　戦うか？』

「当たり前だ！」

答えたのは、意外にもスバルだった。何故怒っているかシルバ・ウィンドには理解など出来ない。ただ、それがスバルのだとしか思えない。そんなもので納得できるほど甘い人格をしているつもりは無いし、納得したくなど無い。

「僕は君を許せない、何があっても！」

『じゃあ、そのボロボロの体でやってみるか？』

今のスバルでは勝てるわけがないだろう。それはスバル自身がよく分かっている。

「それでも、僕はやらなきゃいけないんだ……」

それが自分の仕事とでも言いたいように、スバルは左手を構える。ウォーロックも臨戦態勢に入る。だが、それでも足りないだろう。

だが、その状況を打ち破る切り札（バトルカード）はスバルが持っていたのは、気付けなかった。そしてスバルがそのカードをいち早く理解できるほどの頭を持っていたことも。

「――プログラムアドバンス！」

スバルは素早く三枚のバトルカードを転送する。それを見てヘイトは鎌を生成して構えた。その顔のは余裕が見られる。

だが、それはスバルの右隣に出現したそれを見たら表情はガラリと変わった。それを見てスバルは笑った。嘲笑ではない。勝ちを誇るような笑みだ。

なにせ、デリートされたエグゼが復活したのだから。

『な！　どういう――』

「『ロックバスター！』」

『ビーストスイング！』

ピンクと黄緑色の弾丸、それと鋭爪による斬撃の嵐、それはヘイトを包み込んだ。避けることなど、不可能だった。折角再生したのにもかかわらず、あっけなくヘイトは破れた。爆音と爆風が、戦いの終わりを告げた。

シルバー・ウィンドは一度エグゼを見たが、もう姿は無かった。一度だけ力を借りただけ、という感じだろうか。ヘイトの姿は完全に姿を消して、ようやく終わったようだ。スバル達の戦いは。

地面に座り込む者、呆然としている者、そして勝ったと思う者、それぞれの反応を示した。シルバー・ウィンドいがいは。

（入れ知恵、か……）

最後のプログラムアドバンス、あの正体は分からないが、大体の予想はついていた。あれが、必要なのだと。けれどそれはスバルが持っていれば大丈夫だと思う。

だから、あとは自分のやるべきことをしよう。シルバー・ウィンドは、一瞥することもなくディメンショナルエリアを出た。

『はぁ…はぁ……』

ヘイトはエグゼとスバルの最後の攻撃を受けても生きていた。それはもはや彼の望まなくても生きてしまうだろう。

『体勢を整えなおそう……そして次こそ――』

世界を壊そう、そう彼は誓う。失敗したのには訳があった。先にを狙わなかったからだ、そう結論付けた彼は一度また戻ろうとする。

そこに戻れば一応こんな事態になることは防げるからだ。いままではプライドとギンガという重荷があったから戻れなかったが、もう戻れる。

そこに戻り、万全の体制ならば世界など跡形も無く吹き飛ばせる。それで、当初の計画通りなのだ。だが、彼は今日世界で一番ついていないものであろう。

ウェーブロードにたっていた彼の後ろに、ガシャリという鎧が動く音が聞こえた。そして、ヒュウという風の音まで聞こえる。

『俺の憎しみの心がおまえを生かすなら、何回でも殺しても生き返るって事だな?』

振り返ることは出来なかった。なぜなら、とっくに体を刀で貫かれていたからだ。

『いまちょっと苛立っててな。二十四時間耐久レースでも付き合ってくれや』

「終わったー」

少年は地面に座り込んだ。その手にはもう剣も無い。

『時間をかけるなと言ったはずだ』

「久しぶりの戦いだからいいじゃないか。君も楽しかっただろ？」

『別に、俺が戦わなければ意味が無い』

戦闘狂が、と心の中で思う。どうやら彼のウィザードはいつでもこんな感じらしい。

『それで、あとはたった一つだろ？』

「うん、あとはあいつをスバルに誘導するだけ。これで仕事は一通り終わりだよ？」

『ヘイトは……終わったか』

「ウィンドは遊んでいたかったみたいだけど、無理っぽかったらしいね。まあ、エグゼに対する憎しみをヘイトが背負いきれるとは思えないよ。実際にあったことないけど」

こんなときでも空は蒼かった。けれど少年の心は真っ黒だった。救いようがないとは彼も自覚はしている。

「……さあってと、僕らも帰ろうか？」

「破壊神（フォルテ）」

「え～っと、もしかして……」

少女はディメンショナルエリアから出てくるスバル達を見て顔を引き攣らせていた。もう戦いは終わってしまったのだろうか？

『あらあら、そうみたいですね』

「計画外、ってこと？　……それって――」

『出番無し、ってことですね』

その言葉に少女は脱力した。結局何もなかったということ、やはりというか電話の相手は信用なら無かったこと。とにかく無駄に張り切ってここまできてしまったこと。なんだか自分が惨めに感じて仕方が無い。

『まあ、しょうがないということで』

「済ませられないでしょ！」

『多分、あっちも予想外だとは思っていたと思いますよ？』

だが納得などできるわけがない。これはあれだ、一度一ヶ月間ただ働きでもさせなければ気が済まない。

「もういい、帰ろ！」

「守護神（セレナード）！」

「終わった、みたいね」

ヨイリーが呟いた。ヘイトは倒され、ギンガも保護された。こんな世界規模の事件でも、死者は出なかった。新たな問題も浮上したが。

「ええ、終わりました」

サテラポリスに戻っていた暁は、医療室にギンガを運んだ後、司令室に訪れていた。

「……諸君、戦いは集結した」

数秒の沈黙の後、全員が声を上げて笑い喜んだ。

「研究員の諸君、何をしている！　全世界にこれを伝えるのだ！」

途端にドタバタという音ともに研究員が走り出す。事件は終わったが、業務は残っているのだ。

「これで、一件落着って所ですかね？」

「ええ、けど……」

「ギンガ君の両親の記録、誰が消したか、だ」

暁の報告により、ギンガの両親の記録を調べたのだが、それらし

いものは見つからなかった。もちろんそんなものが消えるはずも無く、外部の誰かが消したのだ。

『これができるのは、外部の者かと』

アシッドの意見に三人が頷く。内部の人間がこれをやろうにも、一応サーバーのほうにも頼りないがウィザードはいるのだ。それを気付かれずにデータを隠蔽できるものなど、内部にはいないはずだ。

「まだ、仕事はやるべきことは残っているようだな」

第１４１話　終末（後書き）

ユーザーでもないかたでも感想かけるので、ぜひ書いてくださいね～

一応言っておきますが蒼き流星はまだ終わりませんからね！

ってか、五千四百もじって……

第１４２話　ショータイム（前書き）

ヒ～ハ～！　とテンション高め

第１４２話　ショータイム

あれから一週間が経った。スバルの名もなんとか回復し――ルナたちががんばったらしい――スバルも普通に学校生活を送れるようになっていた。

ギンガはサテラポリスに収容されてしまった。面会をしようとしても、何故か拒否されてしまった。ギンガではなくカイに。それについて言及しようとしたら「おまえはまだやるべきことがあるんだよ」とぶっきらぼうに言われてしまった。

やることってなんだろう？　と無理矢理追い返され、しょうがなく家に帰ったのだがつい三十分前だ。電波変換が出来るとはいえ、まだ倦怠感が残っていて疲れてしまった。

『なあ、カイって結局何なんだろうな？』

「……分からない。シルバー・ウィンドが僕達を助けたとき、ハヤテ君はサテラポリスにいたっていうし」

なぜ追い返されたかは未だに分からず、メールしたのだが返事は一切無い。正直友達と見られているかも怪しい。カイは何故か周りと距離をとる傾向があるので、あまり踏み込みすぎると今度は存在を否定されそうで恐い。まだ転向してから一ヶ月くらいなので、そういうところも考慮して上げられるように努力するつもりだ。

「まあ、今考えても仕方ないんじゃないのかな」

『それもそうだな。ミソラからのメールも気になるし』

そういってスバルはハンターの画面を見る。そこにはミソラから送られてきたメールが表示されている。一時間後、ＴＫタワーに来て欲しいということだ。

「なんか、このごろ結局大変な気がする……」

『お、おまえもついにミソラのきも――――』

ズッドオオオンという音が聞こえた。一応言っておくがスバルの部屋でだ。更に言うとウォーロックがペチャンコになっている。久しぶりだね、と心の中で言いながら時間を確認する。約束の時間まであと三十分程度、そろそろ行くべきか。

「ウォーロック、大丈夫？」

『……駄目だ』

ヘイト・ギャラクシーに攻撃されたようにボロボロになっているウォーロックは、電波変換が出来ないらしい。しょうがなくバスを使うことにする。

「宿題もあるから早く行きたかったけど、しょうがないか」

『……その前に俺の体の心配は！？』

どうせウォーロックは大丈夫でしょ？　と冷たい言葉を言ってスバルはウォーロックをウィザード・オフした。ぎゃあぎゃあ喚くが受け答えしない。

「さ、行こうか」

このとき、ウォーロックに土下座でもして電波変換を頼めばよかったと思う。まさか、こんなことになるとは夢にも思わなかった。そして、これが何を意味しているかを、エグゼからバトルカードを受け渡されたときに分かっていればと、後悔した。

ここから、エグゼとスバルの繋がりは、始まったのだ――――

『ちょっと遅いわね……』

ハープは溜め息混じりにそういった。今ミソラと二人で待っているのだが、スバルは一向に来ない。電波変換でもしてすぐに来れると思っていたのだが、もしくは来ないのではないかと疑っている。

「あと三分、来てくれると思うんだけど……」

今日は金曜日と生憎学校がある。それでも誘ったのは、今日ギリギリ仕事が空いたからだ。今日誘わないでいつ誘う！　とハープに説得されてメールを送った。すぐに行く、というメールが素っ気ないメールが返ってきたので来るとは思っているのだが、まさか嫌われているのではないか？　という恐怖に少し囚われている。

『さすがに今日は厳しかったかな？』

「でも、来てくれると思うよ。……信じてるから」

『でも、学校あったのはキツかったか……』

「は、ハープが誘えって言ったんじゃない！」

少々口論まがいになるが、すぐに口を閉じる。ミソラはアイドルだ。今はサングラスと地味な服を着て誤魔化しているものの、熱狂的ファンなら声だけでばれてしまうというのもありえなくない。あまり大声で喋る物ではないのだ。

『あと二分、絶望的ね……』

「……」

まるで付き合ってもいないのに振られて多様に錯覚してしまう。今回のはあくまでお礼という感じだ。よく世界のためにがんばってくれました、と褒め称える感じだ。下心など……二割あって三割無い程度だ。

『そういえば、さっき変な電波体いたわよね？』

「……いたっけ？」

正直意気消沈モードなのに強引に話題を変えられると気を使ってもらっているのがバレバレで悲しい。

『いたわよ、なんかこっちずっと見てたわよ？』

「そうなの？」

『大方、あの電波体もあなたのファンね』

だから何？　と返そうとしたら、バスが止まった。それには見慣れた顔が乗っていた。

「あ、来た！」

相手もこちらに気付いたのか、笑顔でこちらに手を振ってくれた。すぐにバスも降りてくれるだろう。

『良かったわね』

彼が来てくれた、それだけでミソラは嬉しかった。願わくば、少ない時間でも彼と楽しい時間が過ごせますように、と願う。

『フフフ、ついに来ましたねロックマン！　時間は四時三十分ジャスト！　ジ～ツにスバラシイ！』

ウェーブロードで電波体はそう叫んだ。彼にとって時間とは絶対に守らなければいけないことで、狂ってはいけない物だ。

『ついに敗北する騎士（ナイト）も来たところで、それから女王（クイーン）をさらって行きまショウ！』

これから始まるのだ、と思うと電波体は口角が上がってしまう。

『ショータイムの始まりです！』

そしてニホン時間四時三十一分、サテラポリスニホン支部にある一通のメールが送られてきた。それはアメロッパ本部からのものだった。

英語で書かれていたそれを翻訳してみると、『開発中の電波体が脱走した。目撃した場合は速やかに捕獲してくれ』

時を操る電波体が、ニホンにやってきたというわけだ。

第１４２話　ショータイム（後書き）

ソードアート・オンライン３、４巻買ってしまった……

今日は眠れないな……

では、とにかく感想待ってます！

第１４３話　停止（前書き）

久しぶりの更新！

第１４３話　停止

『ったく、お気楽なもんだな……』

シルバー・ウィンドの視線の先には、男子小学生と女子小学生が楽しそうに歩いている。女子小学生のほうは変装をしているが、こちらからはバレバレだった。

『だからこそ、今日私達は見届けているのでは？』

『……そうだな、おせっかい（セレナード）』

シルバー・ウィンドのとなりに、羽衣を着た女性ウィザードがいた。一見優雅に見えるそれは、全ての攻撃を防ぐことの出来るものだ。彼女がいなければ、シルバー・ウィンドの能力は大幅に下がっていただろう。

『もしこの時代のロックマンがあれを倒しそうになったらどうするんです？』

『デリートするしかないだろ？』

『できるわけがありませんよ、それは。じゃなければ過去が変わることになります』

運命というのはどんなに抗った所で変えることが出来ない。それは誰しもが同じことだ。その所業はどんなことをしても不可能なのだ。じゃなければ、今頃こんなことにはなっていない。

『フォルテは？』

『一人がお好きなんだとか』

『……俺ら三人は半端な電波体だから見つかりにくいけど、サテラポリスに見つかったら大変なことになるぞ』

まだ2電波技術が完璧ではなかった時代、シルバー・ウィンドたちは電波化したのだ。そして、中途半端だったために元の力は出せなくなり、さらにシルバー・ウィンドはこの前で制限（リミッター）があったのだ。最初目覚めたときは当時のサテラポリスに追いかけられて大変だったものだ。無論、三人一緒に逃げていたわけではないが。

『今でも覚えていますよ。あのとき、ロックマンにお願いされたときは』

世界を救うために手伝って欲しい、そうエグゼニ頼まれた。けれど素直に頷くほどセレナードは優しいわけではない。もちろんそれ相応の代償を貰った。フォルテと半分に分けて。

『後悔してるのか？』

『いえいえ、おかげでこんないい時代にまで生きていられ、最高のオペレーターも見つかりましたから。嬉しいですよ』

『そうか……』

『あなたはどうなんですか？』

その問いに、銀色の剣士は簡潔に答えた。

『後悔してるよ』

彼はセレナードを見ずに小学生二人を監視している。けれど、どこかそれに羨ましいという感情が混じっているのは彼は知らないだろう。

『俺は、あのときに死んでも良かった。いや死にたかった。俺はこの時代でどんないいことがあってもそれは変わらないだろうな』

『だから、あなたをこの時代まで残したのでは？』

ピクリとシルバー・ウィンドの肩が動いた。けれどそれを知ってか知らずか、セレナードは続ける。

『あなたが、まだまだ精神的に成長する見込みがあったからなのでは？』

ギロリと、シルバー・ウィンドの目がセレナードに向いた。その目に宿るのは敵意と殺意。

『……だったらなんなんだ？』

今にも刀を抜く素振りを見せるシルバー・ウィンドを見て、セレナードは短い溜め息をつく。

『あなたは、変わりませんね』

いや、変わらないように変わってしまったのかと考えを改め、再度セレナードはシルバー・ウィンドを見る。勝てないわけではなか

った。正直持久戦に持ち込めばセレナードのほうが有利だ。

だが、それではいろいろ問題が発生する。彼女らのオペレーターにも影響することが多い。そして、彼女達はあまり知られていい存在ではないのだ。

『そろそろ来ますから刀は抜かないでくださいね？』

舌打ちをし、シルバー・ウィンドは刀から手を離した。そろそろ時間だ。

「うっ……」

スバルは思わずうめいた。

「だ、大丈夫スバル君？」

それを見てミソラは心配そうに彼を見つめた。スバルは両手を使って五段積みにした箱を持っているのだからうめくのも無理はないだろう。中身は洋服やらバッグやらで、全部ミソラが買ったものだ。変装しているが、こんなに大きな荷物を持たせているのだから芸能人関係と思われても仕方がないだろう。

「な、なんとか……」

しかしスバルが自分から持つといったのだからしょうがないだろう。彼にも誇り（プライド）がある。ここで弱音を吐いてしまったらせっかく見栄を張ったのが台無しだ。だから彼は今懸命に荷物を運んでいる。

『がんばれ～』

――だからといって横から応援する気のない声援を聞いて怒らないわけでは全く無い。

『おまえが自分から言ったんだからな～？』

「……分かってるけど、それを楽しんでるのは少し許せないな』

少し引き攣った笑みを浮かべながらスバルは彼のハンターの中にいる住人に言う。けれどそんな住人は知らん顔で、且つこの場を楽しんでいる奴だ。

『だけど、手伝ってなんてことが言えるのかな～？』

「ぐっ……」

ククク、とまるで悪人のように――実際悪人面だが――笑うウォーロック。それを見てハープは呆れ顔だ。そんな彼女もこの状況では何もいえない。

「やっぱり私が持つよ」

ミソラがそういってくれたが、スバルは首を横に振った。

「いや、ウォーロックのとおり僕が言ったことだし僕が持ってるよ」

と汗を掻きながらそういわれても説得力が無い。

「いやいや、私の荷物だし」

「どうせもう帰るんだから、大丈夫だよ。ウェーブライナーにのったら下ろせるんだから」

二度目も断わられてしまったミソラは引き下がるしかなかった。だが、正直嬉しかったりもしている。

「それより、ミソラちゃんは体のほうは大丈夫なの？」

「うん、おかげさまでなんとかね。……エグゼの力で治してもらったから」

「……」

エグゼはやはり戻ってこなかった。それはエグゼＰＧＭが壊れたことによって証明されている。ヨイリーからは修復は不可能だとい

われた。

それに、まだ事件は終わっていない。サテラポリスの内部にギンガと繋がっている人間がいるとして今捜索中だ。ギンガは誰とも繋がっていないといっていたらしいが、スバルには本当かどうか分からない。

エグゼに報いたければ一刻も早く見つけ出すことだ、そしてそれは俺達サテラポリスの仕事だ。と暁は言っていた。スバルには何も出来ない、だから待つしかないのだ。けれど、自分達が非力に思えて仕方がないのも事実だ。

「エグゼは、私達に世界を任せたんだよ。だから、生きている私達が何とかしなきゃ」

「……そうだね」

失うものが多すぎた戦いだったが、守ろうと思ったものは守れた。これで、エグゼは満足してくれるだろうか？　というささやかな疑問を考えようした。けれど、考えても無駄なのだ。今はただ、一生懸命に生きていけば、それで――――

ズバッ、とスバルの持っていたプレゼントの箱が切り裂かれた。

「え？」

ミソラの驚きの声が上がった。スバルには何がなんだか理解が出来ない。

『ッ！　スバル、避けろ！』

ウォーロックの声でようやくスバルの思考も戻って、咄嗟に右に避けた。そこになにやら刃物が通過する。

（時計の針……！？）

回転する刃物は建物にぶつかり、そして建物を砕いた。数秒の沈黙、それを壊すように女性の悲鳴が聞こえた。

「これって……」

「電波体の仕業、だね」

『スバル、電波変換だ！』

『ミソラも！』

すぐさまハンターを操作してトランスコードを入力する。

「トランスコード　シューティングスターロックマン！」

「トランスコード　ハープ・ノート！」

眩い光が天まで昇り、そして電波変換が完了した。

『ブラボー！　といったところでショウかね』

「誰だ！」

スバルがそう叫ぶと、ウェーブロードから一体の電波体が降りてきた。スラリとしていて、スバルよりも背が高い。額などには時計マークがついていて、よく分からないセンスをしている。

『クロックマンですよ。この時代のロックマン』

ニタニタ笑うそれに悪意を感じずにはいられないスバル。だが、クロックマンの視線はスバルに向けられてはいなかった。

『やはり美しいデスねぇ……』

「え？」

『絶対にコレクションにしなければ』

「どういうことだ！」

コレクション、その言葉を聞いて嫌な予感がする。

『簡単ですよ！　私は時間を操る電波体。その力をつかって過去、現在、未来の美しい電波体達を集めて永久のコレクションにするのですよ！　どうです？　ビュ～リホーな野望でしょ？』

「ふ、ふざけるな！　そんなことはさせない！」

『あなたでは無理ですよ。おとなしく下がってください』

『くそっ、嘗めやがって！』

「ミソラちゃんは下がってて！　クロックマンは僕が倒す！」

右手にソードを装備して、一気にクロックマンに接近する。だが、それを見てもクロックマンは笑っていた。まるで避ける価値もないといっているかのように。

「くらえっ！」

ソードを袈裟に振ろうとした、その瞬間。クロックマンの背後に時計が出現した。正確にはワープホールだ。それに後ろから入っていき、クロックマンは消えた。

「なに！？」

『どこ行きやがった！？』

ワープホールの中に入っていったということは、遠くに移動したのだろうか？　スバルがそんなことを考えてながら、ふとミソラのほうを見た。一度戻って彼女だけでも家に帰そうと思ったのだ。

だが、その考えはどこかに消えた。なぜなら、彼女の後ろのほうに時計の形をしたワープホールが出現したのだ。ミソラもそれに気付いたのだろう。一度後ろを向いた。そこから、腕が伸びて彼女の肩に触れた。

そして、ミソラの時は止まった。

第１４３話　停止（後書き）

ユーザーでも感想かけるので、ぜひ書いてくださいね～

総合ポイントがついに１００を突破！　超感激しています！

新しくお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

完結までもう少しですが、駄文にならないよう気をつけ、今後とも頑張って生きたいと思います！！！

第１４４話　意外（前書き）

今、作者はガリレオガリレイの夏空という歌にハマっています。一度聴いてみてはどうでしょうか？　自分のセンスなので合うか分かりませんが

第１４４話　意外

「ミ、ミソラちゃん！」

スバルの悲痛な声も虚しく、ミソラからの返事は無い。まるで死んでしまったかのように。

『これで一体、時間もキッチリ五時四十五分四十七秒とスケジュール通りですネ！』

「ミソラちゃんに何をした！」

『なぁに、ただこの子の時間を止めただけですヨ。これで老けることも無く、永久に若さを保つことが出来るのです！』

その意味の分からない野望のためにミソラが誘拐されてしまう、それが許せるほど心が広いスバルではない。

「ミソラちゃんを返せ！」

『無理で～スよ！』

「なら力ずくで――」

『それは無理ですよ、ロックマン！　なぜなら――

『俺がいるからな』

耳を疑った。一瞬誰かと思った。それほどスバルの頭には浮かび

上がらなかった。だがら、その姿を見た途端絶句するしかなかった。

「シルバー・ウィンド……？」

『なんで、おまえが……！』

『フフフ、このハープ・ノートの情報をくれたのはシルバー・ウィンドですヨ！？　あなたには意外でしたか？』

意外とかそんなもんだいではなく、この場にシルバー・ウィンドがいる理由が分からなかった。彼はエグゼの復讐だけに生き続け、そのために仲間をも斬ったような奴だ。それが

「君は、このふざけた計画を手助けする気か！？」

だがそれには応じない。シルバー・ウィンドはクロックマンを見て

『さっさと行け』

ただそれだけを言った。それだけで、敵かどうかは分かってしまう。

『ご協力ありがとうございます』

再度ワープホールを出現させるクロックマンは歪んだ笑みを見せた。

「ま、待て！」

ミソラがどこかに行ってしまう、それを防ぐためにスバルはクロ

ックマンに突っ込んだ。だが、それは見えない何かによって邪魔される。あまりの風に目を覆わなければいけなかった。そして、次に目を開けた瞬間、クロックマンの姿は無かった。

『てめぇ、なんでこんなことをする！』

ウォーロックの怒声が響く。だが、大して気にしてもいないシルバー・ウィンドは刀を抜くだけ。

『ん？　別にあのいかれたタミフル野朗の計画はどうでもいいんだ。ただ、あいつには過去に行ってもらわなければ行けない』

「どうしてだよ！　なんでミソラちゃんが――」

『勘違いしてないか？　別に俺がここに現れなくてもあいつは過去に行っちゃうんだよ。今更どうにかなることじゃない』

『は？　何がいいたいんだ？』

『過去は変わらない。変えられるのは未来だけって事だ』

過去、つまりクロックマンは過去に行ったことなのだろうか？というスバルの疑問を肯定するかのようにシルバー・ウィンドは続ける。

『あいつはとある時代に行った。そこでまたあいつのような被害者が出る』

つまり過去に行ってミソラのような電波体などを集めるということだ。そのことを聞くいて再度気持ち悪いと思った。

『本当なら、俺はここで戻ってもいいんだ。クロックマンは過去に行ったからな。……だが――』

そこでシルバー・ウィンドは刀を抜いた。

『気が変わった。……戦え、ロックマン』

『なっ……』

普段なら、ウォーロックは意気揚々として戦おうとしただろう。だが敵が違いすぎる。スバルとウォーロックはエグゼとの戦いを見ていた。それがどれほどまで別次元の戦いか、それを分からないほど馬鹿ではない。

『別に逃げてもいいぞ？　追いかけはしない。その分助けるのは早まるし、おまえは怪我をしなくて済む』

シルバー・ウィンドの言葉に嘘はないだろう、彼の言っていることは全てが真実であった。だから今回もそれに変わりはないだろう。

「……分かった」

『スバル……！』

ウォーロックが止めようとしたが、スバルの目をみてやめた。目が本気だ。戦いに消極的な彼にしては珍しく、闘争心が燃えていた。

「君がどんな理由でクロックマンを手伝ったかは分からない。けど、それでミソラちゃんがさらわれなければいけない理由にはならない。

僕は、それを許すつもりは無い！」

そして、彼は高らかに叫んだ。

「二重究極変身（デュアルファイナライズ）、ギャラクシーキングダム！」

ノイズが集まり、それはスバルを包んだ。次にそれが弾けとんだときは、もうスバルの体は青くなかった。黒と赤の混ざった姿、圧倒的速度と破壊力で敵を粉砕してしまう変身だ。

『さあ……おそらく俺の人生で最後の戦いだ。しっかり敵を演じてくれよな！』

シルバー・ウィンドの声を合図に、化け物は大きな一歩を踏み出した。

第１４４話　意外（後書き）

ＯＳＳやったことある人は意味が分かるはず

といってもＯＳＳ全て書いたらＯＳＳ買う人がいなくなっちゃうので途中省略します。ご安心を、そこまで天神地祇は優しくないので

最後の言葉、ご想像にお任せします。

では！

っていうかクロックマンがキモいと思ってしまうのは俺だけだろうか？

第１４５話　時限移動（前書き）

今日は僕についての正義の考え方が少しあります～。といっても被っていると思いますがね。

第１４５話　時限移動

「ソニックブレード！」

音速で振るわれる大剣が大気を切り裂く。周囲の電波をノイズが消滅させる。そんな一撃がシルバー・ウィンドに放たれた。

ガアアアンッ、という轟音が響き渡った。ビリビリと空気が震え、建物の窓を粉砕する。

だが、それだけだった。シルバー・ウィンドには一切の傷が無い。右手に持つ刀で受け止めたのだ。しかし、明らかにスバルの持っている大剣とは重量が違う。普通なら弾き飛ばされているはずだ。

『残念だな。おまえと一緒で前の俺とは違うんだよ』

「くっ」

『ビーストスイング！』

至近距離からウォーロックの鋭い爪が振るわれた。至近距離からの攻撃で、こちらは当たる自信があったウォーロック。だが、それを今度は左手で抜刀した鞘に受け止められる。

『前みたいにはいかないようだな』

以前のシルバー・ウィンドはビーストスイングは指も動かさず止められた。それは風を操っていたのだが、厳密に説明するとそれは複雑だ。

腕や棒状の物を振るうと、必ず速度の差が生じる。先のほうが速く、根元のほうが遅くなるのだ。シルバー・ウィンドはそれを利用してウォーロックの二の腕部分に気付かれない程度の風圧を負荷し、攻撃を止めていたのだ。

だが、それはもうできない。ウォーロックも成長しているのだ。生き物は成長し、そしてまた成長する。どんなに大きな壁があろうとも、限界が来るまで成長し続けるのだ。

『おまえに追いつくまで俺は強くなってやるさ！』

『そうか、五億年後を楽しみにしてるよ』

次はシルバー・ウィンドが刀を振るった。薄く鋭利な刀は軽量だ。だが半面に華奢なのも事実だ。どんなに稲妻のように速い一撃でもスバルの大剣相手では防がれてしまうはずだった。

――が、途端スバルの視界はブレた。ブレたというよりは一気に後方に下がったのだ。遅れて手に衝撃が走り、ギギィ、という金属が擦れるような音がついてきた。

慌ててバーニアで体勢を立て直した。シルバー・ウィンドを見ると、刀は鞘に納めていた。つまりはそこまで大振りな攻撃ではなかったことが窺える。

では、何が起こったのだろうか？　風を使ったのか？　でも風ならば分かるはずだ、と自問自答しながらも距離を測る。

音速を超える速度であれば一瞬で詰められる間合いだった。それ

にシルバー・ウィンドの速度はスバルの半分くらいなのだ。勝てないわけが無い。

だが、スバルはそれでも距離を詰めようとは思えなかった。恐かったのだ。ある程度の自信があったのにもかかわらずそれを平気でぶち壊してしまう実力が。

『止まるな、死ぬぞ』

シルバー・ウィンドが地面を思い切り蹴った。けれど速度はスバルには全然劣る。二倍というハンデを使って避けてしまえばよいのだ。

バックステップし、距離を取る。それを見て銀色の剣士は刀を振るった。突如音速を超える衝撃波が発生する。

『ダークエンドホール！』

全てを呑み込む黒い渦が、衝撃波を吸い込むその瞬間、次元が揺れた。

「なっ……！」

渦は一瞬膨張したように見えたが、すぐに四散した。衝撃波の威力は和らぐことも無くスバルに直撃する。肺の空気を無理矢理吐き出される感覚を味わいながら、スバルは墜落した。

『おいおい、俺はまだ風も使ってないんだぞ？　そんなんで終わってちゃ話にならねえよ』

「風を、使ってない……？」

いや使っていたはずだ。さっきの衝撃波は絶対――

そこで気付いた。シルバー・ウィンドはただ剣を振っているだけで、衝撃波は単なる副産物なのではないかと。

ダラリと、嫌な汗が流れた。対峙している相手が、あまりにも人間離れしすぎて――

『安心しろ。ヘイトとの戦いが終わってなきゃこんなことはできなかった。少なくとも刀を振っただけじゃな』

これが、人間なのか？　電波人間という枠を超えてしまっている。これではまるで神様と戦っているような感じだ。

『――それで人を救うとかほざいてるのか？』

少々呆れたような声がスバルに届いた。

『大事な人を救おうとした人がいた、けれど救ったせいでその人と関われなくなってしまった。多くの孤児を救おうとした人がいた、けれどそのせいで無益な戦いに巻き込まれてしまった。正義のために立ち上がった人がいた、けれどその強大すぎるな力のせいで正義とは認められなかった……』

そこで一拍置き、シルバー・ウィンドは更に続けた。

『おまえはそんな不運に見舞われているのか？　助けられてもその人と関われるだろ？　救おうとしても助けるために仕方がない戦い

だろ？　正義のために立ち上がっても正義って思われてんだろ？
それなのに悲劇のヒーローぶってんじゃねえぞ』

　シルバー・ウィンドは知っていた、その悲劇の主人公達を。自分の思ったとおりの結果にならず、苦しんだ者たちを。しかしその三人は立ち止まりはしなかった。がむしゃらにでも前に突き進んでいった。たとえ、自分の望んだ結果にならないと分かっていても。

『おまえが正しい判断をできれば俺となんか戦ってなんかいなかった。俺と戦ってあの女が救われるわけじゃねえだろ？　そこがまだガキだってことだ』

『まるでおまえが行ったこと全てが正義だと思ってんじゃねえよ。この世に正義なんて物は存在しないんだからな』

　正義は無い、彼はそういった。まるでスバルの今までの戦いを否定するかのように。

『正義って言うのはようは自己主張だ。自分が正しいと思うもの、それこそが正義。少しの疑いも無い自分の意思が正義だ。おまえにそれがあるのか？』

「……あ――」

『あっても俺を倒すなんてことよりも優先順位が低い時点で論外だ

な。そんな奴が戦場に出るな』

そういってシルバー・ウィンドは刀を鞘に収めた。それが何を意味するか、スバルは一瞬分からなかった。けれど、シルバー・ウィンドが背を向けてようやく理解する。

『お、おいてめぇ！　まだ勝負は――』

『無駄死にしても俺は構わないけど……どうせおまえらは死なないしな』

「どういうこと？」

だがその言葉に答えず、シルバー・ウィンドは消えた。周波数変換ではなく自分の脚で移動したのだろう。スバルにはどこかに行くかが見えていた。

『……あいつは何がしたかったんだ？』

「僕らを試したんだ。正義を持っているか」

立ち上がりながら、スバルは拳を強く握った。シルバー・ウィンドに舐められていたのもあるが、それよりも自分はミソラのことを考えていなかった。それが、一層彼の握力を強くした。血が出るのではないかと思うくらい強く、強く握った。

「助けに行こう、今度は寄り道せずに……」

『残念ながら俺の最後の敵にはならなかったぜ？　……たしかに殺す気はなかったが』

シルバー・ウィンドはセレナードを置いていき勝手に帰っている途中だ。その間に連絡を済ましておく。

『どうせならまた飛ばないか？　強い奴がいるところに。できれば……そうだな、この世界と似ているところがいいな』

だが電話の向こうの相手はそれよりもと重要なことを言い出す。

『……あとはおまえの仕事だろ？　それを送ったら勝手になんとかしてくれるって』

凄く投げ槍に聞こえるかもしれないが、それが本当なのだから仕方が無い。

『エグゼを殺したいが、殺そうとしてもどうせ無駄に終わるんだ。現に歴史はそうなっている』

仮に異世界のエグゼがいたとしても、彼は殺そうとはしないだろう。あくまで彼らを貶めたエグゼなのだから。けれど見かけたら斬りかかってはしまうだろうが。

『未来ほど知ってつまらないものはないぜ。無駄なことはしないのは一番だからな。……じゃあ、今日の夕飯は焼肉で』

ドアホ、と言われて電話が途切れた。今頃呆れているだろう。そんなオペレーターに苦笑してしまう。

「ヨイリー博士」

あれからスバルはサテラポリスに来ていた。理由は他に無い、ミソラのことについてだ。事前に電話で言っているが、そのときのヨイリー博士の落ち込みっぷりは半端じゃなかった。スバルも今頃だが落ち込んでいる。

「スバルちゃん……」

「今は早く助けることだけ考えましょう。……すぐに救ってあげた

いんです」

「そうね…そうしましょう」

周りの研究員、天地なども暗い表情をしていた。それが更にスバルの胸を縛り付けるがそれでもしょうがないと思って封じ込める。

「クロックマン、といったわね。実はあれは元々はアメロッパが作ったものなのよ」

「アメロッパ？　あの？」

アメロッパといえば世界で一番といってもいいほど凄い国だ。軍事、工業などはもちろん、ウィザードなどの開発も充実している。まさに時代の最先端を歩いている国と言える。

『そのアメロッパがどうしてミソラを？』

「いえ、あれはただ暴走しただけらしいわ。知能に問題があったらしくて、それを修正する前に消えてしまったのよ」

事態が思ったよりも深刻な状況に陥っていることが分かる。だがそれでは留まらなかった。

「クロックマンは時間を行き来する力、いわばタイムトラベルが可能なの」

「シルバー・ウィンドが言っていました。」

「ええ、それでね。つまり時間を行き来するということは、過去を

変えてしまう可能性が出てくるのよ」

『なっ……過去を変える？』

ウォーロックが驚愕した。それほどのことなのだ、過去を変えるという事は。たとえば、生まれるはずだった人間の母親を殺してしまえば、その人は生まれなくなってしまう。逆に殺されるはずだった母親を助ければ、生まれないはずだった人間が生まれてしまう。というようにあってはいけないことがあるのだ。

「まだ他にもいわなければいけないのだけれど、これはまだ注意事項だから言わないでおくわ。次に、ミソラちゃんがどこに飛ばされたかというと……これもまだ分からないわ」

大体予想が出来ていたとはいえその解答は聞きたくなかった。時間を行き来する能力、そんなのは恐らくヨイリーも初めてなのだろう。だから分からないこともたくさんある。

「だけど、おそらく過去に飛んだと思うわ」

「どうしてですか？」

「未のはデータがないのよ。まだ何があるか分からないから、ね。反対に過去なら少なからずデータが残っているわ。それを使ってどんどんミソラちゃんのような被害者を誘拐していくつもりね」

けれど、次の言葉はあまりにもショックだった。

「だけど、私に時間を行き来する力は作れないのよ」

「なっ……！」

『どういうことだ！』

「私も作れるか健闘したのだけれど、あまりに難しすぎるわ。一週間とかで作れるものでもないのよ」

「で、でも、それは関係ないんじゃないんですか？　一週間遅れても同じ時間に飛べば――」

「残念ながらそこまで正確なものをアメロッパも作れていないのよ。最悪の場合、半年もずれてしまうかもしれないわ」

半年、それはあまりにも長すぎる時間だ。クロックマンとミソラがいる時間が半年も長いわけが無い。せめて三日程度。それに当たる可能性は、あまりにも低い。

「今、暁ちゃんがアメロッパにクロックマンのデータを頂戴といっているのだけれど、拒否されてしまっているわ。もし悪用されたら、自分達の国が滅んでしまうかもしれないからね」

つまり、ミソラを助けられないということだろうか？　ついにスバルは絶望の淵に叩き込まれた。眼に涙がにじむ。

「……スバルちゃん、今日は帰りなさい？　対策はなんとか練るから。私達を信じて今日は寝なさい」

その言葉を聞いて、スバルはトボトボとエレベーターに歩いて行った。まるで夢遊病者のような、そんな足取りだ。エレベーターのドアが閉まるその瞬間、スバルの目から光る雫が落ちたのをヨイリ

ーたちは見た。

「どうすれば、ミソラちゃんを助けられるのかしら……」

そんなとき、ヨイリーのハンターにピピピという電子音が鳴った。

メールだ、あて先不明のそれには添付ファイルがあった。

「……え！？」

添付ファイルの名前はこうだった。

クロックＰＧＭと

第１４５話　時限移動（後書き）

スバル君のいいたかったことを知りたい人はメールくださいね

ここややこしいところなので

では、感想待ってます

プロローグ

二日後――サテラポリス

「覚悟はいいのね、ロックマン？」
「……はい！」

ヨイリーの問いに、スバルは数秒の沈黙と威勢のいい返事で返した。その声とその瞳に迷いは無い。とうの昔に決心はついていたのだから。

ヨイリーはその言葉にゆっくりと頷いた。彼女もまたスバルがそう返事するのを分かっていたのだろう。止めようとすることは一切せず、代わりにスバルの後ろにある時計型のワープホールを指差した。

「そのワープホールはあの子達がワープした場所、２００年前の『インターネット』に繋がっているわ」

ヨイリーの言葉に真っ先に反応したのはキザマロだった。

「に、２００年前ですって!?　それってエグゼがいたころの時代じゃないですか！」

２００年前というのは、周知の事実だ。生前のエグゼがもっとも活躍した時代といっても過言ではない。しかしキザマロが驚いているのはそこではなく、２００年も前の世界に行くことに驚いているのだ。

「い、インターネットってなんだ？　食い物か！？」

そこで一度空気が凍てついた。毎度毎度とはいえ、こんなことを言うゴンタに周りが幻滅したのだ。ヨイリーはまだ薄い苦笑いを浮かべているものの、他の三人は嘆息気味だ。

「ちょっと黙っていなさい」

ゴンタのせいで場の雰囲気がぶち壊しになったのを、慌ててルナが元通りにする。

「まだ今みたいに電波の通り道、『ウェーブロード』を使ってのデータ通信が出来るようになる前、世界中のコンピューターを一つに繋いで通信できるようにした、光博士の築き上げたネットワーク技術。それが『インターネット』でしたわね？」

「フフフ、その通りよ。よく知ってるわね、ルナちゃん」

「で、で、で、でも！　そんなに昔のネットワーク技術の中にスバル君が入っても大丈夫なんですか？」

キザマロの質問はもっともだ。２００年前なんていう遅れた技術の中に、最先端の技術が入ったらどうなってしまうのだろうか、想像することなんて小学生には無理だ。

「大丈夫よ、基礎となる技術は今の時代と一緒。スバルちゃんとウォーロックちゃんが融合した姿、ロックマンならインターネットにも自由に入れるわ」

『へっ！　別に俺は元々電波の体だから大丈夫だけどな！』

ハンターＶＧからウォーロックが声を張り上げた。彼も彼で今回

の任務を張り切っているのだろう。

『おいスバル、　なんなら俺だけでそのインターネットとやらに行ってやろうか？』

「ダ、ダメだよウォーロック！　ウォーロックけ行かせたら何しでかすか分かったもんじゃないんだから！」

慌ててスバルが止めにかかる。ウォーロックが一人で２００年前に行ってしまえば、それこそ世界がめちゃくちゃになってしまう。

「フフ、頼もしいわねウォーロックちゃん。でも……」

微笑を浮かべるヨイリーの目がスッと細くなり、スバル達には思いもよらない一言が彼女の口から発せられた。

「戻ってこれるかは分からないわ」

一瞬のタイムラグが生じる。そしてスバルはその言葉をようやく理解して目を見開いた。

『なっ！？』

ウォーロックもそれについては予想外だったのだろう。さっきまでの明るさは消えうせてしまっている。これが人間なら顔面蒼白といったところか

「なんですって！？」

「ど、どういうことだよ博士！」

ルナやゴンタ、キザマロも声を上げる。それに対してヨイリーは

あくまでも冷静に告げた。

「そのワープゾーンはあの子達を追跡するために作った、いわば未完成品なの。一度使ってしまったら消えてしまうような、ね」

つまりはスバルの後ろにあるワープホールは一度使えばそれっきりの消耗品ということだ。しかしヨイリーの腕が悪いわけではない。逆にこの短時間でアメロッパの技術を模倣するだけでも賞賛に値するくらいだ。

「戻ってくるには、２００年前の世界のどこかにいるあの子達を見つけるほかに手段は無いわ」

帰ってくるにも、ミソラを助けるためにも、結局はクロックマンと対峙することは絶対だ。ヨイリーは暗にそう告げていた。

「じゃあ、もし見つけられなかったら……？」

誰もが口に出すであろう疑問に、ヨイリーは間髪入れずに答える。

「戻って来れないわね」

「そ、そんなぁ～……」

もし、スバルがミソラを救うことが出来なければスバルも戻って来れない。一度戻ってきてやり直そうなどということは出来ないのだ。

「それでも、覚悟はいいロックマン？」

再度同じ質問をヨイリーはあえてした。この事実は最後まで言わ

ないでおいたのだ。試す、そういう意味合いが強い。スバルがここで少しでも揺らぐのであったら、ヨイリーはスバルを行かせないつもりだったのだ。

「……はい！　ボクが行かなきゃ、ボクが見つけてあげなきゃいけないんです！」

『おっ？　スバルのくせに言うようになったじゃねーか！』

スバルとウォーロックの二人の言葉に、ヨイリーは安心したように微笑んだ。

「そう、ね。あなたならきっとみつけてあげるわ。でもね、一つだけ気をつけて欲しいの」

一拍置いて再度ヨイリーは告げた、更なる問題を。

「２００年前の世界であまり人と関わらないこと。話したりするだけなら大丈夫かもしれないけど、この事件に人を巻き込むようなことは絶対にしちゃ駄目よ」

つまりはエグゼとも関わるな、そういうことかとスバルは勝手に結論付けた。けれどそれだけではなかった。

「そんなことをしては歴史が変わってしまうわ。その場合、最悪私達の世界が消えてしまうわ」

「ッ！」

あまりのことの大きさにスバルは息を呑んだ。自分の肩に乗っかった重みが、どれほど大きいかを再度実感してのことだろう。

「もちろんこれはあの子達にも言えることなの。もしあの子達が２００年前の世界で誰かを巻き込んでしまうようなことがあれば……」

世界が消えてしまう、ヨイリーはそれをいわなかった。時間もないということを明言しないほうが、時には意味をより強く知らせることもある。

「だからね、なるべく早くあの子達を見つけてきてちょうだい」

「分かりました。あまり人と関わらないように、できるだけ急いで、ですね」

心の中で反芻して、スバルは自分を支えてくれているブラザーに向き直った。

「……それじゃみんな。行って来るよ」

そういってスバルは三人に背を向け、ワープゾーンに駆けていく

――

「待ちなさい！」

凛とした声、それが建物に響き渡った。スバルは足を止め、振り返った。声の主は誰かはすぐに分かっていた。ルナだ。

「ど、どうしたの委員長？」

呼び止められるとは思っていなかったのか、少し動揺したようにスバルは訊いた。

「スバル君、ぜ～～～～～～～～ったいに帰ってきなさい！　これは命令ですからね！」

それに鼓舞されたかのように、キザマロとゴンタもスバルに向かって叫んだ。

「そうですよスバル君！　命令を守らなかったら委員長が怒っちゃいますよ！」

「そうだぞ！　帰ってこなかったら俺だって許さないからな！」

しばしスバルは呆然としていた。けれどすぐに覚悟を決めた目で三人を見る。

「委員長、ゴンタ、キザマロ……ありがとう、絶対帰ってくるよ！　それじゃ、行ってきます！」

今度こそ、スバルはワープゾーンのほうに駆けて行った。

「くっ……ここは？」

スバルが到着したのはウェーブロードとは違う何かだった。スバルはここがどこか確認するために辺りを見渡した。けれど、彼の住んでいた世界とは景色が全然違っているために何も分からなかった、

一つを除いて。

「僕の知っている電脳世界とは随分感じが違うけど……ここがヨイリー博士が言っていた『インターネット』っていうところなのかな？」

直後、ビキビキという音がスバルの背後からなり始めた。慌ててスバルが振り向く。すると、ワープゾーンが砕けている最中だった。それ粉々になり、電脳世界に消えていった。

「……もう後戻りは出来ない、か」

「なんだなんだ？　いまさら弱気になってるのか？　だらしねえぞ！」

「違うよ！　ただがんばらなきゃって思っただけ！」

そして彼は行くべき道を見つめる。ここから、始まるのだ。

「うん、がんばらなきゃね。この時代のどこかにいるはずなんだ。見つけ出して一緒に帰らなきゃ！」

そういって彼は駆け出した。２００年前という世界を。これから何がおきるかも分からない未知の世界を。

「絶対に助け出してみせる、待っててね……ミソラちゃん！」

――スバルがワープゾーンに入る前

『ヒヒヒ、これでようやく回り始める！』

電波体はサテラポリスの中にいるのにも関わらず、誰にも感知されなかった。それはインビジルで隠れている、というわけではなかった。

『ヘイトは使い捨てカメラみたいな死にかたしたからな……しょうがないといったらしょうがないけどな』

腰にあるのは二本の刀、片方には大きな傷があり、余程のダメージを負ったことを窺わせる。

『さあて、これでようやく始まる俺らの時代が。エグゼもいねえ…邪魔な三人がいるだけだが、それでも関係ねえ！　絶対にこの星を終わらせることが出来る！」

昂ぶった感情を抑えきれないといわんばかりに電波体は大声で叫んだ。

『ゲームの始まりだ……せいぜい足掻けよロックマン、そして――』

『キリュウ……！』

プロローグ（後書き）

久々の更新～

ユーザーでも無い方でも感想かけるので是非なさってください！

OSS編？　偽者（前書き）

時系列にお気をつけ下さい

OSS編？　偽者

２００年前――

「……で、どうやったらここから出られるの？」

スバルの質問に、しかしウォーロックは答えることが出来なかった。もちろん二人とも２００年前のことについての知識はほとんど皆無だ。簡単にいうと迷子、だ。

周りには多くのネットナビが存在しており、何やら会話を交えていた。しかしその顔は笑顔ではなく真剣みを帯びている。スバル達には知る良しもなかったが、その内容の大半がＷＷＷ（ワールドスリー）についてだ。最近世界にも注目されるほどに活動している犯罪組織に、ネットナビも気が気ではない。

――しかし、そのことだけについて話しているわけではない。いくらかの視線はスバルにも向けられていて、何やらひそひそと会話している。曰く「あんな奴ここら辺でいたっけ？」

「早くしないと注目を浴びすぎて歴史が壊れちゃうかもしれないよ！」

『いや、これくらい大丈夫だろ』

「そうかな……」

ヨイリーの話では、話すくらいなら大丈夫らしい。けれど、念には念をだ。関わりを持って得をすることは無いはずだ。それにどこから出る、なんてこの世界の住民には当たり前すぎることを訊ける

わけもなかった。

『あんまり急いだ所で何もねえ、そうだろ？　普段のおまえのセリフを俺に言わせんじゃねえ』

焦っていても仕方が無い、今はどこまで冷静にいられることが大事なのだ。ウォーロックにそれを認識させられ、少しスバルは悲しそうな目をした。

「ウォーロックにそんなこと言われるなんて……」

『んだとてめぇ！』

さっきから二人の大声で注目を浴びているのだが、全くそれについては気付いていない。近くに強力な周波数があることも、気付いていなかった。

「……ん？」

ネットナビというのは少なからず――例外があるが――周波数を持っている。電波体より弱く、探すのにも苦労しそうなほどの。群衆の中にはそんな周波数が溢れかえっていた。けれど、その中で一際大きな周波数を放っているネットナビがいた。

いや、それはネットナビなどではなく、電波体――

「いた！」

あまりのことにスバルは大声を出してしまった。スバルに視線を合わせているネットナビのかなり後ろ、そこにアレはいた。スバルが倒すべき電波体。

それはスバルを見てニヤリと笑うと、背を向けて走り出した。まるで自分から見つかりに来たとでもいいたいかのように。
しかしミソラを助けることだけを考えていたスバルは罠ということを忘れてしまっていた。すぐに敵を追う為に走り出す。

「ま、待て！」

なんだなんだ？　と騒ぎ始めるネットナビ達だったが、それを無視して電脳の中を走る。

クロックマンは時々後ろを振り返りながら走っている。スバルもそれに追いつこうとがんばるが、差は変わらないまま、約十五メートルを保っている。

「ウォーロック、周波数変換は？」
『無理だ！　このインターネットとかいうのはこっちの時代と違いすぎる！　何が起こるかわかんねえぞ！』

逆に言えば、クロックマンも周波数変換出来ないのだが、差が縮まらないのでスバルは苛立ちを覚えていた。

「……そうだ！　バトルカード　ジェットアタック！」

バトルカードを操作し、地面を蹴る。瞬間、強化された脚力でクロックマンとの距離を詰める。それに驚いたのか、クロックマンは思わず振り返った。

「バトルカード　ロングソード！」

右手に剣を装備し、クロックマンの背中にスバルは斬撃を繰り出

した。しかし

『コーリングブライ！』

クロックマンがそう叫ぶと、ヴゥン！　という音と共にスバルの攻撃は弾かれた。第三者によって。

「なっ……」

スバルの攻撃を防いだのは、ブライだった。剣がブライソードだが、寸分違わずブライだ。けれど、目には輝きが無く、まるで屍のようだ。

『ふふふふふ、わざわざこんなところまで来たのですか。ご苦労なことです』

クロックマンがニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

『スバル、このブライは偽者だ！』

「えっ？　どういうこと？」

『ワタシが呼び寄せたのですよ、未来からね！　まあ、もっともコピーですがね』

ブライは右手の剣を構えると、そのままスバルに突っ込む。それをスバルは剣で防ぐ。鍔迫り合いになりジリジリと攻防が始まるが、剣を弾き飛ばせない。

『では、ワタシはこれで失礼します。スケジュ～ルが詰まっているのでね』

『なっ、待ちやがれ！』

けれどそれを阻むのはブライだ。クロックマンのもとへは行かせない、そんなようにスバルの目には映った。

「絆を嫌う君が誰かを助けるなんてね……」

絆を拒絶する者は答えない、ただ剣を構える。それだけはコピーもオリジナルも同じということか。生気の無い目でスバルを捉えながら、ブライはあくまで戦う意志を示した。

『スバル！　すぐ追いつかねえとやべえぞ！』

「分かってるよ。バトルカード　マッドバルカン！」

左手にバルカンを装備したスバルは、そのままブライに銃弾の嵐を浴びせた。電波障壁は一、二発は防いだものの、残りの十一発は防げず、ブライは攻撃を受けるしかなかった。けれど倒れてくれるわけもない。

『チッ！　倒れねえか』

「さすがにソロのコピーだけあるね……」

ブライを倒さなければクロックマンに追いつけない、多分引き離そうとしてもブライは追ってくるだろう。

『スバル、次で決めろ！』

ここでずっと足止めを喰らっていれば逃げられてしまう。次の攻撃で決めなければ、どんどんミソラを助ける機会は失われていく。

「うん、ロッ―」

しかしブライだってただの棒人形ではない。剣を大上段に構え、そのまま垂直に跳んだ。しかもただの攻撃ではない。紫色のオーラを纏い、全てを破壊する魔の一撃。

「――これは！」

『スバル、避けろ！』

ブライの最強の技、ブライブレイクが、インターネットに炸裂した。ドオッ！　という轟音が鳴り、ブライの攻撃がインターネットに炸裂した。その圧倒的攻撃力により、インターネットの地面は根こそぎ壊されてしまい、すぐに修復されることは無いだろう。

もちろん、そこにはスバルの姿はなかった。爆風によって飛ばされたのか、はたまたデリートされたのか、ブライには分からなかった。否、それを疑問に思うこともブライはしなかった。あくまで、それはコピーで、忠実な駒でしかないのだから。さながらロボットというべきだろう。

「――ヘンゲノジュツ！」

だから、ブライは気付かなかった。スバルがバトルカードを使ったのに気付かなかった。

ブライの後ろに回りこんだスバルは振り返る隙も与えぬまま、その背中にソードを突き刺した。ブライの胸から、緑色のソードが生える。けれど、貫かれたのにも関わらず、ブライの顔は無表情。痛みすら感じない。

ソードが刺さった場所から徐々に彼の体は消えていく。徐々に風穴は広がっていき、そしてブライの体はすべて消えた。実にあっけなく、それは消えた。

「ふぅ……」
『終わったな』

スバルはブライが消えたのを見て安堵した。ブライがデリートした様を見て少し微妙な心境だが、今はそんなので立ち止まることなどできる状況ではない。

「すぐ追いかけよう、時間がない」

周りの被害を見れば酷い有様ではあった、ヨイリーにはあまりこの時代に悪影響を与えるなといわれていたが、どう見ても与えてしまった。直すのが一番最善だろうが、多分この時代のサテラポリスのような組織がすぐに駆けつけに来るだろう。

事情聴取などされたらそれこそミソラを救い出すことは困難になるだろう。時間を食ってしまえばクロックマンは別の時代に行ってしまう。そうすればもう終わりだ。ミソラは助けられないし、スバルも戻れない。

『ああ、すぐ行くぞ！』

そういって、彼らはクロックマンが逃げた方向に駆けていく。

『ん？』

クロックマンは街中で足を止めた。街中で彼のような目立つ風貌をした者がいれば、声の一つでもかけられそうだが、彼の移動手段

からしてそれはない。

彼が足を止めたのは、周波数を感知したからだ。それも、敵の。

『ブライを倒しましたか……二分四十六秒、まあ計画通りですね』

時計を見てそれを確認すると、周波数変換でどんどん街中を移動していく。瞬間移動のようなものなのだから、声のかけようもない。無論、彼も人気のないところに移動し続けているのだから、彼の姿を見ることも、また無いのだが。

『次の標的ターゲットまでは、あと1キロ……フフフ、楽しみですネ～』

彼は幸運だった。アメロッパのサテラポリス本部は、厳重に監視された、いわば要塞。電波体である彼でも、脱出は不可能だった。出たくても出られない、野望があるのにも関わらず彼はそれをずっと我慢して、モルモットとして生きていた。

そんなときだ、奴が現れたのは。唐突に爆発音が鳴ったと思えば、研究員達が騒ぎ出し、警備ウィザードが大量に出動された。何事かと思ったが彼は拘束されて動けなかった――恐らく彼を盗みに来たのだと思ったからだろう。

悠に百を超える警備ウィザード、だがそれはまるで紙屑のように消し去られた。あるものは刀で、あるものは見えない何かで、まるで暴風のように蹴散らされた。

そして数分後、彼はその姿を見ることが出来た。銀色の鎧、銀色の刀、そして紅い瞳。ぱっと見電波体だと思ったが、それからは周波数が感じ取れなかった。

呆然としていたクロックマンに対して、彼は単刀直入に言った。

「ここから出たくないか？」

それは、彼にとって救いの言葉、絶対に叶わないとまで思っていたこと。嬉しすぎて彼は狂喜してしまったほどだ。

銀色の剣士は強引にクロックマンの拘束を解くと、二人でアメロッパ本部から脱出した。追っ手は銀色の剣士が全て叩き伏せ、時間を稼いでくれたりもした。

何故そこまでしてくれる？　おまえは誰だ？

そう訊いたが剣士は答えなかった。だが、おまえの野望を叶える手伝いをしてやるといった。

野望を口に出したことは無い、けれど実際に目の前の剣士は全てを知っているようだ。それを知っているのだからただの電波体というわけではないだろう。しかし彼はあくまでその正体を薄々感づいていた。

ああ、こいつは神の遣いなのだと。

以前、彼には声が聞こえた。それは誰の声かも分からないし、空耳だと彼はこれまでずっと思っていた。なぜならそれは、この厳重の監視下の中から抜け出せるというものだったからだ。

世界最高の監視下にある施設でそれは無理だとクロックマンは思っていた。だから期待などしていなかった。しかし現実はどうだろう。もはや彼を拘束していた施設は破壊されつくしており、回復の兆しも見えない。きっと彼を探す余力も無いだろう。

そして彼と銀色の戦士は逃亡した。クロックマンが知らない世界へと、そして彼の愛する時間が征服する世界へと。

それからはクロックマンは銀色の戦士に出来るだけ従属した。二つの残骸データを何かの高周波数のコピー機のようなものでコピー

させられた。
　それからミソラを誘拐し、銀色の戦士の計らいで２００年前へと逃げていった。銀色の戦士はついてこなかったが、足止めをしてくれるといっていたのだ。
　あとはここに一つの『城』を気付き上げ、そこにミソラを幽閉した。けれどそれだけでは終わらない。まだ足りないのだ。彼を幽閉していた時間とミソラだけでは釣りあわない。
　だから彼はその場所へと向かっていた、彼の求める芸術があるところに。
　場所は、秋原町。

『スバル、全然差が縮まってねえぞ！』
「そんなこと言ったってしょうがないでしょ！　相手も周波数変換を使ってるんだから！」

　スバルとウォーロックはあれからインターネットからプラグアウト――ハンターのポップアップにそう書かれていた――して一旦現実世界に出ることが出来た。
　クロックマンの周波数を頼りにただひたすら周波数変換で移動しても、距離は縮まらない。それに歯がゆさを思えながらも彼らは追っていた。クロックマンがどこに向かっているのかも知らずに、ただ追っていた。

『クソ！　逃げてばっかいやがって！　絶対に捕まえたらぶっとば

してやる！』

そう意気込むウォーロックだが、虚しくも差は縮まらない。

「どこに向かってるんだろう……」

『おおかた、美しいネットナビのところじゃねえか？　気持ち悪い趣味しやがって！　監禁趣味なんて変態のやることじゃねえか！　ハイドじゃねえんだからよ！』

「いや、ハイドにそんな趣味は無いと思うけど……」『だからって、誘拐趣味はあるじゃねえか！』

「なんでここにいない人間をけなすんだよ！」

そういって、彼らは一つの場所に向かっていく。全ての、始まりに、いやある種の終わりに向かって。

OSS編？　偽者（後書き）

久々更新。受験生って辛い。一日三千文字って……

結構話数は伸びそうです

OSS編？　不法侵入

２００年前

『……ッ。スバル、クロックマンの周波数が消えた！』
「え、どういうこと！？」

ウォーロックの言葉に、思わずスバルは歩みを止めた。今は路地裏だから誰の目にも付かない。ましてや２００年前だ、スバルがいかに奇抜な格好をしていても
けれどスバルの顔からは動揺が容易に見て取れた。無理も無いだろう、誰だって追いかけている相手が消えたりしたら驚く。
それがクロックマンだとしたら尚更だ。もしかしたら、もう目当てのナビを捕まえて、もう他の時代に行ってしまった可能性もあるのだから。だが、ウォーロックから思いもしないことを告げられる。

『……これは――家か？』
「家？」
『ああ、間違いねえ。誰かの家だ。多分、そこからまたインターネットに潜り込んだんだ！』

冷静に考えてみてみれば、走っているだけのクロックマンが目当ての物を捕まえられるはずが無いのだ。もしそうなら、ミソラもそうや
って誘拐できたのだから。

『とにかくすぐ行くぞ！　このまま差を広げられたら逃げられちま

う！』

「分かった、とにかくその家に行ってみよう！」

「なんで熱斗のＰＥＴに繋がらないのよぉ……」

赤い髪をした少女はとある少年に向けて電話を掛けていたのだが、一向に繋がる気配が無い。繋がらないのには理由があるが、それを知る術を彼女は持っていなかった。

彼女がその少年に電話を掛けようとしているかは簡単だ。彼女が一大事に巻き込まれからだ、厳密に言えば彼女のネットナビが、巻き込まれたのだ。　唐突だった。いきなり家の中に意味不明な侵入者が現れたのだ。それも、ドアを開けずにだ。だがそれよりも驚くことがあった。その侵入者の姿だ。全体的に黄緑色を基調とした、時計を額や手の甲などにつけていた。

それは、ネットナビと呼ばれるものだった。けれど違うところが一つ、それは現実世界には現れないという点だ。

驚いていた彼女は何も出来ず、ただ呆然としていることしか出来なかった。そして次にそのネットナビが彼女のピアノの前で消えたときは悲鳴をあげてしまった。

彼女のピアノはインターネットに繋がっており、ネットナビがプラグインすること自体は特に不思議ではない。だが、それがネットナビかどうかはそれが起こるまでは分からなかったのだ。

そして、彼女は一つ間違いを犯していた。それは、ピアノの電脳に入る前にそのネットナビを止めておくべきだった。それをしたところで止められることは出来なかったが、それでも時間を稼ぐこと

ぐらいは出来たかもしれない。

結果的に、彼女は後悔した。ピアノの中に入ったネットナビが、彼女のネットナビを誘拐してしまった。彼女のネットナビは自分の危機を感じてか、抵抗はしたが、それも一度触られただけで終わった。

プラグアウトすることは不可能だった。何度も何度も試したが、プラグアウトすることは出来ず、遂には二人のネットナビがインターネットの彼方に消えてしまったのだ。

インターネットの中は、彼女ではどうにもすることが出来ない。だから助けてくれる人を考えたのだが……思いついたのが青いネットナビのオペレーターだけだったというわけだ。

だが、そんな少年にすら電話が繋がらない。つまり頼みの綱も切れたということだ。

「ロールぅ……どこ行っちゃったのよぉ……」

相棒がいなくなって、胸にポッカリと穴が開いてしまったような感覚。少女の顔は蒼白で、今にも死んでしまいそうな、そんな儚さを感じさせる。

だが、そんな少女に追い討ちを掛けるが如く、少女の家の中に青い少年は現れた。

「きゃっ！」

本日二度目の家への侵入を許し、少女は叫び声を上げてしまった。それは驚くだろう、急に家の中に青い少年、もとい不法侵入者が現れたのだから。

「うわっ！」

だが、何故だかそんな侵入者のほうも驚いていた。それも目をまんまるに開けて。

「ウォーロック！　誰もいないって言ったじゃないか！」

『あぁ？　そういったらおまえインターホン押してから中に入ろうとするじゃねえか！　そうしたら時間がかかるだろうが！』

……どうやら、侵入者の間で問題が発生したようだ。一応二人の間には固い絆が結ばれている設定だが、信頼まではなかったようだ。そんなもんでよくここまで来れたもんだと思ってしまうのは、作者の心が冷たいからなのだろうか。

「あ、君には危害を加えないから」

と、青い少年は少女に向かってそういった。こんなセリフを吐く侵入者は、世界中に三人いれば充分だろう。

少女は驚きのあまり言葉を失ってしまっていた。いきなり中に現れた驚きと、少年の容姿がどことなく少女が知っているネットナビに似ていたからだ。

「それより、ここに変なネットナビは来なかった？」

「へ、変なネットナビ……？」

『額に時計をつけた悪趣味なやつのことだ！』

その言葉についさっき現れたネットナビのことを思い出す。あれはたしか――

「そ、そこのピアノに……」

少女は自分が普段使っているピアノを指差す。

「ウォーロック、ピアノの中には入れる？」

『ああ、インターネットにも繋がってるっぽいぜ！』

少女には少年の会話の意味があまり分からなかったが、どうやらそのネットナビを追っている事だけは分かった。多分、自分のネットナビと同じように誰かを誘拐されたのだとは分かった。

「あ、あの！」

気付けば少女は少年に声を掛けていた。何故だろう、と少女自身にも理由は分からなかったが、気付いたときには言っていた。

「わ、私のネットナビが、そ、その時計のネットナビにさらわれちゃって。そ、それで……」

最後は消え入るようになってしまった声、だが少年はそれに答えてくれた。

「……分かった、君のネットナビも必ず救うよ」

そういって、少年はピアノの前で急に消えた。おそらくプラグインしたのだろうと少女は勝手に推測する。

「……そうだ！　熱斗を呼ばなきゃ！」

次に電話を掛けたときは、とある少年には繋がった。けれど、少

女はそのときは落ち着いていなかった。とある少年が少女の家に来たときも、状況をすべて話せていなかった。だから、ある問題が勃発してしまう。それをまだ、誰も知らない。

「ウォーロック、クロックマンはどこ？」

『……分からねえ、多分また他の電脳に行っちまったぞ』

インターネット2でスバルとウォーロックはインターネットに入ったはいいが、どの道をどういけばクロックマンに追いつくかが分からなかった。彼らがインターネットの地図を持っているわけでもないので、当然といえば当然だ。右も左も分からないというわけではないが、スバル達の状況はそれに似ていた。

『周波数変換で移動してもしょうがねえしな……』

周波数変換で移動したとしても、どこをどういけばいいのか分からないのだからあまり意味が無い。最悪の場合この時代に着てまで迷子になってしまう可能性もあるのだ。それだったらまだ自分の足で歩いたほうが確実だ。

「そうだね。とにかく一刻も早くミソラちゃんを見つけないと……！」

『ああ、いつ他の時代に飛ばれたりするか分からないんだ。けど、まだ他の時代に飛ばれたりしてない限り、あいつは確実にこのインターネットと繋がっている所にしか逃げられないはずだ』

どんなにインターネットが広くても、繋がっていない場所に移動できるわけではない。どんなにがんばっても繋がっている電脳にし

か移動出来ないのだ。だから、どんなにクロックマンが逃げようとしても、今スバル達がいる電脳と繋がっている。スバルはこの電脳と繋がっている電脳を、順々に探していけばいいのだ。

「でも、それだとどこに……？」

スバルはこのインターネットに入る前、一人の少女と会った。それはたしか、自分のネットナビもさらわれたといっていた。つまりクロックマンは少なくともそのネットナビを担いでいるか何かしているはずなのだ。

ネットナビがどれくらいの性能か分からないが、少なくとも意識が無い（はずである）女性ネットナビを担いでるあの派手なクロックマンを見かければ、通報くらいするはずである。現実でなくても、そんな異様な光景があればそれが普通だ。けれど、この時代のサテラポリスらしきネットナビが動いている気配は全く無い。

「どこか人目につかない場所にいる？」

けれどそんなの可能だろうか？　クロックマンがこのインターネットを全て把握できているとは思えない、だからといってインビジブルを持ってしても、そしたら空中に気を失っている女性ネットナビだけは消えない。つまりクロックマンはもう見つかってもいいはずなのだ。

「まさか……」

『どうしたスバル？』

「クロックマンは自分で電脳を作ったかもしれない……」

無かったのなら作ればいい。実に簡単な理論だ。けれど、そんなこと――

『クロックマンは次世代のウィザード、だったはずだ……。可能なんじゃねえか？』

たとえ無数に作ることは出来なくても、自分が隠れる電脳くらいは作れるかもしれない。そうなれば通報されることもないし、見つかることも無いだろう。

しかしそれだけの巨大な力をクロックマンが有しているということは、実力も相当なものだ。

『いよいよ面倒臭くなったか？』

「……いや、そうでもないよ」

それが、電脳であるならば、きっとワープポイントが必ずあるはずだろう。でなければクロックマン自身が電脳に入ることは出来ない。もっとも、電脳に入ることを拒否するなどという裏技めいたものがなければだが。

「やることは結局なんら変わってない。すぐに行こう」

『妙に落ち着いてきたな、おまえ』

「どこかのワンちゃんが落ち着いたのと同じことだよ」

『ワンちゃんってもしかして俺！？』

そんな軽口を叩いて、ついに本格的に探しに行こうと思ったときだった。

『あ、蒼いナビ……？』

後ろからそんな声が掛けられた。スバルは自分のことだと思い、返事をしようとした。けれど、ヨイリーにあまり関るなといわれて

いる以上、返事をしなかった。しかし、話しかけられていきなり逃げたとなれば、それは怪しい人物と認定され、面倒なことになりそうなので、愛想笑いだけ浮かべて去ろうと彼は振り返った。

話しかけてきたのはエグゼだった。

『（なっ……）』

「（えっ……）」

絶句するしかなかった。あの、エグゼだ。ヘイトとの戦いのとき、命を散らしてしまったあのエグゼだ。そのエグゼが、スバル達の目の前に現れたのだ。

「（おっ、落ち着いてウォーロック。このエグゼは、この時代のエグゼだ）」

つまり、スバル達の協力したエグゼの昔ということだ。決してヘイトのためにいろいろな策を弄した彼ではない。まだヘイトの存在も、目の前の英雄は知らないだろう。

『（これが驚かずにはいられるか！　あいつだぞ！　エグゼだぞ！）』

「（そうだけど……）」

『（きっとあいつもクロックマンのことを嗅ぎ付けて来たんじゃねえのか？　何ていったって英雄だぜ英雄）』

そう、エグゼもクロックマンのことを嗅ぎ付けて――厳密にはスバルが先ほど会った少女、メイルに助けを求められて――ここに来

たのだ。そんな彼はスバルを自分に似ているとか、こいつがメイルのネットナビ、ロールをさらったのではないかと思いに耽っている。

『（どうする？）』

「（……逃げよう。やっぱり彼を巻き込むわけには行かないよ。……なんかこっちを疑り深い目で見てるけど）」

それはロール誘拐容疑をかけられているから当然だろう、とは突っ込まないであげよう。そんなことスバルは微塵も分かっていないのだから。

「（とにかく、彼は突き放さなきゃ！　彼をこの事件に関らせちゃいけない！）」

そういって彼はロックバスターを構え、エグゼに照準を合わせる。厳密に言えばエグゼの一メートル先の道に、だ。構えられたロックバスターにエグゼは身構えるが、スバルは無視してロックバスターをチャージ。溜められるエネルギーはやがて最高潮までエネルギーを増幅させ、やがて放たれた。

放たれた弾は、地面に着弾してそして爆発を誘発させた。スバルにしてみればそこまでするきはなかったのだが、今の彼は以前ロックバスターを使ったときの実力とは違っている。ガイア、守護神（ガーディアン）という、重過ぎる代価を払って手に入れた強さは、スバルが想像するよりも大きかったのだ。

『うわっ！』

爆発によってエグゼは反射的に眼を瞑ってしまった。

『なっ、何するんだ！』

エグゼはそうスバルにいうが、スバルは答えない。そして、可哀想な容疑者はエグゼから逃げていった。これでもう追ってこないと思ってしまい、これでもう自分とは関ろうとはしないだろうという甘い考えで。逆の立場だとしたら、それは絶対に有り得ないのにも関らずだ。

その程度で、エグゼは折れない。まだ英雄の卵である彼でも、そのくらいの強靭な心は持っていた。

OSS編？　火蓋は切られる物

「くっ……」

スバルは追われていた。それもほぼ同じ容姿をしたネットナビに。時代が二百年過ぎれば、エグゼと呼ばれる存在は、今は多くの者にロックマンと呼ばれていた。ロックマンがロックマンに追われているその光景は、事情を知っている人が見ればそれは笑ってしまうかもしれないが、それでも本人達は必死なのだからしょうがない。

「ふ、振り切れない！」

足の速度は結局過去だろうが未来だろうが変わらないらしい。下手に周波数変換を使えないために、これは結構痛手だ。別にスバルが百メートル八秒で走れるほどに早いわけではないから当然だろう。昔に引きこもったからこうなるのだ、と思うのは作者が毒舌だからだろうか。

『巻き込んじまわないようにもっと早く走れ！　もう遅いけど！』

「分かってるよ、けど出来ないんだよ！」

右左、とにかく引き離すために曲がる曲がる。けれどエグゼは絶対に迷わない。それは何故か、彼一人で追いかけているわけではないから。正確には彼にはオペレーターがいるからだ。どういうルートでスバルが逃げようが、エグゼは迷うことはない。

そんなことを知ってか知らずか、スバルは何の浅知恵も捻らぬまま走る。けれど差は広がらない。しかし縮んではいる。

「くそっ！」

そういってスバルは振り返ってロックバスターを放つ。それはさっきと同じように地面に着弾し、爆発する。エグゼがそのせいで遅れる数秒、それを使ってスバルは差を少しでも広げる。
そんな不毛な戦いがかれこれ二、三度繰り返されていた。しかしそれもすぐにどうせ縮まってしまうのであまり効果があるわけでもない。

「本当、ここどこだよ！」

スバルにしては珍しくヤケクソ気味に叫んだ。それはヘイトの戦いからまだあまり長く日が経ってなかったせいなのかもしれない。憔悴しきっているともいえる。それに何より、ミソラを救う為に来たというのに何も出来ていないのが、情けなかったのかもしれない。
けれど、神様は思わぬところでスバルに幸運を与える。
何も考えずにただテキトーに走っていたのが良かったのか、それとも日頃の行いが良かったのか、はたまた運命によって導かれたのか、それは神のみぞ知るが、とにかくそれは見つかった。当初の目的が。

「……あれは！」

それは間違いない、あの野朗のワープホールだ。
けれど、それでも簡単には入らせてくれない。それは別にクロックマンが特に細工をしていたというわけではなく、ただ単にスバルの事情だ。それも、とびっきり面倒なものが。

『お、追いついたぞ！　そこにロールちゃんがいるのか！？』

それはスバルには分からなかったが、いないといってもエグゼは

このワープホールに飛び込んでいってしまうだろう。それだけは阻止しなければならない。どんなに凄い英雄だろうと、過去の者であろう事には変わらない。つまり、エグゼは本当は今スバル達と関ってはいけないのだ。

だから、嫌でも彼はそのセリフを言わなければならなかった

「……ここから先へは行かせない……！」

未来で恩人になる人に、そんなことを言わなければならないことを、誰が予想できただろうか？　多分、誰もいないことだろう。けれどこうする他ないの。

『（おい、それじゃまるで――）』

「（そうだよ、これから戦うんだよ）」

やりたくないけど、とスバルは付け足す。

「（大丈夫、絶対に負けはしないから）」

『（け、けど本気で戦うのか？）』

「（駄目に決まっているじゃないか）」

『（い、いや本気戦おうぜ！）』

「（駄目に決まっているじゃないか！　未来が壊れちゃうよ）」

そんなやりとりをエグゼは知る術もない。

『何だと!?　……立ったら力ずくでも!』

そういって、エグゼは構える。

「（いい、君はビーストスイングくらいだからね？）」

『（クソ……だけど負けるんじゃえぞ。あいつが深く関っちまったら歴史が変わっちまうんだからな！）』

しかしスバル達の相手はスバル達の心中など知るわけもない。本気でロールを誘拐したのが目の前にいる青い奴だと思っているのだ。

『熱斗君！』

「わ、分かった！　バトルオペレーション　セット」

『イン！』

こうして、過去と未来のロックマンは剣を交えることになってしまった。

OSS編？　火蓋は切られる物（後書き）

外伝集のカイ編をちょっと削除。矛盾発見しました。孤児院なんてものがあれば物語が全て破綻してしまう……！

あんまり変わりませんけどね

次回はWロックマンですよ、陳腐な戦いですが。

OSS編？　過去対未来（前書き）

流星ＶＳエグゼ、結構前に更新したのとはまた違ったものになっています。

今回は結構筆が乗りました。どちらかというとあれなバトルでしたので僕的には想像しやすかったのが大きいと思います。

OSS編？　過去対未来

「バトルカード　ソード」

先に仕掛けたのは以外にもスバルのほうであった。左手を翡翠色の剣に変形し、そのままエグゼへと向かっていく。

熱斗としては最初は様子見に徹するほうが無難だと考えていた。何故だか熱斗は、自分でも分からないまま敵への恐怖があった。敵の殺気が恐かったわけでもなければ、恐ろしい外見をしているわけではないのに調子を狂わされる。

だから熱斗はまずは攻撃を受けようとした。そしてそれは戦術としては間違っていない。距離十数歩くらいあるのだ。バトルチップが間に合わないわけがない。

しかし、その熱斗の勘ぐりが外れた。

ふっ、とスバルの姿が消えた。実にコンマ1秒にも満たないそれだが、しかし熱斗の指を止めるのには充分すぎた。そして、次に起こった現象でついに熱斗は驚嘆の声を上げる。

消えたスバル、しかしそのエグゼに酷似した敵は瞬きした次の瞬間にはエグゼの前へと現れたのだ。そのことに驚いたのはエグゼも同じで、驚きに眼を見開いた。咄嗟に手で守ろうとすることも叶わない。

エグゼと熱斗は知らないが、これはスバルのウィザード、ウォーロックの「ウォーロックアタック」と呼ばれる技だ。敵をロックオンした次の瞬間には、もう敵の目の前へと移動してしまう。

そして何も出来ずに固まっているエグゼに対し、スバルは剣を振るった。多無防備な敵に剣を振るったら、かすり傷程度では済まされない。

結果として、エグゼは真後ろへと飛んでしまった。もし、熱斗が驚きに身を固めずにバリアを使っていれば、恐らくはこんなことにならなかったであろう。

『ぐっぅ……』

しかしながらエグゼが一撃を受けたことはあくまで仕方のないことだ。もしウォーロックアタックをエグゼが知っていれば、きっとこんなことにはならなかったはずだ。

「大丈夫か！？」

『――大丈夫だよ、熱斗君』

オペレーターからの呼びかけにエグゼはあくまでも落ち着いた声で答えた。彼が受けた攻撃はソードという軟弱カード、しかも手加減された一撃であるがためにエグゼは大ダメージを受けずに済んだ。

「……今くらいでこの先も進めなきゃな」

対して攻撃を行ったスバルは、すぐに追撃を良しとしなかった。この戦いはエグゼをデリートするのが目的ではなく、クロックマン追跡を諦めてもらうことにある。

『おい、いいのかスバル。エレキスラッシュとかのほうがいいんじゃねえのか？』

「いや、それは意味がないと思うよ」

『なんで――』

しかしウォーロックの疑問はすぐに解消されることになる。今さっき立ち上がったエグゼ、その体には真新しいソードの傷がある。

だがその傷が一瞬にして癒えた。

「この世界でのネットナビはオペレートして扱うんだ。だからどこかでエグゼを操っているオペレーターがいる。マヒにしても、詳しくは知らないけどきっと無駄だよ」

『……それに俺らにはデリート寸前まで追い詰めるやり方が分からないしな』

ウォーロックやスバルは、これまで敵を倒すことばかり行ってきて、敵を退かせることは初めてなのだ。あくまで敵の撤退『だけ』を目的としている為に、なまじ本気を出すことが叶わない。

『面倒臭ぇな……』

ウォーロックの性分からしてこんな戦いは柄ではない。彼は本気を出し、しのぎを削り、敵を倒すことに喜びを覚える。そんな彼が敵の撤退などということに対し、良い感情抱けるわけがなかった。

「僕らはエグゼを倒すことが目的じゃない。僕達の目的はクロックマンにある」

『……手加減するのはいいが、負けんじゃねえぞ?』

「うん、最初からそんな気はない」

そしてスバルは次手へと駒を進める。左手でロックバスターを構え、銃口をエグゼへと向ける。

エグゼもそれに気付いたのだろう。しかしそれを無視してスバルはロックバスターをチャージする。溢れ出る黄緑色のエネルギー、それは銃口から漏れ出そうなくらいまで集まり、

「チャージバスター!」

放たれた。
しかし今度こそエグゼと熱斗も行動を起こした。さっきの一撃を見て、改めてスバルを強敵と認識し、スバルの攻撃に応じる。

「バトルチップ　キャノン」

エグゼの右手が緑色の砲身に姿を変え、すぐにそれを構えてエグゼは半ば強引にスバルへと放つ。スバルのチャージショットが、今まさにエグゼに直撃しょうとしたところだった。
弾丸と砲弾が激突し、相殺し、煙を撒き散らす。煙はすぐにエグゼを包み込み、スバルからでは詳細が不明な状態になった。なので熱斗はすぐに次の行動に移ることが出来た。

「バトルチップ　バリア！」

青い球状の壁が視界の塞がれたエグゼを包み込む。煙が舞っていた分、スバルもエグゼがバリアを張ったことに気付けないでいた。
もう一度ソードに変形した左腕を、エグゼに向かって振るう。しかし今回ばかりは事情が異なってしまう。
ソードはバリアと接触、そこでソードとバリアは消滅してしまう。そこでスバルははたと気付いた。スバルは剣を防がれて体勢が崩れた状態だ。しかしエグゼはバリアで守っただけで、体勢は崩れていない。

「まずっ――」
「バトルチップ　ナイトソード！」

体勢の崩れたスバルへとエグゼはもてる限りの力で剣を振るった。
これがエグゼがスバルに勝っている部分でもあった。煙が舞って

からの一連の行動は、恐らくエグゼだけでは不可能だ。しかしバトルチップを転送するのは違う視線で見る熱斗だ。彼が見る「違う視線」、それは戦いを外野から見ると同義だ。そして視界が広い分、外野から見たほうが戦況は分かりやすい――！

ナイトソードの一撃で後ろへとよろけるスバル。吹き飛ばされなかったのはさすがに経験や実力がエグゼよりも高いということか。しかしそれが吉と出るかというのはまた別の話だ。

後ろに数歩よろける、というのが悪かった。それはつまり、エグゼの間合いからまだ離れていないということでもあるのだから。

『おおおおおおおおおおっ！』

ナイトソードを構えたままエグゼはスバルへと斬りかかる。エグゼとてスバルと戦う理由がないわけではない。彼にはロールを助けるという、立派な理由があるのだ。

2、3度と振るわれる剣、しかしスバルはそれをすんでのところで避けられた。何故ならば彼にとって、エグゼの振るう剣はあくまで「遅い」。体勢の崩された状態ならいざ知らず、体勢が整った状態であれば避けられないわけではないのだ。

4度目に振るわれた剣を避け、さらにはバックステップでスバルは完全に間合いを切った。すぐに追いかけようとするエグゼを熱斗た止める。さっきの瞬間移動のほかに、まだ何かあると熱斗は踏んでいたのだ。

「……ウォーロック」

『あぁん？』

「次、僕が合図をする。そしたら――」

『・・・任せろ！　必ず当ててやるよ』

スバルは様子見をしているエグゼを見ながら作戦を組み立てた、

戦いというのはほとんどが敵の先手をどちらが読めるかによって決まる。そしてこのスバルの作戦はスバルが思う以上に功を奏すことになる。

「バトルカード　ソード！」

またもスバルは剣を装備する。どこからどう見ても何の変哲もないソード、しかしその威力がどれほど恐ろしいかエグゼは先ほど思いそらされた。

（来る……！）

このときエグゼと熱斗は同じことを思った。またあの瞬間移動が来る。だったらこちらは振るわれる直前に攻撃をすればいい、と。

熱斗はスバルの瞬間移動は、後ろを取ることは出来ないと踏んでいた。何故ならそれが出来れば最初からそうしていたはずだ。そのほうがよっぽど効率がいいし、倒しやすい。

そして瞬間移動の攻略方法を見抜いていた。敵の瞬間移動はただエグゼの目の前に移動するだけで、すぐに剣を振るうことが出来ない。ならば振り上げたその瞬間に一撃を加えることができるはずだ、と。

スバルの体が消える。すぐに熱斗はバトルチップを転送、雷電を帯びた剣がエグゼを微かに照らす。もしこの攻撃を当てることが出来れば、敵はマヒし動けなくなる。そこにプログラムアドバンスを浴びせれば勝負は決する。熱斗はついに勝負に出た。

スバルがエグゼの目の前へと現れる、その瞬間をエグゼは逃さなかった。まさにジャストミート、エグゼは我ながら上手くいったものだと歓喜した。これでロールが助けられる、そんな期待と共に。

地面に足をつけたスバルに雷電の剣が触れそうになる、まさにそ

の瞬間にエグゼの視界が物理的にぶらされた。

『えっ――？』

胸に痛みが走るのを認識し、エグゼの頭を疑問が駆け巡った。たしかに敵は剣を振るう暇さえなかったはずだ。しかし現実にエグゼは攻撃を喰らった。何故？　と思うエグゼの視界の端に、青色の獣のような物が見えた。

つまり敵は反撃することを計算してバトルチップを使ったのか。そしてカウンターになる形であの獣が攻撃をしたのだ、と。

エグゼの解釈はあながち間違っていない。スバルはエグゼが反撃するのを計算し、そこでカウンターの形でエグゼに攻撃をしたのだ。それは端から見れば芸術とさえ誉められるほどの、見事なコンビネーションだった。

『ざまあみろってんだ！』

そう吠えそうになったウォーロックだが何も言わずにハンターＶＧに戻った。あくまでもスバルには黙っていろ、と言われているのである。何故なのか、と分からないウォーロックだが渋々と従った。

「これで、戦闘不能だといいんだけど……」

少々ぎこちなく呟くスバル、これでエグゼがデリートなんてことがあったら世界は崩壊。スバルという存在も消えることになる、とヨイリーに告げられているためにエグゼに対して敵なのに心配をかけていた。

『……くっ』

エグゼは吹き飛ばされたのを自覚してから、自分の受けたダメージがどれくらいかを計算する。傷は肩から胸にかけ浅くない爪痕だけ。しかしエグゼ自身の精神が折れかかっている。

強い、と認識せざるを得なかった。あの自分に似た敵は間違いなく今までで一番強いと確信していた。

勝てるだろうか？　エグゼは自分自身に問うた。本当にあのネットナビを倒しロールを助けることが出来るだろうか。バトルチップの威力はそれほどない、しかし扱い方が自分とは違う。それはつまり敵のほうが実力者であるということを示している。

無理なのではないか――？

「諦めるなロックマン！」

ふいに、オペレーターからの叱責がエグゼの耳に届いた。それはまだ諦めていない者の声、勝負を諦めずただ勝とうという者の声。

「まだ勝負は終わっていない！　だから諦めるな！　ここで諦めたらそれこそ終わりだろ！？」

熱斗だって敵との実力差を分かっていたはずだ。なのに何故こんなにも彼は諦めないのだ？　エグゼは痛みの発する体で訊いた。理解できない、とも告げた。すると彼のオペレーターは笑みを浮かべて答えるのだ。

「俺たちはここで終わるわけないだろ？　俺たちは、強いんだから……！」

その言葉を聞き、反芻し、受け止めたとき、エグゼの心から諦めというもの無くなった。何を一体迷っていたんだろう、ここで負けていいわけもないし、そもそも最高のパートナーがいるのに負ける

わけないじゃないか。
エグゼは立ち上がった。そこに打算も勝算もありはしない。しかし自分は一人ではないというたった一つの真実が、彼を突き動かすには充分だった。
まだか、スバルは立ち上がったエグゼに左手を構える。エグゼも右手の銃口を敵へと向ける。そして、発射は同時だった。

「『ロックバスター！』」

ほぼ同時、発射された翡翠と桃色の弾丸はそれぞれの中間でぶつかり、弾けていく。しかしエグゼのほうが押され気味で、顔に弾丸が数回掠っている。だが押されているだけで、勝敗は決していない。

『熱斗君、バトルチップ！』
「ＯＫ，ロックマン。バトルチップ　スプレットガン！」

ロックバスターから瞬時に別の銃身に切り替え、それを敵に向かって容赦なく浴びせる。これにはさしものスバルも避けるしかなかった。だが後ろに避けたのではない。あくまで前に、だ。

「いくよウォーロック！」
『これで決着を着けようぜぇ！』
「バトルカード　バリア　ソード！」

二枚同時にバトルカードを使用、これで一撃だけならスバルは攻撃を避けることが出来る。そして攻撃を喰らったその瞬間、ウォーロックアタックをしてエグゼの目の前に移動し剣を振るえば勝敗は決する。
降りかかる弾丸を避けながらスバルは徐々にエグゼとの距離を縮めていく。熱斗とエグゼもあたらないと判断したのか、次のバトル

チップを使用する。

「バトルチップ　パラディンソード！」

聖騎士（パラディン）が持つ黄金と蒼の二つの色を持つ剣でエグゼはスバルを迎え撃つ。いくらスバルが実力者だからと言って、ソードとパラディンソードとでは後者のほうが圧倒的に有利だ。

お互いが感じ取った。これが最後の交錯だと。緊張に体をこわばらせながらも、しかし両者は互いの意地を引っさげて走っていく。

そしてその能力の有利さから仕掛けたのはスバル、ウォーロックアタックにより距離を縮めエグゼの頭を狙って振るう。しかしそれは過去二度見た。エグゼは慌てることも無くソードにあわせ、パラディンソードと激突させる。

響いたのはガラス細工が割れるような音、それと共にスバルのソードが砕け散った。しかしそれはスバルも分かっていたことだ。迫り来る剣をバックステップシ避ける。そしてがら空きになったエグゼに対し、獣が吼える。

『ビーストスイング！』

瞬時に現れたウォーロックは鋭利な爪を振るう。興奮のあまりか最初の前提である手加減を忘れてしまっており、それはエグゼをデリートしかねない勢いでエグゼへと迫る。――しかし

「バトルチップ　ジェットアタック！」

エグゼは無理な体勢からなんとウォーロックへと突っ込んだ。あたる、と確信していたがためにウォーロックの反射神経も一歩遅れる形となり、無様にエグゼに激突せられた。だがそこで話は終わらない。吹き飛ばされたウォーロックと、バックステップしたスバル

がぶつかったのだ。

『なっ！？』

「ッ！　これは――！」

ウォーロックとスバルが激突し、さらに後方へと飛んでいく。空中で達磨状態になりながら、二人は地面に3度バウンドしようやく止まった。だが戦いはそこで終わらない。

熱斗がせわしなく指を動かし、そしてそこで4枚のバトルチップを並べた。これなら勝てる、という彼が選んだ最高の一手。それが今まさに放たれようとする。

スバルとて黙って倒れているわけではない。すぐさま立とうとした。しかしウォーロックと達磨状態であったことが悪かった。二人ともが同時に立とうとし、逆にお互いの脚を引っ張ってしまっているのだ。そしてそれだけあれば熱斗の準備も整う。

「バトルチップ　ガイアハンマー1，2，3、　アースクエイク3
スロットイン　――プログラムアドバンス　ヘビースタンプ！！」

スバルとウォーロックの頭上に大きな分銅が形成され始める。徐々に徐々に輪郭がはっきりとし、そして完成した直後、それは一気にスバル達へと降下していく。

「――――――――！」

圧倒的破壊をもたらす分銅が、インターネットの地面を破壊した。

OSS編？　共同戦線（前書き）

正真正銘の最新話！　お待たせしましたマジですいません！　一年という間を空けて、蒼き流星連載再開をここに宣言します！

ヘビースタンプによって、エグゼとスバルがいたところから半径二十メートルは爆風の被害を受けていた。これなら敵もデリートされただろう、そう高をくくっていたエグゼは瞠目した。

なんと、スバルはデリートされることなくそこに存在していたのだ。所々に傷があるものの、しかし消えてはいない。あの大技に、どうやったら耐えられるのか。

スバルだってエグゼのヘビースタンプには驚愕した物だ。もし、咄嗟に達磨状態を回避、ウォーロックをハンターＶＧに逃げさせ、避けなければ彼だって危なかったかもしれない。まともに喰らっていればデリートまではいかなくても重傷を負っていただろう。

もっとも、今のスバルはヘビースタンプに近すぎた為に、軽い脳震盪を起こし伸びている状態だ。つまりエグゼの勝ちである。

『はぁ、はぁ、はぁ……』

肩で息をしながら先ほどまで戦った敵へとエグゼは目を向ける。彼から見れば敵はデリートさえなくても相当なダメージを受けていて、あと何時間は動けないと判断されたのだ。まさかあの大技を喰らって、ただの脳震盪を起こしただけとは思えまい。

勝ったということよりも、まずは先に進めるということが疲れた彼を動かした。これでもうロールが救えるという希望は彼を必要以上に焦らせた。

すぐに視線を時計型ワープホールへと向ける。この先に彼が待ち望んでいる結果があるのだ。

『この先にロールちゃんが……。待っててねロールちゃん、今助けにいくからね！』

疲労、焦り、興奮、この三つの状態を全て備えているエグゼはまともな思考を持てていなかった。無理からぬことでもあるが、それでも彼のオペレーターは止めようとした。

「なぁ、ロックマン。ちょっと熱くなり過ぎだって！　まずはこのナビから話をして……って！？」

しかし熱斗の声を聞いてか聞かずか、エグゼはワープホールへと飛び込んでいった。ある意味では当然の行為、もしエグゼが平静とした精神でいれば、きっと未来での彼の活躍もなかったかもしれない――。

一方その頃、スバルはエグゼが飛び込んでから僅か一分後にむくりと起き上がった。ようやく脳震盪が治まり、立ち上がることが出来たのだ。だが彼とてその間意識を失っていたわけではない。エグゼがその後どうしたのか、彼は耳からその情報を得ていた。

『おいスバル、あいつワープホールに入っちまったぞ？　ったく、手ェ抜いたバトルしやがって……あいつを巻き込んじまったら、それこそ歴史が変わっちまうんじゃねえのか！？』

ウォーロックはハンターＶＧに避難していたが為に、ヘビースタンプの余波から逃げることには成功していた。ウォーロックならエグゼを力ずくでも止めることはできたかもしれない。だが、彼の心中からしてみれば本気を出してしまってエグゼをデリートしかねないという恐怖があったために出来なかったのだ。

相棒からその事実を改めて確認させられ、スバルは悔しげに歯を

食いしばった。手を抜いて負けた、その事実が彼を苦しめる。
どうせならばいっそ本気で戦えば相手は恐れをなして逃げたのではないか。それとも自分がもう少し実力があり、手加減出来る力があったならこんなことにはならなかった――。
しかし不貞腐れても仕方がない。こうしている間にも、エグゼはワープホールのあちら側を突き進んでいるのだから。

「分かってるよそんなこと。……でも僕の実力不足だ」
『だあああああ！　本当に面倒臭えな歴史って奴はよお！！』

ウォーロックは勝てる勝負をむざむざと負けたことに腹を立てていた。もし自分だったら勝てていたと思っているのだろう。そしてまだ勝負は終わっていないとも思っている。

『うだうだ言ってる暇はねえ！　追いかけるぞスバル！』
「うん、すぐに止めよう！」

そしてスバルもまたワープホールへと飛び込んで行った――。

『ここは……』

一方エグゼはというと、ワープホールの向こう側の電脳へとたどり着いていた。そこはさながら異界というに充分だった。まず作り方が違う。地面は時計の形を象ったところもあればパズルのように組み合わせた所もある。エグゼやネットが知っている電脳は、ここよりも整備されていてネットナビが移動しやすいように配慮されていた。
ここは敵の根城で、だからこんなにも酷い電脳なんだ。そしてこ

ここにはロールちゃんがいる。
そう思いすぐに辺りを見回し始める。そして見つけた、桃色をしたネットナビを。
彼女が立っていたのはエグゼとは距離的に近く、しかし道のり的には遠い物だった。いうなればこの電脳の道はU字型なのだ。始点と終点にそれぞれがいる。つまりエグゼがロールを救うためには長い道を走らなければならない。

『熱斗君、ロールちゃんを見つけたよ！』
「ホントか！？　……見つかったからいいけど、あんまりもう突っ走るなよ？」
『ごめんごめん。でもロールちゃんの様子がおかしいんだ』

そういって彼はロールをもう一度見る。恐らくロールの視界にはエグゼも映っているはずだ。なのに何の行動もロールは起こさない。まるで時が止まってしまっているかのように。

「何かあったのか？」
『……一ミリも動いていない。何かに止められてしまっているみたいに』

このときエグゼはまだ敵がどんなものかを知らないが為に「何らかの能力でロールの動きが止められている」と誤解した。あながち間違っていないその誤解だが、しかし実際は本当に時が止められてしまっているとは思っていなかったであろう。

『とにかくロールちゃんのところまで行ってみる』
「分かった。そこ、何だか普通のインターネットじゃないから気をつけてな！」
『うん、了解！』

エグゼはすぐに駆け出した。熱斗の話を聞く余裕が出来たわけだが、二人は重大なミスを犯していた。

普通、誘拐したものを隠さずに放置しておくか？　何故敵はいない？　そのことに気付いていれば事態は変わっていた。

『あ、あれ……？』

時計の上を通りかかったエグゼ、しかしさっきまでの勢いとは違い徐々にその体は勢いをなくしていった。

「どうした、ロックマン？」

『なんだか、からだが、うご…か…な……』

そして、本当にエグゼの動きは止まってしまった。いや、彼自身の時を止められてしまったのだ。敵の策略に嵌ってしまって。

「ロッ、クマン？　ロックマン？　……ロックマン返事をしろよ！」

熱斗もその異常に気付いたのだろう。必死に画面の向こう側かエグゼに対して呼びかける。しかし当のエグゼの意識はすで無い。どんなに呼びかけようが、彼の時間は止まったままなのだ。そしてエグゼの時間を止めた者は、ゆっくりとどこかで口角を上げた。

『クックック、……ジャスト三時！　スケジュールどおりぃ！　お馬鹿なお馬鹿なロックマンエグゼが、私のジ～ニアスなトラップにはまってしまいました。一分一秒の狂いも無い、実に気持ちいい！　クヒャーッハッハッハ！』

そしてそんな敵が影で笑いを上げている間に、スバルがエグゼの

元までやってきた。だが時既に遅し、エグゼも時を止められてしまっていた。

『……捕まっちまってるじゃねえか！』

ウォーロック声を張り上げた。せっかくまた戦えると思っていただけに、この落胆は大きいものなのだろう。

「……巻き込んじゃったね」

スバルも苦々しく呟く。この失態があとに自分の世界に影響を与えるかもしれないと思うと彼の背筋が寒くなっていく。

『しょうがねえ、こうなっちまったら仕方がねえ。こうなったら思いっきり暴れてやろうじゃねえか！』

「駄目だよそんなの！　それにいつも暴れているのはウォーロックだけでしょ！？　とにかく、こうなったら光さんにも協力してもらうしかない」

『――光？』

その言葉に疑問を呈すウォーロックに対し、スバルはうなずいて見せた。

「うん。エグゼのオペレーター、そしてもう一人の英雄だよ」

「くそっ、ロックマンとの応答が途切れた……」

現実世界で熱斗はＰＥＴを目の前にかすれた声を出した。無理も無い。急に相棒がとまり、それから何の返事もないのだから。

「熱斗、ロックマンがどうかしたの？」

隣にいるメイルもエグゼの異変に察したのか、ＰＥＴの中を覗き込む。しかし、青いネットナビは微塵も動いたりしない。

「分からない……けど分かっていることは――」

ロックマンがやられた。だが熱斗はその続きをいうことが出来なかった。その言葉の意味は、言い換えれば彼に幼馴染のネットナビを救うことが出来なくなったということなのだから。

「う、そ……？」

顔を青ざめるメイルに熱斗は言葉をかけることができなくなった。頭の中ではこれからどうすればいいかと考えているが答えは導き出せない。完全に手詰まりだった。

もしもう一体ネットナビがいたら――。我ながら馬鹿もいいところだ、しかし熱斗はそう思わずに入られなかった。それが現実と化せば、ロックマンもロールも救えると――。

そして、現実と化した。

それは熱斗とメイルを割り込む形で現れた。青を基調としたボディに青いバイザー、そして胸に輝くシューティングスターエンブレム。紛れも無いそれは先ほどまで電脳にいたスバル本人であった。

「なっ……」

「えっ……！？」

いきなりの敵の出現に驚きを隠せない熱斗と、ロール救出を誓ってくれた相手の登場に驚愕したメイルは声を上げた。いきなり人が

現れたのだ、この時代の人間が驚かないほうがどうかしている。

「お、おまえは……さっきの青いナビ」

「うん、そうだよ光さん」

驚いた熱斗とは対照的に、あくまでスバルは冷静であった。逆に何故驚かれているのかと疑問に思っているほどだ。しかしすぐに自分の登場の仕方が悪かったのかと思い至り、ふっと笑みを零す。

それを見た熱斗が良からぬことを考えているのではないかと考えたが、案の定それは彼の幼馴染によって否定される。

「熱斗、さっきロールを助けようとしてくれた人だよ！」

「……は？」

今度は幼馴染の言葉に驚いた熱斗。口を間抜けに開けた様はとても将来偉人として教科書に乗せられる人物とは思えない。このときはまだただの少年であったのだ。

「だから、この人が熱斗よりさきにロールを先に助けようとしてくれたの」

「……ふざけんなよ！　さっき俺たちはこいつと戦ってたんだぜ！？　何で止めてくれなかったんだよ」

「だって、すんごい真剣な顔だったからＰＥＴの中を見れなかったんだもん！」

何だかいろいろと大変そうだな。話から外れてしまっているスバルはそう思ったがすぐに時間がないと悟り二人を止めにかかった。

「ま、まあまま二人とも落ち着いて。このままだとロールっていう女の子を連れ去られちゃうよ？」

スバルの言葉が耳に入ったのか、二人はぴたりと口を閉じた。それから初対面の人に諭されたということから顔が少し紅潮した。これほど滑稽なこともあまりないだろう。

「……で、おまえは誰なんだ？」

まずはこの場の整理をしようと熱斗が口を開く。その目はあくまでも敵を見る目で、信用という言葉が一切ない。メイルの証言もあってかすぐに対処をしようとはしていなくても、あくまでも警戒している。

ここからが本番だな、スバルは心新たにし説明を開始した。

「――僕は２００年後のロックマンなんだ」

予期せぬその言葉に熱斗とメイルは息を呑む。しかしそれだけではスバルの説明は終わらない。

ロールを誘拐したのは２００年後にいった時を操るネットナビ。そしてスバル自身も仲間を誘拐されてしまい、この時代にやってきたのだと。

最初はあまりの驚きに二人は声も上げずただただ聞いているだけだったが、しかしある種の疑問が沸いて出た。

「信じられない。だって、ネットナビなら現実世界に出ることが出来ないだろ？」」

「……２００年後の世界ではそうでもないんだ。電波技術が発達して、ネットナビも現実世界に出ることが出来るんだ」

「電波技術？」

聞きなれない言葉に声を上げた熱斗だが、スバルもそこまで説明

するつもりもない。彼とて焦っているのだ。もしかしたらこの一分一秒のせいでミソラを救うことが出来ないかもしれない。

「２００年後の進んだ技術、って感じかな。そして僕はネットナビのウォーロックと融合してこの姿になれるんだ」

融合？　熱斗とメイルがまたしても疑問の声を上げた。すぐに話を進めたいスバルはまたしても説明を省こうとしたが――。

『この俺がウォーロックだ！』

いきなり飛び出したウォーロックまでは省けなかった。

青い獣は紅い双眸を光らせながら熱斗とメイルを見つめた。ウォーロックの出現はスバルよりも驚いたらしく、熱斗とメイルは後ずさりした。というか、ただ単にウォーロックが怖かっただけである。

『……てめぇが光か。さっきはよくもやってくれたじゃねえか』

鈍く光る爪をぎらつかせながらウォーロックは熱斗に威圧をかける。先ほどの敗北が余程気に食わなかったらしい。今にも飛び掛りそうな勢いだ。

『てめぇはスバルが手加減してるともしらずによくも――！』

「ウィザード・オフ」

主人の命によりウォーロックは強制的にハンターの中へと帰還した。駄犬みたいだ、正直な感想を熱斗は抱き思わず笑いそうになる。

「ごめん。これが僕のネットナビなんだ」

誤りつつハンターの中に目を向けると、そこではウォーロックが怒り心頭とばかりに睨み付けている。もう勘弁してくれとばかりにスバルは視線を送ったがしかしウォーロックは無視する。

「ウォーロックと融合することによって、僕はこの現実世界でも戦うことが出来るんだ。……それはクロックマンも同じ」

「それで、メイルの家に侵入したってことか？」

「大体そんなところであっているよ」

しかしスバルの説明に熱斗はあまり納得をすることが出来ずにいた。信じることが出来ない、というよりも時代によって開きすぎている技術についていけずにいたのだ。

「……つまりおまえは人間なのに電脳世界に入ることが出来るのか？」

「うん、そうだよ。さっき君と戦ったように」

「……」

このとき熱斗が何を思ったのかをスバルは知らない。知る由も無かったはずだ。

極端な話、熱斗は絶対に安全だ。ＷＷＷとの戦いも、ウイルスとの戦いも、エグゼだけが戦ってくれている。安全圏から彼は指示をするだけでいいのだ。エグゼが負けようとも、ある例外さえ除けば怪我を負うことさえない。

しかしそんな彼はこれでいいのかという疑問が心の片隅で形を大きくしていた。自分は本当にそれでいいのかと。

そして彼はスバルを目の前にし強く意識するようになる。スバルは本当に身をさらしながら戦っている、自分とは違う立場で戦っている。見えない境界線が二人の間を割っていた。

「……つまりまた戦いにいくんだな？」
「もちろん。だけど――君たちにはこの件から手を引いてほしい」
スバルの言葉に熱斗は心臓を掴まれたのではないかという思いで聞いていた。血が必要以上に騒ぎたて体中を駆け巡るのを感じながら。それ見たメイルが心配そうに熱斗を見つめたが、声をかける勇気が無かった。

「クロックマンとの戦いは、過去の君たちが関わると未来に悪影響を与えかねないんだ。だから出来ればここで手を引いてほしい」
「……ロックマンやロールは？」
「現況であるクロックマンを倒すことが出来れば大丈夫だと思う。未来でそう説明を受けてきたんだ」
「じゃあ俺たちはここに終わるまで待っていればいいのか？」
「大丈夫。僕が何とかするから」

自信に満ち溢れたスバルの顔を見て熱斗は自分とは違うのだと自覚させられた。
ネットナビと融合して戦うということは、つまりデリートされたら一緒に死ぬということだ。それなのになんで逃げ出さない？　仲間のためとはいえ、それだけで立ち向かうことが出来るのか？

「……嫌だ」

気がつけば熱斗はスバルの申し出を拒否していた。

「嫌だ、ただここで待っているだけなんて、絶対に嫌だ……！」

実力不足だと分かっていた、自分が弱いと分かっていた、必要とされていないと分かっていた、そして何より自分は絶対に安全だと

分かっていた。なのに何もしないなんて、出来るだろうか？　相棒が時を止められてしまい、それでただ弱いというだけで黙っていられるだろうか？

スバルはそんな熱斗を見て端と気づいた。熱斗は今何かの瀬戸際に立っているのではないかと。それは同じ境遇にしか立ったことがない者の第六感ともいえる直感であった。

ここでもし彼の成長の場面を取り除いてしまったら、それこそ世界はこのあとの危機に屈し未来は消滅してしまうのではないか。もしかしたら自分たちがここで会うのも最初から決まっていたことなのではないか。

「――分かった。君にも手伝ってもらおう」

口に出すのは意外なくらい簡単で、迷いが無かった。しかしその言葉にスバルのパートナーが意義を申し立てる。

『なっ、おまえ何言ってんだ!?　ヨイリーのばあさんいいわれてるじゃねえか！　過去の人間と必要以上に関わるなって！』
「ウォーロックは黙ってて」
『なっ――!?』

おそらくウォーロックも熱斗の顔を詳細に見れば気づいたのかもしれないが、あいにくハンターの中からその表情を読み取るのは難しかった。そのために気づけなかった。

「光さん――いや、熱斗君。君にも手伝って欲しい。いや、ぜひ手伝ってください」

そういわれた熱斗は、しかし最初は信じることが出来なかった。

「……本当に？」
「うん、本当に」
「……何をすればいいんだ？」
「決まっているよそれは」

スバル自身も知りたかった。熱斗がどんな視点をもち、どうやって戦っていたのかを。

「オペレートしてほしい、この僕を」

その台詞に熱斗はしばし呆然としてから、やがて苦笑いを浮かべた。結局自分にはこれしか出来ないのか。だけど、何もしないよりはマシだ。

「……オペレートするには名前が必要だ。だけどロックマンって呼ぶにはちょっと抵抗がある。本名を教えてくれないか？」
「うんいいよ。僕の名前は――星河スバル」

ここに、英雄と英雄の共同戦線は張られた。

OSS編？　共同戦線（後書き）

一人称か三人称かでと割れたら一人称のほうが好きだけど最強は三人称で時々一人称の心理描写が入るのだよねって思うこの頃。小説を上手くなりたいと思う人たちはこんど一緒に研究してみないか・・・・！　ぶっちゃけ文章酷いの俺くらいだけどね、ここまで酷いのは。

駄文７０００文字……。結構書いたものだ。しかしこれが私にかける最大の描写だ。マジですいません。

一人称もこんなもんでおまえ下手だな、と思われる方も多いと思います。次話からも少しずつ上手くなれるようがんばります。

OSS編？　英雄×英雄＝∞

「――そこ、右！」

熱斗の声がスバルの耳に届いた瞬間、スバルは一気に後方へと跳んだ。次の瞬間はもうスバルが立っていた場所にファントムクローが通り過ぎる。

ここはクロックマンの『城』である電脳。あのあとすぐにエグゼを救出しようとしたスバルの視界に入ったのは、電脳を多い尽くすほどの電波体の群れであった。それはウイルスだけではない。スバルが戦ってきたＦＭ星人、ムーの電波体、ディーラー、その全てが集結をしていた。

数としてはウイルス１００、約電波体２０。対してスバルはウォーロックを合わせても二体、圧倒的数の前では彼らは無力でしかない――はずだった。

「バトルチップ　メガキャノン！」

しかし結果はどうだろうか。囲まれているスバルは周りからの攻撃を軽々と避け続け、転送されるバトルチップを駆使し敵を薙ぎ倒しまくっている。

スバルとウォーロックではけして成し遂げられなかった芸当。だが今回は違う。もう一人の英雄・熱斗がいることによって二人だけでは見ることが出来なかった新たな視点から攻略をしていく。

「バトルチップ　ビッグボム！」

前方へと投げられた小型の爆弾が電波体達を燃やしていく。電脳は今、粒子が荒れ狂う地獄絵図と化していた。その地獄絵図の真ん

中に聳え立つスバルは他人が見れば悪魔と評するかもしれない。それほどにスバルの戦いぶりは鬼気迫るものだった。

『……あと何体いるんだこりゃ』

ウォーロックが呆れ気味な声を漏らす。彼らがここで戦い始めもう10分を越えようとしている所なのだ。無理もないだろう。何故なら敵の数が一向に減らないから。

彼らが今対峙している敵と、最初に見えた敵の数は変わっていない。つまり敵はどこからか湧いてきていることとなる。その場所が分からないから今彼らは止まっているわけだ。

『おいくそオペレーター！　そろそどこから湧いているか分かったか!?』

「うるせえ、まだ分かってないからバトルチップを送っているんだよ!!」

ウォーロックに怒鳴り声をぶつける熱斗だが、実際は心の中で謝罪をしていた。ネットナビを助けるのがオペレーターの仕事、熱斗はそうずっと思っていた。だからスバルにオペレートを頼まれたとき、自分にも仕事があると喜び、スバル達を助けようと思った。

しかしそれが出来ていない。いくらスバルが強いといっても体力が無限にあるわけではないということは熱斗も知っている。これまでほとんど無傷で済んでいるが、いつ傷を負わされるか分かった物ではない。だからすぐに電波体の発生源をすぐに突き止める必要があるのだ。

（考えろ、考えるんだ！　どこからあいつらは現れる？　そもそもどうやって現れる？）

しかし見れば見るほど熱斗は混乱していく。敵の発生源はランダムに現れるし、何かの装置が見えるわけでもない。見えるのはスバルを押しつぶさんばかりに存在する敵と、スバル、捉われたエグゼだけ。

「……バトルチップ　フレイムソード！」

スバルの左腕が真っ赤な剣に変形する。それと同時にスバルは敵へと猛然と突っ込んでいく。その彼の小さな体に向かって１００を越える電波体からの攻撃が向かう。爆風によってスバルの体もよく見えない。それが熱斗を焦らせる。

「どうすれば、どうすればいいんだよ……！」

まだ見ぬ本当の敵、それを倒さなければロールを助けることは出来ない。しかし本当の敵を倒す前には目の前の敵を一掃しなければいけない。

（スバルは今も死ぬかもしれない状況で戦っている。それに変わって俺は安全な場所で何も出来ずに見守っているだけ。……ふざけるな！）

焦りながら、目を赤く染めながら、熱斗は思考を深めようとしていく。だがそれが本当はただ単に思考を鈍らせていることなどということを彼は気付いていない。

「……まだか」

スバルとウォーロックは熱斗の指示が止まったことに気付き、自分達で応戦しようとしたが圧倒的数の前では無傷では済まされなかった。見えない角度からのゴルゴンアイ、ペインヘルフレイムの直撃を避けながらなんとか敵の数を減らそうとするが、敵は減る気配など一行に見せない。

『おいスバル！　このままだと俺たちやられちまうぞ！』

「分かってるよ。でも、僕たちにはどうすることも出来ない……！」

スバルとてこのままでいいとは思っていない。この状況を打破するため思考しようとしている。しかしそれを敵の膨大な数の攻撃が邪魔をする。実質彼には考える余裕がなかった。

ウォーロックもそのところは分かっているつもりではいるが、何せいつ逃げられるかも分からないクロックマンに焦りを感じてしまっている。そんな状況で彼も考えられるわけがない。

今の二人には、熱斗に託すしか手段が無かった。

「とにかく僕たちは今倒れないことだよ。僕たちが倒れたら、それこそ終わりだ……」

『チッ、結局今は俺たちが気張るしかねえってことかよ……やってやらぁ！』

ぎらりと鈍く爪を光らせウォーロックは敵へと構える。スバルも左手のハンターを操作し、バトルカードを使用する。

「バトルカード　ソードファイター！」

右手を約一メートルサイズの剣に変形させ、スバルは思う。

（僕たちはまだ戦える。だから熱斗君、何とかこの状況を一秒でも変えられるようにがんばって……！）

しかし、まだ熱斗は敵のカラクリに気づいてはいなかった。先ほどよりも焦燥に色を濃くさせるだけで、事態をどうこうするような一手を見出せないままただ立っている。

思わずＰＥＴを持つ熱斗の腕に力が篭る。汗ばむ手の内で、きしきしとＰＥＴが音を立てた。どうせなら折ってしまって楽になりたい、本気でそう思うようになって来たそのとき、熱斗の手を誰かが包み込んだ。熱斗が見てみると、その手の主はメイルだった。

「熱斗、大丈夫……？」

心配そうに見つめるメイルの手もじっとりと汗で湿っていた。メイルもこのままではロールが帰ってこないことは分かっている。そして今熱斗たちがどうするかも分からない状況で戦っているのかも。

メイルの問いに熱斗は答えられずにいた。自分は大丈夫であるが、スバルはもう少しで力尽きてしまうかもしれない。そんな想像がまだ熱斗の思考を鈍くさせていた。

「ねえ、とにかく落ち着こう？」

「落ち着けられないよ。だって、もうすぐスバルはやられちまうかもしれないんだ！」

思わず声が荒れ、そのせいでメイルの身体がびくっと震えてしま

う。熱斗も一瞬やりすぎた、と思ったが今は謝る時間も惜しいといわんばかりだ。

「俺が、頭悪いから……」

「……自分を責めても仕方ないよ」

「でもどうすればいいか分からないんだよ！」

「だから落ち着いてって！」

メイルのその一言でようやく熱斗は言葉を失った。悲しそうに目を濡らすメイルの気迫に圧され、黙るしかなかった。

「敵がどうやって増えているかわからないのなら、敵の気持ちを考えればいいんじゃない？」

「敵の、気持ち……」

頭をゆっくりと冷やしながら熱斗はＰＥＴの画面を見る。傷つきながら戦っているスバルが映り焦ってしまいそうだがそれを抑えながら考える。

「何か、敵が守っているものはない？」

メイルのその問いに、一瞬熱斗は首を横に振りそうになる。近場に存在するものといえば、スバルとウォーロック、敵の電波体、そして囚われたエグゼ――。

（もしかして、あの時計……！？）

仮にもしあの時計の罠が２つの能力を持っていたとしたら？　一定時間が経ってからまたスバルがこちらに来ることを敵が予測していたら？　エグゼを救出しなければ先に進めないのなら、最高の時

間稼ぎでは？

「そうか……！　ありがとう、メイルちゃん。――スバル、おい聞こえるかスバル！」

《すぐにロックマンを助けてくれ！　そうすればたぶん、こいつらは増えることはない！》

鼓膜を揺さぶる熱斗の声、それによってスバルはいったん敵から距離を取る。ここに再度来てから１５分が経過していた。無傷であったスバルの身体にはいくつもの裂傷が出来ており、このままでは撤退を余儀なくされるかもしれなかった。

「……本当に？」

『おいおい、それでこいつらが増えることはねえんだろうな！？』

《絶対って保証はねえけど、それしか考えられない！　とにかくやってみてくれ！》

『これで間違ってたら承知しねえからな！』

しかしウォーロックは熱斗を信じきっていた。他にすがるものがないというのもあるかもしれないが、しかし熱斗が今後英雄になることに変わりない。だから信頼できる。

「熱斗君を信じてやってみよう、ウォーロック」

『それしか方法がねえんだから仕方がねえ……。とけいのデータは？』

「ちゃんとあるよ。それで罠に触れさせれば……」
『少なくともエグゼは帰ってくるってことか……どっちにしろいくしかねえ』
「じゃあ、すぐに終わらせよう！　熱斗君、バトルチップをお願い！」
そうスバルが叫ぶと、すぐに熱斗からの返事が来た。
《オーケイ。バトルチップ　ショットガン　クロスガン　スプレットガン　メガキャノン　スロットイン――》
《プログラムアドバンス　パワードキャノン！》
スバルの右腕が大口径の銃火器に変わる。それをスバルはすぐに前方へと構える。先方の敵はエグゼを守るように壁をつくっている。これなら敵にあたりはしてもエグゼにあたることは無いだろう。
『スバル、撃て！』
ウォーロックの号令の直後、スバルの右腕が火を噴いた。数秒もたたないうちに前方の敵に直撃、弾丸はそれでも足りずに辺りに爆風を撒き散らし、敵を燃やし、吹き飛ばし、消していった。もし敵が本物であれば悲鳴が響き渡っていたであろう。
しかしこれは敵は偽物で、すぐに復活してしまう。道は開いたのに、また塞がれてしまう。その前に
「ウォーロック！」
『ああ、一気に突っ込んでやるぜ！』

ウォーロックの真骨頂、「ウォーロックアタック」。エグゼへと狙いを定め、スバルは地面を蹴った。
視界の端で敵が復活を始める。だがそれではスバルには追いつかない。コンマ数秒の世界で、スバルは咄嗟に右手を出した。そしてエグゼの目の前で移動し、触れた。
とけいのデータが敵の罠を中和――エグゼの時間が、再び動き出した。

『……あれ？』

硬直したエグゼが困惑の声を上げる。

『僕、何をしていたんだっけ？　たしか、ロールちゃんを……って！』

エグゼはスバルを見つけるとすぐに距離を置いた。そうか、まだエグゼは僕たちのことを敵だと思い込んでいるんだ、とスバルは思い出す。

『おまえがロールちゃんを攫った犯人だな……！　どこにいる！……後ろに敵を引き連れているようだけど、僕は負けないぞ！』
《落ち着けロックマン》

不意に熱斗の声が響く。

《その蒼いナビ……スバルは仲間だ》
『……えっ？』

今さっきとけいの呪縛から開放されたことも相まって、エグゼは

言葉を失っていた。それに追い討ちをかけるように熱斗は解説を続ける。

《本当の適は別にいる。スバルの後ろにうじゃうじゃいるのが敵の手下だ》

スバルが振り返ってみると、敵たちは全て消えうせてなどいなかった。目測でおよそ１００体ほど、しかしさっきよりも減っている。復活する様子は見せない。

「……ねえ、ロックマン」

スバルはエグゼへと振り返り、ゆっくりと言葉を紡ぎだす。

「僕たちには君の力が必要だ。……僕も君と同じように救いたい女の子がいる。だから、力を貸してほしい」

「たくさんいるけど、僕たち二人がいれば、絶対に倒せるから」

現代

「……フゥーハハハ！」

どこかの国のどこかの地方のどこかの孤児院で、そんな高笑いが響いた。

「今日は楽しいね、サイコーにっ！」

「……うるさいカイ」

さっき高笑いをしていた少年――カイに対し、病院の院長の娘――黄璃光はあきれ気味に言った。今彼女らがいるのはリビングだ。さきほど夕食を済ませ、後片付けをしている最中なのだ――黄璃だけが。

「別にいいんじゃんか。こうでも言ってないとテンションが上がらないし」

「だからって楽しいって無理矢理言うのはどうかと思うけど」

「だってつまんないじゃん、このごろ。地球が救われたからって言って各地のデパートとかで半額セールが行われているだけじゃん」

「……あのね、私にとってはそれ重要なことだから」

「俺にとってはどうでもいいことだから」

はぁ、とため息をつきながら黄璃は片付けられた皿を洗っていく。今の時代専用の食器を洗うものもあるのだが、数が多すぎて不足分を補わなければいけないのだ。面倒くさいなと思いながらもしっかり洗っているかぎり、仕事はカイよりもきちんとやるタイプらしい。

点けっぱなしのテレビからは響ミソラが失踪した事件を報道し、謎のウィザードの顔写真入りで映っている。それと同時にサテラポ

リス・ニホン支部から1体のウィザードが消失したこととの関連性を問われており、いろんな意見が取り立たされている。

「大丈夫なのかな、ミソラ」
「何故呼び捨て？　仲いいの？」
「ファンはミソラって言うんだよ」

よく分からない理屈だな、とカイは呟きせんべえをばりぼりと頬張る。二人とも特に心配している様子は無い。今頃全国のミソラファンとロリコン共はこの事件を受けて発狂していることだろう。さっきまでリビングにいた子供たちなんて大勢で泣いていて近所があるならばうるさいと怒鳴られていることだろう。

「どこに消えちゃったんだろう。早く戻ってきて欲しいな」
「あれだ、γ世界線だよきっと」
「どこそこ？」

分かりにくいネタを振りまくカイに対し黄璃は首を傾げながら訊いた。しかしカイだって適当にいっているので分かるはずもない。

「大丈夫大丈夫。一応は生きているだろうから。そのうち帰ってくるよ」
「そうじゃないけど困るけどさ……いまいち信じられないっていうか」
「心配すんなって。……ちゃんと収束するからさ」
「だから何のことだって」

いいじゃん別になんでも～、と笑顔で答えるカイ。カイと黄璃が会ってから二年と少し経っているが、いつもこんな感じだ。助けてあげた恩を忘れているんじゃないか？　と思いながら1人で食器を

洗っている黄璃。お疲れ様です。

「まあまあ、大丈夫だろ。なんてったってあるんだろ？　おまえの病院に」

「光熱斗が記した、日記形式のデータがさ」

「ふう……」
『終わったね……』

スバルとエグゼに数分前までは存在していた多くの敵は今は見る影もない。たった二人で、全てをデリートしきってしまったのだ。
コピーの体力が相当低かったのもあるが、それが二人が高かったのもまた理由の一つだ。

「これで信じてもらえたかな、ロックマン。僕が君の敵ではないと言うことが」

スバルの質問にエグゼは笑顔で頷いた。それは敵に見せる表情ではなく、仲間に見せるものだ。

『うん、ごめんねスバル君。僕が誤解してしまったばかりに攻撃してしまって……』
「いや、あれは僕も悪かったよ。未来を変えてしまうかもしれないから君との接触は出来るだけ避けたかったから……」

出会いは最悪の形であった。しかし今は最高の形でタッグを2人は組んでいる。当事者はまったくこんなことを予測できていなかった。各々が自分たちだけで解決しようとやっきになっていた。そして自滅していった。
だが、時間を越えた絆は事態を解決へと招いた。それが彼らの最高の力なのかもしれない。

「……じゃあ、行こうかロックマン。助けよう、二人で」
『うん、救おう。僕たちの手で』

２人が向かうのはロールとミソラが捉えられている約１００メートル先の場所、電波人間とネットナビが走り抜けるには１０秒なんてかからない。しかしそう簡単にことは運ばない。通路を邪魔するようにウイルスが出現し出したのだ。さっきとは違い強力な電波体は見えないが、それでも数が多い。悪あがきでもしているみたいだ。

「ロックマン！」
『スバル君！　いくよ！』

呼吸を合わせるように２人が突っ込んでいく。旧知の仲のようなその息のあいように、おそらく驚くものもいるかもしれない。しかしさきほどまで１００体の電波体と２人で戦っていたのだ。短い時間ではあったが、お互いを知るには充分すぎた。

「バトルカード　ファイアスラッシュ！」
≪バトルチップ　ファイアソード　スロットイン！≫

２本の炎の剣がウイルス達をことごとく焼いて消し炭にしていく。２人を狙ってくる攻撃は避けられ、隙を作ったものから順々に消されてしまう。ウイルスに恐怖という感情があれば、いますぐにでも逃げているはずだ。
開始から約１分ほどで戦闘は終了、現れたウイルス達はまた全て消し去ってしまった。先ほどのように復活する気配も無い。

「……なんでだろう」

スバルは呟きながら考えようとしたが、今は目の前にいるロールとミソラを助けることが先だと考え思考をやめた。エグゼと熱斗もその件については深く考えようとしなかった。少しでも弱らせたかったのではないかという考えがあったからだ。

『ロールちゃん……』

ようやく距離で表わすと１０数メートルまで来たところでエグゼはすぐに助けようという衝動に襲われた。ロールとミソラは硬直したままだが、すぐにでも触れる位置にいるのだ。無理矢理助けることも可能なはずだ。しかしスバルによって止められる。

「いるのは分かっている。出て来い、クロックマン！」

辺りを見渡しながらスバルは叫んだ。ロールとミソラを残してクロックマンが逃げてくれるなどということは期待していない。そして、罠があることも見抜いていた。

『……クーックックックック。時間にしてジャ～ストタイミングといったところでしょうか』

そんな演技がかった声とともに時計方のワープホールが２人の前に現れる。そこからゆっくりと現れたのは、スバルにとっては何回か見たあの憎い顔だった。

「クロックマン……」

『こいつが、ロールちゃんを……』

『ああ、面倒ごとの中心はこいつだ！』

その言葉に酔いしれるかのようにクロックマンはニタリと笑った。

『みなさんみなさん、こうも私の計画通りに動いてくれてありがとうございます。私としては嬉しくて嬉しくて仕方がありませんよ、本当に』

皮肉たっぷりに言うその言葉にウォーロックが青筋を浮かび上げさせた――実際にはそんなのはない、比喩だ。今にもぶちのめそうと臨戦体勢に入っている。

『私が美しいナビや電波体を集める計画、あなたがただけが邪魔をしてくる。……助けてくれる人もいるのに、残念なことです』
『賛同するってのは、あのシルバー・ウィンドのことか!?』
『ええ、そうです。彼はいい人でしたよ』
『……意味分からねえ奴だとは思っていたが、ここに来てあいつが誰なのか俺には分からなくなってきた……!』
「僕もだよ、ウォーロック」

何故シルバー・ウィンドがクロックマンに協力をしているのかはスバルとウォーロックには全く分からなかった。しかし今シルバー・ウィンドがいないので無視していいことでもある。

『とにかくロールちゃんを返せ!』
『それは無理ですね～、このビューティフルなネットナビを手放したくない。もちろん、キュートな電波体についても同じですが』
『いちいち言い方がムカツク野郎だな……』

その罵倒の言葉に、しかしあくまでクロックマンは笑っていた。

「クロックマン、君が引かないのなら僕たちは君と戦うしかない。……それでもいいの?」

『う〜ん、それは困りましたね。もしそうなら……こうするしかないのでは？』

そういってクロックマンはロールとミソラを自分の前へ壁のようにした。つまり「人質」ということだ。いつでも自分が人質をどうにでも出来るんだぞ、暗にそう告げていた。

『くそっ、きたねえぞ！』

『あなたがたのような下劣な電波体にいわれたくはありませんね。小うるさい蚊は黙っているのが一番かと』

しかし、クロックマンはすぐにロールとミソラを壁としてではなく後ろへと移動させた。そのときのクロックマンはあまりにも無防備で、だが余裕な表情は崩れなかった。

『けれど、やはりこんなにも時間をかけて手に入れた芸術を傷つけられては困ります。……壁として使用することはありません』

「……えっ？」

思わずスバルは疑問の声を上げてしまった。エグゼ、ウォーロック、熱斗に関してもそれは同じだ。クロックマンはたった一人、スバルとエグゼは2人。数として勝てるわけがない。なのに姑息な手を使わずに余裕な笑みを崩さずにいられるのだろうか？

『使用するのは、これですよ！！』

突如クロックマンのすぐ傍の地面に魔方陣のようにワープホールが現れる。また新しい電波体を呼び寄せるのか？　そう思ったスバルだがすぐにそれは間違いだと思い知らされる。

出てきたのは、一本の赤黒い杖だった。

それをすかさずクロックマンは持つと、スバルとエグゼへと向ける。

『バーニングスター！』

見覚えのある名前とともに、ふりかかるのは火の粉の雨、予想外の攻撃に2人は避けることもままならなかった。

「うわあああああああっ」

『ぐおあああああああああああっ』

それは、たった数週間前にスバルを焼いた敵の炎であった。レーヴァテイン・フレアの攻撃、それをクロックマンが行ったのだ。

『私の能力は過去にあったものを呼び寄せるものです。しかし「ガイア」本体を呼び寄せることはさすがに無理でして、こうして武器だけを取り出すことしか出来ませんでした。そして、時間もかかるので電波体やウイルスを使って時間稼ぎをしました』

余裕の声でクロックマンはまたもワープホールから武器を取り出す。弓、二丁銃、手袋、槍、どれもこれもスバルが今まで見てきた最強の武器たち、それが今クロックマンの手に渡った。

あのクロックマンの笑みはこれがあったからなのかとスバルは気付いた。さっき通路に現れたウイルスはこれを呼び寄せる為に使われる時間を稼ぐためなのだと。

たとえ一人であろうとあんな武器を使われてはスバルとエグゼに勝ち目は薄い。エグゼＰＧＭはもうないので変身をすることも出来ない。

『さあ、どうします？　今の私に、勝つことが出来ますか？』

「くっ……」

予想外の戦力にスバルは歯噛みした。敵はあくまで体力の低い電波体だけを召還するだけの電波体と見くびっていた。それがまさかここまで強力な兵器を持っているとは夢にも思っていなかったのである。

『おいおい、あんなの使われたらマジで俺ら終わりだぞ！』

『ガイア』の強さはスバルとウォーロックが身に染みてわかっている。しかもスバル1人で倒してなどいない。仲間の助力があってこその勝利であった。さらにクロックマンは全ての『ガイア』の力を使うことが出来る。いくらエグゼがいようとも、勝てるわけが無い。

『スバル君、君は、あいつの能力が分かるのかい？』

バーニングスターによるダメージを無視し立ち上がるエグゼにスバルは頷いた。

「うん、知ってる。……クロックマンが持っている武器のほとんどを」

『だったら、どうすれば勝てるかも分かるんじゃないの？』

「……」

エグゼに問いに対する答えは無い。いわば、スバルが勝ったのはそのときの変身によるものが大きかったからだ。エグゼＰＧＭによる様々な変身のおかげで窮地を乗り越えたに過ぎない。いくらあの

ころよりもスバルの実力があがったからといって、丸腰でサブマシンガンに勝とうとするようなことは出来ない。

『どんなにあなたがたがグレイトな作戦を立てようが、私に勝つことは出来ませんよ！』

そういってクロックマンは杖を離し今度は二丁拳銃を手に掴んだ。黄色に輝くその銃口が、すぐに雷撃を辺りに散らす。

「あの武器は、たしか……京都で出会った1体のものだ！」

『ジェノサイドサンダー！』

嵐のように放たれる雷弾の数々、それをスバルとエグゼは回避しようとするが、弾は2人に当たらず地面に着弾する。

『……あぁ？　ヘタクソな野郎だな！　こんなにも弾撃ってんのに外しやがって』

ウォーロックの挑発、しかしクロックマンはそのことに動じない。先ほどから顔に貼ってある笑顔は剥がれるようすが見えない。

《（なんだ、この余裕。何かあるのか……？）》

攻撃を外されてスバルとエグゼはすぐに反撃を行おうとしていたが、熱斗はそうしようとは思わなかった。敵の余裕すぎるその笑顔が心のどこかで引っかかった。

外された弾丸、しかしそれはまだ地面に残ったままだ。それも雷を帯びたまま。何かを待っているかのように――。

《2人とも、防げ！》

熱斗のその言葉に、２人はすぐに理解できなかった。ここから反撃だというときに何故防げという指示が出るのか全く分からなかったのだ。だがスバルも熱斗に遅れて気づく。何故弾丸が自分たちに当たらなかったのかを。

熱斗とスバルが行動を起こしたのはほぼ同時だった。

《バトルチップ　バリア！》
「バトルカード　バリア！」

すぐさま青色のバリアが２人の身体を包み込む。場が急変したのはまさにその直後だ。地面にあった弾丸がバチバチと音を立てたと思うと次の瞬間には電撃が当たりに撒き散らされたのだ。

『ボルティッツックドオオオオオム！』

アサルト・ブリッツの連続技、それはバリアなどというちゃちなものを貫通し２人を焼く。

『クーヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ！　どうですどうです！？すばらしい力でしょう。これさえあればどんな敵にだって勝つことが出来る！　貴様らみたいな下種な奴らに、負けるわけがないのですよおおおおおっ！！』

今のクロックマンはあの『ガイア』さえ超えるのではないか、いつも強気なウォーロックが不覚にもそう思っていた。それほどまでに今のクロックマンの実力は圧倒的すぎた。時を操る電波体、それがどんなに脅威なのか。気づいたところでもう遅かった。

「どうすれば、いいんだ……？」

思わず出た問い、しかしそれがあればそんなのすぐに実行している。

勝てないと告げられていた。強すぎる、実力があり犬死するだけだ。それなら一度撤退したほうがいいに決まっている。スバルの思考が徐々に逃げていく。

『くそっ……』

しかし、エグゼは違っていた。ぼろぼろになりながらも、その両足でしっかりと立ち上がった。何故？　とスバルは思う。何故そんなことが出来るんだと。

だが思い出した。何故ならばスバルだって経験がしたことがあるから。

今のエグゼには打算や勝算などということは考えていない。ただひたすらに友達を守るという、そのためだけに立ち上がる強さ。

「……」

『……スバル』

「うん」

その姿を見てスバルものろのろと立ち上がった。ダメージが大きすぎて今にも膝をつきそうになってしまうが、意地で耐えた。

自分たちが何故この時代まで来たか、何故ここでクロックマンと対峙しているのか、そして何故逃げてはいけないのか。思い出し、反芻し、スバルはもう一度闘志を燃やした。

「……ロックマン。あの杖はさっきみたいに炎の攻撃、銃は雷だ。手袋は木属性、水属性、槍は……闇ってところかな。それぞれの攻撃の弱点を突けば、たぶんゆうりに勝負を運べると思う」

『分かった』
「クロックマンはこちらの動きに対し臨機応変に武器を変えるつもりだ。熱斗君、バトルチップをどれだけ早く転送出来るかが勝負の鍵だ」
《任せとけ！》
「ここから僕とウォーロックは熱斗君のオペレートはいい。2人をオペレートはさすがに難しいからね。――じゃあ、いくよ？」

その言葉と共にスバルはクロックマンへと跳んで行った。ウォーロックアタック、ひらいていた距離を一気に縮め、クロックマンの目の前と肉薄する。

「バトルカード　ソードファイター？！」

その余裕な笑みを斬り刻んでやるといわんばかりに剣が振るわれた。あまりにも一瞬の出来事、クロックマンは笑みを崩して呆然としていた。殺った。そう思ったスバルだが手ごたえがありすぎた。ぎゃりぎゃりぎゃりと何かが削れるような音が響き渡る。
そこにあったのは、漆黒の槍と盾。

（ゲイボルグの、武器……！？）

スバルの攻撃は全て盾によって防がれていた。巨大な盾で見ることが出来ないだろうが、おそらくクロックマンは笑っているだろう。
思わず歯噛みするスバルだが、槍が動くのを見て回避行動に出ようとする。

『ダアアクネスランスッ！』

突如、槍から漆黒の炎が噴き出る。闇、光を暗い尽くすそれは今

スバルを焼き尽くそうと迫ってくる。攻撃をしたあとのスバルには絶対に避けられない攻撃。スバルは、漆黒の槍に貫かれてしまった。

『まずは1人ぃいいい！　……うん？』

しかし手ごたえが無い。突き刺したはずのスバルは何故か狸に変わってしまっており、デリートされていな――

「ヘンゲノジュツ！」

クロックマンは後ろに現れたスバルに反応することが出来なかった。振り返ることもままならなかった。最初に感じたのが衝撃、そのあとに痛み、何が起こったのかもわからないクロックマンには殺しはずのスバルに斬られたという発想に結びつかなかった。

『があああああああああああっ！』

激痛に叫ぶクロックマン、余裕な笑みなどもはやどこにもない。そこにいるのは、ただ激痛に身を任せる哀れな電波体だった。

倒れたまま後ろに振り返りスバルの姿を確認したクロックマン、表情は苦悶から怒りへと変わり、槍と盾を手放す。そして緑色の手袋を嵌めた。

『許さん！　ムシケラごときが調子に乗るなぁ！』

地面から緑色の植物が生えたかと思うと、次の瞬間にそれは槍状の武器に変わりスバルへと伸びていった。

『リイイイフランス！』

スバルへと伸びていく槍、それは今度こそスバルを串刺しにしようと――

《バトルチップ　フレイムソード！》

クロックマンはスバルの動きに集中しすぎてエグゼのことを忘れていた。まさに2人のロックマンの波状攻撃。それを防げるものなど、いるのだろうか？

植物の槍はエグゼの剣によってあっさりと消し炭になってしまう。プロヴェはあくまでノイズを栄養分として植物を再生させていた。しかしここではノイズなど皆無だ。だから、すぐに消えてしまう。今度こそクロックマンは表情を消す。

「バトルカード　ヘヴィキャノン！」

紫色の大砲をスバルは敵に向ける。すぐに弾丸はクロックマンへと向かっていき、ようしゃなく爆炎を散らす。

今度は悲鳴さえ上がらなかった。黒い煤を身体中にまとったクロックマンは力が抜けたまま吹っ飛び、地面に落ちてからもピクリとも動かなかった。

『大丈夫スバル君』

「うん、大丈夫。ありがとうロックマン」

英雄タッグが繰り広げる攻撃、それはさっきまで絶望的だったものを無理矢理ひっくり返す。

だからこの2人は、今まで――これから――世界を救っていったのだ。

『オオオウシャンズウロボロオオス！』

横からの激流、それが唐突にやってきてスバルとエグゼを飲み込んでいった。さらにその激流の中に混じった矢が突き刺さる。そして2人を押し流す。まさに水の本領だ。

『まだ終わりませんよッ！　ここまで来たのです。そう簡単に諦められるわけがないでしょう！！』

ブラフマの蒼弓を構えたクロックマンが叫ぶ。ただただ自分の欲だけに忠実な電波体の姿は醜く、それでいて鬼気迫るものだった。それを見て熱斗は吐き気がすると思った。自分を満足させるためだけに他人を不幸にする、クロックマンという電波体があまりにも気持ち悪い。

『くそっ、スバル油断すんじゃねえ！』

「ごめん、ウォーロック」

『完全にやったと思ったのに。……まだ戦う余力があるなんて』

しかしブラフマの最強の技を受けてなお2人の英雄は力尽きていなかった。武器がいくら強力でも、使い手によって威力は二倍にも半分にもなるということか。そしてクロックマンは武器に見合っただけの実力を持っていない。

『だけど、ここで倒す！』

「うん、そうだね。ここで倒さなきゃいけないんだ！」

クロックマンをにらみつける様に2人は立ち上がる。どちらも退く気は一切ない。どちらが死ぬまで、勝負は続くのだろう。

クロックマンが弓を離しまた杖を持つ。レーヴァテインの杖。そして満身創痍のクロックマンが放つ攻撃ならば、あれしかない。

『バアアアニングドラガアアンンンッッ！！』

杖から出現したのは1体の紅き炎龍。触れれば蒸発してしまうくらいのその灼熱のからだは、龍が一瞬首をもたげると音速で2人へ突っ込んでいく。

《バトルチップ　ムラマサ》
「バトルカード　ムラマサブレード」

それに対し2人の英雄が取り出すのは一本の刀。自分の体力がなければないほど威力を増す、危機的状況にはうってつけのものだ。水属性よりもこちらを選んだのはこちらのほうが威力が高いと踏んだのだ。

『「喰らえエエエエエエエエッ！！！」』

2本の刀が唸りを上げて龍の頭に斬り裂いた。実体がない分手ごたえが感じられない。しかし、だ。

『……あぁ？』

紅き龍は、消えうせた。たった2本の太刀に切り裂かれたことによりその姿は消えたのだ。

『まだ降参しないの？』

エグゼがあくまでも平然とした口調で訊いた。ムラマサはさっきの攻撃により消滅したが、敵にとってもうバーニングドラゴンは訊かない攻撃だと知らしめることが出来た。あとはクロックマンを倒

せばいいだけの話。

『てめぇはこれで終わりだ！　おとなしく現代に戻るっていうなら、勘弁してやってもいいぜ？』

しかしウォーロックはクロックマンがここで退くとは全く考えていない。あくまで上辺だけでの質問だ。

『……クーックックック、クヒャーッハッハッハッハ！！　退く？　そんな言葉が私の辞書にあるとでも？　そんなわけがないでしょう。私もあなたがたも、ピイイインチな状態には変わりありません。だったら、勝機がないわけではない！』

そういってクロックマンは最後の力を振り絞るかのように漆黒の槍に手を伸ばした。ゲイボルグの槍、それが意味するのは『ガイア』で最強の攻撃を放つということ。

『私はシルバー・ウィンドによってこの世界の外へと出された。それを無駄にすることは出来ない。せっかく掴んだチャンス、時間の狭間で、至高の芸術を集めさせてもらいます！』

クロックマンが右手をかざすと、そこに黒い炎がゆっくりと集まり出す。ゆっくりと、しかし着実に大きくなっていくその炎は、さながら漆黒の太陽のようだ。

「……ロックマン」

スバルがエグゼに対して告げる。

「これが最後の攻撃になる。これに、全力をかけて欲しい。そうすればきっと――」
『ロールちゃんを救えるってことだね』
あくまでもエグゼは笑っていた。ぼろぼろに傷つきながらも、しかしここで出会えたことに誇りを持っているかのように。
スバルは左手を構える。エグゼは右腕を構える。その先にいるのは漆黒の太陽、破壊の象徴、しかしそれを消し去れば光が見えてくる。
「いくよ、ロックマン」
『これで終わりだ、スバル君』
『「ロックバスター！」』
『ブラックサン！』
吹き荒れる銃弾、全てを焼き尽くす漆黒の太陽は真正面からぶつかりあった。電脳のデータをお互いが喰らい、消し、突き進んでいく。
『あああああああああああああああっ！』
「おおおおおおおおおおおおっ！」
2人の叫び声が電脳に響き渡る。銃弾は着実に当たっているのに、破壊の象徴はまだ消えない。徐々に2人に近づいていく。
このままではやられる、2人がそう思ったその瞬間太陽に突っ込んでいくものがいた。
『――ウォーロックスイング！』

今まで我慢してきたとばかりに振るわれるその一閃、溜め込まれた一撃は漆黒の太陽を、斬り裂いた。

『な、んだとおおおおおおおおっ！？』

今度こそ、今度こそクロックマンは打つ手をなくした。今度こそ勝負は決まった。

「これで、終わりだあああああっ！」

荒れ狂う銃弾は何も出来ないクロックマンを呑み込み、そして、

そして――

光が、垣間見えた。

『や、やった……？』

エグゼの問いに、すぐに答えられるものはいなかった。しかしデータの粒子が待っているのと、さきほどまでクロックマンがいた地点に何もないのを見ると

「……うん、やったんだ！」

ほっとしたのも束の間、スバルとエグゼはぺたりと地面に膝をついてしまった。圧倒的なまでの戦力差を2人のコンビネーションで倒せたはいいものの、お互い体力の限界にまで達していたのだ。

『おいおい、だらしがねえ奴らだな！　クロックマンを倒して終了か？　ほら、見てみろよ』

そういってウォーロックが顎で示す先では、時間に囚われたヒロインたちが呪縛から解き放たれたときだった。

『……あれ？』

「私、どうしたんだっけ……？」

ようやく時間が動き出した彼女達はこの電脳がどこか分かっていない。しかし、ボロボロの状態のロックマンを見て取る行動は同じだった。

『ちょっと、ロックマンどうしたの！？』

「す、スバル君。その怪我は何があったの！？」

すぐさま2人はお互いの知っているロックマンへと駆け寄りすぐさま介抱を始めた。助けにきたというのに最終的に助けられているとは何とも皮肉な話だ。

リカバリーによる介抱が五分くらい続いたあとで、ロールとミソラは2人のロックマンから事情を聞かされた。事の発端であるクロックマン、何故スバルがここに来たのか、そしてロールがさらわれてからのスバルとエグゼの戦闘、さらにさっきまでクロックマンと激戦を繰り広げていたこと。

『「ボロボロなのに喋らないの！」』といわれていた2人だが最後まで話しきってしまっていた。ロールとミソラ達にも知っておいて欲しかったのかもしれない。それは自分の友達を、自慢するかのような勢いだった。

それをヒロイン2人は母親のような気持ち（？）で最後まで聞いた。そして介抱を終えた後、ミソラはエグゼに、ロールはスバルへと謝罪の言葉を述べた。

《ま、とにかくお疲れさん2人共！　ロールもミソラちゃんも戻ってきて本当に良かったぜ！》

ＰＥＴの向こう側にいる熱斗も興奮しているようだった。今更考えてみればスバルとミソラは未来人である。そんな人間と一緒に戦ったのだから、興奮しないほうがおかしいのかもしれない。

『それにしてもスバル君、君たちはどうやって２００年後へ戻るの？』

その言葉にスバルとミソラは一瞬固まった。スバルはヨイリーから「なんとか戻れるだろ」みたいにいわれていたのだが、ワープホールらしきものはどこにもない。

『おい、スバル。俺たちどうするんだ？』
「そうだよスバル君！　私達このままこの時代にいるの！？」
『ポロロン、これはピンチね』

口々に未来人たちが疑問を出したそのとき、スバル達の後ろ側に時計型のワープホールが出現した。それはスバルがこの時代にやってきたものと同型で、しかもそれから

《おお～い、聞こえていますか～！？》
「あっ」
『おっ』
「これは」
『委員長の声ね』
《かえってくるならさっさと帰ってきなさ～い！》

どうやらちゃんと未来へとこのワープホールはつながれているようだった。そのことに再び安堵するスバル。本当に、無事に戦いは終わったのだ。

「ちゃんと、未来へ繋がってて良かった。……ねえ、スバル君。名残惜しいけど、そろそろ帰ろ？　このまま私達がずっといることは、きっとこの世界にいい影響を与えないから」

その言葉にスバルも頷いた。話したいことはいっぱいある。スバルは、エグゼをもっと知りたかった。あのときヘイトに自ら殺されていったエグゼのことを、忘れたくなかったから。

「そうだね。……でもちょっと待って」

そういってスバルはエグゼ達へと振り返った。

「ロックマン。それに熱斗君。最後にお願いだけど、僕たちとブラザーになってくれないかな？」

『ブラザー？』

聞きなれない言葉にエグゼは首を傾げる。

「うん、未来では特に仲のいい友達、親友のことをブラザーっていうんだ」

その言葉を聞いて、エグゼと熱斗は苦笑した。やっぱり駄目なのかな？　そう思ったスバルだがすぐに間違いだと気付かされる。

《水臭いこというなって。俺たちはとっくに親友だよ》

「……熱斗君、ありがとう！」

感激に涙を潤ませるスバル。それを周りの人は微笑みながら見守っていた。

「あ、そうだ。友情の証として、何か受け取ってよ」

ええと、といってハンターを操作して何か上げられる物はないかと探し始めるスバル。そんなものいらねえ、という熱斗の声を無視しスバルは探した。そして、見つけた。

（これは……！）

あの日、ヘイトによって殺される直前にエグゼから渡されたデータ。そのデータの名前は

（ＳＳ、ロックマン……！？）

アイコンはスバルが電波変換した姿が映し出されている。それを見てスバルはあのときのエグゼの台詞を思い出す。

『僕たちは、ブラザーだから』

（このことを、言っていたのか……！）

全てが繋がった。あのときのエグゼはこの時代にスバルが来ることを知っていたのだ。そして『過去』の自分が何を見て、どうするかも分かっていた。だからスバルが死なないと断言していた。

「……ブラザーの証として、これを上げるよ」

あくまで声が震えないように、スバルはエグゼへとそのデータを渡した。

「僕のデータの片割れ、っていうのかな。それを持っていれば、何かいいことがあるかもしれない」

『ん？　スバルそれどうしたんだ？』

「いつそんなものを作ったの？」

いつの間にか、と曖昧にスバルは答えるしかなかった。

『分かった。ありがとうスバル君。大切に保管しておくよ』

《２００年後までのこらせるくらいにな！》

冗談まがいでいった熱斗の発言で周りが少し和んでいく。それが

未来では本当に実現しているとも知らずに。

「じゃあ、僕たちは行くよ」

「ありがとうね、この時代のロックマン！」

『うん、じゃあね！』

『ありがとうスバル君！』

ワープホールへと向かっていくスバルとミソラ。しかしスバルはワープホールへと行く直前でまた振り返り、目を潤ませながら

「ロックマン……また、会おう」

それがどんな意味をしているのか、『今』のロックマンには分からない。ただ呆然としているだけだ。

『……いっちゃったね、スバル君たち』

『そうだね、ロールちゃん』

バリンと、ワープホールが割れて消滅する。エグゼがスバルと会うときは、次は２００年後。そしてそのときのスバルはエグゼとの面識はない。そのことを知らないエグゼは、スバルの最後の言葉に、『まだ』少し心に引っ掛かる程度のことだった。

『さあ、帰ろうか』

『うん、そうだねロックマン！』

名の知れない電脳から2人はプラグアウトしていく。

――その五分後。スバル達が入っていた場所に空間の裂け目のようなワープホールが突如現れた。そこからゆっくりと現れたのは、銀色の剣士。名前を、シルバー・ウィンド。

『ああ……くっそ懐かしい感じがするな。２００年後は堅苦しいけど、なんかこっちのほうがいいよな』

ま、この時代嫌な思い出ばっかだけどと小声でつぶやく。

『面倒だからさっさと用事すませちゃおうっと。……このままエグゼを殺しにいきたいところだけど、そしたらパラドックスが起こるからな。腹立つ話だけど、やめておくか』

そういって彼は名もない電脳の真ん中へと歩み寄っていく。――そこはさっきクロックマンがデリートされた場所だ。

『まずはクロックＰＧＭの再生っと』

そうつぶやくシルバー・ウィンドの右手にあるのは不思議な形をした金属があった。ムーメタル、今から数千年前に作られた地球上で最高峰の電波兵器だ。

それがゆっくりと光り輝いたかと思うと、シルバー・ウィンドのハンターに「ダウンロード・完了」といったカタコトのメッセージが発せられる。

『次にクロックマン――クラークの蘇生だな』

もう一度ムーメタルが鈍く光ったかと思うと、すぐにシルバー・ウィンドの目の前に緑色のウィザードが現れた。

『……あれ？　私――』
『おまえはクロックマンとしてこの時代に来たんだ。アメロッパのクロックＰＧＭの実験が俺に邪魔されてな』
いきなり事実を面識のない人物から聞かされ、サテラポリス・ニホン支部のウィザード・クラークは混乱しそうになった。しかし目の前にいる電波体が何なのかを知った瞬間、目を見開いた。
『シ、シルバー・ウィンド……！』
『おいおい、命の恩人にその言い方はねえだろ』
呆れ気味にいう剣士だが、その顔色は防具に隠されてしまっている。
『これから俺とおまえは２００年後へと戻っていく。んで、サテラポリスに戻ったらおまえをアメリカに寄越した奴に伝えろ。クロックＰＧＭは、ムーメタルの能力のうち２つを完全に再現したものだってな……！』

現代

「おっ、スバルの奴帰ってきたな！」

ゴンタの歓喜の言葉とともに、ワープホールからスバルとミソラが出てきた。

「遅いわよ2人とも、ずっと待っていたんだからね！」

「いえ、委員長。さっきから15分もかかっていな……いえいえなんでもないですすいませんでした！」

ようやく戻ってきた日常、その輪の中に入ってミソラは笑顔になっていた。ようやく戻ってこられたと安堵しているのと、またみんなと楽しい生活が送れるという歓喜。入り混じった感覚を覚えミソラは目を潤ませた。

逆にスバルはエグゼのことを思い出して泣いていた。永遠の擦れ違いを思い出して、胸がはちきれそうに成っていた。

「おいスバル、何号泣しているんだ？」

「ミソラちゃんを救えて嬉しいからに決まっているじゃないですか、ゴンタ君」

「……男なのに情けないわねぇ」

3人が3人とも違う意見を言う。しかしそうではないと気付いたミソラは、スバルの背中をさすった。

「……エグゼとのお別れが、悲しかったの？」

「……少し違う。僕が悲しいのはエグゼと永遠に擦れ違うことだ」

その言葉に最初誰もが意味が分からないという表情をした。しかしそれを無視してスバルは語り出す。

「エグゼは知っていたんだ。エグゼは、この時代に「面識のない僕」

と出会うことを。その未来を作る為に『ガイア』を作って、ヘイトから地球を守った。そして２００年後に、『ガイア』がヘイトに操られて僕たちに倒されることも」

全てが予定調和であったということ。あの『ガイア』は、スバルの未来を守る為に作られたネットナビで、エグゼはスバルを守る為に無理矢理に生かされた。

「そして僕は過去にいって「面識のないエグゼ」と出会い、過去のエグゼを救った。……そして過去を守ったんだ」
「え～っと、つまりどういうことだ？　キザマロ」
「ぼ、僕にも分かりませんよ」

キザマロとゴンタは疑問の声を上げている。しかしルナとミソラは違った。スバルが何をいいたいのかを、すぐに察した。

「……つまり、エグゼは過去にあなたが来て「過去のエグゼ」を救うことまで予想した。そしてそのためには自分が犠牲にならなければいけない。それを把握していたってわけ？」
「うん。そして、時間の関係で僕とエグゼはずっと擦れ違わなければいけないんだ」
「この時代では「スバル君を知っているエグゼ」と「エグゼを知らないスバル君が。２００年前では「スバル君を知らないエグゼ」と「エグゼを知っているスバル君」が会っている。……だから、永遠に擦れ違う」

そう、お互いを知っている2人は会う事は出来ない。

「こんなの、あんまりだよ……」

お互いがお互いを守る為に時間を費やした。だけど、お互い会う事はもう出来ない。ありがとうと御礼をいうことも、ごめんなさいと誤ることも。

「そうでもしなきゃ、世界は救えないなんて……」

世界を救う為に多くの思いを犠牲にしてきた。もし、過去にスバルが関わらないという世界があれば、きっとウィンドが産まれてもエグゼをうらんでこの時代まで生きずに済んだ。『ガイア』はヘイトに操られて死ぬことなんかなかった。

「……顔を上げなさい星河スバル！」

突然のルナの叱責、それにスバルはビクっと体を震わせる。

「それが本当なら、あなたはそこで泣いていないで堂々と立っているべきよ！　だって、あの英雄に救われたってことは、それだけ価値のある人間と思われたってことよ！？　あなたはそのことに、もう少し自信を持つべきじゃなくて？」

「そして、これからも世界を救う為に戦うべきじゃないの？」

気付けばルナの声も震えていた。いや、それだけではない。エグゼのことを理解したキザマロやゴンタ、ミソラさえも泣いている。何故かと訊くまでもない。この世界を救ってくれたエグゼが、あまりにも、あまりにも――

「……そうだね、委員長」

よろりとスバルは立ち上がった。その目はまだ潤んでいる物の、しっかりと何かを決め付けたかのような光を帯びている。――それが、英雄の意志を受け継いだということなのだろうか。

「僕は、エグゼに救われた。だから精一杯生きなきゃいけない。……ここで泣いている場合じゃない」

「……それでいいんだよ、スバル君」

「うん、そっちのほうが私もスバル君らしいと思うよ？」

ルナとミソラも笑顔を取り戻していく。救われたのは自分たちなのに、あのとき泣いていなかった自分達が泣いては駄目だと思ったのだ。

「僕はこれからもロックマンとして生きていくよ」

「そう。……そんなあなた――とミソラちゃんにまだ言っていない言葉があったわね」

何？　と首を傾げるスバルとミソラをよそに、ルナ達3人は笑って告げた。

「「「おかえりなさい」」」

その言葉にスバルとミソラは呆けた後、やはりこちらも笑顔で言うのだった。

「「ただいま」」

最終話　光は受け継がれる

『まだ研究をしているの、熱斗君』

次世代の携帯端末から呼びかける相棒に老いた博士はにんまりと笑って答える。

「ああ、そうだよロックマン。あと熱斗君と呼ぶのはもうやめてくれ。まるでまだ小学生みたいじゃないか」

『まるで、じゃなくて今も小学生みたいだろ？　いつも科学省の会議に遅刻してメイルちゃんに怒られているくせに……』

「そういえば、来斗（らいと）にもそんなことといわれたな……」

その言葉にはぁ、とエグゼはため息をつく。

今や熱斗は５０をすぎる博士となった。あの戦いの日々では考えられないくらいにのんびりとした生活――はなく、ある意味ではこちらのほうが大変な日々を送っていた。毎日が研究、科学を一歩でも前進させようとするために疲労との戦いでもある。

「ま、年をとっても俺は変わらないさ。それがこの瞳が語っている」

ぱちん、と熱斗が指をならすとどこからか鏡が現れた。どうやらカラクリのようなものらしい。

「俺の瞳は、昔っから変わっていない。……周りの人間は、残念なことに目が枯れてしまったがな」

科学者というのは熱斗のように純粋に――熱斗もある意味では純粋ではない――科学を極めようとしている人間ではない。たまたま

科学が出来たものが、金や名誉のために前進させよとしている。以前にはテロ組織の高性能なミサイルの設計図を与えたものもいたくらいだ。

「――ようやく平和な世界が見えてきたんだ。もっと平和な世界にしようと思うのは当然のことさ。たとえこの身体に負担をかけようとも」

『……』

エグゼはこのごろ熱斗の身体が思わしくないことを知っている。だから無理をさせたくなかった。しかしとめることも出来なかった。何故なら熱斗から「もう自分は長くないかもしれない。でも、死ぬ前になんとかこの3つの研究は完成させたいんだ」と告げられているからだ。

その3つの研究とは――

「ブラザーバンドシステム、電波技術の確立、そして電波人間――。こんな夢物語を完成させるのはやっぱり大変だな」

深夜の12時を回っているというのに熱斗は汗をかいていた。今は冬、気温からしても寒く汗など出ないくらいなのだ。それほど興奮しているということか。

「でも、完成させなきゃいけないんだよ。そうだろロックマン。じゃなきゃ――スバルたちは俺たちと40年位前に会えないんだからさ」

ただそれだけに、熱斗は身体に無理してまで働いていた。未来の、スバルたち人類のために。

『……ここで熱斗君が研究をやめても、誰かがその3つを完成させるよ？』

「俺の技術であいつらの役に立ちたいんだ」

その瞳には爛々と光を帯びている。いずれその光を帯びる少年のために、今熱斗は研究している。

「これから生まれていく奴らのために、戦うことを引退した俺は何かを残してあげたいんだよ。――彩斗兄さんだってそうだろ？　だからフォルテとセレナードまで圧縮データに残して未来に託したんだろ？」

『……そうだね、熱斗』

彩斗は否定しなかった。今の熱斗を否定すれば、過去の自分を否定することにもなってしまうから。

『僕はウィンドの恨みを背負ってでもスバル君たちの未来を守ってあげたい。それが世界のためならば……僕が犠牲になっても構わないよ』

「兄弟って、本当に似ているんだな」

ははは、と熱斗は苦笑した。苦笑しながらパソコンを見つめている。本当に焦っているようだった。

『もう僕は寝るよ。熱斗、身体には気をつけてね？』

「ああ、おやすみ彩斗兄さん」

そういって次世代端末機の電源は切られた。ここからは本当に1人で研究を行う。

「……絶対に俺が生きている間に完成させてやる。そして、本当に平和な世界を作ってやるんだ――！」

この日からちょうど1年後、光熱斗は亡くなった。原因は過労死、日ごろからの研究がたたった結果だという。

彼が行っていた研究は完成させられなかったが、彼の息子へと受け継がれた。息子から孫へ、孫から曾孫へ、彼の思いと、彼の思い出と共に。「世界を平和にする」という一見馬鹿げた、しかし彼が本気で成し遂げようとした夢。

いつしか本当にそうなっていることを願って、この日記は光彩斗が締めくくらせてもらう――

「いい話だね」

天井を見つめながらカイは呟いた。

「うん、本当にいい話」

黄璃はそういってパソコンの電源を落とした。

「今日は光熱斗が死んでからちょうど１６０年が経過した日なんだ

って」
「……へえ」
あくまでカイは興味のなさそうな声を発していた。
「幸せだったのかね、その英雄は」
「……幸せだったと思うよ？　だって、お兄さんがこんな日記を残しているくらいだもん」
そうかなーと呟くカイ。いまいち納得のいかない表情だ。
「自分を殺して未来へつなぐ、か。本当に少年漫画で出てきそうな台詞だよ」
「だからこそ、英雄になれたんじゃないの？　スバルって人も、それを受け継いでいるはずだよきっと。血は繋がってなくても、思いは受け継げるから」
黄璃はパソコンの前から移動し食器を洗うことを再開する。その背中を見てカイは
「……おまえには受け継がれているのか？」
そう黄璃に訊いた。
「……分からない」
黄璃はあくまで肯定はせず素直に答えた。
「私は分からないよ。自分を犠牲にしてでも未来へ繋ぐなんて思考に、どうやったらなるかなんて。私が出来ることなんて、食べ物が

無い人に住処を与えることだもん。うんうん、それすらも違う。私が買った家ではないから、それはお母さんの手柄。私があくまで出来ることは……こうして語り継ぐことくらいじゃないのかな」

「だったら、そういう思考になるようにこれから生活していくことだな」

そういってカイは椅子から飛び降りる。

「どこにいくの？」

「どっか。9時前には帰ってくるさ」

カイはすたすたと歩いていくとすぐに玄関にある自分の靴を履いた。それから迷わずドアを開けて外に出る。

「ん、もう一番星は光っているのか」

太陽が沈むか沈まないかというくらいの時間帯に、もう星は光り輝いていた。

「……光熱斗の思いは、あの光のように誰かに知られて、受け継がれていってるのか」

ぽつりとそんなことを呟くカイ。

「まあ、俺は風のように生きたいように行くだけだけどさ」

言うが早いか彼は歩き出す。暗闇に染まっていく道を、たった1人で、どこに行くとも決めずに、ただただ歩いていく。

最終話　光は受け継がれる（後書き）

これにて蒼き流星は完結。これからの更新は外伝集からのひっぱってくるだけですので御気になさらず。

後書きは活動報告ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒｂｌｏｇｍａｎａｇｅ／ｖｉｅｗ／ｂｌｏｇｋｅｙ／２３２７１５／　にとんで貰いたいと思います。あとがきとかここに乗せたくないので

※）注このあとにつづくＳＳなどは外伝集にあったもののコピペです。読んだ方は２回目読む必要はありません

では、長い停滞期間がありましたがようやく完結！　全て読んでくださった方、ありがとうございました！

裏話？　姉弟の悩み

ジャック・クインティアの家。

ここでは毎度お馴染みということが行われていた。それは

『キャハハハ、これでも喰らえ～！』

『んなの喰らうか～！』

コーヴァスとヴァルゴの喧嘩である。２体のウィザードが帰ってきてからずっとこの調子だ。

おかげで家は焦げ跡や水浸しになっているところがある。

「ヴァルゴ、やめて！家が壊れるわ！」

クインティアが説得しようとする。

『え～、だって退屈なんだもん！ストレス発散～』

もちろん説得されるようなやつでもない。

「ウィザード　オフ！」

無理矢理ヴァルゴをハンターに戻す。ジャックもハンターにコーヴァスを戻す。

『も～、クインティアは頭固いんだから～』

家が壊れてしまうほど暴れてもらったら困る。

「2人とも、家に攻撃しないで！」

家が一瞬物音1つ立たなくなる。

『・・じゃあ～、物を投げるのはいいのね？』

「・・・・え？」

『じゃあもっとやりましょう～！』

ヴァルゴはハンターからでて、家の備品を投げまくる。

『俺も混ぜろ～！』

コーヴァスも参戦して家は備品が飛び交う。

「はぁ～・・・」

ため息をつくクインティア。ここまで来たら止められない。

「姉ちゃん、あそこに頼もう」

「・・・あそこって？」

「決まってるだろ？」

「ＷＡＸＡだよ」

「どうしたティア、なにかあったのか？」

ＷＡＸＡニホン支部についた2人は、早速今回のことに関係のない人物に出迎えられた。

「もしかして俺に――――」

「あなたには関係ないわ」

クインティアは暁を無視して歩いていった。

「ざまあみろ」

ジャックも暁を通り過ぎる。

「・・・・・・俺なにか悪いことした？」

取り残された暁は、ただ呆然としていた。

「なるほどね～、分かったわ。なんとかしましょう」

「助かります、ヨイリー博士」

クインティアはヨイリーに礼を言った。

「一応そのようなものは作ってあるわ。けど、実装してないけどね」

「なんでですか？」

「まだ強度が弱いのよ、まあ、喧嘩程度ならなんとかなるけど」

今クインティアの頼みで、喧嘩をしてもいい環境をつくれないかというのが話題だ。

「じゃあハンターを貸してくれる？ヴァルゴとコーヴァスにつけるわ」

『え？なんか俺達改造するのか？』

「大丈夫よ、ちょっとプログラムを組み込むだけだから」

ヨイリーは2人のハンターを預り、ヨイリーは去っていった。

1時間後

「できたわ」

ヨイリーが歩いてくる。

「ヴァルゴちゃんには無効化するベール（インヴァリットベール）をつけたわ。これは電波の影響を消すものよ」

「コーヴァスには？」

「コーヴァスちゃんには無効化する壁
インヴァリットウォール
をつけたわ。これは電波以外の力を無効化するものよ」

「ありがとうございます、ヨイリー博士」

「じゃあねクインティアちゃん。あと、式、楽しみにしてるわよ？」

「え？ホントか姉ちゃん」

「・・・・冗談を本気にしないように気をつけなさい、ジャック」

２人はＷＡＸＡを後にした。

裏話？　少女の悩みと疑問

「ふ～、暇だね。ハープ」

ミソラが言った。今日は久々の休みだった。土曜日、スバル達も休みのはずなのだが、分からない。分からないというのは、スバルにメールを送ったのだが、返信がないのだ。

『スバル君、どうしたのかしら』

ハープも心配そうに言った。返信がないのは珍しい。いつもならあまり時間もかからず返信がくるはずだが、5日前から返信がない。

「私、嫌われちゃったのかなー・・・・・」

悲しそうにミソラは言う。もしそうだとしたら、ショックで立ち直れないかもしれない。

「・・・・スバル君、返信頂戴よ・・・・」

少しミソラは拗ねている。

『ミソラ、なにかあるのよ。だって、ウォーロックでもなにか返信するもの』

ハープはスバルに非がないという。

「でも、返信て言っても、一行もないんだよ？」

『ミソラ、それは言いすぎよ。あなたはスバル君が思い通りにならないから悲しんでるの？』

ミソラは目を見開いた。たしかにそうかもしれない。彼のことを思うあまり、自分の思い通りにならないからと悲しんだり拗ねているのだ。

『彼にも彼の人生があるわ。それにミソラと関わらない時間だってあるのよ？』

そうだ、彼は自分と関わらない時間のほうが多い。本当になにかあった可能性も否定できない。

「・・・・そうだね、ごめん」

ミソラは謝った。ハープとスバルに。

『スバル君も、悩み事もあるし。あなただってあるでしょ？』

ミソラの顔が微かに赤くなる。

「そ、そうだけど・・・ってハープ、からかわないでよ！」

ミソラが少し怒ったように言った。ハープはそんなミソラを見て笑う。

『・・・・話変わるけど、昨日擦れ違った子、なんか変な子よね』

ミソラはその時のこと思い出す。

ベイサイドシティにある家に帰ろうとしたミソラは、家まで歩いていた。その時刻は6時。もちろん変装はしている。メガネに帽子、どこにでもいそうな冴えない小学生みたいだった。

「今日もスバル君から返信なかったな～」

ミソラは悲しそうに言った。

『また明日があるじゃない』

ハープはそんな彼女を励ます。

「・・・スバル君ってさ、私の気持ち気付いていると思う?」

ミソラがハープに聞いた。

『それはないと思うわ・・・』

ハープは言った。曖昧にしているとはいえ、言い切っている。

「やっぱりね・・・・」

ミソラは溜め息をついた。

「できれば気付いて欲しいな～」

少しはその気があるくらいは知っておいて欲しかった。

『彼にそれを期待するのはどうかと思うわ』

ハープは『無理無理・・・』と言っているようにも聞こえる。

「まあ、まだ事件も解決してないし、気長にがんばっていこう～」

半ばヤケに聞こえる。

『そんなんじゃスバル君は振り向いてくれないわよ?』

ハープは呆れている。

「～～～～～！・・・・・なんか虚しいよね」

ミソラが言った。

「振り向いて欲しいのに、スバル君は気付かない。でもスバル君は私にかっこいい言葉を言う・・・・なんかこっちは虚しいし、スバル君はずるい・・・・・」

ミソラは落ち込んでいる。

「・・・・ハァ～・・・・」

ミソラの溜め息は、暗くなりつつある空に消えていった。

『・・・・ミソラ・・・・・』

ハープはミソラに同情している。

「鈍感な人って、残酷だね」

ミソラの心の中の声だった。

そんな時、路地から銀髪の少年がでてきた。身長は１６０位。眼は細い。

ミソラとの距離は１０メートル。どんどん距離が短くなっていく。

そして、少年とミソラが擦れ違った。

「（そんなんじゃ思いなんか伝わんないぜ？）」

「え？」

ミソラは振り返った。少年はただ歩いていった。間違いなく少年が

発した。

「あ、あの・・・」

ミソラは少年に話しかけた。

「・・・何？」

少年はめんどくさそうに返事をする。

「あの、さっき私になんか言い――」

「キャ――――！」

突如悲鳴が聞こえた。見ると、そこにはウイルスが出現しているではないか。

大勢の人が雲の子を散らすように逃げていく。

「ハープ、行こう！」

『ええ、ミソ――』

「あんた邪魔」

その少年がミソラの前に立ちふさがった。

「ちょっとあなた分かっているの？あの数は一般人じゃ無理よ！」

見ればウイルスは３０はいる。並みのウィザードじゃキツイ。

「女に戦わせるってか？言っとくけどあんたみたいなひ弱そうな人間よりは強い自信あるよ？」

たまにこういう自信過剰な男子がいるのだ。

「いいからどいて！あなたじゃ――――」

「アイドルだが遊撃隊だが知らねえが、けじめのついてない奴に言われたくないね」

ミソラはびっくりする。変装がバレたのだ。このアイドル生活で、このファッションはバレなかったのに。

「ゲイル、ウィザード　オン」

突如、少年のハンターから白い龍のウィザードが出てくる。

「ゲイル、２つに分断して」

少年の背負っていた縦長い袋から、刀を取り出した。

「な！・・・銃刀法違反よ！？」

「バレなきゃＯＫ」

そういって少年とウィザードはウイルスに駆け出した。

『ダウンバースト』

ミソラにはなにが起こっているか分からなかった。ただ分かったのは、中央にいたウイルスが吹き飛び、ウイルスが2つに分断されたってことだけだ。

少年は刀を振るい、ウィザードは爪を振るう。ウイルスは徐々に数を減らしていった。

「・・・なんなのあの子」

ミソラは呟いた。ウイルスに電波変換もしないで突っ込むのは、サテラポリスくらいだ。自分と同じくらいの年の少年が、なせこんなに強いのだろう。

そんな少年を見ていたら、どこからともなくウイルスがミソラに襲い掛かった。

「きゃっ」

「油断するなよ」

少年はウイルスを一刀両断にした。

「・・・・え?」

ミソラは間の抜けた声を出してしまった。さっきまで少年は7メートルも離れている場所にいたのだ。そしたら一瞬で目の前まで移動したのだ。

「終わったな〜」

少年は汗を拭いながらそう言った。

「あ、あの・・・・」

「何？俺が誰か？」

「ち、ちがくて、その・・・・ありがとう」

「どうも」

少年は素っ気なく言った。

「まあ、アイドル活動と、遊撃隊としての仕事。あとスバルに思いを伝えるとこと、がんばって」

少年はミソラに言った。

「え？スバル君のこと知ってるの？」

「ああ、知ってるよ」

少年は答えた。ウィザードをハンターに戻し、ミソラに向き直る。

「じゃあな、また会うと思うけど」

少年はそういって、夜の道に消えていった。

「・・・私の変装見破られてたし、擦れ違うときもなんか言ってたし、なんなんだろうね」

ミソラは言った。

『なんか、ミソラに言いたげだったしね』

ハープも同感したように言った。

「また会うって、なんで分かるんだろう・・・」

ミソラと少年の出会いは、ミソラにとって多大の影響を与えるとは、今の時点では分からなかった。

いや、彼と関わる全ての人間に、多大な影響を与えるとは、ある１人の人物しか知らなかった。

裏話？　追われる少年　追う刑事

とある電脳の中

『・・・・終わったか』

銀色の剣士、シルバー・ウィンドは呟いた。

『ざっと、４０か？』

彼は４０もいるウイルスを１人でデリートしていたのだ。

『この姿久しぶりだしな、慣れないな』

彼はぶつぶつとひとり言を言っている。

刀を構えて、空気を斬る。

『やっぱ剣の腕前はあいつに劣るな』

溜め息をついて言った。どうやらショックらしい。

『くそ～、なんか悔しい』

そんな彼の近くに、またもやウイルスが出現する。

『はぁ～、今日は厄日か？』

そういって彼はまた刀を振るう。

同刻

「ここがベイサイドシティか」

カイはベイサイドシティに来ていた。

「さて、じゃあ行きますか」

カイは歩いていく。

『よお、カイ』

ゲイルがハンターから声をかける。

「なに、ゲイル」

『なにしに行くんだ?今日はいい風吹きそうじゃないぜ?』

「刀直しに行くんだよ」

カイは自分の縦長い布状の袋を見せる。

『銃刀法違反じゃね?』

「見つかったら逃げる」

カイは笑っていった。

『ハハ、もうつけられているけどな』

ゲイルは笑って言っているが、眼が笑っていない。

「サテラポリスか・・・・・」

ハンターを取り出して、鏡を出す。カイのハンターには、鏡ともう1つ特別な機能がついている。

「あれは・・・・・サテラポリスのエースってか」

カイは鏡をしまう。

『どうする？』

「あれ使うにしても人多いし、どっか丁度いい路地曲がる」

カイは冷静に状況を把握する。サテラポリスは1人。逃げられないわけじゃない。

『電波変換して追いかけられたらどうする？』

「あれ使う。無理にでも。そのほうが比較的安全にできるだろ」

カイは大通りを右に曲がる。大通りって言うくらいだから人も多い。

「くっ、アシッド、見失ってないな！」

『はい、シドウ』

「ったく、病み上がりの人間にこんな仕事やらせるなよ」

暁は毒づき、カイを追っていく。

「さすがサテラポリス、見失ってないな」

カイが感心したように言った。

『これくらいで見失ってちゃサテラポリス失格じゃね？』

「そう？俺大勢の中から人見つけんの苦手なんだけど」

『おまえが途中でギブアップするだけ』

ゲイルは突っ込んだ。

「ああ、そうだな・・・・・ん？」

カイの１０メートルくらい前に冴えなそうな少女がいる。

『どうした？一目惚れ？』

「あいつに言いたいことあるんだけど、丁度いい」

カイはその少女に擦れ違うように歩く。

「（そんなんじゃ思いなんか伝わんないぜ？）」

「え？」

少女は振り返った。

（言いたいこと言ったし、さっさと行こう）

カイは歩み去ろうとする。けれど、

「あ、あの・・・」

呼び止められた。追われてる身なのに。自分が話しかけなきゃ良かったのだが。

「・・・何？」

早く行かせて欲しい。けれど話しかけられたら無視するのもいやだ。

「あの、さっき私になんか言い――」

「キャ――――！」

突如悲鳴が聞こえた。。見ると、そこにはウイルスが出現しているではないか。

（めんど・・・）

カイは思った。ゲイルの言ったことはホントだった。

「ハープ、行こう！」

『ええ、ミソ――』

「あんた邪魔」

少女の前に割り込む。

「ちょっとあなた分かっているの?あの数は一般人じゃ無理よ!」

一般人ね。俺の実力知らないでよく言ってくれるよ。

「女に戦わせるってか?言っとくけどあんたみたいなひ弱そうな人間よりは強い自信あるよ?」

こんなひ弱そうな奴よりは強い自信はある。

「いいからどいて!あなたじゃ――――」

「アイドルだが遊撃隊だが知らねえが、けじめのついてない奴に言われたくないね」

少女は驚いている。けじめがついてないのをもしかして自覚がないのか?

「ゲイル、ウィザード　オン」

ハンターからゲイルを出す。

「ゲイル、2つに分断して」

俺は袋から刀を取り出す。

「な!・・・銃刀法違反よ!?」

「バレなきゃOK」

良い子は真似しないでね♪

そういって俺達は駆け出す。

『ダウンバースト』

ゲイルの技が中央にいるウイルスに当たった。

「アシッド今のは？」

『上空から圧縮した空気の塊を落とす技です。この威力では、航空機も墜落できます』

「じゃあ、あいつが――――」

『ですが、あのウィザードの技は刃というよりは弾丸です。まだ確証は持てません』

「そうか・・・・」

暁は、カイの戦いを静かに見ていた。

「遅いな～」

のろのろと動いているウイルスをどんどん斬っていく。

「遅い遅い遅い」

右、後ろ、左、右と、襲ってくるウイルスを切り伏せていく。

（あと2）

2体のウイルスを斬って、こちらのウイルスは片付いた。

見てみると、ゲイルも片付いている。

（じゃあ、これで行け――――）

「きゃっ」

少女が襲われていた。距離約7メートル。

ゲイルを見る。ゲイルも分かっているといわんばかりに、腕を動かす。

そしてカイは、一瞬で少女の目の前まで移動した。

「油断するなよ」

「・・・・え？」

俺はウイルスを一刀両断した。

「終わったな～」

汗を拭って俺は言った。

「あ、あの・・・・」

「何？俺が誰か？」

「ち、ちがくて、その・・・・ありがとう」

「どうも」

少女にお礼を言われた。まあ、彼女でも倒せたので素っ気なく言った。

「まあ、アイドル活動と、遊撃隊としての仕事。あとスバルに思いを伝えるとこと、がんばって」

「え？スバル君のこと知ってるの？」

「ああ、知ってるよ」

（あれ？あんま反応ない、もしかして俺の勘違い？）

まあそれはおいといてゲイルをハンターに戻す。

「じゃあな、また会うと思うけど」

絶対に近くに俺は少女と会う。それは運命であり、必然。

「アシッド、追うぞ！」

暁はカイを追いかける。カイは暗い路地に歩いていった。

「しつこいな」

『どうする？』

カイは微笑んで歩くだけ。

そこに、

「な！・・・」

暁は愕然とした。あの銀色の剣士が突如現れたではないか。カイは普通に歩いている。

「アシッド、あれを追うぞ！」

『分かっています！』

『ちっ、めんどうだ』

シルバー・ウィンドはそう言った。暁は、シルバー・ウィンドを追っていった。

「来たか・・・・」

老人はそう呟いた。

「久しぶり、じいさん」

カイは老人のいる店に入っていった。

「刀見てくんない？」

「いいだろう、見せてみなさい」

老人はカイの刀を受け取り、刀を念入りに見る。

「・・・・そろそろ、昔のように――――」

「戻らないよ、俺は」

老人の言葉をカイは遮った。

「あれはきみのせいじゃない」

「でもおれがやったことだ。それは変えられない」

暗いことなのか、カイの表情が曇っている。

「・・・・きみは、成長しないな」

「成長しきったんだよ、俺は」

老人は溜め息をついた。

「ほれ、刀は大丈夫だ。その刀はかなりの業物だからな、別にわざわざここに来なくてもよかろうに」

「まあ、こっちにも事情があってね」

カイは言わなかった。この老人は絶対に止める。

「じゃあな、また来るよ」

「ああ、いつでもきておくれ」

カイは店を出て行った。

「・・・俺の罪は消せないな」

カイは夜の道に消えていった

裏話？　金を手に入れろ

大変だ。なにかって？それは

「金がない～」

そう、俺

カイ

は金が尽きた。おこづかいではない、生活費がだ。

今は訳があって別居している。もう一緒に暮らすこともないが・・・・

とにかくお金がない。

「どうしようゲイル～、金がない」

『・・・・・それで？』

「それでじゃないだろ、どうしよう～」

金がない＝生活していけないというわけだ。ヤバイに決まっている。

『また俺に行って来いと？』

どこにかは決まっている。ウイルスのところにだ。

『・・・・・はぁ～』

ゲイルは溜め息をついて俺達が住んでいるアパートから出て行った。

「よし、じゃあどうするか・・・・・」

一応言っておくが、とある理由でお金がない場合、国家から了承を得ておけば、ウイルスを退治してゼニーをもらえる。まあ、あまり貰えないが。仕事がなくてもウイルスバスティングで暮らすことも可能である。

ちなみに税金だ。ようするに孤児達にも生きる権利を与えようとかそんな感じだ。

まあそんな説明はどうでもいい。ゲイルがウイルスを狩ってる間、俺はどうすべきかだ。

「よし、じゃああそこ行くか」

俺はギリギリここから往復できる分の電車賃を持って、駅に向かった。

ということでまたもベイサイドシティ。今回は刀ではない、食料だ。

ウェーブライナーから降り、俺は改札を出る。

今回は追っ手はいないらしい。そこまで俺に構っているほどサテラポリスも暇じゃないだろうが。

「ラッキ～♪じゃあ行くか」

俺は走った。といっても３０メートルくらいで歩きに変わったけれど。

今回の目的地も同じ、じいさんの所だ。

『ってかカイって宿題終わってんのか？』

ゲイルはウイルスを爪で引き裂きながら言った。

『早くやっちまえよ～、あとでめんどくさいことになるから』

数はおよそ５０、倒したのをあわせれば２００。２０００ゼニーくらいだろうか。

『ったく、オペレーターがあんなんだからこっちも大変なんだよ～』

ウイルスに愚痴をいいながら爪で引き裂く。ストレス発散のつもりでやっているのだろうか。

『俺も宿題かったるいなー』

棒読みでそう言った。

『・・・・休養長すぎるから体力鈍ってんだよ、めんどくせえ』

苛立った声だ。言葉を発するごとに力が強くなっていく。

『・・・・俺達の課題は、そう簡単に終わんないな』

あいつ以外には言っていない、届かなくても、ただゲイルは言う。

『俺をこき使って楽しいのか?』

苛立ちが頂点に達している。

『・・・・・殺させて、何が楽しい?』

『――ここにいるウイルス、血祭りに上げてやらぁ』

こうして、殺戮が始まった――

「また、おまえか・・・・・」

「悪かったな、じいさん」

そう、俺はまたこの鍛冶屋、というか武道具店に来た。

「・・・今回はなんじゃ？」

「食いもんくれ」

率直に言う。そのほうが伝わりやすい。

「また金を使い果たしたのか・・・・・」

溜め息混じりに言われた。金は減る物だと思うが・・・・

「今持ってくる」

じいさんは店の奥、つまり家となる場所に入っていった。

「ほれ、これでどうじゃ」

ダンボールという今時古いものに包まれた食べ物を見る。

「おお、うまそうじゃん」

色とりどりの野菜、新鮮な肉、魚。

「ここってそんなに儲かってるの？」

今時剣道とかは流行っていない。そんなに儲かっているとは思えない。

「・・・・まあな、他の仕事もしているしな」

『他の仕事』、俺には関係のない話なので首は突っ込まない。

「じゃあ、ありがたく貰っておくぜ」

「・・・一緒に暮らさないか？」

突然、いや2回目か。

「・・・俺にはもう家族は要らない、じいさんは余生を楽しく過ごしてくれ」

そう、必要ない。あっただけで、足枷だ。

「そうか・・・・ならおまえは友達を大事にしなさい」

その言葉は俺の胸を抉る。友達、スバル達の顔が浮かぶ。

「・・・・ああ」

俺は嘘を言った。助言はしている、けれど大事にしているかというとそれは違う。

「おまえは、もう少し自分を見たほうがいい」

じいさんはそう言った。

「おまえは、周りの眼ばかりを気にするクセがある」

たしかにそうだ、俺は他人ばかり気にする。

「だから弱い」

再度俺の胸は抉られた。

「だからおまえには奥義は継承させん」

キッパリじいさんは言った。

「・・・・・分かった」

「その答えも駄目じゃな」

じいさんは悲しい目をした。そんなに哀れみの眼で見られるほど俺は可哀想なのか。

「・・・・じゃあな、じいさん」

「ああ、さよならだ」

俺は店を出た。

やはりあのじいさんとは気が合わないらしい。『奥義』は継承させて欲しかったが、もう時間もないことだ。

「さっさと俺らも終わらせるか」

俺の全てとゲイルの全て、それを賭けた最大のものを――――

外伝番外編　ある剣士×2

ここはどこかの電脳、そこに一人の剣士がいた。彼の名をフランベルジェ。水色の服のようなものを着て、腰には自分と同じ名前の剣を差している。彼は言わずと知れた剣豪でもあった。

けれど彼は満足しなかった。そう、彼は世界で最強になろうと思ったのだ。

けれどそれは無駄に終わった。彼は今までに二人の強豪と戦い敗北したのだ。そう、それも圧倒的に。剣では右に出るものはいなくても、戦いではまだまだだということだ。

だから、片っ端から戦う意欲がある奴と戦っていた。けれど、それは彼に更なる高みへは上らせてくれなかった。彼と彼が負けた者との差の間がなかったのだ。

（結局、我は強くなれぬのか？）

強さ、それには限界がある。彼らにもそれは当てはまる。フランベルジェはその限界に達してしまったのだと思った。

このままでいいのか？　このまま負けっぱなしでいいのか？　それだけがフランベルジェの頭の中でぐるぐると回る。

けれど、そこにある剣士が現れた。体全体の色は鈍く光る銀色、腰に差すのは白銀の刀。それは今まであったことのない者。

『ん？　なんでウイルスがいない？』

その剣士も、戦う者を探していたのだろう。あたりに普通ならいるはずのウイルスを探す。けれどもちろんいない。なぜなら自分が倒してしまったのだから。

自分はウイルス以外は倒していない。というか逆にそれ以外のものは勝負をしようとしてこなかった。そんな奴を倒す意味も無いのでこの電脳からどくようにとは言って追い出しただけだ。

『お～い、そこの水色』

色からして自分のことなのだろう。声の方向に振り返る。

『ウイルス知らないか?』

『……我が全て葬った』

『おいおいそれは駄目だよ、一応ここ俺の庭だし』

そういう彼、ウィンドは少し苛立ちを露にしている。

『なら、我と戦えばいいだろ?』

『……おまえ、それ本気で言ってるの?』

たしかウィンドは『ガイア』と呼ばれる組織の一員だったはずだ。『ガイア』と呼ばれる組織は知名度こそ低いがそこそこの強さだったはず。まさにフランベルジェにとって絶好の標的。

『我と戦え』

『命令形になってるし……ま――――』

『後悔すんなよ？』

それが開幕の合図だった。二人は空中でぶつかった。各々の得物を片手に突っ込み、空中で幾度かの斬撃を放つ。

『インパクトウェーブ！』

『バーストウィンド！』

空中で水の刃と風の刃がぶつかり、はじける。その極わずかの暇にお互いは突っ込む。ウィンドが攻撃をするとそれに反撃するかのようにフランベルジェも攻撃をする。

一進一退。それだけがこの状況を表わしていた。

『ふっ、意外にやるな』

『黙れ、おまえに誉められても嬉しくないんだよ』

そしてまた激突をする。まるで、磁石であるかのように。まるで、戦わなければいけないように。

『アングリーウェーブ！』

『エアバレット！』

怒涛の波のような衝撃波と、風のような無数の弾丸が衝突する。全てはどちらとも破壊することは出来ず、二人は幾度か攻撃を喰らう。けれどそれでも二人はたっている。

『くそが……無駄に気張るんじゃねえ！』

『そっちこそ、さっさと葬り去られれば良いものを！』

お互いのプライド、はたまたただ負けず嫌いなだけなのか。互いに得物を握り締める。

『なぜおまえはそこまで戦うのだ？　なぜにそこまで――――』

『俺はこれからまたやってくる戦いに備える、それだけだ！』

二人の体にあるのは裂傷。二人が手に持つは刀。二人が思うのは、勝つと言う思いだけ。

コイツだけには負けないという思い。

『『うおおおおおおおおおおおおおおっ！』』

ただ、二人の雄たけびだけが、電脳に響いた。

爆風と激流が、全てをなぎ払った。

『おやおや、気付きましたか？』

ここは電脳……だったはずだ。たしか最後の攻撃をお互いはなった瞬間意識が終わった。死んでいないので負けたわけではないが、勝ったわけでもない。引き分けか。

『んだそのニタニタ顔は、気持ち悪いな』

『いや、あなたがそこまでボロボロになるのだからさぞかし強かったのでしょうね。フランベルジェという輩は』

さすがにここまで情報が行き渡っていたのは心外だが、まあ驚くことでもない。『ガイア』という組織の中ならそのくらいは五分で行き渡る。

『では、意識も戻ったことですし帰りましょう。リカバリーは使いましたから起きれますね？』

『……ああ』

少々だるいが起きることにした。

『では、行きましょう』

そういって二人は電脳から姿を消した。

『面白い、我をここまで痛めつけるとは！』

フランベルジェはどこかの電脳でそう呟いた。彼は笑っていた。ここまで自分と似て、さらに強き物に出会えたことに。

『我は何度でも戦う、おまえを倒すためなら！』

その先に待つ、最強という称号。それだけが、欲しかった。

けれどそんなのはどうでもよくなった。ただあの剣士に勝つ。それだけが、欲しい。

『何年経っても、我は、おまえを――――！」

そしてフランベルジェは、また戦いの螺旋に戻っていく。

誰も、止められない

外伝番外編　敗北から学ぶ者

なぜだろう。

自分は確かに負けたはずだ。

けれど今現在僕は生きている。

何故だろう。

僕が倒したわけでもないのに

世界は僕が倒したという。

みんなもそういう。

泣きじゃくった顔でそんなに嬉しがられても

僕は何もしていない。

僕は、無力に敗北しただけだ。
ただ、銀色の閃光に
助けられただけだ

『スバル、考えても仕方が無いぞ～』

そういうスターキャリアーからのウォーロックの声も元気が無い。
当然だ。何故か自分達はラ・ムーに負けて気絶していたのに、生きていた。

そして、周りからは誉められた。それが、妙に悲しかった。自分ではないのに勝手に自分だと言われるこれが、妙に自分の胸を抉った。

『結果的に世界は救われたんだ、それでいいじゃねえか』

「……よくないよ、だったら僕のほかに世界を救ってくれた人が救ってくれたってみんなに言わなきゃ」

ふてくされてベッドに寝ても、心は休まらない。

「僕達、なんでみんなに誉められてるんだろう」

『……』

自分達は世界を救ったヒーローではない。自分達は惨めな負け犬だった。

かすかに見えたあの銀色、あれは誰だったのだろうか？　けれど新学期が始まっても詳細はつかめなかった。

「僕達、どうすればいいんだろう」

今現在、事件などは無い。無いかもしれないが、ある可能性も否定できない。

次は、本当に大切な人を救えるのだろうか？

「はぁー……」

でてくるのは溜め息しかない。自分達は、ラッキーでしか生きていない。次はラッキーがあるとは限らない。

『どうするもこうするも、とにかく宿題終わらせたらどうだ？』

最もらしいことといわれ少しドキリとした。けれど、それも今考えていることに霞んでいく。

「……」

自分は何をすればいいんだろう、自分はこれからどう生きていけばいいんだろう？

「今を頑張って生きよう、かな？」

ふいにそんなことばが口から出た。

そうだ、それしかない。考えていても、仕方が無い。ただ、頑張って生きていけば、何か見えてくるはずだ。

「よし！　宿題頑張ろう！」

『うわっ！　いきなりどうしたスバル！？』

とにかく前向きに生きていこう。それが、いつか実を結ぶと思うから。いや、結ばせるのだから。

もし、あの銀色の閃光に会ったら、面と向かってこう言おう。自分は君に救われた命で、頑張って生きている、と。

そして、この少年は数ヵ月後にメテオGと呼ばれる隕石を止めることとなる。

作者との談話？

ということで、今回は作者と登場人物の質問と談話コーナーということです。では、記念すべき第一回のゲストは

「・・・・なんで俺？」

甲斐　疾風くんです♪

「え？普通、スバルじゃね？そして＋ウォーロックかあのミソラじゃね？」

・・・・なに？君もヘビードーンくらいた――――

「さ～、作者様、なにから話し合いましょうか？」

顔色変えずに敬語に変えるとは、すごいね君。さすが僕のお気に入りキャラだ。

「へ～、そうなんだ。あんがと」

敬語やめるとはね。しかも危機が去った瞬間に。

まあいいや。まず君には疑いがあるけど、どう思う？

「ホントやめてほしいわ。なに、シルバー・ウィンドって？どこ出身？」

ごめんね～。疑いかけちゃって。出身地は僕も考えてないや♪

「そういう細かい設定決めたほうがいいぜ？」

忠告どおりこれからがんばっていくよ～。

「あとさ、アンタやたらとハイペースとか、連載早いとか言われがちだぜ？そのうちぶっ倒れるんじゃねえか？」

もう倒れてます♪

「は？なに連載してんの！」

冗談だよ、本気にすんなよ。寝不足なだけだよ。

「このヤロ～！騙したな！ってか寝不足って駄目じゃん！」

冬休み寝るよ。成績悪くなかったら。

さて次の質問　カレー３０秒ってホント？

「知らんわ。数えてないもん」

まあたしかに周りが言ってるだけだもんね。

「おれは怪物じゃね～し」

モンスターなんだよな。

「そうそう・・・・ってちがーう！英語にしただけじゃんか！」

英語にしたらだいぶ変わるぜ？

「・・・・そういうもん？」

では次の質問　自分のモデルの人物についてどう思う？

「忘れ物多くて、早食いってか？現実でいたら単なる馬鹿だね」

・・・・・・・・そう。

「え？今の間なに？」

じゃあ次の質問

「無視するなー！」

ゲイルとはどう出会ったの？

「ん？なんか彷徨ってたからウィザードにした」

テキトーだね。

「まあなんかの縁ってやつ？」

ちなみに君のモデルは君みたいに好奇心旺盛じゃないよ

「へ～、じゃあなんでそういう設定にしたんだ？」

テキトー。

「アンタもじゃねえか！」

じゃ、次の質問　身長は？

「１６２センチ、体重は４５キロ　血液型　ＡＢ型」

痩せてるね。

「脂肪率エラー」

問題だね。エラーって

「好きな食べ物　数え切れないほど」

大雑把すぎだね。モデルに似てるよ。

「嫌いなのは　焼き魚」

刺身は苦手な人いるけど、なんで？

「人間としての本能がそういってるから」

まあスルーで　好きなこと

「ゲーム、モン〇ターハ〇ターとか」

俺も好きだよ、

「流星の小説なのにこんなこと言っていいの？」

いいんじゃん？

「あとパ〇ポンとかも」

あれ3出て欲しいね。

「全くだ。同感するよ」

まあ結構ズレたから　また直すよ。

スバルについてどう思う？

「まあ、大変だと思うぜ？あの年で世界任されてんだから」

君にも任すさ

「・・・・Ｗｈｙ？」

僕のお気に入りだから♪

「巻き込むな～！」

では次、ミソラのことをどう思う？

「・・・・なんで俺？スバ――――」

ヘビードーン落とすよ？

「いやいや、あの子かわいいですよね～。おれハートウェーブ好きだな～」

へぇ～、そう思ってたんだ。

「ってか一般人からしたら充分かわいいと思うよ？」

まあそういうことで会社も作ってんだろうしね。伊達にヒロインじゃないしね。

では最後に一言

「流星４を出してくれ～！」

ってな感じで今回は終わりで～ス♪

作者との談話？

さあ、作者があまりにも暇なので、第二段を作りました～♪では今回のゲストは

「ぼ、ぼく？」

スバルで～す♪

「てかなんで主人公さしおいて脇役が第一弾なんですか？」

え？君はお気に入り2位だから

「え～！主人公なのに！」

1位カイ　2位スバル、ミソラ　3位ウォーロックだよ。

「あの、なんでウォーロックはここにいないんですか？」

邪魔だから。

「うわ～、性格ザックリしてますね～」

よく言われるよ（笑）

じゃあ質問ね　シルバー・ウィンドについて、裏の主人公って設定だけど、どう思う？

「どうって、敵か味方か分からないし、正直なんとも・・・」

まあ、そうだね。物語が進めば分かって行くよ。

「裏って言うからには、暗躍するんですか？」

あとに分かるよ。

「え～、教えて欲しいな～」

読者の皆様も思ってるよ。多分ね。

「多分なんですか？」

だってさ、お気に入り登録も少ないし・・・・・・・・

「ああ～たしかに」

まあいいや、次、カイ　ハヤテについてどう思う？

「ハヤテ君か～、正直早く食べるのもどうかと・・・・」

そんな否定するなよ、かわいそうだろ？モデルが

「まあ、たしかにそうですね」

カイ君は君の友達だけど、それについてどう思う？

「とくにいい友達だと思いますけど・・・・あ、そういえばブラザーバンド結んでない！」

カイ君のことテキトーに思ってるんだ・・・・

「そ、そんなわけじゃ・・・・・・」

かわいそうに

「う・・・・・・」

まあいじめるのはよしておくよ。じゃあ次　ウォーロックについて

「う～ん・・・・・・」

悩むの？

「だって、朝起こしてくれないし・・・・」

君が起きないだけだろ？

「でも、もっと起こし方をかんがえてくれれば――――」

それを言う前にさっさと起きろよ

「・・・・・・・」

他にはどう思う？

「いいやつだとは思うけど・・・・・好戦的なのが・・・・」

まあたしかに嫌だね

「そこさえ直してくれればサイコーなんだけどな～」

何事にも汚点はあるものさ

「そうですよね」

じゃあ次　ミソラちゃんについて

「え？」

なんで？驚くこと？お気に入りだから聞いてるだけだけど

「・・・・いいブラザーだと思っています」

そう、他に思うことは？

「僕と同い年で歌手になれるなんてすごいな～って思います」

まあたしかにね。

「でもデザートには少し大食いなのが・・・・・」

まあしょうがないんじゃない？君といられることがそれだけ楽しいんだから

「だったらいいんだけど」

きっとそうだよ

「質問なんですが、あなたはミソラちゃんのことどう思いますか？」

僕？う～ん、活発で明るい、そんな子が近くにいてくれれば嬉しいね。だからお気に入りに選んだし。

「もしかして、ミソラちゃんのファン？」

そうだね、シューティングスターは好きだよ。

「そうなんですか～」

まあ君も、ミソラちゃんのことを見守って欲しいな

「分かりました」

うん、がんばって～。

『作者～！！』

「うわっ、ウォーロック！」

どうした？

『どうしたじゃねえ！てめえ、スバルに――――』

ヘビードーン、いけ

『ぎゃあああああ！！！！！』

「ウォーロック！」

てことで第二段終わりで～ス。

作者との談話？

ではでは、作者が暇なんで、第三段で～す。では、今回のゲストは

「響ミソラで～す。よろしくお願いします」

ミソラちゃんで～す♪やっぱり前の2人とは違ってこういうの慣れていますね～

「いえいえ、とんでもないですよ」

いやいやいや、前の2人なんて「なんで俺なの？」って感じなのに対して、ちゃんとあいさつできるんだっもん。差を感じるね。

「う～ん、たしかにそうですね。まあ、しょうがないんじゃないですか？」

そう言って貰えるとスバル君達も嬉しいはずだよ。

では質問　（スバルの世界で）クリスマスはどのように過ごしたいですか？

「やっぱりスバル君達とパーティーでもしたいですね。でも仕事あるかも・・・・・」

アイドルって大変だね。

「でも、やりがいがあります！」

すごいね、やりがいを感じられるなんて。

「歌が好きですし」

なにかにやりがいを感じられるって、やっぱり素敵だね。

じゃあ、次の質問　もし、休日がもらえたら？

「買い物にも行きたいし、お菓子も食べたいな～。でも太るし・・・・」

カイ君は太らない設定だよ～

「私もそうしてください！」

う～ん、でもモデルがそうだからなんだけどな・・・・・

「お願いします！」

まあ、そうしようかな？

「やったあー！」

（元々その設定だけどね・・・・・・・）

で、１人で行きたいの？

「う～ん、スバル君と行きたいな～」

なんで?女心分かるの?僕分かんないけど

「そういうんじゃなくて、一緒にいれば楽しいんですよ」

そんなもん?

「はい!」

へ~、意外だな~。あの子鈍感だから

「はい、それが唯一の欠点ていうか・・・・」

考えとかも分かってくれないよね

「そうなんですよね~、でもたまにカッコイイ事もいうけど」

まあね、あれが素直にでるからすごい。

「でも人の気持ちも分かって欲しい」

いつか伝わるよ、きっと

「はい・・・・て作者さん!?」

ハハハ、顔真っ赤♪

じゃあ次の質問　アイドルで1番困ることは

「やっぱり休みがないことかな~」

休んじゃえば?夏休みくらい

「それは駄目ですよ～、ファンのみなさんが期待してくれてるんですから」

でも君自身はどうなの?

「え?・・・・休んで遊びたいのもあります・・・・・でも歌いたい」

僕はね、無理することもないと思うよ?だって子供のうちしか遊べないもの。

「う～ん・・・・・・・」

歌うことはどこでもできると思うよ?友達との絆を深めるのにも必要なことだし。

「・・・・考えてみます」

偉いよ、答えを焦らず出そうとするところ

では次の質問　僕の好きなシューティングスターのことについてあれはどんな思いで作ったの?

「あれは、私が孤独だったときの再現ですね」

ああ、そしてスバルが助けてくれたと

「はい、私の闇を照らしてくれました」

それだけ君にとって彼は大きな存在なんだ。

「・・・・はい」

まあ、がんばってね？これからの戦いでも、彼は君を頼りにしてるから

「分かりました、今回はどうもありがとうございました」

ではでは、今回はなんか難しい議題もありましたが、終わりで～ス♪

作者との談話？

では、あんまり作者が本編を更新したくないので、第４段で～ス。
では、こんかいのゲストは

『や～っと俺の番か』

ウォーロックです・・・・

『な、なんでそんなやる気ないんだ？』

おまえの聞いても仕方なくね？

『俺はそんな重要じゃないのか？』

うん、あんまね。

『でもよ、俺のことお気に入りでトップ３に入ってるじゃねえか！』

カイ＞＞スバル、ミソラ＞＞＞＞＞超えられない壁＞＞＞＞＞＞＞＞ウォーロック

『そんなに差があるのかよ！』

厚いね、壁。

『ってかなんでカイが一番なんだ？』

カイはね、一応オリキャラなんだよ。い・ち・お・う・ね。

『そこなんで強調するんだ？』

性格がモデルとだいぶ違うんだよ。あと俺刀好きだしね。

『そこか！』

そこだ、ワン●ースだったら俺ゾ●だもん。

『読者が分かりにくそうだから伏字やめとけ！』

心の目で見てくれれば分かるさ。多分ね。

『しかも多分かよ！』

俺は絶対という言葉はないと思うのさ。９９．９９％ならあると思うけど。

『なんだそりゃ？』

じゃあ質問に移ろうか、一応ゲストだし。

『一応かよ！』

じゃあまずは、シルバー・ウィンドについて

『・・・周波数がなくて、あの実力、恐ろしいぜ・・・・』

いや、周波数はあるよ？

『なんで人間のおまえが分かるんだよ！』

作者だから

『・・・ネタバレじゃね？』

理由が分からないだろ？そこを考えて欲しいんだよ。まあ、俺の個人的な偏見だけどね。

『じゃあ駄目じゃん！』

気にするな♪まあ君達にもいずれ分かるときがあるさ。

『ああ、期待してるぜ』

期待されても困るけどね

じゃあ次、カイについて

『あいつがシルバー・ウィンドじゃねえのか？』

補足にも書いたとおり、シルバー・ウィンドがＷＡＸＡにいたとき、カイはずっと学校にいたよ。

『じゃあ、ちげえのか？』

作者に聞くな。自分のその脳筋でがんばって考えろ。

『脳筋じゃねえ！』

分かった、分かった。

あと他になんかある？

『なんか心理面をすごい理解してるって、感想に書かれてたな』

俺自身あまりそういう自覚ないけどね、ぶっちゃけ。

『まあ、俺は好かねえけどよ』

なんで？

『あいつ、なんか俺達に距離置いてるっていうか・・・・』

まあ、君達とは考えがだいぶ違うしね。

『・・・過去になにかあったのか？』

さあ？本編でそれは語りますよ。

では次、ギンガについて

『転校してきたんだから、なにかしら俺達と関わりあるんだよな？』

もうあるよ。

『うそ！』

まあ、間接的にね。メテオＧより前でね。

『いいほう？悪いほうか？』

本編でそちらも語りますよ。

『スバルはあいつ見て震えだしたらしいが・・・・』

あれはギンガのせいじゃないよ？

『そうなのか、てっきりギンガかと思ったけどな』

じゃあ誰なのか、それを考えて欲しいね。

『質問だけどよ、４８話でギンガがカイに「宿題」って言ったが、なにか意味があるのか？』

おお、君にしてはいいとこ突いてるね～。それも俺の個人的な偏見だけど。俺と同じ考えのいるんじゃないのかな～。まあそちらも自分の想像力をふくらまして考えてもらいたい。

では、最後、ミソラとスバルの仲！

『来たか！いいんじゃねえのか？仲がよくて』

まあね～、ルナとはまた別格だしね。

『ハハ、違いねえ』

まあ、ルナにはルナの相手がいるはずですしね・・・・はい。

『ってかもう少し恋愛の場面増やしたほうが良くないか？』

ミソラの思い次第だしね。ミソラが今はいいって思ってるんだから、いいんだよ。きっと。

『つまらねえな～、からかい――――』

なにいってるんだこの野郎。いけヘビー

『ぎゃあああああああ！』

では、また次回会いましょう♪

作者との談話？

では、第5段で～ス　こんかいのゲストは

「サテラポリス所属、暁シドウです」

シドウさん、来ました。今日はよろしくお願いします。

まあ、つい最近退院なさったと聞いたのですが、お体のほう大丈夫ですか？

「いや～、大丈夫になったんですよ～」

へ～、どういうことをして？

「うまい棒食べて」

それはホントですか？

「ホントだよ、俺は嘘はつかない！」

へ～、そうなんですか。ああ、それとクインティアさんから暁さんのことについて手紙が届いております

「え、ティアから！？」

え～っと、「シドウは、うまい棒の凄さをみんなに知ってもらうとか訳のわからないとことを言って、嘘を言うことがあります。気をつけてください」だそうです。

「ぐ・・・・・」

思いっきり嘘っぱちじゃないですか。

「で、でもそれが嘘だとは証明されてない！」

それが本当とも証明されていませんが。

「ぐぐ・・・やるな作者」

まあ、本題に移りましょう。

では最初にシルバー・ウィンドについてです。

「あれは、異端だな」

なんでですか？

「あの実力、３人でも敵わなかったゲイボルグを圧倒しているからな」

まあたしかに強いですね。

「仲間なら心強いが・・・まだ不明な点が多くて」

サテラポリスも手を焼いていると。

「ああ、敵だと恐ろしいな、あれは」

うまい棒食べながら言わないで下さい。

「え、飲食駄目なの？」

僕だけＯＫです。

「なんで？」

作者の権限ってやつです。僕この小説の神的存在なんで。

「せ、せこいな～」

では次、カイ　ハヤテについて

「あれがシルバー・ウィンドだと睨んでいるんだが、あの子を追っていたらシルバー・ウィンドが現れたんだよ」

カイ君はいたんですよね？

「うん、いたんだよ。ドッペルゲンガーでもないかぎりね」

じゃあ疑いが晴れたと思っていいのですか？

「まだ分からないな。あの子の行動を探って見なきゃ」

なるほど～。

「でもあの子、刀持ってたからな、そのうち補導されると思うよ？」

大変ですね～。でもあの子、免許持ってますから。

「え？取れんの？」

２２ＸＸ年は、ある程度法律が緩くなってますから。

「知らなかった・・・」

警察なんだから知っておいてください。

「話し変わるけど、あの子のウィザード強いね」

ゲイルですか？まあ竜ですから

「そこ？」

そこです。少なからずそこです。

「ふ～ん、そうなんだ」

では次、スバルについて

「あいつは凄いよ。この世界のヒーローだし」

まあそうですね。伊達に主人公じゃありませんし。

「まあ、友達とも仲がよくていいやつじゃん？」

まあ照れ性ですけどね。

「そうなんだよな～、そこが欠点て言うか」

まあ人間そんなもんでしょう

では次、ミソラについて

「かわいいよな～、あの子」

ヒロインですから。

「あの子もスバル支えて偉いよ」

そうですね～。

では次、スバルとミソラについて

「・・・作者、それを聞きたくてスバルとミソラの部分を短くしたのか？」

さあ？どうでしょう

「え～、いいコンビじゃないの？」

そうでね～。

「で、いつあれなの？」

この一連の事件が終わったらだそうです。

「おっしゃ！さっさと終わらせてやるか！」

がんばってください！2人のためにも！

「ああ、任せておけ！」

じゃあ今回は――――

「え？俺のは聞かないの？」

なにを？

「察してよ！」

分かりませんね。いいたいことがあれば言ってもいいですよ

「え～、近日中にいい報告をしたいと思います」

では、次回をお楽しみに～

作者との談話？

さあさあ、では談話第６段で～ス♪では今回のゲストは

あれ？いない？

マジで？じゃあどうすんの？

おおスタッフ（？）からメッセージが。

なになに？たまには自分のことを喋りやがれ。ｂｙカイ

Ｗｈｙ？なんで？俺のこと喋って誰か聞いてくれるの？ってかカイってなんだよカイって。ふざけんなよあのクソ野朗。

前置き長くなりましたが、僕の情報を

個人情報　トップシークレット！

部活に入っていマ～ス♪

勉強　全国的に見れば　中の下か下の上　はたまた下の中

運動　中の下、か下の上　はたまた下の中

好きなゲーム　アクション系　モン○ン　パタ○ン　ロックマン系（流星、エグゼ、ゼロ）　イナズマイレ○ン。

好きな漫画　家庭○師ヒッ○マンＲＥＢＯ○Ｎ！　鋼の錬金○師　ツバサク○ニカル　ｘｘｘＨＯＬＩＣなど

好きな小説　推理小説　パス○ードシリーズ　夢水清○朗シリーズ　ダレンシ○ン

欲しい物　金　視力　１日２６時間　カリスマ性（笑）

願い　寿命で天に逝く。

くらいかな？

え？これだけ？やべなにか考えなきゃ

え～っと・・・・・・・・・

流星のロックマンに出会った経緯

動画サイトで載っていたからです。ちなみに2、3しか持っていません。1は５００円くらいで買えますが、3やった僕としては、電波変換する場所が限られているので、あまりやりたくないです。

流星3での好きなコンボ

シリウスX↓サンダーオブアース

これをやったら爽快です。ｗｉｆｉでやると相手が可哀想になってきます。これにムーテクノロジーをやるといいらしいのですが、あ

まり3枚揃わないので僕は入れていません。ちなみに1と2しかサンダーオブアースは持っていません。

オーラ↓ホーリーパネル

これは凄いですね。クリムゾンドラゴンの時大活躍しました。2でもブライの時によく使いましたね。でもすぐに剥がされた・・・・

好きなカード

エドギリソード3

　これは5枚入れています。大好きです。とにかくそろったら使います。でもあまり3枚揃わない・・・・・Xでない・・・・・・ブライZZと戦えない・・・・・

ソードファイター

　これも大好きです。全部ヒットすると爽快ですし。でもX持ってない・・・・・

2でのすきなレジェンドカード

ペガサスマジックSP→ドラゴンスカイSP→レオキングダムSP

がんばって作りました。威力だけは強いです。けど相手が1番後ろじゃなきゃほぼ使えません。

アイスステージ→ネバーレイン3→ホワイトメテオをリピートする。

これはアポロンのとき神でしたね。アポロン瀕死に追い込めます。そろえるのめんどくさかったけど・・・

2での好きなカード

ペガサスマジックGX　ドラゴンスカイGX　レオキングダムGX

これはもう最高です！どれも属性が有利だったらありえない威力叩き出しますし。ジェミニなんてドラゴンGXつかえば終わりですしね（笑）ウェーブコマンドカードでやりました。

ボルティックアイ3

これを3枚やって敵を嵌めました。イエティがかわいそう（笑）

ジェミニサンダー

これでイエティとブラキオをボコボコにしました。

ジェミニスパークＳＰ

これも使い勝手が良くて好きでした。ブレイク性能とマヒがあるのが好きでしたね。

ハープノートＳＰとノーマル＋５０

強すぎます。けれど次のほうが強いです。マヒがこっちはありますけどね。

マッドバルカン３とノーマル＋５０

ギガ並みの威力を出します。カウンターを取れるのも強みです。ブライ戦のときは、バルカンを単体でつかってカウンターを狙いました。適当に真ん中で打てばとれます。

まあ以上です、案外多かったですね。

では小説の話を

野球編が終われば次は本編に入ります。次はちょっとシルバー・ウィンドについてみなさんに悩んでもらいます。あとスバルとミソラの擦れ違い？もやります。

おもいっきりネタバレですがね。

次章からは重要になるんで。

３つの計画。そして黒ローブの正体。ガイア。ガイアとウィンド。エグゼＰＧＭ。復讐。２００年前

これが次章からのキーワードと思ってください。黒ローブはまだ活躍してませんが。

ではカイについて

モデル　体格的な部分は僕の小六のときにしました。流星って身長みんな低いので高い人がいいかな、とおもい設定しました。性格は、スバル達とは明らかに違うキャラにしたいなと思ってこんな性格にしました。

ギンガ

　モデルいません。ただ、こんなやつがいたら・・・・・と思い設定しました。

シルバー・ウィンド

　これは、モン○ンのシルバーソルシリーズの防具と考えて結構です。ちなみに1番僕が好きな装備です。眼はリオソウルUシリーズみたいな眼です。赤い部分はバイザーってことで。武器は白銀の日本刀。これはオリジナルです。

　こんなこと書いていいのかな？

ガイア

　赤い魔術師がハイドとかぶりましたが、そこ以外はほぼオリジナルです。モデルいません。

黒ローブ

モデルいません。まあ、どんな物語でもいそうな人・・・・かな？

以上で～ス。

あと４章で一応一区切りです。けど要望などがあれば続編も考えています！てかもう構想も考えていますがね（笑）

では、次回もご期待を！次はまじめに書くので！

作者との談話？

『さあさあ、作者が暇なので第7段！　さあ、今回のゲストは？』

「暇だから俺を呼んだのか！？」

『いつも不機嫌、ジャ～ック君です！』

「だれがいつも不機嫌か！」

『さあさあ、今回は何で君を呼んだか教えましょう』

「ん？　なんかあるのか？」

『それはね』

『暇そうだから』

「おまえと一緒にすんな～！」

『え～、人間は同じ生き物だよ？　まあ、君とは違って僕は健全な毎日を送っていますから』

「俺も健全な毎日送ってるわ！」

『へ～、意外。そういえばさあ、君って毎日ご飯どうしてんの？』

「ねえちゃんが作ってくれてるよ。　結構美味いぜ」

『シスコンが』

「黙れ！」

『黙れ＝認めたくない＝事実と捉えていいのかな？』

「なわけあるか！」

『じゃあ質問、なんで最初にそんなわけないっていわなかった？』

「そ、それは……」

『悲しいな、否定できないなんて。可哀想で涙が……』

「嘘泣きだろ！」

『心の中では泣いてると思うよ？　知らないけど。』

「知らないのかよ！」

『ところでさ、ゲームやんない？』

「ゲーム？」

『いまうちのクラスで流行っててさ。結構これが面白いんだわ～』

「どんなの？」

『まず１５本のペン（なんでもいい）を用意します。』

「ほうほう」

『それでな、それを左からか右からか、３本と５本と７本に分ける。分けるといっても縦にそろえる』

「それでどうすんだ？」

ここでルールの説明。

２人でペンを取り合うゲーム

勝敗決定

相手に最後にペンを取らせる。

・1グループ内なら、何本でもとってもいい。

例　3本　5本　7本　→　5本　7本　など。

けれど、1グループだけ。2グループ以上は駄目。

例　3本　5本　7本　→　7本など

「簡単だな。で、とっていって最後に相手にペンを取らせたほうが勝ちと」

『そうそう。じゃ、やってみようか。』

「おう、先攻俺な」

3本　5本　7本　→　3本　3本　7本

『馬鹿だな』

3本　3本　7本　↓　3本　3本

「う〜ん……」

3本　3本　↓　3本

『勝ちだな』

3本　↓　1本

「うわあああああああ！」

1本　↓　0本

『俺の勝ち〜♪』

「なんで負けた！？」

『最初に真ん中2本とったら負けだよ。その時点でほぼ俺の勝ち決定。ミスんなきゃ俺の勝ち』

「ようするに頭脳戦てわけか・・・・・」

『そうそう、簡単なね。もう1回やる？』

「おう！次おまえ先攻」

3本　5本　7本 → 3本　5本　6本

「ちまちま取りやがって！」

3本　5本　6本 → 5本　6本

『あ～あ』

5本　6本 → 5本　5本

「う……」

5本　5本 → 5本　2本

『とっくに俺の勝ちだし』

5本　2本　↓　1本　2本

「……あ」

1本　2本　↓　2本

『終わり～』

2本　↓　1本

「くっそおおおおおお！」

1本　↓　0本

『言っておくけど作者権限じゃないぜ？2グループしか残ってなくて、なおかつ数字が揃えたほうが勝ち』

「もう1回だ！」

『わかったよ。説明下手でスイマセン。分からなかったらメールください。感想もね～！』

「また負けたー！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9673i/

蒼き流星

2011年9月12日19時14分発行